國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
MAY 27 [illegible]
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

釋經論部

五ノ下

眞野正順
椎尾辨匡 譯

目次

大智度論（全一百巻中 自巻第八十四 至巻第一百）……（本丁）〔一九〇二——二二八八〕……（通頁）一
第七十　三慧品（八四）……一
第七十一　道樹品（八五）……一八
第七十二　菩薩行品（八五）……二五
第七十三　種善根品（八五）……三二
第七十四　遍學品（八六）……三六
第七十五　次第學品（八六—八七）……五〇
第七十六　一心具萬行品（八七）……六五
第七十七　六喩品（八八）……七五
第七十八　四攝品（八八—八九）……八〇
第七十九　善達品（八九）……一〇四
第八十　實際品（九〇）……一一六
第八十一　照明品（九一）……一三三

第八十二　淨佛國土品（九二—九三）……一四七
第八十三　畢定品（九三—九四）……一六七
第八十四　四諦品（九四）……一八二
第八十五　七喩品（九五）……一九一
第八十六　平等品（九五）……一九二
第八十七　涅槃如化品（九六）……二〇九
第八十八　薩陀波崙品（九六—九八）……二一六
第八十九　曇無竭品（九九—一〇〇）……二五四
第九十　囑累品（一〇〇）……二七九
摩訶般若波羅蜜多心經解題……〔一—五〕……二八九
摩訶般若波羅蜜多心經（一卷）……二九四
仁王般若波羅蜜經解題……〔一—二〕……二九五
仁王般若波羅蜜經……〔一—二三〕……三〇七

序品第一（卷上）……三〇七
觀空品第二（同）……三〇九
菩薩教化品第三（同）……三一三
二諦品第四（同）……三二一
護國品第五（卷下）……三二五
散華品第六（同）……三二七
更持品第七（同）……三二七
囑累品第八（同）……三三六
佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經解題……〔一——八〕……三三九
佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經……〔一——二八〕……三四七
行品第一（卷上）……三四七
帝釋品第二（同）……三四九
持無量功德建塔品第三（同）……三五〇
功德品第四（同）……三五一

福量品第五(同)……三五一
隨喜功德品第六(同)……三五二
地獄品第七(同)……三五三
清淨品第八(同)……三五四
稱讃功德品第九(同)……三五四
魔品第十一(同)……三五五
般若伽陀現世品第十二(卷中)……三五七
不思議品第十三(同)……三五七
譬喩品第十四(同)……三五八
天品第十五(同)……三五九
如實品第十六(同)……三五九
不退地祥瑞品第十七(同)……三六〇
空品第十八(同)……三六〇
昴天品第十九(同)……三六一
善解方便品第二十(同)……三六七
魔業品第二十一(同)……三六三

善友品第二十二（同）……三六四
法王品第二十三（卷下）……三六六
我品第二十四（同）……三六六
戒品第二十五（同）……三六七
幻化品第二十六（同）……三六七
妙義品第二十七（同）……三六八
散華品第二十八（同）……三六九
聚集品第二十九（同）……三六九
常歡喜品第三十（同）……三七〇
出法品第三十一（同）……三七一
善護品第三十二（同）……三七三

巻の第八十四

第七十、三慧品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法に所爲無く、所作無くんば、應に三乘(卽ち)聲聞・辟支佛・佛乘有りと分別すべからず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法の所爲無く所作無き中には分別有ること無く、所爲有り所作有る中には分別有り。何となれば、凡夫、愚人は聖法を聞かず、五受衆、所謂色受想行識に著し、檀波羅蜜に著し、乃至阿耨多羅三藐三菩提に著すればなり。是の人は、是の色有ることを念じて是の色を得、乃至是の阿耨多羅三藐三菩提有ることを念じて、是の阿耨多羅三藐三菩提を得。是の菩薩は是の念を作す、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。我れ當に衆生を生死より度すべしと。須菩提よ、我れ五眼を以て觀るも、尚ほ色、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ず、何に況んや、是の狂愚の人、目無くして而も阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生を生死より度脱せんと欲するをや」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し佛、五眼を以て觀たまふとも、衆生の生死の中より度すべき者を見ずんば、今、世尊は云何にして阿耨多羅三藐三菩提を得て、衆生に三衆なる正定・邪定・不定有りと分別するや」と。「須菩提よ、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得、初に衆生の三衆の若くは正定、若くは邪定、若くは不定を得ず。須菩提よ、衆生は無法・有法の想あるを以て我れ其の妄著を除き、世俗法を以ての故に、得ること有りと說くも、第一義には非ず」と。「世尊よ、第一義に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るにあらずや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、顚倒に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、若し第一義の中に住し得ず、亦た顚倒の中に住して得ずんば、將に世尊の阿耨多羅三藐三菩提を得るもの無からん」と。佛の言はく、「不なり。我れ實に阿耨多羅三藐三菩提を得るも、所住に若くは有爲相、若くは無爲相なし。須菩提よ、譬へば、佛の所化の人は、有爲相に住せず、無爲相に住せざるが如し。化人は亦た來ること有り、去ること有り。亦たは坐し、亦たは立つ。須菩提よ、是の化人、若し檀波羅蜜を行じ、尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行じ、四禪・四無量心・四無色定・五神通を行じ、四念處を行じ、乃至八聖道分を行じ、空三昧・無相三昧に入り、內空乃至無法有法空を行じ、八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・大悲大慈を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉ず、是の化人は無量の衆生に三衆有るを化作す。須菩提よ、汝が意に於いて云何、是の化人は檀波羅蜜を行ずること有りや。乃至三衆の衆生有りや不や」と。須菩提言さく、「不なり」と。「須菩提よ、佛も亦た是の如し。諸法は化の如く、化人の化の衆生を度するが如くにして、實に衆生の度すべきもの有ること無きを知る。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずるに、佛の所化の人の如く行ず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は化の如くならば、佛と化人と何等の差別有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「佛と化人と差別有ること無し。何となれば、佛も能く所作有り、化人も亦た能く所作有ればなり」と。「世尊よ、若し佛無うして、化のみ獨り能く所作有りや不や」と。佛の言はく、「能く所作有り」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何なれば佛無うして、化に能く所作有りや」と。「須菩提よ、譬へば、過去に佛有りて須扇多と名くるが如し。菩薩を度せんと欲するが爲の故に、佛を化作し已つて而も自ら滅度す。是の化佛は住すること半劫にして佛事を作し、應に菩薩の行に應ずる者に記を授け已つて滅度す。一切世間の衆生は、佛の實に滅度したまふことを知るも、須菩提よ、化人は實に無生無滅なり。是の如く須菩提よ、菩薩は般若波羅蜜を行ずるに、當に諸法の化の如くなるを信ずべし」と。（須菩提言さく）、「世尊よ、若し佛と佛の所化の人と差別無くんば、云何にして布施をして清淨ならしめん。人、佛を供養したてまつるが如きは、是の衆生は乃ち無餘涅槃に至るまで福德盡きず。若し化佛を供養せば、是の人は乃ち無餘涅槃に至るまで福德も亦た應に盡きざるべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「佛は諸法實相を以ての故に、一切の衆生・天及び人の與に福田と作る。化佛も亦た諸法實相を以ての故に、一切衆生・天及び人の與に福田と作る」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の佛、及び化佛に於て種ゆる所の福德を置くも、若し善男子・善女人有つて、但敬心のみを以て佛を念ずるに、是の善根の因緣をもて乃至、苦を畢りて其の福盡きず。須菩提よ、是の敬心をもて佛を念ずることを置くも、若し善男子・善女人有つて、但だ一華を以て虛空中に散じ佛を念ずるのみにして、乃至、苦を畢りて其の福盡きず。須菩提よ、是の敬心をもて佛を念じ、華を散じて佛を念ずることを置くも、若し人有つて、一たび南無佛と稱せば、乃至、苦を畢りて、其の福盡きず。是の如く須菩提よ、佛は福田の中に其の福を種ゆること無量なり。是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、佛と化佛と差別有ること無しと。（そは）諸法の法相に異なること無ければなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を行じ、諸法實相の中に入るべし。是の諸法實相は壞すべからず。所謂般若波羅蜜の相乃至阿耨多羅三藐三菩提の相は、（壞すべからず）」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法實相は壞すべからずんば、佛は何を以てか諸の法相、言はく是の色、是の受想行識、是の內法、是の外法、是の善法、是の不善法、是の有漏、是の無漏、是の世間、是の出世間、是の有諍法、是の無諍法、是の有爲法、是の無爲法等を壞したまひしや。世尊よ、將に諸法の相を壞すること無からん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「不なり。名字の相を以ての故に諸法を示し、衆生を解せしめんと欲す、佛は諸法の法相を壞せず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若くは名字の相を以ての故に、諸法を說いて衆生をして解せしむ。世尊よ、若くは一切法に名無く相無くんば、云何なれば名相を以て衆生に示し、解せしめんと欲するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「世俗の法に隨うて名相有るも、實には著する處無し。須菩提よ、凡人の如きは苦を說くを聞いて、名に著し相に隨ふ。須菩提よ、諸佛及び弟子は名に著せず、相に隨はず。須菩提よ、若し名、名に著し、相、相に著せば、空も

亦た應に空に著すべく、無相も亦た應に無相に著すべく、無作も亦た應に無作に著すべく、實際も應に實際に著すべく、法性も應に法性に著すべく、無爲性も應に無爲性に著すべし。須菩提よ、是の一切法は但だ名相のみ有り。是の法は名相の中に住せず。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は但た名相の中にのみ住して、應に般若波羅蜜を行ずべく、是の名相の中にも亦た應に著すべからず」と。「世尊よ、若し一切有爲法は但だ名相のみならば、菩薩摩訶薩は誰の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、種種の勤苦を受くるや。菩薩は道を行ずる時、布施、持戒し、忍辱を行じ、勤めて精進し、禪定に入り、智慧を修し、四禪・四無量心・四無色定・四念處より乃至八聖道分を行じ、空を行じ、無相を行じ、無作を行じ、佛の十力を行じ、乃至大悲大慈を具是す」と。佛の言はく、「須菩提の所說の如く、若し一切の有爲法は但だ名相のみ有りといはば、菩薩摩訶薩は誰の爲の故に菩薩道を行ぜん。須菩提よ、若し有爲法は但だ名相等のみならば、是の名相と名相の相とは空なり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は菩薩道を行じて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ、法輪を轉じ已り、三乘法を以て衆生を度脫す。是の名相も亦た無生・無滅・無住異なり」と。

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は一切種智を說きたまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「我は一切種智を說く」と。須菩提言さく、「佛は一切智を說き、道種智を說き、一切種智を說きたまふ。是の三種の智は何の差別有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「薩婆若は是れ一切の聲聞・辟支佛の智なり、道種智は是れ菩薩摩訶薩の智なり、一切種智は是れ諸佛の智なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因緣の故に、薩婆若は是れ聲聞辟支佛の智なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切とは所謂內外法に名く。是の聲聞・辟支佛は能く知つて、一切道、一切種智を用ふること能はず」と。須菩提言さく、「世尊よ、何の因緣の故に、道種智は是れ諸の菩薩摩訶薩の智なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切の道を、菩薩摩訶薩は應に知るべし。若し聲聞道・辟支佛道・菩薩道を應に具足して知るべくんば、亦た應に是の道を用つて衆生を度し、亦た實際の證を作すべからず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛說きたまふが如く、菩薩摩訶薩は應に諸道を具足すべく、應に是の道を以て、實際に證を作すべからざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩は未だ佛土を淨めず、未だ衆生を成就せず。是の時、應に實際に證を作すべからず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩は道中に住して、應に實際に證を作すべきや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、外道の中に住して、實際に證を作すや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、道・非道に住して、實際に證を作すや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、非道・亦た非非道に住して、實際に證を作すや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は何處に住して、應に實際に證を作すべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於いて云何、汝は道中に住し、諸法を受けざるが故に漏盡心に解脫を得るや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。「汝、非道に住し、漏盡心もて解脫を得るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「汝は道非道に住して漏盡心もて解脫を得るや不や」と。「汝は非道亦た非非道に住して、漏盡心もて心に解脫を得るや不や」と。（須菩提言さく）「不なり、世尊よ」と。

不や」と。「不なり、世尊よ、我は所住無く、諸法を受けず、漏盡心もて心解脫を得」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩も亦た是の如く、所住無くして、應に實際に證を作すべし」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何なるを一切種智の相と爲すや」と。佛の言はく、「一相なるが故に一切種智と名く。所謂一切法寂滅の相なり。復次に諸法の行類、相貌、名字、顯示の說をば佛は實の如く知りたまふ。是を以ての故に一切種と名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、一切智・道種智・一切種智、是の三智は結を斷ずるに、差別有りて、盡くること有り、餘ること有りや不や」と。佛の言はく、「煩惱を斷ずるに差別有り、諸佛は煩惱の習を一切悉く斷じ、聲聞・辟支佛は煩惱の習を悉く斷ぜず」と。「世尊よ、是の諸人は無爲法を得ずして、煩惱を斷ずることを得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、無爲法の中に差別を得べきや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、若し無爲法の中に差別を得べからずんば、何を以ての故に、是の人は煩惱の習を斷じ、是の人は煩惱の習を斷ぜずと說くや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「習は煩惱に非ず。是の聲聞・辟支佛の身口には婬欲・瞋恚・愚癡の相に似たるもの有り。凡夫愚人は之が爲に罪を得。是れ三毒の習なり、諸佛には有ること無し」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し道に法無くんば、涅槃にも亦た法無し。何を以ての故に、分別して、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりと說くや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是れ皆な無爲法なるを以て而も分別して、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりとすること有り」と。「世尊よ、實に無爲法なるを以ての故に、分別して須陀洹乃至佛有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「世間の言說の故に差別有り、第一義には非ず、第一義の中には分別して說くこと有ること無し。何となれば、第一義の中には言語の道無く、結を斷ずるが故に後際を說けばなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、諸法の自相空の中には前際は得べからず、何に況んや、後際有りと說かんや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸法の自相空の中には前際有ること無し、何に況んや、後際有りとは是の處有ること無し。須菩提よ、衆生は諸法の自相空を知らざるを以ての故に、爲に是れ前際、是れ後際なりと說くなり。諸法の自相空の中には前際、後際は得べからず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に自相空の法を以て般若波羅蜜を行ずべし。須菩提よ、若し菩薩、自相空の法を行ずれば、則ち若くは內法、若くは外法、若くは有爲法、若くは無爲法、若くは聲聞法、辟支佛法、若くは佛法に著する所無し」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊は常に般若波羅蜜を說きたまふ。般若波羅蜜は何の義を以ての故に般若波羅蜜と名くるや」と。佛の言はく、「第一度、一切法を得て彼岸に到る。是の義を以ての故に般若波羅蜜と名く、復次に、須菩提よ、諸佛・菩薩・辟支佛・阿羅漢は、是の般若波羅蜜を用つて彼岸に度ることを得。是の義を以ての故に般若波羅蜜と名く。復次に、須菩提よ、分別籌量して一切法乃至微塵を破壞し、是の中に堅實なるものを得ず。是の義を以ての故に般若波羅蜜と名く。復次に、須菩提よ、諸法の如・法性・實際は皆な般若波

羅蜜の中に入る。是の義を以ての故に般若波羅蜜と名く。復次に、須菩提よ、是の般若波羅蜜は、法有りて若くは合し、若くは散じ、若くは有色、若くは無色、若くは可見、若くは不可見、若くは有對、若くは無對、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲なること無し。何となれば、是の般若波羅蜜は無色・無行・無對・一相・所謂無相なればなり。」復次に、「須菩提よ、是の般若波羅蜜は能く一切の法、一切の樂說辯、一切の照明を生ず。須菩提よ、是の般若波羅蜜を、魔、若くは魔天、聲聞、辟支佛、人及び餘の異道の梵志・怨讎・惡人も菩薩の般若波羅蜜を行ずるを壞すること能はず。」何となれば、是の人輩は、般若波羅蜜中に皆な得べからざればなり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は應に是の如く、般若波羅蜜の義を行ずべし。復次に、「須菩提よ、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜の義を行ぜんと欲せば、應に無常の義、苦の義、空の義、無我の義を行ずべく、亦た應に苦智の義、集智の義、滅智の義、道智の義、法智の義、比智の義、世智の義、他心智の義、盡智の義、無生智の義、如實智の義を行ずべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の義の爲の故に應に般若波羅蜜を行ずべし」と。

須菩提、佛に白して言さく「世尊よ、是の深般若波羅蜜の中の義と非義とは皆な得べからず、云何に菩薩は、深般若波羅蜜の爲の故に應に般若波羅蜜を行ずべきや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜の義の爲の故に、應に是の如く念ずべし。貪欲は義に非ざれば、是の如き義は應に行ずべからず。瞋恚・愚癡は義に非ざれば、是の如き義は應に行ずべからず。一切の邪見には義無ければ、是の如き義は應に行ずべからず。何となれば、三毒の如相には義有ること無く、非義有ること無く、一切の邪見の如相には義有ること無く、非義有ること無きが故なり」と。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の念を作すべし、「色は義に非ず、非義に非ず。乃至識は義に非ず、非義に非ず。檀波羅蜜乃至阿耨多羅三藐三菩提は、義に非ず非義に非ず」と。何となれば、須菩提よ、佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ時、法の若くは義、若くは非義を得べきもの無きが故なり。須菩提よ、佛有るも、佛無きも、諸法の法相は常住にして、是れ義有ること無く、非義有ること無し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、應に義及び非義を離るべし。

須菩提、佛に白して言さく「世尊よ、何を以ての故に、般若波羅蜜は義に非ず非義に非ざるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切の有爲法は無作の相なり、是を以ての故に般若波羅蜜は義に非ず非義に非ず」と。「世尊よ、一切の賢聖、若くは佛、若くは佛弟子は皆無爲を以て義と爲す、云何なれ佛は般若波羅蜜には義・非義有ること無しと言ふや」と。佛の言はく、「一切の賢聖、若くは佛、若くは佛弟子は皆な無爲を以て義と爲すと雖も、亦た增を以てせず、亦た損を以てせず。須菩提よ、譬へば、虛空の如きは衆生を益すること能はず、衆生を損ずること能はざるが如し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を益すこと有ること無く、損ずること有ること無し」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は、無爲の般若波羅蜜を學せずして、一切種智を得るや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の無爲の般若波羅蜜を學して當に一切種智を得べし。（そは）二法を以てせざるが故なり」と。「世尊よ、二法を以て

せざれば、能く不二の法を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。須菩提言さく、「二法は能く不二の法を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し二法を以てせず、不二の法を以てせざれば、云何にして當に一切種智を得べきや」と。「須菩提よ、所得無きは卽ち是れ得なり。(そは)是の得には所得無きを以てなり」と。

【論】釋して曰はく、須菩提復た問ふ、「世尊よ、若し一切法は無作・無起の相ならば、云何んぞ分別して三乘有らん」と。佛は其の意を可とし、更に因緣を說きたまふ。「凡夫人は未だ道を得ず、五衆に著するが故に、亦た是の空・無作・無起の法に著するが故に、疑を生ず、云何んぞ分別して三乘有らんと。汝は已に道を得、五衆に著せず。亦た空・無作・無起に著せず、云何なれば疑を生ずるや」と。佛、此の中に自ら因緣を說きたまふ、「我れ五眼を以てするすら尙ほ色等の諸法を得ざるに、狂人は眼無うして而も得んと欲す」と。須菩提問ふ、「若し法無く衆生無くんば、云何にして三聚の衆生有りと說くや」と。佛答へたまはく、「我れ衆生を觀るに、一聚は得べからず云何んぞ三有らん。但だ顚倒を破せんと欲するが爲の故に分別して三有り。能く顚倒を破する者を正定と名け、必ず顚倒を破すること能はざる者を是を邪定と(名け)、因緣を得れば能く破し、得ざれば則ち破することと能はざる、是を不定と名く。皆な世俗法を以ての故に說くも、最も第一義には非ず」と。

問うて曰はく、佛は實に第一義の中に住して道を得たまふ。何を以てか、須菩提に答へて不、なりと言ふや。

答へて曰はく、須菩提は新發意の者の爲の故に問へり。是の故に佛は不なりと言へり。何となれば、顚倒の有法の中にすら、尙ほ住すべからず、何に況んや第一義の無所有の中に住せんや。是の故に須菩提は疑ふ、若し二處(有爲及び無爲)に住せずんば、將に世尊は、無く正覺を得ること無きやと。佛答へたまふ、實に阿耨多羅三藐三菩提の道を得るも但だ住する所無きのみ。有爲性は虛誑不實(なるが故に)、無爲性は空無所有なるが故に(二處に)住すべからずと。此の中に佛は是の事を明了にせんと欲するが故に、化佛の譬喩を說きたまふ。化佛の如きは、有爲性に住せず、無爲性に住せず、而も能く來去して說法すればなり。

問うて曰はく、化人、來去し說法することは爾るべし。云何にして能く檀波羅蜜等を行ずるや。

答へて曰はく、化人能く實に行ぜずと言はず、衆生眼に(化人に)所行有るに似たるを見るも是れ化事なり。經中に說くが如く、乃至[一]須扇多(の如し)。須菩提は意に已に、種種の因緣もて、

【一】「須扇多」。過去佛。本卷初頭のの經典本文參照。

化佛と眞佛とは等うして異無きを信伏すれど、今猶少しく疑うて佛に問ふ、「若し分別無しとせば眞佛に供養すれば、乃ち無餘涅槃に至るまで福故らに盡きず、化佛を供養するも亦た爾なりや不や」と。佛答へたまはく、「化佛・眞佛を供養するは、其の福異ならず。何となれば、佛は諸法實相を得るが故に供養して福盡きず。化佛も亦た實相を離れざるが故に。若し供養すれば心は能く異ならず其の福も亦た等し」と。

問うて曰はく、化佛には十力等の諸の功德無し、云何んぞ眞佛と等しからん。

答へて曰はく、十力等の諸の功德は皆な諸法實相に入る。若し十力等にして諸法實相を離るれば、則ち佛法に非ず。顚倒の邪見に墮せするなり。

問うて曰はく、若し爾らば、眞と化の中に定んで諸法實相有らん。何を以てか惡心もて佛身より血を出だせば、逆罪を得と言ふを、化佛には說かざるや。

答へて曰はく、經中には、但だ惡心もて佛身より血を出だすことのみ說いて眞化を辨ぜず。若し化佛を供養して、福を具足することを得ば、惡心もて毀謗するも、亦た應に逆罪を得べし。(もし)惡人定んで化佛を是れ眞(佛)なりと謂つて、而も惡心もて血を出だし、血、則ち出ずとせば便ち逆罪を得ん。

問うて曰はく、若し爾らば、毘尼の中に何を以てか化人を殺すも殺戒を犯さずと言ふや。

答へて曰はく、毘尼の中には皆な世間の事の爲に衆僧を攝するが故に戒を結びて實相を論ぜず。何となれば、毘尼の中には人有り、衆生有りて、假名を逐うて而して戒を結び、佛法を護らんが爲の故に、後世の罪の多少を觀ぜず。又後世に罪重きもの有るも、戒中には便ち輕し。道人の鞭打して牛羊等を殺せば罪重く、而も戒は輕きが如し。女人を讃歎するは、戒中には重きも、後世の罪は輕し。化の牛羊を殺せば則ち衆人嫌はず譏らず論ぜず、但だ自ら心の罪を得るのみ。若し眞と化の牛羊を殺すに、心異ならざれば罪を得ることは等し。然も戒を制するの意は衆人の譏嫌の爲の故に重しと爲す。是の故に經中に說く、意業は最大にして、身口の業に非ず。人如、大に布施を行ずるも、慈三昧を行ずるに及ばざるが如し。慈三昧を行ずるに、衆

生に、所得無きも、而も自ら無量の福を得。邪見、斷善根の人は、衆生を惱まさざるも而も阿鼻地獄に入る。是の故に化佛・眞佛を供養するに、心等しきを以ての故に、其の福は異ならず。

復次に、此の中に、佛説きたまはく、是の化佛の光相を具足せるを畫くも、人あつて、石泥の(佛)像等を見て慈心に念佛すれば、是の人は乃至苦を畢へて、其の福盡きずと。佛の言はく、復た泥像を畫くも、若し恭敬心有れば、佛像を見ずと雖も佛を念ずるが故に、華を以て空中に散ずれば、其の福も亦た苦を畢ふることを得。復た華を散ずることを畫くも、但だ一たび南無佛と稱するのみにて、是の人も亦た苦を畢ふることを得、其の福盡きず。

問うて曰はく、云何なれば但だ空しく佛の名字を稱するのみにて、便ち苦を畢ふることを得て、其の福盡きざるや。

答へて曰はく、是の人は曾つて佛の功德の、能く人の老病死の苦を度するを聞き、若くは多く、若くは少く(佛を)供養し、及び名字を稱すれば、無量の福を得、亦た苦を畢へて、(福)盡きざるに至る。是の故に福田無量なり。故に輭心に布施すと雖も、其の福は亦た盡くること無し。是の如く種種の因緣譬喩の故に、眞佛と化佛とは佛の福田にして異なること無く、供養する者は其の福無量なり。(そは)一切法の實相は、別無く異なること無きが故なり。

爾の時に、須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、若し諸法實相は壞すること無きが故に、(眞化の)二佛異なること無しとせば、今佛分別して諸法を是は色、是は受・想・行・識、乃至是は有爲、是は無爲法なりと說きたまふは、將に諸法の相を壞すること無きや」と。佛、須菩提に答へたまはく、「佛は種種に分別して諸法を說くと雖も、但だ言說を以て衆生をして解脫を得、心に著する所無からしめんと欲するのみ。若し(眞化の)二佛、共に語るとも、諸法の名字を說くべからず。衆生は佛に及ぶ者無きを以て、牽引して解せしめんと欲するが故に、是れは善、是れは惡と說きたまふのみ」。法華經に火宅を說くが如き、三乘を以て諸子を引出し、但だ名相を以て諸法を說いて、第一義を壞せざるが如し。須菩提問ふ、「名相を以て衆生の爲に說くと雖も、實事有ること無くんば、將に虛妄なること無からんや」と。佛答へたまはく、「衆人は世俗に隨ふて言說するも、中に於て名相に著する處有ること無し」。佛、此の中に自ら因緣を說きたまふ。凡夫の如きは、苦を說けば(その)名に著し、その相を取る。諸佛

及び弟子は、口に苦を說くも而も心に著せず。若し著せば苦聖諦と名けず。苦諦は即ち是れ名相等にして、定んで實有る無し。凡夫の著する者も、亦た是れ名相にして、定んで實有ること無し。云何んぞ空の名相中に空の名相に著せん。若し空の名相中に名相に著せば、空も亦た應に空に著すべく、無相も亦た應に無相に著すべく、無作も亦た應に無作に著すべく、乃至無爲性も亦た應に無爲性に著すべし。是の法は皆な如なり。凡夫の苦諦の相は但だ名相のみ有り、名相も亦た名相中に住せず。菩薩は是の名相等の諸の法門中に入り、是の名相の般若の中に住し、應に一切法に實有ること無きを觀ずべし。須菩提、問ふ、「若し一切法は但だ名相のみ有らば、菩薩は何等の爲の故に發心するや」と。經中に說くが如し。佛、答へたまはく、「若し一切法は但だ名相のみ有らば、名相の中の名相も亦た空ならん。是の法は皆な畢竟空にして、如・法性・實際の中に入る。是の故に菩薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を發し、乃至能く三乘を以て衆生を度す。若し諸法に定んで實有りて名相に非ずんば、即ち是れ生滅無し、生滅無きが故に、苦無く、集無く、盡無く、道無し。云何んぞ三乘を以て衆生を度せん。若し諸法は但だ是れ空の名相にして實無くんば、亦た生滅無し、生滅無きが故に苦集盡道無し。亦た云何んぞ度すべけんや。今菩薩、一切法の名相等の空なることを知れば則ち世間の顚倒を離れ、亦た名相の空なることを知るも、亦た名相の空を離る。是の如く有を離れ無を離れ、中道に處して能く衆生を度す」。佛の意は、菩薩は是の中道の般若を行じて、一切種智を得となり。

爾の時に、須菩提難ぜんと欲するが故に、先づ佛語を定めて乃ち問ふ。「世尊は一切種智を說きたまふや」と。佛の言はく、「我一切種智を說く」と。復た問ふ、「佛は常に三種の智を說きたまふ、三種の智に何の差別有りや」と。佛答へたまはく、「薩婆若は是れ聲聞・辟支佛の智なり。何となれば、一切を內外の十二入に名く。是の法は聲聞・辟支佛の總相の知なればなり。皆な是れ無常・苦・空・無我等なり。道種智は是れ諸の菩薩、摩訶薩の智なり。道に四種有り。一には、人天中に福樂を受くる道なり。所謂福德を種ゆることなり。并に三乘の道あり(合して)四と爲す。菩薩の法は應に衆生を引導して大道の中に著くべし。若し大道に入るに任へざる者は、二乘の中に著くし、若し涅槃に入るに任へざる者は、人天の福樂の中に著けて、涅槃の因緣と作す。世間の福樂の道は是れ十善・布施・諸の福德なり。三十七品は是れ二乘の道なり。三十七品及び六波羅蜜は是れ菩薩道

なり。菩薩は應に了了に是の諸の道を知るべし。菩薩は佛道を以て自ら爲し、人の爲にし。餘の三道を以て、但だ衆生のみの爲にす、是れ菩薩の道種智なり」。須菩提。問ふ、「何を以てか道種智を菩薩の事と爲すや」と。佛答へたまはく、「菩薩は應に一切の道を具足し、是の道を以て衆生を化すべし。是の道に出入すと雖も、未だ衆生を敎化し、佛國土を淨めざれば而も證を取らず。是の事を具足し已つて、然る後道場に坐して乃ち證を取る。是の故に須菩提よ、道種智は是れ菩薩の事なり」と。須菩提、復た問ふ、「是の菩薩は、何の處に住して、實際に證を作すやと。須菩提、意へらく、若し道中に住して證を作さば、是の事は然らず。そは二の過有るが故なり。一には、結使有る人は應に畢竟清淨の正智有るべからず。若し有らば則ち佛と異なること無し。若し異ならば煩惱の習氣有るが故に、應に錯謬有るべし。二には、一切の有爲法は皆な是れ虛誑の和合なるが故に、假名有りて定んで實有ること無し。是の故に佛は、不なりと言へり。若し道中に住するすら尙ほ得ず、何に況んや、道に非ざるをや。道・非道も亦た二の過有るが故に、道に非ず不道に非ず。心に著し、相を取るを以ての故に、亦た不なりと言へり。爾の時に、須菩提は意に或は是の念を作さく、佛の所得の道は甚深不可得底なりと。是の故に復た、「菩薩は何の處に住して、實際に證を作すや」と問へるに。佛は須菩提に反問したまへり。

問うて曰はく、佛は何を以ての故に、直に答へずして、須菩提に反問したまひしや。

答へて曰はく、須菩提は、自ら所得の道中に於ては、了了にして惑無きも、佛の所證を貴尙ぶが故に四句に戲論し、著心にして了ぜざること有るが如し。故に問へり。是の故に佛は須菩提の所得の證を以て反つて問ひたまふ。「汝、道を得る時、四句の中に住して證を得しや」と。答へて言はく、「不なり、我は住する所無くして漏盡を得たり」と。(佛の言はく)「汝は住する所無きを以て而も心に解脫を得たり。當に知るべし、菩薩、摩訶薩も亦た是の如く、四句に住せずして實際を證す」と。是の故に佛反問したまへり。復た有人言はく、四種答の中に、是を反問答と名くと。

問うて曰はく、須菩提は金剛三昧に住し心に解脫を得たり。云何なれば道中に住せずと言ふや。

答へて曰はく、住すとは相を取つて定んで是の法有りとするに名く。是の人は更に無爲の勝法を求むるが故に名けて有爲法

に住すと爲さず。(有爲法を)用ゐざるが故に、中に於て住せずと爲す。復た有人は住は是れ名相なりと言ふ。凡夫法の中には便ち是は金剛、是は解脱なりと分別すること有り。無相の法を得れば、則ち分別する所無し。佛は無相の法の爲の故に、須菩提に反問したまへり。「汝は應に名相を以ての故に問ふべからず。汝は應に名相を以て難を爲すべからず」と。

一切種智は是れ佛智なり。一切種智は、一切三世法中に通達無礙なるに名く。大小精麁を知り、事として知らざること無し。佛自ら一切種智の義を說きたまふに二種の相有り。一には諸法實相に通達するが故に寂滅の相なり。大海水の中にては、風も能く動ずこと能はず、其の深きを以ての故に、波浪起らざるが如し。一切種智も亦た是の如く、戯論の風の動すこと能はざる所なり。二には、一切諸法は、名相文字を以て言說すべく、了了に通達して礙無く、有無の二事を攝するが故に一切種智と名く。有人の言はく、「十力・四無所畏・四無礙法・十八不共法は盡く是の智慧の相なり。和合して、名けて一切種智と爲す」と。復た有人の言はく、「金剛三昧もて次第に無礙解脱を得るが故に、若くは大小・近遠・深淺・難易も事として知らざる無し」と。是の如き等の種種無量の因緣をもて一切種智と名く。

須菩提は是を聞き已つて佛に問ふ、「智慧に故らに上中下の分別有らば、煩惱を斷ずるに復た差別有りや不や」と。佛の言はく、「差別無し。斷ずる時には差別有るも、斷じ已れば差別無し。譬へば、刀に利鈍有れば斷ずる時に遲速有るも、斷じ已れば差別無きが如し。如來は煩惱及び習都べて盡き、聲聞・辟支佛は但だ煩惱盡くるのみにして、而も習氣餘り有り」と。須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、三種の斷は是れ有爲なりや、是れ無爲なりや」と。佛答へたまはく、「皆な是れ無爲なり」と。復た問ふ、「世尊よ、無爲法の中に差別を得べきや不や」と。佛答へたまはく、「是の法は無相無量なり、云何んぞ差別を得べけんや」と。復た問ふ、「世尊よ、若し差別無くんば、云何なれば是の斷の中には餘有り、是の斷の中には餘無しと說くや」と。「須菩提よ、是の習は眞の煩惱に名けず。有人は一切の煩惱を斷ずと雖も、身口の中にも亦た煩惱の相出づること有り、凡夫は是の相を見聞し已つて則ち不清淨の心を起こす。譬へば、蜜婆私詑阿羅漢の如きは、五百世(の間)獼猴の中に在り、今に阿羅漢を得と雖も猶ほ樹木に騰跳す。愚人は之を見て卽ち輕慢を生じて、是の比丘は獼猴の如くに似たりと。是の阿羅漢は煩惱の心無きも、而も猶

ほ本の習有り。又畢陵伽婆蹉阿羅漢の如きは、五百世(の間)婆羅門の中に生じて、輕蔑の心を習ふが故に阿羅漢を得と雖も、猶ほ恆(河)の水神に語つて言はく、小婢よ、流を止めよと。恆神瞋恚して、佛に詣つて陳訴す。佛は懺悔を教へたまふも猶ほ小婢と稱す。是の如き等、身口業の煩惱の習氣は二乘は盡きず、佛には是の如き事無し。一婆羅門惡口して、一時に五百の(惡)事を以て佛を罵るに、佛に慍色無きが如し。婆羅門心に乃ち歡喜し、卽ち復た一時に五百の善事を以て佛を讃歎するに、佛に亦た喜色無きが如し。當に知るべし、佛には煩惱の習氣盡くるが故に、好惡異なること無きことを。又復た佛初めて道を得たまふに、實の功德中に好名聲を出して十方に充滿し、唯佛のみ自ら知りたまふ。而るに孫陀梨梵志女は身を殺して佛を謗り、惡名を流布せり。佛は此の二事に於て、心に異有ること無く亦た憂喜せず。又婆羅門の聚落中に入り、空鉢にして出でたまふに、天人種種に供養したてまつる。又復た三月馬麥を食したまふに、釋提桓因は恭敬して、天食を以て供養したてまつる。阿羅婆伽林中の棘刺寒風に、佛、中に在りて宿したまふ。又歡喜園中に於て、天の百寶石上に在りて、柔軟滑澤なり。又天の臥具を敷く。此の好惡の事中に於て心に憂喜無し。又提婆達多は瞋心もて、石を以て佛を推し。羅睺羅は敬心をもて手を合せて、佛を禮したてまつるに、此の二人に於て其の心平等にして、兩眼を愛するが如し。是の如き等、種種の干亂に異想有ること無し。譬へば、眞金を燒磨鍛煉するも、其の色變ぜざるが如し。佛は此の衆事を經て心に增減無し。是の故に知るべし、諸佛は愛恚等の諸の煩惱の習氣都べて盡くることを。

須菩提、意へらく、「若し諸法實相の中には、若くは道、若くは涅槃に所有無く、若し所有無くんば、何を以てか是の須陀洹乃至辟支佛は習氣未だ盡きず、佛は習氣を盡くせるを分別するや」と。佛の言はく、「三乘の聖人は皆な無爲法を以て而も差別有り。無爲に因つて差別有りと雖も、而も有爲法の中に說くことを得べし」と。須菩提は佛語を定めんと欲するが故に問ふ、「世尊よ、實に無爲法を以ての故に差別有りや」と。佛答へたまはく、「世俗法の語言名相の故に分別すべし、第一(義の)法中には分別無し。何となれば第一義の中にては一切語言の道斷え、一切の心の所行を斷ずるを以ての故なり。但だ諸の聖人は結使を斷ずるを以ての故に後際有りと說く」と、後際とは所謂無餘涅槃なり。須菩提、問ふ、「世尊よ、諸法は自相空なるが故に前際

は不可得なり。何に況んや、後際をや。何となれば、前際に因るが故に後際有ればなり」と。佛、其の意を可としたまひ、衆生は諸法の自相空を知らざるを以ての故に、是れは前際なり、是れは後際なりと說く。自相空なる諸法の中に、前後際は不可得なり。何となれば、若し先に生有れば則ち後に老死有り。若し老死を離れて生有れば、是れ則ち不死にして而も生ずるなり。是の生は無因、無緣なり。若し先に老死あり後に生有りといはば、生ぜずして云何んぞ老死有らん。先後既に得べからず、一時も亦た得べからず。是を以ての故に、自相空なる法中には、前(際)後際有ること無しと說く。佛の言はく、是の如く須菩提よ、菩薩は應に自相空なる法を以て般若を行ずべし(そは)內外の法乃至佛法に著せざるが故なりと。

問うて曰はく、上來常に般若波羅蜜の相を說けり。今何を以てか更に問ふや。

答へて曰はく、但だ相を問ふのみならず。

人常に般若波羅蜜を說くも、般若波羅蜜は何の義を以ての故に般若と名くるや。佛の言はく、第一度一切法を以て彼岸に到るを般若波羅蜜と名く。第一度とは、聲聞人は下智を以て度し、辟支佛は中智を以て度し、菩薩は上智を以て度するが故に、第一度と名く。

復次に、煩惱に九種有り、上中下の各に三品有り。智慧にも亦た九種有り。下下の智慧は鈍根の須陀洹より來り、乃至上の下(の智慧)は是れ第一の聲聞舍利弗等なり、上の中(の智慧)は是れ大辟支佛なり、上の上(の智慧)は是れ菩薩なり。上の上の智慧を以て度するが故に、第一度と名く。聲聞辟支佛は但だ總相の度にして、別相に於て少し。菩薩は一切法の總相・別相を皆な了了として知るが故に第一度と名く、

復次に、菩薩が度する時には、智慧遍滿して法中を知すべし。二乘の人は法中を知るべきも、遍滿すること能はず。是の故に、第一度と名く。

復次に、第一度とは、大乘の福德智慧・六波羅蜜・三十七品を具足して滿つるが故に、安隱に度す。又十方の諸佛、大菩薩、諸天皆な來つて佐助し、安隱に度することを得。人七寶の船に乘れば、行具を牢治し、上に種種の好食有り、好導師有りて、

意に隨つて好風に遇へば、則ち好度を爲し、若し人草栰に乘じて度れば、恐怖して好度と名けざるが如し。

復次に、佛三乘の人に說きたまはく、是の般若波羅蜜を以て、度つて彼岸の涅槃に到り、一切の憂苦を滅す。是の義を以ての故に般若波羅蜜と名くと。

復次に、是の般若波羅蜜の中には、一切法の內外、大小を思惟し籌量し分別し推求するに、乃至微塵の如きも堅實なるものを得ず。既に微塵に到れば則ち分別すべからず。心心數法乃至一念の中にも亦た分別すべからず。是の般若波羅蜜の中には、心色の二法は破壞し、推求するに堅實なるものを得ず。是の義を以ての故に、般若波羅蜜と名く。

復た次に、般若を慧と名け、波羅蜜を彼岸に到ると名け、彼岸を盡一切の智慧、邊智慧と名け、不可破壞相と名く。不可破壞相は即ち是れ如・法性・實際なり。其の實を以ての故に破壞すべからず。是の三事は般若中に攝入するが故に、名けて般若波羅蜜と爲す。

復次に、般若波羅蜜は法有りて、法と合する有り、散ずる有ること無く、畢竟空なるが故に是の般若は無色・無形・無對なり。一相にして所謂無相なり。是の義は先に說けるが如し。是の如き等の種種の因緣の故に、般若の義と名く。

今、當に般若の力を說くべし。所謂、般若は能く一切の智慧・禪定等の諸法を生じ、能く一切の樂說・辯才を生ず。般若の力を以ての故に、一句をもて演說するに種種に莊嚴し、劫を窮むるとも盡きず。星宿日月の照らす能はざる處を般若は能く照らし、能く邪見・無明の黑闇を破するが故に、魔、若くは魔人、聲聞辟支佛を求むる人、外道、惡人も壞すること能はざる所なり。何となれば、菩薩は般若を行じ、此の諸の惡人は般若の中に於て皆な得べからざるが故なり。

復次に、若し行者一心に信受し諷誦せば、諸惡も便を得ること能はず、何に況んや、正憶念し、說の如く行ずるをや。是の如く須菩提よ、菩薩は應に般若の義を行ずべし。般若の義とは、所謂無常の義、苦・空・無我の義、四諦智・盡智・無生智・法智・比智・世智・知他心智・如實智の義なり。故に應に般若を行ずべし。是の般若は、大海に種種の寶物有つて、或は大、或は小なるも、唯一の是れ如意寶なるが如く、般若波羅蜜にも亦た種種の諸の智慧の寶、無常等の四聖行・十智有るも、唯有の如實智なる

こと如意寶の如し。

問うて曰はく、先品に說くが如くんば、若くは常、若くは無常等の行を般若波羅蜜を行ずと名けず、今、何を以てか無常等の義を行ずるが故に、應に般若波羅蜜を行ずべしと言ふや。

答へて曰はく、我已に先に答へたり。無常に二種有り。若し著心もて戲論する無常は、是を般若を行ずと名けず、若し著心無く戲論ならざる無常を以て常倒を破することを爲し、又自ら著心を生ぜざる、是を般若を行ずと名く。

問うて曰はく、三藏の中には但だ十智のみ有り、此の中には何を以てか、如實智有りや。

答へて曰はく、是の故に大乘と名く。大法は能く小法を受け、小は大を受くること能はざればなり。

問うて曰はく、十智の各各に體相有り、如實智には何等の相有りや。

答へて曰はく、有人の言はく、能く諸法實相、所謂る如・法性・實際を知るは、是を如實智の相と名くと。佛、此の中に說きたまはく、如實智は唯是れ諸佛のみ得たまふ所なり。何となれば、煩惱未だ盡きさる者には、猶ほ無明有るが故に、如實を知ること能はず。二乘及び大菩薩は、習未だ盡きざるが故に、遍ねく一切法・一切種を知ること能はざれば、如實智と名けず。但だ諸佛のみ一切の無明に於て盡く餘無きが故に、能く如實に知りたまふと。

問うて曰はく、若し佛を除きて、更に如實に知る者無くんば、二乘は云何にして涅槃を得、大菩薩は無生忍を得るや。

答へて曰はく、如實智に二種有り、一には遍滿具足し、二には未だ具足せざるなり。(遍滿)具足とは佛なり、具足せずとは二乘及び大菩薩なり。譬へば、闇室の中に作すところ有るが爲の故に燈を燃すに、爲す所已に辦じて、後に燈來れば其の明は益增すが如し。黑闇に二分有り、一分は初燈已に除き、第二分は後燈の除く所なり。第二分の闇は初燈の明と和合す。若し爾らざれば、第二燈には則ち所用無ければなり。是の如く二乘及び大菩薩の智慧は已に無明を破すと雖も、佛の智慧の除く所の無明の分は、是の諸人の除く能はざる所なり。初燈に照らす所無しと言ふことを得ず。是の如く二乘及び菩薩の智慧は是れ遍ねき如實智と言ふことを得ず。遍ねき如實智は、是れ佛にして、但だ如實智のみは、二乘及び菩薩の共にする所なり。

意に隨つて好風に遇へば、則ち好度を爲し、若し人草栰に乘じて度れば、恐怖して好度と名けざるが如し。

復次に、佛三乘の人に說きたまはく、是の般若波羅蜜を以て、度つて彼岸の涅槃に到り、一切の憂苦を滅す。是の義を以ての故に般若波羅蜜と名くと。

復次に、是の般若波羅蜜の中には、一切法の內外、大小を思惟し籌量し分別し推求するに、乃至微塵の如きも堅實なるものを得ず。旣に微塵に到れば則ち分別すべからず。心心數法乃至一念の中にも亦た分別すべからず。是の般若波羅蜜の中には、心色の二法は破壞し、推求するに堅實なるものを得ず。是の義を以ての故に、般若波羅蜜と名く。

復た次に、般若を慧と名け、波羅蜜を彼岸に到ると名け、彼岸を盡一切の智慧、邊智慧と名け、不可破壞相と名く。不可破壞相は卽ち是れ如・法性・實際なり。其の實を以ての故に破壞すべからず。是の三事は般若中に攝入するが故に、名けて般若波羅蜜と爲す。

復次に、般若波羅蜜は法有りて、法と合する有り、散ずる有ること無く、畢竟空なるが故に是の般若は無色・無形・無對なり。一相にして所謂無相なり。是の義は先に說けるが如し。是の如き等の種種の因緣の故に、般若の義と名く。

今、當に般若の力を說くべし。所謂、般若は能く一切の智慧・禪定等の諸法を生じ、能く一切の樂說・辯才を生ず。般若の力を以ての故に、一句をもて演說するに種種に莊嚴し、劫を窮むるとも盡きず。星宿日月の照らす能はざる處を般若は能く照らし、能く邪見・無明の黑闇を破するが故に、魔、若くは魔人、聲聞辟支佛を求むる人、外道、惡人も壞すること能はざる所なり。何となれば、菩薩は般若を行じ、此の諸の惡人は般若の中に於て皆な得べからざるが故なり。

復次に、若し行者一心に信受し諷誦せば、諸惡も便を得ること能はず、何に況んや、正憶念し、說の如く行ずるをや。是の如く須菩提よ、菩薩は應に般若の義を行ずべし。般若の義とは、所謂無常の義、苦・空・無我の義、四諦智・盡智・無生智・法智・比智・世智・知他心智・如實智の義なり。故に應に般若を行ずべし。是の般若は、大海に種種の寶物有つて、或は大、或は小なるも、唯一の是れ如意寶なるが如く、般若波羅蜜にも亦た種種の諸の智慧の寶、無常等の四聖行・十智有るも、唯有の如實智なる

こと如意寶の如し。

問うて曰はく、先品に說くが如くんば、若くは常、若くは無常等の行を般若波羅蜜を行ずと名けず、今、何を以てか無常等の義を行ずるが故に、應に般若波羅蜜を行ずべしと言ふや。

答へて曰はく、我已に先に答へたり。無常に二種有り。若し著心もて戲論する無常は、是を般若を行ずと名けず、若し著心無く戲論ならざる無常を以て常倒を破することを爲し、又自ら著心を生ぜざる、是を般若を行ずと名く。

問うて曰はく、三藏の中には但だ十智のみ有り、此の中には何を以てか、如實智有りや。

答へて曰はく、是の故に大乘と名く。大法は能く小法を受け、小は大を受くること能はざればなり。

問うて曰はく、十智の各各に體相有り、如實智には何等の相有りや。

答へて曰はく、有人の言はく、能く諸法實相、所謂る如・法性・實際を知るは、是を如實智の相と名くと。佛、此の中に說きたまはく、如實智は唯是れ諸佛のみ得たまふ所なり。何となれば、煩惱未だ盡きさる者には、猶ほ無明有るが故に、如實を知ること能はず。二乘及び大菩薩は、習未だ盡きざるが故に、遍ねく一切法・一切種を知ること能はざれば、如實智と名けず。但だ諸佛のみ一切の無明に於て盡く餘無きが故に、能く如實に知りたまふと。

問うて曰はく、若し佛を除きて、更に如實に知る者無くんば、二乘は云何にして涅槃を得、大菩薩は無生忍を得るや。

答へて曰はく、如實智に二種有り、一には遍滿具足し、二には未だ具足せざるなり。（遍滿）具足とは佛なり、具足せずとは二乘及び大菩薩なり。譬へば、闇室の中に作すところ有るが爲の故に燈を燃すに、爲す所已に辦じて、後に燈來れば其の明は益增すが如し。黑闇に二分有り、一分は初燈已に除き、第二分は後燈の除く所なり。第二分の闇は初燈の明と和合す。若し爾らざれば、第二燈には則ち所用無ければなり。是の如く二乘及び大菩薩の智慧は已に無明を破すと雖も、佛の智慧の除く所の無明の分は、是の諸人の除く能はざる所なり。初燈に照らす所無しと言ふことを得ず。是の如く二乘及び菩薩の智慧は是れ遍ねき如實智と言ふことを得ず。遍ねき如實智は、是れ佛にして、但だ如實智のみは、二乘及び菩薩の共に(二)する所なり。

爾の時に、須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、若し深般若の中にて義と非義とは、云何にして菩薩は深般若の義の爲の故に般若を行ずと言ふや」と。佛答へたまはく、貪欲等の煩惱は義に非ず、應に行ずべからずとは、諸法に三分有り、貪欲等の諸の煩惱は是れ義に非ず、六波羅蜜等の諸の善法は是れ義なり。色等の法は無記なるが故に、義に非ず非義に非ず。若し人、煩惱及び煩惱を行ずる者の中に於て怨憎の心を生ぜば、六波羅蜜等の諸の善法、及び善法を行ずる者の中に於て愛念の心を生じ、色等の無記法、及び無記法を行ずる者の中に於て即ち癡心を生ず。經中に說くが如し。凡人は樂を受くることを得る時は貪心を生じ、苦を受くる時は瞋心を生じ、不苦不樂を受くる時は癡心を生ず。是の故に說く、菩薩は應に是の念を作すべし、貪欲等は義に非ず、應に念ずべからず、以て非と爲すと。經に廣く說くが如し。此の中に因緣を說く、惡法・善法・無記法は一如相にして義、非義有ること無し。（そは）如相には二無く、分別無きが故なり。復次に、佛得道の時は、一法の若くは義、若くは非義を見ず。諸法實相は有佛にも無佛にも常住にして、義・非義を作さず。若し是の如く知らば卽ち是れ義なり。但だ分別心を破するが故に、義・非義を應に行ずべからずと說く。是の如く須菩提よ、菩薩は應に是の義・非義を離れたる般若波羅蜜を行ずべしと。

須菩提復た問ふ、「何の緣の故に、般若は義に非ず、非義に非ざるや」と。佛答へたまはく、「一切法は無作・無起の相なるが故に能く作す所無し。云何んぞ般若波羅蜜を義と非義とを作すあらんや」と。須菩提、復た問ふ、「世尊よ、一切の諸佛及び弟子の若きは皆な無爲法を以て義と爲す。佛は何を以てか般若波羅蜜を義と非義とを作すこと能はずと說きたまふや」と。佛答へたまはく、「一切の聖人は無爲法を以て義と爲すと雖も、義と非義とを作さず。（そは）增すこと無く、損ずること無きが故なり」と。此の中に譬喩を說く、虛空の如の如きは、衆生を益すること能はず、衆生を損ずること能はず。虛空は無法なるが故に義と非義と有ること無し、何に況んや、虛空の如をや。虛空は法無しと雖も、一切の世間は虛空に因るが故に所作有ることを得。般若波羅蜜も亦た是の如く、無相無爲なりと雖も、而も般若に因りて能く五波羅蜜等の一切の佛道法を行ず、著心を以ての故に、般若には義・非義無しと說く。著心無きが故に第一實義を說き、世諦を以ての故に、說いて義と言ふ。第一義の中には義有

【二】別本にては、否定の意「せざる所なり」とある。

ること無し。

復次に、般若に二種有り、一には有爲、二には無爲なり。有爲般若を學して能く六波羅蜜を具足し、十地中に住し、無爲般若を學して一切の煩惱の習を滅し佛道を成ず。今、須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、菩薩は無爲般若を學して一切智を得。云何んぞ義無しと言ふや」と。佛答へたまはく、「薩婆若を得と雖も、(有爲無爲の)二法を以てせざるが故に得。分別して相を取れば、是を二法と名く」と。復た問ふ、「不二の法は能く不二の法を得るや」と。佛答へたまはく、「不なり。何となれば、不二の法は卽ち是れ無爲なり、無爲には得・不得の相有ること無し、是の無爲法は行ずべからざるが故なりと。復た問ふ、「若し不二の法を以て得ずんば、二法を以て不二の法を得べきや不や」と。答へて言はく、「不なり。何となれば、二法は虛誑不實なるが故なり。云何んぞ不實を行じて而も實法を得んや」と。復た問ふ、「世尊よ、若し二を以てせず、不二を以てせずんば、云何にして當に一切種智を得べきや」と。佛答へたまはく、「無所得は卽ち是れ得なり。此の中に、二・不二は卽ち是れ分別無く、皆な無所得なり。是の無所得は、有所得を以て行と爲さず。有爲法を行じて是の無所得を得と雖も、心に相を取らざるが故に所得無し。何となれば、空・無相・無作と合行するが故なり。

卷の第八十五

第七十一道樹品【一】

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若波羅蜜は甚深なり。世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は衆生を得ずして、而も衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を求む。是を甚だ難しと爲す。世尊よ、譬へば、人虚空の中に於いて、樹を種ゑんと欲せば、是を甚だ難しと爲すが如し。世尊よ、菩薩摩訶薩も亦た是の如く、衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるも、衆生は亦た得べからず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸の菩薩摩訶薩の爲す所は甚だ難し。衆生の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を求め、吾我に著する顚倒の衆生を度す。須菩提よ、譬へば、人の樹を種ゆるに樹の根莖枝葉華果を識らずして、而も愛護し、漑灌すれば、漸漸に長大し、華葉果實成就し、皆な之を用ふることを得るが如し。是の如く須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩は衆生の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求め、漸漸に六波羅蜜を行じ、一切種智を得て佛樹を成し、華葉果實を以て衆生を益す。須菩提よ、何等をか葉もて衆生を益すと爲すや。菩薩摩訶薩に因りて三惡道を離るることを得る、是を葉もて衆生を益すと爲す。何等をか華もて衆生を爲すや。菩薩に因りて、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天處、乃至非有想非無想天處に生ずることを得る。是を華もて衆生を益すと爲す。何等をか果もて衆生を益すと爲すや。是の菩薩は一切種智を得、衆生をして須陀洹果・斯阿含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・佛道を得せしむ。是の衆生は漸漸に三乘の法を以て、無餘涅槃に於いて而も般涅槃す、是を果もて衆生を益すと爲す。是の菩薩摩訶薩は衆生の實法を得ずして、而も衆生を度し、我顚倒の著を離れしめ、是の念を作す、一切の諸法中には衆生の我所無し、衆生の爲に一切種智を求むるも、是の衆生は實に得べからず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、當に知るべし、是の菩薩は佛の如しと爲す。何となれば、是の菩薩は因緣の故に、一切の地獄種、一切の畜生種、一切の餓鬼種を斷じ、一切の諸難を斷じ、一切の貧窮下賤の道を斷じ、一切の欲界、色界、無色界を斷ず」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は佛の如し。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求めざれば、世間には則ち過去未來現在の諸佛無く、世間には亦た辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・須陀洹無く、三惡趣及び三界も亦た斷ずる時無けん。須菩提よ、汝の說く所の如く、是の菩薩摩訶薩は、當に知るべし佛の如しと。是の如し、是の如し。須菩提よ、當に知るべし、是の菩薩は實に佛の如し。何となれば、如を以ての故に如來を說き、如を以ての故に、辟支佛、阿羅漢、一切の賢聖を說き、如を以ての故に、色乃至識と爲すと說き、如を以ての故に一切法乃至有爲性、無爲性と說く。是の諸の如は如實にして異なること無し。是を以ての故に、說いて名けて一如と爲す。諸の菩薩摩訶薩には、是の如

【一】三本宮本には第七十一訖第七十三品、聖本は七十品訖第七十二品

を學して、一切種智を得、如來と名くることを得。是の因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩は、當に知るべし、佛の如しと說くことを。（そは）如相を以ての故なり。

是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に如般若波羅蜜を學すべし。菩薩、如般若波羅蜜を學すれば、則ち能く一切法の如を學す。一切法の如を學すれば、則ち一切法の如を具足することを得。一切法の如を具足し已れば、一切法の如に住し自在なることを得。一切法の如に住し自在を得已れば、善く一切衆生の根を知り、善く一切衆生の根を知り已れば、一切衆生の根を具足することを知り、一切衆生の根を具足することを知り已れば、亦た一切衆生の業因緣を知り、一切衆生の業因緣を知り已れば、願智を具足することを得、願智を具足し已れば、三世の慧を淨め、三世の慧を淨め已れば、一切衆生を饒益し、一切衆生を饒益し已れば、佛國土を淨め、佛國土を淨め已れば一切種智を得、一切種智を得已れば法輪を轉じ、法輪を轉じ已れば、衆生を安立し、三乘に於いて無餘涅槃に入らしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩、一切の功德を得て、自ら利し人を利せんと欲せば、應に阿耨多羅三藐三菩提の心を發すべし」と。

須菩提、佛に白して言さく「是の諸の菩薩摩訶薩は說く能く說の如く、深般若波羅蜜を行ず。一切世間の天、及び人、阿修羅は應に爲に禮を作すべし」と。佛、須菩提に告げたまはく「是の如し、是の如し。是の菩薩摩訶薩は能く說の如く、深般若波羅蜜を行ず。一切世間の天、及び人、阿修羅は應當に爲に禮を作すべし」と。「世尊よ、是の初發意の菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めて、幾所の福德を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく「若し千國土の中の衆生、皆な聲聞辟支佛の意を發さんに、汝が意（こころ）に於いて云何、其の福多きや不や」と。須菩提言さく「甚だ多くして無量なり」と。佛、須菩提に告げたまはく「其の福は、初發意の菩薩摩訶薩に如かざること、百倍、千倍、巨億萬倍、乃至算數譬喩も、及ぶこと能はざる所なり。何となれば、聲聞辟支佛の意を發す者は、皆な菩薩より出づるが故なり。菩薩は終に聲聞辟支佛に因りて出でず。二千世界、三千大千世界の中も亦た是の如し。是の三千大千世界の中の聲聞辟支佛地に住する者を置くも、若し三千大千世界の中の衆生、皆な乾慧地に住せば、其の福多きや不や」と。須菩提言さく「甚だ無量なり」と。佛言はく「初發意の菩薩に如かざること百倍千倍、巨億萬倍より、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。是の乾慧地に住する衆生を置き、若し三千大千世界の中の衆生、皆な性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辦地、辟支佛地に住せんに、是の一切の福德を初發意の菩薩に比せんと欲するに、百倍、千倍、巨億萬倍乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。須菩提よ、若し三千大千世界の中の初發意の菩薩の、法位に入れる菩薩に如かざること、百千萬倍、巨億萬倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。若し三千大千世界の中の法位に入る菩薩の、佛道に向ふ菩薩に如かざること、百千萬倍、巨億萬倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。若し三千大千世界の中の佛道に向ふ菩薩の、佛の功德に如かざること、百千萬倍、巨億萬倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、初發心の菩薩摩訶薩には、當に何等の法をか念ずべきや」と、佛の言はく、「應に一切種智を念ずべし」と。須菩提言さく、「何等か是れ一切種智なるや。一切種智は何等の緣、何等の增上、何等の行、何等の相なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切種智は所有無く、想なく、念なく、生なく、示なし。須菩提の問ふ所の如き、一切種智は何等の緣、何等の增上、何等の行、何等の相とは、須菩提よ、一切種智は、無法を緣となし。念を增上と爲し、寂滅を行と爲し、無相を相と爲す。須菩提よ、是を一切種智の緣・增上・行・相と名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、但だ一切種智のみ無法なりや、色受想行識も亦た無法なりや、內外法も亦た無法なりや、四禪・四無量心・四無色定・四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・空三昧・無相三昧・無作三昧・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・大喜大捨・初神通・第二・第三・第四・第五・第六の神通・有爲相・無爲相も亦た無法なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「色も亦た無法なり、乃至有爲相、無爲相も亦た無法なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、何の因緣の故に、一切種智は無法、乃至有爲相、無爲相も亦た無法なりや」と。佛の言はく、「一切種智に自性無きが故なり。若し法に自性無くんば是を無法と名く。色乃至有爲相、無爲相も亦た是の如し」と。「世尊よ、何の因緣の故に、諸法に自性無きや」と。佛の言はく、「諸法は和合因緣生の故に生ず。法の中に自性無し。若し自性無くんば是を無法と名く。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、當に一切法は無性なりと知るべし。何となれば、一切法は自性空なるが故なり。是を以ての故に、當に知るべし、一切法は無性なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法無性なれば、初發意の菩薩は、何等の方便力を以ってか、能く檀波羅蜜を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就し、能く尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行じ、初禪乃至第四禪を行じ、慈心乃至捨心を行じ、空處乃至非有想非無想處、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分・空三昧・無相三昧・無作三昧・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を行じ、能く一切種智を行じ、佛世界を淨め、衆生を成就するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は能く諸法の無性を學し、亦た能く佛世界を淨め、衆生を成就し、世界も衆生も亦た無性なりと知る。卽ち是れ方便力なり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜を行じて佛道を修學し、尸羅波羅蜜を行じて佛道を修學し、羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行じて佛道を修學し、乃至一切種智を行じて佛道を修學し、亦た佛道は無性なることを知る。是の菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行じて佛道を修學し、乃至未だ佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・一切種智を成就せざるも、是を佛道を修學すと爲す。能く佛道の因緣を具足す。能く佛道の因緣を具足し已りて、一念相應の慧を用て一切種智を得。爾の時に、一切の煩惱の習永く盡きて、生ぜざるを以ての故に、是の時、佛眼を以て三千大千世界を觀るに、無法も尙ほ得べからず、何に況んや有法をや。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に無性の般若波羅蜜を行ずべし。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の方便力と名く。無法すら尙ほ得べからず、何

に況んや有法をや。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩の若くは布施する時、布施の無法すら尚ほ得べからず、何に況んや有法をや。受者及び菩薩心に無法にして、尚ほ知らず、何に況んや有法をや。乃至一切種智の得者、得法、得處は無法にして尚ほ知らず、何に況んや有法をや。何となれば、一切法の本性爾ればなり。佛の作に非ず、聲聞辟支佛の作に非ず、亦た餘人の作に非ず、一切法には作者無きが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸法と諸法の性とは離るるや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。諸法と諸法の性とは離る」と。「世尊よ、若し諸法と諸法の性と離るれば、云何にして離法は能く離法の若くは有、若くは無なるを知るや。何となれば、無法は無法を知る能はず、有法は有法を知る能はず、無法は有法を知る能はず、有法は無法を知る能はざればなり。世尊よ、是の如く、一切法は無所有の相なり。云何にして菩薩摩訶薩は是の分別を作すや、是の法は若くは有、若くは無なりと」。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は世諦を以ての故に、衆生に若くは有なり若くは無なりと示す。第一義を以てするに非ず」。「世尊よ、世諦と第一義諦とは異なること有りや。」「須菩提よ、世諦と第一義諦とは異なること無し。何となれば、世諦の如は即ち是れ第一義諦の如なり。衆生は是の如を知らず見ざるが故に、菩薩摩訶薩は世諦を以て、若くは有なり、若くは無なりと示す。復次に、須菩提よ、衆生は五受の衆中に於いて、著相有るが故に無所有なることを知らず。是の衆生の爲の故に、若くは有なり若くは無なりと示し、清淨の無所有なることを知らしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應當に是の行般若波羅蜜を作すべし」と。

【論】釋して曰く、須菩提は佛より、無所得は即ち是れ得なることを聞き、未曾有なりと歎じ、佛に白して言さく、「世尊よ、是の般若は甚深なり」と。經中に廣く說くが如し。「樹を以て譬喩と爲す。葉華果實は薄きより轉た厚し。樹葉の蔭に熱時涼み樂しむが如く、衆生は菩薩道の樹蔭に因りて、三惡道の熱苦を離るることを得。何となれば、惡を遮するが故なり。華の色好く、香淨くして柔軟なるが如く、衆生は菩薩に因り、布施・持戒・敎化を以ての故に、人天の中に福樂を受く。樹果の色香味の力の如く、衆生は菩薩に因るが故に、須陀洹等の諸の聖道の果を得」と。須菩提は是を聞いて歡喜して言はく、「是の菩薩は佛の如くして異なること無し」と。此の中に自ら因緣を說く、「菩薩に因るが故に、地獄等の惡道を斷ず」と。佛は其の意を可とし、更に因緣を說きたまはく、須菩提よ、若し菩薩發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求めずんば、乃至三界に斷ずる時無しと。

復次に、諸法の如を得るが故に、說いて如來と名け、乃至須陀洹と名く。如を以ての故に、色乃至無爲性を說く。是の諸法

の如は皆な一にして異なること無し。菩薩是の如を學すれば、必ず當に薩婆若を得べし。是の故に、佛の如くして異なること無しと言ひ、我心を以て、菩薩を貪り貴ばざるが故に、說いて佛の如しと言ひ、如を得るを以ての故に佛の如しと言ふ。是の如は佛に在るも亦た菩薩に在るも、一相なるを以ての故に、是を菩薩は佛の如しと爲すと名く。如を離れ、更に法の如に入らざる者有ること無し。

問うて曰く、若し如を同じうするを以ての故に、菩薩は佛の如しと名けば、乃至畜生の中にも亦た是の如有り、何を以てか佛の如しと名けざるや。

答へて曰く、畜生にも亦た如の因緣有りと雖も、未だ發せざるが故に、衆生を利益すること能はず、如を行じて薩婆若に至ること能はず。故に是の如く、須菩提よ、菩薩は應に是の如般若波羅蜜を學すべし。

菩薩は是の如般若波羅蜜を學するが故に、則ち能く一切法の如を具足す。具足を諸法實相を得と名け、能く種種の門を以て衆生をして、解することを得せしむ。具足することを得るを以ての故に、一切法に於いて、如にして自在なることを得。是の諸法の如を得れば、自在に已に能善く衆生の根を知る。能善く衆生の根を知るが故に、能く衆生の諸根を具足するを知る。「諸根」とは、信等の五善根なり。三乘の人は各各能く分別有り、是の人は有なり、是の人は無なり、是の人は力を得、是の人は力を得ずと。「具足」とは信等の善根を具足するなり。是の如き人は能く世間を出で、信(等の)根力を得れば、則ち決定して能く受持し疑はず。精進力の故に、未だ法を見ずと雖も、一心に道を求め、身命を惜まず、休まず、息まず、念力の故に、常に師の教を憶し、善法來れば聽き入れ、惡法來れば聽き入れず、守門の人の如し。定力の故に、心を一處に攝して動ぜず。智慧を助くるを以てなり。智慧力の故に、能く實の如く、諸法の相を觀ず。根を得るに二種有り。一には大心在りて、人身の中に則ち菩薩の根を成ず。二には、小心在りて、人身の中に則ち小乘の根を成ず。是の具足の根を得れば則ち度すべし。或は菩薩有り、人の信等の五根を得と雖も、而も度すべからざるを見る。(そは)先世の惡業罪重きに由るが故なり。是の故に、一切衆生の業因緣を知ると云ふ。無數劫の業因緣を知らんと欲せば、宿命通を得るを要す。既に知り已つて衆生の爲に過去の罪業の

因緣を說く。衆生は是の過去の罪を以ての故に畏れず。是の故に、願智を求め、三世の事を知らんと欲す。既に知り已つて、衆生の爲に、未來世の罪業の因緣もて、當に地獄に墮すべしと說く。衆生は聞き已つて、則ち恐怖を懷き、恐怖し已れば、心伏して度し易し。衆生若し未來世の福報の因緣を知らんと欲し、爲に說き已れば、則ち歡喜し、度すべし。是の故に、業因緣を知り已つて願智を具足すと說く。願智を具足するが故に、三世の慧淨にして通達無礙なることを得、過去の善惡の業を知り、又、未來の善惡の果報を知る。現在の衆生の諸根の利鈍を知り、然る後に、法を說いて敎化するに、利益する所多くして虛しからず。大に衆生を利益するが故に能く佛國土を淨め、佛國土を淨め已つて一切種智を得。一切種智を得るが故に法輪を轉じ、法輪を轉じ已つて、三乘を以て衆生を安立し、無餘涅槃に入る。是の如き利益は、皆な如を學する中より來る。是の故に、佛說きたまはく、菩薩、一切の功德を得て、自ら利し、人を利せんと欲せば、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべしと。須菩提、是の菩薩の功德の甚だ多きことを聞き、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩は能く說の如く、般若波羅蜜を行ずれば、一切の世間は應當に禮を作すべし」と。經中に廣く說くが如し。初發意の菩薩の功德を分別す。爾の時に、須菩提は、是の甚深の般若の、憶想無く初學の得る所に非ざることを知る。是の故に、佛に問ひたてまつれり、「初發意の菩薩は應に何等の法を念ずべきや」と。佛答へたまはく、「應に一切種智を念ずべし」と。一切種智とは、卽ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。薩婆若、佛法、佛道は、皆な是れ一切種智の異名なり。

問うて曰はく、佛は何を以てか答へて、一切種智を念ずと言ひしや。

答へて曰はく、初發意の菩薩は、未だ深智慧を得ざるも、既に世間の五欲の樂を捨つるが故に、佛は心を繫けて薩婆若を念ぜしめ、應に是の念を作すべきを敎へたまへり、「小雜の樂を捨つと雖も、當に淸淨の大樂を得べし」と。顚倒虛誑の樂を捨てて實樂を得、繫縛の樂を捨てて解脫の樂を得、獨善の樂を捨てて一切衆生と共にする善樂を得。是の如き等の利益を得るが故に、佛は初發意の者に敎へて、常に薩婆若を念ぜしめたまへり。須菩提問ふ、「世尊よ、是の一切智は是れ有法なりや爲ん。是れ無法なりとや爲ん。何等の緣、何等の增上、何等の行、何等の相なるや」と。佛、須菩提に答へたまはく、「一切種智は所有

無し。所有無きを非法と名く、無生無滅なり。諸法は如實なれば、緣も亦た所有無し。念を增上と爲し、寂滅を行と爲し、無相を相と爲す。

問うて曰はく、皆な是れ畢竟空の念なり。何を以てか、獨り增上と言ふや。

答へて曰はく、諸法は各各力有り、佛の智慧は是れ畢竟空、如・法性・實際にして、無相、所謂る寂滅の相なり。佛は一切種智を得、復た思惟せず、復た難易無く、遠近の所念を皆な得るが故に、念を增上と爲すと言ふ。

須菩提問ふ、「世尊よ、但だ一切種智のみ無法なりや、色等の法も亦た無法なりや」と。佛答へたまはく、「色等の一切法も亦た是れ無法なり」と。自ら因緣を說きたまふ、若し法は、因緣和合より生ずとせば卽ち自性無し、若し法に自性無ければ、卽ち是れ空にして無法なり。是の因緣を以ての故に、當に知るべし、一切法は無所有の性なることを。

須菩提問ふ、「初發心の菩薩は、何の方便を以てか、檀波羅蜜、乃至一切種智を行じ、佛世界を淨め、衆生を敎化するや」と。佛答へたまはく、「無有所の法性中に學し、入りて觀ずるも亦た能く諸の功德を集め、衆生を敎化し、佛世界を淨む、卽ち是れ方便力なり。所謂る有無の二法を能く一時に行ずるが故なり、所謂る畢竟空もて諸の福德を集む。是の人は六波羅蜜を行ずる時亦た佛道を修治す。佛心の如く畢竟空なる無所有の法を以て、六波羅蜜乃至一切種智を行ず。是の菩薩は是の道を行じて、能く佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を具足し、菩薩道を行ずる時、是の法を具足し、道場に坐し、一念相應の慧を用て一切種智を得。人の夜寶珠を失するに、電光暫く現ずれば、卽時に還た得るが如し。故に煩惱及び習永く盡きて更に復た生ぜず。佛を得已つて、佛眼を以て一切十方世界の中の一切の物を觀るに、尙ほ無法を見ず。何に況んや有法をや。畢竟空法は能く顚倒を破し、菩薩をして成佛せしむるも、是の事すら尙ほ得べからず、何に況んや、凡夫顚倒の有法をや。是の故に、須菩提よ、當に知るべし、一切法は無所有の相なり。是を菩薩の方便と名くることを。空すら尙ほ得べからず、何に況んや有をや。須菩提よ、菩薩は應に無所有の般若波羅蜜を行ずべし。是の菩薩は是の無所有の般若波羅蜜を行じ、若し布施の時は、卽ち布施物は空しうして、所有無く、受者及び菩薩心も、亦た所有無きことを知る。乃至、一切種智、得者、得法、

得處の無法すら尙ほ知らず、何に況んや有法をや。得者は菩薩、得法は是れ阿耨多羅三藐三菩提、得法を用ふるは、是れ菩薩道なり。皆な是の法の所有無きことを知る。何となれば、一切法の本性爾なればなり。智慧を以ての故に異ならず。凡夫の作に非ず、亦た諸の聖人の作に非ず。(そは)一切法は作無く、作者無きが故なり」と。須菩提意へらく、「若し諸法都べて是れ無所有の相ならば、誰か是の無所有なることを知るや」と。是の故に佛に問ふ、「世尊よ、諸法と諸法の性と離るれば、云何にして離法は能く離法の、若くは有、若くは無なると知らん。何となれば、無法は無法を知ること能はず、有法は有法を知ること能はず、無法は有法を知ること能はず、有法は無法を知ること能はざればなり。世尊よ、是の如く、一切法は無所有の相なり。云何にして菩薩は是の分別を作さん、是の法は若くは有、若くは無なり」と。佛答へたまはく、「菩薩は世俗の故に衆生の爲に若くは有、若くは無と說く、第一義には非ず。若し有是れ實に有ならば、無も亦た應に實有なるべし。若し有不實ならば無云何にして應に實なるべけんや」と。須菩提問ふ、「世俗と第一義と異なること有りや」と。若し異ならば法性を破壞するが故に、是の故に佛は異ならずと言ふ。世俗の如は卽ち是れ第一義の如なり。衆生は是の如を知らざるが故に、世俗を以て爲に若くは有、若くは無なりと說く。

復次に、衆生は五受陰の中に著する所有り、是の衆生は所有を離れて無所有を得と爲すが故に、菩薩は無所有を說き、世俗法の故に、諸法を分別して、衆生をして是れは無所有なることを知らしめんと欲す。是の如く、須菩提よ、菩薩は應に無所有の般若波羅蜜を學すべしと。

第七十二[二]菩薩行品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は菩薩行を說きたまふ、何等か是れ菩薩行なるや」と。佛言はく、「菩薩行とは、阿耨多羅三藐三菩提の爲に行ず、是を菩薩行と名く」と。「世尊よ、云何なれば菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提の爲に是の菩薩行を行ずるや」と。佛の言はく、「若し菩薩摩訶薩、色空を行じ、受想行識空を行じ、眼空乃至意(空)を行じ、色空乃至法(空)を行じ、眼界空乃至意識界(空)を行じ、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・

【二】「菩薩行品」宮本には「道行品」と名く。

禪(那)波羅蜜・般若波羅蜜を行じ、內空を行じ、外空を行じ、內外空を行じ、空空を行じ、大空を行じ、第一義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無始空・散空・諸法空・性空・自相空・無法空・有法空・無法有法空を行じ、初禪・第二・第三・第四禪を行じ、慈悲喜捨を行じ、無量虛空處・無量識處・無所有處・非有想非無處想を行じ、四念處を行じ、四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八正道分を行し、空三昧を行じ、無相、無作三昧を行じ、八背捨、九次第定を行じ、佛の十力を行じ、四無所畏を行じ、四無礙智を行じ、十八不共法を行じ、大慈大悲を行じ、淨佛國土を行じ、成就衆生を行じ、諸の辯才を行じ、文字入無文字を行じ、諸の陀羅尼門を行じ、有爲性を行じ、無爲性を行じ、如と阿耨多羅三藐三菩提との二を作さず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるをば、阿耨多羅三藐三菩提の爲に行ずと名く。是を菩薩行と爲す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊は說いて佛と言ふ。何の義の故に、佛と名くるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法の實義を知るが故に、名けて佛と爲す。復次に、諸法實相を得るが故に、名けて佛と爲す。復次に、實義に通達するが故に、名けて佛と爲す。復次に、實の如く一切法を知るが故に、名けて佛と爲す」と。

須菩提言さく、「何の義の故に菩提と名くるや」と。「須菩提よ、空の義は是れ菩提の義、如の義、法性の義、實際の義は是れ菩提の義なり。復次に、須菩提よ、名相、言說は是れ菩提の義なり。須菩提よ、菩提の實義は壞すべからず、分別すべからず、是れ菩提の義なり。復次に、須菩提よ、諸法實相は誑ならず、異ならず、是れ菩提の義なり。是を以ての故に菩提と名く。復次に、須菩提よ、是の菩提は諸佛の有する所なるが故に菩提と名く。復次に、須菩提よ、諸佛は正しく遍ねく知るが故に名けて菩提と爲す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、是の菩提の爲に六波羅蜜を行じ、乃至一切種智を行ぜば、諸法に於いて、何の得、何の失、何の增、何の減、何の生、何の滅、何の垢、何の淨あらん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行じ、乃至一切種智を行ぜば、諸法に於いて得無く、失無く、增無く、減無く、生無く、滅無く、垢無く、淨無し。何となれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、得失・增減・生滅・淨垢を爲さざるが故に出ればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ得失を爲さず、乃至淨垢を爲さざるが故に出るとせば、菩薩摩訶薩は云何に般若波羅蜜を行じて、能く檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を取り、云何に內空外空乃至無法有法空を行じ、云何に禪、無量心、無色定を行じ、云何に四念處乃至八聖道分を行じ、云何に空、無相、無作解脫門を行じ云何に佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を行じ、云何に菩薩の十地を行じ、云何が聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位中に入るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、(得失等の)二法を以ての故に檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行ぜず。二法を以て乃至一切種智を行ぜず」と。須菩提言さく、「世尊よ、若し菩薩

摩訶薩、二法を以ての故に、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を行ぜず、二法を以ての故に、乃至一切種智を行ぜずんば、菩薩は初發意より乃ち後意に至るまで、云何にして善根を增益するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し二法を行ずる者は、善根を增益することを得ず。何となれば、一切の凡夫は皆な二法に依りて善根を增益することを得ず。菩薩摩訶薩は不二の法を行じ、初發意より乃ち後意に至るまで其の中間に於いて善根を增益す。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切世間の天及び人、阿修羅も能く伏すること無く、能く其の善根を壞して、聲聞辟支佛地、及び諸の衆惡、不善法に墮せしむること無し。菩薩を制して、檀波羅蜜を行じ、善根を增益すること能はざらしむること能はず、乃至、般若波羅蜜も亦た是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に、是の如く般若波羅蜜を行ずべし」と。

「世尊よ、菩薩摩訶薩は、善根の爲の故に般若波羅蜜を行ずるや不や」と。佛の言はく、「不なり、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、亦た善根の爲の故に般若波羅蜜を行ぜず。亦た非善根の爲の故に般若波羅蜜を行ぜず。何となれば、須菩提よ、菩薩摩訶薩の法は、未だ諸佛を供養せず、未だ善根を具足せず、未だ眞知識を得ざれば、一切種智を得ること能はざればなり」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は、諸佛を供養し、善根を具足し、眞知識を得て、能く一切種智を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より諸佛を供養し、諸佛の所說の十二部經、修妬路乃至憂波提舍をば是の菩薩は聞持誦利し、心に觀じ了達し、了達するが故に陀羅尼を得。陀羅尼を得るが故に、能く無礙智を起し、無礙智を起すが故に、所生の處より乃ち薩婆若に至るまで、終に忘失せず是の法も亦た諸佛の種ゆる所の善根に於て、是の善根の爲に護られ、終に惡道諸難に墮せず。是の善根の因緣を以ての故に、深心清淨なることを得、深心清淨なることを得るが故に、能く佛國土を淨め、衆生を成就し、善根を以て護らるるが故に、常に眞知識、所謂諸佛諸の菩薩摩訶薩、及び諸の聲聞の能く佛法衆を讚歎する者を離れず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に諸佛を供養し、善根を種え、善知識に親近すべし」と。

【論】釋して曰はく、上品の中に、須菩提、佛に問ふ、經に常に般若波羅蜜を說く、何を以ての故に、波若波羅蜜と名くるやと。佛、種種の因緣もて答へたまふ、此の事に因るが故に、此の品中に復た問ふ。世尊は經に常に菩薩行を說きたまへり、何等か是れ菩薩行なりやと。是の故に、須菩提は菩薩行を問へり。

問うて曰はく、若し般若波羅蜜の中に一切法を攝し、又た、般若は卽ち是れ菩薩行ならば、何を以ての故に更に問へるや。

答へて曰はく、一切の菩薩道を菩薩行と名け、悉く遍ねく諸法實相を知る智慧を般若波羅蜜と名く、是を異なれりと爲す。若し般若經の菩薩行は、等しうして共に相攝せば、異なること無し。

復次に、有人の言はく、菩薩行とは、菩薩の身口意業の諸有る所作を、皆な菩薩行と名く。是の事を以ての故に、須菩提は但だ菩薩の正行を分別せんと欲するが故に問へり。是の故に佛答へたまはく、菩薩行とは、阿耨多羅三藐三菩提の爲にする諸の善行なり、是を菩薩の正行と名く。菩薩の不善無記、及び著心もて行ずる善法は、菩薩行に非ず。但だ悲心を以ての故に、及び空の智慧を阿耨多羅三藐三菩提の行と爲し、是を菩薩行と名く。何等か是れ清淨の行なるや。所謂、色空行、受想行識空行、乃至有爲性無爲性空行、是の諸法に於いて、是れ空、是れ實、乃至是れ有爲、是れ無爲なりと分別せず。阿耨多羅三藐三菩提の如きは、戲論を滅し、不二相なり。是を菩薩行と名く、能く壞する者無く、亦た過失無しと。須菩提は是の菩薩行を聞き已つて、歡喜して問ふ。菩薩行の果報は作佛を得。經に常に佛と言ふ、何等をか是れ佛の義なると。佛答へたまはく、諸法の實義を知るが故に、名けて佛と爲すと。

問うて曰はく、若し爾らば阿羅漢、辟支佛、及び大菩薩、是の人も亦た諸法の實義を知る、何故に名けて佛と爲さざるや。

答へて曰はく、上に已に燈を然すの喩を說けり。凡夫に於いては實と爲すも、佛に於いては實と爲さず。煩惱の習に覆はるるを以ての故に、名けて實と爲さず。一切種智を得、一切法中の疑悔を斷ずること能はざるが故に、正智實義と名けず。上に分別せるが如し。

問うて曰はく、諸法の實義を知ると、諸法の實相を得ると、實義に通達すると、一切法を實の如く知ると、是の四に何等の異なること有りや。

答へて曰はく、有人は言ふ、「義異なること無く、名字異なるのみ」と。有人は言ふ、差別有り。義とは、諸法實相は不生不滅、法相常住にして、涅槃の如きに名け、是の義を知るが故に、名けて佛と爲す。是の義中に常に覺悟して錯謬無く、是の義に於いて、種種の名相の法を以て、衆生をして第一實義を解せしむ。是の故に四無礙の中に別して義無礙・法無礙を說けり。有人は諸法の實義を得と雖も、通達すること能はず。（そは）二因緣有るが故なり。一には煩惱未だ盡きざると、二には未だ一切智を得ざるとの故なり。須陀洹・斯陀含・阿那含の如きは、未だ煩惱を斷ぜざるが故に、通達すること能はず。阿羅漢・辟支

佛・大菩薩は煩惱盡くと雖も、未だ一切種智を得ざるが故に、通達すること能はず。是の故に、實義に通達するが故に、名けて佛と爲すと說く。「實(際)の如く一切法を知る」とは、總じて上の三事の亦は義、亦は法、一切法の若くは有、若くは無を種種に了了として知るが故に、一切種智の義中に說くが如く、亦は寂滅相を知り、亦は有爲相を知る。復次に、菩提を智と名け、佛を智者と名く、是の智を得るが故に、名けて智者と爲すなり。

須菩提世尊に問ふ、「何等か是れ菩提なるや」と。佛答へたまはく、空・如・法・性・實際を名けて菩提と爲し。空三昧相應の實相智慧もて、如・法性・實際の菩提を緣ずるを實智慧と名く。三學道は未だ煩惱を斷ぜざれば、智慧有りと雖も、名けて菩提と爲さず。三無學の人は、無明永く盡きて、餘ること無きが故に、智慧を菩提と名く。二無學の人は、一切智もて、正しく遍ねく諸法を知ることを得ざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提と名くることを得ず。唯だ佛一人の智慧のみを、阿耨多羅三藐三菩提と名く。

復次に、名相、語言、文字の故に菩提と名く。菩提の實義は分別し破壞すべからず。

復次に、菩提は是の如と異ならず。常に虛誑ならず。何となれば一切衆生の智慧は轉轉して勝るもの有り。佛に至れば、更に勝る者無し。諸法も亦た轉轉して勝るもの有り。先には虛誑にして、後には眞實なり。菩提に至れば、更に實なる者無し。是の故に、菩提を名けて實と爲す。

復次に、菩提を得るが故に、名けて佛と爲すが如く、今は佛を得るを以ての故に菩提と名く。

復次に有人は言はく、盡智もて生永く盡くることを知る。是を菩提と名くと。

有人は言はく、盡智、無生智を菩提と名くと。有人は言はく、無礙解脫を菩提と名く。何となれば、是の解脫を得れば、一切法に於いて、皆な通達すればなりと。有人は言はく、四無礙智は是れ菩提なり。何となれば、佛の諸法實相を知りたまふは是れ義無礙なり。諸法の名相を知りて分別するは、是を法無礙と名く。種種の語言を分別して、衆生をして解することを得せしむるは、是を辭無礙と名く。說法敎化する所有りて無窮無盡なるは、是れを樂說無礙と名づく。四無礙を以て具足し、衆生

を利益するが故に、菩提と名くと。

有人は言はく、佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・一切種智の是の如き無量の佛法を、盡く菩提と名づく。何となれば、智慧大なるを以ての故に、諸法皆な菩提と名づくればなりと。有人は言はく、眞の菩提を佛に名く。無漏の十智、是の十智相應の受想行識、身口業、及び心不相應の諸業を皆な菩提と名く。共に緣じ、共に生じ、共に相佐助するが故に、皆な菩提と名くと。

復た有人は言はく、菩提の義は無量無邊なり。唯だ佛のみ能く遍ねく知りたまふ。餘人は其の少分を知る。譬へば、轉輪聖王の寶藏の中の諸寶は、能く分別して其の價を知る者無く、聖王寶を出だして人に賜へば、正しく其の所得の者を知るべきが如しと。

此の中に須菩提、佛に菩提の相を問ひ已り、更に問ふ、「世尊よ、若し菩提は畢竟空にして不壞の相ならば、菩薩は六波羅蜜の諸法を行じて、何等の善根を增益するや」と。佛答へたまはく、若し菩薩、是の菩提の實相を行ずるに、一切法に於いて增益する所無し、何に況んや、善根をや。何となれば、般若波羅蜜は、得失乃至垢淨の故に出ずと爲さず。畢竟清淨なるが故なりと。佛は其の意を可としたまへり。復た更に問ふ、「若し增減無くんば、云何にして菩薩は般若を行じ、檀波羅蜜等の諸の菩薩行を取るや」と。佛答へたまはく、菩薩は是の法を行ずと雖も、二法を以ての故に行ぜず、畢竟空に和合して共に行ず、是の故に應に難ずべからずと。復た問ふ、「世尊よ、若し是の菩薩二法を行ぜずんば、云何にして初發意より乃ち後心に至るまで善根を增長するや」と。佛答へたまはく、若し人、二法を行ぜば、即ち顚倒にして、善根を增長すること能はず。人の夢中に大に財を得と雖も、竟に所得無し。覺め已つて得る所の多少をば眞に名けて得と爲すが如しと。佛、須菩提に語りたまはく、一切の凡人は皆な二法に著するが故に、善根を增益すること能はず。菩薩は諸法實相、所謂る不二の法を行じ、初發心より來(このかた)、乃ち後心に至るまで、善根を增益して錯謬有ること無し。是の故に、菩薩を、一切の天人、阿修羅、能く其の善根を壞して二乘に墮せしむること無く、及び餘の衆惡も亦た壞すること能はず。「餘の惡」とは、慳貪等の煩惱が、檀波羅蜜、諸の善法

等を破することとなり。復た問ふ、「世尊よ、菩薩は善根の爲の故に般若を行ずるや」と。佛答へたまはく、善の爲ならず、不善の爲ならざるが故に般若を行ずと。

問うて曰はく、不善根の爲の故に般若を行ぜざることは爾るべし、云何なれば善根の爲の故に行ぜざるや。

答へて曰はく、此の中に、佛意は、阿耨多羅三藐三菩提を貴ぶが故に、諸善根を行ずと雖も、事を辦ずるが爲の故に行ずるは、以て貴しと爲さず。栰喩經に說くが如し。善法すら尙ほ應に捨つべし、何に況んや、不善法をや。善根は是れ佛道を助くる法なり。人は栰の爲の故に渡らず、彼岸に到るが爲の故に渡るが若し。此の中に佛、因緣を說きたまふ、菩薩、未だ諸佛を供養せず、未だ眞の智識を得ず、一切種智を得ること能はず。是の故に、善根を種ゆと雖も、以て貴しと爲さず、但だ阿耨多羅三藐三菩提の爲(の故)なりと。

須菩提言さく、「云何なれば菩薩は、善根の爲にせずと雖も、而も能く諸佛を供養し、乃至一切種智を得るや」。佛答へたまはく、菩薩は初發心より已來、諸佛を供養す。經中に說くが如く。佛を供養することは大なるが故に、但だ佛のみを說く。當に知るべし、已に辟支佛、乃至乾慧地に住する凡人を供養することを。(そは)聞法の爲の故なり。其れより十二部經を說くを聞き、常に師を得ること能はざるを以ての故に、皆な當に受持すべく、喜忘を以ての故に、誦讀して利ならしむ。「心觀」とは、常に心を經卷に繫け、次第に憶念し、先づ語言を以て義を宣べ、後了達を得て卽ち陀羅尼を得。陀羅尼に二種有り、一には、聞持陀羅尼、二には、諸法實相を得る陀羅尼なり。讀誦修習して常に念ずるが故に、聞持陀羅尼を得、義に通達するが故に、實相陀羅尼を得。是の二陀羅尼門の中に住して、能く無礙智を生じ、衆生の爲に法を說くが故に、四無礙智を具足す。

問うて曰はく、若し菩薩に無礙智有らば、佛と何の異ありや。

答へて曰はく、無礙に二種有り、一には眞無礙、二には名字無礙なり。此の中の佛の無礙を除いて、餘は菩薩の所得に隨ふて無礙なり。是の菩薩は讀經等の因緣の故に、所生の處より、乃ち一切種智を得るに至るまで、終に忘失せず。何となれば、深く入りて諸法を讀誦するが故に、煩惱折薄し、善根の爲に護らるるが故に、惡道の諸難に墮せず、盲人が目有る者の爲に將

ゐ護らるるが故に、終に溝壑に墜落せざるが如し。善根福徳を集むるが故に、深心清淨を得。

「深心清淨」とは、一切衆生を慈愛し、怨賊中の人と雖も、亦た惡、所謂る奪命等を加へず。復次に、智慧福徳大に集るが故に、煩惱は微少にして、遍ねく菩薩の善心を覆ふこと能はず。復次に深心とは、衆生の中に於いて慈悲心、不捨心、救度心を得、諸法の中に於いて無常・苦・空・無我・畢竟空心乃至佛を得、佛想、涅槃想を生ぜず、是を深心清淨と名く。深心清淨なるが故に能く衆生を敎化す。何となれば、是の煩惱薄きが故に高心、我心、瞋心を起さず。故に衆生、其の語を愛樂(あいぎやう)信受し衆生を敎化す。衆生を敎化するが故に、佛世界を淨むることを得。毘摩羅詰佛國品の中に説くが如し、衆生淨きが故に世界清淨に、善根の爲に護らるるが故に終に善知識を離れずと。

「善知識」とは、諸佛、大菩薩、阿羅漢なり。略して善知識の相を説かば、能く三寶を讃歎する者なり。是の如く菩薩は應に諸佛を供養し、善根を種ゑ、善知識に親近すべし。何となれば、病人は應に良醫藥草を求むべきが如く、佛を良醫と爲し、諸の善根を藥草と爲し、膽病人を善知識と爲す。病者は此の三事を具するが故に、病は除差することを得。菩薩も亦た是の如く、此の三事を具して諸の煩惱を滅するが故に、能く衆生を利益す。

第七十三[三]種善根品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、若し諸佛を供養せず、善根を具足せず、眞知識を得ずして、當に薩婆若を得べきや不や」と。佛、須菩提に告ずたまはく、「菩薩摩訶薩は諸佛を供養し、善根を種ゑ、眞知識を得るも、一切種智は尙ほ得難し、何に況んや、諸佛を供養せず、善根を種ゑず、眞知識を得ざるをや」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩を供養し、善根を種ゑ、眞知識を得るも、何を以ての故に、一切種智を得難きや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の菩薩摩訶薩は方便力を遠離し、諸佛より方便力を聞かず、種ゆる所の善根を具足せず、常に善知識の敎に隨はず」と。「世尊よ、何等をか是れ方便力にして、菩薩摩訶薩は、是の方便力を行じて一切種智を得るや」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は初發意より檀波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて、佛、若くは辟支佛、若くは聲聞、若くは人、若くは非人に布施し、是の時に、布施想、受者想を生ぜず。何となれば、一切法の自相空、無生無定相、無所轉なるこ

【三】「種善根品」宮本には「三善根品」。石本には「善根方便品」。宋元二本には「衆善根品」に作る。

とを觀じて、諸法實相、所謂る一切法の無作無起相に入ればなり。菩薩は是の方便力を以ての故に、善根を增益し、善根を增益するが故に、檀波羅蜜を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、布施して世間の果報を受けず。但だ一切衆生を救度せんと欲するが故に、檀波羅蜜を行ず。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より尸羅波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて戒を持する時、婬恚癡(いんぬち)の中に墮せず、亦た諸の煩惱の纏縛、及び諸の不善、破道の法、若くは慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・亂意・愚癡・慢・大慢・慢慢・我慢・增上慢・不如慢・邪慢・若くは聲聞心・若くは辟支佛心に墮せず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、一切法の自相空・無生無定相・無所轉なることを觀じ、諸法實相、所謂る一切法の無作無起相を觀ずればなり。菩薩は是の方便力を成就するが故に、善根を增益し、善根を增益するが故に、尸羅波羅蜜を行じ、佛國土を淨め、衆生を成就し、戒を持して世間の果報を受けず、但だ一切衆生を救度するが故に、尸羅波羅蜜を行ず。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、羼提波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて方便力を成就するが故に、見諦道・思惟道を行じ、亦た須陀洹果・斯陀含(果)・阿那含(果)・阿羅漢(果)を取らず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は諸法の自相空、無生無定相、無所轉なることを知り、是の助道法を行ずと雖も、而も聲聞辟支佛地を過ぐればなり。須菩提よ、是を菩薩の無生法忍と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、毘梨耶波羅蜜を行じ、初禪に入り乃至第四禪に入り、四無量心、四無色定に入り、諸禪に出入すと雖も、而も果報を受けず。何となれば、是の方便力を成就するが故に、諸の禪定の自相空、無生無定相、無所轉なることを知り、佛國土を淨め、衆生を成就し、精進して世間の果報を受けず、但だ一切衆生を救度せんと欲するが故に、毘梨耶波羅蜜を行ず。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、禪波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて八背捨・九次第定に入り、亦た須陀洹果を證せず、乃至阿羅漢果を證せず。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、諸法の自相空、無生無定相、無所轉なることを知ればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、般若波羅蜜を行じ、佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法、大慈大悲を學し、乃至未だ一切種智を得ず、未だ佛國土を淨めず、未だ衆生を成就せず。其の中間に於いて應に是の如く行ずべし。何となれば是の菩薩摩訶薩は、諸法の自相空、無生無定相、無所轉なることを知ればなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を行じ、果報を受けざるべし。

【論】問うて曰はく、須菩提は何を以ての故に、是の麁問を作せるや。「諸佛を供養せず、善根を具足せず、眞知識を得ずして當に薩婆若に得べきや不(いな)や」と。

答へて曰はく、有人は言ふ、若し一切諸法は無所有の性にして、畢竟空ならば、畢竟空の中には、善根を種ゆると、善根を

種ゑざるとは、等しうして異なること無けん。若し爾らば、諸佛を供養せず、善根を種ゑず、眞知識を得ずして、薩婆若を得んやと。復有人は疑つて言はく、薩婆若を得れば、更に種種の門ありて、善根を種ゆる等を須ゐさるべし。是の故に、佛に問ひたてまつれり。佛答へたまはく、「若し諸佛を供養し、善根を種ゆるも、眞知識を得るは尙ほ得難し、何に況んや不らさるをや」と。

須菩提問ふ、「畢竟空の中には福有ること無きを以て福に非ず、何を以てか但だ福德を以ての故に得るや」と。佛答へたまはく、「世諦の中に福有るを以ての故に得」、須菩提は衆生の無所有に著するが爲の故に問ひ、佛は有法に著せさるを以て答へたまへり。所謂る精進、修福すら尙ほ得べからず、何に況んや、福を修せざるをや。食を乞うて受くる道人が一聚落に至り、一家より一家に至り乞食して得ず、一の餓狗の飢ゑ臥するを見、杖を以て之を打ち、「汝は畜生にして無智なり。我れ種種の因緣もて家家に食を求むるすら尙ほ得る事能はず。何に況んや、ふ汝臥して而も望み得んや」と言へるが如し。須菩提問ふ、「世尊よ是の諸佛を供養する等の因緣有りて、何故に其の果報を得ざるや」と。佛答へたまはく、「方便を離るるが故なり」と。方便とは、所謂る般若波羅蜜なり。諸佛の色身を見ると雖も、智慧の眼を以て法身を見ず。少しく善根を種ゆと雖も、而も具足せず。善知識を得と雖も、親近し諮受せず。又た、佛自ら因緣を說きたまふ。所謂る菩薩は初發意より有無の心を以て、檀波羅蜜を行ず。有心とは、所謂る薩婆若に應ずる心もて布施し、諸佛の種種無量の功德を念じ、衆生を憐愍するが故に布施す。無心とは、若し佛、乃至凡人に施しても三想所謂る施者・受者・財物を生ぜざるなり。何となれば、施物等の一切法は自相空にして、本より已來、常に不生にして定相。(卽ち)若くは一、若くは異、若くは常、若くは無常等は無し。是の法は、自相空なるが故に轉ずべからず。(そは)如中に安住するが故なり。是の如く觀ずれば、卽ち諸法實相、所謂る無作無起の相に入る。一切法は能く作す所無く、高心を生ぜず、悕望する所無し。是の如き方便力の故に、能く善根を增益し、不善根を離れ、衆生を敎化し佛世界を淨め、布施すること、若くは多く若くは少きも、世間の果報を受けず。但だ一切衆生を救度せんと欲するが故なり。菩薩が衆生に布施するには量有り、限あり。是の念を作さく「我れ先世に深く福德を行ぜず、今廣く衆生に施すこと能はず、

我れ今當に深く、實に多く檀波羅蜜を行じ。是の果報を得已つて、能く利益を具足し、廣く無量の衆生に施し、若くは今世に利し、若くは後世に利し、若くは道德に利せん」と。是の如き方便無き菩薩は、諸佛を供養し、善根を種ゑ、眞知識を得と雖も尙ほ得ず、何に況んや、供養せざるをや。餘の五波羅蜜も亦た是の如し。

卷の第八十六

第七十四遍學品

【經】爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩は大智慧を成就し、是の深法を行ずるも亦た果報を受けず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。菩薩摩訶薩は大智慧を成就し、是の深般若波羅蜜を行ずるも亦た果報を受けず。何となれば是の菩薩摩訶薩は、諸法の性中に動ぜざるが故なり」と。「世尊よ、何等の諸法の性中に動ぜざるや」と。佛の言はく、「無所有の性中に於いて動ぜざるなり。復次に、菩薩摩訶薩は色性の中に動ぜず、受想行識性の中に動ぜず、檀波羅蜜性の中に動ぜず、尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜性の中に動ぜず、四禪性の中に動ぜず、四無量性の中に動ぜず、四無色定性の中に動ぜず、四念處性の中に動ぜず、乃至八聖道分性の中に動ぜず、空三昧、無相、無作三昧乃至、大慈大悲性の中に動ぜず。何となれば、須菩提よ、是の諸の法性は即ち是れ無所有なればなり。須菩提よ、無所有の法を以て、所有の法を得ること能はず」と。

須菩提言さく、「世尊よ、所有の法は能く所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、所有の法は能く無所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、無所有の法は能く無所有の法を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、若し無所有は所有を得ること能はず、所有は所有を得ること能はず、所有は無所有を得ること能はず、無所有は無所有を得ること能はずんば、將に世尊は道を得ざること無きや」と。佛の言はく、「得ること有るも、此の四句を以てせず」と。「世尊よ、云何に得ること有るや」と。佛の言はく、「所有に非ず、無所有に非ず、諸の戯論無き、是を道を得と名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ、菩薩摩訶薩の戯論なるや」と、佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、色の若くは常、若くは無常を觀ぜば、是を戯論と爲す。受想行識の若くは常、若くは無常を觀ぜば、是を戯論と爲す。色の若くは苦、若くは樂、受想行識の若くは苦、若くは樂を觀ぜば、是を戯論と爲す。色の若くは我、若くは非我、受想行識の若くは我、若くは非我、色の若くは寂滅、若くは不寂滅、受想行識の若くは寂滅、若くは不寂滅を觀ぜば、是を戯論と爲す。苦聖諦は應に見るべく、集聖諦は應に斷ずべく、滅聖諦は應に證すべく、道聖諦は應に修すべしとせば、是を戯論と爲す。應に四禪・四無量心・四無色定を修すべしとせば、是を戯論と爲す。應に四念處・四正勤・四如意足・五根 五力・七覺分・八聖道分を修すべしとせば、是を戯論と爲す。應に空解脫門・無相解脫門・無作解脫門を修すべしとせば、是を戯論と爲す。應に八背捨、九次第定を修すべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道を修すべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に菩薩の十地を具足すべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に菩薩

位に入るべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に佛國土を淨むべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に衆生を成就すべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を生ずべしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に一切種智を得べしとせば、是を戯論と爲す。我れ當に一切煩惱の習を斷ずべしとせば、是を戯論と爲す。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色の若くは常、若くは無常を戯論すべからざるが故に、應に戯論すべからず。受想行識の若くは常、若くは無常を戯論すべからざるが故に、應に戯論せず。乃至、一切種智を戯論すべからざるが故に、應に戯論せず。何となれば、性は戯論ならざるの性、無性も戯論ならざるの無性なり。性と無性とを離れて更に法の得べき無ければなり。所謂、戯論とは戯論の法と戯論の處となり。是を以ての故に、須菩提よ、色は戯論無く、受想行識乃至一切種智は戯論無し。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に無戯論の般若波羅蜜を行ずべし」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば色は戯論すべからず、乃至一切種智は戯論すべからざるや」と、佛、須菩提に告げたまはく、「色に性無く、乃至一切種智に性無し。須菩提よ、若し法の性無なれば、即ち是れ戯論無し。是を以ての故に、色は戯論すべからず、乃至一切種智は戯論すべからず。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く無戯論の般若波羅蜜を行ぜば、是の時菩薩位に入ることを得」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法に性有ること無くんば、菩薩は何等の道を行じてか、菩薩位に入るや。聲聞道を用ふとや爲ん、辟支佛道を用ふとや爲ん、佛道を用ふとや爲ん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「聲聞道を以てせず辟支佛道を以てせず、佛道を以てせずして、菩薩位に入ることを得。菩薩摩訶薩は、遍ねく諸道を學して菩薩位に入ることを得。須菩提よ、譬へば、八人の先づ諸道を學し、然る後に正位に入り、未だ果を得ずして、而して先づ果道を生ずるが如し。菩薩も亦た是の如く、先づ遍ねく諸道を學し、然る後に菩薩位に入り、亦た未だ一切種智を得ずして、而して先づ金剛三昧を生ず。爾の時、一念相應の慧を以て、一切種智を得」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、遍ねく諸道を學して菩薩位に入らば、八人は、須陀洹に向つて須陀洹を得、斯陀含に向つて斯陀含を得、阿那含に向つて阿那含を得、阿羅漢に向つて阿羅漢、辟支佛道、佛道を得。是の諸道は各各異なれり。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、遍ねく諸道を學し、然る後に菩薩位に入るとせば、是の菩薩若し八道を生ぜば、應に八人と作るべし。見道を生ぜば應に須陀洹と作るべく、思惟道を生ぜば應に斯陀含と作り、阿那含と作り、阿羅漢と作るべし。若し辟支佛道を生ぜば、辟支佛と作る。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、八人と作り、然る後に菩薩位に入るとせば、是の處有ること無し。菩薩位に入らずして、一切種智を得るも亦た是の處無し。須陀洹と作り、乃至辟支佛と作り、然る後、菩薩位に入るも亦た是の處無し。菩薩位に入らずして、一切種智を得るも、亦た是の處無し。世尊よ、我れ云何にして應に知るべきや、菩薩摩訶薩の遍ねく諸道を學して、菩薩位に入るを得るといふことを」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し菩薩摩訶薩、八人と作りて、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、辟支佛道を得、

然る後に菩薩位に入るとせば、是の處有ること無し。菩薩位に入らずして、當に一切種智を得べしとせば、是の處有ること無し。須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、初發意より六波羅蜜を行ずる時、智を以て觀じ、八地を過ぐ。何等か八地なる。乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辦地、辟支佛地なり。道種智を以て、菩薩位に入り、菩薩位に入り已つて、一切種智を以て、一切煩惱の習を斷ず。須菩提よ、是の八人の若くは智、若くは斷は是れ菩薩の無生法忍なり。須陀洹の若くは智、若くは斷、斯陀含の若くは智、若くは斷、阿那含の若くは智、若くは斷、阿羅漢の若くは智、若くは斷、辟支佛の若くは智、若くは斷は、皆な是れ菩薩の忍なり。菩薩は是の如く、聲聞、辟支佛道を學し、道種智を以て菩薩位に入り、菩薩位に入り已つて、一切種智を以て、一切煩惱の習を斷じて佛道を得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は遍ねく諸道を學し、具足して應に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、阿耨多羅三藐三菩提を得已り、果を以て衆生を饒益す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊の所說の道は、聲聞道、辟支佛道、佛道なり。何等か是れ菩薩の道種智なる」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、應に一切道種淨智を生ずべし。須菩提よ、何等か是れ道種淨智なる。若し諸法の相貌の顯示すべき所の法を、菩薩は應に正しく知るべく、正しく知り已つて、他の爲に演說開示し、諸の衆生をして解を得せしむ。是の菩薩摩訶薩は、應に一切の音聲語言を解すべく、是の音聲を以て法を說くに、遍ねく三千大千世界に滿つること響相の如し。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に先づ具足して一切道を學すべく、道智を具足し已つて應に分別して衆生の深心を知るべし。所謂る地獄の衆生、地獄道の、地獄の因、地獄の果は應に障ふべきを知るべし。畜生餓鬼道の、畜生餓鬼の因、畜生餓鬼の果、應に障ふべきを知るべし。諸の龍、鬼神、犍闥婆、緊那羅、摩睺羅伽、阿修羅道の因果應に障ふべきを知るべし。人道の因果、應に知るべし。諸の天道の因果、應に知るべく、四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵天・光音天・遍淨天・廣果天・無想天・阿婆羅呵天・無熱天・易見天・喜見天・阿迦尼吒天道の因果、應に知るべく、無邊虛空處・無邊識處・無所有處・非有想非無想處道の因果、應に知るべく、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八正道分の因果、應に知るべく、空解脫門・無相解脫門・無作解脫門・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲の因果、應に知るべし。菩薩は是の道を以て、衆生をして須陀洹道乃至阿羅漢、辟支佛道乃至阿耨多羅三藐三菩提に入らしむ。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の淨き道種智と名づく。菩薩は是の道種智を學し已つて、衆生の深心の相に入り、入り已つて、衆生の心如に隨つて應に說法して、言ふ所虛しからざるべし。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、善く衆生の根相を知り、一切衆生の心心數法、生死の所趣を知ればなり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の如く應に道般若波羅蜜を行ずべし。何となれば、一切諸の善助道の法は、皆な般若波羅蜜の中に入り、諸の菩薩摩訶薩、聲聞、辟支佛の應に行ずべき所なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提。是の一切法は皆な合せず、散ぜず、色なく、形なく、對な

く、一相にして所謂無相ならば、世尊よ、云何にして是の助道法は、能く阿耨多羅三藐三菩提を取るや。世尊よ、是は合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相の法にして、取る所無く、捨つる所無く、譬へば、虚空の取る無く、捨つる無きが如し」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し、須菩提よ、諸法は自相空にして、取る所無く、捨つる所無し。須菩提よ、衆生有りて、諸法の自相空を知らざれば、是の衆生の爲の故に、助道法を顯示して、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。復次に、須菩提よ、所有る色受想行識、所有る檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜、所有る內空・外空乃至無法有法空・初禪乃至非有想非無想處・四念處乃至八聖道分・三解脫門・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・一切種智等の諸法、是の聖法の中に於いて、皆な合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相なり。是の世俗法を以ての故に、衆生の爲に說いて解せしむ、第一義を以つてするに非ず。須菩提よ、是の一切法中に於いて、菩薩摩訶薩は智見を以て法の如く應に學すべく、學し已つて諸法の、應に用ふべきと、應に用ふべからざるとを分別す」と。

須菩提言さく「世尊よ、何等の法をか、菩薩分別し已つて應に用ふべしとし、應に用ふべからずとするや」と。佛の言はく、「聲聞辟支佛法は、分別して應に用ふべからずと知り、一切種智は分別して、應に用ふべしと知る。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の聖法の中に於いて、應に般若波羅蜜を學すべし。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何を以ての故に、說いて聖法と名く。何等か是れ聖法なる」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の聲聞辟支佛の法、諸の菩薩摩訶薩、及び諸佛は、欲・瞋・癡に於いて合せず、散ぜず。身見、戒取、疑と合せず、散ぜず。欲染、瞋恚と合せず、散ぜず。色染、無色染、掉慢、無明と合せず、散ぜず。初禪乃至第四禪と合せず、散ぜず。慈・悲・喜・捨、虛空處乃至非有想非無想處と合せず、散ぜず。四念處乃至八聖道分と合せず、散ぜず。內空乃至大悲、有爲性、無爲性と合せず、散ぜず。何となれば是の一切法は皆た色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相なればなり。無色法は無色法と合せず、散ぜず。無形法は無形法と合せず、散ぜず。無對法は無對法と合せず、散ぜず。一相法は一相法と合せず、散ぜず。無相法は無相法と合せず、散ぜず。須菩提よ、是の色なく、形なく、對なく、一相、所謂無相の般若波羅蜜を諸の菩薩摩訶薩は應に學すべく、學し已れば諸の法相を得ず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は色相を學せざるや、受想行識相を學せざるや、眼乃至意相を學せず。色相乃至法相を學せず。地種相乃至識種相を學せず。檀波羅蜜相・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜の相を學せず、內空乃至無法有法空の相を學せず、初禪の相乃至第四禪の相を學せず、慈相乃至捨相を學せず、無邊空相乃至非有想非無想相を學せず、四念處相乃至八聖道分相を學せず、空三昧相、無相無作三昧相を學せず、八背捨、九次第定相を學せず、佛の十力相、四無所畏、四無礙智の相十八不共法の相、大慈大悲の相を學せず、苦聖諦相、集、滅、道聖諦相を學せず、逆順の十二因緣相を學せず、有爲性相、無爲性相を學

せざるや。世尊よ、若し諸の法相を學せずんば、菩薩摩訶薩は云何にして諸の法相の、若くは有爲、若くは無爲を學し、學し已つて聲聞辟支佛地を過ぎん。若し聲聞辟支佛地を過ぎずんば、云何にして菩薩位に入らん。若し菩薩位に入らずんば、云何にして當に一切種智を得べけん。若し一切種智を得ずんば、云何にして當に法輪を轉ずべけん。若し法輪を轉ぜずんば、云何にして三乘を以て衆生の生死を度せん」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法、實に有相ならば、菩薩は應に是の相を學すべし。須菩提よ、一切法は實に有相なく、色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相なるを以て、是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は相を學せず、無相を學せず。何となれば、有佛にも無佛にも、諸法一相の性は常住なればなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は有相に非ず、無相に非ずんば、菩薩摩訶薩は、云何にして般若波羅蜜を修せん。若し般若波羅蜜を修せずんば聲聞辟支佛地を過ぐること能はず。若し聲聞辟支佛地を過ぎずんば、菩薩位に入ること能はず。若し菩薩位に入らずんば、無生法忍を得ず。若し無生法忍を得ずんば、諸の菩薩の神通を得ること能はず。若し菩薩の神通を得ずんば、佛國土を淨め、衆生を成就すること能はず。若し佛國土を淨め、衆生を成就せずんば、一切種智を得ること能はず。若し一切種智を得ずんば、法輪を轉ずること能はず。若し法轉を轉ぜずんば、衆生をして須陀洹果・斯陀含(果)・阿那含(果)・阿羅漢果・辟支佛道を得せしむること能はず、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむること能はず。亦た衆生をして、布施の福を得せしむること能はず。亦た持戒、修定の福を得せしむること能はず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸法は無相にして、一相に非ず、異相に非ず。若し無相を修するは是れ般若波羅蜜を修するなり」と。

須菩提言さく、「世尊よ、云何に無相を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなるや」と。佛の言はく、「諸法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり」と。「世尊よ、云何に諸法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなるや」と。佛の言はく、「色の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。受想行識の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。眼の壞、耳鼻舌身意法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。色法の壞、聲香味觸法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。不淨觀の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。初禪の壞、第二、第三、第四禪の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。慈悲喜捨の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。無邊空處・無邊識處・無所有處・非有想非無想處の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天・念滅・念安般の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。無常相・苦相・無我相・空相・集相・因相・生相・緣相・閉相・滅相・妙相・出相道相・正相・跡相・離相の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。十二因緣の壞を修し、我相・衆生・壽命相の壞を修し、乃至知者・見者相の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。常相・樂相・淨相・我相の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。四念處、乃至八處聖

道分の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。空三昧・無相三昧・無作三昧の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。八背捨・九次第定の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。有覺有觀三昧・[一]無覺有觀三昧・無覺無觀三昧の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。苦聖諦・集聖諦・滅聖諦・道聖諦の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。苦智・集智・滅智・道智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。盡智・無生智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。法智・比智・世智・他心智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。檀波羅蜜を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。內空・外空・內外空・空空・大空・第一義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無始空・散空・性空・諸法空・自相空・不可得空・無法空・有法空・無法有法空の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。一切智の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり。一切煩惱の習の壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば色の壞を修し、乃至一切煩惱の習を斷ずる壞を修するは、是れ般若波羅蜜を修するなりと名くるや」。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色法有りと念ぜず、是れ般若波羅蜜を修するなり。受想行識有りと念ぜず、乃至一切の煩惱の習を壞する法有りと念ぜず、是れ般若波羅蜜を修すと爲す。何となれば、法の念有る者は般若波羅蜜を修せず。須菩提よ、法の念有る者は檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を修せず。何となれば、須菩提よ、是の人は法に著して、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜を行ぜず。是の如く著する者には、解脫有ること無く、道有ること無く、涅槃有ること無ければなり。法の念有る者は、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を修せず、空三昧を修せず、乃至一切種智を修せず。何となれば、是の人は法に著るが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ有法、何等か是れ無法なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「二は是れ有法、不二は是れ無法なり」と。「世尊よ、何等か是れ二なるや」。佛の言はく、「色相は是れ二、受想行識相は是れ二、眼相乃至意相は是れ二、色相乃至法相は是れ二、檀波羅蜜乃至佛相・阿耨多羅三藐三菩提相・有爲(性)・無爲相は是れ二なり。須菩提よ、一切相は皆な是れ二なり。一切の二は皆な是れ有法なり。適有法有れば便ち生死有り。適生死有れば、生老病死、憂悲苦惱を離るることを得ず。是の因緣を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、二相とは、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜有ること無く、道有ること無く、果有ること無く、乃至順忍有ること無し、何に況んや、色相を見、乃至一切種智相を見んや。若し道を修すること無くんば、云何んぞ須陀洹果、乃至阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提及び一切煩惱の習を斷ずることを得んや」と。

【論】釋して曰はく、佛說きたまはく、「菩薩は六波羅蜜を行じて、世間の果執を受けず」と。

【一】別本には「有覺有觀三昧」の次に「無定の壞は是れ般若波羅蜜を修するなり。有覺有觀三昧」の字を挿入す。

須菩提は未曾有なりと歎じ、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩は大智慧を成就し、是の深法を行じ、能く因と作して而も果を受けず。是の菩薩は大利の爲の故に小報を受けず」と。佛は其の意を可し已つて、更に自ら因緣を說きたまふ。所謂、菩薩は諸の法性中に於いて動ぜずと。諸の法性は、無所有にして畢竟空なり。法性實際を知る菩薩は定心に安住し、是の中に動ぜず。須菩提問ふ、「世尊よ、何等の性中に動ぜざるや」と。佛答へたまはく、「色性中に動ぜず。乃至大慈大悲等の性中に動ぜず。何となれば、是の諸法の性は衆の因緣もて生ずるが故に、自在ならず、定相無く、定相無きが故に所有無ければなり。諸法とは所謂色等の法なり。是の色等の法に因るが故に無爲を說く。是の故に、無爲法も亦た所有無し。何となれば、無所有の法を以て、所有の法を得べからざればなり」と。須菩提言さく、「若し無所有は所有を得ること能はずんば、豈に所有の法を以て所有の法を得べけんや」と。佛答へたまはく、「不なり。何となれば、無所有の法は、一切の聖人の稱讃したまふ所なり。所住の處すら尚ほ所得を有すること能はず。何に況んや、所有の法をや」と。「所有の法は無所有を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり。何となれば、所有と無所有の二は俱に過有るが故なり」と。「無所有を以て無所有を得べからずと言ふや不や」と。佛の言はく、「不なり、何となれば、所有の法に生相、住相有り。虛誑なるを以ての故に、尚ほ所得無し。何に況んや、無所有なるをや。本より已來畢竟空にして、而も所得有り」と。此の中須菩提、更に問ふ、「世尊よ、若し四句は皆な得ざるを以て、將に道無く、果を得ること無しとするや」と。佛答へたまはく、「實に得道の法有り。但だ是の四句を以てせず。何となれば、四句は上の如き失有るが故なり。若し是の四句の戲論を離るれば、卽ち是れ道なり」と。

復た問ふ、「世尊よ、何等か是れ菩薩の戲論の相なるや」と。佛答へたまはく、「色等は若くは常、若くは無常なりとするは是れ菩薩の戲論なり。何となれば、若し常なれば則ち不生不滅にして、罪福好醜無ければなり。無常も亦た然らず。何となれば、常に因りて無常を說く。常既に不可得なり、何に況んや、無常をや」と。

復次に、若し無常なれば、定んで是の色等の實相も、亦た應に業因緣・果報有るべからず。何となれば、色等の諸法は念念に滅失するが故なり。若し業因緣・果報滅すれば、則ち無常相と名けず。是の如き等の種種の因緣の故に、無常は是れ色等の實相

に非ず。先に無常を破する中に說くが如し。乃至、是の念を作さく、「我れ當に一切煩惱の習を斷ずべし」と。是を戲論と爲す。色等の諸法は戲論すべからず、而も凡夫の人は諸法を戲論す。菩薩は、不可戲論に於いて、法に隨つて戲論せず。何となれば、自性は自性を戲論すること能はざればなり。所以何となれば、性は因緣より生ずるが故に、但だ假名のみ有り、云何んぞ能く戲論せん。若し性すら戲論する能はずんば、何に況んや無性をや。離性、無性は更に第三法の戲論すべきもの無し。所謂、戲論とは戲論の法、戲論の處なり。是の法は皆な不可得なり。須菩提よ、色等の法は是れ不可戲論の相なり。是の如く、菩薩は應に無戲論の般若波羅蜜を行ずべし。

復次に、佛自ら不可戲論の因緣を說きたまふ。色等の法は無性なり。若し法は無性ならば、即ち是れ戲論すべからず。若し菩薩能く是の不可戲論の般若を行ぜば、便ち菩薩位に入ることを得と。須菩薩は意へらく戲論無ければ、是の三乘道の菩薩は、何道を以て無戲論の菩薩位に入るやと。佛は答へて、皆な不なりと言へり。何となれば、菩薩は大乘の人なるが故に、應に二乘道を用ふべからず。六波羅蜜を未だ具足せざるが故に、佛道を用ふること能はず。此の中に佛自ら因緣を說きたまふ、菩薩は應に遍ねく諸道を學して菩薩位に入るべし。此の中に譬喩を說く、見諦道中の八人、先時に遍ねく諸道を學し、正位に入り、而も未だ須陀洹果を得ざるが如し。菩薩も亦た是の如く、先づ遍ねく諸道を學し、菩薩位に入り、而も未だ一切種智の果を得ず。若し菩薩、金剛三昧に住すれば、一念相應の慧を以て一切種智の果を得。須菩提問ふ、「世尊よ、若し菩薩、遍ねく諸道を學し、然る後に菩薩位に入らば、是の諸道は各各異なれり。若し菩薩遍ねく是の道を學し、若し八道に生ぜば、即ち是れ八人なり。乃至辟支佛道に生ずれば、即ち是れ辟支佛なり。世尊よ、若し菩薩八人と作り、乃至辟支佛と作り、然る後に菩薩位に入るとは、是の處有ること無し。若し菩薩位に入らずして、一切種智を得るも、亦た是處有ること無し。我れ當に云何にして菩薩の遍く諸道を學して、菩薩位に入ることを知るべきやと。佛、其の意を可るし已つて、更に自ら因緣を說きたまふ。菩薩は初發意に六波羅蜜を行ずる時、智見を以て、八地に入ることを觀じ、直に過ぐ。人の親親が獄に繫がるるが故に、入りて之を看るも、亦た與に同じく桎梏に著かざるが如し。菩薩は道種智を具足せんと欲するが故に、菩薩位に入る。遍ねく諸道

を觀じて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、一切種智を得、煩惱の習を斷ず。佛、須菩提に示したまふ、二乘の人は諸佛菩薩の智慧に於て少氣分を得。是の故に、八人の若くは智、若くは斷、乃至、辟支佛の若くは智、若くは斷は、皆な是れ菩薩の無生法忍智にして、學人の八智と名く。無學は或は九、或は十斷なり。十種の結使を斷ずるに名く。所謂上下分の十結なり。須陀洹、斯陀含は略して三結を斷ずと說く。阿那含は、略しては五下分の結を斷ずと說く。廣くは九十二を斷ずと說く。阿羅漢は、略しては三漏盡くと說き、廣くは一切の煩惱を斷ずと說き、是を智斷と名く。智斷は皆な是れ菩薩の忍なり。聲聞の人は四諦を以て道を得、菩薩は一諦を以て道に入る。佛、是の四諦を說きたまふも、皆な是れ一諦にして、分別するが故に四有り。是の四諦の二乘の智斷は皆な一諦の中に在り。菩薩は先づ柔順忍の中に住し、無生無滅、亦た非無生非無滅を學し、有見・無見・有無見・非有非無見等を離れ、諸の戲論を滅し、無生忍を得。無生忍とは、佛、後品の中に自ら說きたまへり。乃ち作佛に至るまで常に惡心を生ぜず。是の故に無生忍と名く。論者言く、是の忍を得て一切法の畢竟空を觀じ、心心數法を緣ずることを斷じて生ぜず、是を無生忍と名くと。又復た言く、能く聲聞辟支佛の智慧を過ぐるを無生忍と名くと。聲聞辟支佛の智慧は、色等の五衆の生滅を觀じ、心厭離して解脫を得んと欲す。菩薩は大福德の智慧を以て、生滅を觀ずる時、心に怖畏せず。小乘人、菩薩の如きは、慧眼を以て生滅の實定相を求むるに得べからず。先の破生品の中に說くが如し。但だ肉眼、麁心のみを以て、無常生滅有ることを見る。凡夫の人は諸法の中に於いて常見に著し、是の著する所の法、還つて無常に歸し、衆生は憂悲苦惱を得。是の故に、佛說きたまはく、「憂苦を離れんと欲せば、常相を觀ずること莫れ」と。是の無常は常顚倒を破するが故に、無常に著することを爲さざるが故に說く。是の故に、菩薩は生滅觀を捨てて、不生不滅の中に入る。

問うて曰く、若し不生不滅に入らば、不生不滅は、卽ち復た是れ常なり。云何んぞ常顚倒を離るることを得んや。

答へて曰く、無常に二種有るが如し。一には常顚倒を破して、無常に著せず。二には無常に著して戲論を生ず。無生忍も亦た是の如し。一には生滅を破すと雖も、無生無滅に著せざるが故に常顚倒に墮せず。二には不生滅に著するが故に、常顚倒に

墮す。眞の無生とは、諸觀を滅し、語言の道斷え、一切道を觀ずること涅槃の相の如く、本より已來常に自ら無生なり。智慧を以て觀ずるに非ざるが故に、無生をして、是の無生無滅畢竟清淨を得せしむ。無常觀すら尙ほ取らず、何に況んや生滅をや。是の如き等の相を無生法忍と名く。是の無生(法)忍を得るが故に、卽ち菩薩位に入り、菩薩位に入り已り、一切種智を以て、煩惱及び習を斷じ、種種の因緣もて一切衆生を度す。好果樹の饒益する所多きが如し。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩の道種智なるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は無生忍法に住して、諸法實相を得、實相より起つて、諸法の名相語言を取り、旣に自ら善く解し、衆生の爲に說いて開語を得せしむ。菩薩は福德の因緣の故に、一切衆生の音聲語言を解し、是の音聲を以て、三千大千世界に遍くし、亦た是の聲に著せず。如の響相を知る。是の音聲は卽ち是れ梵音の相なり。是を以ての故に、菩薩は應に一切の道を知り、遍く衆生の心を觀じ、其の本末を知り、善法を以て利益し、不善法を遮すべし」と。經中に廣く說くが如し。菩薩は先づ諸法實相を知るが故に、二乘道に於て入出自在に觀じ已つて、直に過ぎて菩薩位に入り、衆生を度せんが爲の故に道慧を起し、衆生の爲に法を說かんと欲す。一切衆生の語言音聲を解し、梵音の聲を以て法を說く。所謂、惡道を遮し善道を開く。惡道とは三惡道、善道とは三善道(卽ち)人・天・阿修羅なり。種種の因緣もて惡道を呵し、善道を讚ず。惡道を遮すとは、所謂、地獄道、地獄の因、地獄の果なり。地獄は先に說くが如し。地獄道とは上の不善道なり。地獄の因とは三毒なり。貪欲增長して貪嫉を起すは不善道なり。瞋恚增長して恚惱を起すは不善道なり。愚癡增長して邪見を起すは不善道なり。三毒は三不善道の因にして、三不善道は是れ七不善道の因なり。地獄の果とは、是の因を以ての故に地獄の身心を受け、身心に種種の苦惱を受く。是を果と名く。菩薩は應に衆生に地獄の果を示し、然る後に爲に法を說き、地獄の道及び因果を斷ぜしむべし。十不善道に上中下有り。上とは地獄、中とは畜生、下とは餓鬼なり。十善道にも亦た上中下有り、上とは天、中とは人、下とは鬼神なり。十善道に住して能く欲を離れ、色界に生じ、色を離れて無色界に生じ、三惡道中に常に苦を受くるが故に、應に知るべし、應に遮すべしと言ふ。天人の中には得道の因緣有り。涅槃の爲の故に、或時は應に遮すべし。不定なるを以ての故に、餘の助道法を說かざるが故に、應に遮を說くべからず。

乃至阿耨多羅三藐三菩提を、菩薩能く是の如く分別し已つて、衆生の應に小乘法を以て度すべき者を知らば、小乘法を以て而も之を度し、應に大乘法を以て度すべき者は、大乘法を以て而も之を度す。是の菩薩は衆生の深心の數事、及び宿命の業因緣を知り、又未來世の果報、因緣を知り、又衆生を化すべき時節を知り、及び處所を知り、諸餘の度すべき因緣、盡く皆な之を知る。是の故に所說虛しからず。是の如きの道種慧、及び諸の助道法は皆な般若の中に攝在す。是の故に菩薩は應に道慧般若を行ずべし。

須菩提、佛に白して言さく、「若し助道法、菩提、是の法は皆な合せず、散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相にして、是の助道法は皆な空ならば、云何にして能く阿耨多羅三藐三菩提を取らん。空ならば所有の法無く、應に取ること無く、捨つること無かるべし。譬へば、虛空は無法なるが故に、取ること無く、捨つること無きが如し」と。須菩提の所說は眞實にして著心無きが故に、佛可して、「是の如し、是の如し」と言ひ、更に因緣を說きたまはく、「衆生有り、是の如く諸法の自相空なるを知らざるが故に、爲に是の助道法を分別し、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、但だ三十七品のみ空にして合せず散ぜざるには非ず。所有る色等乃至一切種智も、聖法の中に於ては亦た自相空にして合せず散ぜず」とは、是れ畢竟空の義なり。此の中に說くが如く、一相にして所謂無相なり。是の法は空なりと雖も、世諦を以ての故に、衆生の爲に說いて聖法に入ることを得せしめんと欲す。第一義には非ず。是の中の菩薩は皆な應に知見を以て、是の法を學すべし。初め知るを知と名け、後に深く入るを見と名く。知を未了に名け、見を已了に名く。

問うて曰く、知と見とに何の差別有りや。

答へて曰く、有人は言ふ、「知にして見に非ざる者有り。見にして知に非ざる者も有り。亦た知にして亦た見なるあり。知に非ず、見に非ざる有り」と。「知にして見に非ざる者有り」とは、盡知、無生智なり。世間の正見、及び五見を除き、餘の慧を皆な知と名く。是の慧は見に非ず。「見にして知に非ず」とは五見、世間の正見、見諦道の中の八忍なり。是は見にして知に非ず。餘の無漏の慧は（慧にして）、「亦た知とも名け亦た見とも名く。」是の見と知とを離れたる餘法は、見に非ず知に非ず」。

復次に、有人は言ふ、「定心を名けて見と爲し、定と未定を通じて、名けて知と爲す。轉法輪經の中に説くが如し。苦諦は知り已つて應に見るべく、知り已り分別して是の法は應に見るべしと知る、是れ苦諦なり。是の法は應に斷ずべきは是れ集諦なり。是の法の應に證すべきは是れ滅諦なり。是の法の應に修すべきは是れ道諦なり。或は煩惱の斷を知るを名けて見と爲す。九の斷の知の如し。

須菩提は般若の異なる名字、所謂聖法を聞くが故に問ふ、「何等か是れ聖法なるや」と。佛答へたまはく、「聖法中の諸の賢聖、若くは佛、若くは辟支佛、聲聞等は、欲等の諸法の不合不散を以てす。不合とは、一切の煩惱を顚倒と名く、顚倒は卽ち所有無し。若し所有無くんば、云何んぞ合すべき。若し合せずんば、云何んぞ散ずること有らん。合せざるが故に、凡人を輕んぜず、散ぜざるが故に自ら高からず。一切衆生に於いて不憎不愛なり」と。

又復た此の中に、佛自ら不合不散の因緣を説きたまふ。所謂、是の法は皆な色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂無相なり。無色は無色法と合せず散ぜず。乃至無相法は無相法と合せず散ぜず。何となれば、是の法は皆な一性なればなり。自性は自性と合せず。是を一相無相の般若波羅蜜と名く。菩薩は應に學すべく、學し已つて法の得べき相無しと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩は色相を學せざるや。乃至有爲無爲相を學せざるや。世尊よ、若し是の諸の法相を學せずんば、云何なれば經中に、菩薩は先づ諸法の相を學し、後、聲聞、辟支佛地を過ぐと説くや。若し聲聞辟支佛地を過ぎずんば、云何にして菩薩位に入らん」と。此の中に廣く説くが如し。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法に實に相有らば、應當に是の相を學すべし。須菩提よ、一切法は實に相無し。是の故に、菩薩は應に相を學すべからず。無相も亦た應に學すべからず。相を取るを以ての故に、相事を破す」と。問相品の中に説くが如し。有佛にも無佛にも、諸法は常住に一相にして所謂無相なり。須菩提は佛より一切法の無相を聞き、今還つて佛に問ふ、「世尊よ、若し一切法は有相に非ず、無相に非ずとせば、云何にして菩薩は般若を修せん。若し無相有らば無相に因つて般若を修すべし。今、相は無相なるを以て皆な無ならば、何事に因つてか般若を修するを得ん。若し般若を修せずんば、聲聞辟支佛地を過ぐるを得ること能はず、乃至三福田に安立する能

はず」と。佛は其の言を可とし、「是の如し、是の如し」と。而して更に般若を修する因緣を說きたまふ。「所謂菩薩は修相を以ての故に、是の般若を修せず、無相を修するが故に是れ般若を修す」と。復問ふ、「世尊よ、云何なれば無相を修するは、是れ般若を修するや。若し無相ならば、云何にして修すべき」と。佛答へたまはく、「諸法の壞を修するは、是れ般若を修するなり。諸法は壞するを以ての故に、無相の相も亦た壞す。譬へば、車が分壞するが故に、車相も亦た滅するが如く、又、輪の分壞するが故に、輪相も亦た滅するが如し。是の如くして乃ち微塵に至る」。「世尊よ、何等か是れ諸法の破壞すべき者なるや」と。佛答へたまはく、「色法の壞を修するは、卽ち是れ般若波羅蜜を修するなり。乃至、斷一切煩惱習の壞を修するは、卽ち是れ般若波羅蜜を修するなり」と。須菩提、佛に白さく、「云何に色の壞を修し、乃至斷一切煩惱習の壞を修するは、是れ般若を修するなるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は一心に薩婆若を念じ、衆生を憐愍し、正しく般若波羅蜜を行ずることを得んと欲し、色は是れ有法なりと念ぜず。是の如く修するは是れ般若を修するなり」と。色は是れ定實、有相の過有るを以ての故なり。所以何となれば、佛此の中に自ら因緣を說きたまふ。有相の者は般若を修せず。般若の中には、無相すら尙ほ無し。何に況んや有法をや。是の人は般若波羅蜜を修せず、亦た五波羅蜜をも修せず。是の人は有法の戲論に著して、布施等を修せず。是の如く著する者には、解脫有ること無く、道無く、涅槃無し。三解脫門無きが故に、解脫無く、聖人無しと言ひ、空法の故に、道無しと言ひ、道無きが故に、涅槃無しと言ふ。

問うて曰く、何を以ての故に道無きや。

答へて曰く、是の人は諸法を戲論し、老病死を厭はず。法に著するが故に、邪見を生じ、邪見の故に、實の如く、身の不淨等を觀ずること能はず。身を觀ずること能はざるが故に、身念處を修せず。身念處を修せざるが故に、受・心・法念處を修すること能はず、四念處を修せざるが故に、乃至一切種智を修すること能はず。何となれば、有法に著するが故なり。

須菩提、佛に問ふ、「世尊よ、何等か是れ有法、何等か是れ無法なるや」と。凡人は或は有法中に於て無想を生じ、無法中に有想を生ず。是の事を分別せんと欲するが故に問へり。佛答へたまはく、「二相は是れ有、不二相は是れ無なり」と。復た問ふ、

「何等か是れ二相なるや」と。佛答へたまはく、「色相を取るは、即ち是れ二なり」と。先の品中に說くが如し。色を離れて、眼無く、眼を離れて色乃至有爲、無爲性無し。何となれば、有爲を離れて無爲を說くことを得ず。無爲を離れて有爲の實相を說くことを得ず。是の故に、二法は相離ることを得ず。凡人は此を謂つて二と爲す。是の故に顚倒す。佛は略して二相を說きたまへり。一切法中に相を取るは、皆な是れ二なり。一切の二は皆な是れ有なり。適有なれば便ち生死有り。何となれば、有中に著心を生じ、著心の因緣もて諸の煩惱を生じ、煩惱の因緣もて生死に往來し、生死の因緣もて憂悲苦惱す。是の故に說く、適有れば便ち生死有り。生死有れば老病憂苦を免ることを得ずと。須菩提よ、是を以て當に知るべし。二相の人は檀波羅蜜有ること無く、乃至順忍有ること無し。何に況んや、色の實相を見、乃至一切種智の實相を見んや。是の人、若し色等の諸法の實相を見ざれば、則ち修道無し。云何んぞ須陀洹果乃至一切煩惱の習を斷ずること有らんやと。六波羅蜜に二種有り。世間と出世間となり。此の人には出世間の六波羅蜜有ると無きが故に、是の故に說く、「是の有相の人には、六波羅蜜有ること無し」と。若し有らば、但だ世間の波羅蜜有るのみ。此の中には世間の波羅蜜を說かず、聲聞道の果すら尙ほ無し。何に況んや佛道有らんや。

問うて曰はく、順忍は是れ何等の順忍なりや。

答へて曰はく、是れ小乘の順忍なり。小乘の順忍すら尙ほ無し、何に況んや、大乘をや。

問うて曰はく、頂法は已に不退なり。何を以てか乃ち忍法に至るまでを說くや。

答へて曰はく、聲聞法の中にも、亦た頂の墮を說き、摩訶衍にも、亦た頂の墮を說く。汝は何を以ての故に、頂法は墮せずと言ふや。有人は言ふ、頂法は墮せずと雖も、牢固ならず、一定なること能はざるが故に說かず。忍は是れ久住にして、已に正定に入り、未だ無漏を得ずと雖も、而も無漏と同じく、苦法忍に隨順するを以ての故に、名けて忍と爲す。未だ曾て是の法を見ざるが故に、便ち能く忍を見る。是の故に忍と名く。是の人は、諸佛、聖人に於ては小と爲し、凡夫に於ては大と爲すと。色を見るに二種有り。一には、色の實相を見ること了了なり。二には、諸色に繫る煩惱を斷ずるが故に、名けて見と爲す。色の

如く、乃至一切種智、一切煩惱の習事も亦た是の如し。若し人、色を見道を修するすら尙ほ無し、何に況んや、能く須陀洹果を修し、乃至煩惱の習を斷ずることを得んや。

【經】爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し法相有りとするも尙ほ順忍を得ず、何に況んや道を得んや。世尊よ、若し法相無ければ當に順忍を得べきや不や。若くは乾慧地、若くは性地、若くは八人地、若くは見地、若くは薄地、若くは離欲地、若くは已辦地、若くは辟支佛地、若くは菩薩地、若くは佛地、若くは修道、是の修道に因りて當に煩惱を斷ずべきや不や。是の煩惱を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入ることを得ず。若し菩薩位に入らずんば、則ち一切種智を得ず。一切種智を得ざれば、則ち一切煩惱の習を斷ずることを得ること能はず。世尊よ、若し法相有ること無ければ、是の諸法は即ち不生なり。若し不生なれば、是の諸法は則ち一切種智を得ること能はず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し法有ること無ければ、則ち順忍有り、乃至一切煩惱の習を斷ず」と。

第七十五次[二]第學品

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、法相有りや不や。所謂色相乃至識相、眼相乃至意相、色相乃至法相、眼界相乃至意識界相、四念處相乃至一切種智相、若くは色相、若くは色斷相、乃至識相、識斷相、十二入、十八界も亦是の如し。若くは無明相、若くは無明斷相、乃至憂悲愁惱相、憂悲愁惱斷相、若くは欲相、若くは欲斷相、若くは瞋相、若くは瞋斷相、若くは癡相、若くは癡斷相、若くは苦相、若くは苦斷相、若くは集相、若くは集斷相、若くは盡相、若くは盡斷相、若くは道相、若くは道斷相、乃至一切種智相、斷一切煩惱習相（ありや不や）」と。佛言はく「不なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時は、法相・非法相あること無し。即ち是れ菩薩の順忍なり。若し法相有ること無く、非法相有ること無ければ、即ち是れ修道にして、亦た是れ道果なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩の有法は、是れ菩薩道なり。無法は是れ菩薩の果なり、是の因緣を以ての故に、當に知るべし、一切法は無所有の性なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は無所有の性ならば、佛は云何にして一切法の無所有の性なることを知るが故に、佛と成ることを得、一切法に於て自在力を得たまふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。一切法は無所有の性なり。我れ本と菩薩道を行じ、六波羅蜜を修し、諸欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂初禪に入り、乃至第四禪に入り、是の諸禪及び支に於て相を取り、有を念ぜず。是の

【二】宮本には「三次品」。明本には「三次第行品」に作る。

諸禪より禪味を受けず。是の禪を得ず。無染淸淨にして四禪を行じ、我れ是の諸禪に於いて果報を受けず。四禪に依りて住し、五神通(即ち)・身通・天耳・知他人心・宿命通・天眼通を起し、諸の神通に證して相を取らず、是の神通有るを念ぜず。神通の味を受けず。是の神通を得ず。我れ是の五神通に於いて分別して行ぜず。須菩提よ、我れ爾の時、一念相懸の慧を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。所謂是れ苦聖諦、是れ集、是れ滅、是れ道聖諦なり。十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を成就し、作佛を得三聚の衆生(即ち)正定・邪定・不定を分別す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「云何にして、世尊は、諸法無所有の性中に於いて、四禪、六神通を起し、亦た衆生無きに、而も分別して三聚と作すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸の欲、惡不善法は當に性有り。若くは自性、若くは他性有るべしとせば、我れ本と菩薩行を爲す時、諸の欲惡不善法の無所有性を觀じて初禪に入ること能はざらん。(そは)諸の惡欲不善法は無所有にして、性若くは自性、若くは他性は、皆な是れ無所有の性なるを以ての故に。我れ本と菩薩道を行ずる時、諸の欲惡不善法を離れて初禪に入り、乃至第四禪に入れり。須菩提よ、若し諸の神通に性の若くは自性、若くは他性有らば、我れ是の神通の無所有性を知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提よ、神通には性の、若くは自性、若くは他性有ること無く、皆な無所有性なるを以て。是を以つての故に、諸佛は神通に於て無所有性を知り、阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と。

【論】問うて曰く、諸法の空は一義なり。何を以ての故に、須菩提は種種の因緣もて重ねて問へるや。此の中に問ふ、「法相有る者は順忍を得ず。乃至若し不生ならば、是の諸法は薩婆若を得ること能はず」と。

答へて曰く、是の諸法畢竟空の義は、甚深にして解し難く說者すら尙ほ難しとす、何に況んや受者行者をや。是の故に、須菩提は般若を以て垂れ訖るも、人疑ひ多く、惑ひ多きを恐るるが故に、種種の因緣もて重ねて問へるなり。

復次に、所問の義は一なりと雖も、所因の處異なり。或は問ふ、「世尊よ、若し一切法空ならば、云何んぞ分別して五道有らん」と。或は問ふ、「若し一切無所有の相ならば、云何んぞ分別して三乘有らん」と。或は問ふ、「世尊よ、相ある者は、乃至順忍を得ず。云何にして當に八地を觀じて菩薩位に入るべきや」と。是の如き等種種に問ふ。異問の故に義は差別を得。(そは)般若には一定の相無きが故なり。佛、須菩提の意を可とし、「是の如し、是の如し」と(宣へり)。須菩提の先に問ふ順忍は、是れ小乘の順忍なり。今、須菩提は、菩薩の順忍法を問ふ。「若し菩薩般若を行ずる時、法相有りや不や」と。佛答へたまはく、「菩薩般若を行ずる時、法に相の、若くは有、若しくは無を生ずること無し。何となれば、有無を見るは、二つながら倶に過あるが

故なり。則ち是れ菩薩の順忍なり。一切法の中に於て有相を生ぜざるは、即ち是れ修道なり。須菩提よ、有法は是れ菩薩道、無法は是れ果なり。有法を有爲法に名け、無法は是れ無爲法なり。有爲の八聖道を行じて諸の煩惱を斷じ、無爲の果を得と。

復次に、有人は言ふ、「五波羅蜜を有法と名く、是れ菩薩道なり。般若波羅蜜は畢竟空なるが故に、法有ること無し。是は菩薩の果なり」と。有人は言ふ、「般若波羅蜜の智慧相は有爲法なるが故に、是を道と爲す。如・法性・實際は因緣より生ぜず、常に有なるが故に、名けて果と無す」と。是等の如き法の差別無きこと有り。是の因緣を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、一切法は皆な是れ無所有の性にして、名けて無法と爲すことを。

復た問ふ、「世尊よ、若し一切法は無所有の性ならば、佛は云何にして無所有の性中に於て、正智もて阿耨多羅三藐三菩提を得、諸法の中に於て自在を得るや」と。佛、其の言を可としたまはく、『菩薩は無所有の智を以て、一切法を合行し、能く一切の著を斷ずるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得」と。此の中に、佛は自を引いて證を爲したまはく、「我れ本と菩薩たりし時、六波羅蜜を行じ、欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂して初禪に入る」と、欲を離るとは、五欲を離るるなり。惡不善法を離るとは、五蓋を離るるなり。人を將ゐて惡道に入るを名けて惡と爲し、善法を障ぐるが故に、不善と名く。有覺有觀は初禪に攝する所の善の覺觀なり。離生喜樂とは、五欲を捨離して喜樂を生ずるなり。喜樂とは色界の中に二種の樂あり、一には有喜の樂、二には無喜の樂なり。喜樂は初禪、二禪中に、無喜の樂は三禪の中なり。初禪、二禪は倶に喜樂有り、何の差別かある。初禪中の喜樂は、欲を離るるによるが故に生じ、二禪の喜樂は定より生ず。

問うて曰く、亦た初禪の煩惱を離れて二禪を得。何を以てか、離生を說かざるや。

答へて曰く、欲界の中は、散亂の故に定の稱無し。行者、能く欲を離るるが故に、名けて離生と爲す。初禪の中には定有り。二禪は初禪の定に因りて生ずるが故に、名けて定生と爲す。

復次に、欲界の煩惱は、不善の相なるが故に初禪を障ふ。行者、大障を離れんと欲するが故に離生を說く。色界の煩惱を無記と名け、微弱を患と爲し、覺觀の因緣を以ての故に禪を失す。是の故に、佛說きたまはく、「諸の覺觀を滅し、內心清淨なる

が故に二禪を得。三禪、四禪は先に說くが如し。我、是の諸の禪支に於て相を取り、得已つて是の禪有りと念ぜず。初めて禪を習ふ時、相を取り、乃至得て、得已つて著味を恐るるが故に無常を觀じ、是の禪ありと念ぜず。是の禪定相を得ず、亦た味を受けず。染心無くして四禪を行じ、外道に異なり、是の諸の禪修に於いて、果報禪を受けず。四禪に依りて住し、五神通を起すも、亦た禪法の如く其の味を受けず。宿命通の故に、一切衆生の本業の因緣を知り、是の間に來生し、天眼通力の故に、衆生の未來世の所生の處を見、其の業行に隨つて、一切衆生の本末を知り已つて、心に大悲を生ず。云何にして衆生の生死相續の苦を斷ぜん」と。爾の時、心、廻向して漏盡通に入り、卽時に一念相應の慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得。所謂、是れ苦相なり。苦の因は是れ愛なり。愛斷じ、苦盡くれば致る」と爲す。苦盡くれば是れ道なり。四諦に通達するが故に、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を得、衆生を分別して三聚と爲し、三神通に住して是の衆生を度す。所謂、天耳、知他心、身通なり。衆生の爲に法を說き、生死を度らしむ』と。須菩提復た問ふ、「若し諸法、無所有ならば、云何にして佛は菩薩と爲る時、四禪六神通を起さん。若し衆生無くんば、云何にして衆生を分別して三聚と作さん」と。佛答へたまはく、「諸欲、諸惡は若し當に性の、若くは自性、若くは他性有るべくんば、我れ本と菩薩たりし時、諸欲の惡不善法の無所有性を觀じて、初禪に入ること能はざらん」と。佛の意はく、「若し諸欲不善法に、定性の實法、若くは多、若くは少有らば、自相は、若くは自身中に、若くは淨、常等の性有り。性に二種有り。若くは自性、若くは他性なり。自性を自身不淨性に名け、他性を衣服等の莊嚴、身具に名く。此は皆な無常・虛誑にして、苦惱の因緣なり。內外の五欲の中には、常樂我淨の實有ること無し。若し有らば、我れ本と菩薩道を行ずる時、五欲の空無所有の性を觀じて初禪に入ること能はざらん。今、欲惡不善法に、實性の、若くは自性、若くは他性有ること無し。是の故に我れ菩薩たりし時、五欲惡不善法を離れ、初禪に入り、乃至第四禪に入れり。若し諸の神通に性の若くは自性、若くは他性有らば、我れ本と菩薩道を行ずる時、神通の所有無きを知る故に阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざりしならん」と。須菩提問ふ、「若し諸法、定んで所有無く、性空ならば、佛は云何にして諸法の中に於て自在力を得ん」と。佛答へたまはく、「我れ四禪を以ての故に、諸の煩惱に於て解脫を得、六神通の故に諸法に於て自在を得、衆生を度

す」と。須菩提意へらく、「四禪、六神通は是れなるを以て、云何んぞ空に於て自在力を得ん」と。佛示したまはく、「我れ五欲等の空・虚誑にして、定相無きことを觀ずるが故に、此の禪に著せず。而して諸の神通を起すも、諸禪は有相有量なるが故に捨てて阿耨多羅三藐三菩提を得べし。初めて欲を離るる時、無所有の性を以て因と爲して、阿耨多羅三藐三菩提の果を得るも亦た所有無し。若し禪定は空にして、阿耨多羅三藐三菩提は不空ならば、是の難有るべし。今、皆な空なるが故に、應に難有るべからず。

卷の第八十七

第七十五次第學品(餘)

【經】須菩提言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、諸法の無所有性なるを知らば、四禪五神通に因つて阿耨多羅三藐三菩提を得。世尊よ、新學の菩薩摩訶薩は、云何なれば諸法の無所有性の中に於て、次第行、次第學、次第道あり、是の次第行次第學次第道を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、若くは初め諸佛より聞き、若くは多く諸佛を供養せる菩薩より聞き、若くは諸の阿羅漢、若くは諸の阿那含、若くは諸の斯陀含、若くは諸の須陀洹に聞く所、無所有を得るが故に是れ佛なり。無所有を得るが故に是れ阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹なり。一切の賢聖皆な無所有を得るが故に名あり。一切有爲の作法は所有の性無く、乃至毫末許りの如きも所有ある事なし。是の菩薩摩訶薩は、是れを聞き、已はりて、此の念を作す、若し一切の法、性有る事無ければ、無所有の性を得るが故に、是れ佛なり。乃至無所有を得るが故に、是れ須陀洹なり。我れ若し當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきも、若くは得ざるも、一切の法、常に有性なければ、我れ何を以てか發心して、阿耨多羅三藐三菩提を得ざらんや。阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、一切衆生の有相に行ずるに、當に無所有の中に住せしむべきなりと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し已りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。一切衆生を度することを爲すの故なり。菩薩摩訶薩の行ずる所の次第行、次第學、次第道とは、過去の諸の菩薩摩訶薩の行ずる所の道、阿耨多羅三藐三菩提を得るが如く、是の新發意の菩薩は、應に六波羅蜜を學すべし。所謂る檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜是れなり、是の菩薩摩訶薩、若し檀波羅蜜を行ずる時、自ら布施を行じ、亦た人に敎へて布施を行ぜしめ、布施を行ずるの功德を讚歎し、布施を行ずる者を歡喜して讚歎し、是の布施の因緣を以ての故に大財富を得。是の菩薩は慳心を遠離して衆生に布施し、飲食・衣服・香華・瓔珞・房舍・臥具・燈燭など種種資生に須ふる所盡く之を給與す。菩薩摩訶薩は是の布施及び持戒を行じて、天人の中に生じて、大尊貴なる事を得。是の持戒布施を以ての故に、禪定衆を得。是の布施持戒禪定を以ての故に、智慧衆・解脫衆・解脫知見衆を得。是の菩薩は是の布施・持戒・禪定衆・智慧衆・解脫衆・解脫知見衆に因つての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位に入り。菩薩位に入り已つて、佛國土を淨むることを得て、衆生を成就し、一切種智を得。一切衆生を得已りて法輪を轉じ。法輪を轉じ已りて、三乘の法を以て、衆生の生死を度脫せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩は是の布施を以て、次第行、次第學、次第道あるも、是れ皆な不可得なり。何となれば、自性は所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より、自ら持戒を行じ人を敎へて持戒せしめ、持戒の功德を讚歎し、持戒を行ずる者を歡喜し

讃歎す。持戒の因緣の故に、天人の中に生じて大尊貴なることを得。貧窮の者を見ては、施すに財物を以てし、持戒せざる者には、敎へて持戒せしむ。亂意の者には、敎へて禪定をせしめ、愚癡の者には、敎へて智慧あらしめ、無解脫の者には、敎へて解脫あらしめ、無解脫知見の者には、敎へて解脫知見あらしむ。是の持戒、禪定、智慧、解脫、解脫知見を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、佛國土を淨むることを得、佛國土を淨め已りて衆生を成就し、衆生を成就し已りて、一切種智を得。一切種智を得已りて、法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて、三乘の法を以て衆生を度脫す。是の如く、須菩提よ、菩薩は、是の持戒を以て、次第行、次第學、次第道あるも、是の事は皆な不可得なり。何となれば、一切法の自性に所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初めより已來、羼提波羅蜜を行じ、羼提を行ずる事を人に敎へ、羼提の功德を讃歎し、羼提を行ずる者を歡喜し讃歎す。羼提波羅蜜を行ずる時、衆生に布施して各各滿足せしめ、敎へて持戒せしめ、敎へて禪定せしめ、乃至解脫智見せしむ。是の布施・持戒・禪定・智慧の因緣を以ての故に、阿羅漢辟支佛地を過ぎて、菩薩位の中に入り。菩薩位の中に入り已りて、佛世界を淨むることを得。佛世界を淨め已りて衆生を成就し。衆生を成就し已りて、一切種智を得。一切種智を得已りて、法輪を轉じ。法輪を轉じ已りて、三乘の法を以て衆生を度脫す。是の如く須菩提よ、菩薩は、羼提波羅蜜を以て、次第行、次第學、次第道あるも、是の事は皆な不可得なり。何となれば、一切の法は、自性に所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初より以來、自ら毘梨耶波羅蜜を行じ、毘梨耶を人に行ずる事を敎へ、毘梨耶を行ずる功德を讃歎し、毘梨耶を行ずる者を歡喜し讃歎す。乃至是の事は不可得なり。自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初より以來、自ら禪に入りて無量心に入り、無色定に入り、亦た人をも敎へて禪に入り、無量心に入り無色定に入らしめ、禪に入り、無量心に入り、無色定に入る功德を讃歎し、禪無量心・無色定を行ずる者を歡喜し讃歎す。是の菩薩は諸の禪定無量心に住して、布施の衆生をして各各滿足せしめ、敎へて持戒せしめ、敎へて禪定智慧せしめ、是の布施・禪定・智慧・解脫・解脫知見の因緣を以ての故に、阿羅漢辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、佛世界を淨め、佛世界を淨め已りて、衆生を成就し、衆生を成就し已りて、一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて三乘の法を以て、一切衆生を度脫す、乃至是の事は不可得なり、自性所有無きが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は初より以來、般若波羅蜜を行じて、衆生に布施して、各各を滿足せしめ、敎へて持戒・禪定・智慧・解脫・解脫知見せしめ、是の菩薩の般若波羅蜜を行ずる時、自ら六波羅蜜を行じ、亦た他人をも敎へて六波羅蜜を行ぜしめ、六波羅蜜の功德を讃歎し、六波羅蜜を行ずる者を歡喜し讃歎す。是の菩薩は是の檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜の因緣及び方便力を以て、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入る、乃至是の事は不可得なり。自性所有無きが故なり。須菩提よ、是を初

發意の菩薩摩訶薩の次第行、次第學、次第道と名く。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の次第行、次第學、次第道とは、菩薩摩訶薩に初より以來、一切種智相應の心を以て、諸法の無所有の性を信解して、六念、謂ゆる念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天を修するなり。須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は、念佛を修するや、菩薩摩訶薩の念佛は、色を以て念ぜず、受想行識を以て念ぜず。何となれば、是れ色は自性無く、受想行識も自性なければなり。若し法自性無ければ、是を無所有と爲す、何となれば、憶するところなきが故なり。是を念佛となす。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の念佛は、三十二相を以て念ぜず、亦た金色身を念ぜず、丈光を念ぜず、八十隨形好を念ぜず。何となれば、是れ佛身は自性なきが故なり。若し法に自性なければ、是を無所有と爲す。何となれば、憶する無きが故なり、是を念佛となす。

復次に、須菩提よ、應に戒衆を以て佛を念ずべからず、應に定衆・智慧衆・解脱衆・解脱知見衆を以て佛を念ずべからず。何となれば是の衆は自性有る事なければなり。若し法に自性無ければ、是を法に非ずとなす。無所有の念、是を念佛となす。

復次に、須菩提よ、應に十力を以て佛を念ずべからず、應に四無所畏・四無礙智・十八不共法を以て佛を念ずべからず、應に大慈大悲を以て佛を念ずべからず。何となれば、是の諸法は自性無ければなり。若し法に自性無ければ、是に非ずとなす。念ずる所なき、是を念佛となす。

復次に、須菩提よ、應に十二因緣の法を以て佛を念ずべからず。何となれば、是の因緣の法は自性無ければなり。若し法に自性無ければ是れを非法となす、念ずる所なき、是を念佛とす。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、應に佛を念ずべし。是を菩薩の初發意の次第行・次第學・次第道となす。是の菩薩摩訶薩は、次第行・次第學・次第道の中に住して、能く四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を具足し、空三昧・無相無作三昧、乃至一切種智を修行す。諸法の性に所有無きが故なり。是の菩薩は諸法の性の所有無き事を知る。是の中に有性なく無性もなし。

須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は應に念法を修すべきか。須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、善法を念ぜず不善法を念ぜず、記法・無記法を念ぜず、世間法を念ぜず、出世間法を念ぜず、淨法を念ぜず、不淨法を念ぜず、聖法を念ぜず、凡夫法を念ぜず、有漏法を念ぜず、無漏法を念ぜず、欲界繋法・色界繋・無色界繋を法を念ぜず、有爲法・無爲法を念ぜず。何となれば、是の諸法は自性無ければなり。若し法に自性無ければ、是を非法と爲す、念ずる所なきが故なり。是を念法と爲す。念法の中に無所有の性を學するが故に、乃至當に一切種智を得べし。是の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸法無所有の性を得、是の無所有の性の中に、相あるに非らず、相なきに非らず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に念法を修すべし。是の法の中に於いて、乃至小許の念なし。何に況んや念法を

や。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は、云何に應に念僧を修ずべきや。須菩提よ、菩薩摩訶薩の僧を念ずるに無爲法なるが故に、分別して佛弟子衆あり。是の中、乃至少許の念なし、何に況んや念僧をや。是の如く、菩薩摩訶薩に、應に念僧を修ずべし。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は、云何に應に念戒を修すべきか。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、應に聖戒・無缺戒・無隙戒・無瑕戒・無濁戒・無著戒・自在戒・智者所讃の戒・具足戒・隨定戒を念ずべし。應に是の戒は無所有の性なりと念ずべし。乃至少許の念もなし、何に況はんや念戒をや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、應に念捨すべし。若しくは自ら捨を念じ、若しくは他の捨を念じ、念他捨、若くは財を捨て、若くは法を捨て、若くは煩惱を捨て、是の捨は不可得なりと觀ずるが故に、乃至少許の念もなし、何に況や捨を念ずるをや。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に念捨すべし。

須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は應に念天すべきか。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の念を作す、四天王諸天は、信・戒・施・聞・慧有る所のものなり。此の間に命終して、彼の天處に生ぜり。我も亦た是の信・戒・施・聞・慧有りと。乃至他化自天は信・戒・施・聞・慧有る所のものなり。此の間に命終して、彼の天處に生ず。我も亦た是の信・戒・施・聞・慧有りと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の天を念ずべし。無所有の性中に尙ほ少許の念もなし、何に況んや念天をや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の六念を行ず。是を次第行・次第學・次第道と名づく。」

爾の時に、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法無所有の性なれば、所謂る念色乃至識、眼乃至意、色乃至法は、是れ無所有の性なり。眼界乃至意識界も是れ無所有の性なり。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智も、是れ無所有の性なり。世尊よ、若し一切法無所有の性なれば、是れ則ち道なく、智なく、果なからんか」。佛、須菩提に告げたまはく「汝、是の色性は實有なりと見るや不や。乃至一切種智は實有りや不や」と須菩提言く「見ざるなり、世尊よ」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝、若し諸法實有なりと見ざれば、云何なれば是の問を作すや。」須菩提言さく、「世尊よ、我れ是の法に於て敢て疑ひ有らず、但だ當來世の諸比丘にして、聲聞辟支佛道菩薩道を求むる者の爲にす。是の人は當に是の如く言ふべし。「若し一切の法は無所有の性なれば、誰か垢、誰か淨、誰か縛、誰か解なる」と。是を知らず、解せざるが故に、而も戒を破し、正見を破し、威儀を破し、淨命を破す。是の人は是の事を破するが故に、正に三惡道に墮すべし。世尊よ、我れ當來世に是の如きの事あらんことを畏る。是を以ての故に佛に問ひたてまつれり。世尊よ、我れ是の法の中に於て、信じて疑はず悔いざるなり」と。

【論】釋して曰く、須菩提は佛語を伏受して、一切の諸法は空なりと雖も、而も能く四禪神通を起す。是の大菩薩の近く成佛する者は能く行ず、(然し)今未だ知らざる新發意の者は、云何にか行ぜん。是の故に疑つて佛に問へり。世尊よ、新發意の菩

薩摩訶薩は、云何にして諸法無所有性の中に於て、次第行、次第學、次第道し、是の次第行を用つて、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。次第行、次第學、次第道を以ての故に、當に知るべし、是の新發意の菩薩は、無量劫に發す意と雖も、未だ諸法實相を得ず、皆な新學と名く。

問うて曰く、若し是の如きの人は是れ新學ならば、但だ應に布施持戒等を行ずることを教ふべし。佛は何を以つてか教へて諸法の無所有、畢竟空性の中に於て行ぜしめたまへるや。

答へて曰く、今は始めて無所有・畢竟空の法に入ることを明すが故に、無所有を行ぜしむ。而して是の菩薩は、無所有・畢竟空なるを以つて、布施持戒等の行に和合せしむ。譬へば小兒の藥を服するに蜜を須ふれば乃ち下すが如し。是の故に新發意も亦た深空を觀ずると雖も咎なし。佛、須菩提に答へたまはく「菩薩は若くは初めに諸佛より聞き、若くは多く諸佛を供養する者より聞く」と。諸佛とは若くは過去、若くは現在なり。多く諸佛を供養するものとは、遍吉・觀世音・得大勢菩薩・文殊師利・彌勒菩薩等なり。四種の聲聞聖人の義は、先に說くが如し。辟支佛は說法を樂はざるが故に說かず。諸佛等の聖人は皆な無所有に因るが故に是の分別あり。聖人は禪定等の諸の功德有りと雖も皆な涅槃の爲の故にす。涅槃は卽ち是れ寂滅の相、無所有の法なり。是の故に諸の聖人は皆な涅槃に因つて是の差別有りと說く。一切有爲の作法は因緣和合に因つて生起す、故に實に定性乃至毫末許の如き所有あることなし。有爲に二種あり。一には色、二には無色なり。色法は分別を破壞し、乃至微塵も定實あることなく、無色法の中にも乃至一念の定實あることなし。破の義は上に說くが如し。是の菩薩は諸佛聖人より是の法を聞き、餘人は多く著心を以て說く。諸の聖人は無著心を以て說く、是の故に但だ聖人より聞くのみ。

爾の時、次第學の菩薩、是の法を聞いて、比智籌量を以て、決定して諸法の究竟必要なるを知り、皆な佛所得の實相の中に入る。所謂る寂滅無戲論の相なり。我れ若し作佛を得、若し作佛せざるも、一等にして異るなし。何となれば、諸法實相は不增不減にして、更に新法の得べきなきが故に、法も亦た失せざればなり。若しくは衆生を度すに、衆生は畢竟空にして本来不可得なり。我が所願の所作の功德、及び成佛の時の神通力は、皆な夢の如く幻の如し。故に一も定實の相なく、畢竟空なり。

得不得は同じと雖も、我れ何を以てか、發心し作佛せざらんと。

問うて曰く、若し諸法は畢竟空にして、無所有なりと知らば、云何にして復た言ふや、我れ何を以てか發心し作佛せずと。

答へて曰く、畢竟空無所有にして、障礙する所なくんば、何ぞ發心して作佛するを妨げん。

復次に、若し畢竟空を說いて、諸の戲論を滅せば、云何んぞ發心を障へんや。若し障は卽ち是れ有性ならば、云何んぞ無所有の性と言はんや。

問うて曰く、若し發心を障へずんば、亦た應に不發心をも障へざるべし。菩薩は何ぞ安住せずして、而も發心し、諸の勤苦を受くるや。

答へて曰く、有る人は言ふ、是の菩薩は、種種の因緣あつて應に發心すべし。或は多くの諸の親屬知識が皆な聞かず知らざるを以て、是の諸法實相を得ず。是の故に、今世後世に、諸の苦惱を受くるなり。我れに幸に力あり、能く是の人をして衆苦より離るるを得せしむ。譬へば人が好食良藥を得たるが如し。親里の知識、諸の病苦を受くれば、云何んぞ與へざらん。是の故に、菩薩は、諸法の性は無所有なりと知ると雖も、親里に因るが故に、而も發心して衆生を利益す。菩薩は復た是の念を作す、我れ諸法實相を聞くと雖も、心、未だ深く入らず、未だ禪定有らず、智慧未だ熟せず、諸の苦惱を受く。是の故に、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求め、諸の功德を集め、無有所の法を以て證を作す。自らの爲めにし又他人の爲めにす。是の菩薩は復た大乘の深義を聞き、衆生等、法等の中に住して、別異の心なく、佛を得べし。復た人及び怨に中ると雖も、都て異心なし。所以は何んとなれば、是の菩薩は畢竟空心を以て、煩惱微薄にして、怨親平等に、是の念を作す。怨親に定めなし。因緣を以ての故に、親は或は怨となり、怨は或は親と爲る。此の大因緣を以て、忍波羅蜜を具足するが故に作佛することを得。何に由つてか得るや。怨を忍ぶに由るが故なり。是を以て菩薩は怨を視ること親の如し。譬へば嶮道を過ぎんと欲すれば應當に導師を敬重し頂戴すべきが如し。又良醫は賤しと雖も、貴者の重んずる所なるが如し。是の如く思惟し籌量し分別す、人に中るも怨家は我れに用なしと雖も、而も是れ佛道の因緣なり。是の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是を一種の次第行、次

第學、次第道と名く。是の故に過去の菩薩の所行を以て證と爲す。

問うて曰く、次第行と、次第學と、次第道とに何の差別ありや。

答へて曰く、有人は言ふ、「差別なし。若くは行、若くは學、若くは道は、その義一にして語異なる」と。

有人は言ふ、「初めを行と名け、中を學と名け、後を道と名く。行を布施と名け、學を持戒と名け、道を智慧と名く」と。

復次に、行を持戒に名け、學を禪定に名け、道を智慧に名く。

復次に、行をば正語正業正命に名け、學をば正精進正念正定に名け、道をば正見正思惟に名く。此の八事を名けて、道と爲すと雖も、然も分別するに三分あり。正見は是れ道の體にして、是の道の發起す。正思惟正語正命は正見を助益す、故に名けて行と爲す。正精進正念正定は能く正見を成就して牢固ならしむ、是を學と名く。

復次に、有人は言ふ、「檀波羅蜜、毘梨耶波羅蜜を名けて行と爲す。初めて道に入るが故に、尸羅波羅蜜を名けて學となす。人心は常に五欲に隨て禁じ難く制し難く、須臾も停息するなし。漸く尸羅波羅蜜、禪波羅蜜を以ては是の心を制伏す。是の故に學と名く。羼提波羅蜜、般若波羅蜜を名けて道と爲す。何となれば、忍を善と爲し、般若を智慧と爲せばなり。善と智と具足するが故に道と名く。譬へば人に眼あり足あれば、意の所至に隨ふが如し。是の如き等を名けて、三事の差別と爲す。

問うて曰く、何を以てか次第と名くるや。

答へて曰く、須菩提の意を以てするに、若し一切の法は無所有なれば、初發心の菩薩は、是の空法の中に於て、云何にして能く漸く次第に學ぜんや。是を以ての故に、次第と說く。諸法は空にして解し難しと雖も、次第に行じ力を得るが故に、能く成就することを得。譬へば、緣梯は一の初桄より漸く上るに、上る處高し雖も、難しと雖も、亦た能く至ることを得るが如し。

次第行とは、四種に六波羅蜜を行ずるなり。經中に說くが如し。自から檀を行じ、人に敎へて檀を行ぜしむ。檀の功德を讃じ、檀を行ずるものを歡喜し讃ず。善く慳貪の根を拔き、深く檀波羅蜜を愛し、衆生に慈悲し、諸法實相に通達す。是の因緣を以ての故に、能く四種に檀波羅蜜を行ず。或は人あり、自ら布施を行じ、人に敎へて布施せしむる能はず。或は他の瞋を畏

れ、或は己の爲めに布施せしめ、之れを以て恩と爲すを畏る。是の如き等の因緣の故に人を敎ふる能はず。或は人あり、人に布施を敎へて、自ら施す能はず。或は人あり、種種に布施の德を讃歎し、人に勸めて施さしめ、而も自ら行ずる能はず。人有り自ら布施を行じ、亦た人を敎へて布施せしめ、布施の德を稱讃し、而も人の布施するを見て歡喜する能はず。所以は何んとなれば、或は破戒の惡人あり、施を行つて（施を）見ることを喜ばず。人有り、施主を見ることを喜んで而も讃歎せず、其の邪見を以て施果を識らざるが故なり。是の如く、各各に具足すること能はず、菩薩は大悲心もて、深く善法を愛するが故に、能く四事を行ずること、上に說くが如し。菩薩、若し但だ自ら布施し、他人に敎へざれば、但だ能く今世に少許の是の衆生を利益し、業因緣に隨つて貧窮の處に墮す。是の故に菩薩は衆生に敎へて言はく、「我れ財物を惜しまず、我れ多く汝に施すと雖も汝も亦た持して後世に至ることを得ず。汝今當に自ら作すべく、後當に自ら得べし。布施の實の功德、種種の因緣を以て、衆生をして、施を行ぜしめ、施を行ずる者を見ては、是れ破戒の惡人なりと雖も、但だ其の好心布施の德を念じて、其の惡を念ぜず、是の故に歡喜讃歎するなり。

復次に、三寶無盡福田の中に施す、故に施福盡きず、必ず佛道に至るを見る。其の未來無盡の功德を觀るが故に、歡喜して是の四種の布施を行じ、世世に財富めるなり。是の菩薩は財富の爲に布施せず。未だ阿耨多羅三藐三菩提六波羅蜜等の法を具足せずと雖も、中間にして而も財富自ら至るなり。譬へば、人は穀の爲めの故に、禾を種ゆれば藁艸自ら至るが如し。菩薩は財物の報を得る時、慳貪の心を離れ、衆生の心に隨つて布施し、食を須ふるには、食等を與ふ。

問うて曰く、是の菩薩は布施する時、先づ何等の人に施すや。

答へて曰く、是の菩薩は衆生に因つて大悲心を起すと雖も、而も菩薩の布施は必ず先づ諸佛・大菩薩・辟支佛・阿羅漢及び諸聖人を供養す。若し聖人なければ、次第に持戒・精進・禪定・智慧・離欲の人に施す。若し是の人無ければ、一切の出家弟子に施す。若し是の人なければ、次に五戒を持ち十善道を行ひ、及び一日戒三歸を持つものに施す。若し是の人なければ、次に中人の正に非ず邪に非ざる者に施す。若し此の人無ければ、次に五逆惡人に施し、及び諸の畜生にも與へざるべからず。菩薩は施

を以て一切衆生を攝するが故なり。有人は言ふ「應に先づ五逆の罪人、斷善根の者、貧窮の老病、下賤乞丐の者、乃至畜生に布施すべし。譬へば、慈母の多く衆子あらんに、先づ羸病を念じて、其の所須を給するが如し。又菩薩は餓虎が子を食はんと欲するが爲の故に、身を以て之れに施すが如しと。

問うて曰く、是の如く種種ならば、應に先づ何者に施すべきや。

答へて曰く、一切衆生は、皆な是れ菩薩の福田なり。（そは）能く大悲を生ずるが故なり。菩薩は常に阿耨多羅三藐三菩提を以て衆生に施さんと欲す。何に況んや衣食等にして、而も分別あらんや。又菩薩は無生忍法を得、平等にして差無し。未だ無生忍を得ざる者は、或は慈悲心多く、或は分別心多し。此の二心は倶に行ずることを得ず。悲心多ければ、先づ貧窮の惡人に施して此の念を作す「福田の中に種ゆれば、果報大なりと雖も、衆生を憐愍するが故に、先づ貧者を利す。是の如きの田は不良なりと雖も、慈悲心を以て大果報を得るなり。分別心多ければ是の念を作す「諸佛は無量の功徳有るが故に應に先づ供養すべし」と。諸法を分別し、佛身を取著するを以ての故に心小なり。其の心小なりと雖も、福田良きが故に功徳も亦た大なり。若し諸法實相を得れば、般若波羅蜜方便力の中に入りて、心は自在を得、二事倶に行じて、衆生を慈愍し、又覩ること皆な佛の如し。是の如き等菩薩は、因緣に隨つて布施を行ず。

問うて曰く、經に何を以てか、衣食等を與ふと言はずして、食を須むるには、食を與ふと言ふや。

答へて曰く、人有り、食を須むるには飮を與へ、飮を須むるに衣を與へなば、受者の心に稱はざるを以ての故に、福德少し。此の故に食を須むるには食を與ふと言ふ。

問うて曰く、有人は若くは羞ぢ、若くは怖れ、所須ありと雖も、言を發する能はず、云何にして其の所須を知らん。

答へて曰く、菩薩は其の相貌を觀て、時と所須と土地との所宜に隨ふ。或は他心を知る者ありて資生の具、意に隨つて與へんに、是の人は是の布施に因つて、戒衆を成ずることを得。復是の念を作す「我れ衆生を憐愍し、衣食を以て布施するも、所益甚だ少なく、持戒に如かず」と。常に無惱無畏を以て衆生に施す。菩薩は此の持戒の中に住して、戒を守護せんが爲の故に、

禪定の心を生じ、散ぜずして清淨なるが故に慧衆を成ずるを得。戲論なく諸著を捨るは是れ慧相なり。是の慧を以て諸の煩惱の縛を破り、解脫衆を得、了了に知見し、解脫を證するが故に、解脫知見衆と名く。是の人は先づ布施及び五衆の因緣を成ずるが故に、聲聞辟支佛地を過ぎて、菩薩の位に入るなり。

問うて曰く、菩薩は應に六波羅蜜を行じて菩薩の位に入るべし。此の中に云何なれば、五衆を說くや。

答へて曰く、法は一なりと雖も、種種の異名を以て說く。是の故に五衆を說くも咎なし。是の人は、一の波羅蜜の中より、諸の波羅蜜を起さんと欲し、布施を主となす。已に先に持戒衆を說いて、尸羅波羅蜜と名け、定衆解脫衆を禪波羅蜜と名け、慧衆解脫知見衆、是れ般若波羅蜜なり。諸の波羅蜜を行ずる時、能く諸の惡事を忍ぶ。是を羼提波羅蜜と名く。能く諸の波羅蜜を起して、休まず、息まず、是を毘梨耶波羅蜜と名く。

問うて曰く、若し爾れば何を以てか、但だ諸波羅蜜の名と說かずして、而も五衆と說くや。

答へて曰く、是の人は菩薩の位に入らんと欲す、此の中に但だ持戒禪定を以ては、和合衆戒・清淨戒・無盡戒を得ざるなり。要を以て之を言へば、一切の戒を攝するをば名けて戒衆と爲す。能く煩惱を破り、二乘を過ぎて、菩薩の位に入る。譬へば、一人二人を名けて軍と爲さず、多人を和合せば、乃ち成じて軍と爲り、能く怨敵を破るが如く、餘衆も亦た是の如し。菩薩は自ら禪定等の衆を得、亦た衆生をして得せしむ。是を菩薩の衆生を敎化すと名く。衆生を敎化し已りて、自らの功德、及び衆生の功德を持して盡く淨佛國に廻向す。此の二法を具ふれば、卽ち一切種智を得て法輪を轉じ、三乘を以て衆生を度す。是を菩薩の次第行、次第學、次第道と名く。麁を先にして細を後にし、易を先にして難を後にし、漸漸に習學するを名けて次第と爲す。餘の五波羅蜜は亦た應に義に隨つて分別すべし。諸の法性は無所有なりと雖も、而も世諦に隨つて行ず、顚倒を破せんが爲の故なり。

復次に、念佛等の六念は、是れ初めの次第行なり。行じ易く、得易きを以ての故なり。

問うて曰く、六念の中に亦た言ふ、「色を以て佛を念せず」と。云何なれば易と言ふや。

答へて曰く、有る法は共行なるが故に、名けて易と爲す。譬へば苦藥を服するに、蜜を以て之を下せば、則ち易きが如し。六念の義は、初品の中に廣く說くが如し。六波羅蜜・六念等は、柔軟易行にして邪見を生ぜず、是の菩薩は次第に法を學ぶ、餘の三解脫門等は、思惟し籌量して、或は邪見を生ずるが故に、此の中に說かざるなり。

須菩提は、「世尊よ、若し實に無所有ならば、云何んぞ次第行等あらんや」と難ず。佛、須菩提に反問したまはく、「汝は聲聞の智慧を以て、色等の法を見る、是れ一定の實法なりや不や」と。答へて曰く、色等の一切の法を見ず、但だ因緣の和合に從つて、假りに其の名あるのみにして、定實あることなし、云何んぞ有と言はんや。佛、須菩提に語りたまはく、「汝若し實定の有なりと見ずんば、云何んぞ次第等を以て空と難じ、而も次第の法は空を離れざる」と。爾の時に、須菩提は受解すること了了たり。是の故に「我れに疑ふ所なし。（たゞ）爲に當來世に三乘を求むる人の爲に（問ふなり。その人は）、佛、空無所有の性を說きたまふを聞くも、罪重く智鈍なるを以ての故に、空相を取りて便ち言はん。誰か垢、誰か淨なる。凡夫惡人は何を以てか垢と名け、出家得道の人は何を以てか淨と名くるや。是の人は佛語の深義にして、何の事を以て說くかを解せず。是の空に著するが故に、何ぞ持戒等を用ゐんやと言はん。是の因緣を以て、卽ち邪見を生じ、正見を破す。正見を破るが故に、少因緣を以て、而も戒及び威儀を破して、畏忌する所なし。出家の人は資を白衣に仰ぎ、便ち妄語して衣食等を求利し、正命等を破る。此の罪を種ゆるが故に、三惡道に墮し、或は白衣を重んず、是の失あるが故に佛に問へるなり。我は已に道を得て、諸法に於て受くる所なく、又常に佛の空法を說きたまふを聞く。云何んぞ戲論して疑を生ぜんや。又我は常に無諍三昧を修し、衆生を憐愍す、是の故に佛に問ひたてまつれるなり。

第七十六一心具萬行品[一]

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法の性は無所有なれば、菩薩は何等の利益を見るが故に、衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を求むるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切法の性

【一】宮本は「一念品」。石本は「一心萬行品」と作る。三本は「一念具萬行品」と作る。明本には「經には一念品に作る」と夾註あり。

は無所有なるを以ての故に、菩薩は衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求むるなり。何となれば、須菩提よ、諸の得あり著ある者は、解脫すべきこと難ければなり。須菩提よ、諸の相を得る者は、道あることなく果あることなく、阿耨多羅三藐三菩提あることなし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、相を得ること無き者は、道あり果あり、阿耨多羅三藐三菩提有りや不や」と。「須菩提よ、無所得は即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。(そは)法の性壞せざるが故なり。若し無所得の法に道を得んと欲し、果を得んと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば(これ)法性を壞せんと欲すと爲す。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、無所得法は即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なれば、云何にして菩薩の初地乃至十地あり、云何にして無生忍法あり、云何にして報得の神通あり、云何にして報得の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧あり、是の果報の法中に住して、能く衆生を成就し、能く佛國土を淨め、及び諸佛に衣服・飲食・香華・瓔珞・房舍・臥具・燈燭・種種資生の須ゆる所の具を供養し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て、是の福德を斷ぜず、乃至般涅槃の後には。舍利及び弟子は供養を得て、爾乃ち滅盡するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法は無所得の相なるを以ての故に、菩薩の初地乃至十地を得、報得の五神通、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧あり、衆生を成就し、佛國土を淨む。亦た善根の因緣を以ての故に、能く衆生を利益し、乃至般涅槃の後には、舍利及び弟子は供養を得」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は無所得の相ならば、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、諸の神通に何の差別有りや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「無所得法の布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・神通に差別有ることなし。衆生が布施乃至神通に著するが故に、分別して說くのみ」と。「世尊よ、云何なれば無所得法の布施乃至神通に差別なきや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時布施を得ず、施者受者皆な不可得にして而も布施を行ず、戒を得ずして戒を持し、忍を得ずして忍を行じ、精進を得ずして精進を行じ、禪を得ずして禪を行じ、智慧を得ずして智慧を行じ、神通を得ずして神通を行じ、四念處を得ずして四念處を行じ、乃至八聖道分を得ずして八聖道分を行じ、空三昧無相無作三昧を得ずして空無相無作三昧を行じ、衆生を得ずして而も衆生を成就し、佛國土を淨むることを得ずして佛國土を淨め、諸佛の法を得ずして而も阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、應に是の如く、無所得の般若波羅蜜を行ずべし。菩薩摩訶薩の是の無所得の般若波羅蜜を行ずる時、魔若くは魔天も破壞する能はず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、一念の中に具足して六波羅蜜・四禪・四無量心・四無色定・四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・三解脫門・佛の十力・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・三十二相・八十隨形好を具足し行ずるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の有する所の布施は、般若波羅蜜を遠離せず、修する所の持戒・忍辱・精進・禪定は、般若波羅蜜を遠離せず、四禪・四無量心・四無色定・修四念處・乃至八十隨形好は、般若波羅蜜を遠離せず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば菩薩は摩訶薩は般若波羅蜜を遠離せざるが故に、一念の中に具足して六波羅蜜乃至八十隨形好

を具足し行ずるや」と。佛の言はく、「菩薩の般若波羅蜜を行ずる時、有する所の布施は般若波羅蜜を遠離せず、不二の相なればなり。持戒の時も亦た不二の相なり。忍辱を修し、精進を勸め、禪定に入るも亦た不二の相なり。乃至八十隨形好も亦た不二の相なればなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば菩薩摩訶薩は布施する時不二の相なるや、乃至八十隨形好を修するに不二の相なるや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、檀波羅蜜を具足せんと欲して、檀波羅蜜の中に、諸波羅蜜及び四念處乃至八十隨形好を攝す」と。「世尊よ、云何にして菩薩は布施する時、諸の無漏法を攝するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、無漏心に住して布施すれば、無漏心の中に於て相を見ず、所謂る誰か施し誰か受け、施す所何物なるやと(見ず)。是の無相心・無漏心・斷愛・斷慳・貪心を以て布施を行じ、是の時に布施を見ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提の法を見ず。是の菩薩は無相心無漏心を以て持戒して、是の戒を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、忍辱して是の忍を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、精進して是の精進を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、禪定に入り、是の禪定を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て、智慧を修して是の智慧を見ず、乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て四念處を修して、是の四念處を乃至八十隨形好を見ず」と。

「世尊よ、若し諸法無相無作ならば、云何にして檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・般若波羅蜜を具足するや。云何にして四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を具足するや。云何にして空三昧・無相無作三昧、佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を具足するや。云何にして三十二相、八十隨形好を具足するや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるや。・無相心無漏心を以て布施し、食を須むるに食を與へ、乃至種種の所須盡く之を給與す。若くは內、若くは外、若くは其の身を支解し、若くは國城妻子を衆生に布施す。若し人あり、來つて菩薩に語りて言く、何ぞ此の布施を用て、是の益する所なき般若波羅蜜を行ずることを爲すやと。菩薩是の念を作す、是の人は我が布施を來り訶すと雖も、我れ終に悔いず、我れ當に勸めて布施を行じて與へざるべからず。施し已りて、一切衆生と之れを共にし、阿耨多羅三藐三菩提に迴向するも、亦た是の相を見ず。誰か施し、誰か受け、施す所は何物なる、迴向者は誰なる、何等か是れ迴向法なる、何等か迴向の處、所謂る阿耨多羅三藐三菩提なる。此の相は皆な見るべからず。何となれば、一切法は皆な內空を以ての故に空なり、外空の故に空なり、內外空の故に空なり、空空・有爲空・無爲空・畢竟空・無始空・散空・性空・一切法空・自性空の故に空なりと。是の如く觀じて、此の念を作す、迴向者は誰なる、何處に迴向し、何の法を用てか迴向すると。是れを正迴向と名く。爾の時に、菩薩は能く衆生を成就し、佛國土を淨め、能く檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜、乃至三十七助道法・空無相無作三昧、乃至十八不共法を具足す。是の菩薩は、能く是の如く、檀波羅蜜を具足して、而も世間の果報を受けざること、譬へば、他化自在諸天の意の所須に隨つて、即ち皆

な之を得るが如し。菩薩も亦た是の如く、心に所願を生じ、意に隨つて卽ち得。是の菩薩摩訶薩は、是の布施果報を以ての故に、能く諸佛を供養し、亦た能く一切衆生、天及び人阿修羅を滿足す。是の菩薩に檀波羅蜜を以て衆生を攝取し、方便力を用ゐ、三乘の法を以て衆生を度脫す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相無得無作の諸法の中に於て檀波羅蜜を具足す。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は云何にして無相無得無作法の中に於て、尸羅波羅蜜を具足するや。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜を行ずる時、種種の戒、所謂る聖無漏入八聖道分戒・自然戒・報得戒・心生戒を持す。是の如き等の不缺・不破・不雜・不濁・不著・自在戒・智所讃戒、此の戒を用つて所取なく、若くは色、若くは受想行識、若くは三十二相、八十隨形好、若くは刹利の大姓、若くは婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵天・光音天・遍淨天・廣果天・無想天・無煩天・無熱天・妙見天・喜足天・阿迦膩吒天・空處天・識處天・無所有處天・非有想非無想天、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若くは阿那含果、若くは阿羅漢果若くは辟支佛道、若くは轉輪聖王、若くは天王(を取らず)但だ一切衆生の爲に之れを共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、無相・無得・無二を以て廻向す。世俗法の爲の故にして第一實義にはあらず。是の菩薩は尸羅波羅蜜を具足し、方便力を以て四禪を起し、味著せざるが故に五神通を得、四禪に因つて天眼を得。是の菩薩は二種の天眼(所謂)修得と報得とに住す。天眼を得已りて、東方現在の諸佛を見、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、所見の如く事失せず、南西北方四維上下の現在の諸佛(を見)、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで所見の如く失せず。是の菩薩は天耳淨を用て人耳に過ぎて、十方諸佛の說法を聞き、所聞の如く失せず、能く自ら饒益し、亦た他人をも益す。此の菩薩は知他心智を以て、十方諸佛の心を知り、及び一切衆生の心を知り、亦た能く一切衆生を饒益す。是の菩薩は宿命智を用て、過去の諸業因緣を知り、是の業因緣を失せざるが故に、是の衆生の在在處處に生ずる所は悉く知る。是の菩薩は是の漏盡智を用て、衆生をして須陀洹果、乃至阿羅漢界、辟支佛道を得せしめ、在在處處に能く衆生をして善法の中に入らしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は諸法の無相無得無作の中に於いて、尸羅波羅蜜を具足す」と。

「世尊よ、云何にして諸法は無相無作無得なるに、菩薩摩訶薩は能く羼提波羅蜜を具足するや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より以來、乃ち道場に坐するに至るまで、其の中間に於いて、若し一切衆生來り、瓦石刀杖を以て是の菩薩に加へんに、菩薩は此の時瞋心を起さず、乃至一念をも生ぜず。爾の時に菩薩は二種の忍を修すべし。一には一切衆生の惡口罵詈、若くは刀杖瓦石を以て之を加へんに瞋心起らず、二には一切法は無生・無生法忍なり。菩薩は若し人來りて、惡口罵詈し、或は瓦石刀杖を以て之に加へんに、爾の時菩薩は是の如く思惟すべし、我を罵る者は誰ぞ、譏り訶する者は誰ぞ、誰か打擲する者なる、誰か受者あると。是の時に菩薩は應に諸法の實性を思惟すべし。所謂る畢竟空にして法なく、衆生なく、諸法尙ほ得べからず、何に況んや衆生あらんやと。是の如く諸法の相を觀ずる時、罵者を見ず、割截者を見ず、是の菩薩は、是の如く、諸法の相を觀ずる時、卽ち無生法忍を得。云何なれば無生法忍と名くるや。諸法の相常

に不生なれば、諸の煩惱も本より已來、亦た常に不生なることを知ればなり。是の菩薩摩訶薩は、是の二忍に住して、能く四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、三解脫門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を具足す。是の菩薩は是の聖無漏出世間の法に住し、一切の聲聞辟支佛と共ならずして、聖神通を具足す。聖神通に住し已りて、天眼を以て東方の諸佛を見、是の人は念佛三昧を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に斷絕せず。南西北方四維上下も亦た是の如し。是の菩薩は、天耳を用て、十方諸佛の所說の法を聞き、所聞の如く衆生の爲に說く。是の菩薩は亦た十方諸佛の心を知り、及び一切衆生の念を知り、知り已りて、其の心に隨つて而して爲に說法す。是の菩薩は宿命智を以て一切衆生の宿世の善根を知り、衆生の爲に說法し、其をして歡喜せしむ。是の菩薩は漏盡神通を以て衆生を敎化して三乘を得せしむ。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以て衆生を成就し、一切種智を具足し、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉ず。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相無得無作の法中に羼提波羅蜜を具足す」と。

須菩提言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は云何にして諸法の無相無作無得なるに、能く毘梨耶波羅蜜を具足するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、身精進、心精進を成就して初禪に入り、乃至第四禪に入りて、種種の神通力を受け、能く一身を分ちて多身となし、乃至平手に日月を捫摸す。身精進を成就するが故に、飛んで東方に到り、無量百千萬の諸佛の世界を過ぎて、諸佛に飮食衣服、醫藥臥具、香華瓔珞、種種の所須を供養し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、福德果報終に盡くべからず。是の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時に、一切世間の天及び人は勤め設けて衣服飮食を供養し、乃至無餘涅槃に入りし後、舍利及び弟子は供養を得。亦た是の神通力を以ての故に、諸佛の所に至りて、法敎を聽受し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に違失せず。是の菩薩は、一切種智を修する時、佛世界を淨め、衆生を成就す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて身精進を成就し、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。

須菩提よ、云何にして菩薩は心精進を成就して、能く毘梨耶波羅蜜を具足する。須菩提よ、菩薩摩訶薩の心精進とは、是の心精進、聖無漏入八聖道分を以て、精進して身口の不善業をして入ることを得せしめず。亦た諸法の相を取らず、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは有爲、若くは無爲、若くは欲界、若くは色界、若くは無色界、若くは有漏性、若くは無漏性、若くは初禪、乃至第四禪、若くは慈悲喜捨、若くは無邊虛空處乃至非有想非無想處、若くは四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、若くは空無相無作、若くは佛の十力、乃至十八不共法なりと相を取らず。若くは常、若くは無常、若くに苦、若くは樂、若くは我、若くは無我、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若くは阿那含果、若くは阿羅漢果、若くは辟支佛道、若くに菩薩道、若くは阿耨多羅三藐三菩提、若くは是れ須陀洹、阿那含、阿羅漢、若くは是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりと相を取らず。是の衆生は三結を斷ずるが故に須陀洹を得、是の衆生は三毒薄きが故に斯陀含を得、是の衆生は下分結を斷ずるが故に阿那含を得、是の衆生は上分結を斷ずるが故に阿羅漢を得、是の衆生は辟支佛道を以ての故に辟支佛と作り、是の衆生は道種智を行ずるが故に菩薩と名くるも、亦

た是の諸法の相を取らず。何となれば性を以て相を取るべからず、是れ性無なるが故なり。是の菩薩は是の心精進を以ての故に、廣く衆生を利益するも、亦た是の衆生を得ず。是を菩薩の毘梨耶波羅蜜を具足し、諸佛の法を具足し、佛國土を淨め、衆生を成就すと爲す。(そは)不可得なるが故なり。　是の菩薩は身精進心精進を成就するが故に、一切諸の善法を攝取す。是の法も亦た著せざるが故に、一佛國より一佛國に至りて、衆生を利益せんが爲に、爲す所の神通、意に隨つて無礙なり。若くは諸華を雨らし、若くは諸名香を散じ、若くは妓樂をなし、若くは大地を動し、若くは光明を放ち、若くは七寶莊嚴の國土を示し、若くは種種の身を現じ、若くは大智慧光明を放ちて聖道を知らしめ、殺生乃至邪見を遠離せしめ、或は布施を以て衆生を利益し、或は持戒を以て、或は身體を支解し、或は妻子を以て、或は國土を以て、或は已身を以て給施し、所に隨つて方便して衆生を利益す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、無相無作無得の諸法の中に、身心精進を用て、能く毘梨耶波羅蜜を具足す」と。

「世尊よ、云何にして菩薩は般若波羅蜜を行じ、無相無作無得の法中に住して、能く禪波羅蜜を具足するや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は佛の諸禪定を除き、餘の一切の諸禪三昧は皆な能く具足す。是の菩薩は諸欲諸惡不善法を離れ、離生喜樂有覺有觀にして初禪に入り、乃至第四禪に入る。是の慈悲喜捨の心を以て一方に遍滿し、乃至十方一切世間に遍滿す。是の菩薩は一切の色相を過ぎ、有對相を滅し、別異相を念ぜざるが故に、無邊虛空處に入り、乃至非有想非無想處に入る。是の菩薩は禪波羅蜜の中に於て住し、逆順に八背捨九次第定に入り、空三昧無相(三昧)無作三昧に入る。(或る時は無相三昧に入り、)或時は如電光三昧に入り、或る詩は聖正三昧に入り、或時は如金剛三昧に入る。是の菩薩は禪波羅蜜の中に住し、三十七助道法を修し、道種智を用て一切禪定に住し、乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辨地、辟支佛地を過ぎて、菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて、佛地を具足す。是の諸地の中に乃至阿耨多羅三藐三菩提を行じて中道に道果を取らず。是の菩薩は是の禪波羅蜜の中に住して、一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し、諸佛の植ゆる所の諸善根に從つて佛國土を淨め、一佛國より一佛國に至りて衆生を利益す。或は布施を以て衆生を攝取し、或は持戒を以てし、或は三昧を以てし、或は智慧を以てし、或は解脫を以てし、或は解脫知見を以て、衆生を攝取し、衆生を敎へて、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、諸有る善法の能く衆生の得道せしむるものをして、皆な敎へて得せしむ。是の菩薩は此の禪波羅蜜の中に住して、能く一切の陀羅尼門を生じ、四無礙智を得、報得の諸の神通を得。是の菩薩は終に母人の胞胎に入らず、終に五欲を受けず、生不生なく、生ずと雖も生法の汚す所とならず。何となれば、此の菩薩は一切の作法を見ること幻の如くにして、而も衆生を利益し、亦た衆生及び一切の法を得ずして、衆生を敎へて無所得の處を得せしむればなり。是れ世俗法の故にして第一實義に非らず。是の禪波羅蜜に住して、一切の禪定、解脫三昧を行じて、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に禪波羅蜜を離れず。是の菩薩は是の如く道種智を行ずる時、一切種智を得て一切の煩惱習を斷じ、斷じ已りて自ら其の身を益し、亦た他人をも益す。自ら益し他を益し已りて、一切世間の天及び人、

阿修羅の爲に福田を作す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、能く無相禪波羅蜜を具足す」と。

「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、無相無作無得の法中に住し、般若波羅蜜を修し具足するや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法に於て定實の法を見ず。是の菩薩は色は不定にして實相に非ずと見、乃至識は不定にして實相に非ずと見る。色生を見ず、乃至識生を見ず。若し色生を見ず乃至識生を見ざれば、一切法、若くは有漏、若くは無漏の來處を見ず、去處を見ず、亦た集處をも見ず。是の如く觀ずる時、色性乃至識生を得ず、亦た有漏無漏法性をも見ず。此の菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切諸法の無所有の相を信解す、是の如く信解し已りて、内空乃至無法有法空を行じ、諸法に於いて所著なし。若くは色、若くは受想行識、乃至阿耨多羅三藐三菩提なりと。是の菩薩は無所有の般若波羅蜜を行じて、能く菩薩道、所謂る六波羅蜜乃至三十七助道法、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、三十二相、八十隨形好を具足す。是の菩薩は空に住し佛道を淨むる中、所謂る六波羅蜜、三十七助道法、報得の神通、是の法を以て衆生を饒益し、宜しく布施を以て攝し、敎へて布施せしめ、宜しく戒を以て攝し、敎へて持戒せしめ、宜しく禪定、智慧、解脱、解脱知見を以て攝し、敎へて禪定、智慧、解脱、解脱知見を修せしめ、宜しく諸の道法を以て敎ふべきものは、敎へて須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、宜しく佛道を以て化すべき者は、敎へて菩薩道を得、佛道を具足せしむ。是の如き等、其の所應の道地に隨つて、而して之を敎化し、各をして(その)所を得せしむ。是の菩薩は種種の神通力を現ずる時、無量如恒河沙の國土を過ぎて、衆生を度脱し、其の所須に隨つて皆な之を供給し、各をして滿足せしめ、一國土より一國土に至りて、淨妙國土を見、以て自ら己の佛國土を莊嚴す。譬へば、他化自在天の中には、資生の所須、意に隨つて自ら至るが如く、亦た諸の淨佛國よ求欲より離るるが如し。是の人は是の報得の檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、報德の五神通を以て菩薩道を行じ、種智一切の功德を功德を成就して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の菩薩は爾の時、色法乃至識を受けず、一切の法、若くは善、若くは不善、若くは世間、若くは出世間、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲を受けず、是の如く一切の法皆な受けず。是の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、國土一切の所有る資生の物、皆な主有ることなし。何となれば、是の菩薩は一切の法を行じて受けず、不可得を以ての故なり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相の法中に能く般若波羅蜜を具足す」と。

【論】問うて曰く、問者も答者も倶に無所有と言ふ、云何にして分別して是は問、是の答を知るや。

答へて曰く、言ふ所の法は一なりと雖も、而も心は異なれり。問者は著心を以て問ひ、答者は無著心を以て答ふ。須菩提は意に謂へらく、「無所有の中には應に發心すべからず」と。須菩提は聽者の著心の爲の故に此の問を作せり。諸法空の中には菩

薩の發心する者を見ず、衆生の利益すべきものを見ず、阿耨多羅三藐三菩提心を見ざるなり。是の故に無所有の法中に於いて難を作すは、若し一切法は無所有性ならば、菩薩は何の利を見るが故に發心するやとなり。須菩提は菩薩と衆生と阿耨多羅三藐三菩提との中に於て疑はず、但だ無所有の法を問へり。佛は答ふるに、「正しく無所有空なるを以ての故に能く發心するなり。若し無所有にして空なれば、菩薩も衆生も阿耨多羅三藐三菩提も亦た皆な空にして所有なし、云何んぞ難を起さんや。若し衆生と菩薩と及び阿耨多羅三藐三菩提にして無所有空を離れなば、是の難あるべし。先に說くが如し。畢竟空なれば諸法に於いて障礙する所なし、何ぞ發心を妨げんや。佛は還つて無所有空を以て、須菩提の所聞を破し、亦た復自ら因緣を說きたまへり。「須菩提よ、心に著する者は解脫を得ること難し、是の人は無始生死の中より來りて、一切煩惱を以ての故に、深く諸法に著す。有を聞くも亦た著し、空を聞くも亦た著し、得失にも亦た著す。是の如きの衆生は免出すべきこと難し。是の故に、菩薩は無上道心を發し、自ら相好を以て身を嚴り、梵音聲を得て大威德有り。衆生の三世心の根本を知り、種種の神通力因緣譬喩を以て、爲に無所有の法、空、解脫門を說き、其の心を引導す。衆生は是の如き希有の事を見て、即時に其の心柔軟にして佛を信じ、法を受く。是の故に、經に說かく「有に著する者は、解脫を得難し、有所得の者は道無く、果無く、阿耨多羅三藐三菩提なし」と。須菩提、世尊に問ふ、「若し有所得の者は道なく、果なく、阿耨多羅三藐三菩提なくんば、無所得の者は道あり、果ありや不や」と。佛答へたまはく、「無所有は即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。若し人、是れ有所得、是れ無所得なりと分別せず、諸法實相、畢竟空の中に入るも、是れも亦た無所得ならば、即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。諸法實相を破壞せざるが故なり、法性は即ち是れ諸法實相なり」と。須菩提意に謂へらく、「法性は正行、邪行も常に破壞すべからず、何を以てか佛は法性を壞せざるは、是れ道、是れ果なりと言へるや」と。佛答へたまはく、「法性は破壞すべからず雖も、衆生の邪行の故に名けて破壞と爲す。虛空を雲霧士塵は染むること能はずと雖も、亦た不淨と名くるが如し。人の實に虛空を染汚せんと欲するが如し。是の人は法性を染汚せんと欲せんと爲すも、是の事なし。故に佛は譬喩を說きたまへり。若し人法性を壞せんと欲せば、是の人は無所有の法中に於て、道を得、果を得、阿耨多羅三藐

三菩提を得んと欲すと爲す。須菩提、佛に白して言さく、「若し無所有卽ち是れ道ならば、云何んぞ十地等の諸の菩薩法ありや」と。經に廣く說くが如し。

問うて曰く、此の事は佛已に先に答へたまへり。所謂若し法空なれば、菩薩何事を見る故に發心するや。今若し法空なりと言はば、云何んぞ初地等あらん。佛は皆な空を以て答へたまひしに、今、須菩提は何を以てか更に問へるや。

答へて曰く、衆生は心に著し、解し難きを以ての故に、更に問ふなり。是の衆中に新發意の菩薩有り。是の諸法實相の空なるを聞き、卽ち著心を生ず。佛は其の著も破したまふに亦た破す所の法に著す。須菩提は此の人の爲の故に更に問へり。佛、須菩提に答へたまはく、「無所得を以ての故に初地、乃至般涅槃の後、舍利は供養を得るあり。所著ある中には、初地及び諸功德を說くべからず。亦た無所得の因緣を以ての故に、布施より乃ち諸の神通に至るまで、差別あることなし。差別あることなきが故に、應に難ずべからず」と。須菩提復た問ふ、「云何なれば無所得の布施、乃至諸の神通には、差別あることなきや」と。佛答へたまはく、「菩薩は初發心より已來、阿耨多羅三藐三菩提寂滅の相に似たり。布施は畢竟空なり。所謂る施者・受者・財物を得ずして而も布施を行ず。是の如く布施の中には分別あることなし。乃至菩提を得ず。而も阿耨多羅三藐三菩提を得ること亦た是の如し。是を菩薩は無所得の般若波羅蜜を行ずと名く。是の無所得の般若波羅蜜を行ずれば、魔若くは魔天も破壞することと能はざるなり」と。一念の中に六波羅蜜を行ずとは、

問うて曰く、須菩提は何を以ての故に、一念の中に、六波羅蜜等を行ずる諸の功德を問へるや。

答へて曰く、須菩提は佛より、般若波羅蜜の甚深なる無所有の相、諸法の中に於ける無礙の相を聞けり。若し爾れば、則ち所として能はざるなく、事として作さざるなし。云何にして菩薩は一念の中に能く六波羅蜜、乃至八十隨形好を攝せんや。初發心の時には、有無に著するの心重きを以ての故に、漸漸次第に行じて、今は有無悉く捨つるが故に、所として能はざるなし。是の故に問へり。佛答へたまはく、菩薩は般若波羅蜜を離れずして、布施等の諸の功德を行じ、障礙なきが故に、能く一念の中に行ず。若し般若波羅蜜を遠離せば、則ち漸漸次第に行ず。

須菩提問ふ、「云何なるを不遠離と名くるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は二相を以て布施等を行ぜず」と。復問ふ、「云何に二相を以てせざるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、檀波羅蜜を具足せんと欲し、布施の一念の中に於て一切の善法を攝す」と。先に說くが如し。何等か是れ一念なる。所謂菩薩は無生法忍を得て、一切の煩惱を斷じ、諸の憶想分別を除き、無漏心の中に安住して一切を布施す。無漏心は是れ無相の[二]心なり。菩薩は是の心中に住して、誰か施し、誰か受け、誰の物なるかを見ず。一切の相を離る心もて布施し、一法あることを見ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提すら尙ほ見ざるなり、如何に況んや餘法をや、是を不二の相と名く。乃至八十隨形好も亦た是の如し。須菩提は更に異事を以て是の義を問ふ、「世尊よ、諸法は無相・無作・無起ならば、云何にして能く檀波羅蜜等、乃至八十隨形好を具足するや」と。佛答へたまはく、「菩薩は無相・無作の法中に相を取らざるが故に、障礙の心を無くして布施し、食を須むるには食を與ふる等、經中に已に委悉せり。又先の品中にも、亦た廣く說けり。是の故に更に解せず。無漏無相の六波羅蜜に二種あり。一には、無生法忍を得たる菩薩の所行、二には未だ無生法忍を得ざる菩薩の所行なり。無生法忍を得たる菩薩の所行は、此の中に說く所の如し。何となれば、無相無漏の心中に住して、布施等の諸法を行ずるが故なり。

問うて曰く、生身の菩薩は、貪惜未だ除かざるが故に、割截すれば甚だ痛む、是れ則ち難しと爲す。無生法忍を得たる菩薩は、化人の所作の如く、割截するも痛なし、何の恩分かあらん。

答へて曰く、無生法忍を得たる菩薩は是の六波羅蜜を行ずるを難しと爲す。所以は何んとなれば、無生法忍の寂滅の心を得れば、應に涅槃の樂を受くべし。而るに此の寂滅の樂を捨てて、衆生の中に入り、種種の身を受け、或は賤人となり、或は畜生等と爲る。是れ卽ち難しと爲す。生身の菩薩は貪愛未だ除かず、佛身に著するが故に、身を以て布施す。是は悕望たり、淸淨の施にあらず。是の故に如かざるなり。

復次に、無漏無相の六波羅蜜を行ずるに、是の時能く有漏有相を具足すれば、則ち具足すること能はず、是の故に能く具足するものは大恩分あるなり。

【二】「心」別本には「相」に作る。

巻の第八十八

第七十七六喩品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして無想・不可分別・自相空なる諸法の中に六波羅蜜、所謂る檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を具足して修するや。世尊よ、云何なれば無異法の中に而も分別して異相を說くや。世尊よ、云何に般若波羅蜜は檀・尸・羼提・精進・禪を攝するや。世尊よ、云何にして異相の法を行じ、一相の道を以て得果するや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如くなるに住す。是の中に住して布施を行じ、戒を持し、忍辱を修し、精進を勸め、禪定に入り、智慧を修す。是の五陰は實に夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如し。五陰は夢の如く相無く、乃至化の如く無相なるを知る。何となれば夢は自性無く、響影焰幻化も皆な自性なし。若し法に自性なければ是の法は無相なり、若し無相なれば、是の法は一相、所謂る無相なればなり。是の因緣を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、菩薩の布施は無相なり。施者は無相なり、受者も無相なりと知る。能く是の如く布施を知るは、是れ能く檀波羅蜜を具足し、乃至能く般若波羅蜜を具足し、能く四念處乃至八聖道分を具足し、能く內空乃至無法有法空を具足し、能く空三昧無相無作三昧を具足し能く八背捨・九次第定・五神通・五百陀羅尼門を具足し、能く佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を具足するなり。是の菩薩は、是の報得の無漏法の中に住し、飛んで東方世量の國土に到り、諸佛に衣服飲食を供養し、乃至其の所須に隨つて而して之を供養し、亦た衆生を利益するに、應に布施を以て攝すべき者は、布施をもつて之を攝し、應に持戒を以て攝すべき者は、教へて持戒せしめ、應に忍辱・精進・禪定・智慧を以て攝すべき者は、教へて忍辱・精進・禪定・智慧ならしめて是を攝取し、乃至　種種の善法を以つて攝すべき者は、種種の善法を以て之を攝取す。是の菩薩は、是の一切の善法を成就して、世間身を受け、世間生死の汚す所とならず、衆生の爲めの故に、天上人中に於いて尊貴富樂を受け、是の尊貴富樂を以て衆生を攝す。是の菩薩は、一切法の無相なることを知るが故に、須陀洹果を知るも亦た中に住せず、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を知るも亦た中に住せず、辟支佛道を知るも亦た中に住せざるなり。何となれば、是の菩薩は一切種智を用て一切法を知り已りて、當に一切種智を得べく、聲聞辟支佛と共ならざればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は一切法の無相なることを知り已りて、六波羅蜜の無相なることを知り、乃至一切佛法の無相なることを知る。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住し。能く無相の尸羅波羅蜜を具足す。是の戒は、不缺・不破・不雜・不著にして、聖人の讃する所の無漏戒にして、八聖道分に入る。是の戒中に住して、一切

の戒、所謂る名字戒・自然戒・律儀戒・作戒・無作戒・威儀戒・非威儀戒を持す、是の菩薩摩訶薩には、諸戒を成就して、此の願を作さず、我れ是の戒の因縁を以つての故に、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、若くは小王家、若くに轉輪聖王家、若くは四天王天處に生じ、若くは三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天に生ぜんと。是の願をなさず、我れ持戒の因縁の故に、當に須陀洹果・斯陀含果・阿羅漢果・辟支佛道を得べしと。何となれば一切法の無相、所謂る一相、無相の法は、能く無相の法を得ること能はず、有相の法は有相の法を得ること能はず、無相の法は有相の法を得ること能はず、有相の法は無相の法を得ること能はざればなり。是の如く須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、能く無相尸羅波羅蜜を具足して菩薩の位に入り、菩薩の位に入り已りて、無生法忍を得、道種智を行じて報德の五神道を得、五百陀羅尼門に住して四無礙智を得。一佛國より一佛國に到りて諸佛を供養し、衆生を成就し、佛國土を淨む、五道の中に入ると雖も、生死の業報は染汚すること能はざるなり。須菩提よ、譬へば轉輪聖王の化するに、坐臥行住すと雖も、來處を見ず、去處を見ず、住處、坐處、臥處を見ずして、而して能く衆生を利益するも、亦た衆生を得ざるが如し。菩薩も亦た是の如し。須菩提よ、譬へば、須扇多佛の阿耨多羅三藐三菩提を得、三乘の爲めに法輪を轉じて、菩薩の記を得ること有ることなきものを化し、作物し已りて、身壽命を捨てゝ無餘涅槃に入るが如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦た是の如く、般若波羅蜜を行ずる時、能く尸羅波羅蜜を具足す。尸羅波羅蜜を具足し已りて、一切の善法を攝す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、無相羼提波羅蜜を具足す。「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は無相羼提波羅蜜を具足するや。」「須菩提よ、菩薩摩訶薩には二忍の中に住して、能く羼提波羅蜜を具足す。何等をか二忍となす。生忍と法忍となり。初發意より乃至道場に坐するまで、其の中間に於いて、若し一切の衆生來りて、罵詈麁惡語、或は瓦石刀杖を以て、是の菩薩に加へんに、是の菩薩は羼提波羅蜜を具足せんと欲するが故に、乃至一念の惡をも生ぜずして、是の菩薩は是の如く思惟す、我を罵る者に誰ぞ、我を害する者に誰ぞ、惡言を以て我に加へ、瓦石刀杖を以て我を害する者に誰ぞと。何となれば、是の菩薩は一切法に於て、無相忍を得たるが故に、云何んぞ是の念を作さん。是の人我を罵り、我を害すと。若し菩薩摩訶薩、是の如く行ずれば、能く羼提波羅蜜を具足し、是の羼提波羅蜜を具足するが故に無生法忍を得。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なるを無法法忍と爲す。是の忍は何をか斷ずる所とし、何をか知る所とするや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「法忍を得て、乃至少許の不善法をも生ぜず、是の故に無生法忍と名く。一切の菩薩の斷ずる所の煩惱の盡くる、是を斷と名け、智慧を用て一切法の不生なることを知る、是を知と名く」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の聲聞辟支佛の無生法忍と菩薩の無生法忍とは何等の異有るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸の須陀洹の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名け、斯陀含の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名け、阿那含の若くは智、若くは斷。是を菩薩の忍と名け、阿羅漢の若くは智、若くは

斷、是を菩薩の忍と名け、辟支佛の若くは智、若くは斷、是を菩薩の忍と名く。是れを異と爲す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の忍を成就して、一切の聲聞辟支佛に勝れ、是の如き報得の無生忍中に住して菩薩道を行じ、能く道種智を具足す。道種智を具足するが故に、常に三十七の助道法及び空無相無作三昧を離れず、五神通を離れず、五神通を離れざるが故に、能く衆生を成就し、佛國土を淨む。衆生を成就し、佛國土を淨め已りて、當に一切種智を得べし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、無相の羼提波羅蜜を具足す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相の五陰の夢の如く、響きの如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、身精進・心精進を行ず。身精進を以ての故に神通を起し、神通を起すが故に、十方國土に到りて、諸佛を供養し、衆生を饒益す。身精進力を以て衆生を教化して三乘に住せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、能く無相の精進波羅蜜を具足す、是の菩薩は心精進聖無漏精進を以て八聖道分中に入り、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。是の毘梨耶波羅蜜は皆な一切の善法、所謂る四念處、四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・四禪四無量心・四無色定、[一]八解脫、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を攝す。是の菩薩は是の法を行じて、當に一切種智を具足すべし。一切種智を具足し已りて、一切煩惱の習を斷じ、三十二相身を具足滿じ、無等無量の光明を放つ、光明を放ち已りて、三たび十二行法輪を轉ず、法輪を轉ずるが故に、三千大千世界は、六種に震動し、光明遍ねく三千大千世界を照らし三千大千世界中の衆生は、說法の聲を聞き、皆な三乘の法を以て、而して度脫することを得。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は精進波羅蜜の中に住して、能く大に饒益し、及び能く一切種智を具足す。

復次に、須菩提よ、菩薩は無相の五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、能く禪波羅蜜を具足す。」「世尊よ、云何に菩薩は五陰の夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くなるに住して、能く禪波羅蜜を具足するや。」「須菩提よ、菩薩摩訶薩は初禪に入り、乃至第四禪に入り、慈悲喜捨に入り、無量心に入り、無邊虛空處に入り、乃至非有想非無想處に入り、空三昧無相無作三昧に入り、如電光三昧に入り、如金剛三昧に入り、聖正三昧に入り、諸佛の三昧を除いて、諸餘の三昧、若くは聲聞辟支佛と共に三昧に入り、皆な證し(皆入るも)亦た三昧味を受けず、亦た三昧果を受けざるなり。何となれば、是の菩薩は、是の三昧の無相無所有性なることを知ればなり。當に云何に無相法に無相法味を受け、無所有法に無所有法味を受くべけん。若し味を受けざれば、即ち禪定力に隨つて、若くは色界、若くは無色界を生ぜず。何となれば、是の菩薩は是の二界を見ず亦た是の禪を見ず、亦た入禪の者をも見ず、亦た法を用て入禪するものをも見ず、(入禪の處をも見ざればなり)。若し是の法を得ざれば、即ち能く無相禪波羅蜜を具足す。菩薩は是の禪波羅蜜を用て、能く聲聞辟支佛地を過ぐ。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば菩薩は無相の禪波羅蜜を具足するが故に、能く聲聞辟支佛地を過ぐるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は善く內空を學し、善く外空を學し、

【一】八解脫、別本には「八背捨」と作る。

乃至善く無法有法空を學し、是の諸空に於て法の住すべき處なし。若くは須陀洹果、若くは斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果、乃至一切種智、是の諸法の空も亦た空なり。菩薩摩訶薩は、是の如く、諸空を行じて、能く菩薩位中に入る。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なるが菩薩摩訶薩の位なるか。云何なるが位にあらざるや」。「須菩提よ、一切の有所得は是れ菩薩の位に非ず、一切の無所得は、是れ菩薩の位なり。」「世尊よ、何等か是れ有所得なる。何等か是れ無所得なるや」。「須菩提よ、色は是れ有所得、受想行識は是れ有所得眼耳鼻舌身意、乃至一切種智は有所得なるは、是れ菩薩の位にあらず。須菩提よ、菩薩の位とは、是の諸法は示すべからず、説くべからざるなり。何等の法をか示すべからず、説くべからずとなす。若くは色乃至一切種智なり。何となれば、須菩提よ、色の性は是れ示すべからず、説くべからず、乃至一切種智の性は、是れ示すべからず、説くべからざればなり。須菩提よ、是の如きを菩薩の位と名く。是の菩薩は入位中に、一切の禪定三昧具足するも、尙ほ三禪定三昧力に隨つて生ぜず、云何に況んや、婬怒癡に住し、中に於いて罪業を起して生ぜんや。菩薩は但だ幻の如き、法中に住して衆生を饒益するも、亦た衆生を得す、亦た幻を得ず。若し得る所なければ、是の時に能く衆生を成就し、佛國土を淨む。是の如く、須菩提よ、是れを菩薩の無相禪波羅蜜を具足し、乃至能く法輪を轉ずと名く。所謂る不可得の法輪なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、一切法を夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如しと知る」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何にして一切法を夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如しと知るや」と。「須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時夢を見ず。夢を見る者を見ず、響を見ず、響を見る者を見ず、影を見ず、影を見る者を見ず、焰を見ず、焰を見る者を見ず、幻を見ず、幻を見る者を見ず、化を見ず、化を見る者を見ず。何となれば、是の夢響影焰幻化は、皆な是れ凡夫愚人の顚倒の法なるが故なり。阿羅漢は夢を見ず、夢を見る者を見ず、乃至化を見ず、化を見る者を見ず、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛も亦た夢を見ず、亦た夢を見る者を見ず、乃至化を見ず、亦た化を見る者を見ず。何となれば、一切の法は無所有の性にして不生不定なればなり。若し法、無所有の性にして不生不定ならば、菩薩摩訶薩は、當に云何にして般若波羅蜜を行じ、是の中に生相定相を取らん。是の處(ことわり)は然らず。何となれば若し諸法にして、少多(すこしく)も性有り、生有り、定あらば、般若波羅蜜を修すと名けざればなり。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、色に著せず、乃至識に著せず、欲色無色界に著せず、諸禪解脫三昧に著せず、四念處乃至八聖道分に著せず、空三昧・無相無作三昧に著せず、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜に著せず、著せざるが故に、能く菩薩の初地を具足し、初地の中に於ても亦た著を生ぜざるなり。何となれば、此の菩薩は是の地を得ず。云何んぞ貪著を生せん。乃至十地も亦た是の如し。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるも、亦た般若波羅蜜を得ず、若し般若波羅蜜を行ずる時、般若波羅蜜を得ざれば、是の時に一切法を見て、皆な般若波羅蜜の中に入るも、亦た是の法を得ず、何とな

れば、是の諸法と般若波羅蜜とは無二無別なればなり。何となれば、諸法は如・法性・實際に入るが故に、分別する事なければなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は相なく分別なければ、云何にして是れは善、是れは不善、是れは有漏、是れは無漏、是れは世間、是れは出世間、是れは有爲、是れは無爲なりと說かん」と。「須菩提よ、汝が心に於いて如何。諸法實相の中に法ありて是は善、是は不善、乃至是は有爲、是は無爲、是は須陀洹果、乃至是は阿羅漢、是は辟支佛、是は菩薩、是は阿耨多羅三藐三菩提なりと說くべきや不や」と。「世尊よ、說くべからざるなり」と。「須菩提よ、是の因緣を以ての故に、當に當るべし、一切法は、無相・無分別・無生・無定にして、示すべからざることを。須菩提よ、我れ本と菩薩道を行ぜし時も、亦た法の性の、若くは色、若くは受想行識、乃至若くは有爲、須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提の得べきものあることなし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、初發意より乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、應に善く諸の法性を學すべし。善く諸の法性を學するが故に、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く。是の道を行じて、能く六波羅蜜を具足し、衆生を成就し、佛國土を淨め、此の法中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得、三乘の法を以て衆生を度脫するも亦た三乘に著せず、是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無相の法を以て、當に般若波羅蜜を學すべし」と。

【論】問うて曰く、須菩提、佛に問ふ、「若し諸法は無相無分別なれば、云何んぞ差別して、六波羅蜜を說くや」と。佛還た答へたまはく、「菩薩は是の夢の如き五衆の中に住して、能く六波羅蜜を具足す」と。須菩提は空を以つて問ひ、佛も還た空を以つて答へたまへり。此の問答は云何にして別異するを得るや。

答へて曰く、須菩提は問ふ、「若し諸法空なれば、今に眼に見る菩薩は六波羅蜜を行じて作佛するや」と。佛答へたまはく、「凡夫は實智慧を遠ざけて相を取り、菩薩は六波羅蜜を行じて作佛すと見る」と。是れ空法に著するが故に難ず。菩薩は五衆に住すと雖も、五衆は如幻、如夢の空法の中に住して、亦た空心を以つて布施を行ず。是の故に、諸法の具足を行ずと雖も、六波羅蜜は空を妨げず。譬へば、雲霧の遠く見れば則ち見え、之れに近づけば則ち所見なきが如し。凡夫も亦た是の如く、實相を遠ざかるが故に諸佛を見、菩薩は實相に近づくが故に皆な空なるを見る、是の故に妨げず。妨げざるが故に、能く檀波羅蜜の一念の中に於て、具足して諸の善法を行ず。是の人は常に無漏の清淨波羅蜜を修するが故に、身を轉じて還つて無漏の波羅蜜を報得す。報得とは、更に修行せず自然にして得るに名づく。譬へば、報得の眼根は自然に能く色を見るが如し。是の報得の無漏波羅蜜を得已りて、能く一身を變じて、無量阿僧祇身を作り、十方の佛の所に於いて、具足して諸佛の甚深の法を聞き、

十方の衆生を度脱して漸漸に佛世界を淨め、願に隨つて作佛するなり。

問うて曰はく、若し諸法は空にして無相ならば、云何にして分別せん。云何にして檀波羅蜜等を行ずることを知るを得て、各各餘の波羅蜜を具足するや。

答へて曰はく、行者は自ら分別せずと雖も、而も諸佛菩薩は其の檀を行じ、尸を行じ、諸行を具足するを說きたまへり。聲聞の人の如きは、見諦無漏、無相、無分別の法中に入り、餘の聖人も亦た其の所入の法を數へ、諸法實相、所謂る無相の相を知る、是を正見と名く。正見の力を得已るを名けて正行と爲す。是の時、衆生を惱さず、諸惡を爲さざる、是れを正語正業正命と名く。是の時、所說なく、亦た所造なしと雖も、而も名けて正語正業と爲す。所以は何んとなれば、是を深妙の正語正業と名く。所謂る畢竟じて、衆生を惱さざるが故なり。是の中に發して造作する所ある、是を精進と名く。念を緣中に繫く、此を正念と名く。心を一處に攝す、是を正定と名く。身受心法、實相を見る、是を四念處と名く。乃至七覺意も亦た是の如し。四念處の中に於いても、亦た八聖道の中の諸聖人を數と爲すが如し。菩薩も亦た是の如く、是の無相、檀波羅蜜を行じて、能く尸羅波羅蜜等の諸善法を具足す。檀波羅蜜、尸波羅蜜に、諸の善法を攝することも亦た是の如し。

問うて曰はく、上品の中に一波羅蜜を以て諸波羅蜜を具すると、此の無相に一切法を攝すると何の差別ありや。

答へて曰はく、上には一念の中を以て、能く諸波羅蜜を具し、此には諸法は空にして無相なりと雖も、能く諸波羅蜜を具するを以て異となす。

第七十八四攝品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く、化の如くにして、事實あることなく、無所有性自性空なれば、云何にして是れ善法、是れ不善法、是れ世世間法、是れ出世間法、是れ有漏法、是れ無漏法、是れ有爲法、是れ無爲法なりと分別し、是の法能く須陀洹果を得、能く斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得、能く辟支佛道を得、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「凡夫愚人は夢を得、夢を見る者を得、乃至化を得、化を見る者を得て、身口意に善業・

不善業・無記業を起し、福業若くは罪業を起し、不動業を作す。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、二空(即ち)、畢竟空無始空の中に住し、衆生の爲に説法して、是の言を作す。諸の衆生よ、是の色は空にして所有なし、受想行識は空にして所有なし、十二入、十八界は空にして所有なし。色は是れ夢なり、受想行識は是れ夢なり。十二入、十八界は是れ夢なり。色は是れ響なり、是れ影なり、是れ焔なり、是れ幻なり、是れ化なり、受想行識も亦た是の如し、十二入、十八界も是れ夢なり、是れ響なり、是れ影なり、是れ焔なり、是れ幻なり、是れ化なり。是の中には、陰・入・界なく、夢なく、亦た夢を見る者なく、響なく、亦た響を聞く者なく、影なく、亦た影を見る者なく、焔なく、亦た焔を見る者なく、幻なく、亦た幻を見る者なく、化なく、亦た化を見る者もなく、一切法は根本實性なく所有なし、汝等は無陰の中に陰有りと見、無入に入ありと見、無界に界ありと見る。此の一切の法は和合因縁より生じ、顛倒の心を以て起り、業の果報に屬す。汝等何を以ての故に、諸法空にして根本無き中に於いて、而も根本相を取るや。是の時、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、慳法の中より、衆生を抜出して、教へて檀波羅蜜を行ぜしめ、是の布施を以て、大福報を得、大福報より抜出して、教へて持戒せしめ、持戒の功徳をもて、天上尊貴の處に生じ、復た抜出して初禪に住せしむ。初禪の功徳をもて梵天の處に生ず。二禪、三禪、四禪、無邊空處、無邊識處、無所有處、非有想非無想處も亦た是の如し。衆生の行ずる是の布施及び布施の果報、持戒及び持戒の果報、禪定及び禪定の果報より、種種の因縁もて抜出して、無餘涅槃及び涅槃道の中に安置す。謂ゆる、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空解脱門、無相無作解脱門、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法なり。衆生をして安隱に聖無漏法・無色無形・無對法の中に住せしめ、須陀洹果を得べき者あらば、安隱教化して、須陀洹果に住せしめ、斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道を得べき者ならば、斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道に住せしめ、阿耨多羅三藐三菩提得べき者ならば、亦た安隱教化して、阿耨多羅三藐三菩提の中に住せしむ」。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸の菩薩摩訶薩は、甚だ稀有にして及び難し、能く是の深般若波羅蜜を行じ、諸法は無所有性、畢竟空、無始空にして、而も諸法を、是れ善、是れ不善、是れ有漏、是れ無漏、乃至是れ有爲、是れ無爲なりと分別す。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸の菩薩摩訶薩は、甚だ稀有にして及び難し、能く是の深般若波羅蜜を行じ、諸法は無所有性、畢竟空、無始空なるに、而も諸法を分別す。須菩提よ、汝等若し是の菩薩摩訶薩の希有にして、及び難き法を知らば、即ち一切の聲聞辟支佛も報ゆる能はざるを知る、如何に況んや餘人をや」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の希有にして、及び難き法にして、諸の聲聞辟支佛の有ることなき所となすや。」佛、須菩提に告げたまはく、「一心に諦聽せよ、菩薩摩訶薩ありて、般若波羅蜜を行じ、報得の六波羅蜜中に住し、及び報得の五神通・三十七助道法に住し、諸の陀羅尼、諸の無礙智に住して、十方の世界に到り、布施を以て度すべき者は、布施を以て之を攝し、

持戒を以て度すべき者は、持戒を以て是を攝し、忍辱・精進・禪定・智慧を以て度すべき者は、其の所應に隨つて而して之を攝取し、初禪を以て度すべき者は、初禪を以て之を攝取し、二禪・三禪・四禪・無邊空處・無邊識處・無所有處・非有想非無想處を以て度すべき者は、其の所應に隨つて之を攝取し、慈悲喜捨心を以て度すべき者は、慈悲喜捨心を以て、之れを攝取し。四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・空三昧・無相無作三昧を以つて度すべき者は、其の所應に隨つて、而して之を攝取す」と。「世尊よ、菩薩摩訶薩は、云何に布施を以て、衆生を饒益するや。」「須菩提よ、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、其の時其の所須に隨つて、布施し、飲食・衣服・車馬・香華・瓔珞・種種の所須、盡く是れを給與す。若くは供養するに、佛、辟支佛・阿羅漢・阿那含・斯陀含・須陀洹等、等しうして異有ることなく、若くは施すに正道中に入れる人、及び凡人、下は禽獸に至るまで、皆な分別することなく等一に布施す。何となれば、一切法は不異不分別なるが故なり。是の菩薩は異ることなく、分別することなく、。布施し已りて、當に無分別法の報。所謂る一切種智を得べし。須菩提よ、菩薩摩訶薩、乞丐するものを見れば、我れ是の心を生ず。佛は是れ福田なり、我れ當に供養すべし、禽獸は福田にあらざれば應に供養すべからずと。是れ菩薩の法にあらず。何となれば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提心を發して此の念を爲さず、是の衆生は應に布施を以て饒益すべく、是は應に是の衆生に布施すべからず。布施の因緣の故に、應に刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生じ、乃至是の布施の因緣を以て、三乘法を以て是れを度して、無餘涅槃に入らしむべしと。若し衆生來りて菩薩に從つて乞はんに、亦た異心を生じて、應に是れに與ふべく、應に是れに與ふべからずと分別せず。何となれば、是の菩薩は是の衆生の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發せばなり。若し分別し簡擇せば、便ち諸佛、菩薩、辟支佛、學、無學人、一切世間の天、及び人の訶責する處に墮す。誰か請はん、汝一切衆生を救ひ、汝一切衆生の舍、一切衆生の護、一切衆生の依となりて、而も應に與ふべきと應に與ふべからざるとを分別し簡擇せよと。

復次に、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、若くは人、若くは非人來りて、菩薩の身體肢節を求乞せんと欲するに、是の時、應に二心を生ずべからず。若くは與へ、若くは與へずと。何となれば、是の菩薩摩訶薩は、衆生の爲めの故に身を受く、衆生來りて取るに、何ぞ與へざるべけんや。我れ衆生を饒益するを以ての故に、是の身を受く、衆生乞はざるも自ら應に之れを與ふべし、何に況はんや、乞はれて而も與へざらんや。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、應に是の如く學すべし。

復次に、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩乞ふ者あるを見れば、應に是の念を生ずべし、是の中に誰か與へ、誰か受け、施す所何物なるかと。是れ一切法の自性は皆な得べからず、畢竟空なるを以ての故なり。空相法は與ふるなく、奪ふなし。何となれば畢竟空の故に、內空の故に、外空・內外空・大空・第一義空・自相空の故なり。是の諸空に住して布施せば、是の時に檀波羅蜜を具足す。檀波羅蜜を具足するが故に、若くは內外法を斷ずる時に是の念を爲す、我を截るものは誰か、我を割く者は誰かと。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て、東方如恆河沙等の諸の菩薩摩訶薩を見るに、大地獄に入りて火を滅し、湯を冷かならしめ、三事を以て敎化す、一には神通力、二には知他心、三には說法なり。是の菩薩は神通力を以て、大地獄の火を滅し湯を冷かならしめ、知他心を以て慈悲喜捨し、意に隨つて說法す。是の衆生は菩薩に於いて清淨心を生じ、地獄より脫することを得て、漸く三乘法を以て苦際を盡すことを得。南西北方四維上下も亦た是の如し。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て、十方世界を觀じ、如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀るに、諸佛の爲に給使し、諸佛に供養し、隨意に愛樂し恭敬し、若くは諸佛の所說盡く受持し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を終に忘失せず。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て、十方如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀ずるに、畜生の爲めの故に、其の壽命を捨て、身體を割截して諸方に分散す。諸の衆生ありて、是の諸の菩薩摩訶薩の肉を食ふ者は、皆な菩薩を愛敬す。愛敬するを以ての故に、即ち畜生道を離るることを得て諸佛に値遇し、佛の說法を聞いて說の如く修行し、漸く三乘聲聞辟支佛佛法を以て、無餘涅槃に於て而して般涅槃す。是の如く、須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩の益する所甚だ多く、衆生を敎化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、說の如く修行し、乃至無餘涅槃に於て般涅槃す。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て十方如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を見るに、諸の餓鬼の飢渴の苦を除く。是の諸の餓鬼は皆な菩薩を愛敬す。愛敬するを以ての故に、餓鬼道を離るることを得て諸佛に値遇し、諸佛の說法を聞いて說の如く修行し、漸く三乘聲聞辟支佛佛法を以て而して般涅槃し、乃至無餘涅槃す。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生を度せんが爲の故に大悲心を行ず。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て見るに、諸の菩薩摩訶薩は、四天王天上に在りて說法し、三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天上に在りて說法す。諸天は菩薩の說法を聞いて、漸く三乘を以て、而して滅度することを得。須菩提よ、是の諸天衆の中に五欲に貪著する者あれば、是の菩薩は火起り、其の宮殿を燒くことを示現し、而して爲めに說法して、是の言を作す、諸天よ、一切有爲の法は悉く皆な無常なり、誰か安らかなる者を得んと。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て十方世界を觀し、如恆河沙等の國土の中を見るに、諸の梵天は邪見に著す。諸の菩薩摩訶薩は、敎へて邪見を遠離せしめて、是の言を爲す、汝等云何なれば空相虛妄の諸法中に於いて而も邪見を生ずると。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は大慈心に住して、衆生の爲めに說法す。須菩提よ、是を諸菩薩の希有にして、及び難きの法と爲す。

復次に、須菩提よ、我れ佛眼を以て十方世界如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀ずるに、四事を以て衆生を攝取す。何等をか四となす。布施と愛語と利益と同事となり。云何に菩薩は布施を以て衆生を攝する。須菩提よ、菩薩は二種の施を以て衆生を攝取す、財施と法施となり。何等の財施か衆生を攝取する。須菩提よ、菩薩摩訶薩は金銀瑠璃頗梨眞珠珂貝珊瑚等の諸の寶物を以てし、或は飲食・

衣服・臥具・房舍・燈燭・華香・瓔珞、若くは男、若くは女、若くは牛羊象馬車乘を以てし、若くは己身を以て衆生に給施し、衆生に語りて言はく、「汝等若し所須有らば、各來りて之れを取れ、己の物を取るが如くにして疑難を得る事なかれ」と。此の菩薩は施し已りて、教へて三歸依(即ち)歸依佛、歸依法、歸依僧せしむ。或は教へて五戒を受けしめ。或は教へて一日戒(を受け)しむ。或は教へて初禪あらしめ、乃至教へて非有想非無想定あらしめ、或は教へて慈悲喜捨あらしめ、或は教へて念佛・念法・念僧・念戒・念捨・念天あらしめ、或は教へて不淨觀あらしめ、或は安那般那觀、或は相、或は觸あらしめ、或は教へて四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・空三昧・無相無作三昧・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・三十二相・八十隨形好あらしめ、或は教へて須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果あらしめ、或は教へて辟支佛道あらしめ、或は教へて阿耨多羅三藐三菩提あらしむ。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、方便力を以て衆生に教へ、財施し已りて、後、教へて無上安隱涅槃を得せしむ。須菩提よ、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は希有にして及び難きの法と名く。

須菩提、菩薩は云何に法施を以て衆生を攝取する。須菩提よ、法施に二種あり、一には世間、二には出世間なり。何等をか世間の法施となし、世間を敷演し顯示する。所謂る不淨觀・安那般那念・四禪・四無量心・四無色定、是の如き等の世間法、及び諸餘の凡夫と共に行ずる所の法、是を世間の法施と名く。是の菩薩は是の如きの世間法を施し已りて、種種の因緣を以て、教化して世間法を遠離せしむ。世間法を遠離し已りて、方便力を以て、聖無漏法及び聖無漏法界を得しむ。何等をか是れ聖無漏法とし、何等をか是れ聖無漏法果なり爲す。聖無漏法とは三十七助道法三解脫門なり。聖無漏法果とは須陀洹果、乃至阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提なり。復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の聖無漏法は須陀洹果中の智慧、乃至阿羅漢果中の智慧、辟支佛道中の智慧、三十七助道法中の智慧、六波羅蜜中の智慧、乃至大慈大悲中の智慧、是の如き等の一切の法、若くは世間、若くは出世間の智慧、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲、是の法中の一切種智、是を菩薩摩訶薩の聖無漏法と名く。何等をか聖無漏法果と爲す。一切煩惱の習を斷ずる、是を聖無漏法果と名く。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は一切種智を得るや不や」。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は一切種智を得と。」須菩提言さく、「菩薩と佛とは何等の異りありや」。佛の言はく、「異りあり。菩薩摩訶薩の一切種智を得たる、是を名けて佛となす。所以は何んとなれば、菩薩心と佛心とは異りあることなければなり。菩薩は是の一切種智の中に住して、一切法に於て照明せざるなし。是を菩薩摩訶薩の世間の法と名く。須菩提よ、菩薩摩訶薩は世間の法施に因りて、出世間の法施を得、是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生を教へて世間法を得しめ已り、方便力を以て教へて出世間法を得しむ。須菩提よ、何等をか是れ菩薩の出世間法と爲す。凡夫法と共に同ぜざる、所謂る四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・三解脫門・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・三十二相・八十隨形好・五百陀羅尼門、是を出世間の法と名く。

須菩提よ、云何なるを四念處と爲す。菩薩摩訶薩は、內身循身觀を觀じ、外身循身觀を觀じ、內外身循身觀を觀じ、勸めて精進し、一心に智慧もて身を觀じ、身の集の因緣を觀じ、身の滅を觀じ、身の集の生滅を觀じて、是の道を行ずるに所依なく、世間に於て[二]所愛なし、受心法念を受くる處も亦た是の如し。須菩提よ、云何なるを四正勤と爲す。未生の惡不善法を生ぜざらしめんが爲めの故に勤めて生欲精進す。已生の惡不善法を斷ぜんが爲めの故に、勤めて生欲精進す。未生の善法を生ぜしめんが爲めの故に、勤めて生欲精進す。已生の諸の善法を增長し、修し、具足せんが爲めの故に、勤めて生欲精進す。是れを四正勤と名く。須菩提よ、云何なるを四如意足と爲す。欲三昧をも斷行して、初めて如意足を成就し、精進三昧・心三昧・思惟三昧をも斷行して如意足を成就す。云何なるを五根と爲す。信根・精進根・念根・定根・慧根なり。云何なるを五力と爲す。信力・精進力・念力・定力・慧力なり。云何なるを七覺分と爲す。念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・除息覺分・定覺分・捨覺分なり。云何なるを八聖道分と爲す。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。

云何なるを三三昧となす。空三昧門・無相無作三昧門なり。云何なるを空三昧と爲す。空行無我行を以て心を攝す、是を空三昧と名く。云何なるを無相三昧と爲す。寂滅行離行を以て心を攝す、是れを無相三昧と爲す。云何なるを無作三昧と爲す。無常行・苦行を以て心を攝す、是れを無作三昧と爲す。云何なるを八背捨と爲す。內に色相ありて外色を觀ず、是れ初背捨なり。內色相なく外色を觀ず、是れ二背捨なり。淨背者是れ三背者なり。一切の色相を過ぎ、一切對相を滅し、一切の異相を念ぜざるが故に、無邊虛空を觀じて、無邊虛空處に入り、乃至一切の非有想悲無想處を過ぎて、滅受想背捨に入る、是を八背捨と名く。云何なるを九次第定とする。行者・欲・惡・不善法を離れ、有覺有觀にして離生喜樂あり、禪初に入り、第二禪・第三禪・第四禪、乃至非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入る、是を九次第定と名く。

云何なるを佛の十力と爲す。是處不是處を如實に知り、衆生の過去未來現在の諸業諸受法を知り、造業の處を知り、因緣を知り、報を知り、諸の禪定解脫三昧定の垢淨分前相を如實に知り、他の衆生の諸根上下の相を知り、他の衆生の種種の欲解を知り、一切世間種種無數の性を知り、一切到道相を知り、種種の宿命を知り、一世乃至無量劫を如實に知り、天眼もて衆生の乃至善惡道に生ずるを見、漏盡くるが故に、無漏心解脫を如實に知る、是を佛の十力と爲す。云何なるを佛の四無所畏と爲す。佛誠言を作したまはく、我は是れ一切正智人なりと。我は沙門、婆羅門・若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆有りて、實の如く是の法を知らずと云ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我安穩を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中にありて師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆の實に轉ずる能はざるは、一の無畏なり。佛誠言を作したまはく、我は一切の漏盡くと。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは梵、若く

【二】所愛。別本「所受」に作る。

は魔、若くは復た餘衆ありて、實の如く是の漏盡きずと言ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安穩を得、無所畏を得、聖主の所に安住し、大衆の中にありて師子吼を作し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若、は魔、若くは梵、若くは復た餘衆の實に轉ずる能はざるは、二の無畏なり、佛誠言を作したまはく、我は障法を説くと。若くは沙門婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは餘衆有りて、實の如く是の法を得て、道を障へずと言ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安穩を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて、師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆の實に轉ずる能はざるは、三の無畏なり。佛誠言を作したまはく、我が説く所の聖道は能く世間を出で、是の行に隨つて能く苦を盡すと。若くは沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、復た餘衆ありて、實の如く是の道を行ずるも、世間を出づること能はず、苦を盡すこと能はずと言ふも、乃至是の微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安穩を得、無所畏を得、聖主の所に安住し、大衆中にありて師子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若くは天、若くは魔、若くは梵、若くは復た餘衆の實に轉ずる能はざるは、四の無畏なり。

云何なるを四無礙と爲す。一には義無礙智、二には法無礙智、三には辭無礙智、四には樂説無礙智なり。云何なるを義無礙智と爲す。義に緣る智慧、是れを義無礙智と爲す。云何なるを法無礙智と爲す。法に緣る智慧、是れを法無礙智と爲す。云何なるを辭無礙智と爲す。辭に緣る智慧、是れを辭無礙智と爲す。云何なるを樂説無礙智となす。樂説に緣る智慧、是れを樂説無礙智と爲す。云何なるを十八不共法と爲す。一には諸佛の身に失なく、二には口に失なく、三には念に失なく、四には異想なく、五には不定の心なく、六には不知已捨の心なく、七には欲減するなく、八には精神減ずるなく、九には念減ずるなく、十には慧減ずるなく、十一には解脱減ずるなく、十二には解脱知見減ずるなく、十三には一切の身業智慧に隨つて行じ、十四には一切の口業智慧に隨つて行じ、十五には一切の意業智慧に隨つて行じ、十六には智慧もて過去世を知ること無礙、十七には智慧もて未來世を知ること無礙、十八には智慧もて現在世を知ること無礙なり。云何なるを三十二相となす。一には足下安平立平にして奩底の如し。二には足下に千輻輞輪相を具足す。三には手足の指長きこと餘人に勝る。四には四足柔軟にして餘の身分に勝る。五には足跟廣くして具足滿好なり。六には手足の指合し、縵網餘人に勝る。七には足趺高平にして好く跟と相稱ふ。八には伊泥延鹿蹲蹲纖好、低泥延鹿王の如し。九には平住して兩手膝を摩す。十には陰藏の相馬王象王の如し。十一には身は縱廣等しく、尼倶盧樹の如し。十二には一一の孔より一毛生じ、色青く柔軟にして右旋す。十三には毛上向し、青色柔軟にして右旋す。十四には金色相其の色微妙にして閻浮檀金に勝る。十五には身光の面一丈なり。十六には皮薄く細く滑かにして塵垢を受けず、蚊蚋を停めず。十七には七處滿じ、兩足の下、兩手の中、兩肩の上、項中、皆な滿字相分明なり。十八には兩腋の下滿ず。十九には上身師子の如し。二十には身廣く端直なり。二十一には肩圓好なり。二十二には四十齒あり。二十三には齒白く齊密にして根深

し。二十四には四牙最も白くして大なり。二十五には方頰車師子の如し。二十六には味中に上味を得、咽中の二處津液流出す。二十七には舌大きく、軟薄にして、能く覆面して、耳髮の際に至る。二十八には梵音深遠にして、迦蘭頻伽の聲の如し。二十九には眼色金精の如し。三十には眼睫牛王の如し。三十一には眉間の白毫相、軟白にして、兜羅綿の如し。三十二には頂髻肉骨より成る。是の三十二相は佛身に成就し、光明遍く三千大千世界を照らす。若し廣く照らさんと欲すれば、即ち遍く十方無量阿僧祇の世界に滿ち、衆生の爲めの故に、丈光を受く。若し無量光明を放てば、即ち日月時節歲數なし。佛の音聲は遍く三千大千世界に滿ち、若し大聲を欲すれば、即ち十方世量阿僧祇の世界に遍滿す。衆生の多少に隨つて音聲遍く至る。

【論】問うて曰く、上來已に處處に諸法の性の空なるを説けり。云何にして善不善ありと分別するや。須菩提は何を以てか後より已來、品品の中の義は異なるなきに、而も種種の名を作して問へるや。

答へて曰はく、是の事上に已に答へたり。

復次に、衆生は無始生死より已來、著心深くして解すること難きが故に、須菩提は復た是の重問を作せり。

復次に、是の般若波羅蜜は、是の空の義を要説せんと欲するが故に數數問へり。

復次に、佛世に在す時は、衆生は利根にして悟り易し、佛の滅度五百年の後、像法の中の衆生は、佛法に愛著し、著法の中に墮して、若し諸法は皆な空にして、夢の如く、幻の如くなば、何を以ての故に、善不善ありやと言ふや。是を以ての故に、須菩薩は未來の衆生の鈍根にして、解せざるを憐愍するが故に、重ねて世尊に問へるなり。「若し諸法は皆な空なれば、云何にして善不善等ありと分別せん」と。是の中に佛自ら因緣を説きたまはく、凡夫は顚倒の心の故に、法に於て皆な顚倒の異見を作し、乃至一法の是れ實なるを見ず。凡夫は夢中に於て夢に著して夢を得、夢を見る者も亦た夢中所見の事に著す。是の人若し罪福を信ぜざれば、三種の不善業を起す。若し罪福を信ぜば、三種の善業を起す、善と不善と不動となり。善は欲界の中の善法、喜樂、果報に名け、不善は憂愁苦惱の果報に名け、不動は色無色界に生ずる因緣業に名く。菩薩は是の三種の業は皆な是れ虛誑不實なるを知り、二空の中に住して、衆生の爲めに法を説く。畢竟空は諸法を破し、無始空は衆生の相を破し、中道に住して衆生の爲に法を説く。所謂五衆十二入十八界は皆な是れ空にして、夢の如く、幻の如く、乃至化の如し。是の法の中には夢

なく、亦た夢を見る者もなし。菩薩、衆生に語るらく、「汝等は空法に於て顚倒心の故に諸の著を生ず。經の中に廣く說くが如し。是の菩薩は方便力の故に顚倒の中より衆生を拔出し、顚倒の法を破する中に著す。譬へば、慳貪の如きは是れ顚倒なれば、布施を以て慳貪の法を破す。而も衆生は是の布施に著するが故に、爲めに布施の果報を無常にして實に空なりと說き、布施より衆生を拔出して、持戒せしめ、持戒及び持戒の果報の中より衆生を拔出し、衆生に語つて言はく、「天福盡る時は無常にして苦惱なり」と。衆生を拔出し、欲を離れて禪定を行ぜしむ。而も爲に禪定及び果報の虛誑不實を說き。能く人をして顚倒の中に墮せしめ、種種の因緣もて、爲めに布施持戒禪定の無常の過失を說き、涅槃に住せしめ、涅槃の方便を得せしむ。所謂る四念處乃至十八不共法なり。衆生をして是の法の中に住せしむ。若し布施持戒禪定、是れ定實の法ならば、則ち應に遠離せしむべからず。布施持戒等の凡夫の法を破するが如く、此は即ち顚倒に因つて生ず。少時衆生を益すると雖も、久しければ則ち變異して能く苦惱を生ずるが故に、亦た敎へて捨離せしむ。菩薩は方便力の故に、先づ衆生をして罪を捨てしめ、持戒布施の福德を稱讃す。

復次に、爲めに持戒布施を說くも、亦た未だ無常苦惱を免れず。然る後、爲めに諸法の空を說き、但だ實法を稱讃す。所謂る無餘涅槃なり。是の時、須菩提は甚だ希有なりと歡喜す。菩薩は能く是の如く、是の諸法實相を知る。所謂る畢竟空なり、而も衆生の爲に說法して無餘涅槃に至らしむ。佛の言はく、「是れ一希有の問なり。更に菩薩の希有の法を知らんと欲し、一切聲聞辟支佛は是の菩薩に報ふること能はず。何に況んや餘人をや」と。須菩提問ふ、「何等か是れなる。更に希有の法ありや」と。佛の答は經の中に說くが如し。

問うて曰はく、經の中に敎へて布施持戒禪定せしむると、今復た更に說くと、更に何等の異りあるや。

答へて曰はく、先には生身の菩薩を說き、今は變化身を說く。先には一國土を說き、今は無量世界を說く。是の如き等の差別あり。

問うて曰はく、若し菩薩、「佛は是れ福田、衆生は福田にあらず」と知るは、是れ菩薩の法に非らずとせば、菩薩は何の力を

以ての故に、能く佛をして畜生と等しからしむるや。

答へて曰はく、菩薩は般若波羅蜜の力を以ての故に、一切法の中に畢竟空心を修す。是の故に一切法に於て分別なし。畜生の如し。五衆・十二入・十八界和合して、生るるを名けて畜生となす。佛も亦た是の如く、諸の善法の和合より、假りに名けて佛となす。若し人衆生を憐愍せば、無量の福德を得、佛に於て著心せば、諸惡の因緣を起して無量の罪を得。是の故に一切の法は畢竟空なりと知る。故に畜生を輕んぜず、佛に著心し貴ばざるなり。

復次に、諸法實相は、是れ一切法無相なり。是の無相の中に、是れ佛、是れ畜生なりと分別せず。若し分別せば、是れ即ち取相なり。是の故に等しく觀ず。

復次に、菩薩に二法門あり、一には畢竟空法門、二には分別好惡法門なり。入空の法門には即ち等觀を得て、分別法門に入る。諸の阿羅漢、辟支佛、尙ほ佛に及ばず、何に況んや畜生をや。其の衆生を輕んじ、憐愍し布施せざるが爲めの故に不分別を敎ゆるなり。

問うて曰はく、菩薩の身は木石にあらず、云何なれば衆生來りて割截するに、而も異心を生ぜざるや。

答へて曰はく、有人は言ふ、「菩薩は久しく羼提波羅蜜を修するが故に能く愁惱せず、羼提仙人の手足を截られて、血皆な乳となるが如し」と。有人は言ふ、「菩薩無量世より來た、深く大慈悲心を修するが故に、割截ありと雖も亦た愁憂せず。譬へば、草木に瞋心あることなきが如し」と。有人は言ふ、「菩薩は深く般若波羅蜜を修し、身を轉じて般若波羅蜜の果報を得。心を空しうするが故に了了に空を知り、身を割截する時、心亦た動ぜず、外、物に動ぜざるが如く、內も亦た是の如し。般若の果報を得るが故に、諸法の中に於て分別する所なし」と。有人は言ふ、「是の菩薩は生死の身にあらず、是れ三界を出でたる法性生身なり。無漏の聖心もて果報の中に住するが故に、身木石の如し。而して能く割截するものを慈念す。是の菩薩は能く是の如き心を生ずるが故に、內外の法を劫奪割截する時、其の心動ぜず、是を菩薩の希有の法となす」と。復次に、希有の法とは、經中に說くが如し。我れ佛眼を以て十方如恒河沙等の世界の中の菩薩を見るに、地獄の中に入りては、火をして滅めしめ、

湯をして冷かならしめ、三事を以て衆生を敎化す。經中に說くが如し。

問うて曰はく、若し爾らば應に三惡道有るべからずや。

答へて曰はく、三惡道の衆生は無邊無量なり。菩薩は無邊無量なりと雖も、衆生は倍多く、無量の菩薩は、衆生の度すべき因緣に隨ふ。若し三惡道の中に於いて、餘の功德ある者あれば、菩薩は卽ち度す。重罪者は、卽ち菩薩を見ず。菩薩は一相にして見るに、分別心なきが故に、一一に衆生を求覓せず。譬へば、大赦に、及ぶものは得脫し、及ばざる者は則ち蒙らざるが如し。

問うて曰はく、若し衆生、菩薩を割截し、或は其の肉を食はば、當に罪あるべし、云何んぞ得度せんや。

答へて曰はく、此れ菩薩の本願なり。「若し衆生ありて、我が肉を噉はば、當に得度せしむべし」と。經中に說くが如し。衆生、菩薩の肉を食はば、則ち慈心を生ずと。譬へば、色聲香觸あり、人聞見すれば則ち喜び、復た聞見なければ則ち瞋るが如く、味も亦た是の如し。瞋る者あれば、慈心を起す者あり、毘摩羅詰經に說くが如し。香飯を服食し、七日にして道を得るものあり、得ざる者あり。肉を噉ふを以ての故に、度するを得るにあらず。慈心を起發するを以ての故に、畜生を免る事を得、善處に生じて佛の得度に値ふなり。菩薩あり、無量阿僧祇劫に於いて、深く慈心を行じ、外物を給施するも、衆生の意猶ほ滿たざれば、並に自ら身を以て布施せるに、乃ち滿足せり。法華經の中に「藥王菩薩は外物珍寶もて佛に供養するに、意猶ほ滿たず、身を以て燈となし、佛に供養するに、爾乃ち足り滿つ」と(說くが)如し。

復次に、人は外物を得ること多しと雖も、以て恩となさず、所以は何んとなれば、愛重する所に非らざるが故なり。其の身を得る時には乃ち能く驚感す。是の故に、身を以て布施す。菩薩は又天上の諸人の爲に說法す。經中に廣く說くが如し。人は四事を以て之を攝す、布施と愛語と利益と同事となり。布施に二事あり、經中に廣く說くが如し。

問うて曰はく、何を以てか、略して餘の四道を說き、而して廣く人道の中の法を說くや。

答へて曰はく、三惡道の中には、苦多きが故に、衆生は少しく疑ふ。若し菩薩の大神通、希有の事を見れば、則ち直に信じ、

愛著して得度す。諸天は天眼有るが故に、自ら罪福の因緣果報を見て、菩薩が少しく神足を現ずれば、則ち解す。人は肉眼を以て、罪福の因緣果報を見ず、又た多く外道邪師、及び邪見の經書に著す。諸の煩惱に二分有り、一は見に屬し、二は愛に屬す。若し但た一事あれば、則ち大罪を成ずること能はず。三毒の人は邪見の力を得て能く盡く重惡を作し、邪見の人は貪欲瞋恚を得て能く大に罪事を作す。須陀洹には三毒有りと雖も、邪見なきが故に、三惡道に墮して、重罪を作さざるが如し。是の故に、人中には多く三毒邪見あり。又た眼に罪福の因緣を見ざるが故に度し、度し難きが故に多く說けるなり。

問うて曰はく、若し爾れば四事の中、何を以てか多く布施を說き、餘の三は略して說くや。

答へて曰はく、布施の中に三事を攝するが故に、財施法施を以て衆生を敎化すれば、則ち攝せざる所なきなり。復た次に、四事の中、初めて廣く布施を開けば、則ち餘の三も亦た是の如しと知る。

問うて曰はく、爾らば何を以てか略して財施を說き、而も廣く法施を說くや。

答へて曰はく、財施は少なく、法施は廣きが故なり。所以何んとなれば、財施は有量の果報にして、法施は無量の果報なり。財施は欲界繫の果報にして、法施は亦三界繫の果報にして、亦た是れ三界を出づるの果報なり。財施は能く三界の富樂を與へ、法施は能く涅槃の常樂を與ふ。又た財施は法施より生ず、法を聞けば則ち施すが故なり。

復次に、財施の果報は、但だ富樂にして種種なきも、法施は亦た富樂あり、亦た餘事あり、乃ち佛道涅槃の果報に至る。是等の因緣を以ての故に、廣く法施を說けり。二施の義は經中に佛自ら廣く說きたまへるが如し。

問うて曰はく、經中に、須菩提は何を以ての故に、菩薩は一切種智を得るや不やと問へるや。

答へて曰はく、須菩提意へらく、「若し菩薩の時一切種智を得ば、則ち菩薩と名けず、云何んぞ未だ佛を得ずして、能く一切種智を得ん。一切種智を得るが故に名けて佛となす。若し先づ作佛せば、一切種智を用つて何かせん」と。佛答へたまはく、「今一切種智を得るを名けて菩薩と爲し、已に一切種智を得たるを名けて佛と爲す。菩薩の時、佛の因緣を具足して心を生じて一切種智を得んと欲す。得已れば名けて佛と爲す。眞實に之を言へば、菩薩も得ず、佛も亦た得ざるなり。何となれば、菩薩

は未だ佛を得ず、得已れば更に復た得ざればなり。世俗の法の故に、菩薩は今佛を得、得已竟んぬと說く。第一義中には則ち一切法なし、何に況はんや、佛及び菩薩をや。」又た經の中に言はく、「佛心は菩薩に異らず、菩薩は佛心に異らず。次第に相續して斷ぜざるが故に二心あるも異なく、分別無きが如きが故なり。」

問うて曰はく、九次第定、三十二相、八十隨形好、此は此れ世間共有の法なり。何を以ての故に、名けて出世間不共の法と爲すや。

答へて曰はく、四禪・四無色定・滅受想を九次第と名け、滅受定は但だ聖人のみ能く得。四禪、四無色定は初禪より起り、更に餘心を雜へずして、禪に入る。二禪より乃ち滅受定に至るまで、念念の中の受に餘心を雜へざるを名けて次第と爲す。凡夫は是れ罪人にして鈍根なり。云何んぞ能く三十二相を得ん。轉輪聖王・提婆達・難陀所得の相の如し。名字は同じと雖も威德具足し淨潔の得處は佛と同じからず。先に轉輪聖王と佛相との不同を分別せる中に說くが如し。又た是の相は聖無漏法の果報なるが故に、自在にして意に隨つて無量無邊なり。轉輪聖王等の相は、是れ福德業の因緣なるも、自在なる能はず、量有り、限有るなり。

復次に、提婆達、難陀には三十相ありて三十二相なし。輪輪聖王には三十二相有りと雖も、威德なく、具足せず、處を得ず、愛等の煩惱と俱なり。八十隨形好の具足は、唯だ佛菩薩にのみ之れあり。餘人は正に少許あるべし。或は指纖長、或は失腹、是の如き等の無威德の好有るも言ふに足らず。是の故に說いて、出世間にして凡夫の法を共にせずと言ふも咎なし。

問うて曰はく、初めより來た、處處に諸法五衆、乃至一切種智を說きて、是の三十二相八十隨形好を說かず。今、經竟らんと欲するに、何を以てか品品の中に說くや。

答へて曰はく、佛に二種の身あり、法身と生身となり。二身の中に於いては法身を大とす。法身は大にして、益する所多きが故に、上來廣く說けり。今、經を訖らんと欲するが故に、生身の義は應に說くべし。是の故に說けり。

復次に、是の生身は相好莊嚴なり、是れ聖無漏法の果報なり。今次第に說く。上には諸の波羅蜜を雜へて、四念處等の諸法

の義を說く。先に十力等を說くが如し。是の佛法甚深の義は、今當に更に略して說くべし。
問うて曰はく、佛の十力とは、若し總相の說なれば、則ち一力、所謂る一切種智力なり。若し別相の說なれば、千萬億種力なり。法に隨つて名を爲す。今、何を以てか但だ十力を說くや。

答へて曰はく、佛は實に無量の智力有り、但だ衆生は得ること能はず、行ずること能はざるを以ての故に說かざるなり。是の十力もて度すべき衆生の事を辦ず。所以何んとなれば、佛は是處非處力を用て、定んで一切法中の因果を知りたまふ。所謂る惡業を行ずれば、惡道に墮すとは、是れ處あり。惡業を行じて、天上に生ずるは、是れ處なきなり。善も亦た是の如し。五蓋を離れず、七覺を修せずして、道を得とせば、是れ處あることなし。五蓋を離れ、七覺を修して、道を得るとせば是れ處有り。餘の九力は盡く是の中に入る。佛は是の力を以て、十方六道の中の衆生の度すべき者と度すべからざる者とを籌量したまふ。度すべき者は、種種の因緣、神通變化を以て之を度脫し、度すべからざる者は、是の人中に於て捨心を修す。譬へば、良醫は其の病相を觀、審定して、其の活すべきを知れば則ち是れを活し、活すべからざる者は則ち之れを捨つるが如し。衆生を度する方便は、所謂る二力なり。(即ち)業力と定力もて其の業因緣の生處を求む。人は業因緣を以ての故に身を受け、世間に縛著し、禪定の因緣の故に解脫を得。行者は必ず當に苦を求むべし、「(苦は)何に從つてか生じ、何に由つてか滅す」と。是の故に二力を用ふ。業力に二分あり、一には淨業、能く惡業を斷ず。二には垢業なり。淨業とは禪定解脫、脫の三昧に名づけ、不淨業とは能く三界の中に身を受く。人に二種有り、鈍根は身を受けんが爲めの故に業を作し、利根は身を滅せんが爲めの故に業を作す。

問うて曰はく、若し爾れば、何を以てか皆な淨業を作さしめざるや。

答へて曰はく、衆生の根に利鈍あるを以ての故なり。

問うて曰はく、衆生には何の因緣の故に利鈍あるや。

答へて曰はく、種種の欲力あるを以ての故なり。惡欲の衆生は、常に惡に入るが故に鈍なり。欲を嗜好と名づく、罪事を嗜

好し、惡業を生ずるが故に鈍なり。善欲の者は道を樂しみ、助道法を修するが故に利なり。

問うて曰はく、衆生は何を以てか、皆な善欲をなさざるや。

答へて曰はく、是の故に佛は世間の種種の性を說きたまへり。惡性と善性となり。惡性の者は惡欲なり。惡欲の故に根鈍なり、火は熱性、水は濕性なるが如し。其の所以を責むべからず。

問うて曰はく、惡欲卽ち是れ惡性ならば、何の差別ありてか二力を作すや。

答へて曰はく、性には先づ欲あり、因緣を得て生ず、譬へば、先づ瘡ありて、觸の因緣ありて、則ち血出づるが如し。性は內にあり、欲は外にあり、性は重く、欲は輕く、性は除き難く、欲は捨て易く、性は深く、欲は淺し。性を用つて業と作せば、必ず當に報を受くべく、欲を用つて業を作せば、必ずしも報を受けず。是の如き等の差別あり。復た有人の言はく、「欲は常に習へば增長して、遂に成じて性と爲り、性も亦た能く欲を生ず」と。是の人、若くは今世、若くは後世、常に是の欲を習へば、卽ち成じて性と爲る。是の性の中に住して、惡を作し、害を作す。若し善性に住すれば則ち度すべく、若し惡性に住すれば則ち度すからず。佛旣に衆生の二種の性を知り、已に其の果報の善道、惡道、種種の差別を知りたまへり。惡性は三惡道に墮し、善性は四種道(所謂)人・天・阿修羅・涅槃道あり。

問うて曰はく、一切到處道力と、天眼力と何の差別ありや。

答へて曰はく、天眼は但だ生死の時を見る。是の中、未だ死せざる時を知らず。因を見て果を知るは天眼なり。現前に罪福の果を見る、是を名けて一切到處力といふ。

問うて曰はく、聲聞辟支佛も亦た涅槃を得るも、亦た能く衆生を化す。何を以てか是の力無きや。

答へて曰はく、是の故に後の三力を說くなり、三世の中の衆生の事、盡く能く通達し遍く知る。宿命力を以て、一切衆生の過去の事、本末悉く知る。天眼、生死智力を以ての故に、一切衆生未來世の中の無量の事、盡く能く遍く知る。是の知を作し已りて、現世の中の衆生の度すべき者を知り、爲に漏盡法を說く。是を以ての故に、但だ佛のみ是の力あり、二乘には無き所

なり。一人あり、卽日、應に阿羅漢を得。舍利弗、日中の時、汝は得道の因緣なしと言語し、捨てて度せざるに、哺時に佛、宿命神道を以て見たまへば、過去八萬劫の前に得道の因緣あり。今應に成就すべし、哺時に法を說くに、卽ち阿羅漢道を得たるが如し。

復次に、佛は初力を以て、衆生の度すべく、度すべからざる相を知り、第二力を以て、衆生の三障の爲に、覆はれ、覆はるなき者を知り、第三力を以て、衆生の禪定解脫の淨と不淨の者を知り、第四力を以て、衆生の根に利あり、鈍あり、能く法性に通ぜるもの、通ぜざる者を知り、第五力を以て、衆生の根の利鈍の因緣、善惡の欲を知り、第六力を以て、二欲の因緣、種種の性を知り、第七力を以て、衆生利鈍の根、善惡果報の處、七種の道を知り、第八力を以て、衆生宿世の善惡の業、障不障を知り、第九力を以て、衆生の今世には未だ度すべからず、未來世の生處に度すべきを知り、第十力を以て、是の人は空解脫門を以て、涅槃に入り、無相無作門もて涅槃に入るを知り、是の人は見諦道、思惟道の中に於て、念念の中に、若干の結使を斷ずるを知る。是の十力を以て、衆の所應の度緣を籌量して、而も爲に法を說きたまふ。是の故に說法は初めより空言なし。

問うて曰はく、佛の智慧は無量なり、身相も亦た無量なるべし。又佛身は諸の天王に勝る、何を以てか、正しく轉輪聖王と同じく、三十二相ありや。

答へて曰はく、三十二相は多からず、少なからざるの義、先に說けるが如し。

復次に、有人の言はく、「佛菩薩の相は定まらず」と。是の中に說くが如くんば、衆生の好む所に隨つて、以て其の心を引導すべき者には、爲に相を現ず。衆生の金を貴ばずして、而も餘色の琉璃頗梨金剛等を貴べば、是の如き世界の人には、佛則ち金色を現ぜず、其の好む所を觀じて、則ち爲に色を現ず。又た衆生、纖長指及び網縵を貴ばず、長指利爪を以て羅刹相を爲し、網縵を以て水鳥の相を爲す、造事便ならず、手に衣を著けざるが如し。何ぞ是れを用ふることを爲さんや。罽賓國の彌帝隸力利菩薩の如きは、手に網縵あり、其の父彼を惡み以て怪と爲し、力を以て之を割いて言はく、我が子は何の緣ありてか鳥の如くなるやと。有人は、肩の圓大なるを好まず、以て腫に似たりと爲すあり。腹現れざるを以ての故に、腹無きこと餓相の如し

とする有り。亦た有人は青眼を以て好まずと爲し、但だ白黒分明を好む。是の故に、佛は衆生の好む所に隨つて、而も爲めに相好を現ず。是の如き等は常に定りあることとなし。有人の言はく「是の三十二相は實に定んで神通力、變化身を以て、衆生の好む所に隨つて、爲に相を現ず」と。有人の言はく、「佛、有る時は神通變化し、有る時は世界の處生に隨ふ。當生の處には神通變化を言ふことを得ず。又た三千大千世界の中に於て、度すべき衆生の處に隨つて生ずれば、則ち爲めに相を現ず」と。密迹經の中に說くが如し。或は金色を現じ、或は銀色を現じ、或は日月星宿色、或は長、或は短、引導すべき衆生に隨つて、則ち爲に相を現ず。此の間、閻浮提の中、天竺國の人の好む所に隨つて爲に三十二相を現ず。天竺國の人は今、故に肩髆を治め、厚大の頭上に皆な髻あらしむるを好しと爲す。人相の中にて五處の長きを好しと爲すが如し。眼と鼻と舌と臂と指と髀と手と足との相なり。若くは輪、若くは蓮華、若くは具、若くは日月、是の故に佛の手足には千輻輪、纖長指有り、鼻高好、舌廣長にして薄し、是の如き等は皆な先に貴ぶ所の者に勝るが故に、恭敬心を起す。國土あれば佛は爲めに千萬の相、或は無量阿僧祇相、或は五六三四の相を現じたまふ。天竺の好む所に隨ふが故に三十二相、八十隨形好を現ずるなり。

巻の第八十九

第七十八 四攝品(餘)

【經】云何なるを八十隨形好と爲す。一には頂を見ず。二には鼻直高好にして孔現はれず。三には眉初生の月の如くにして、紺瑠璃色なり。四には耳輪埵成し、五には身堅實にして、那羅延の如し。六には骨際鈎鎖の如し。七には身一時に廻すること、象王の如し。八には行く時、足の地を去ること四寸にして印文現ず。九には爪赤銅色の如く、薄くして潤澤あり、十には膝骨堅著にして圓好なり。十一には身淨潔なり。十二には身柔軟なり。十三には身曲らず。十四には指長く纖圓なり。十五には指文莊嚴なり。十六には脈深し。十七には踝見えず。十八には身潤澤なり。十九には身自ら持して逶迤せず。二十には身滿足す。二十一には識滿足す。二十二には容儀備足す。二十三には住處安らかにして、能く動かすものなし。二十四には威一切に振ふ。二十五には一切樂觀す。二十六には面大長ならず。二十七には容貌を正うして色を撓さず。二十八には面具足し滿ず。二十九には唇赤くして頻婆果の色の如し。三十には音響深し。三十一には臍深くして圓好なり。三十二には毛右旋す。三十三には手足滿ず。三十四には手足意の如し。三十五には手文明直なり。三十六には手文長し。三十七には手文斷ぜず。三十八には一切惡心の衆生も見れば和悦す。三十九には面廣く姝好なり。四十には面淨滿して月の如し。四十一には衆生の意に隨つて、和悦して與に語る。四十二には毛孔より香氣を出す。四十三には口より無上香を出す。四十四には儀容師子の如し。四十五には進止象王の如し。四十六には行法鵝王の如し。四十七には頭摩陀那果の如し。四十八には一切の聲分具足す。四十九には牙利どし。五十には舌の色赤し。五十一には舌薄し。五十二には毛紅色なり。五十三には毛潔淨なり。五十四には廣長の眼なり。五十五には孔門相具足す。五十六には手足赤白にして蓮華の色の如し。五十七には臍出でず。五十八には腹現れず。五十九には細腹なり。六十には身傾動せず。六十一には身を持すること重し。六十二には其の身分大なり。六十三には身長し。六十四には手足淨潔にして軟澤なり。六十五には邊光各一丈なり。六十六には光身を照して而して行く。六十七には等しく衆生を見る。六十八には衆生を輕んぜず。六十九には衆生に隨つて音聲過ぎず減ぜず。七十には説法して著せず。七十一には衆生の語言に隨つて而して説法をなす。七十二には一發音もて衆聲に報ゆ。七十三には次第あつて因緣説法す。七十四には一切衆生觀相を盡すこと能はず。七十五には觀る者厭足することなし。七十六には髮長好なり。七十七には髮亂れず。七十八には髮旋好なり。七十九には髮の色青珠の如し。八十には手足に德相あり。須菩提よ、是を八十隨形好となし、佛身に成就すること、是の如し。

須菩提よ、菩薩摩訶薩は二施を以て衆生を攝取す。所謂る財施と法施となり。是を菩薩の希有にして及び難き事と爲す。云何に菩薩摩

訶薩は愛語もて衆生を攝取するや。菩薩摩訶薩は六波羅蜜を以て衆生の爲めに說法し、此の言を作す。汝六波羅蜜を行じて、一切善法を攝す可しと。云何に菩薩摩訶薩は利行もて衆生を攝取すとするや。菩薩摩訶薩は長夜に衆生を敎化して六波羅蜜を行ぜしむ。云何に菩薩摩訶薩は同事もて衆生を攝取すと爲すや。菩薩摩訶薩は五神通力を以ての故に、種種變化して五道の中に入り、衆生と與に同事す。此の四事を以て而して之を攝取す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時衆生を敎化す。善男子よ、當に喜く學して諸字を分別すべし。亦た當に善く一字乃至四十二字を知るべし。一切の語言は皆な初字門に入り、一切の語言は亦た第二字門乃至第四十二字門に入り、一切の語言は皆な其の中に入り、一字は皆な四十二字に入り、四十二字も亦た一字に入る。是の衆生、應に是の如く善く四十二字を學し已りて能善く字法を說き、善く字法を說き已りて善く無字法を說く。須菩提よ、佛の善く字法を知る如く、善く字を知り、善く無字を知り。無字法の爲めの故に、字法を說くべし。何となれば、須菩提よ、一切の名字法を過ぐるが故に名けて佛法となせばなり。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し衆生は畢竟して不可得ならば、法も亦た得べからず、法性も亦た得べからず。畢竟空なるが故なり、無始空なるが故なり。世尊よ、菩薩摩訶薩は云何にして般若波羅蜜を行じ、禪波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・羼提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜を行ずる時、四禪・四無量心・四無色定・三十七助道法・十八空を行じ、空無相三昧・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・三十二相・八十隨形好を行ぜん。云何にして報得五神通に住して、衆生の爲めに說法するや。衆生は實に得可らず。衆生得べからざるが故に、色得べからず、乃至識も亦た得べからず。五衆得べからざるが故に、六波羅蜜乃至八十隨形好も皆な得べからず。是の不可得中に衆生なく、色なく、乃至八十隨形好なければなり。世尊よ、云何に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、衆生の爲めに說法するや。世尊よ、菩薩の般若波羅蜜を行ずる時、菩薩も尙ほ得べからず、何に云んや當に菩薩法ある可けんや。」

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、衆生不可得なるが故に、當に知るべし、是れ內空・外空・內外空・空空・大空・第一義空・有爲空・無爲空・畢竟空・無始空・散空・諸法空・自相空・性空・不可得空・無法空・有法空・無法有法空なりと。(衆生不可得なるが故に、)當に知るべし、五陰空・十二入空・十八界空・十二因緣空・四諦空・我空・壽者・命者・生者・養者・育者・衆數者・人者・作者・使作者・起者・使起者・受者・使受者・知者・見者、皆な空なりと。衆生不可得なるが故に、當に知るべし、四禪空・四無量心空・四無色定空なりと。當に知るべし、四念處空・乃至八聖道分空・空空・無相空・無作空・八背捨空・九次第定空なりと。衆生不可得なるが故に、當に知るべし、佛の十力空・四無所畏空・四無礙智空・十八不共法空なりと。當に知るべし、須陀洹果空・斯陀含果空・阿那含果空・阿羅漢果空・辟支佛道空なりと。當に知るべし、菩薩地空なりと。當に知るべし、阿耨多羅三藐三菩提空なりと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く一切法の空なることを見、衆生の爲めに說法して、諸空の相を失せず。是の菩薩は是の如く觀ずる時、一切法無礙を知る。一切法無礙を知り已り

て、諸法相の不二不分別なることを壞せず、但だ衆生の爲めに實の如く說法す。譬へば、佛の所化人は、化人復た無量千萬億人を化作して、敎へて布施せしむるものあり、敎へて持戒せしむるあり、敎へて忍辱せしむるあり、敎へて精進せしむるあり、敎へて禪定せしむるあり、敎へて知慧せしむるあり、敎へて四禪・四無量心・四無色定せしむる者あるが如し。汝の意に於て云何。佛の所化人諸法を分別し、破壞することありや不や」。須菩提言さく、「不なり、世尊よ、是の化人は心なく心數法なし、云何んぞ諸法を分別し破壞せんと。」是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、衆生の爲めに應に說法し、衆生を顚倒地より拔出し、衆生をして各所應の如く住地を得しむ。不縛不脫法を以ての故なり。何となれば、須菩提よ、是の色は不縛不脫なり、受想行識は不縛不脫なり。色の無縛無脫なる是れ色ならず、受想行識の無縛無脫なる是れ識ならず。何を以ての故に、色は畢竟清淨なるが故なり。受想行識、乃至一切法、若くは有爲 若くは無爲も亦た、畢竟清淨なるが故なり。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生の爲めに說法するも、亦た衆生及び一切法を得ず。一切法得べからざるが故に、菩薩は法に住せざるを以ての故に、諸法の相中、所謂る色空乃至有爲無爲法空に住す。何となれば、色乃至有爲無爲の法は自性得べからざるが故に、住處ある事なければなり。無所有法は無所有法に住せず、所有法は所有法に住せず、自性法は自性法に住せず、他性法は他性法に住せず。何を以つての故に、是の一切の法は皆な得べからざるが故に、不可得の法、當に何處にか住すべけん。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、是の諸空を以て能く是の如く說法し、是の如く般若波羅蜜を行じ、諸佛及び聲聞辟支佛に於て過あることなし。何を以ての故に、諸佛及び菩薩辟支佛阿羅漢は是の法を得已りて、衆生の爲めに說法するも、亦た諸法の相に轉ぜず。何となれば、如法性實際は轉ずべからざるが故なり。所以何んとれば、諸法(を得已りて)性無きが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し法性・如・實際、轉ぜざれば、色と法性とは異なるや不や。色と如・實際とは異なるや不や。受想行識・乃至有爲・無有法・世間出世間・有漏無漏異なるや不や」と。佛の言はく、「不なり。色は法性と異ならず、如と異ならず、實際と異ならず、受想行識乃至有漏無漏も亦た異ならず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し色は法性と異ならず、如と異ならず、實際と異ならず、受想行識、乃至有漏無漏異ならずんば、云何にして黑法を分別し、黑報所謂地獄餓鬼畜生ならん、白法の白報、所謂、諸天及び人あらん。黑白法の黑白報あらん。不黑不白法の不黑不白報、所謂須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提あらん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「世諦の故に分別して果報ありと說くは第一義には非ず。第一義の中には因緣果報を說く可らざればなり。何となれば、是の第一義は實に相あることなく、分別あること無く、亦た言說も無し、所謂色乃至有漏無漏法は不生不滅相、不垢不淨にして畢竟無始空なるが故なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世諦を以ての故に分別して果報ありと說き、第一義に非ずんば、一切凡夫人は應に須陀洹果・

斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提あるべし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於いて云何。凡夫人は是れ世諦法なり、是れ第一義なりと知ると爲すや不や。若し是を知れば、凡夫人は應に是れ須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提なるべし。須菩提よ、凡夫人は實に世諦を知らず、第一義諦を知らず、道を知らず、分別道果を知らざるを以て、云何にして當に諸果あらん。須菩提よ、聖人は世諦を知り、第一義諦を知り、道あり、修道あり、是を以ての故に聖人は差別して諸果あり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、修道せば果を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり、須菩提よ、修道するも果を得ず、修道せざるも亦た果を得ず。亦た道を離れざるも果を得、亦た道中に住せざるも果を得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生の爲めの故に諸果を分別するも、亦た是の有爲性と無爲性とを分別せず」と。「世尊よ、若し有爲性と無爲性とを分別せずして諸果を得るとせば、云何なれば世尊は自ら說きて三結の盡るを須陀洹果と名け、淫怒癡薄きが故に斯陀含果と名け、五此間結を盡くるを阿那含と名け、五彼間結の盡くるを阿羅漢果と名け、所有の集法皆な滅散する相を辟支佛道と名け、一切煩惱の習を斷ずるが故に阿耨多羅三藐三菩提と名くや。世尊よ、我れ當に、云何にして有爲性と無爲性とを分別せずして、諸果を得ることを知らん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提を以て、是の諸果は是れ有爲なり、是れ無爲なりとせん」と。須菩提言さく、「世尊よ、皆な是無爲なり」と。「須菩提よ、無爲法中に分別ありや不や」と。「不なり、世尊よ」。「須菩提よ、若し善男子善女人、一切法若くは有爲、若くは無爲は、一相にして、所謂無相なりと通達せば、是の時、若くは有爲、若くは無爲なりと分別することありや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は、衆生の爲めに說法して、諸法を分別せず。所謂內空の故に、乃至無法有法空の故に、是の菩薩は自ら無所著の法を得、亦た人に敎へて無所著の法、若くは檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜・初禪乃至第四禪・慈悲喜捨・無邊虛空處・乃至非有想非無想處、若くは四念處乃至一切種智を得せしむ。是の菩薩は自ら著せざるが故に、又他を敎へて無所著を得せしむ。無所著の故に礙ふる處なし。譬へば、佛の所化人の布施するも亦た布施の報を受けず、但だ衆生を度せんが爲めの故に、乃至一切種智を行じて、一切種智の報を受けざるが如し。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、六波羅蜜乃至一切法、有漏無漏有爲無爲を行じて住せず、亦た法を受けず、但だ衆生を度せんが爲めの故なり。何となれば、此の菩薩摩訶薩は能く一切諸法の相に達するが故なり」と。

【經】問うて曰はく、八十隨形好は是れ身法を莊嚴し、識滿足す、何を以て隨好形の中にあるや。

答へて曰はく、此の識は是れ果報生の識にして、世間の好醜は自然にして知る。凡人は識具足せざるが故に、人法を學んで乃ち知る。佛は一歲具足し滿じて乃ち生る、故に身識皆な具足す。餘人は若くは八月、若くは九月、胎に處す。總じて十月と言ふ。菩薩は胎に處すること十月、總じて一歲を得、身根具足するが故に、果報得の識も亦た具足す。

問うて曰はく、足安立住處と安住處と、何の異りあるや。

答へて曰はく、住處安きは白衣勇士の器仗を牢持し、住處に安據すれば則ち動すべからざるが如し。又出家する時には、魔民惡鬼の能く動轉して退敗せしむる者なし。

四十二の義は摩訶衍の中に說くが如し。「一字盡く諸字を入る」とは、譬へば兩の一合するが故に二となり、三つの一の故に三となり、四の一を四と爲すが如し。是の如くにして乃ち千萬に至る。又た阿字は定となすも、阿は變じて羅となり、亦た變じて波となるが如し。是の如くにして盡く四十二字に入る。「四十二字一字に入る」とは、四十二字は盡く阿の分なり。阿の分還つて阿の中に入る。善く字を知るが故に、善く諸法の名を知る。善く諸法の名を知るが故に、諸法の義を知る。無字卽ち是れ諸法實相の義なり。所以何んとなれば諸法義の中には諸法の名字なし。須菩提問ふ、「若し諸法畢竟空にして名字なくんば、云何んぞ菩薩は果報の六神通に住して、衆生の爲めに諸法を說くや。若し畢竟衆生無ければ、則ち法あることなけん」と。佛、須菩提を可して言はく、「是の如し。十八空を以ての故に、一切法は不可得なり。我・衆生・乃至知者・見者、乃至當に知るべし。佛、菩薩の皆な空なることを。と是の如く知り已つて、衆生の爲に是の空法を說く。若し衆生是れ有にして而も爲に空を說かば、是れ卽ち不可なり。衆生は空なるを以て、但だ顚倒に從つてのみ有るなり。是の故に、菩薩は空を失せずして而も爲に法を說く。不失とは、諸法皆な空、所說不空を作さざるなり。若し所說不空を以てせば則ち空相を失すと爲す。若し口に空を說いて而も心是れ有ならば、是れ亦た失と爲す。是の中に、佛自ら不二を說きたまへり。(そは)法相を壞せざるが故なり。是の事を明了にせんと欲して譬喩を說く。佛の化作する所の如きは、化人にして而も爲に持戒、布施、諸の功德を說法す。若し是の如きの方便を以て法を說くも、是れ則ち咎なし。則ち能く衆生を顚倒より拔出するなり。(そは)無縛無解の故なり。第一義の中には縛なく解なし。世諦の故に縛あり解あり。是の中に、佛自ら因緣を說きたまはく、色は不縛不解なり。何となれば、是の不縛不解の中には色相なきが故なり。乃至識も亦た是の如し。菩薩は是の如く、不住の法を用ての故に、空法の中に住して、衆生の爲に說法す。衆生は不可得、衆生及び一切法は不可得なるが故なり。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、所謂無

所有の法は無所有に住せず、譬へば、虛空は虛空に住せざるが如し。自性法は自性法に住せず、譬へば、火は火中に住せざるが如し。他性法は他性法に住せず、譬へば、水性の中に火性なきが如し。又た他性は不定の故なり。若し能く是の如く淸淨に法を說かば、是の菩薩は諸佛賢聖に於いて、則ち過あることなけん。何となれば、諸佛賢聖は一切法に著せず、法を說く者も亦た一切法に著せず、諸佛賢聖は畢竟空にして、皆な寂滅相を以て心の所行と爲せばなり。法を說く者も亦た是の如し。諸佛賢聖は三解脫門に入り、一切法の實性を得。所謂無餘涅槃なり。法を說く者は是の法に隨ふが故に咎なしと。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、諸佛賢聖は是の法を得已つて、衆生の爲に法を說き法性を轉ぜず、法性は空無相の故なりと。須菩提問ふ、「若し法性を轉ぜざれば、色等の諸法と法性とは異るや不や」と。佛、答へたまはく、「不なり」と。何となれば色等の諸法實相は卽ち是れ法性なるが故なり。佛の意は、菩薩は說法する時も亦た法性を壞せざるを以てなり。須菩提問ふ、「色等の諸法も亦た法性と異ならずんば、何を以ての故に但だ法性のみを貴ぶや」と。佛は、「色は法性と異らざるを以ての故なり」と。答へたまふを以て、故らに須菩提難ずらく、「若し異ならずんば云何んぞ分別して善惡白黑、須陀洹等の諸果有らん」と。佛答へたまはく、「色等の法は法性を離れずと雖も、世諦を以ての故に分別あり。第一義の中に於ては分別なし。何となれば第一義を得たる聖人は分別する所なく、有所得を聞いて喜ばず、無所得を聞いて憂ひず、空無相の證を得るが故なり。乃至微細の法すら尙ほ相を取らず、何に況んや、分別して善惡有らんや。未だ實相を得ざる者は、第一義を得んと欲するが故に分別する所あるなり」と。佛、是の中に自ら因緣を說きたまはく、「是の法は言說も無く、亦た生滅垢淨法もなしとは、所謂る畢竟空、無始空なればなり」と。

問うて曰はく、此の中に何を以てか但だ二空を說いて名けて法と爲すや。

答へて曰はく、一切の所有、若くは法、若くは衆生は、若し畢竟空なりと言はば、則ち諸法を破す。若し無始空なりと言はば則ち衆生を破す。此の二法を破し已れば、則ち一切法盡く破す。此の中、菩薩は衆生の爲に說法す。是の故に、二空を以て、二事を破す。餘空有りと雖も、畢竟空の甚深にして、畢く盡すに如かず。餘空は火の木を燒いて猶ほ灰盡あるが如く、畢竟空

は灰なく燼なし。有人の言はく、「若し十八空を說くも咎なし、略して說くが故に二空を說く」と。須菩提言さく、「若し世諦を以ての故に、分別して善惡白黑及び諸の聖果あらば、第一義の中に、凡夫人は應に須陀洹等の聖果有るべし。何となれば若し世諦を以てせば、虛妄中に分別して諸の賢聖あらんも、第一義の中には凡夫は應に賢聖と作るべければなり。須菩提は分別して實相と凡夫とを異となす。佛の言はく、「第一義は一相なり」と。是の故に須菩提言さく、「凡夫は是れ應に是れ聖人なるべし」と。爾の時、佛答へたまはく、「若し凡夫、分別して是れ第一義、是れ世諦なりと知らば、凡夫人は應に須陀洹等の諸の聖果あるべし。凡夫は實に道を知らざるを以て、道を分別するを知らず、道を行じ、道を修することを知らず、何に況んや道果を得んをや」と。佛の言はく、「聖人は能く是の分別を爲すが故に、是の聖果を說く」と。爾の時、須菩提は自ら失あることを知るが故に言はく、「無量無相無動の性中に、我れ云何にして相を取り無量の法を量らんと欲するや。云何にして强ひて凡夫の法を以て聖果と爲さんや」と。爾の時、佛語を受けて、道を行ずる者は果を得、道を行ぜざる者は果を得ざることを知る。是の故に佛に白さく、「道を修して果を得るや不や」と。佛の言はく「不なり」と。

問うて曰はく、佛は上に分別して道を修し、道果を得と說く。今云何なれば不なりと言ふや。

答へて曰はく、佛は先に非著心を說けり。今は須菩提は著心を以て問ひ、道中より果を出さんと欲すること、麻中より油を出すが如し。若し爾れば道と果とは同じく虛誑となる。是の故に不なりと言ふ。聽者は念を生ぜん「若し修して得ずんば、修せざれば當應に得べきや」と。是の故に佛の言はく、修するすら尙ほ得ず、何に況んや修せざるをや。譬へば、二人の到る所有らんと欲して、一は住して行かず、二は道を失せば二俱に到らざるが如し。若し道を修せざれば、尙ほ少許の攝心の樂すらなし、何に況んや道果をや。若し心に相を取り道を修せば、心に攝して禪定の樂有りと雖も、道果有ることなし。若し取相、著心せずして道を修せば、則ち道果あり。是の故に佛說きたまはく、「菩薩は般若波羅蜜を行じて、有爲無爲の性を分別せざるが故に、道果の差別あり」と。

爾の時、須菩提問ふ、「若し爾らば、佛は何を以ての故に、三結を斷じて須陀洹を得、是の如き等の分別有りと說くや」と。

佛反問を以て答へたまはく、汝が意に於て云何。汝は須陀洹果等を以て、是は有爲、是は無爲と爲すや」と。須菩提言さく、「是れ無爲なり」と。佛の言はく、「若し爾れば、無爲の中に差別ありや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」と。「若し分別なくんば、汝、云何なれば難を爲すや」と。又復また須菩提に問ふ、「若し善男子善女人、一切法の一相、謂ゆる無相に通達して、三解脫門の中に住し、涅槃を證するの時、是の時、法有りて若くは有爲、若くは無爲と分別するや不や」と。答へて言さく、「不なり」と。佛意は、唯だ是の心を眞實となす。餘は時に皆な虛誑なり。汝云何んぞ難を作すや。菩薩は般若波羅蜜を行じて、一切法を分別せず、內空等の諸空の中に住して、是れ大清淨なり。自ら著せず、亦た衆生に敎へて、所著なからしむ。謂ゆる檀波羅蜜、乃至一切種智なり。菩薩は道中に皆な敎へて、著せざらしむ。譬へば、佛の所化人の如きは、布施等を行じて、亦た布施等を分別せず、亦た布施等の法の果報を受けず、但だ衆生を利益し、度せんが爲の故なり。菩薩の心も亦た是の如し。何となれば、善く諸法の性に通達するが故なり。善く通達すれば、法性の相を取らず、亦た法性の中に住せず、法の性に於いて疑はず悶へずして、法を說き、罣なく、礙なく、遮なし。是れ則ち法性に通達するなり。

第七十九善達品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして菩薩は善く諸法の相に達するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「譬へば化人の婬怒癡を行ぜず、色乃至識を行ぜず、內外法を行ぜず、諸の煩惱結使を行ぜず、有漏法無漏法・世間法出世間法・有爲法無爲法を行ぜず、亦た四果もなきが如し。菩薩も亦た是の如く、是の事有ることなく、亦た是の法を分別せざる、是を善く諸法の相に達すと名く」。須菩提言さく、「世尊よ、化人は云何に修道あらん」。佛の言はく、「化人の修道は垢ならず、淨ならず、亦た五道生死にもあらず、須菩提よ、汝の意に於て云何。佛の所化人は、根本實事有りて、垢あり淨ありや不や」。須菩提言さく、「不なり、佛の所化人は、根本實事あることなく、亦た垢なく、亦た淨なく、亦た五道生死にもあらず」。「是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩の善く諸法の相に達するも亦た是の如し。」須菩提言さく、「世尊よ、一切の色は化の如くなるや不や。一切の受想行識は化の如くなるや不や」。佛の言はく、「一切の色は化の如く、一切の受想行識は化の如し」。「世尊よ、若し一切の色は化の如く、一切の受想行識は化の如く、一切法は化の如くんば、化人は色なく、受想行識なく、垢なく、淨なく、五道生死もなく、亦た解脫處もなし。菩薩は何等の功用かあらん。」佛、須菩提に告げたまはく、「汝の心に於て

云何。菩薩摩訶薩の本と菩薩道を行ずる時、頗し衆生ありて、地獄・餓鬼・畜生・人天中より解脱を得ることを見るや不や」。須菩提言さく、「不なり、世尊よ」。佛言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、衆生の三界より解脱を得るを見ず。何となれば、菩薩摩訶薩は、一切の法は幻の如く、化の如しと見知すればなり」。世尊よ、若し菩薩摩訶薩、一切諸法は幻の如く、化の如しと見知せば、何事の爲の故に、・六波羅蜜・四禪・四無量心・四無色定・三十七助道法を行じ、乃至大慈大悲・淨佛國土・成就衆生を行ずるや」。佛、須菩提に告げたまはく、「若し衆生自ら、諸法は幻の如く、化の如しと知らば、菩薩摩訶薩は終に阿僧祇劫に於て衆生の爲に、菩薩道を行ぜず。須菩提よ、衆生は自ら諸法の幻の如く、化の如くなるを知らざるを以てなり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、無量阿僧祇劫に於いて、六波羅蜜を行じ、衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は、夢の如く、響の如く、影の如く、焰の如く、幻の如く化の如くなれば、衆生は何處にありてか住し、菩薩は六波羅蜜を行じて、而も之を拔出せんや。」「須菩提よ、衆生は但だ名相虛妄憶想分別の中に住す。是の故に菩薩は般若波羅蜜を行じ、名相虛妄の中に於て衆生を拔出す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ名、何等が是れ相なるや」。佛の言はく、「是の名は强ひて假の施設と作す。所謂る此れ色、此れ受想行識、此れ男、此れ女、此れ大、此れ小、此れ地獄、此れ畜生、此れ餓鬼、此れ人、此れ天、此れ有爲、此れ無爲なり。此れ須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道なり、此れ佛道なり。須菩提よ、一切法を取る、是の故に名となす。一切の有爲法は、但だ名相あるのみ、凡夫愚人は、中に於て著を生ず。菩薩摩訶菩は、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、名字中に於て敎へて遠離せしめ、是の言を爲す、諸の衆生、是の名は但だ空名あるのみ。虛妄憶想分別中に生じて、汝等、虛妄憶想に著することなかれ。是のこと本來皆な無自性空なるが故に、智者の著せざる所なり」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生の爲に說法す。須菩提よ、是れを名となす。何等をか相となす。須菩提よ、二種の相あり。凡夫人所著の處なり。何等をか二となす。一には色相、二には無色相なり。須菩提よ、何等をか色相と名くる。諸の所有の色、若くは麁、若くは細、若くは好、若くは醜、皆な是れ空なり。此の空法の中に憶想分別し著心す。是を名づけて色相となす。何等か是れ無色相なるや。諸の無色法は、憶想分別し、著心取相するが故に煩惱を生ず。是を無色相と名づく。是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生をして、是の相著を遠離せしめ。無相法中に二法、所謂是れ相、是れ無相なりと墮せざらしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、衆生敎化して相を遠離し、無相性中に住せしむ」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は但だ名相あるのみなれば、云何にして菩薩は般若波羅蜜を行じて、能く自ら饒益し、亦た他人を敎へて善利を得しめ。云何にして菩薩は、諸地を具足し、一地より一地に至りて、衆生を敎化して三乘を得しむるや」と。佛、

須菩提に告げたまはく、「若し諸法の根本、定んで有にして、但だ名相のみあらざれば、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、自ら益すること能はず、亦た他人をも利益すること能はざらん。須菩提よ、諸法は根本の實事あることなく、但だ名相あるのみ。是の故に、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、能く禪波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。毘梨耶波羅蜜・羼提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜を(具足)す。無相なるが故なり。四禪那波羅蜜・四無量心波羅蜜・四無色定波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。四念處波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。乃至八聖道分波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。内空波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。乃至無法有法空波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。八背捨波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。九次第定波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。佛の十力波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。乃至十八不共法波羅蜜を具足す、無相なるが故なり。是の菩薩は無相なるが故に、自ら是の諸の善法を具足し、亦た他人を教化して善法を具足せしむ。無相なるが故なり。須菩提よ、若し諸法の相に當に實に毫釐許の如くなる者有らば、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、諸法の無相無憶念なることを知りて、阿耨多羅三藐三菩提を得、亦た衆生を教へて、無漏法を得しむこと能はず。何せとなれば、一切無漏法は無相無憶念なるが故なり。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、無漏法を以て衆生を利益す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は、無相無憶念なれば、云何なる數か是れ聲聞法、是れ辟支佛法、是れ菩薩法、是れ佛法なるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於て云何。無相法と聲聞法とは異れるや不や」。「不なり、世尊よ」。「無相法と辟支佛法・菩薩法・佛法とは異れるや不や」。「不なり、世尊よ」。佛、須菩提に告げたまはく、「無相の法は即ち是れ須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛法・菩薩法・佛法なりや」。須菩提言さく、「是の如し、世尊よ」。「須菩提よ、是の因緣を以ての故に、當に一切法は皆な是れ無相なりと知るべし。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の一切法の無相を學し、善法、所謂る六波羅蜜・四禪・四無量心・四無色定・四念處・乃至十八不共法を增益することを得。何となれば、菩薩は餘法を以て要となすこと、三解脫門、所謂空・無相・無作の如くならず。所以何んとなれば、一切善法皆な三解脫門に入ればなり。何となれば、一切法の自相空、是を空解脫門と名け、一切法の無相、是を無相解脫門と名け、一切法の無作無起相、是を無作解脫門と名くればなり。若し菩薩摩訶薩三解脫門を學せば、是の時、能く五陰の相を學し、能く十二入の相を學し、能く十八界の相を學し、能く四聖諦十二因緣法を學し、能く内空、外空、乃至無法有法空を學し、能く六波羅蜜、四念處、乃至八聖道分を學し、能く佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を學す」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、能く五受陰相を學するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、色の相を知り、色の生滅を知り、色の如を知る。云何に色の相を知るや。色は畢竟空にして、内分は分異り、虚にして實無きこと、譬へば、水沫の堅固なるなきが如くなるを知る。是を色の相を知ると爲す。云何に色の生滅を知るや。色の生ずる時、從りて來る所なく、去つて至る所なし。若し不來不去なれば、是を識の生滅相を知るとなす。云何に色の如を

知るや。是の色の如は生ぜず滅せず、來らず去らず、增せず減ぜず、垢ならず淨ならず、是を色の如を知ると爲す。須菩提よ、如の名、如の實は虛しからず。如の前後中も亦た爾なり、常にして異らず。是を色の如を知ると爲す。云何に受の相を知り、云何に受の生滅を知り、云何に受の如を知るや。菩薩は諸受の相、水中の泡の一起一滅するが如くなるを知る。是を受の相を知るとなす。受の生滅を知るとは、是の受は從て來る處なく、去つて到る處なき、是を受の生滅を知るとなす。受の如を知るとは、是の如は生ぜず滅せず、來らず去らず、增せず減ぜず、垢ならず淨ならず、是を受の如を知るとなす。云何に想の相を知り、云何に想の生滅を知り、云何に想の如を知るや。想の相を知るとは、是の想は焰水の不可得にして、而も妄に水想を生ずるが如し、是を想の相を知るとなす。想の生滅を知るとは、是の想は從つて來る所なく、去つて至る所なし。是を想の生滅を知るとなす。想の如を知るとは、諸の想の如に生ぜず滅せず、來らず去らず、增せず減ぜず、垢ならす淨ならず、實相に於て轉ぜず、是を想の如を知るとなす。云何に行の相を知り、云何に行の生滅を知り、云何に行の如を知る。行の相を知るとは、行は芭蕉の葉葉除却するが如く、堅實なることを得ず、是を行の相を知るとなす。行の生滅を知るとは、諸行の生ずるや、從つて來る所なく、去つて至る所なき、是を行の生滅を知るとなす。行の如を知るとは、諸行は生せず滅せず、來らず去らず、增さず減ぜず、垢ならず淨ならず、是を行の如を知るとなす。云何に識の相を知り、云何に識の生滅を知り、云何に識の如を知るや。識の相を知るとは、幻師の四種の兵を幻作するが如く、實の識あることなきも亦た是の如し、是を識の相を知るとなす。識の生滅を知るとは、是の識の生ずる時、從つて來る所なく、滅する時去る所なし、是を識の生滅を知るとなす。識の如を知るとは、識は生ぜず滅せず、來らず去らず、垢ならず淨ならず、增ぜず減ぜずと知る、是を識の如を知るとなす。云何に諸の入、眼の眼性空、乃至意の意性空、色の色性空、乃至法の法性空を知り、云何に眼界の眼界空、色の色界空、眼識の眼識界空、乃至意識界も亦た是の如しと知るや。云何に四聖諦を知るや。苦聖諦を知る時、二法を遠離して、苦聖諦の不二不別なることを知る、是を苦聖諦と名く。集滅道も亦た是の如し。云何に苦の如を知るや。苦聖諦即ち是れ如なり。如は即ち是れ苦聖諦なり。集滅道も亦た是の如し。云何に十二因緣を知るや。十二因緣の不生の相を知る、是を十二因緣を知ると名く」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、各各分別して諸法を知れば、將に色性を以て法性を壞し、乃至一切種智性もて法性を壞すること無きや」。佛、須菩提に告げたまはく、「若し法性の外に更に法あれば、應に法性を壞すべし。法性の外に法は得べからず、是の故に壞せず。何となれば、須菩提よ、佛及び佛及び佛弟子は法性の外に法の得べからざることを知るが故なり。法性の外に法有りと說くべからず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、應に法性を學すべし」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩、若し法性を學すれば、學する所なしとなすか」。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は法性を學すれば即ち一切法を學す。何となれば、一切法は即ち是れ法性なればなり」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因緣の故に

一切法即ち是れ法性なりや」。佛の言はく、「一切法は皆な無相無爲性の中に入る。是の因緣を以ての故に法性を學すれば、即ち一切法を學するなり」。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は即ち是れ法性なれば、菩薩摩訶薩は何を以てか、般若波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・羼提波羅蜜・尸羅波羅蜜・檀波羅蜜を學し、菩薩摩訶薩は、何を以てか、初禪・第二・第三・第四禪を學し、菩薩摩訶薩に、何を以てか、慈悲喜捨を學し、何を以てか、無邊虛空處・無邊色處・無所有所・非有想非無想處を學し、何を以てか、四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を學し、何を以てか、空・無相無作解脫門を學し、何を以てか、八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を學し、何を以てか、六神通を學し、何を以てか、三十二相、八十隨形好を學し、何を以てか、學して刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生じ、何を以てか、學して四天王天處・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天に生じ、何を以てか、學して梵天王住處・光音天・遍淨天・廣果天・無想定・淨居天に生じ、何を以てか、學して無邊空處に生じ、無邊識處に生じ、無所有處に生じ、非有想非無想處に生ぜん、何を以てか、初發意・第二・第三・第四・第五・第六・第七・第八・第九・第十地を學し、何を以てか、聲聞地・辟支佛地・菩薩位を學し、何を以てか、成就衆生淨佛國土を學し、何を以てか、諸の陀羅尼を學し、何を以てか、樂說法を學し、何を以てか、阿耨多羅三藐三菩提を學し、學し已つて一切種智を得、一切法を知るや。世尊よ、諸法の法性中には是の分別なし。世尊よ、將に菩薩は非道中に墮することなからんか。何となれば、世尊よ、法性の中に是の如きの分別なく、法性中に色なく、受想行識なく、諸の法性も、亦た色受想行識を遠離せず、色は即ち是れ法性、法性即ち是れ色なり。受想行識も亦た爾り。一切法も亦た是の如くなればなり」。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、色は即ち是れ法性、受想行識は即ち是れ法性なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、若の法性の外に法あることを見ば、阿耨多羅三藐三菩提を求めずと爲す。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、一切法性は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと知る。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切法は即ち是れ法性ありと知り已つて無名相の法を以て、名相を以て說く。所謂る是れ色なり。是れ受想行識なり、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。須菩提よ、譬へば、工なる幻師、若くは幻師の弟子が多人の處に立ちて、種種の形色・男女・象馬・端嚴・園林及び諸の廬館・流泉・浴池・衣服・臥具・香華・瓔珞・餚膳・飯食を幻作し、衆の妓樂を作して以て衆人を樂ましむるが如し。又復た人を幻作して、布施、若くは持戒忍辱精進禪定智慧を修せしめ、是の幻師は復た刹利の大姓、婆羅門居士の大家・四天王天處・須彌山・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天を幻作して、以て衆人に示す。復た梵衆天、乃至非有想非無想天を幻作し、又復た須陀洹・斯陀含・阿那含・辟支佛・菩薩摩訶薩の初發意より、檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜を行じ、初地を行じ、乃至十地を行じて、菩薩位に入り、神通に遊戲して、衆生を成就し佛國土を淨め、諸禪解脫三昧に遊戲し、佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲を行じて、佛身の三十二相・八十隨形好を具足するを幻作して、以て衆人に示す。是の中、無智の人は、「未曾有なり、是の人は多能にして巧に衆事を爲して衆人を娛樂せし

め、種種の形色乃至三十二相八十隨形好もて身佛を莊嚴す」と嘆ず。其の中、有智の士は思惟して言はく、「未曾有なり、是の中に實事有ることなし。而も無所有の法を以て、衆人を娛樂せしめ、形相あらしむ。事の事相なく、有の有相なし」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、法性を離れて法有るを見ず。般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生を得ずと雖も、而も自ら布施し、亦た人を敎へて布施せしめ、布施法を讃歎し、布施を行ずるものを歡喜し讃歎す。自ら持戒し、亦た人を敎へて持戒せしめ、自ら忍辱し、亦た人を敎へて忍辱せしめ、自ら精進し、亦た人を敎へて精進せしめ、自ら禪を行じ、亦た人を敎へて禪を行ぜしめ、自ら智慧を修し、亦た人を敎へて智慧を修せしめ、智慧を修する法を讃歎し、智慧を修するものを歡喜し讃歎す。自ら十善を行じ、亦た他を敎へて十善を行ぜしめ、十善を行ずる法を讃歎し、十善を行ずるものを歡喜し讃歎す。自ら五戒を受行し、亦た他人を敎へて五戒を受行せしめ、五戒の法を讃歎し、五戒を受行するものを歡喜し讃歎す。自ら八戒齋を受け、亦た他人を敎へて、八齋戒を受けしめ、八齋戒の法を讃歎し、八戒齋を行ずるものを讃歎し歡喜す。自ら初禪を行じ、乃至自ら第四禪を行じ、自ら慈悲喜捨を行じ、自ら無邊空處、乃至非有想處非無想處を行じ、亦た他人を敎へて行ぜしむ。自ら四念處乃至八聖道分を行じ、自ら三解脫門、佛の十力を行じ、乃至自ら十八不共法を行じ、亦た他人を敎へて十八不共法を行ぜしめ、十八不共法を讃歎し、十八不共法を行ずるものを歡喜し讃歎す。須菩提よ、若し法性前後中に異有らば、是の菩薩摩訶薩は、方便力を以て法性を示し、衆生を成就すること能はず。須菩提よ、法性の前後中に異なきを以て、是の故に菩薩は般若波羅蜜を行じ、衆生を利益せんが爲めの故に、菩薩道を行ずるなり」と。

【論】問うて曰はく、佛は品品の中に、諸法の相に通達するを說きたまへり。今須菩提は何を以てか更に問へるや。

答へて曰はく、是の般若波羅蜜には一定の相なし。無言說の故に、數數聞くと雖も猶ほ未だ具するに足らざるが是の故に更に問へり。譬へば犢子は大善母の美乳を飮むと雖も、猶ほ止まざるが如し。佛の大慈悲は猶ほ善母の如く、般若波羅蜜は美乳の如く、須菩提は犢子の如し。數諸法の相を聞くと雖も、猶ほ未だ厭足せざるなり。

復次に、唯だ佛の、一切智のみ、能く諸法實相に通達し、餘人は達すると雖も、究盡すること能はず。是の故に問へり。餘の菩薩は未だ作佛せず、云何んぞ能く通達せんや。

佛、譬喩を以て答へたまはく、「幻化の人の如きは、三毒、諸の煩惱、結使なく、心心數法なく、內外、有漏無漏の法中に攝せざる所、凡夫の法に墮せず、亦た聖果の中に墮せず。是は須陀洹等と言ふことを得ざるも、亦た能く他心の善惡を發し、爲す所の變化の事を必ず能く成就せしむ。是の變化は其の實は垢ならず淨ならず、六道の攝せざる所なり。菩薩の身も亦た是の

如し。三毒等の煩惱なく、是の心心數法は、皆な是れ先世の虛誑顚倒の法にして、因緣の生ずることを知るが故に、信ぜず隨逐せず、能く是の如く行ず。是を善く諸法の相に通達すと爲す。是の時、須菩提は能く空を知ると雖も、佛法を貴敬し尊重するを以て佛法を限量すること能はず、故に佛に問へり。「世尊よ、一切の色等の法は皆な空なること化の如きや」と。佛答へたまはく、「一切の色等の法は皆な化の如し。汝、佛法を貴重するが故に敢て空と言はず、我は一切智を以ての故に、能く諸法の空を說く。餘人は師子の力を貴ぶも、び師子は自ら其の力を貴ばざるが如し」と。爾の時に、須菩提言さく、「若し一切法は畢竟空にして、皆な化の如くならば、佛は何を以てか、種種に菩薩の功德を讚じ、菩薩に因るが故に、三惡道を斷じ、能く衆生を拔出し、涅槃を得せしむるや」と。佛反問したまはく、「須菩提よ、汝が意に於て云何。菩薩は本と菩薩道を行ずる時、定んで衆生の五道の中より拔出するもの有るを見るや不や」と。須菩提言さく、「無し」と。佛、其の心を可として、「是の如し、是の如し。何となれば、菩薩は無生法忍を得るの時は、一切法は幻の如く化の如しと知見すればなり」と。須菩提言さく、「若し爾れば菩薩は何事を以ての故に、六波羅蜜等を行ずるや」と。佛答へたまはく、「若し衆生自ら諸法は空にして夢の如く、幻の如しと知らば、菩薩は則ち功夫無けん」と。復次に、若し諸法決定して空相ならば、則ち菩薩は功夫なく、諸法を非實非空ならしめ、諸の語言の道を過ぎて、畢竟空にして寂滅相なり。衆生は是の事を知らざるが故に、吾我の心を生じ、惡罪業を起し、無量の苦を受く。是の故に菩薩は諸法實相を知り、大悲心を生ず。長者に子有り、盲にして毒を飮んとす。長者は其の必ず死するを知り、種種に方便を起し、遮つて飮ましめざるが如し。菩薩も亦た是の如く、是の衆生を見るに、顚倒にして明無く、盲の故に三毒を飮む。則ち大悲心を生ず。無量阿僧祇劫に於いて、六波羅蜜を修し、佛國土を淨め、衆生を敎化す」と。須菩提、是を聞き已りて、更に佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切の法は空にして根本なく、夢の如く幻等の如くならば、衆生は何の處に有つてか住し、而して菩薩は拔出するや」と。須菩提、意に謂へらく、「人の深泥に沒すれば、拔出することを得るが如し」と。佛答へたまはく、「衆生は但だ名相、虛誑、憶想分別の中に住するのみ。佛の意は、一切法の中には決定して實なる者無し、但だ凡夫は虛誑の故に著するのみ。人の闇中に、人に似たる物を見て、是を實人と謂ひて、畏怖を生ずるが如し。

又た悪狗の井に臨んで自ら其の影に吠ゆるに、水中に狗なく、但だ其の相のみあり、而るに悪心を生じて、井に投じて死するが如し。衆生も亦た是の如く、四大和合の故に名けて身と爲す。因緣生の識和合する故に動作語言す。凡夫の人は中に於て人相を起し、愛を生じ、恚を生じ、罪業を起して、三悪道に墮す。菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を憐愍して種種の因緣もて敎化し、空法を知らしめて之れを拔出し。是の言を作す、是の法は皆な畢竟空にして無所有なり、衆生は顚倒虛妄の故に、有に似如するを見ること、化の如く、幻の如く、乾闥婆城の如きも、實事有ることなし。唯だ人眼を誑惑するのみと。

復次に、一切の法は但だ名字の和合に從ひ、更に餘名あり、頭足腹背の和合の故に、假に名けて身と爲すが如く、髮眼耳鼻口皮骨の和合の故に、假に名けて頭と爲し、諸毛和合の故に、名けて髮と爲し、分分和合の故に、假に名けて毛と爲し、諸微塵和合の故に名けて毛分となし、亦た諸分を和合するが故に名けて微塵となすが如し。

問うて曰はく、微塵は第一微細の故に、分と作すことを得ず、分無きが故に和合なし。是れ則ち定法なり。是の故に、一切は空にして、定法あることなしと言ふことを得ず。

答へて曰はく、若し微塵是れ色なれば、則ち應に分あるべし。何となれば、一切の色は皆な虛空の中にあり、皆な十方あればなり。若し微塵是れ色なれば則ち十方の分あり。若し十方の分あれば、云何んぞ是れ極微ならん。若し汝の說くが如く、微塵は分なければ、則ち色に非ず。何となれば色相を出づるが故なり。又復た色を五情の得べきものに名く。若し微塵は五情の得る所にあらざれば、云何んぞ是れは色なりと知ることを得ん。是の故に、微塵は但だ虛名のみあり、眼見の麁色すら、尙ほ破して空ならしむべし、何に況んや不可見、不可觸をや。

問うて曰はく、微塵は細なるが故に、五情の得ること能はざる所ならんも、聖人が天眼を得れば則ち見ん。

答へて曰はく、天眼にして見ば、細なりと雖も、是れ色相なるが故に、應當に分あるべし。若し分なければ、則ち色にあらず。色に非ざれば、則ち天眼も見ず。是を以ての故に、天眼も亦た虛誑の妄見なり。是の故に、聖人は慧眼を以て、世間を觀じて則ち得道す。微塵は先に說くが如く、但だ名のみありて實なし。微塵は無きが故に、一切法は名字の和合なるが故に、更

に假名のみありて、實定あることなし。而るに衆生は妄に貪著を生じ、貪欲瞋恚の因緣の故に惡業を起し、無量阿僧祇劫、三惡道に在りて苦を受く。若し諸法は實定ならば、尙ほ貪欲瞋恚は罪の因緣を作すべからず。何に況はんや、虛誑にして無實なるをや。若し能く虛誑の名相を捨てて、空法に著せざれば、則ち涅槃常樂を受けん。

問うて曰はく、名と相とに何の差別ありや。

答へて曰はく、名は是れ衆物の字なり。熱する物の字を火と爲すが如し。相とは烟を見て是の火相と知るが如し。熱は是れ火の體なり。復次に、五衆和合の中の男女は是を名と爲し、身貌の男女を別つべき、是を相となすが如し。是の相を見るが故に、名字を作して、名けて男女となす。

問うて曰はく、若し爾らば、名と相とは異なることなけん。所以何となれば、相を見るが故に名を得、名を知るが故に相を得ればなり。

答へて曰はく、汝、我が說く所を解せざるか。先づ男女の貌を見て、然る後名けて男女と爲す、相は本たり名は末たり。又復た人の眼に色を見るが如し。偏に好む所の相を取りて著を生ずるも、餘人に於ては則ち然らず。其の能く染著の心を生ずるを以て、是を名けて相とす。復次に、此の中に、佛自ら名と相との分別を說きたまへり。名とは假の名、名を以て諸法を取る。經中に廣く說くが如し。

須菩提問ふ、「若し一切法は但だ名と相のみあらば、菩薩は云何んぞ自ら利し、人を利せん」と。佛答へたまはく、「若し諸法の根本が、定有ならば、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、自らを利し人を利すること能はさらん。何となれば、若し諸法の性が定んで實有ならば、卽ち是れ無生なればなり。何となれば、性は先きに定有なるが故なり。若し是の法、因緣の和合より生ぜば、卽ち是れ定性なし。若し性定有ならば、卽ち因緣の和合を須ゐず。若し爾れば卽ち無生なり。無生の故に無滅なり。無滅の故に罪福なし。無常を知るを以ての故に、則ち罪を捨て福を修す。若し常なれば、縛なく解なく、世間なく涅槃等なけん。是の故に、佛、須菩提に告げたまはく、「若し法は、定有にして但だ名相のみにあらずとせば、菩薩は般若波羅蜜を行じて自ら

利し人を利せず。禪波羅蜜等を行じて自を利し人を利せざらん。無相なるが故なり。是の菩薩は自ら是の善法を具足し、亦た善法を以て衆生を利益す。(そは)無相なるを以ての故なり。佛、須菩提に告げたまはく、「若し諸法當に毫釐の如き許りも實有ならば、菩薩は道場に坐する時、一切法の空・無相・無所有を觀じて、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ること能はざらん。亦た能く是の法を以て、衆生を利益すること能はざらん。何となれば、是の菩薩は、道場に坐する時、一切法の第一眞實を觀じて、若し少しも錯らば、應に阿耨多羅三藐三菩提を得べからず、亦た能く衆生の爲に、是の空・無相の法を說く能はざればなり。所以何んとなれば、法、若し定有ならば、佛は云何んぞ衆生を誑はして一切法は無漏・無相・無憶念とせん。

問うて曰はく、四諦の中の三諦は皆な有相なり。苦諦には則ち苦相あり、集諦は則ち集相あり、道諦には則ち道相あり、唯だ滅諦のみ無相なり。亦た是れは無相涅槃なりと憶念すること有り。汝は何を以てか、一切無漏の法は無相・無憶念なりと言ふや。

答へて曰はく、摩訶衍の法は聲聞法と異れり。摩訶衍の法中には、一切の無漏法は無相・無憶念なりと說く。

復次に、有相・有憶念は皆な是れ虛誑不實なり。若し虛誑不實なれば則ち是れ諸の煩惱漏る。云何んぞ是れ無漏ならん。

復次に、此の三諦は皆な滅諦に隨ふ。苦を見ては卽ち捨て、集を見ては卽ち斷じ、實定と言はず。道を見るは滅に趣くが爲の故なれば、亦た是の道の中に住せず、盡く是の[一]住を滅す。是の滅盡の法は無相無緣なり。云何んぞ憶念あらんや。憶念は皆な是れ相に緣じて法に著す。是の故に、無漏法は皆な無相・無憶念なり。

須菩提意へらく、「若し無漏の法是れ第一實にして、無相・無憶念ならば、一切の法性も亦た應に無相・無憶念なるべし。但だ凡夫は顚倒の故に相有り、憶念有るなり」と。是の故に、佛に問ふ、「若し一切の法は、無相・無憶念ならば、云何んぞ是れは聲聞法、是れは辟支佛法、是れは菩薩法、是れは佛法なりと數へん」と。佛、須菩提に反問したまはく、「三乘の法と無相の法とは、異なるや不や」と。須菩提答へて曰はく、「諸の煩惱滅すれば卽ち是れ斷なり。斷は卽ち是れ無爲法なり。亦た滅道諦は卽ち是れ無漏無相なりと知る。是の故に三乘は無相の法と異

【一】「住」。別本には「主」または「生」に作る。

らず」と言ふ。佛、復た問ひたまはく、「須陀洹乃至佛法は、即ち是れ無相の法なりや」。答へて言さく、「是れは是の因緣を以ての故に、當に知るべし、一切法は皆な是れ無相なることを」。「若し無相ならば、汝云何なれば難じて諸道ありと言ふや、正に無相なるを以ての故に、三乘の諸道あり」。佛の言はく、「若し菩薩能く是の如く無相の法を學せば、則ち能く諸善法、所謂る六波羅蜜、乃至十八不共法を增益せん。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、「菩薩は唯だ三解脫門に住し、餘法を以て要となさず」と。所以何んとなれば、三解脫門は是れ實法、餘の四念處等の法は實なりと雖も、皆な方便の說なればなり。三解脫門は涅槃に近づき、亦た能く一切の實善法を攝す。是の故に、菩薩は應に學すべしと說くなり。

問うて曰はく、若し菩薩、此の三解脫門を學すれば、即ち五衆、十二入、十八界等を學すとせば、是の三解脫門は、皆な空にして無相無分別なり。是の五衆の諸法は、皆な是れ有相有分別の法なり。云何んぞ三解脫門を學ぶが故に、是の餘法を學ぶや。

答へて曰はく、菩薩、是の三解脫門を學べば、則ち三界を出でて、三漏を盡すが故に、諸法の中に於いて、實智慧を得て、通ぜざる所なし。先來の五衆の中は、皆な虛妄邪行なり。今此の三解脫門を得るが故に正通達を得。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、「菩薩は此の三解脫門無相の法を行ずる時、色の生を知り、色の滅を知り、色の如を知る。乃至識も亦た爾なり」と。經中に廣く說くが如し。須菩提復た問ふ、「佛の言ふ所の如く、菩薩は色等の相を知り、色等の生を知り、色等の滅を知り色等の如を知る。若し是の如く分別せば、將に色性を無みし、法性を壞せん」と。佛答へたまはく、「若し法の法性より出づる者あらば、色性は應に法性を壞すべし。一切法の實相を名けて法性と爲す。是の故に一切法は皆な法性中に入る。色性の實相は即ち是れ法性にして同じく一性なり。云何んぞ色性、能く法性を壞せん」と。佛更に因緣を說きたまはく、「諸佛賢聖は、法性を出でて更に法有る者を見ず、得ざるが故に說かず。諸佛賢聖は最も信ずべくんば、菩薩は應に是の如く法性を學すべし」と。須菩提、佛に白さく、「若し菩薩法性を學せば、是れを學する所無しと爲す。所以何んとなれば、法性は無性なるが故なり」と。佛答へたまはく、「法性は無性なりとは、若し菩薩、法性を學せば一切法を學すと爲す。若し法性に當に別に性あるべく、若し無性是れ性なれば當に但だ法性を學して一切法を學せざるべし。今法性は實に別性なし、亦た無性も無きが故に、遍く一

切法を學す。但だ諸法實相は是れ法性なり。是の故に實相を得れば、則ち正しく遍く一切法を學するなり」と。

爾の時に須菩提、佛に白さく、「世尊よ、若し一切法は則ち是れ法性なれば、菩薩摩訶薩は何等を以ての故に、六波羅蜜乃至陀羅尼門を學し、何を以ての故に諸法實相卽ち是れ法性なるや。若し一切法卽ち是れ法性ならば、菩薩は更に何の求むる所かある。復次に、法性の中には、是の六波羅蜜、乃至陀羅尼を分別することなし。今菩薩、分別して是の法を行ぜば、將に顚倒の中に墮することなきや」。佛、須菩提の意を可して答へたまはく、「若し菩薩、法性を出でて法有りと見るとせば阿耨多羅三藐三菩提を求めざらん。何となれば、法性を出でて法有らば、是れ常顚倒なり。無明は轉じて實なからしむべからず。云何んぞ一切法の中に無明を斷じて作佛するを得ん。菩薩は一切法は卽ち是れ畢竟空、常寂滅の相なりと知り、戲論なく、名字なし。衆生を憐愍して、方便力を以てするの故に、名相を以て說く。謂ゆる「是れは色、是れは受想行識、乃至阿耨多羅三藐三菩提なり」となり。經中に說く所の幻喩の如し。幻師は卽ち是れ菩薩、幻法は卽ち是れ六波羅蜜等の諸法なり。是の諸法を行ずと雖も、著心なきこと、幻師の種種の物を幻作すと雖も、其の實なきを知りて、而も著せざるが如し。智者は是れ佛及び大菩薩無智者は凡夫人及び新發意なり。而して大に歡喜し未曾有なりと歎ず。菩薩は菩薩道を行じ、法性を出づと雖も、更に法有るを見ず、亦た一定の衆生あるを見ず。而も大に自身及び衆生を利益す。經中に說くが如し。是の菩薩は自ら布施等を行じ、亦た他人をして布施の法を讃歎せしめ、布施を行ずる者を歡喜し讃歎す。乃至十八不共法も亦た是の如し。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、「若し法性が、先無にして後有ならば、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざらん。亦た方便力を以て說くこと能はざらん。所以何んとなれば、若し法性は先無後有にして因緣より生ぜば、卽ち凡夫の共法と異なるなし。若し法性が先有後無ならば、衆生及び諸法は則ち斷滅に墮す。諸法性は先に空なるを以て中後も亦た爾なり。智慧力の故に空ならしむるに非ず。衆生及び諸法は、無餘涅槃に入る時を以て、乃ち空ずるにあらず、本より已來常に空なり。菩薩は衆生を敎へて、何を以てか其の實性を觀ぜずして而も顚倒に著するや。若し諸法は畢竟空性なりと觀ぜば、則ち本より已來常に空にして、今失する所なしと知る。是の如く、般若波羅蜜を行ずる菩薩は則ち能く衆生を裨利す」と。

卷の第九十

第八十實際品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し衆生は畢竟不可得ならば、菩薩は誰の爲めの故に、般若波羅蜜を行ずるや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩は實際の爲めの故に、般若波羅蜜を行ず。須菩提よ、實際と衆生際と異ならば、菩薩は般若波羅蜜を行ぜず。須菩提よ、實際と衆生際とは異ならず。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、衆生を利益せんが爲めの故に、般若波羅蜜を行ず。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、實際の法を壞せざるを以て、衆生を實際の中に於て立つ。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し實際は即ち是れ衆生際なれば、菩薩は即ち實際を實際に於て建立すと爲す。世尊よ、若し實際を實際に於て建立せば、即ち自性を自性に於て建立すと爲す。世尊よ、自性は自性に於て建立することを得ず。世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を實際に於て建立するや。」佛、須菩提に告げたまはく、「實際は實際に於て建立すべからず。自性は自性に於て建立すべからず。須菩提よ今、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に衆生を實際に於て建立す。實際も亦た衆生際と異ならず、實際と衆生際とは無二無別なるなり。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ諸の菩薩摩訶薩の方便力にして、是の方便力を用ひて、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を實際に於て建立するも、亦た實際の相を壞せざるや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生を布施に於て建立し已れば、布施の先後際の[一]相空なることを說いて是の言を爲す、是の如きの布施は前際空なり、後際空なり、中際も亦た空なり、施者も亦た空なり、施報も亦た空なり、受者も亦た空なりと。諸の善男子善女人、是の一切法は實際の中に得べからず。汝等、布施の異、施者の異、施報の異・受者の念を念ずること莫れ。若し汝等布施異・施者異・施法異・受者異を念ぜざれば、是の時、布施は善く甘露味を取り、甘露味の果を得。汝等善男子よ、是の布施を以ての故に、色に著すること莫れ。受想行識に著すること莫れ。何となれば、是れ布施は布施相空、施者は施者空、施報は施報空、受者は受者空なればなり。空中には布施も得べからず、施者も得べからず、施報も得べからず、受者も得べからざるなり。何となれば、是の諸法は畢竟じて自性空なるが故なり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生を教へて持戒せしめ、衆生に語つて言はく、汝善男子よ、殺生法を除捨し、乃至邪見（法）を除捨せよ。何となれば、善男子よ、汝の分別する所の法の如く、是の諸法には是の如きの性無ければなり。汝善男子、當に諦かに思惟すべし、何等

【一】「空」。別本には「相」に作る。

か是れ衆生にして命を奪はんと欲し、何等の物を用てか命を奪はん。乃至邪見も亦た是の如しと。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如きの方便力もて衆生を成就す。『是の菩薩摩訶薩は、即ち衆生の爲めに布施持戒の果報を說くも、是の布施持戒の果報は自性空なり。布施持戒の果報の自性空なることを知り已りて是の中に著せず、著せざるが故に心散ぜずして能く智慧を生じ、是の智慧を以て一切結使の煩惱を斷じて無餘涅槃に入る。是れ世俗の報にして第一實義にあらず。』何となれば、空中には滅することあることなく、亦た滅せしむるものもなし。諸法は畢竟空にして、即ち是れ涅槃なればなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生の瞋恚惱心を見て教へて言はく、汝善男子よ、來りて忍辱を修行せよ。忍辱を爲す人は當に忍辱を樂しむべし。汝の瞋る所のものは自性空なるが故なり。『汝來れ、善男子よ、是の如く思惟せよ、我れ何の法中に於てか瞋る、誰か瞋者なる、瞋る所の者は誰ぞ。是の法は皆な空なり、是は性空の法なり、空ならざる時はなし。是の空は諸佛の作にあらず、辟支佛・聲聞の作にあらず、菩薩摩訶薩の作にあらず、諸天・鬼神・龍王・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽等に非ず、四天王天にあらず、乃至他化自在天にあらず、梵衆天にあらず、乃至淨居天にあらず、無邊空處・乃至非有想非無想處諸天の諸作に非ずと。汝當に斯の如く思惟すべし、誰か瞋り、誰か瞋者なる。何等か是れ瞋事なる。是の一切法は性空なり、性空法中に瞋る所有るなしと。是の如く須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是の因緣法を以て、衆生を性空に於て建立し、次第に、漸漸に示教利喜して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。是れ世俗の法にして、第一實義にはあらず。何となれば、是の性空の中には得者あることなく、得法あることなく、得處有ることなければなり。須菩提よ、是れを實際性空の法と名づく。菩薩摩訶薩は衆生の爲めの故に、是の法を行ずるも、衆生は亦た得べからず。何を以ての故に。一切の法は衆生の相を離るればなり。』

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、教へて身精進・心精進ならしめて、是の言を爲す、諸の善男子よ、諸法性空の中に懈怠の法なく、懈怠の者なく、懈怠の事なしと。是の一切の法性皆な空にして、性空に過ぎたる者なければ、汝等、身精進・心精進を生じ、善法に生ぜんが爲の故に、懈怠すること莫れ。善男子よ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは諸の禪定解脫三昧、若くは四念處乃至八聖道分、若くは空解脫門、無相無作解脫門、乃至十八不共法中に懈怠すること莫れ。諸の善男子よ、是の一切法性空の中に當に無礙相を知るべし。無礙法の中には懈怠者なく懈怠法なし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を教へて性空に住し、二法に墮せざらしむ。何となれば、是の性空には、二なく別なきが故なり。是れ無二法なれば、則ち瞋るべき處なし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は性空般若波羅蜜を行ずる時、衆生を教へて精進せしめ、是の言を爲す、諸の善男子よ、勸めて精進せよ、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、若くは精進、若くは禪定、若くは智慧、若くは禪定解脫三昧、若くは四念處乃至八聖道分、

若くは空解脫門無相無作解脫門、若くは佛の十力、若くは四無所畏、若くは四無礙智、若くは十八不共法、若くは大慈大悲、是の諸法(に於て)、汝等二相を念ずること莫れ。何となれば、是の法性は皆な空にして、是の性空の法は應に二相を用つて念ずべからざればなり。應に不二相を用つて念ずべからざればなりと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生を成就し、衆生を成就し已りて、次第に敎へて須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得せしめ、菩薩位に入りて、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生の亂心するを見て、方便力を以て、衆生を利益せんが爲めの故に、是の言を爲す、諸の善男子よ、當に禪定を修すべし。汝亂相を生ずることなく、當に一心を生ずべし。何となれば、是の法性は皆な空にして、性空の中には、法の若くは亂、若くは一心として、得べきものあることなければなり。」汝等是の三昧に住して、所有る作業、若くは身、若くは口、若くは意に、若くは布施し、若くは持戒し、若くは忍辱を行じ、若くは勤めて精進し、若くは禪定を行じ、若くは智慧を修し、若くは四念處を行じ、乃至若くは八聖道分を行じ、若くは諸解脫次第定を行じ、若くは佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、三十二相、八十隨形好を行じ、若くは聲聞道、若くは辟支佛道、若くは菩薩道、若くは佛道、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、若くは一切種智、若くは成就衆生、若くは淨佛國土、汝等皆な當應に所願に隨つて得べし。性空を行ずるが故なり。是の如く、須菩提よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、方便力を以て、衆生を利益せんが爲めの故に、初發意より終に懈廢せず。常に善法を求めて衆生を利益して、佛國土に至りて諸佛を供養し、諸佛に從つて法を聞き、捨身し、受身し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、遂に忘失せざれば、是の菩薩は常に諸の陀羅尼を得て、諸根具足す。謂ゆる身根語根意根なり。何を以ての故に、是の菩薩摩訶薩は常に一切種智を修し、一切種智を修するが故に、一切の諸道皆な修す。若くは聲聞道、若くは辟支佛道、若くは菩薩道、若くは菩薩の神通道なり。神通道を行じて、菩薩は常に衆生を利益し、終に忘失せず。是の菩薩は報得神通に住して、衆生を利益し、生死五道に入るも、終に耗減せざればなり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて性空に住し、禪定を以て衆生を利益す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、性空に住し、方便力を以ての故に、衆生を利益して是の言を爲す。「汝等諸の善男子よ、一切法の性空を觀ぜよ。善男子よ、汝等當に諸業の、若くは身業、若くは口業、若くは意業をなして、甘露味を取り、甘露果を得べし。性空の中には法として退する有ることなし。何となれば、性空は退せず、亦た退するもの無ければなり。性空は法にもあらず、亦た非法にもあらざるを以て、無所有法の中に於て、云何が當に退することあるべけん」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、是の如く衆生を敎へて、常に懈廢せざらしむ。是の菩薩は自ら十善を行じ、亦た他人をも敎へて十善を行ぜしむ。五戒八戒の成就も亦た是の如し。自ら初禪を行じ、亦た他人を敎へて初禪を行ぜしめ、乃至第四禪をも亦た是の如くす。常に自ら慈心を行じ、亦た他を敎

へて慈心を行ぜしめ、乃至亦た捨心も是の如くす。自ら無邊空處を行じ、亦た他人をも教へて無邊空處を行ぜしめ、乃至非有想非無想處も亦た是の如くす。自ら四念處を行じ、亦た他人をも教へて四念處をも行ぜしめ、乃至八聖道分、佛の十力、乃至八十隨形好も亦た是の如くす。自ら須陀洹果の中に於て智慧を生ずるも亦た是の中に住せず、亦た他人をも教へて須陀洹果を得せしめ、乃至阿羅漢も亦た是の如くす。自ら辟支佛道の中に於て智慧を生ずるも亦た是の中に住せず、亦た他人をも教へて辟支佛道を得せしむ。自ら阿耨多羅三藐三菩提を生じ、亦た他人をも教へて、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、方便力の故、遂に懈怠せざるなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法の性常に空なれば、常空の中に衆生は得べからず、法・非法も亦た得べからず。菩薩摩訶薩は云何にして一切種智を求めん。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、諸法の性皆な空なれば、空中に衆生得べからず、法非法も亦た得べからざるなり。須菩提よ、若し一切法の性空ならずば、菩薩摩訶薩は性空に依りて、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、衆生の爲めに性空の法を說かざらん。須菩提よ、色は性空、受想行識は性空なれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、五陰の性空の法を說き、十二入、十八界性空の法を說き、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分の性空の法を說き、三解脫門・八背捨・九次第定・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法・大慈大悲・三十二相・八十隨形好・性空の法を說き、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・一切種智を說き、煩惱を斷し、性空の法を習ふ。須菩提よ、若し內空の性空ならず、外空、乃至無法有法空の性空ならずば、卽ち空性を壞す。是の性空なれば、不常不斷なり。何となれば、是の性空なれば住處なく、亦た從つて來る所なく、亦た從つて去る所もなければなり。須菩提よ、是を法の住相と名く。是の中に法なく、聚無く、散なく、增なく、減なく、生なく、滅なく、垢なく、淨なし。是を諸法の相となす。菩薩摩訶薩は此の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、法として發する所あるを見ず、無礙無住なり。是れを法の住相と名く。是の菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる所、一切法の性空なるを見、阿耨多羅三藐三菩提を轉ぜず。何となれば、是の菩薩は、法の能く障礙するもの有るを見ず、當に何處にか疑を生ずべけん。是れを阿耨多羅三藐三菩提と名く。性空なれば衆生を得ず、我を得ず、人を得ず、壽を得ず、命を得ず、乃至知者、見者を得ず。性空の中には色は得べからず、受想行識は得べからず、乃至八十隨形好は得べからず。須菩提よ、譬へば佛が四衆、(卽ち)比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を化作して、常に是の諸衆の爲に法を說いて、千萬億劫斷ぜざるが如し。」

佛須菩提に告げたまはく、「此の諸の化衆は、當に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得、阿耨多羅三藐三菩提の記を得べきや不や」。須菩提言さく、「不なり、世尊よ、何となれば、是の諸の化衆は、根本實事有ることなきが故なり。一切諸法も性空にして、亦た根本實事なし。何等か此の衆生は、須陀洹果、乃至阿羅漢果を得、阿耨多羅三藐三菩提の記を得ん。」「須菩提よ、菩薩摩訶薩も亦た是の

如し。衆生の爲に性空の法を説くも、是の衆生は實に得べからず。衆生の顚倒に墮するを以ての故に、衆生を拔いて不顚倒に住せしむ。顚倒に卽ち是れ無顚倒なり。顚倒不顚倒は一相なりと雖も、而も多く顚倒し、少なく顚倒せず。無顚倒處の中には、卽ち我なく、衆生無く、乃至知者見者なし。無顚倒處の中には、亦た色なく、受想行識無く、十二入なく、乃至阿耨多羅三藐三菩提もなし。是れを諸法の性空と爲く。菩薩摩訶薩は是の中に住して、般若波羅蜜を行ずる時、衆生の相顚倒中に於て衆生を拔出す。謂ゆる無衆生を有衆生の相中より拔出し、乃至知者、見者相中より拔出し、色なき色相中、受想行識なき受想行識相中より衆生を拔出す。十二入、十八界、乃至一切の有漏も亦た是の如し。須菩提よ、亦た諸の無漏法、所謂る、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分有り。是の如き等の法は、無漏法なりと雖も、亦た第一義相に如かず。第一義相とは、無作・無爲・無生・無相・無説なり。是れを第一義と名づけ、亦た性空と名づけ、亦た諸佛の道とも名く。是の中に衆生を得ず、乃至知者見者を得ず、色受想行識を得ず、乃至八十隨形好を得ず。何となれば、菩薩摩訶薩は道法の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提心を求むるにあらず。諸法實相性空の爲めの故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む、是の性空の前際も亦た是れ性空なり、後際も亦た是れ性空なり。中際も亦た是れ性空なり。常に性空にして、性空ならざる時は無ければなり。菩薩摩訶薩は是の性空般若波羅蜜を行じて、衆生の衆生相に著するを拔出せんと欲するが故に、道種智を求む。道種智を求むる時、遍く一切道、若くは聲聞道、若くは辟支佛道、若くは菩薩道を行ず。是の菩薩は、一切道を具足し、衆生を邪想著より拔出し、佛國土を淨め已りて、其の壽命に隨つて阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、過去十方の諸佛の道は、性空なり。未來現在十方の諸佛の道も亦た性空なり。性空を離れては世間に道なく道果なし。要ず諸佛に親近するに從り、此の諸法の性空なるを聞き、是の法を行じて、薩婆若を失せざれ。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、甚だ希有なり、諸の菩薩摩訶薩有つて、此の性空の法を行ずるも、亦た性空の相を壞せず。所謂る、色と性空と異なり、受想行識と性空と異なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提と性空と異るとは、世尊よ、但だ色は卽ち是れ性空なり。性空は卽ち是れ色なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提は是れ性空なり、性空は卽ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり」。佛、須菩提に告げたまはく、是の如し、是の如し、若し色と性空と異り、若し受想行識と性空と異り、乃至阿耨多羅三藐三菩提と性空と異ならば、菩薩摩訶薩は一切種智を得ること能はず。須菩提よ、今、色は性空に異らず、乃至阿耨多羅三藐三菩提は性空に異らず、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切法の性空なることを知り、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何となれば、此の中に法の若くは實、若くは常有ることなければなり。但だ凡夫は色受想行識に著し、凡夫は色相を取り、受相行識相を取り、我心ありて内外の物に著するが故に、後身の色受想行識を受く。是の故に、生老病死の愁憂苦惱を脱することを得ずして五道に往來す。是の事を以ての故に、菩薩摩訶薩は、性空波羅蜜を行じて、色等の諸法相の、若くは空、若くは不空なるを壞せず。何となれば、是の色性空相は色を壞せず、所謂る是の色是れ空なればなり。譬へ

ば虚空は虚空を壊せず、內虛空は外虛空を壊せず、外虛空は內虛空を壊せざるが如し。是の如く、須菩提よ、色は色の苦相を壊せず、色の空相は色を壊せざるなり。何となれば、是の二法は性あることなければ、能く壊する所あらんや。(所謂る是れ空なり、是れ非空なりと)。乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦た是の如し。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切の法空にして無分別ならば、云何にして菩薩摩訶薩は初發意より已來、是の願を爲さん。我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。世尊よ、若し一切の法分別するなければ、云何んぞ菩薩は發心して、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと言ふや。」「世尊よ、若し諸法を分別せば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し、若し菩薩摩訶薩、二相を行ずれば、阿耨多羅三藐三菩提なし。若し分別して二分と作さば、阿耨多羅三藐三菩提なし。若し諸法を二とせず、分別せざれば、則ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。菩提は是れ不二相、不壊相なり。須菩提よ、是の菩提は色の中に行ぜず、受想行識の中に行ぜず、乃至菩提は亦た菩提の中に行ぜざるなり。何となれば、色は即ち是れ菩提なり、菩薩は即ち是れ色にして二ならず、分別すべからざればなり。乃至十八不共法も亦た是の如し。是の菩提は非取の故に行じ、非捨の故に行ず。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、菩提を非取の故に行じ、非捨の故に行ぜば、菩薩摩訶薩は菩提を何處に行ずるや」。佛、須菩提に告げたまはく、「汝の意に於て云何。佛の所化人の如きは何處にありて行ずるや。若くは取中に行じ、若くは捨中に行ずるや。」須菩提言さく、「世尊よ、非取の中に行じ、非捨の中に行ずるなり。」佛の言はく、「菩薩摩訶薩の菩提も亦た是の如く、非取中に行じ、非捨中に行ず。須菩提よ、汝の意に於て云何。阿羅漢の夢中の菩提は何處にか行ずるや。若くは取中に行じ、若くは捨中に行ずるや。」「不なり、世尊よ、非取中に行じ、非捨中に行ずるなり。世尊よ、阿羅漢は畢竟不眠なり。云何にして夢中に菩提を、若くは取中に行じ、若くは捨中に行ぜん」。「須菩提よ、菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提も亦た是の如く、非取中に行じ、非捨中に行じ、所謂る色の中に行じ、乃至一切種智の中に行ずるなり。」「世尊よ、將に菩薩摩訶薩は、十地を行ぜず、六波羅蜜を行ぜず、三十七助道法を行ぜず、十四空を行ぜず、諸の禪定解脫三昧を行ぜず、佛の十力、乃至八十隨形好を行ぜずんば、五神通に住し、佛國土を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得ること無けん。」

佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、今、菩薩は菩提に處行なしと雖も、若し十地六波羅蜜、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分、空無相無作解脫、佛の十力、乃至八十隨好を具足せず。常捨法、不錯謬法、是の諸の法を具足せざれば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。此の菩薩摩訶薩は、色相中に住し、受想行識相中に住し、乃至阿耨多羅三藐三菩提相中に住して、能く十地を具足し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。是の相は常に寂滅にして、法として能く增し、能く減じ、能く生じ、能く滅し、能く垢き、能く淨く、能く得道し、能く得果するあることなし。世諦の法なるが故に、菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得るは

第一實義にあらず。何となれば、第一義中には色有ることなく、乃至阿耨多羅三藐三菩提あることなく、亦た阿耨多羅三藐三菩提を行ずるものなければなり。是の一切の法は皆な世諦を以ての故に、第一義にはあらずと說く。須菩提よ、菩薩摩訶薩は初發意より已來、阿耨多羅三藐三菩提を行ずるも、菩提も亦た增さず、衆生も亦た減ぜず。菩薩も亦た增減なし。須菩提よ、汝の意に於て云何。若し人初めて得道する時、無間三昧に住して、無漏根を得、若くは須陀洹果、若くは斯陀含果、若くは阿那含果、阿羅漢果を成就するに、汝は爾の時に若くは夢、若くは心、若くは道、若くは道果に得る所、有りとするや不や。」

須菩提言さく、「世尊よ、得ざるなり。」佛、須菩提に告げたまはく、「云何にして當に阿羅漢果を得たる者を知るべき。」「世尊よ、世諦の法なるが故に、分別して阿羅漢道と名く」。佛の須菩提に語りたまはく、「世諦の故に說いて菩薩と名け、說いて色受想行識乃至一切種智と名く。是の菩提の中には、法の若くは增、若くは減を得べきなし。(そは)諸法の性空なるを以ての故なり。諸法性空尙ほ得べからず、何に況んや初地心乃至十地心・六波羅蜜・三十七助道法・空三昧・無相無作三昧・乃至一切の佛法を得んや。當に所得あらば、是の處あることなかるべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を行じ、阿耨多羅三藐三菩提の法を得て衆生を利益するなり。

【論】釋して曰はく、上の品中に、須菩提は種種の因緣もて難ぜり。若し諸法空ならば、云何んぞ五道の生死、善不善の法あらんと。今は衆生を難じて是の言を作す、「世尊よ、若し衆生は畢竟不可得ならば、菩薩は誰が爲の故に般若を行ずるや」と。先に法を難じて衆生の爲にし、今は衆生を難じて法の爲にするが故なり。佛答へたまはく、「實際の爲の故に、菩薩は般若波羅蜜を行ず」と。須菩提意に謂へらく、「菩薩は衆生を度せんが爲の故に般若波羅蜜を行ず」と。佛意ひたまはく、「衆生は假名にして虛誑、畢竟不可得なり。菩薩は一切實法の爲の故に、般若波羅蜜を行ず。實法は卽ち是れ實際なり」と。

問うて曰はく、一切の菩薩は、衆生の苦惱を見て、衆生を度せんが爲の故に大悲心を發す。今何を以てか實際の爲にと言ふや。

答へて曰はく、初發意の菩薩は、但だ衆生の苦を滅せんが爲の故に大悲心を發す。苦とは、所謂る老病死等、及び身心の衰惱なり。云何にして是の苦を滅せんと、苦の因緣を尋ぬるに生に由るが故なり。佛、十二因緣の中に說きたまへるが如く、何の因緣の故に老病死ありや。生あるを以ての故なり。

問うて曰はく、一切衆生皆な生の因緣は是れ苦なりと知る、菩薩に何の奇特か有らん。

答へて曰はく、衆生は生に由つて苦あることを知らず、若し苦に遭ふの時は、但だ人を怨恨し、自ら將適せざれば、初めは生を怨まず。是を以ての故に、結使を增長し、重ねて生法を堪して、眞實の苦因を知らざるなり。人あり鞭杖刀兵、諸の愁惱の苦は無くとも、而も死苦はあり、此の死は何の所よりか來る。生に從つて而も有るなり。復次に、鞭杖刀兵の愁惱は皆な生に由るが故にあり。餘法には或は苦あり或は苦なし。是の生法には必ず定んで苦有り、正に、大智及び諸天をして、生有らしめば必ず死あり、死あれば必ず苦あり。是の故に、生は定で是れ苦の本なるを知る。草木は生有るが故に必ず焚燒すべく若し當に生ぜずんば、猛火大風ありと雖も、燒害する所なきが如し。菩薩は既に苦の因緣を得て、復た生の因緣を推すなり。

生の因緣とは有なり。有に三種あり、欲有と色有と無色有となり。是の三有に著して善惡業を起す、是れ生の因なり。有の因は四種の取なり。取の因緣とは愛等の諸煩惱なり。小なる者は能く未だ業を起さざる故に名けて愛となし、增長して能く業を起すが故に名けて取と爲す。欲取、見取、戒取、我語取、是の四事に取著するが故に能く種種の業を起す。愛の因緣は三種の受なり。受の因緣は眼等の六種の觸なり。觸は受等の諸の心數法に名く。情塵識の三事和合するが故に心中に受等の心數法を生ず。根本に三事和合の故に觸を生ずと雖も、六情の依止住處と爲すが故に但だ六入を說く。六入の因緣は名色なり。六入は卽ち是れ名色の分なりと雖も、成就を六入と名け、未成就を名色と名く。色成就を五入と名け、名成就を一入と名く。是の胎中の時の、因緣次第を名色と名く。名色の因緣は是れ識なり。若し識胎に入らざれば、胎は初めに則ち爛壞す。識を中陰と名く、中の五衆は是の五衆は細なるが故に但だ名けて識と爲す。若し識入らざるも胎成ずとせば、一切和合の時の如き皆な應に胎を成ずべし。

問うて曰はく、識は何の因緣の故に胎に入るや。

答へて曰はく、行の因緣なり。行は卽ち是れ過去三種の業なり。業は識を將ゐて胎に入らしむ。風吹きて焔を絕ちて、空中に去れば焔は則ち風に依止するが如し。先世に人身と作る時、六識を然(もや)すが故に命終の時、業は識を將ゐて胎に入らしむ。

問うて曰はく、上に業を何を以てか有と名け、今は業を何を以てか行と名くるや。

答へて曰はく、上は是れ今世の業なり、未來の有の爲の故に名けて有と爲す。今の業は過去世に已に滅盡して、但だ名のみあるを名けて行と爲す。(天竺の語にては刪迦羅。秦には行と言ふ)是の行の因緣を無明と名づく。一切の煩惱は、是れ過去の業因緣なりと雖も、無明は是れ根本なるが故に但だ無明と名く。今世現在は愛取に著すること多きが故に愛取の名を受け、過去世の中には是れ疑邪見の處の故に但だ無明と名く。今一切の苦惱の根本を得るは是れ無明なり。

問うて曰はく、無始の生死は展轉して甚だ多し。何を以てか、止だ無明に齊るや。

答へて曰はく、此の事は先に已に答へたり。菩薩思惟して、人を苦より脫することを得んが爲の故に、苦の因緣を求むるに、衆生の過去現在の老死等の苦は除くことを得べからず、未來世の老死苦を除かんが爲に、相續を斷じて復た生ぜしめず。良醫が過去の病は治すべからず、現在の病も亦た治すべからず、服藥は但だ能く應に起るべきの病を治し、其の冷熱を破して、復た起らしめざるが如し。又火を失して舍を燒くに、已に過ぎ去れる火の爲の故に滅するを勸めず、現在の火の爲の故に滅するを勸めず、但だ未來の火をして更に燒かしめざらんが爲の故に滅するをむるが如し。良醫、滅火に人勸めて方便するも亦た虛からず。菩薩の衆生の苦惱を滅するも亦た是の如し。過去の苦已に滅すれば亦た能く現在に苦惱する所なし。先世の因緣は成就せるが故に却くべからず。但だ未來世の老死等の苦の因緣を破するが故に、是の生法の老死等の苦を破し、自然に永く滅す。是の故に菩薩は未來世の老死等の苦の因緣生を滅せんと欲して、現在に有等の八因緣を得。一には有漏業と名け、二には現在世の諸の煩惱、所謂る四取一愛に名く。是の二種の煩惱は二の心數法より生ず。所謂る受と及び觸となり。觸は能く一切の心數法を生じ、受より前に生ずるが故に名を得。觸は是れ受の因緣なり、受は能く三毒を生ずと雖も、一切衆生は是の舊煩惱を愛す。觸の因緣は是れ內の六入なり、先に說くが如し。外の六入ありと雖も、內の六入なきが故に、觸等の心數法は生ぜざるなり。是の故に內の六入の名を得。名色は是れ六入の因緣なり、此の中に說くが如く、初めて胎に入るの識は是れ名色の因緣なり。識と名色とは胎中に在り、此の中に六入有りと雖も、未だ成就せず、未だ用ふべからざるが故に、未だ名字を得ず。既

に生ぜる嬰孩は未だ所作あること能はず。但だ六入のみあり。轉た大にして六觸あり。小兒の火を蹈み、氷を履むも、但だ觸あるのみにして、未だ苦樂を知らず、轉た大にして苦樂を受くるも、未だ深く愛著せざるが如し。小兒は瞋ると雖も未だ殺等の惡業を起すこと能はず、喜ぶと雖も未だ施等の善業を起すこと能はざるが如し。年、成人に及んで苦を得ては恚を生じ、樂を得ては愛を生ず。樂具を求むるが故に、欲等の四取を取り、取る時能く善惡の業を起す。若し先に一世の無明業の因緣を知れば、則ち億萬世も知るべし。譬へば、現在の火の熱きが如く、過去未來の火も亦た是の如し。若し無明の因緣を、更に其の本を求むれば則ち無窮にして、即ち邊見に墮し、涅槃の道を失せん。是の故に求むべからず。若し更に求めなば則ち戲論に墮せん。是れ佛法にあらず。菩薩は無明を斷ぜんと欲するが故に無明の體相を求む。求むる時は即ち畢竟空に入る。何となれば佛經に「無明の相は內法も知らず、外法も知らず、內外法を知らず」と說けばなり。菩薩は內空を以て內法を觀ずるに內法は即ち空なり、外空を以て外法を觀ずるに外法は即ち空なり、內外空を以て內外法を觀ずるに內外法は即ち空なり。是の如等の、一切は是れ無明の相なり。先品に德女經中に無明を破するを廣く說けるが如し。

復次に、菩薩は無明の體を求むれば、即時に是れ明なり。所謂る諸法實相にして名けて實際と爲す。諸法を觀ずるに如幻如化なり。衆生は顚倒因緣の故に諸煩惱を起し、惡罪業を作りて、五道を輪轉し生死の苦を受く。譬へば、蠶の糸を出して、自ら裹み縛し、沸湯火炙に入るが如く、凡夫衆生も亦た是の如し。初めに生ずる時未だ諸の煩惱あらず、後に自ら貪欲瞋恚等の諸の煩惱を生ず。是の煩惱の因緣の故に眞の智慧を覆ひ、身を轉じて地獄の火燒湯煮を受く。菩薩は是の法の本末皆な空なるを知る。但だ衆生は顚倒して錯るが故に是の如きの苦を受く。菩薩は此の衆生に於て大悲心を起し、是の顚倒を破せんと欲するが故に、實法を求めて般若波羅蜜を行じ、實際に通達し、種種の因緣もて衆生を敎化し、實際に住せしむ。是の故に實際に住して咎なきなり。

復次に、經の中に說く、「若し衆生と實際と異らば、菩薩は般若波羅蜜を行ずべからず。異なれば、實際は是れ畢竟空にして、衆生際は是れ決定して有なり」と。若し爾れば應に難ずべし、若し諸法實（際）相は空なれば、菩薩は云何にして衆生の爲の

故に是の實際を修せん。若し衆生は畢竟空にして、實際は定有ならば、衆生は無く則ち利益する所なけん。誰の爲の故に實際を行ぜんや。今衆生際は實に實際と異らざるが故に般若波羅蜜を行じ、狂誑顚倒の凡夫を覺悟せんと欲するが故に、般若波羅蜜を行じて、衆生をして實際の中に住せしめて、而も實際を壞せざるなり。

是の時、須菩提は更に問ふ、「若し衆生際と異らざれば、云何んぞ實際を以て實際に著するや、自性は應に自性の中に住すべからず、指端は自ら指端に觸るる能はざるが如し」と。佛其の意を可とし、「菩薩は方便を以ての故に、衆生を實際に建立す。而して衆生と實際の一異は亦た不可得なり。若し是れ一なれば、則ち實際の相を壞す。所以何んとなれば、是は一性を得るが故なり。菩薩は是の二法は、一にあらず、二にあらず、亦た不一にもあらず、亦た不二にもあらず、畢竟寂滅にして戲論の相なしと知る。菩薩は大悲心を生じ、但だ衆生を拔出して、顚倒より離れしめんと欲するが故に衆生を敎化す。

又問ふ、「云何なるを方便と名くるや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生を檀の中に建立す。是の檀を說くに。先際と後際は空なり、中際も亦た爾なり、經中に廣く說くが如し。菩薩は實際を知れば衆生の邊に到る。先の檀品の中に說くが如し。衆生は聞き已つて發心し、煩惱を析薄するも深く布施に著す。菩薩、衆生を憐愍して、我れ慳中より拔出するに今復た布施に著せり。衆生若し布施を受くるも、福盡なば諸の苦惱を受けん。又福德富貴の因緣を受くるも、得て大罪を作さば則ち地獄に墮せん。是の故に此の衆生は小許の時樂を得て。而も苦を受くること長久なるを愍む。是の故に菩薩は爲に布施の實相所謂る畢竟空を說いて、是の言を作す、「是の布施は過去には已に滅して、見るべからず、得るべからず、用ふべからず、但だ憶念すべきのみ、夢の見る所の如きと異なるなし。未來は未だ生ぜざるが故に、亦た所有なく、畢竟空なり。是の布施は先後際に無なるが故に中際も亦無し」と。六塵を破する中と、色法を破する中に說くが如し。現在の布施は眼に見ゆと雖も、分分に破折して、乃ち微塵に至れば、不可得なり。布施は三世に空なり。施者・受者・果報も亦た是の如し。菩薩施者に語りて言はく、「布施等の法は是れ初めて佛法に入るの門なり。實際の中には實際の相も亦た無し、何に況はんや布施をや。汝、布施等の法を念ずる莫れ著する莫れ」と。若し念ぜず著せざれば布施の體相の如し。是の如きの布施は則

ち甘露味と甘露果とを得。甘露味とは是れ八聖道分にして、甘露果とは是れ涅槃なり。菩薩は實際の中に住すと雖も、方便力布施門を以て衆生を度す。餘の波羅蜜も亦た是の如し。經中に廣く說くが如し。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法性空ならば性空の中には法及び非法もなく、亦た衆生もなし。菩薩は云何にして是の空中に住して一切種智を求むるや」と。佛答へたまはく、「菩薩は性空の中に安立するが故に、能く是の布施等の諸法を行ず」と。又問ふ「性空は一切法を破し、悉く盡して餘すことなし。云何にして菩薩は性空の中に住して、能く布施等の諸の善法を行ずるや」と。佛、須菩提の意を可とし、而して因緣を說きたまはく、「菩薩は諸法實相を知りて此の中に住し、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。諸法實相とは、即ち是れ性空なり。若し一切法性空ならざれば、菩薩は應に是の諸の法性空の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得べからず」と。已に衆生の爲に性空の法、所謂色性空、受想行識性空なりと說く。乃至衆生の爲に一切種智は煩惱の習を斷ずる性空の法なりと說く。

復次に、須菩提よ、十八空、若し性空ならざれば、是れ空體を壞すと爲す。何となれば十八空は能く一切の法をして空ならしむればなり。若し自ら不空なれば、即ち虛誑と爲す。又若し不空なれは則ち常邊に墮し、著處に能く煩惱を生ず。性空には實に住處なく、從來する所なく、去つて至る所なし。是を常住の法相と名く。常住の法相は是れ性空の異名なり、亦た諸法實相と名く。是の相中には生なく、滅なく、增なく、減なく、垢なく、淨なし。菩薩は此の中に住して、一切法の性空なるを見、阿耨多羅三藐三菩提に於いて、退かず、疑はず、悔いざるなり。何となれば、諸法の能く障礙するものを見ず、方便力を以ての故に、衆生を度すればなり。方便力とは、畢竟して法もなく、亦た衆生もなきに、而も衆生を度するなり。

問うて曰はく、若し衆生及び法は、本より已來た無爲ならば、誰か方便を作し、誰を度脫すと爲すや。

答へて曰はく、性空は空性に名けて、亦た無なり。汝何を以てか是の空の性相を取つて難をなすや。若し性に空相あらば、應當に難を作すべし。

復次に、諸法實相を得る者は是れ性空なりと知る。是の人は則ち諸法の性空にして、法なく、衆生なしと知る。凡夫は未だ

實相を得ざるが故に、種種憶想分別す。譬へは、狂人の妄に所見あれば以て實有と爲すが如し。凡夫狂人を度せんが爲の故に、衆生の爲に言つて、狂法の中には是れ諸法の分別ありと說くも、實相の中には則ち無し。菩薩は本願を滿さんと欲するが故に、又性空に著せざるが故に、衆生を度すこと有るも、此の中に則ち應に難ずべからず。

復次に、此の經の中に、佛自ら因緣を說きたまはく、「性空の中には衆生は不可得なり、知者・見者も亦た不可得なり、乃至八十隨形好も亦た是の如し。而も菩薩は是の如し。而も菩薩は是の法を立つ。衆生の爲に、是の世諦を說くが故に是は實にあらず」と。此の中に佛譬喩を說きたまはく、「如し佛、化人を作り、又、四部の衆を化作し、而して爲に法を說くに、道を得るものありや不や」と。須菩提言さく、「不なり。所以何んとなれば、定んで根本實事なし。何ぞ須陀洹を得、乃至佛を得る者あらんや」と。菩薩の法を說いて衆生を度するも亦た是の如し。衆生は定んで實あることなし。但だ顚倒の中に於て、衆生を拔出して。無顚倒の中に著けんと欲するなり。無顚倒の法にも、亦た處所もなく、此の中に衆生もなく、乃至知者・見者もなし。空性、一相なりと雖も、而も顚倒は多く、不顚倒は少なし。是の故に、是の性空不顚倒の法を貴ぶ。菩薩は此の中に住して、但だ衆生の妄想を破して衆生を破せず。又無漏法乃至八聖道分は是れ無漏なりと雖も、生滅するを以ての故に第一義に如かず。須菩提よ。是れ性空なり、一切諸佛は唯だ是の道ありて更に異道なし。何となれば、諸佛は皆な實智の不壞不異の法を求め、十力四無所畏諸の異法有りと雖も名けて一道と爲さず。所以何んとなれば、此は皆な是れ有爲法にして轉變して無常なるが故なり。是の性空の中には、衆生もなく、亦た色等の諸法もなし。菩薩は菩薩道の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めず、但だ性空の爲の故なり。

問うて曰はく、何等か是れ性空にして、何等か是れ菩薩道なるや。

答へて曰はく、第一義の中には、分別なく、世諦の中には、分別あり、諸法實相を性空と名づく。餘の布施等、乃至八十隨形好は是れ菩薩道なり。是の法を行ずと雖も、此の法の爲にせず、性空を求むるが爲の故なり。是の故に、菩薩道の爲にせざるが故に是の性空を行ずと說く。先も亦た性空、中も亦た性空、後も亦た性空なり。本より已來、常に空にして作者あること

大福徳智慧方便力を以ての故に、衆生心中の顚倒を破りて性空を知らしむ。譬へば虚空の性は常に淸淨にして、垢闇を著けざるも、或る時、風雲闇翳なれば、世人便ち虚空は不淨なりと言ひ、更に猛風有つて風雲を吹除けば便ち虚空は淸淨なりと言ふも、而も虚空には實には垢もなく淨もなきが如し。諸佛も亦た是の如し、說法の猛風を以て、顚倒の雲翳を吹却して淸淨を得しむ。而も諸法の性は常に自ら無垢無淨なり。是の菩薩は一切法の性空を知るが故に、能く一切の種種道を行じて衆生を度し、一切の道を具足し、佛國土を淨め、衆生を敎化し、阿耨多羅三藐三菩提を得るの時、意に隨つて壽命す。「意に隨つて壽命す」とは、菩薩は無生忍法を得て、如幻の菩薩道に入り、能く一時に變化して、千億萬身と作り、十方に周遍して、一切菩薩道を具足し行ず。處處の國土の中にて衆生の壽命の長短に隨つて其の形を受くるなり。釋迦牟尼佛は是の國土に於ては壽命百年なるも、莊嚴佛國に於ては壽は七百阿僧祇劫なるが如し。佛法は五不可思議の中に於て、是れ第一不可思議なり。佛、須菩提に告げたまはく、「一切法の性空は是れ諸佛の眞法なり。若し是の法を得れば、則ち名けて佛と爲す。若し是の法を說けば、名けて衆生を度すと爲す。三世の佛も皆な亦た是の如し。是の性空を離るれば、則ち道なく果なし。道とは八聖道分、果とは七種の果なり。所以何んとなれば、若し性空を離れて、別に定法あれば、則ち相を取つて著を生ず、著するが故に、亦た離欲なく、離欲なきが故に、則ち道果なし。若し性空を離るれば、布施持戒を行ずと雖も、慈悲等を行ずる善法力の故に、惡道に墮せずして、天に生ずと雖も、果盡くれば還た惡道に墮し、本の如くにして異ならず。性空の法を行じ、亦た性空に著せざるは卽ち是れ涅槃なり。餘法を行ずれば著心を生じて、退失あり。若し此の法を行ずれば則ち退失なし」と。須菩提、歡喜して佛に白して言さく、「甚だ希有なり、菩薩は是の性空の法を行ずるも亦た性空の相を壞せず」と。佛答へたまはく、「若し色等の法と性空と異なれば、菩薩は則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ざらん。何となれば、空法あれば則ち離を得べからざればなり。須菩提よ、今、色等の諸法は實に性空なり、菩薩は是の法を知り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得。所以何んとなれば、此の中には一法として定んで是れ常なるものあるなし。但だ凡夫我心を生ずるが故に内外の法に著し、生死病死を脫することを得ざればなり。

是の故に菩薩は是の性空を行じて、六波羅蜜に和合して、色等の諸法の相を壞せず。所謂る、若くは空、若くは不空、若くは空不空、若くは非空非不空、是の如く諸法の相を示すことを作さず、是を不壞と名く。所以何んとなれば、色の實相卽ち是れ性空なり、性空云何んぞ自ら性空を壞せん、乃至菩提も亦た是の如し。是の中に佛譬喩を說きたまはく、內虛空が外虛空を壞せざるが如し。同體なるを以ての故なり」と。須菩提問ふ、「世尊よ、若し諸法性空にして別異なくんば、菩薩は何の處に於てか、阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。佛其の意を可として、「是の如し」と言へり。若し分別して、二相あらば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ず。阿耨多羅三藐三菩提を實智慧と名く。色法の中に於て行ぜず、所謂る不著不染なり。所以何んとなれば、是の智慧は色を取るが爲の故に行ぜず、是の故に色中に行ぜず。須菩提復た問ふ、「若し菩提は中を取て行ぜず、中を捨てて行ぜずんば、當に何れの處に於てか行ぜん。取を實法と名け、捨を空法と名く。取を著行と名け、捨を不著行と名く。取を二行と名け、捨を不二行と名く、是の如き等に分別す」と。佛反問したまはく、「須菩提よ、汝の意に於て云何。佛の所化の人は、何處に行ずとせん」と。須菩提の言さく、「是の化人は行ずる處なし。化人は心なく心數法もなきが故なり」と。菩提も亦た是の如し。復問ひたまはく、「汝が意に於て云何。阿羅漢の夢中の菩提は何處に在つてか行ずとなすや」と。須菩提言さく、「阿羅漢は尙ほ眠らず、何に況んや、夢中の菩提に行處あらんや。」

問うて曰はく、菩提に三種あり。阿羅漢の菩提と、辟支佛の菩提と、佛の菩提となり。阿羅漢の菩提は有漏心の中、無記心の中に在つては行ぜず、但だ無漏心の中に在りて行ず。佛は何を以ての故に、阿羅漢の夢中の菩提は何處に行ずと問ひたまひしや。

答へて曰はく、阿羅漢は、是れ一切漏盡の聖人にして卽ち夢なし。佛は、必ず處なきを以ての故に問うて、必ず行法なきことを明さんと欲せるなり。

問うて曰はく、乃至佛も猶尙眠あり、何を以てか之れを知る。佛嘗て阿難に命じて、「汝四襞の優多羅僧を敷け、我れ小らく眠らんと欲す。汝諸の比丘の爲に法を說け」と。又薩遮尼乾、佛に問ふ、「佛、自ら晝日眠あるを念ずるや不や」と。佛の言は

く、「春の末、夏の初めは、時熱きを以ての故に、少しく眠息す、食患を除かんが故なり」と。薩遮尼乾、佛に白さく、「餘人の言ふあり。晝日眠るを是れ癡相なりと」と。佛の言はく、「汝置け、汝は癡相を別たず。諸漏能く後身を生じて、相續して斷ぜざる、是を癡相と名く。常に眠らずと雖も、亦た是れ癡なり。若し是の諸漏永く滅して餘すことなければ、眠ると雖も癡と名けず」と。是の如き等は、經中に處處に說けり。須菩提は何を以てか阿羅漢すら尙ほ眠らずと言ふや。

答へて曰はく、眠に二種あり、一には眠つて夢み、二には眠つて夢みず。阿羅漢は安隱の爲に樂に著するが故に眠るにあらず、但だ四大身法を受くれば當に食・息・眠・覺有るべし。是の故に少許の時息むを名けて眠と爲す。夢眠を爲さざるが。故に須菩提は阿羅漢すら尙ほ眠らずと言へるなり。有人の言はく、離欲の者は禪定を得て、色界繫の四大は身中に入り、身心歡樂なれば則ち眠あることなし。慧解脫の阿羅漢は色界の四大は身中に入らざるが故に眠有り。此の故に、須菩提は阿羅漢すら尙ほ眠らずと言へりと。是の故に阿羅漢にも眠有り、不眠あり。佛は方便力を以て、衆生を度せん爲に人法を受るが故に眠を現ず。

須菩提復た問ふ、「若し行ぜざれば、云何にして菩薩は一地より十地に至り、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得んや」と。佛其の意を可とし、菩提は行ずる處なしと雖も、未だ六波羅蜜の諸法を具足せざれば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。是の菩薩は色相に住し。乃至菩薩相の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得。色等の法を捨てず、亦た菩提の相に著せず、色等の法は即ち是れ菩提なり、常寂滅にして法なしと知る。若くは增、若くは減、若くは垢、若くは淨、若くは得道、若くは得果は、但だ世諦の故に說く。菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得るも。第一義の中には色、乃至菩提有ることなしと。佛是の事を明さんと欲するが故に反問したまはく、「須菩提よ、汝が意に於て云何。汝、煩惱を斷じて道を得る時、所得ありや不や。所謂る夢等の五衆、若くは道、若くは道果の如きは、決定して一法なりや不や」と。須菩提言さく、「得ざるなり」と。所以何んとなれば、須菩提意へらく、無相門の中に住して道に入る、云何んぞ相を取らんと。佛の言はく、「汝若し乃至微細の少法だにも得ずんば、云何なれば說いて、汝は阿羅漢と爲すや」と。須菩提言さく、「世諦法の故に說いて阿羅漢と言ふ。凡夫顚倒法の中には、得あ

り、失あり、衆生あり、法あり」と。佛の言はく、「菩提も亦た是の如し。世諦法の故に、菩薩ありと說き、色等乃至菩提ありと說くも、菩提の中には、定法あることなく、亦た衆生もなく、亦た菩提もなし。菩薩は是の菩提法に增あることなく、減あることなしと觀ず。所以何んとなれば諸法性は是の如くなればなり。菩薩も亦た是の諸法の性を得ず、何に況んや初發心乃至十地及び六波羅蜜、三十七品、乃至十八不共法あらんやと。當に所得あるべくんば、是の處あることなし。所以何んとなれば、諸法の性は是れ一切法の根本なるすら尙ほ不可得なり、何に況んや、六波羅蜜等の。是の作法は尙ほ定實あらんや。是の如く、菩薩は是の諸法の性を行じて、佛を得る時、能く大に衆生を利益す。

巻の第九十一

第八十一照明品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩薩摩訶薩・六波羅蜜・十八空・三十七助道法・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法を行ずるも、菩薩道を具足せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。世尊よ、菩薩摩訶薩は、當に云何に菩薩道を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得べきや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、檀波羅蜜を行ずるに施を得ず、施者を得ず、受者を得ざるも、亦た是の法を遠離せずして、檀波羅蜜を行ず、是れ則ち菩薩道を照明するなり。是の如く、須菩提よ、菩薩は方便力を以ての故に菩薩道を具足し、具足し已つて能く阿耨多羅三藐三菩提を得。持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、乃至十八不共法も亦た是の如し」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、云何に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を習ふや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に色を壞せず色に隨はず。何となれば、是の色の性は無なるが故に、壞せず隨はず、乃至識も亦た是の如し。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に檀波羅蜜を壞せず隨はず、何となれば、檀波羅蜜の性は無なるが故なり。乃至十八不共法も亦た是の如し。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は自性の壞すべく隨ふべきもの無くんば、云何にして菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜、諸の菩薩摩訶薩の所學の處を習ふや。何となれば、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざればなり」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「汝が言ふ所の如く、菩薩は般若波羅蜜を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、方便力を離れざるが故に得べし。舍利弗よ、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ若し一法の得べきあらば、應當に取るべし。若し不可得ならば、何の取る所かありて、所謂、此れは是れ般若波羅蜜なり、是れ禪波羅蜜なり、是れ毘梨耶波羅蜜なり、是れ羼提波羅蜜なり、是れ尸羅波羅蜜なり、是れ檀波羅蜜なり、是れ色受想行識、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとせんや。舍利弗よ、是の般若波羅蜜の不可取の相なり。乃至一切諸佛の法の不可取の相なり。舍利弗よ、是を般若波羅蜜、乃至佛法を取らずと名く。是れ菩薩摩訶薩の應に學すべき所にして、菩薩摩訶薩は是の中に於て學するの時、學の相も亦た得べからず。何に況んや般若波羅蜜、佛法・菩薩法・辟支佛法・聲聞法・凡夫人法をや。何となれば、舍利弗よ、諸法は一法として性あることなければなり。何是の如きの無性の諸法に、何等をか是れ凡夫人、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・菩薩・佛とせんや。若し是の諸の賢聖無くんば、云何んぞ法あらん、是の法を以ての故に、分別して是れ凡夫人・須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・菩薩・佛なりと說く。

舍利弗佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法は性なく、實なく、根なく本なければ、云何んぞ是れは凡夫人なり、乃至是れは佛なりと知らんや」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「凡夫人著するところの處・色に性あり、實ありや不や」と。「不なり。世尊よ、但だ顚倒心を以ての故なり。受想行識、乃至十八不共法も亦た是の如し」と。「舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、諸法の性なく、根本なきことを見るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「云何なれば菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に諸法の性なく、根本なきを見るが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すや」。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法の根本を見て、中に住して退沒し、懈怠の心を生ずることなし。舍利弗よ、諸法の根本は實には無我なり、無所有なり、性常に空なり、但だ顚倒愚癡の故に衆生は陰入界に著す。是の菩薩摩訶薩は諸法の所有なく、性常に空にして、自性空なるを見る時、般若波羅蜜を行じ、自ら立つて幻師の如く、衆生の爲めに法を說く。慳者には爲に布施の法を說き、破戒の者の爲には持戒の法を說き、瞋る者には爲に忍辱の法を說き、懈怠の者に、爲に精進の法を說き、亂想の者には爲に禪定の法を說き、愚癡の者には爲に智慧の法を說き、衆生をして布施乃至智慧に住せしめ、然して後、爲めに聖法を說きて、能く苦より出す。是の法を用ての故に、須陀洹果を得、乃至、阿羅漢果、辟支佛道を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は是の衆生の無所有を得て、敎へて布施、持戒、乃至智慧あらしめ、然して後、爲に聖法を說き、能く苦より出し。是の法を以ての故に、須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を得」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、有所得の過罪あることなし。何となれば、舍利弗よ、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時に、衆生を得ず、但だ空法相續する故に、名けて衆生となせばなり。舍利弗よ、菩薩摩訶薩は二諦の中に住して、衆生のために說法す。世諦と第一義諦となり。舍利弗よ、二諦の中には衆生は不可得なりと雖も、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に、衆生の爲に法を說く。衆生是の法を聞くも、今世の吾我は尙ほ不可得なり、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提及び所用の法を得べけんや。是の如く、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に衆生の爲に法を說く」と。

舍利弗、「佛に白して言さく、世尊よ、是の菩薩摩訶薩の心曠大にして、法の若くは一相、若くは異相、若くは別相として得べきものあることなし。而も能く是の如く大に誓莊嚴し。是の莊嚴を用ての故に、欲界に生ぜず、色界に生ぜず、無色界に生ぜず、有爲性を見ず、無爲性を見ず、而も三界の中に於て衆生を度脫するも、亦た衆生を得ず。何となれば、衆生は不縛不解なればなり。衆生は不縛不解なるが故に、無垢無淨なり。無垢無淨なるが故に、五道を分別することなし。五道を分別することなきが故に、業なく煩惱なし。業なく煩惱なきが故に、亦た果報もあるべからず。是の果報を以ての故に、三界の中に生ず」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「是の如し、是の如

し。汝の言ふ所の如く、若し衆生は先有後無ならば諸佛菩薩は則ち過罪あり。諸法の五道生死も亦た是の如く。若し先有後無なれば諸佛菩薩は則ち過罪あり。舍利弗よ、今、佛あるも無佛なきも、諸法の相は常住して異らず。是の法相の中、倘は我無く、衆生無く、壽命無く、乃至知者無く、見賢者無し。何に況んや、當に色受想行識あるべけんや。若し是の法なくんば、云何んぞ當に五道を往來して、衆生を拔出する處あるべけんや。舍利弗よ、是の諸法の性は常に空なり。是を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は過去の佛より是の法相を聞き、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す。是の中に法の我として當に得べきものあることなく、亦た衆生の定んで著する處の法あることなく、出す可からず、但だ衆生の顚倒を以ての故に著するのみ。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は大誓莊嚴を發し、常に阿耨多羅三藐三菩提を退せざるなり。是の菩薩は、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得ざるべきや、我れ必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得きやと疑はず。阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、實法を用て、衆生を利益し、顚倒を出でしむ。舍利弗よ、譬へば幻師の百千億萬人を幻作して、種種の飲食を與へて、飽滿せしむるに歡喜して唱へて我れ大福を得たり、我れ大福を得たりと言ふが如し。汝の意に於て云何。是の中に人有りて、食飲して飽滿するや不や。」「不なり、世尊よ。」佛の言はく、「是の如く舍利弗よ、菩薩摩訶薩は初發意より已來、六波羅蜜・四禪・四無量心・四無色定・四念處・乃至八聖道分・十四空・三解脱門・八背捨・九次第定、佛の十力、乃至十八不共法を行じ、菩薩道を具足し、衆生を成就して、佛國土を淨むるも、衆生の法の度すべきものなし。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ菩薩摩訶薩の道にして、菩薩は是の道を行じて、能く衆生を成就し、佛國土を淨むるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より已來、檀波羅蜜を行じ、尸羅・羼提・毘梨耶・禪・般若波羅蜜を行じ、乃至十八不共法を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何に菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行じ、衆生を成就するや。」佛、須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩ありて、檀波羅蜜を行ずる時、自ら布施し、亦た衆生を敎えて布施せしめて此の言を作す。「諸の善男子よ。汝等布施に著すること莫れ。汝布施に著するが故に、當に更に身を受くべし。更に身を受くるが故に多く衆苦を受くるなり。諸の善男子よ、諸法相の中には施す所なく、施す者なく、受くる者なし。此の三法の性は皆な空なり。是の性空の法は取る可からず、取るべからざるの相は是れ性空なり」と。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜を行ずる時、衆生に布施するも、是の中に布施を得ず、施者を得ず、受者を得ず。何となれば、無所得の檀波羅蜜、是を名けて、檀波羅蜜と爲せばなり。是の菩薩は是の三法を得ざるが故に、能く衆生をして、須陀洹果を得せしめ、乃至阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行ずる時、衆生を成就す。是の菩薩は自ら布施を行じ、亦た他人を敎えて布施を行ぜしめ、布施の法を讃歎し、布施を行ふ者を歡喜し讃歎す。是の菩薩は是の如く布施し已りて、刹利大姓、婆羅門大姓、居士大家に生じ、若くは小王、若くは轉輪聖王となる。是の時、四事を以て衆生を攝取す。何等をか四となす。布施・愛語・利行・同事なり。是の四事をもて衆生を攝し已りて、

衆生は漸漸に戒・四禪・四無量心・四無色定・四念處・乃至八聖道分、空・無相・無作三昧に住し、正位の中に入ることを得、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、若くは辟支佛道を得、若くは敎へて阿耨多羅三藐三菩提を得せしめて、是の言を作す、「諸の善男子よ、汝等當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。阿耨多羅三藐三菩提は得易きのみ。何となれば、定法として衆生所著の處あることなく、但だ顚倒の故に衆生著するのみなればなり。是の故に、汝等自ら生死を離れ、亦た他を敎えて生死を離れしむべし。汝等當に發心して、能く自ら利益し、亦た當に他人をも利益を得しむべし」と。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く、檀波羅蜜を行ずべし。是の檀波羅蜜を行ずる因緣の故に、初發意より已來、終に惡道に墮せず、常に轉輪聖王と作る。何となれば、其の種ゆる所に隨つて、大果報を得ればなり。是の菩薩は、轉輪聖王となる時、乞者あるを見て、是の念を作さく、我れ餘事の爲の故に、轉輪聖王の果を受けず、但だ一切衆生を利益せんが爲めの故のみと。是の時に、是の言を作す、此は是れ汝の物なり。汝自ら之を取れ、難かる所あること莫れ。我れに惜しむ所なし。我は衆生の爲めの故に生死を受く。「汝等を憐愍するが故なりと。大悲を具足し、是の大悲を行じて衆生を饒益するも、亦た實に定んで衆生の相を得ず。但だ假名あるが故に是の衆生を說くべきのみ、是の名字も亦た空にして、響聲の如く、實に相を說くべからず。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く、檀波羅蜜を行じ、衆生の中に於て惜む所なく、乃至自身の肌肉をも惜まず、何に況んや外物をや。是の法を以ての故に、能く衆生をして生死より出す。何等をか是の法となすや。所謂檀波羅蜜・尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜、乃至十八不共法もて、衆生をして生死の中より得脫せしむるなり。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、布施し已つて是の言を作さく、諸の善男子よ、汝等來りて戒を持つべし。我れ當に汝等に供給して、乏短することなからしむべし。衣食・臥具・乃至資生に須ふるところは盡く當に汝に給すべし。汝等は乏少の故に戒を破る。我れ當に汝に所須を給し、若くは飮食乃至七寶、乏しき所なからしむべし。汝等是の戒律儀の中に住し、漸漸に當に苦を盡すことを得、三乘若くは聲聞乘、若くは辟支佛乘、若くは佛乘に乘じて、而して度脫することを得べし。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、若し衆生の瞋惱するを見れば、是の言を作す、諸の善男子よ、汝等何の因緣を以ての故に瞋惱するや、我れ當に汝が須ふる所を與ふべし。汝等の欲する所、我より之を取れ、悉く當に汝に給して、若くは飮食・衣服・乃至資生の所須に乏しき所なからしむべしと。是の菩薩は檀波羅蜜の中に住し、衆生を敎へて忍辱せしめ、是の言を作さく。一切法の中に堅實なるものあることなし、汝等の瞋る所、是の因緣は空にして、堅實なるなく、皆な虛妄なる憶想より生ず、根本あることなし。汝、瞋恚もて壞心し、惡口し、罵詈し、刀杖もて、相加へて以て命を害ふるに至る。汝等、是の虛妄の法を以て、瞋を起すが故に、地獄、畜生、餓鬼の中、及び餘の惡道に墮し、無量の苦を受くること莫れ。汝等是の虛妄無實の諸法を以ての故に、而も罪業を作すこと莫れ。是の罪業を以ての故に尙ほ人身すら得ず、何に況んや佛世に生ずることを得んや。諸人よ。佛世には値ひ難く、人身は得難し。汝等好時を失ふ

こと莫れ。若し好時を失はゞ、則ち救ふべからずと。是の菩薩摩訶薩は、是の如く衆生を教化して、自ら忍辱を行じ、亦た他人を教へて忍辱を行はしめ、忍辱の法を讃歎し、忍辱を行ずる者を歡喜し讃歎す。是の菩薩は衆生をして、忍辱の中に住せしめ、漸く三乘を以て衆苦を盡くすことを得せしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜に住し、衆生をして忍辱に住せしむ。

須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は檀波羅蜜に住し衆生をして精進せしむるや。須菩提よ、菩薩は衆生の懈怠せるを見て、是の如き言を作す、汝等何を以てか懈怠するや。衆生の言はく、因縁少きが故なりと。是の菩薩は檀波羅蜜を行ずる時、諸人に語つて言はく、我れ當に汝の因縁をして具足せしむべし、若くは布施、若くは持戒、若くは忍辱、是の如き等の因縁の故に、汝をして具足せしむべし。是の衆生は、菩薩の利益因縁を得るが故に、身精進し、口精進し、心精進す。身精進、口精進、心精進するが故に、一切の善法を具足し、聖無漏の法を修す。聖無漏の法を修するが故に、當に須陀洹果・乃至阿羅漢果・辟支佛道を得、若くは阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行ずる時、精進波羅蜜に住して、衆生を攝取す。

須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行ずる時、衆生を教化して、禪波羅蜜を修せしむるやと。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩衆生の亂心を見るや是の言を作す、汝等禪定を修すべしと。衆生の言はく、我等の因縁具足せざるが故なりと。菩薩の言はく、我れ當に汝等のために因縁を作すべし。是の因縁を以ての故に、汝が心をして覺觀に隨はざらしめ、亦た馳散せざらしめんと。衆生は是の因縁を以ての故に、覺觀を斷じ、初禪・二禪・三禪・四禪に入り、慈悲喜捨の心を行ず。衆生は是の禪無量心の因縁を以ての故に、能く四念處、乃至八聖道分を修し、三十七助道法を修する時、漸く三乘に入り、而して涅槃を得、終に道を失はず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜を行ずる時、禪波羅蜜を以て、衆生を攝取し、禪波羅蜜を行ぜしむ。

須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行じて、般若波羅蜜を以て、衆生を攝取するや。須菩提よ、菩薩は衆生の愚癡にして智慧あることなきを見て、是の言を作す、汝等何を以ての故に、智慧を修せざるや。衆生の言はく、因縁未だ具足せざるの故にと、菩薩は檀波羅蜜の中に住して是の言を作す。汝等の所須の智慧を具足することを得んとせば、我れより之を取れ、所謂布施・持戒・忍辱・精進・禪定、此の因縁を具足し已りて、汝等是の如く思惟すべし。般若波羅蜜を思惟する時、法の得べきもの有りや不や。若くは我、若くは衆生、若くは壽命乃至知者、見者は得べきや不や、若くは色受想行識、若くは欲界色界無色界、若くは六波羅蜜、若くは三十七助道法、若くは須陀洹果、若くは斯陀含、阿那含、阿羅漢果、辟支佛道、若くは阿耨多羅三藐三菩提を得べきや不やと。是の衆生は、是の如く思惟する時、般若波羅蜜の中に於て、法の得べく著すべき處あることなし。若し諸法に著せざれば、是の時、法の生あり・滅あり、垢あり、淨あるを見ず。是れは地獄、是れは畜生、是れは餓鬼、是れは阿修羅衆、是れは天、是れは人、是れは持戒、是れは破戒、是れは須陀洹、是れは斯陀含、是れは阿那含、是れは阿羅漢、是れは辟支佛、是れは佛なりと分別せず。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行ずる

時、般若波羅蜜を以て衆生を攝取す。

須菩提よ、云何に菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜・乃至三十七助道法を以て衆生を攝取するや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜の中に住し、供養の具を以て衆生を利益す。是の利益の因緣を以ての故に、衆生は能く四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を修し、衆生は是の三十七道法を行じて、生死の中に於て解脱することを得。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は無漏の聖法を以て衆生を攝取す。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は衆生を敎化する時、是の如く言ふ、諸の善男子よ、汝等、我より所須の物を取れ。若くは飲食・衣服・臥具・香華・乃至七寶等の種種の資生の須ふる所のもの、汝是れを以て衆生を攝取し、汝等、長夜に利益し、安樂にして、是の念を作すこと莫れ、是の物は我が所有に非ず、我れ長夜に衆生の爲の故に、此の諸物を集む、汝等當に是の物を己の物と異なることなきが如く取り、衆生を敎化して、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を行ぜしめ、乃至三十七助道法、佛の十力、乃至十八不共法を得せしめ、亦た無漏法果、所謂、須陀洹・乃至阿羅漢果・辟支佛道・阿耨多羅三藐三菩提を得せしむべし。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は檀波羅蜜を行ずる時、應に是の如く衆生を敎示して、三惡道及び一切生死の往來の苦を離るることを得せしむべし。

復た次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して衆生を敎化し、是の言を作す、衆生よ、汝等、何の因緣、少きが故に戒を破るや、我れ當に汝の與めに因緣(即ち)、若くは布施、乃至智慧及び種種の資生の所須を具足することを作すべしと。是の菩薩は尸羅波羅蜜に住して衆生を利益し、十善道を行じ、十不善道を遠離せしむ。是の諸の衆生は諸の戒を持して破戒せず、缺戒せず、濁戒せず、雜戒せず、取戒せず、漸く三乘を以て而して苦を盡くすことを得。尸羅波羅蜜を首となし、檀波羅蜜に說くが如く、餘の四波羅蜜も亦た是の如し」と。

【論】問うて曰はく、先に菩薩は六波羅蜜等の諸の助道法を行ずるも、菩薩道を具せざれば則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ることと能はずと說けり。今、須菩提は、應に自ら六波羅蜜等を行じて菩薩道を具足すれば阿耨多羅三藐三菩提を得べきことを知るべし、何を以てか更に問へるや。

答へて曰はく、須菩提は云何にして、阿耨多羅三藐三菩提を得るやを疑はず。今は但だ云何に菩薩道を具足して、阿耨多羅三藐三菩提を得るやを問ふなり。佛答たまはく、若し菩薩は六波羅蜜等の諸法を用ふれば、方便力の和合を以ての故に能く行ず、是の時菩薩道を具足す、方便力は決定して是の布施等の三事を得ず、亦た是の三事を離れずして、檀波羅蜜を行ず。是

の時、菩薩道を照明す、照明と具足とは、是れ一義なり。若し菩薩、決定して、布施等の三事を得ば、直に常顚倒、取相、著法等の過罪に墮す。若し是の三事を得ずんば、則ち斷滅の邊、著空に墮し、還た邪見等の諸の煩惱を起して、便ち菩薩道を離る。若し菩薩、是の二邊を離るれば、空に因りて是の施等の假名字の虛誑の法を捨て、諸法實相に因りて是の著空を離るれば、施者なく、受者もなく、阿耨多羅三藐三菩提相の如し。是の布施を觀ずるも、亦た爾くして異ることなし、是の如き布施を名けて具足と爲す。乃至十八不共法も亦た是の如し。

舍利弗は會中に在りて、佛が須菩提の與に般若は甚深にして、果報大に利益あるを說き給ふを聞き、利益ありと雖も決定性なし、云何に習ふべきや」と。(問ふに)佛、答へたまはく、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、色を壞せず、色に隨はず、是の如きを般若波羅蜜を習ふと名く」と。菩薩は初發心より實法を知るが爲の故に、常に般若波羅蜜を行じ、次第に其の所宜に隨つて布施等の諸法を行ず。是の故に常に菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、布施等の諸法を行ず。

「色を壞せず」とは、是の色は無常なりと言はず、是の色は空なり無所有なりとも言はず、是を色を壞せずと名く。「色に隨はず」とは、眼に色を見、相を取りて、著を生ずるが如きにあらざるなり。復次に、是の色は、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂なり等と說かず、是を色に隨はずと名く。常、無常等は皆な色の實相にあらざるなり。復次に、是の色の根本は世性の中より來る、若くは微塵の中より來る、大自在天の中より來ると說かず、亦た時より來ると說かず、亦た自然に生ずと說かず、亦た無因無緣にして而も强ひて生ずと說かず、是の如き等を名けて隨はず壞せずとなす。是の中に佛自ら因緣を說きたまはく、是の色は性無なるが故に隨はず壞せずと。性無なりとは、是の色は、一切の四大和合の假名により名けて色となす。是の中に、定んで一法の名けて色となすものなし。先の色を破する中に說くが如し。是の色は、因緣和合より生ずるが故に、卽ち是れ無性なり、無生は卽ち是れ性空なり。若し是の色相の性空を得ば、卽ち是れ般若波羅蜜を習ふなり。乃至十八不共法も亦た是の如し。

復問ふ、「世尊よ、若し諸法に自性の壞すべき隨ふべきもの無くんば、云何に菩薩は般若波羅蜜を習はん。般若波羅蜜を學ば

ずんば、阿耨多羅三藐三菩提を得ざらん」と。佛、舍利弗の意を可とし、自ら因緣を說きたまはく、若し菩薩、方便力を用て六波羅蜜を行ぜば、是の人は諸法の空なることを知ると雖も、而も能く般若波羅蜜を起すと。舍利弗よ、若し菩薩、一切の法を求めて、若し少許の定性を得ば、則ち取るべく著すべし。今、菩薩は實に一切の法を求覓するも定實を得ず。所謂是の般若波羅蜜、是れ禪波羅蜜、乃至是れ十八不共法、是の諸法は皆な不可得なり、不可得の故に何の取る所あらん。舍利弗よ、是を菩薩の無取般若波羅蜜と名く。菩薩應に無取般若波羅蜜を學すべし。無取は尙ほ不可得なり、何に況んや般若等の諸法をや。(そは)一切法は無性なるが故なり。舍利弗復た問ふ「若し一切法無性ならば、云何にして是れは凡人乃至佛たることを知るや」と。佛答へたまはく、一切の法には根本の定相無しと雖も、但だ凡人顚倒の故に著す。菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、一切の法の根本無きを見て、而も阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是の菩薩は深く諸法の性空を行ずるが故に、一切の法に根本あるを見ず、見ざるが故に懈らず退かず、了了に一切法の無我・無所有性、性常に空なることを知る。但だ衆生は愚癡顚倒の故に是の陰・界・入に著するのみ。是の時に、菩薩は諸法の甚深寂滅の相にして、而も衆生は深く虛誑顚倒に著するを思惟し籌量し、菩薩は自ら立つて、幻師の如く、種種に神通變化して法を說き、人を度す。幻の所作の如く、憎なく、愛なくして、等心に法を說く、所謂、慳者には施等の六法を敎へ、復た爲めに轉た勝れる法を轉じて生死より出で、須陀洹果、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得せしむと。

問うて曰はく、六波羅蜜の外に、更に何の法あつてか勝れたりとなすや。何を以てか更に爲めに勝法を說くと言ふや。

答へて曰はく、此の中には波羅蜜を說かず、但だ慳者には爲に施を說き、乃至、癡者には爲に智慧を說く、諸佛菩薩の法は初あり後あり、初法は所謂布施・持戒なり。戒施の果報を受け天上の福樂を得、爲に五欲の味を說くも。利は少く失は多し。世間の身を受くれば但だ衰苦のみあり、世間を遠離し、愛法を斷ずるを讚歎し、然して後、爲に四諦を說いて須陀洹果を得せしむ。此の中に菩薩は但だ說いて衆生をして佛道を得せしめんと欲するが故に、先づ敎へて六法を行ぜしむ。此の中の善智慧をば名けて三解脫門の所攝となさず。是の善智慧は能く布施等の善法を生じ、能く慳貪瞋恚等の惡法を滅し、能く衆生をし

て天上に生ずることを得せしむ。何を以て是れを知るや、更に勝法あるが故なり。勝法とは、所謂、四諦の聖法なり、出法一切の聖人所行の法を名けて聖法となし、三界の生死を出づるを名けて出法となす。是の四諦を以て法を說くが故に衆生の根因緣に隨つて須陀洹果を得、乃至一切種智を得せしむ。此の中に初の六法を說かずと雖も布施等を說けば當に知るべし、已に攝すと。

復次に、菩薩は、佛道の爲の故に是の六法を說く。但だ衆生の意劣るが故に自ら小乘を取る。是の故に布施・持戒・生天　受報等の初の六法を說かず。

舍利弗佛に白して言さく「世尊よ、先に菩薩は是の畢竟不可得の法を說き、今無所有の衆生の爲に法を說いて無所有を法を得せしむ。所謂、須陀洹果乃至一切種智なり。世尊よ、菩薩は今無所有の法を得るが故に、能く衆生をして無所有の法を得せしむ。無所得は是れ有所得なりや。」佛答へたまはく「菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、有所得の過あることなし。何となれば、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生及び法を見ず、但だ諸の因緣和合して假名に衆生と名くのみ。菩薩は二諦の中に住して衆生の爲に法を說くも、但だ空のみを說かず、但だ有のみを說かず。愛著の衆生の爲の故に空と說き、取相著空の衆生の爲の故に有と說いて、有無の中の二處に染せず。是の如きの方便力もて、衆生の爲に說法す。衆生は現在の我身及び我すら尙ほ不可得なり、何に況んや、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べけんや」と。舍利弗歡喜して、佛に白して言さく「世尊よ、曠大の心は是れ菩薩なり」と。曠大の心とは、此の中に自ら因緣を說く、所謂、法として若くは一相、若くは異相の得べきものあることなし。人の市に買ふに必ず交易を須ふるが如し。大心の人は則ち然らず、依止する所なくして、而も能く大莊嚴を發す。大莊嚴の故に三界を生ぜず、亦た衆生を拔いて三界を出でしむ。而も衆生は不可得なり、不縛不解の故に一切の法は空なり。久遠より以來、煩惱顚倒して皆な是れ虛誑不實なり、是の故に無縛と名く。縛無きが故に亦た解もなし。縛は卽ち是れ垢、解は卽ち是れ淨なり。無淨無垢の故に六道の分別なし。六道を分別せざるが故に罪福の業なし、罪福の業なきが故に煩惱なし。能く罪福の業を起す者は罪福の業を起さず、亦た應に果報あるべからず。是の如く諸法畢竟空の中に、而も大莊嚴を作す、是を

希有と爲す。譬へば、人の虛空の中に樹を種ゑて、樹葉花果利益する所多きが如し。佛、舍利弗の意を可し、舍利弗の是の空を離ずるが故に佛亦た答へて亦た可とす。其の空を說くを以ての故に可し、其空を難ずるを以ての故に答ふ。所謂舍利弗よ。若し衆生及び諸法が先有今無ならば、諸佛賢聖の過罪あり。過罪とは所謂衆生をして無餘涅槃に入らしめ、永く色等の一切の法を滅して、皆な空中に入らしめ、皆な無所有ならしめ、衆生及び一切法を斷滅するを以ての故に罪過あり。舍利弗よ、衆生及び一切の法は先に來ることなし。若し有佛にも無佛にも常住にして異らされば、是れ諸法實相なり。是の故に六道の生死なく亦た衆生の拔出すべきなし。舍利弗よ、一切の法は先より空なり、是の故に、菩薩は諸佛の所に於て、諸法の是の如きの相を聞くが故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發して、是の念を作す、菩提の中には、亦た法として得べきもの有ることなく、亦た實定の法にして衆生をして著して而も度すべからざるしむるもの無し。但だ衆生の癡狂顚倒するが故に、是の虛誑の法に著するのみと。是の故に菩薩は大莊嚴を發し、阿耨多羅三藐三菩提を轉ぜずして、是の念を作す、我れ必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。得ざるに非ず、得已つて實法を用て衆生を利益す。衆生を利益するが故に、衆生は顚倒より出づるを得と、是の事を明了ならしめんと欲するが故に、經の中に幻師の譬喩を說く。幻師は卽ち是れ菩薩なり、幻師の所作の園林廬觀は卽ち是れ六波羅蜜等の衆生を度するの法なり。幻師の所作の象・馬・男・女は卽ち是れ菩薩の度する所の衆生なり。幻師の一身が幻力を以ての故に、衆生・園林・廬觀等を幻作して、衆生を娛樂するが如し。若し幻師が所幻の作事を以て實と爲し、所幻の人に於て其の恩惠を求むれば、卽ち是れ狂人なり。菩薩も亦た是の如く、諸佛に從つて、一切の法性は、空にして幻の如しと聞いて、而も布施等を以て衆生を利益す。恩惠福報を求めんと欲すれば、卽ち是れ顚倒なり。

問うて曰はく、幻法呪術は實有なれども、幻の所作の物は虛なるべし。衆生の空なるが如く、菩薩も亦た空なり。菩薩は衆生を化作せず、何ぞ喩となすことを得んや。

答へて曰はく、諸法實相の中には法すら尙なし、何に況んや衆生をや。衆生の異名を名けて幻師となす。幻師も實には無し、何を以てか幻師は有にして、所幻のものは無しと言ふや。汝の如きは幻師を以て實有とし、所幻のものは無しとす。聖人は幻

師及び所幻の物を觀るに異ることとなし、事を明了にするを以ての故に譬喩を說き、其の少許の相似の處を取つて喩と爲すなり。何を以てか盡く取つて難をなさん。師子を王に喩ふるが如し。師子は獸中に於て畏るることなく、王は群下に於て自在にして難かること無きが故に、以て喩となすなり。復た何ぞ(師子は)四脚にして毛を負ふを異りとなすを責むべけんや。佛、性空の法を說いて諸法皆な空なるも猶ほ衆生あり、是の故に幻を說いて喩となす。我れ今、喩を說いて以て衆生を破す、汝云何んぞ復た衆生を以て難となすや。

爾の時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等か是れ衆生を成就し、佛國土を淨むる道なるや」と。須菩提は菩薩道を知ると雖も、中に甚深の性空を說くを以ての故に聽者は疑を生ぜり。是の故に問を發せるなり。佛答へたまはく、「菩薩は初發心より、六波羅蜜、乃至十八不共法を行ず。是の菩薩道は是の道を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む」と。須菩提復た問ふ、「云何に是の法を行じて、衆生を成就するや」と。須菩提の意は、「若し是の法、性空にして、衆生も亦た性空ならば、云何にして成就すべきことを得べきや」となり。佛答へたまはく、菩薩は方便力を以ての故に、布施の法を以て衆生を敎化するも、敎へて布施に著せしめざるを以て眞實となすと。方便とは、菩薩、衆生に語るらく、「汝曹善男子よ、來つて布施するも、是の布施に著すること莫れ。經の中に說くが如しと。衆生は布施を以て貴樂の處に生じ、貴樂の因緣の故に我と憍慢とを生ず。我と憍慢と増長するが故に善法を破す。善法を破るが故に三惡道に墮す。是の故に菩薩は、先に敎へて言へり、布施に著すること莫れ。但だ此の布施に因つて、持戒等の善法を修し、皆な是の法を廻らして涅槃に向へ。所以何んとなれば、是の性空なる諸法實相は、相を取るべからざればなりと。是の如く、菩薩は方便力の故に、衆生を敎化して、須陀洹果、乃至佛道を得せしむ。是の菩薩は自ら布施を行じ、亦た衆生に布施を敎ふ。若し自ら施さざれば、或は人有つて言はん、若し施にして是れ好法ならば、何ぞ自ら行ぜざるやと、是の故に菩薩は先づ自ら布施す。復次に、菩薩は深く善法を愛す。布施は是れ初門なり、是の故に是の布施を行ず。又菩薩は深く衆生を慈悲するに、慈悲心大なりと雖も、而も能く衆生を充滿すること能はざるを以て、是の故に先づ布施を行じ、其の心をして軟ならしめ、以て引導すべくせしむ。布施の因緣をもて、四姓に生じ、及び轉輪

王となり、四攝法を以て衆生を攝取し、漸漸に三乘の法を以て涅槃を得せしめ、他に布施を教へ、布施の法を讃歎し、布施を行ずる者を歡喜し讃歎す。是れ深く布施を愛し、同行を見るが故に歡喜し讃歎するなり。

　復次に、心に衆生を憐愍して、若し修福を見れば、則ち之れが爲に歡喜すること、慈父の子の善を行ふを見て、心則ち歡喜するが如し。是の人は四種に布施を行じ、刹利等の貴姓の中に生ず。布施を以て攝し已つて、漸漸に教へて持戒、禪定等、乃至辟支佛道を得せしむ。或は衆生の大心ある者を見るに、少許の慈悲心あり、是の人生死の長遠を怖畏するが故に其の心懈怠す。菩薩は方便力の故に是の衆生に語るらく、咄、衆生よ、阿耨多羅三藐三菩提は得易し、汝等何を以てか難しとなすや。衆生の所著の處には、此の中に定實の法にして能く遮する者、解し難き者あることなし。汝等當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。既に自ら度して、復た能く衆生を度脱せしむべしと。衆生を度脱すとは、菩薩は自ら大乘に乘じて度を得、三乘を以て衆生の應に度すべき所に隨つて之れを度し、既に自ら利益し、復た他人を利益す。他人を利益すとは、既に自ら佛と作り、而も三乘を以て衆生を度脱するなり。若し菩薩、能く是の如く般若波羅蜜を行ぜば、初發心より終に三惡道に墮せず、常に轉輪聖王と作るとは菩薩は多く欲界に生ず。何となれば、無色界の中には、形なきを以ての故に教化すべからず。色界の中には多く禪定の樂に味著し、厭惡の心なきが故に化し難ければなり。亦た欲天に生ぜず。所以何となれば、妙なる五欲に著すること多きが故に化し難く、人中に在つては、世世に四事を以て、衆生を攝するが故に、轉輪聖王と作るなり。此の中に佛自ら因縁を説きたまはく、其の種ゆる所に隨つて大果報等を得と。經の中に布施の相を説くが如し。復た菩薩ありて檀波羅蜜を行ずる時、衆生の破戒を見て、是の言を作す、汝曹、因縁具足せざるを以ての故に戒を破る。我れ當に汝の所須を給して乏少することなからしむべしと。破戒の人に二種あり。一には持戒の因縁具足せざるが故に、貧窮人の飢寒急なるが故に賊と作るが如し。二には持戒の因縁を具足すと雖も、惡心を習ふを以ての故に、好んで惡事を行ふなり。貧窮にして戒を破る者には、菩薩之に語つて言はく、汝但だ戒を持て、我れ當に汝に所須を給すべし。汝等、持戒の中に住し、漸漸に三乘を以て而も度脱することを得よ、是れを布施に因りて戒を生ずと名く。衆生は不如意の事を以ての故に瞋り、若くは物を求めて意の如くならざるを

以ての故に瞋り、人の意に稱はざるが故に瞋る。菩薩は檀の中に住し、其の意に隨つて之れを給足す。

問うて曰はく、若し貧乏の者に給施して、瞋らしめざることは爾るべし、人の意に稱ふを得ずして、之に惱み瞋らしむるは復た云何。

答へて曰はく、如意珠を以て之に施せば、則ち人をして皆な意に稱はしむ。珠の威德の故に、人の瞋る者無し。行者は慈三昧に入るが故に、人の瞋る者なきが如し。是の故に少しく、何の因緣の故に瞋るや、我れ當に汝をして少く所を具足せしむべしと說く。

復次に、一切の法性は皆な空にして無所有なり。汝の瞋るところの因緣も、亦た虛誑にして定まることなし。汝、云何なれば虛誑の事を以ての故に瞋罵し、害を加へ、乃至命を奪ふや。此の重罪業を起すが故に、三惡道に墮し、無量の苦を受く。汝虛誑無實の事を以ての故に、而も大罪を受くること莫れ。山中に一の佛圖あるが如し。彼の中に一の別房あり。房中に鬼あり、來つて道人を恐惱せしむるが故に、諸の道人皆な房を捨てて去る。一の客僧の來るあり、維那は處分して此の空房に住せしめ、而して之に語つて言はく、此の房の中に鬼神あり、喜んで人を惱す、能く中に住せば住せよと。客僧は自ら持戒の力多聞なるを以ての故に、「小鬼何ぞ能くする所ぞ、我れ能に之を伏すべし」と言ひ、卽ち房に入つて住す。暮に更に一僧あり來つて住處を求む。維那亦た此の房に在つて住せしめ、亦た鬼ありて人を惱ますと語る。其の人も亦た、小鬼何ぞ能くする所ぞ、我れ當に之れを伏すべし」と言ふ。先に入りし者は戶を閉ぢて、端坐して鬼を待てり。後に來る者夜闇に戶を打つて入ることを求むるに、先に入る者は謂つて是れを鬼となし、爲めに戶を開けず。後に來る者力を極めて戶を打ち、內にある道人は力を以て之を拒む。外なる者勝つことを得て、戶を排して入ることを得。內の者之れを打ち、外なる者亦た力を極めて熱打す。明旦に至つて相見るに、乃ち是れ故舊の同學なり、各に相ひ愧謝す。衆人雲の如く集り笑て之を怪しめり。衆生も亦た是の如し。五衆は我なく人なくして、空なるに、相を取つて鬪諍を致す。若し支解して地に在かば、但だ骨肉有るのみ。人もなく、我もなし。是の故に菩薩は衆生に語つて言はく、汝根本空の中に於いて鬪諍して罪を作すこと莫れ。鬪諍する故に人身すら尙ほ得べ

からず、何に況んや佛に値ふことをや。當に知るべし、人身は得難く、佛世には値ひ難く、好時過ぎ易きことを。一たび諸難に墮せば永く治すべからず。若し地獄に墮して燒炙屠割せらるれば、何ぞ敎化すべき。若し畜生に墮せば共に相ひ殘害して亦た化すべからず。若し餓鬼に墮せば飢渴熱惱して亦た化すべからず。若し長壽天に生ぜば、千萬の佛は過ぐるとも、禪定の味に著するが故に皆な覺知せず。安息國の如き、諸の邊地に生ずる者は、皆な是れ人身愚にして敎化すべからず。中國に生ずと雖も或は六情を具せず、或は四肢完からず、或は盲聾瘖瘂、或は義理を識らず、或る時は六情具足し、諸根通利するも而も深く邪見に著し、罪福はなしと言ふ、(之れ亦た)敎化すべからず。是の故に爲に說く、好時は過ぎ易し、諸難の中に墮すれば、度を得べからずと。餘の波羅蜜は、經の中に廣く說くが如し。故に復た之れを解せざるなり。

問うて曰はく、檀波羅蜜に住して、五波羅蜜を行じ訖る。何を以てか復た更に六波羅蜜を說くや。

答へて曰はく、上には一度の中に、次第に五を具足す。今は卽ち一時に總說するなり。

復次に、先には但だ六波羅蜜を說き、今は通じて三十七品及び諸の道果を說く。

問うて曰はく、三十七品は、自ら心より出づ、云何んぞ是の因緣を與ふ可けん。

答へて曰はく、菩薩は、坐禪のものには、衣服・飮食・醫藥・法杖・禪鞄・禪鎭を供給し、好師の敎詔を得せしめ、好き弟子を得て化を受けしめ、骨人に與へて觀ぜしめ。禪經を與へて人をして爲に禪法を說かしむ。是の如き等は三十七助道法の因緣なり。又た人をして爲に摩訶衍の法を說かしむ。汝等須ゆるところの衣服・飮食は盡く來つて是を取れ、便ち是れ汝の物なり、自ら疑難することを莫れ、汝等、是の物を得已らば、自ら六波羅蜜を行じ、亦た他人を敎化して、六波羅蜜を行ぜしめよ。是の布施の性は皆な空なり、汝等是の施及以び果報に著すること莫れ。衆生は是の性を得て、漸漸に阿耨多羅三藐三菩提を得て、無餘涅槃に入る。布施を首となして、五波羅蜜を生ずるが如く、餘の波羅蜜も亦た是の如し。

卷の第九十二

第八十二淨佛國土品【一】

【經】爾の時に、須菩提是の念を作さく、「何等をか是れを菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是の道に住して、能く是の如き大誓莊嚴を作すや」と。佛、須菩提の心の所念を知つて、須菩提に告げたまはく、「六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の道なり、三十七の助道法は是れ菩薩摩訶薩の道なり、十八空は是れ菩薩摩訶薩の道なり、八背捨、九次第定は是れ菩薩摩訶薩の道なり、佛の十力、乃至十八不共法は是れ菩薩摩訶薩の道なり。一切法は亦た是れ菩薩摩訶薩の道なり。須菩提よ、汝が意に於て云何、頗し法として、菩薩の學せざる所あらば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや不や。須菩提よ、法として菩薩の應に學すべからざる所のものあることなし。何となれば菩薩は一切の法を學せざれば、一切種智を得ること能はざればなり」と。

須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切の法は空なりとせば、云何にして菩薩は一切の法を學すと言ひ、將た、世尊よ、無戲論の中に戲論を作して所謂是は此、是は彼、是は世間法、是は出世間法、是は有漏法、是は無漏法、是は有爲法、是は無爲法、是は凡夫人法、是は阿羅漢法、是は辟支佛法、是は佛法なりとする事なきや。」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。一切の法は實に空なり。須菩提よ、若し一切の法空ならずんば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提よ、今、一切の法は實に空なるが故に、菩薩摩訶薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提よ、汝の言ふところの如し。若し一切の法は空ならば、將た佛は無戲論の中に於て戲論を作し、此彼を分別して、是れは世間の法、是れは出世間の法、乃至是れは佛法なりとする事なし。須菩提よ、若し世間の衆生、一切法の空なるを知らば、菩薩摩訶薩は、一切の法を學びて一切種をず。須菩提よ、今衆生は、實に一切法の空なることを知らず、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、諸法を分別して、衆生の爲に說く。須菩提よ、是の菩薩道に於て、初より已來（このかた）、應に是の如く思惟すべし、一切諸法の中に定性は得べからず、但だ和合の因緣に從つて法を起すが故に、名字の諸法あるのみと。我れ當に諸法の實性を思惟して、若くは六波羅蜜性、若くは三十七助道法、若くは須陀洹果、乃至阿羅漢、若くは辟支佛道、若くは阿耨多羅三藐三菩提に著する所無かるべし。何となれば、一切の法、一切法性は空にして空は空に著せず、空は亦た不可得なり、何に況や、空中に著あらんや。須菩提よ、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し、一切法に著せずして、而も一切法を學し、此の學の中に住して、衆生の心行を觀ず。是の衆生心は何れの處にあつてか行ずるや（を觀じ、）衆生が虛妄不實の中に行ずるを知る。是の時菩薩は是の念を作さく、是の衆生は不實虛妄の法に著す、度し易きの

【一】別本「淨土品」または「國土品」に作る。

みと。是の時菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に住する時、方便力を以ての故に是の如く教化して言ふ。汝諸の衆生よ、當に布施を行じて、饒財を得べくも、亦た布施の果報を恃みて自ら高ぶること莫れ。何となれば、是の中に堅實の法なければなり。持戒、禪定、智慧も亦た是の如し。諸の衆生よ、是の法を行じて、須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道を得べくも、是の法ありと念ずること莫れと。是の如く教化し、菩薩道を行じて而も所著なし、是の中に堅實あることなきが故なり。若し是の如く教化すれば、是を菩薩道を行ずと名く。是の諸法に於て著するところなきが故なり。何となれば、一切の法には所著の相なければなり。性無なきを以ての故なり。性空なるが故なり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は、是の如く菩薩道を行ずる時、住する所なし、是の菩薩は不住の法を用ての故に、檀波羅蜜を行ずるも亦た是の中に住せず、尸羅波羅蜜を行ずるも、亦た是の中に住せず、羼提波羅蜜を行ずるも亦た是の中に住せず、毘梨耶波羅蜜を行ずるも亦た是の中に住せず、禪波羅蜜を行ずるも亦た是の中に住せず、般若波羅蜜を行ずるも亦た是の中に住せず、初禪を行ずるも亦た是の中に住せず。何となれば、是の初禪は初禪の相は空、禪を行ずる者も亦た空、所用の法も亦た空なればなり。第二、第三、第四禪も亦た是の多し。慈悲喜捨、四無色定、八背捨、九次第定も亦た是の如し。須陀洹果を得るも亦た是の中に住せず、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得るも亦た是の中に住せず、辟支佛道を得るも亦た是の中に住せず。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何の因緣の故に、是の中に住せざるや」と、佛の言はく、「二の因緣の故に、是の中に住せず。何等をか二となす。一には、諸の道果は、性空にして住處なく、亦た所用の法もなく、亦た住者なきなり。二には少事を以て足れりと爲さずして是の念を作す、我れ應に須陀洹果を得ざるべからず、我れ必ず應當に須陀洹果を得べきも、我れは但だ應に是の中に住すべからず、乃至辟支佛道を我れ應に得ざるべからず、我れ必ず應當に(辟支佛道を)得べきも、我れ但だ應に是の中に住すべからず。乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るも應に住すべからず。何となれば、我れ初發意より已來た、更に餘心なく、一心に阿耨多羅三藐三菩提に向へばなりと。須菩提よ、菩薩は一心に阿耨多羅三藐三菩提の中に向ひて、餘心を遠離し、作す所の身口意の業は、皆な阿耨多羅三藐三菩提に應ず。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は是の一心に住して能く菩提の道を生ず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切諸法不生ならば、云何にして菩薩摩訶薩は能く菩提道を生ずるや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。一切の法は無生なり。云何に無生なるや。所作なく、所起なしとせば、一切の法は不生なるが故なり。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、有佛にも無佛にも、諸法の法相は常住ならずや」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。有佛にも無佛にも、是の諸法の法相は常住なり。衆生は是の法の法相に住することを知らざるを以て、是の爲の故に、菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に菩提道を生じて、是の道を用て、衆生の生死を拔出す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、生道を用ひて菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、不生道を用ひて菩提を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、不生非不生道を用ひて菩提

を得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。須菩提言さく、「世尊よ、云何にして當に菩提を得べきや」と。佛の言はく、「道を用ひて菩提を得るにあらず、亦た非道を用ひて菩提を得るにもあらず。須菩提よ、菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なりとせば、今菩薩は未だ作佛せざる時に、應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。云何にして諸佛を多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀と說き、三十二相、八十隨形好、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲ありとするや」と。

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何。佛は菩提を得るや不や」と。「不なり。世尊よ、佛は菩提を得ず。何となれば、佛は即ち是れ菩提、菩提は即ち是れ佛なればなり」と。「須菩提の問ふ所の如くんば、菩薩の時も亦た應に菩提を得べし。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩は六波羅蜜、三十七助道法を具足し、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を具足し、如金剛三昧を具足して住し、一念相應の慧を用て、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の時を名づけて佛となす。一切法の中に自在を得」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ云何に菩薩摩訶薩は佛國土を淨むるや」と。佛の言はく、「菩薩あり、初發意より已來、自ら身の麁業を除き、口の麁業を除き、意の麁業を除き、亦た他人の身口意の麁業を淨む」「世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の身麁業、口麁業、意麁業とをすや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「不善業、若くは殺生、乃至邪見、是を菩薩摩訶薩の身口意の麁業と名づく。復次に、須菩提よ、慳貪心・破戒心・瞋心・懈怠心・亂心・愚癡心、是を菩薩の意の麁業と名づく。復次に、戒不淨、是を菩薩の身口の麁業と名づく。復次に、須菩提よ、若し菩薩、四念處の行を遠離せば、是を菩薩の麁業と名づく。四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・空三昧・無相無作三昧を遠離するも亦た菩薩の麁業と名づく。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、須陀洹果の果を貪り、乃至阿羅漢果、辟支佛道を貪る、是れを菩薩摩訶薩の麁業と名づく。

【論】釋して曰く、上來、須菩提は常に種種に空法を問ひ、時を以て疑に會せり。其は已に寂滅無戲論の法を體し、猶ほ復た多く問へり。是を以て問はずして而も心に念ず。復次に、菩薩及び諸天あり、深く禪定に入りて語言を好まず、而も法利を得んと欲す。是の故に須菩提は言を發せずして而も心に念ぜり。

問うて曰く、須菩提に言なしと雖も而も世尊は言を以て答へたまへり。

答へて曰く、佛の身色は視て厭足なし、色に厭なきが如く、聲も亦た是の如し。語ると雖も而も細なる禪定の行を妨げず、是の故に佛は言を以て答へたまへり。

復次に、佛は寂滅の相に安立し、阿耨多羅三藐三菩提の中に於て住し、一切の法の若くは善、若くは不善等を分別したまはず、衆生の疑あつて而も問へば、佛は所問、所念に隨つて答へたまへり。是の故に須菩提と同じからず。

須菩提は是の六波羅蜜等の諸法甚深の義を聞くも、其の邊を得ること能はず。是の故に問へり。「何等か是れ菩薩道なりや。是の道を行じ、清淨に、六波羅蜜等の諸の善法莊嚴に著する所なきが如くなるやと。佛其の意を知り、須菩提に於ては益する所少しと雖も、諸の菩薩を增益せんが爲の故に答へたまはく、六波羅蜜等は是れ菩薩の道なり、六波羅蜜は是れ菩薩初發心の道なり。次に四禪、八背捨、九次第定及び三十七の道品を行じて、但だ涅槃を求め、十八空、佛の十力等を求め、微細に但だ佛道を求む。六波羅蜜の道は多く衆生のための故なり。三十七品等は、但だ涅槃の中に於て、聲聞辟支佛地を出過して、菩薩位の道に入る。是の三種は皆な是れ生身の菩薩の所行なり。所以何んとなれば、諸法を分別するが故なり。今又た一切の法は皆な是れ菩薩道なり。是の法性は生身の菩薩の所行にして諸法に好惡あるを見ず。諸法の平等相に安立するが故なり、此の中に佛自ら因緣を說きたまへり。菩薩は應に一切の法を學すべし、若し一法にして學せざれば則ち一切種智を得ること能はず、「一切法を學す」とは一切種門を用つて思惟し、籌量し、修觀し、通達するなり」と。

須菩提、佛に白さく、若し一切の法は一相、所謂空ならば、云何んぞ菩薩は一切法を學して、將た、無戲論相の法中に於て戲論を爲すこと無きや。所謂此・彼の諸法は、略して是の戲論の相を說けるなり。（即ち）此は東、彼は西、是れ上、是れ下、是れ常、是れ無常、是れ實、是れ虛、是れ世間、是れ出世間、乃至是れ二乘法、是れ佛法なり。佛は其の說を可とし、一切の法は空相なり、若し法は實定にして空ならずとせば、卽ち是れ無生無滅なり。無生無滅の故に四諦なく、四諦なきが故に佛法僧寶なし。是の如くんば三寶等の諸法は皆な壞せん。今諸法は實に空なり、乃至空相も亦た空なり、衆生は愚癡顚倒の故に著す。是の故に、衆生の中に於て、悲心を起し、拔出せんと欲するが故に、佛の身力を求め、衆生をして其の語を信受せしめ、顚倒を捨てて、諸法の實相に入らしめんと欲す、是の故に、菩薩は諸法は空なりと知ると雖も、而も衆生を利益せんが爲めに分別して說く。若し衆生自ら諸法の空なることを知らば、菩薩は但だ自ら空相の中に住して、一切法を學し分別することを須

ゐず。菩薩は菩薩道を行ずる時、初發意より已來、是の如く思惟す、「一切の法は、定實の法なく、但だ因緣和合より起り、是の衆因緣も亦た各各和合より起る」と。かくて乃至畢竟空に到る。畢竟空は唯是の一法のみ實にして、餘は無性の故に皆な虛誑なり。我れ無始世より來た、是の虛誑の法に著し、六道の中に於て、厭うて、苦惱を受く、我は今是の三世十方の佛の子なり。般若は是れ我か母なり、今復た虛誑の法を隨逐すべからず」と。是の故に菩薩は、乃至畢竟空の中にも亦た著せず、何に況んや餘法、所謂檀波羅蜜等をや。爾の時に、菩薩は菩薩の道を照明し、其の心、安穩にして自ら念ずらく、「我れは但だ著心を斷ずるのみなるに、道は自然にして至る」と。是のことを知り已つて念ずらく、「衆生は深く世間に著するも、而も畢竟空なり、亦た空も無性にして住處あることなし、衆生信受すべきこと難し。衆生をして是の法を信受せしめんが爲の故に、一切の法を學す。修行の生起は、是れ衆生を度する方便の法なり。衆生の心行の趣く所を觀、何の法を好み、何の事を念じ、何の志願する所かを知り觀る時、悉く衆生所著の處は皆な是れ虛誑・顚倒・憶想・分別の故に著して、根本の實事あることなきを知る。爾の時に菩薩は大に歡喜して是の念をなす、「衆生は度し易きのみ」と。所以何んとなれば、衆生の著する所は、皆な是れ虛誑無實なればなり。譬へば、人に一子有り、喜んで不淨の中にありて、戲れて土を聚めて穀となし、草木を以て鳥獸となし、而して愛著を生じ、人の(之を)奪ふ者あれば、瞋恚し、啼哭す。其の父、此の子は今愛著すと雖も、此の事は離れ易きのみと知り已つて以て大に自ら休するが如し。何となれば、此の物は眞にあらざるが故なり。菩薩も亦た是の如し。衆生の不淨の臭身、及び五欲に愛著するは、是れ無常にして種種の苦の因なりと觀じ、是の衆生は信等の五善根成就する時、即ち能く捨離するを得ることを知る。若し小兒の著する所、實に是れ眞物ならば、復た年百歲に至ると雖も、之に著すること轉た深うして、捨つることを得べからず。若し衆生の著する所の物定んで實有ならば、信等の五根を得と雖も、之れに著すること轉た深うして、亦た離るること能はず。諸法は皆な空にして虛誑不實なるを以ての故に、無漏清淨智の慧眼を得る時、即ち能く所著を遠離し、大に自ら慚愧す。譬へば、狂病の所作は法にあらざるも、醒悟の後には羞慚して顏なきが如し。菩薩は衆生の度し易きを知り已つて、般若の中に安住し、方便力を以て衆生を敎化す。汝等當に布施を行じて、饒財を得べきも、是の布施の果報を恃ん

で、自ら憍り高ぶること莫れ。此の中に堅實あることなし。皆な當さに破壞すべし。未だ布施せざる時と異ることなし。持戒等乃至十八不共法も亦た是の如し。是と諸法は淸淨にして大に益する所ありと雖も、皆な是れ有爲法にして、因緣より生じ、自性あることなし。汝等、若し是の法に著せば、能く苦惱を生ず。譬へば熱したる金丸は是れ實物なりと雖も、捉ふれば則ち手を燒くが如し。是の如く、菩薩は衆生を敎化し、菩薩の道を行じて、自ら所著なく、亦た衆生のために無所著を說く。無著の心を以て、檀波羅蜜を行ずるが故に、檀の中に住せざるなり。住せずとは、所謂布施の時、三種の相を取らず、亦た果報に著して自ら高うして、罪業を生ぜず、布施の果報の滅壞する時も亦た惱を生ぜず。尸羅波羅蜜、乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦た是の如し。此の中に、佛自ら不住の因緣を說くに二種あり。一には菩薩は深く空に入り、諸法の性を見ざるが故に住せず。二には小事を以て足れりとせざるが故に住せず。是の菩薩は異心あることなく、但だ一向に能く菩提の道を生ず。

須菩提、佛に白さく、若し一切の法は無生ならば、云何にして菩薩は能く菩提の道を生ぜんやと。佛、須菩提の意を可とし、「一切の法は無生なり、我れ實に處處に諸法の無生を說くも、凡夫のために說くにあらず、但だ無作の解脫を得て三種の業を起さざの者のために說くなり」と。復問ふ、「世尊よ、佛は自ら佛有るも佛無きも、諸法の法相は常住なりと說き給へり。聖人の法相空なるが如く、凡夫も亦た是の如きや」と。佛其の所說を可とし、「諸法の實相は常住なり、衆生は(之を)知らず解せざるを以ての故に、菩提の道を起す。但だ凡夫の顚倒の法を除かんがための故に名づけて道となす。若し決定して道として著す可きものあれば、卽ち復た是れも顚倒なり。道と非道と平等なる、卽ち是れ道なり。是の故に難ずべからず」と。須菩提問ふ、「云何に菩提を得べきや。生道を用ふるが故に得るや」と。佛の言はく、「不なり」と。何となれば生道とは、菩薩、是の有爲法の生滅の相と觀じて是を實と謂ふ、是の故に不なり。先に熱せる金丸の喩を說けるが如し。不生の法は卽ち是れ無爲無作の法なるが故に、亦た以て菩提を得べからず。生と不生との二は俱に過あるが故なり。生に非ず不生に非ずして菩提を得るや。答へて言はく、不なり。

問うて曰く、若し生と不生とは二つながら俱に過ありとせば、非生非不生は過あるべからず。何を以てか得ずと言ふや。

答へて曰く、若し非生、非不生は是れ好なり、是れ醜なりと分別すれば、相を取つて著を生ずるが故なり。故に過ありと言ふ。若し能く著せざれば、則ち是れ菩提の道なり。

須菩提問ふ、若し四句を以て得ざれば云何にして道を得るや。佛答へたまはく、「道を以てせず、非道を以てせざれば、則ち菩提を得」と。何となれば、菩提は卽ち是れ道、道は卽ち是れ菩提なればなり。菩提を諸法の實相と名くるは、是れ諸佛の所得の究竟實相にして變異あることなく、一切の法は菩提の中に入つて、皆な寂滅の相なること、一切の水は大海の中に入れば、同じく一味となるが如し。是の故に佛は、菩提の性は卽ち是れ道の性なりと說きたまへり。若し菩提の性と道の性と異らば、菩提を名けて、無戲論寂滅の相と爲さず。是の故に菩提は卽ち是れ道、道は卽ち是れ菩提と說くなり。復次に、是の二法異らば、道を行ずるも菩提に到るべからず。（何となれば）諸法の因果は不一不異なるが故なり。

須菩提復た問ふ、若し爾らば、菩薩、道を行ずれば、便ち是れ佛なるべし。所以、何んとなれば、道は卽ち是れ菩提なるが故なり。又佛は是れ菩薩なるべし、何となれば、菩提は卽ち是れ道なるが故なり。今、何を以てか、差別あり、佛に十力等、三十二相、八十隨形好ありと說くやと。須菩提は新學の菩薩の爲の故に、分別して佛を難じて、菩薩は卽ち是れ佛なるべしと（言ふに）。佛は反問を以て答へたまはく、「佛は菩提を得るや不や」と、答へて言さく、「不なり、何となれば、菩提は佛を離れず、佛は菩提を離れず、二法和合するが故に、是の佛は是れ菩提なり。是の故に難じて、菩薩は卽ち是れ佛なりと言ふべからず」と。此は總相の答なり。

問うて曰はく、佛は是れ衆生、菩提は是れ法なり、云何なれば佛は卽ち是れ菩提なりと言ふや。

答へて曰はく、先づ三十二相ありて身を莊嚴し、六波羅蜜等の功德ありて心を莊嚴するも、而も名けて佛となさず。菩提を得るが故に、之を名けて佛となす。是の故に、佛と菩提と異らずと言ふ。微妙淸淨なる五衆の和合を假に名けて、佛と爲す、（その）法は卽ち是れ五衆なり。五衆は假名を離れず、菩提は卽ち是れ五衆の實相なり。一切の法は皆な菩提に入るが故なり。是の故に佛は卽ち是れ菩提、菩提は卽ち是れ佛なり。但だ凡夫の心中に異りありと分別するのみ。

問うて曰はく、汝先に論議の中に說いて、菩提と道とは不一不異なりと言へり。經の中に何を以てか、道は卽ち是れ菩提、菩提は卽ち是れ道、佛は卽ち是れ菩提、菩提は卽ち是れ佛なりと說くや。

答へて曰はく、一異は倶に不實なりと雖も、而も多く一を用ふるが故に、此の中に菩提卽ち是れ道、道卽ち是れ菩提と說くも咎なし。常、無常の如きは是の二邊は常に多く煩惱を生ずるが故に用ゐず、無常は能く顚倒を破するが故に多く用ゆ、事旣に成辨ずれば亦た無常をも捨つ。此の中も亦た是の如く、若し種種の別異の法を觀ずるを以ての故に、多く著心を生ず。若し諸法を一相に(卽ち)若くは無常、若くは空等と觀ずれば、是の時、煩惱は生ぜず、著心少なきが故なり。是の欲に多く是の一を用ふ。實義の中に於ては一も亦た用ゐず。若し一に著すれば、卽ち復た是れ患なり。

復た次に、別異は無なるが故に、一も亦た不可得なり。相待の法なるが故なり。但だ不著の心を以て一相を取らざるが故に說くに咎なし。一は實ならざるが故に、菩薩卽ち是れ佛とすることを得ず。

復次に、今、佛は更に答へたまひ、須菩提は自ら因緣を說く。菩提は寂滅の相なりと雖も、而も菩薩は能く六波羅蜜等の諸の功德を具足し、金剛三昧に住し、一念相應の慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得。爾の時に、一切法の中に於て自在なるを名づけて佛となすを得。菩薩は道及び菩提の異らざることを知ると雖も、未だ諸の功德を具足せざるが故に名づけて佛となさず。又佛は諸事を畢竟し、願行滿足するが故に名づけて菩薩となさず。得者は是れ佛なり、法は是れ菩提なり。菩提を求むる者は是れ菩薩なり。須菩提は佛より菩提の相(及び)道の相を聞き衆生を成就し已れり。今、淨佛國土の事を問ふは、諸の阿羅漢、辟支佛は力あつて佛國土を淨むることを知ることなければ、是の故に問ふなり。

問うて曰はく、何等か是れ佛土を淨むることとなる。

答へて曰はく、佛土とは、百億の日月、百億の須彌山、百億の四天王等の諸天、是を三千大千世界と名づく。是の如き等の無量無邊の三千大千世界を名けて一佛土となし、佛は此の中に於て佛事を施作す。佛は常に晝に三時、夜に三時、佛眼を以て、遍く衆生を觀じて、「誰か善根を種ゆべき、誰の善根か成熟し增長すべき、誰の善根が成就して度するを得べき」と。是れを見

已つて、神通力を以て、所見に隨つて衆生を敎化す。心は外緣に隨逐して隨意の事を得るも、則ち瞋惱を生ぜず。不淨無常等の因緣を得るも、則ち貪欲等の煩惱を生ぜず。若し無所有、空の因緣を得るも、則ち癡等の諸の煩惱を生ぜず。是の故に諸の菩薩は、佛土を莊嚴し、衆生をして、度し易からしめんが爲めの故に、國土の中に乏少する所なし。無我心の故に則ち慳貪、瞋恚等の煩惱を生ぜず。佛國土有り、一切の樹木は常に諸法實相の音聲を出だす。所謂無生・無滅・無起・無作等なり。衆生は但だ是の妙音を聞いて異聲を聞かず、衆生は利根なるが故に便ち諸法實相を得。是の如き等の佛土の莊嚴を名けて、佛土を淨むとなす。阿彌陀等の諸經の中に說くが如し。佛答へたまはく「菩薩は初發意より來た、自ら麁の身口意業を淨め、亦た他人を敎へて麁の身口意業を淨めしむ」と。

問うて曰はく、若し菩薩、佛土を淨むるに、是の菩薩は無生法忍を得、神通波羅蜜に住し、然る後能く佛土を淨む。今、何を以てか初發意より來た。麁の身口意業を淨むと言ふや。

答へて曰はく、三業の淸淨なるは、但だ佛土を淨めんが爲のみにあらず、一切の菩薩道は皆な此の三業を淨む。初に身口意業を淨めて、後佛土を淨めんが爲に、自身を淨め亦た他人を淨む。何となれば、但だ一人のみ國土の中に生ずるものに非ず、皆な共に因緣を作せばなり。內法と外法とは、若くは善、若くは不善の因緣と作る。惡口の業多きが故に、地に荊棘を生じ、諂誑して曲心なるが故に、地は則ち高下平らかならず。慳貪多きが故に則ち水旱れて調はずして、地に沙礫を生ず。上の諸惡を作さざるが故に、地は則ち平正にして、多く珍寶を出す。彌勒佛の出づる時の如きは、人皆な十善を行ずるが故に地に珍寶多し。

問うて曰はく、若し布施等の諸善法は佛土を淨むるの果報を得ば、何を以てか但だ三業を淨むとのみ說くや。

答へて曰はく、善惡の諸法は、是れ苦樂の因緣なりと知ると雖も、一切の心心數法の中の如く、得道の時には智慧を大となし、攝心の中には定を大となし、作業の時には思を大となす。是の思業を得已つて身口意の業を起し、布施、禪定等は思を以て首となす。譬へば衣を縫ふに、針を以て導となすが如し。後世の果報を受くる時は業力を大となす。是の故に三業を說いて、

則ち一切の[三]善法を攝す。意業の中には盡く一切の心心數法を攝し、身口は則ち一切の色法を攝す、人身三種を行じて福德具足すれば則ち國土清淨なり。內法淨きが故に、外法も亦た淨し。譬へば、面淨きが故に、鏡中の像も亦た淨きが如し。毘摩羅詰經の中に、不殺生の故に、人皆な長壽なること、是の如し等と說くが如し。

問うて曰はく、身口意の麁業は是の事知り易し。須菩提は何を以ての故に問へるや。

答へて曰はく、麁細不定の故なればなり。求道の人の中には、布施に是れ麁善なるも、白衣に於ては細(善)となすが如し。小乘の中には不善業を麁となし、善業を細となすも、摩訶衍の中には、取善の法相、乃至涅槃は皆な名づけて麁となすが如く、麁細は不定なるを以ての故に問ふなり。佛は次第に爲に麁業の相を說きたまはく、「所謂奪命乃至邪見、是の三種の身業、四種の口業、三種の意業を、皆な名けて麁となす」と。復た次に、菩薩は六波羅蜜の法ふ破する慳貪等を、皆な名けて麁となす。

問うて曰はく、先に十善道を說きて已に慳貪等を攝す、何を以てか復た別說するや。

答へて曰はく、是の六法は十不善道に入らず、十不善道は皆な是れ衆生を惱す法なり。是の六法は、但だ衆生を惱すと爲さず、慳心の如きは、但だ自ら財を惜んで衆生を惱さざるなり。貪心に二種あり、一には但だ他の財を貪つて、未だ衆生を惱さず。二には貪心轉た盛にして求めて得ざれば則ち毀害せんと欲す、是を業道と名づく。能く業を起すを以ての故なり。瞋心も亦た是の如し。小なるものは業道と名づけず、其の能く惡處に趣くを以ての故に道となす。是の故に別して六法を說くに答なし。

問うて曰はく、六波羅蜜の中に已に戒を說けり。今何を以てか復た戒不淨を說くや。

答へて曰はく、破戒の法は是れ殺生等の麁罪なり。戒不淨は是れ微細の罪にして衆生を惱さず、飮酒等を十不善道に入れさるが如し。

復次に、五衆戒を破するを名づけて破戒とす。所受の戒を破せず、常に三毒のために覆はれて、心に戒を憶念せず、天福邪見に廻向して戒を持する、是の如き等を名づけて戒不淨となす。

【三】「善」別本には「業」と作る。

復次に、若し菩薩、心に四念處等の三十七品、三解脫門を遠離すれば、是れを麁業と名づく。所以何んとなれば、此の中に心は皆な實法を觀じ、涅槃に隨つて、世間に隨はず。若し四念處等の法を出づれば、心は則ち散亂す。譬へば蛇の行くに、本性は曲を好むも、若し竹筒に入るれば則ち直けれども、筒を出づれば還た曲るが如し。

復次に、若し菩薩、須陀洹果の證を貪れば、是を麁業とす。人、佛が須陀洹果は、三惡道に墮せず、無量の苦を盡くすこと、五十由旬の池水の如し。餘に在る者は、一滴二滴の如し」と說くを聞けば、則ち貪心を生ずるが如し。其の心牢固ならざるを以て、本と作佛を求めしは衆生の爲めなりしが、今は自身の爲めに證を取らんと欲す、是は佛を欺き、亦た衆生に負くとなす、是の故に麁と名く。譬へば、人の客を請じて、飲食を設けん欲して、竟に與へざれば、是れは則ち妄語にして、客に負くが如し。菩薩も亦た是の如く、初發心の時「我れ當に作佛して、一切衆生を度すべし」との願を作して、而も須陀洹を貪れば、是れ則ち一切衆生に負くなり。須陀洹果を貪るが如く、乃至辟支佛道を貪るも亦た是の如し。

卷の第九十三

第八十二淨佛國土品(餘)

【經】復次に、須菩提よ、菩薩が色相・受想行識相・眼相・耳鼻舌身意相・色聲香味觸法相・男相・女相・欲界相・色界相・無色界相・善法相・不善法相・有爲法相・無爲法相を取る。是を菩薩の麁業と名づく。菩薩摩訶薩は、皆な是の如き麁業の相を遠離し、自ら布施し、亦た他人をして布施せしめ、食を須ゆる(者)には食を與へ、衣を須ゆる(者)には衣を與へ、乃至種種の資生の須ゆる所は盡く之を給與し、亦た他人を敎へて種種に布施せしむ。是の福德を持して、一切衆生に與へ、之を共に廻向して、佛國土を淨むるが故なり。持戒・忍辱・精進・禪定・智慧も亦た是の如し。是の菩薩摩訶薩は、或は三千大千國土の中に滿つる珍寶を以て、三尊に施與し、是の願を作して言はく、我れ善根の因緣を以ての故に、我が國土をして皆な七寶を以て成ぜしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は天の伎樂を以て、佛及び塔を樂ひ、是の願を作して言はく、是の善根の因緣を以て我が國土の中に常に天樂を聞かしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、三千大千の國土の中に滿つる天香を以て、諸佛及び(佛)塔を供養し、是の願を作して言はく、是の善根の因緣を以ての故に、我が國土の中に常に天香あらしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は百味の食を以て、佛及び僧に施し、是の願を作して言はく、是の善根の因緣を以ての故に、我が國土の中の衆生をして皆な百味の食を得せしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、天香の細滑なるを以て、佛及び僧に施し、是の願を作して言はく、是の善根の因緣を以ての故に、我が國土の中の一切の衆生をして、天香の細滑を受けしめんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、意に隨ふところの五欲を以て、佛及び僧、並に一切衆生に施し、是の願を作して言はく、是の善根の因緣を以ての故に、我が國土の中の弟子及び一切衆生をして、皆な意に隨ふところの五欲を得せしめんと。是の菩薩は、意に隨ふところの五欲を以て、一切衆生と共に、淨佛國土に廻向し、是の願を作して言はく、我れ佛を得るの時、是の國土の中に天の五欲の如き心に應じて至らんと。

復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是の願を作して言はく、我れ當に自ら初禪に入り、亦た一切衆生を敎へて初禪に入らしめん。第二、第三、第四禪、慈悲喜捨心、乃至三十七助道法も、亦た是の如し。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切衆生

をして、四禪を遠離せず、乃至三十七品助道法を遠離せざらしめんと。

是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は能く佛國土を淨む。是の菩薩は爾所の時に隨つて菩薩道を行じ、是の諸願を滿足す。是の菩薩は自ら一切の善法を成就し、亦た一切衆生の善法をも成就せしむ。是の菩薩は身を受くること端正にして、化するところの衆生も亦た端正なることを得。所以何んとなれば、福德の因緣厚きが故なり。須菩提よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く佛國土を淨め、是の國土の中に、乃至三惡道の名なく、亦た邪見・三毒・二乘・聲聞・辟支佛の名なく、耳に無常・苦・空の聲を聞かず、亦た我の所有なく、乃至諸の結使煩惱の名もなく、亦た諸果を分別するの名もなく、風は七寶の樹を吹き、應に度すべき所に隨つて音聲を出す。所謂、空・無相・無作、諸法實相の音の如し。有佛にも無佛にも一切法、一切法相は空にして空の中に相あることなく、無相の中には則ち作なくして是の如きの法音を出し、若くは晝、若くは夜、若くは坐、若くは臥、若くは立、若くは行、常に此の法を聞く。是の菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方國土の中の諸佛は讃歎したまふ。衆生は是の佛名を聞いて、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。是の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時に說法するに、衆生の聞く者にして信ぜずして疑を生じ、是れは法にして是れは非法なりと言ふことあることなし。何となれば、諸法實相の中には、皆な是れ法にして非法あることなければなり。諸有の薄德の人は、諸佛及び弟子の中に於て善根を種ゑず、善知識に隨はず、我見の中に沒在し、乃至一切の種種の見の中に沒在し、邊見(所謂)若くは斷、若くは常に墮在す、是の如きの人は、邪見を以ての故に、非佛を佛と言ひ、佛を非佛と言ふ。非法を法と言ひ、法を非法と言ふ。是の如きの人は、法を破るが故に、身壞し命終つて、惡道地獄の中に墮す。諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、此の衆生の五道を往來するを見て、邪聚を離れ、正定聚の中に立たしめて、更に惡道に墮せざらしむ。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の佛國土の中の衆生は、雜識の心、(卽ち)若くは世間法、若くは出世間法、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲あることなし。乃至是の國土の中の衆生は、畢竟じて阿耨多羅三藐三菩提に至る。須菩提よ、是れを菩薩摩訶薩の佛國土を淨むとなす」と。

【論】釋して曰はく、復た麁業あり、諸法畢竟空の中に於て、相を取り、著心を生ず。所謂色相・受想行識相・眼相・乃至意相・色相・乃至法相・男相・女相、三界の善不善、有爲無爲の相等を取るなり。

問うて曰はく、男女相は是れ虛妄不實なるべし、餘の色等の善・不善の法は、若し相を取らずんば、云何にして能く色等を厭ひ、善法を成就せんや。

答へて曰はく、佛法の中に二種の空あり、一には衆生空、二には法空なり。衆生空を以て衆生相を破す、所謂る男女等の相

なり。法空を以て色等の法の中の虚妄の相を破す、一切の法を破する空の中に說くが如し。能く色等の善法を觀るに、幻の如く、化の如くにして、定實の相を取らず。厭心を得れば、則ち戲論(即ち)常・無常等を捨つ、是を名けて取相と爲さず。又色等及び善法は、皆な和合の性なり、空を行ずるが故に諸の惱煩を生ぜず。

問うて曰はく、一切の有爲法は假名和合の故に取るべからず。無爲法は是れ眞實の法なり。所謂る如・法性・實際なり、何を以てか取らざるや。

答へて曰はく、不取の相は是れ無爲法にして、無相なるを以て、名けて無爲法門となす。若し取相は便ち是れ有爲ならば、是の如き等の一切の虛誑の取相は不實にして、麁の身口意業を遠離す。菩薩は淸佛土を行ぜんと欲し、是の如き等の麁の身口意業を遠離して、自ら六波羅蜜を行じ、亦た他人に敎へて行ぜしむ。淸淨の因緣を共にするが故に則ち佛土淸淨なり。上には總相に說けり。下は別相の說なり。是の菩薩は三千大千世界に滿つる七寶もて、佛及び僧に施し、是の願を作さく、「我れ是の布施の因緣を以て、我が國土をして皆な七寶もて莊嚴せしめん」と。

問うて曰はく、三千大千世界に滿つる珍寶の若きは、何處より得るや、又諸佛賢聖は少欲知足なり、誰か是れを受くる者ぞ。若し凡夫の若きは厭足なけれど、何ぞ能く三千世界の物を受けんや。

答へて曰はく、是の菩薩は是れ法性生身なり。具足神通波羅蜜の中に住して、十方の佛に供養せんが爲めの故に、三千世界の珍寶の如きを以て供養するなり。又此の寶物は神通力の所作なれば、輕細にして妨げなきこと、第三禪の遍淨天の六十人が一針頭に坐して法を聽くに相妨礙せざるが如し。何に況んや大菩薩の、深く神通に入りて作る所の寶物をや。或は菩薩あり、身を變ずること須彌山の如く、十方の佛前に遍じて以て燈炷と爲り、佛若くは佛の塔廟を供養し、而も願を作して言はく、「我が國土をして常に光明あらしめ、日月の燈燭を須ゐず」と。或は菩薩あり、諸の華香・幡蓋・瓔珞を雨らして以て供養をなし、復た是の願を作す、「我が國土の衆生をして端正にして、華の如く身相嚴淨にして、醜陋あることなからしめん」と。是の如き等の種種の好色の因緣あり。復た菩薩あり、天の伎樂を以て、佛若くは佛の塔廟を娛樂す。是の菩薩は或る時は、神通力を以

ての故に、天の伎樂を作し、或は天王、轉輪聖王の伎樂を作し、或は阿修羅神龍王等の天の伎樂を作して供養し、我が國中に常に好音を聞かんことを願ふ。

問うて曰はく、諸佛賢聖は是れ離欲の人なり、則ち音樂歌舞を須ゐず、何んぞ伎樂を以て供養するや。

答へて曰はく、諸佛は一切法の中に於て、心に著するところなく、世間法に於て盡く須ふる所なしと雖も、諸佛は衆生を憐愍するが故に世に出で、供養に隨ふ者に應じて、願に隨つて福を得せしむべきが故に受く。華香を以て供養するが如きは、亦た佛の須ふる所に非ず、佛身は常に妙香ありて、諸天の及ばざる所なるも、衆生を利益せんが爲めの故に受く。是の菩薩は、佛土を淨めんと欲するが故に、好き音聲を求め、國土の中の衆生をして、好き音聲を聞いて、其の心を柔軟ならしめんと欲す。心柔軟なるが故に、化を受くべきこと易し。是の故に、音聲の因緣を以て而も佛を供養す。或は菩薩あり、三千大千世界に滿つる香もて諸佛若しくは塔に供養す。（卽ち）根香・莖香・葉香・末香、若くは天香、若くは變化香、若くは菩薩果報生の香なり。（是の如く供養して）是の願を作す、「我が國土の中に常に好香あつて、作者あることなからしめん」と。或は菩薩あり、百味を以て諸佛及び僧を供養す。有人の言はく、「能く百種（の羹）を以て供養するを、是を百味と名く」と。有人の言はく、「餅種の數五百にして其の味百あり、是を百味と名く」と。有人の言はく、「百種の藥草藥果もて、歡喜丸を作る、是を百味と名く」と。有人の言はく、「飮食羹餅に總べて百味あり」と。有人の言はく、「飯食に種種備足するが故に、稱して百味となす」と。人の飮食の故に百味なり。天の飮食は則ち百千種味なり。菩薩の福德生の果報の食、及び神通力の變化の食には則ち無量味ありて、能く人心を轉じて離欲淸淨ならしむ。是の四種の食を菩薩は因緣に隨つて、佛及び僧を供養す。是の故に國土の中に、自然に百味の飮食あり。或は菩薩あり、天の塗香を以てす。天竺は國熱く、又身臭きを以ての故に、香を以て身に塗りて諸佛及び僧を供養す。此の因緣を以ての故に、我が國土の衆生をして、天香細滑を受けしむるなり。

問うて曰はく、沙彌戒乃至一日戒を受くるにも尙ほ香を以て身に塗らず、云何なれば香を以て、佛及び僧を供養するや。

答へて曰はく、是の菩薩は、身の貴ぶ所の物を以て、所須の時に隨つて、用ゐて以て供養す。或は以て地を塗り、壁及び行

坐の處に塗るなり。

又た意に隨ふ五欲を以て、諸佛、及び僧、及び餘の衆生に供養す。是の菩薩は好き車馬・妻妾・伎樂・幡蓋・金銀・衣服・珍寶は出家の人の受けざる所なるを以て、則ち諸の衆生に施し、願を作して言はく、「我が國土の衆生をして、常に隨意に五欲を得せしめん」と。

問うて曰はく、此の五欲を、佛は、「火の如く、坑の如く、瘡の如く、獄の如く、怨の如く、賊の如くにして、能く人の善根を奪ふ」と說きたまへり。菩薩は何を以てか衆生をして五欲を得せしめんと願するや。又佛は、「弟子よ、應に衲衣にて乞食し、林樹の下に坐すべし」と說きたまへり。菩薩は何を以てか衆生の爲めに五欲を得んことを求むるや。

答へて曰はく、天上人中にては、五欲は是れ福德の果報なり。若くは今世、若くは後世に貧窮薄福の者は、自ら活くること能はざれば、則ち劫盜を行ひて、或は物主の爲に害せられ、或は財の爲めに他を殺し、或は詰問せられて作さずと妄言す。是の如く、次第に十不善を爲すは、皆な貧窮に由るが故に作すなり。若し人、五欲を具足すれば、則ち欲するところ意に隨ひ、則ち十不善を行ぜず。菩薩の國土は、衆生豐樂なれば、自ら恣にして、乏少するところなく、則ち衆惡なし。但だ愛・慢等の軟結使あるも、若しくは佛の所說を聞き、或は弟子の所說を聞けば、心柔軟なるを以ての故に、法を聞いて道を得べきこと易し。著心多しと雖も、利根の故に、無常・苦・空等を聞けば卽便ち道を得。譬へば垢膩の衣は則ち灰泥を以て之れを淹ふも、宿を經て水を以て之れを浣へば、一時に都て去るが如し。菩薩は衆生をして、著せしむるを欲せざるが故に五欲を以て施す。但だ一時に捨てしめんと欲するが故に、之を與ふるのみ。汝が先きに說けるが如く、佛は弟子に衲衣乞食を敎へたまへり。宿罪の因緣により、生れて惡世に在り、染著の心多し。若し好衣美食を得れば著心則ち深し。又た好き衣食を求めんとするが故に道を行ふを妨廢するなり。是の菩薩は佛國土を淨むるに、衆生に無量の福德を成就すれば、五欲一等なる故に復た貪著せず、亦た更に求めざるが故に妨ぐるところなし。又復た若し行者、五欲を離れて苦行を修すれば、則ち瞋恚を增長し、又復た五欲を憶念すれば、則ち煩惱を生ず。爾の時は則ち向ふ所なし。是の故に佛の言はく、「苦樂を捨て、智慧を用ゐ、中道に處せよ」

と。是の故に佛國土を淨むるに、五欲の施は妨なし。

問うて曰はく、若し爾らば、毘尼の中に、何を以てか、一比丘の「我れ佛法の義を知れば、五欲を受くるに道を妨げず」と言へるに、是の比丘は呵すること乃ち三たびに至り、止めずして擯出せしや。

答へて曰はく、佛法に二種あり、小乘と大乘となり。小乘の中の薄福の人は三毒偏に多し。婆差經の中に佛の說きたまふが如し。「我が白衣の弟子は一に非ず、二に非ず、乃至五百人を出づ。赤栴檀を受けて身に塗り、及び好香花を受け、妻子と共に臥し、奴婢を令せしむ。而も三結を斷じて須陀洹を得、三結を盡し、三毒を薄くして斯陀含を得」と。是の阿梨吒比丘は是の事を聞いて卽ち言はく、「五欲を受くと雖も而も道を妨げずとは、是の事を知らず、佛は誰が爲めにか說くや」と。佛は白衣のための故に說き、此の比丘は、出家法の中に持著して說くなり。是の須陀洹、斯陀含等は是の言を作さず、「我は形壽を盡くすまで欲を犯さず、有餘の三毒を以ての故に時時に道を忘れて而も婬心を發す」と。出家の人は、僧の中に於いて、口に自ら誓つて言はく、「我れ形壽を盡すまで婬欲を犯さず」と。佛の言はく、「若し出家の人、欲を犯せば則ち棄つ」と。是の比丘は自ら誓つて而も犯す、是れ一罪なり。佛の所制を知つて、而も故らに違犯す、是れ二罪なり。是の比丘は白衣の得道を見るが故に、而も自身を以て彼れと同じうす、是の故に罪に墮すなり。佛國土を淨むるに二種の衆生あり、若くは出家、若くは在家なり。在家は五欲を受くと雖も罪なく、亦た妨ぐる所なし。兜率陀の諸天、及び鬱單越の人の如く、五欲を受くと雖も重罪を起さず。出家の衆生は佛に聽すところに隨へば、出家は五欲を受くるも亦た過咎なし。小乘法の中に、阿梨吒比丘の爲めに說くは、薄福重罪の人は心多く悔ゆるが故なり。「佛國土を淨む」とは、世世に六波羅蜜、三解脫門を習行し、五欲を得と雖も亦た染著せず。經の中に說くが如し、「所謂菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて是の念を作す、「我れ當に自ら初禪に入るべく、亦た當に衆生を敎化して初禪に入らしむべし。四禪、四無量心、乃至三十七品も亦た是の如し。是の菩薩は是の願を作す、「我れ佛と作るの時は、盡く四禪乃至三十七品を行ず」と。是の如きの福德の故に、衆生は五欲を受くと雖も妨を爲すこと能はず。是の菩薩は無量阿僧祇の願を作し、爾所の時に隨つて道を行じ、盡く是の願を具足す。是の菩薩は一切の善法を皆な成就し、及び成就せる所の

衆生は、一切の善法を成就するが故に、身端正なることを得て、見る者厭ふことなく、亦た衆生を成就して、端正なることを得せしむ。須菩提よ、菩薩は應に是の如くにして佛國土を淨むべし。復次に、佛土を淨むれば、乃至三惡の名すらなし、何に況んや三惡道のあらんや。

問うて曰はく、諸佛は大慈悲心を以て、苦惱の衆生の爲めの故に出世す。若し三惡道なくんば何ぞ憐愍する所あらんや。

答へて曰はく、佛の出でたまへるは、衆生を度せんが爲の故なり。而も三惡道の衆生は度すべからず、但だ善根を種ゑしむべきのみ。是の故に佛を天人師と名づくるなり。若し天人なくして、但だ三惡道のみあらば、應に難あるべく、應に是の問を作すべきなり。

問うて曰はく、佛は衆生を憐愍して佛國土を淨むる中、何を以てか三惡道の衆生なきや。

答へて曰はく、一切衆生を憐愍すること平等にして異りあることなく、此の中に清淨業の因緣を說けば、是の國土の中に三惡道なきなり。又佛には但だ一國土のみに非ず、乃ち十方恒河沙の國土あり、佛に清淨國土あり、雜國土あり、雜國土の中に則ち具さに五道あり。佛國土を淨むるに或は人天の別異あり、或は人天の別異あることなし。過去天王佛の國土中の如きは唯だ佛は世尊にして以て法王となす。是の故に名づけて天王佛となし、復た國土あるも三毒邪見なし。

問うて曰はく、諸佛は但だ衆生の煩惱を除かんが爲めの故に出世す。邪見三毒は卽ち是れ煩惱なり。若し煩惱なくんば、出でて何の爲す所かあらん。

答へて曰はく、有人は言はく、「是の中には、大福德の因緣の故に、邪見三毒發らず、かるが故に無しと言ふ」と。

復次に、有人の言はく、「是の中の諸の菩薩は、皆な無生法忍を得、常に六波羅蜜等の諸の功德を修し、常に十方に遊んで衆生を度脫し、諸佛の修習する所の諸佛の三昧に於て、無數の聲聞、辟支佛を敎化するに勝れ、亦た阿鞞跋致の菩薩、成就衆生の菩薩、淨佛土の菩薩を敎化するに勝れ、佛道に近づくが爲めの故に利益轉た大なり。是の國土には二乘の名なしとは、（次に說くが如し）。

問うて曰はく、餘佛に三乘の敎化あり、豈に獨り劣らんや。

答へて曰はく、佛は五濁惡世に出で、一道に於て分つて三乘となすなり。

問うて曰はく、若し爾らば阿彌陀佛、阿閦佛等は五濁の世に生ぜず、何を以てか復た三乘あらん。

答へて曰はく、諸佛は初發心の時、諸佛の三乘を以て衆生を度するを見て、自ら願を發して言はく、「我れ亦た當に三乘を以て衆生を度すべし」と。

「亦た無常・苦・空・無我の名なし」とは、衆生は深く常樂等の顚倒に著するを以ての故に、爲に無常等の苦法を說くも、是の中には、常樂等の倒なきが故に無常苦を須ゐず、若し病なければ則ち藥を須ゐず、亦た我の所有なければ、乃至諸の煩惱結使なきも亦た是の如し。二乘なきが故に、亦た須陀洹等の諸果なく、但だ一向に諸法實相に著す。先きに無生法忍を得る者は、諸の三昧陀羅尼門を得、轉た復た諸地等の功德を增益す。「風七寶の樹を吹き、度すべき所に隨つて聲を出す」とは、是の菩薩は衆生をして、法を聞き易すからしめんと欲するが故に、七寶の樹に法の音聲を出すなり。寶樹は遍く國土に滿つるが故に、衆生は生れながらにして便ち法を聞きて餘心を生ぜず、但だ法心のみを生ずるなり。

問うて曰はく、諸佛には無量不思議の神通力あり、何を以てか變化して無量の身を作し、說法して衆生を度せずして何ぞ樹木の音聲を須ふるや。

答へて曰はく、衆生は甚だ多し。若し佛處處に身を現ずれば衆生は信ぜず、謂つて幻化なりとして心に敬重せず。有る衆生は、人より法を聞いて心、開悟せず、若し畜生より法を聞かば則便ち信受す。本生經に說くが如し、「菩薩は畜生身を受けて人の爲めに法を說くに、人は希有なるを以ての故に信受せざるなし」と。又謂はく、「畜生は心直くして誑かさざるが故なり」と。有人の謂はく、「畜生は是れ有情の物にして皆な欺誑あり、樹木は無心にして而も音聲あれば則ち皆な信受す」と。所謂る空・無相・無作にして有佛にも無佛にも一切法は常に空なり。空なるが故に無相なり。無相なるが故に無作無起なり。是の如き等の法は晝夜に常に出づ。餘の國土にては神通力、口力を以て種種に變化するも、此の中にては、常に自然の音聲もて佛國土を淨め、

佛は常に諸佛の爲めに讃せられて、大に功德を作すが故に、能く是の如きの淨國を得。若し淨國の佛名を聞けば則ち畢定して作佛するなり。

問うて曰はく、餘佛は種種に勤苦して說法するも衆生は尙ほ道を得ず、何を以てか但だ佛の名を聞くのみにして便ち道を得るや。

答へて曰はく、餘處の佛、種種に法を說くに、衆生或は道を得、或は善根を得て、終に說を空しうせず。若し是の佛の名を聞けば畢に阿鞞跋致に至る。今(道を)得とは言はず。

問うて曰はく、一切の佛は、若し人、好心もて名を聞けば、皆な當に佛に至るべし。法華經の中に說くが如くんば、福德の若くは大なるも、若くは小なるも、皆な當に作佛すべし。何を以てか獨り淨國の佛のみを說くや。

答へて曰はく、人は餘佛の名字を聞くも、生を受くるに人と異なることなく、但だ一切智あつて道を得るを異れりと爲すと謂ひ、心に敬重せざるが故に、善根を種ゆと雖も、亦た深きこと能はず。是の中には、是れ法性身の佛は身は無量にして無邊の光明あり、說法の音聲遍く十方國土に滿ち、國中の衆生は皆な是れ佛道に近き者なり。無量阿僧祇由旬の衆中に說法し。無量阿僧祇の日月に勝る光明あり、常に身より佛を出し、衆生、見れば、則ち見ることを得せしむ。若し聽かされば則ち見ず。是の佛は一一の毛孔の邊より、常に無量無邊阿僧祇の佛を出だし、一一の諸佛は等うして異なることなく、化佛の邊に於て展轉して復た出ず。度すべき衆生に隨つて、佛を見るに優劣あり、根本の眞佛には大小の異りを分別することあることなし。是の如き等をば若くは見、若くは名を聞き、若くは是の如き功德を聞いて深信敬重するが故に、種ゆる所の善根、云何に畢定して作佛せざることあらんや。復次に、是の佛の法を說く時、疑有る者なく、乃至一人の是の法を非となすと言ふことなし。佛の口づから說きたまふところは悉く皆な是れ法なり。

問うて曰はく、人は釋迦文尼佛より法を聞いて、疑を生ずる者多し。

答へて曰はく、佛は是の中に自ら因緣を說きたまはく、人あり、薄福にして善根を種ゑず、善知識を得ざるが故に疑を生じ、

我見・邊見・邪見等に著す。諸の煩惱覆ふが故に。佛にあらざるを是れ佛なりと言ひ、是の佛を佛にあらずと言ふ。深く善根を種ゑず、善師に順はず、三毒邪見一時に發起して依る所なし。意に任せて自ら恣にするに隨ひ、若くは邪見を見て、其の意に順ふが故に、是れを一切智と言ふ。諸佛の畢竟空と說きたまふを見て、其の意に順はずして便ち非佛なりと言ひ、非法を法と言ひ、法を非法と言ふ。是の如きの人は、諸佛の所に於て多く疑を生ず。多く疑を生ずるが故に心に悔あり。是の淨佛國の中には、是の如きの罪人なきが故に疑を生ぜず。佛の言はく、「是の如きの罪人は、諸法實相を破するが故に、死して地獄惡道の中に墮つ。諸の菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の罪人の生死の中に往來するを見、佛の神通力を以て衆生を拔出し、正定聚の中に住せしめ、三惡趣に墮せしめず、是れを淨佛土と名く」と。是の佛土の中には是の如き諸の過なく、具足せざることなく、世間・出世間、有漏・無漏、有爲・無爲等の中に於て障礙あることなし。所謂る國土は七寶にして、衆生の身は端正にして、相好は莊嚴し、無量の光明あり、常に法音を聞き、常に六波羅蜜乃至十八不共法を遠離せず。是の中の衆生は皆な畢竟じて阿耨多羅三藐三菩提に至る。

問うて曰はく、上には佛の名を聞けば畢定して佛に至るとし。此には諸法に於て障礙なければ必ず佛と作るを得るとす。何の差別ありや。

答へて曰はく、此の中の衆生は、常に佛を見、常に法を聞いて深く善根を種ゑ、多く佛法を集むるが故に、疾かに作佛を得。(佛の)名を聞くものは、倶に畢竟らて定ると雖、而も小にして如かず。是の如き等を名けて淨佛國土の相となす。十地の中に、菩提を莊嚴するに說くが如し。

第八十三畢定品[一]

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の菩薩摩訶薩は、畢定と爲すや、畢定ならずとなすや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は、畢定にして不畢定にあらず」と。「世尊よ、何處

【一】「畢定品」。別本には「畢」を「必」に作る。

にか畢定する。聲聞道の中とや爲ん、辟支佛道の中とや爲ん佛道の中とやせん」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩は、聲聞・辟支佛道の中に畢定するに非ず、是の佛道の中に畢定す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、初發意の菩薩は畢定すとや爲ん、最後身の菩薩は畢定すとや爲ん」と。佛の言はく、「初發意の菩薩も亦た畢定し、阿鞞跋致の菩薩も亦た畢定し、後身の菩薩も亦た畢定す」と。

「世尊よ、畢定の菩薩は墮して惡道の中に生ずるや不や」と。「不なり、須菩提よ。汝が意に於て云何、若くは八人、若くは須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛は惡道の中に生ずるや不や」と。「不なり。世尊よ」と。「是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、初發意より已來、布施・持戒・忍辱・精進して禪定を行じ、智慧を修し、一切の不善業を斷ずるに、若くは惡道に墮し、若くは長壽天、若くは善法を修するを得ざる處に生じ、若くは邊國に生じ、若くは惡邪見家、無作見家に生ず。是の中には佛の名なく、法の名なく、僧の名なきは、是の處あることとなし。須菩提よ、初發意の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に於て、深心を以て十不善道を行ぜば、是の處あることとなし」と。「世尊よ、若し菩薩摩訶薩、是の如きの善根の功德の成就するありて、佛の自ら本生を說くが如く、不善の果報を受けなば、是の時、善根何の所にか在りとなすや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は、衆生を利益せんが爲めの故に、隨つて身を受け、是の身を以て衆生を利益す。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、畜生となる時、是の方便力あり、若し怨賊の來つて殺害せんと欲せば、是の無上の忍辱、無上の慈悲心を以て、身を捨てて怨賊を惱さず。汝、諸の聲聞・辟支佛は是の力あることとなし。是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、菩薩摩訶薩は、大慈悲心を具足せんと欲し、衆生を憐愍し、利益せんが爲めの故に、畜生の身を受くと。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、菩薩摩訶薩は、何等の善根の中に住してか、是の如きの諸の身を受くるや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩摩訶薩は、初發意より乃ち道場に至るまで、其の中間に於て、善根として具足せざる者あることなく、具足し已つて當に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、菩薩摩訶薩に、初發意より應當に學して、一切の善根を具足すべし。善根を學び已つて、當に一切種智を得、當に一切煩惱の習を斷ずべし」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何なれば菩薩摩訶薩には、是の如きの白淨なる無漏法を成就して、而も惡道畜生の中に生ずるや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「汝が意に於て云何。佛には白淨なる無漏法を成就するや不や」と。須菩提言さく、「佛に一切の白淨なる無漏法を成就す」と。「須菩提よ、若し佛が自ら畜生の身を化作して佛事をなし、衆生を度すとせば實に是れ畜生なりや不や」と、須菩提言さく、「不なり」と。佛の言はく、「菩薩摩訶薩も亦た是の如く、白淨なる無漏法を成就するも、衆生を度せんが爲めの故に、畜生の身を受け、是の身を用つて衆生を敎化す」と。佛、須菩提に告げて言はく、「阿羅漢の如きは、變化身を作して、能く衆生をして歡喜せしむるや不や」と。須菩提言さく、「能くす」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。須菩提よ、菩薩摩訶薩は、是の白淨の無漏法を用つて、度すべき衆生に隨つて身を受け、是の身を以て衆生を利益するも、亦た苦を受けず。須菩提よ、汝が意に於て云何、幻師が種種の形、若くは象馬・牛羊・男女等を幻作し、以て衆人に示すに、須菩提よ、是の象馬・

牛羊・男女等は實ありや不や」と。須菩提言さく、「實ならざるなり。世尊よ」と。佛の言はく、「是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、白淨の無漏法を成就して、種種の身を現作し、以て衆生に示すが故に、是の身を以て一切の饒益するも、亦た衆苦を受けざるなり」と。須菩提、佛に白して言さく「世尊よ、菩薩摩訶薩の大方便力は聖無漏の智慧を得て、而も度すべき所の衆生の身に隨つて、種種の形を作し、以て衆生を度す。

【論】問うて曰はく、上の阿鞞跋致品の中に、是の如きの相は、是れ阿鞞跋致、是の如きの相は阿鞞跋致にあらず、阿鞞跋致は即ち是れ畢定なりと說けり。(然るに)須菩提は今何を以てか更に問へるや。

答へて曰はく、是の般若波羅蜜には種種の門あり、種種の道あり。阿鞞跋致は是れ一門の中の說なり。今畢定を問ふは、異門を問へるなり。

復次に、佛心の中には、一切の衆生、一切の法は皆な畢定なり。人は智及ばざるを以ての故に、名けて不畢定となし、佛は無量阿僧祇劫に大功德を積むと雖も、必ず退いて小乘と作る者を知り、亦た微細の蜫蟲にして未だ善心あらずと雖も、爾所の劫を過ぎて發心し、後ち當に作佛すべきを知る。一切の法は皆な是の如く、是の因に從つて、是の果を得ることを定んで知る。是の故に佛は、一切法の中に無礙なりと名づく。(そは)畢定して知るを以ての故なり。

復次に、須菩提は、法華經の中に、「佛の作す所の少功德に於て、乃至戲笑して、一たび南無佛と稱するにも、漸漸に必ず當に作佛すべし」。說くを聞き、又阿鞞跋致品の中には、退と不退とありと(說くを)聞き、又復た聲聞の人は、皆な當に作佛すべしと聞き、若し爾らば、退あるべからず。法華經の中に畢定を說くが如きも、餘經には退あり、不退あるを說く。是の故に今、畢定とやせん、不畢定とやせん」と問へり。是の如き等の種種の因緣の故に定・不定を問へるなり。佛答へたまはく、「菩薩は是れ畢定なり」と。須菩提は、心に入涅槃を以て畢定となせり。是の故に、何の道の中にて畢定と爲すやと問ふ。佛答へたまはく、「不畢定は二乘なり、但だ大乘の中に於てのみ畢定なり」と。佛道を求むる者には上中下あり、是の故に問ふらく、「初發意とせんや、阿鞞跋致とせんや、最後身の畢定とせんや」と。須菩提意に謂へらく、「阿鞞跋致已上は畢定なり、佛道の中に住するが故に」と。佛は、「三種の菩薩は皆な畢定なり」と答へたまへり。畢定とは、必ず當に作佛すべきことなり。

問うて曰はく、上の品の中に說くが如くんば、佛は佛眼を以て十方の菩薩を見るに、佛を求むるものは恒河沙の如くにして、阿鞞跋致を得る者は、若くは一人、若くは二なり。今何を以てか三種の菩薩は盡く皆な畢定すと言ふや。

答へて曰はく、我れ先きに已に般若は甚深にして無量の門ありと說けり。有るは、「諸の菩薩は退いて畢定ならず」と說き。有る處にては「菩薩は畢定して退かず、阿鞞跋致品の中の如し」と說く。須菩提佛に問らく、「菩薩の退する者は何處に於て退するや。色に從ふとやせん、受想行識乃至十八不共法に從ふとやせん。畢竟空の故に諸法は皆な不退なり、此の中に佛は何を以てか更に不退を說くや」と。

問うて曰はく、是の二義は何れか是れ實なる。

答へて曰はく、二事皆な實なり、佛口の所說は實ならざる者なし。佛の如きは或は諸法は空にして所有なしと說き、或は布施持戒等は是れ有爲なりと說き。初發心の者には、諸法は有爲なりと說き、久學の人にして善法に著する者には、諸法は空にして所有なしと、說きたまふ。阿耨多羅三藐三菩提を懈怠して牢固ならさる者、是の如き人は、聲聞道に從つて得度すべし、而も聲聞を求めされば、久しく生死の中に於て苦を受く。是の故に、「發心するものは恒河沙の如きも、阿鞞跋致を得る者は、若くは一、若くは二なり」と說く。衆生是を聞き已つて、能く衆苦を受くるに堪ふる者は、阿耨多羅三藐三菩提を畢定し、若し能はさる者は、聲聞辟支佛道を取るなり。人あり。佛を得るに堪任すれど、而も大悲心薄く、自ら身を愛すること重し。此の人は佛は得難く、多く退く者ありと聞いて、是の念を作す、「我れは或は佛を得ること能はず。早く涅槃を取らんには如かず、何を用てか、世世に勤苦を受くることを爲さん」と。是の人の爲めに故に、「一切の菩薩は乃至初發心に皆な畢定す」と說くこと、法華經の中に說くが如し。

問うて曰はく、若し菩薩皆な畢定して佛ならば、何を以ての故に種種に二乘を呵し、菩薩が二乘の證を取るを聽さざるや。

答へて曰はく、佛道を求むる者は、應に遍ねく法性を知るべし。是の人は老病死を畏るるが故に、法性に於て少分に證を取る。便ち自ら止息して佛道を捨てて衆生を度せず、（これ）諸佛菩薩の呵責する所たり。汝は捨て去らんと欲するも會して離る

ることを得ず、阿羅漢の證を得る時は、諸の菩薩の深三昧を求めず、又廣く衆生を化せず、是れ則ち佛道を迂廻して稽留するなり。

問うて曰はく、阿羅漢の先世の因緣にて受くる所の身は、必ず應當に滅すべし、何處に住在してか佛道を具足するや。

答へて曰はく、阿羅漢を得る時は、三界の諸漏の因緣盡きて、更に復た三界に生ぜざるも、淨佛土あり、三界を出でて乃至煩惱の名なし。是の國土の佛の所に於て法華經を聞きて佛道を具足す、法華經に說くが如し、(阿)羅漢あり、若し法華經を聞かずして、自ら滅度を得と謂はば、我れ餘國に於て爲めに是のことを說かん、汝は皆な當に作佛すべし」と。

問うて曰はく、若し阿羅漢、淨佛國土に往きて法性身を受けなば、是の如く疾かに作佛し得べし。何を以てか迂廻し稽留すと言ふや。

答へて曰はく、是の人は小乘に著するの因緣もて、衆生を捨て、佛道を捨て、又復た道を得と虛言す。是の因緣を以ての故に、生死の苦惱を受けずと雖も、菩薩に於ては根鈍にして、疾かに佛道を成ずること能はず、直往の菩薩に如かざるなり。

復次に、佛法は五不可思議の中に於て最も第一なり。今は漏盡の阿羅漢還つて作佛するは、唯だ佛のみ能く知りたまふ。論議する者は正しく其事を論ずべきも測り知ること能はず。是の故に應に戲論すべからずと言ふ。若し求めて佛を得たらん時には乃ち能く了知せん。餘人は信ずべきも、而も未だ知るべからず。

「畢定の菩薩は三惡道の中に墮するや不や」とは、須菩提、佛の無量の本生の因緣に或は象・鹿・龜・鴿・孔雀・鸚鵡等の種種の苦を受くるを說くを聞く。是の故に佛に問ふ、「世尊よ、若し菩薩、是の如き等の畜生の身を受けなば、云何にして一切菩薩は畢定すと言ふや」と。畢定とは、即ち是れ阿鞞跋致なり、阿鞞跋致とは、三惡趣に墮せざるなり。佛は反問して答へたまはく、「汝が意に於て云何。八人等の聖人は三惡道に墮すとなすや不や」と。須菩提、思惟すらく、「是の諸の聖人は聖道に入るが故に、三惡道に墮するの因緣なし」と思惟し已つて答へて言はく、「不なり」と。佛の言はく、「菩薩も亦た是の如し。三惡道に墮するの因緣盡くるが故に、云何んぞ三惡道に墮せん」と。三惡道に墮する因緣とは、所謂る諸の不善法なり。是の菩薩は、初發心よ

り已來、布施、持戒等の諸の善法を修習して、諸の殺生等の十不善道を斷ず。若し是の人にして三惡道に墮せんか、是の處あることなし。何となれば、諸の惡法を滅して善法を增益するが故なり。不善道に上中下あり、上は地獄に墮ち、中は畜生に墮ち、下は餓鬼に墮つ。是の菩薩は三種已に盡き、深心に衆生を悲念す、是の故に墮せざるなり。

問うて曰はく、若し爾らば三惡道は中に於て生ぜざるべし、是の菩薩は福德多し、何を以てか長壽天の中に生ぜざるや。

答へて曰はく、是の菩薩は衆生を憐愍し、六波羅蜜を行じて、能く禪波羅蜜に入ると雖も、慈悲行に和合して禪味に著せず、命、終に盡きんと欲するに欲界の法を念ふが故に禪道を退く。彼の中にては苦惱なきを以て深く禪味に著して、得度すべきこと難きが故に、長壽天に生ぜず。邊國には障礙ありて、善法を修することを得ざるが故に生ぜず。所以何んとなれば、是の菩薩は慳法の根本を拔出せり。慳法の因緣の故にこそ邊國の法を知らざる處に生ずるなり。

復次に、是の菩薩常に中道を好み、二邊を捨つるが故に邊國に生ぜず。邊國は、三寶の名なく、七衆を識らず、但だ今世の現事を貴んで、福德の道法を貴ばざるが故に邊地と名く。但だ邊國に生ずるのみならざるが故に名づけて邊地となす。若し三寶を識れば、罪福相續の因緣を知り、諸法の實相を解す。是の人は閻浮提の外に生ずと雖も、名けて邊となさず、何に況んや閻浮提の中に生ずるをや。是の菩薩は常に樂しんで、他の爲に說法し、亦た深く善法を愛するが故に、意に隨つて善き衆生と共に生ずることを得。所謂中國の人と爲す。中國に於ても邪見の家に生ぜず。何となれば、是の菩薩は世世に常に自ら正見を行じ、亦た他に正見を敎え、正見の法を讃し、正見を行ずる者を歡喜し讃歎す。是の故に惡邪見の家に生ぜず。

問うて曰はく、是の菩薩は大福德智慧力もて、應に邊地邪見の家に生じて之れを敎化すべし。何を以てか畏れて生ぜざるや。

答へて曰はく、菩薩に二種あり、一には大力を成就する菩薩、二には因緣に屬する新發意の菩薩なり。大菩薩は、衆生の爲めに、度すべき所に隨つて身を受け、邊地邪見を避けず。新發意の菩薩は、若し是の處に生ずれば、既に人を度すこと能はず、又た自ら敗壞す。是の故に生ぜず。譬へば、眞金は泥にあるも終に敗壞せず、銅鐵は則ち壞するが如し。邪見とは所謂る無作の見なり。六十二種は皆な是れ邪見なりと雖も、無作は最も重し。所以何んとなれば、無作は功德を作して涅槃を求むべから

すと言へばなり。若くは天作と言ひ、若くは世界始來と言ふは、是れ邪見なりと雖も、而も福德を作すを遮せず、無作は大惡なるを以ての故に生ぜず。又初發心の菩薩は、深き惡心もて、十不善道を行ずとは、是の處あることなし。何となれば、是の菩薩は一心に廻向し、阿耨多羅三藐三菩提を貴重して、世間の法を貴ばず。是の人は未だ欲の因緣を離れざるが故に、諸の煩惱を起すと雖も、終に深心に惡を作さず。杖楚を加ふと雖も終に命を奪はず、他の財を取るも、其をして命を失はしめず。すの菩薩は一切の不善法斷じ、一切の善法を修集するが故に八難處に生ぜず、常に八好處を得。須菩提問ふ「若し菩薩、是の如き善根を成就する有らば、云何んぞ本生の因緣もて鹿馬等となるや」と。佛答へたまはく、菩薩は實には福德有りて、善根を成就し、衆生を利益せんが爲めの故に畜生の形を受くるも、亦た畜生の罪なし。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、所謂る菩薩は畜生の中にありて怨賊を慈愍するも、阿羅漢辟支佛にはあることなき所なり。阿羅漢辟支佛は怨賊來つて害すれば、報を加へずと雖も、愛念し供養し供給すること能はず。菩薩の本身の如きは、六牙の白象となり、獵師が毒箭を以て胸を射るに、爾の時に菩薩たる象は、鼻を以て獵者を擁抱して、餘象をして害することを得せしめず。雌象に語つて曰はく「汝は菩薩の婦たり、何に緣つてか惡心を生ぜん。獵師は是れ煩惱の罪にして人の過にはあらざるなり。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ば、當に其の煩惱の罪を滅除すべし。譬へば鬼の人に著くや、呪師は來つて但だ鬼を治して人を瞋らざるが如し。是の故に其の罪を求むる莫れ」と、徐ろに獵者に問ふ「汝は何を以てか我れを射るや」と。答へて言はく「我れ汝が牙を須む」と。象卽ち石の罅に就いて牙を拔いて之を與ふ。血肉倶に出づれども以て痛しとなさず、糧食を供給して道徑を示語せり。是の如き等の慈悲は、阿羅漢辟支佛には有すること無き所なり。是の如き好心にして云何んぞ畜生の身を受けんや、當に知るべし、是れ變化して衆生を度するものなるを。

問うて曰はく、何を以てか、人身を作して爲めに說法せずして、而も此の獸身を作すや。

答へて曰はく、有時は、衆生人身を見れば則ち信受せず、畜生身の說法するを見れば、則ち信樂を生じ、其の敎化を受く。又菩薩の大慈悲心を具足せんと欲し、其の實事を行ぜんと欲するに、衆生是れを見て驚喜し、皆な道に入ること得ればなり。

巻の第九十四

第八十三畢定品（餘）

【經】「世尊よ、菩薩摩訶薩は何等の白淨法に住してか、能く是の如きの方便力を作して、而も染汚を受けざるや」と。佛の言はく、「菩薩は般若波羅蜜を用つて、是の如きの方便力を作し、十方の恆河沙の如き國土の中に於て、衆生を饒益して亦た是の身を貪著せず。何となれば、著者・著法・著處、是の三法は皆な自性空にして不可得なるが故なり。空は空に著せず、空中には著者なく、亦た著處もなし。何となれば、空中に空相は不可得なればなり。須菩提よ、是れを不可得空と名づく。菩薩は是の空中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るなり」と。

「世尊よ、菩薩は但だ般若波羅蜜の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得、餘法の中に住せざるや」と。「須菩提よ、隨し法として般若波羅蜜に入らざるものありや不や」と。「世尊よ、若し般若波羅蜜の自性空なれば、云何にして一切の法は皆な般若波羅蜜の中に入るや。世尊よ、空の中に、法として若くは入り、若くは入らざるものあることなし」と。「須菩提よ、一切法・一切法相は空なりや不や」と。「世尊よ、空なり」と。「須菩提よ、若し一切法・一切法相は空ならば、云何にして一切法は空中に入らずと言ふや」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切法空の中に住して能く神通波羅蜜を起し、是の神通波羅蜜の中に住して、十方の恆河沙等の如き國土に到り、現在の諸佛を供養し、諸佛の說法を聞き、諸佛の處に於て善根を種ゆるや」と。佛、須菩提に告げてたはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是の十方の恆河沙等の如き國土を觀ずるに皆な空なり。是の國土の中の諸佛も亦た性空なり。但だ名字を假るが故に諸の佛身を現ずるのみ。假る所の名字も亦た空なり。若し十方の國土及び諸佛の性は空ならずとせば、空に偏ありとなす。（然るに）空は不偏なるを以ての故に、一切法の一切法相は空なり。是を以ての故に一切法の一切法相は空なり。是の故に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を用つて神通波羅蜜を生じ、是の神通波羅蜜の中に住し、天眼・天耳・如意足・他心智・宿命智を起して衆生の生死を知る。若し菩薩、神通波羅蜜を遠離せば、衆生を饒益すること能はず、亦た阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。是の菩薩摩訶薩の神通波羅蜜は、是れ阿耨多羅三藐三菩提の道なり。何となれば、是の天眼を用つて、自ら諸の善法を見、亦た他人を敎へて諸の善法を得せしむればなり。善法に於て亦た著せず。諸の善法は自性空なるが故に、空は著する處なければなり。若し著すれば則ち味を受く。是の空の中には味あることなし。是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、能く是の如きの天眼を生じ、是の天眼を用つて一切法空を觀じ、是の法空を見て、相を取らず、業を作らず、亦た人の爲めに是の法を說くも、亦た衆

生の相を得ず。衆生の名を得ず。是の如く菩薩薩訶薩は、無所得の法を用つての故に、神通波羅蜜を起す。是の神通波羅蜜を用つて、神通の作すべき所の者を能く作す。是の菩薩は天眼通を用つて人眼に過ぎ、十方國土を見る。見已りて飛んで十方に到り、衆生を饒益するに、或は布施を以てし、或は持戒を以てし、或は忍辱を以てし、或は精進を以てし、或は禪定を以てし、或は智慧を以てして衆生を饒益す。或は三十七助道法を以てし、或は諸禪解脱三昧を以てし、或は聲聞法を以てし、或は辟支佛法を以てし、或は菩薩法を以てし、或は佛法を以てして衆生を饒益す。(復た)慳者の爲めには是の如きの法を説く、「諸の衆生よ、當に布施を行ずべし、貧窮は是れ苦惱の法なり。貧窮の人は自ら益すること能はず、何ぞ能く他を益せん。是を以ての故に、汝等當さに勤めて布施し、自身にも樂を得、亦た能く他をして樂を得せしめ、貧窮を以ての故に共に相食噉すること莫れ。(そは)三惡道を離るることを得ざればなり」と。(復た)破戒の者の爲めには説法すらく「諸の衆生、戒法を破るは大苦惱あり。破戒の人は自ら益すること能はず、何ぞ能く他を益せん。破戒の法は苦果の報を受け、若くは地獄に在り、若くは餓鬼に在り、若くは畜生に在り。汝等三惡道の中に墮せば、自ら救ふこと能はず、何んぞ能く他人を救はん。是を以ての故に、汝等、破戒の心に隨ひて、死する時悔あるべからず。若し共に相ひ瞋淨する者あらば、是の如きの法を説け、諸の衆生よ、共に相ひ瞋ること莫れ、瞋は心を亂して、人、善法に順はず。汝等、今共に相瞋りて心を亂せば、或は地獄、若くは餓鬼、畜生の中に墮せん。是を以ての故に、汝等、應に一念の瞋恚心をも生ずべからず、何に況んや多(念)をや。(また)懈怠の衆生の爲めには、諸法して精進を得せしめ、散亂の衆生には禪定を得せしめ・愚癡の衆生には智慧を得せしむるも、亦た是の如し。婬欲を行ずる者には不淨を觀ぜしめ、瞋恚の者には慈心を觀ぜしめ、愚癡の衆生には十二因緣を觀ぜしめ、非道を行ずる衆生には正道、所謂る聲聞道、辟支佛道、佛道に入らしめ、是の衆生の爲めに是の如く説法す、汝等の著する所の是の法は性空なり、性空の法の中には、著すること得べからず。不著の相は是れ空相なりと。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、神通波羅蜜の中に住して、衆生の爲めに利益を作す。須菩提よ、菩薩若し神通を遠離せば、衆生の意に隨つて善く法を説くこと能はず。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、應に神通を起すべし。須菩提よ、譬へば、鳥の翅なければ、高く翔けること能はざるが如く、菩薩は神通なければ、意に隨つて衆生を教化すること能はず。是を以ての故に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、應に諸の神通を起すべし。諸の神通を起し已りて、若し衆生を饒益せんと欲せば、意に隨つて能く益す。是の菩薩は天眼を用て、恆河沙等の如き諸の國土を見、及び是の國土の中の衆生を見、見已りて神通力を用て其の所に到り、衆生の心を知り、其の所應に隨つて、爲めに法を説く。(即ち)或は布施を説き、或は持戒を説き、或は禪定を説き、乃至涅槃法を説くなり。是の菩薩は、天耳を用て二種の音聲、若くは人、若くは非人を聞き、天耳を用て、十方の諸佛の説きたふ所の法を聞き、皆な能く受持し、聞ける所の法の如く、衆生の爲めに説く、(即ち)或は布施を説き、乃至或は涅槃を説くなり。是の菩薩は、(又)他心智を淨め、他心智を用つて衆生の心を知り、其の所應に隨つて爲めの

に　法す。(乃ち)或は布施を說き、乃至或は涅槃を說くなり。是の菩薩の宿命智は、種種の本生の處を憶念し、亦た自ら憶し、亦た他人を憶し、是の宿命智を用つて、過去在在處處の諸佛の名字及び弟子衆を念し、衆生あつて、宿命を信樂せば、爲めに宿命の事を現じて、說法を爲し、或は布施を說き、乃至或は涅槃を說く。如意神通力を用つて、種種無量の諸佛の國土に到り、諸佛を供養し、諸佛に從つて善根を種ゑ、本國に還來し、是の菩薩に漏盡神通智を證す。是の漏盡神通智の證を用つての故に、衆生のために隨應して法を說く。或は布施を說き、乃至或は涅槃を說く。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、應に是の如きの諸の神通を起すべし。菩薩は是の神通を修するを用つての故に、意に隨つて身を受くるも苦樂に染まざるなり。譬へば、佛の所化の人は、一切の事をなすも、而も苦樂に染まざるが如し。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、是の如く、神通に遊戲し、能く佛國土を淨め、衆生を成就すべし。復次に、須菩提よ、菩薩摩訶薩は、佛國土を淨めず、衆生を成就せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。何となれば、因緣を具足せざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是れ菩薩摩訶薩の因緣となし。(そを)具足し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得るや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「一切の善法は、是れ菩薩の阿耨多羅三藐三菩提の因緣なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、何等をか是を善法とし、是の善法を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得ると爲すや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「菩薩は初發意より已來、檀波羅蜜は是れ善法の因緣なり。是の中に是れ施者なり、是れ受者なりと分別することなし、(そは)性空なるを以てなり。是の檀波羅蜜を用つて、能く自ら利益し、亦た能く衆生を利益して、生死より拔出し、涅槃を得せしむ。是の諸の善法は皆な是れ菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の因緣なり。是の道を行じて過去・未來・現在の諸の菩薩摩訶薩は生死を度するを得。已に度し、今度し、當さに度すべし。尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜・四禪・四無量心・四無色定・四念處・乃至八聖道分・十八空・八背捨・九次第定・陀羅尼門・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法、是の如き等の功德は、皆な是れ阿耨多羅三藐三菩提の道なり。須菩提よ、是れを善法と名づく。菩薩摩訶薩は、是の善法を具足し已つて、當に一切種智を得べし。一切種智を得已つて、當に法輪を轉ずべし。法輪を轉ずべし。法輪を轉し已つて、當に衆生を度すべし。

【論】釋して曰はく、爾の時に須菩提問ふ、「何等の善根に住するが故に能く此の身を受くるや」と。佛答へたまはく、「菩薩摩訶薩は、一切の善法を具足す」と。乃至、須菩提大に歡喜して佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩の大方便成就の力は、何等の聖無漏法に住してか、能く此の身を受け、而も畜生身の染むところと爲らざること、譬へば幻師の如く、亦た變化の如くなるや。何等の白淨の法に住してか、能く是の如きの方便をなすや」と。佛答へたまはく、「菩薩は般若波羅蜜の力を以ての故に、能く

是の如きの方便をなすや」と。佛答へたまはく、「菩薩は般若波羅蜜の力を以ての故に、能く是の如き方便を成就し、種種の身を作して、能く十方國土の中の衆生を利益し、亦た是の身を貪らず」と。佛は、此の中に因緣を說きたまはく、「是の菩薩の三法は、不可得なり、一には是れ菩薩の身、二には作す所の鹿馬、三には用ふる所の法なりと。何となれば、是の法は、皆な性空なるが故に、空も亦た空に著せず、空の中に亦た貪著なし。法無なるが故に衆生なく、衆生無きが故に法も亦たなし。此の中に佛は因緣を說きたまはく、「空の中には空は不可得なり。不可得なるが故に、菩薩は云何んぞ是の智慧を貪らん。是れを無所得空般若波羅蜜と名づく。菩薩は是の中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。障礙なきを以ての故に得易し。須菩提問ふ、「菩薩は六波羅蜜、乃至十八不共法に住す。今何を以てか、但だ無所得の般若波羅蜜の中に住して得と說くや」と。佛答へたまはく、「須菩提よ、何の法か般若の中に入らざらん。一切の法は皆な般若波羅蜜の中に入る。若し般若波羅蜜に住すれば、則ち一切の法に住するなり」と。復た問ふ、「若し般若波羅蜜の性空ならば、云何にして一切の法は皆な(其の)中に入るや。」此の中に須菩提自ら因緣を說く、「一切法の性空の中に、法ありて出づることなく、法ありて入ることなし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切法、一切法相は空なりや」と。「世尊よ、空なり」と。(佛の言はく)、「須菩提よ、若し一切法、一切相空ならば、一切法は應に空の中に入る可し。汝云何んぞ、空の中には法の出入するものあることなしと言ふや」と。爾の時に、須菩提は心に伏して解を受け、是の菩薩の身を化して衆生を度するを聞き、今世尊に問ふ、「菩薩は云何にして一切法空の中に住して、能く神通波羅蜜を起し、十方の恒河沙の如き國土に至りて、佛を供養し、法を聽き、甚深の善根を種ゆるや」と。善根とは、諸の陀羅尼三昧門無礙解脫の根本なり。須菩提の意へらく、「般若波羅蜜は性空なり。云何にして菩薩は性空の波羅蜜の中に安住して、能く是の神通有法を行ずるや」と。佛の言はく、「空の故に能く行ずるなり。所以何んとなれば、須菩提よ、菩薩は般若を行ずる時、十方の恒河沙の如き國土は、皆な空なり、是の國土の諸佛も亦た空なりと觀ず。

問うて曰はく、若し國土空ならば、佛も亦た應に空なるべし、何を以てか別說するや。

答へて曰はく、佛は無量阿僧祇劫の實功德を以て是の身を得、能く一の足指を以て十方の恒河沙の如き國土を動かす。又菩

薩は、世世より來、深く佛を愛重すれば、疾かに觀じて空ならしむること能はず。是の故に、國土と共に合して說かざるなり。

此の中に佛、自ら因緣を說きたまはく、「若し十方の國土及び諸佛は空ならずんば、空に偏ありと爲す。偏あるは空、不空の處有るに名く。今實に偏せざるが故に、一切の法、一切の法相は空なり。菩薩は般若波羅蜜を行ずるに、一切法に無礙なり。肉眼を以て色を觀るに通ぜず、上を見れば下を見ず、前を見れば後を見ず。通ずれば見え、障れば見えず。晝は見え、夜は見えず。肉眼力の少なるを知るが故なり。方便を以て更に天眼を求む。方便力とは、他界の四大をして、來つて身中に在らしむるなり。天眼を用ふるの義は先に說けるが如し。天耳・如意足・他心智・宿命智を生じて、衆生の生死の趣く所等を知る。菩薩若し神通なければ、衆生を饒益するを得ること能はず。何となれば、若し神通無くんば、云何にして能く衆生をして發心せしめん。菩薩は神通あるも、猶尙盡く衆生をして發心せしむること能はず、何に況んや無きをや。是の故に、神通波羅蜜は是れ菩薩所行の道なり。菩薩は自ら善法を見、亦た他人をして善法を見るを得せしめ、亦た是の善法に著せず、何となれば、是の法性は皆な空なるが故なり。

問うて曰はく、天眼は色を見るべし、云何んぞ善法を見るや。又一切法の性空なるを見ると言ふや。

答へて曰はく、因中に果を說くなり。天眼を以て見るに自ら己身を見、及び十方の衆生を見る。然して後、他心智、宿命智を用つて、其の今世、後世の善根を求むるに、是の善根及び果報は久しうして皆な磨滅す、磨滅するが故に空を見る。是の善根は、皆な是れ有爲法にして自性なし、自性なきが故に空なり。空なるが故に著すべからず、亦た味を受くべからず。味を受くべからざるが故に著せず。譬へば、蠅の處として著せざるなきも、唯だ火焰には著せざるが如し。衆生の愛著も亦た是の如く、善不善の法の中には皆な著す、乃至非有想非無想にも著するが故に涅槃に入ること能はず。唯だ般若波羅蜜の性空の火のみには著すること能はず。所以何んとなれば、般若波羅蜜。般若波羅蜜の相は空なればなり。若し般若波羅蜜空ならざれば、卽ち是の味は是れ著すべき處なり。菩薩は是の智慧の中に住して有漏の業を起さず、衆生の爲めに法を說き、亦た衆生の假名不可得を知り、是の無所得般若波羅蜜の中に安住して、而も能く神通の事を具足す。若し菩薩、是の無障礙の般若を得ざれば、

即ち無礙神通を得ること能はざらん。菩薩は是の無障礙空神通を得て、飛んで十方の國土に到り、衆生を利益すること、經の中に廣く說くが如し。或は布施を以てし、或は持戒等を以てす。慳者には爲めに布施等の六波羅蜜の義を說く。此の中に佛自ら廣く說きたまへるが如し。此の中に譬喩を說くが如し。鳥の翅なくんば能く飛翔すること能はざるが如く、菩薩も亦た是の如く、神通波羅蜜なくんば、衆生を敎化すること能はず。菩薩は天眼を以て、十方國土の諸佛及び一切衆生を見、天耳力を以て、諸佛より法を聞き、如意神通力を以て、大光明を放ち、或は水火を現じて、種種の變化をなし、奇特の事を現じて、衆生をして希有尊重の心を發さしむ。他心智力を以ての故に、他の心心數法の著する所、厭ふ所、度すべく、度すべからざる、是れ利、是れ鈍、是れ善根成就、是れ未成就なるを知る。是の如き等は、他の衆生の心を知つて、善根成就の者の度すべき者あるを攝取するなり。宿命智、生死智を以て、其の本末、何所より從來するか、何の善根を種ゑしか、好む所の行の何なるや、此より終に當に何れの所に生ずべきや、何れの時にか當に解脫を得べきかを觀ず。是の如く籌量し思惟して度すべき者の、過去の業因緣、未來世の果報を知る、復た神通力を以て是の人は、應に恐怖を以て度すべき者には地獄を以て之れに「汝當に此の中に生ずべし」と示し。應に歡喜を以て度すべき者には、示すに天堂を以てすれば、眼に是の事を見て心に驚怖歡喜を懷いて世間を厭患す。爾の時に、漏盡神通を以て、漏盡の法を說かば、衆生は是の法を聞いて、其の著心を破し、三乘を以て而も涅槃を得。譬へば、白鷺は魚を取らんと欲する時には、進止を籌量して期會を失せず、其の得べきを知れば、即便ち之れを取りて終に空しからさるが如し。菩薩も亦た是の如く、神通力を以ての故に、衆生の本末、度すべきの因緣、國土、時節を觀じ、其の信等の諸根の增利、諸の因緣の具足を知つて、爲めに說法すれば則ち空しからざるなり。是の故に菩薩は神通を離れては、衆生を饒益すること能はざること、鳥の翅なきが如しと說く。餘の神力は佛の自ら說きたまふが如し。天眼を以て十方の衆生の生死を見、亦た衆生の心を知つて意に隨つて說法し、乃至善く神通力を修して而も衆生の爲めに身を受け、苦樂の爲めに汚されず。是の菩薩は衆生の中に於て、或は父となり、或は子となり、或は師となり、或は弟子となり、或は主となり、或は奴となり、或は象馬となり、或は象馬に乘る者となり、或時は富貴にして力勢あり、或時は貧賤となるも、此の諸の事に於て亦

だ染汚せられず。譬へば、佛の、所化の人は一切の事を作すも、苦樂に染められざるが如し。一切の事とは、先に種種阿僧祇の身を作して衆生を度するが如し。苦樂に染せられずとは、樂の中に愛心を生ぜず、苦の中に瞋心を生せざるなり。生死の衆生が隨處に煩惱を起すが如きにはあらず。菩薩は、應に是の如く遊戲神通し、衆生を成就し、佛國土を淨むべし。

問うて曰はく、菩薩の神通力には所作あり、何を以てか遊戲と名くるや。

答へて曰はく、「戲とは、幻師が種種に變を現ずるが如きに名く。菩薩は神通もて種種に現を現ず、之れを名けて戲となす。

復次に、佛法の中の三三昧には空を名づけて上行となす。何となれば、涅槃の著する所なく、得る所なきに似如するが故なり。諸の餘の行法は、皆な名けて下となす、下は小兒の如し。是の故に神通力を說いて、名けて遊戲となすなり。衆生を成就し、佛土を淨むる中に於て最も要用たり、衆生を成就するは、是の中に、佛土を淨めて、共に善根を修すと說くが如し。

問うて曰はく、何の必要ありてか、用つて衆生を成就し、佛國土を淨むるや。

答へて曰はく、佛自ら因緣を說きたまはく、「衆生を成就し、佛國土を淨めざれば無上道を得ること能はず。何となれば因緣具足せざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるが故なり」と。因緣とは、所謂る一切の善法なり、初發意より檀波羅蜜、乃至十八不共法を行じ、是の行法の中に於ては、是れは施者、是れは財物、是れは受者等との憶想分別することなく、乃至十八不共法も亦た是の如し。若し菩薩、心に著せずして分別する所なく、六波羅蜜乃至十八不共法を行ずれば、是れを阿耨多羅三藐三菩提の因緣となす。是の道を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得、亦た能く自ら度し、又た能く衆生を度す。

問うて曰はく、菩薩若し著心もて布施せば、何等の過あつてか、而も具足と名づけざるや。

答へて曰はく、小利ありと雖も、而も大過あり、美食に毒を雜ふるに、美の利ありと雖も、而も自ら命を喪ふが如し。著心の布施は受者の恩重からん。

問うて曰はく、何者か是れ過なるや。

答へて曰はく、若し著心の布施は、意に稱はざることあれば、則ち恚怒を生じ、若し受者其の恩を感ぜざれば、則ち怨嫌を成す。若し著心もて善人に供養するも、少しく凶衰あれば則ち嫌ひ、布施には施す所に悔惜すべからず。若し布施して心、悔

ゆれば、受くる所の果報則ち清淨ならず。

復次に、著心の布施は、深心に財物に貪著す。若し侵奪せらるることあれば、則便ち害を加へて自ら念へらく、「我れ福德好事の爲に財を集む、汝何故に侵奪するや」と。先づ財物を貪つて、今世の事の爲にし、而も布施を作して後世の事の爲にし、愛惜轉た深し。深く著するを以ての故に、若し侵奪せらるることあれば、能く重罪を爲す。重罪の因緣の故に、三惡道の苦を受く。

復次に、貪著の因緣の故に瞋恚を生じ、瞋恚の因緣の故に刀杖を加ふ。刀杖し殺害すれば、諸の苦惱を受く。

復次に、人、愚癡の業を起せば大に安穩ならず。此の虛誑不實の事を行ずるが故に後に、必ず大患を致す。十方の諸佛は皆な無相解脫門を說き、諸法無相の相、是を實となす。若し人、是の財物を取らば虛誑不實の相なり。然して後、心著す。心著するが故に、大果報を期すして而も能く施與す。譬へば、人の多收を求めんと欲するが故に、大に穀子を用ふるが如し。是の如き、著心の布施は、果報少にして不淨なり。終に盡に歸して、諸の憂惱を受くること稱說すべからず。皆な相を取るに由るが故に是の如きの過あり。若し如實の相を以て布施を行ぜば、是の如きの過あることなく、無量阿僧祇の生死の中に、諸の福樂を受けて而も亦た盡きず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。

復次に、若し人、著心を以て善法を行ずれば、是の人若し諸法の畢竟空を聞かば、即時に所行の法を捨てて是の空法に著して相を取り、此を以て實となし、先きの者を虛誑となす。是の人は則ち二種の法を失ふ。先きの善法を失して、邪見に墮す。著心の者は是の如きの過あり。譬へば重病の人が、衆くの藥ありて、之を療ずるに損なしと雖も、藥は復た病を作すが如し。著心もて諸の功德を行ずれば、是の如き等の過罪あり。菩薩は著心を捨てて空相を取らず、如・法性・實際の如し。布施等の法に於ても亦た是の如く、一切衆生の爲めに阿耨多羅三藐三菩提に廻向するを見る。

復次に、菩薩は布施する時、是の念を作す、「十方三世の諸佛の、畢竟淸淨の智慧もて、諸法の實相を知り、亦た是の布施の相を知るが如く、我も亦た是の性を以て廻向せん」と。

復次に、是の菩薩は、一切の五情を心心數法の中に、用ゐず、行ぜず、諸法の相は知ること能はざるが故に、是の法は皆な是れ因緣の邊より生じ、虛誑にして自性あることなきが故に、我れ今諸法の實相を知らんと欲し、是の諸の虛誑を廻向して、實相の中に入るに皆な異あることなし。我れ今、未だ諸法清淨の實智慧を得ること能はざるが故に、是れは虛、是れは實なりと分別する所あり。清淨の智慧を以て之れを知れば、則ち皆な第一義諦と作る。第一義諦の中に入れば、皆な清淨にして別異あることなしと爲す。是の如く布施等を廻向して直ちに佛道に至る。是の故に、分別する所なきの心もて能く布施等を行ずる、是れを眞の菩薩道と名くと說く。

第八十四[一]四諦品

【經】　須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し是の諸法、是れ菩薩法ならば、何等か是れ佛法なるや。」佛、須菩提に告げたまはく、「汝の問ふ所の如く、是の諸法は是れ菩薩法ならば、何等をか是れ佛法となすやとは、須菩提よ、菩薩法も亦た是れ佛法なり、若し一切種を知れば是れ一切種智を得、一切煩惱の習を斷ず、菩薩は當に是の法を得べく、佛は一念相應の慧を以つて、一切の法を知り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。須菩提よ、是れを菩薩と佛との差別となす。譬へば向道と得果と異なるが如し。是の二人は倶に賢聖なるも、而も得と向との異りあり。是の如く、須菩提よ、菩薩摩訶薩の無礙道中に行ずる、是れを菩薩摩訶薩と名け。解脫道の中に一切の闇蔽なき、是れを佛となす。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は自相空ならば、自相空の法の中に云何んぞ。是れは地獄、是れは餓鬼、是れは畜生、是れは天、是れは人、是れは性地人、是れは八地人、是れは須陀洹人、是れは斯陀含・阿那含・阿羅漢人・辟支佛、是れは菩薩、是れは多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりとの差別の異あらん。世尊よ、諸人の不可得なるが如く、業因緣も亦た不可得なり、果報も亦た不可得なり」と。佛の言はく、「是の如し、是の如し。汝の言ふ所の如く、自相空法の中には、衆生なく、業因緣なく、果報なし。須菩提よ、衆生は是の諸法の自相空なることを知らざれば、是の衆生は業因緣、若くは善、若くは惡、若くて無動を作り。罪業の因緣の故に三惡道の中に墮し、福德の因緣の故に人天の中にありて生じ、無動業の因緣の故に色無色界の中に生ず。是の菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜乃至十八不共法を行ずる時、盡く受けて是の助道法を行じ、如金剛三昧にて阿耨多羅三藐三菩提を得。得已りて衆生を饒益す。是の利は常に失はざるが故に、五道の生死の中に墮せず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛に阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、五道の生死を得るや」

【一】　別本には、また「差別品」と言ふ。

と。佛の言はく、「得ざるなり」と。須菩提(言さく)、「世尊よ、業の若くは黒、若くは白、若くは不黒、若くは不白を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。「世尊よ、若し得ざれば、云何にして是は地獄・餓鬼・畜生・人天・須陀洹、乃至阿羅漢・辟支佛・菩薩、諸佛なりと說かん」と。「須菩提よ、若し衆生、諸法の自相空なるを知れば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めず、亦た衆生を三惡趣、乃至五道に往來する生死の中より拔かず。須菩提よ、衆生は實に諸法の自性空なるを知らざるを以ての故に、五道の生死を脫することを得ず。是の菩薩は、諸佛の所に從つて、諸法の自性空を聞き、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。須菩提よ、諸法は爾かく凡夫人の著する所の如くならず。是の衆生は無所有の法の中に於て、顚倒妄想分別して法を得。衆生無きに衆生相あり、色無きに色相あり、受想行識無きに受想行識相ありとし、乃至一切有爲法は無所有なるに、顚倒妄想の心を用つて、身口意の業因緣を作し、五道生死の中に往來して、脫することを得ず、是の菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切の善法は般若波羅蜜の中に內り、菩薩道を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得。阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、衆生の爲に四聖諦(卽ち)、苦、苦の集、苦の滅、苦の滅の道を說き開示し分別す。一切の助道善法は皆な四聖諦の中に入る。是の助道善法を用つての故に分別して三寶あり。何等をか三となす、佛寶と、法寶と、僧寶となり。是の三寶を拒逆して信ぜざるが故に、五道の生死を離るることを得ざるなり」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、苦聖諦を用つて得度するや、苦智を用つて得度するや。集聖諦を用つて得度するや。集智を用つて得度するや、滅聖諦を用つて得度するや、滅智を用つて得度するや、道聖諦を用つて得度するや、道智を用つて得度するや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「苦聖諦もて得度するに非ず、亦た苦智もて得度するに非ず、乃至道聖諦もて得度するに非ず、亦た道智もて得度するに非ず。須菩提よ、是の四聖諦は平等なるが故に、我れは說く、卽ち是れ涅槃なりと。苦聖諦を以てせず、集・滅・道聖諦を以てせず、亦た苦智を以てせず、集・滅・道智を以てせずして涅槃を得」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ。何等をか是れ四聖諦平等の相となすや」と。「須菩提よ、若し苦なく、苦智なく、集なく、集智なく、滅なく、滅智なく、道なく、道智なければ、是を四聖諦の平等と名く。復次に、須菩提よ、是の四聖諦は如にして法相・法性・法住・法位・實際と異らず。有佛にも、無佛にも、法相常住にして爲に誑かず失せざるが故なり。是の菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、實諦に通達せんが爲の故に、般若波羅蜜を行ず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何に菩薩摩訶薩は、實諦に通達せんが爲の故に般若波羅蜜を行ずるの時、實諦に通達するが如きの故に、聲聞辟支佛地に墮せずして直ちに菩薩位の中に入るや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、實の如く諸法を見、見已りて無所有の法を得、無所有の法を得已りて一切法は空にして四聖諦の所攝も、四聖諦攝せざる所の法も皆な空なるを見る。若し是の如く觀ずれば是の時便ち菩薩位の中に入る。是を菩薩の性地中に住して頂墮に從はずと爲す。是の頂墮を用ての故に、聲聞、辟支佛地に墮す。是の菩薩は性地に住するの中に、能く四禪・四無量心・四無色定を生

ず。是の菩薩は是の初定地の中に住して、一切諸法を分別し、四聖諦に通達し、苦の不生、苦に繋ずる心を知り、乃至道の不生道に繋ずる心を知り、但だ阿耨多羅三藐三菩提に順じて、心に諸法の如實相を觀ず」と。「世尊よ、云何に諸法の如實相を觀ずるや」と。佛の言はく、「諸法の空を觀ずるなり」と。「世尊よ、何等か空なるや」と。佛の言はく、「自性空なり。是の菩薩は是の如きの智慧を用つて、一切法空を觀ずるに、法性として見るべきなし。是の法性中に住して阿耨多羅三藐三菩提を得。何となれば性相なければなり。是の阿耨多羅三藐三菩提は、諸佛の所作にあらず、辟支佛の所作にあらず、亦た阿羅漢の所作にあらず、亦た向道の人の所作にあらず、亦た得果の人の所作にあらず、亦た菩薩の所作にもあらず、但だ衆生は諸法の如實の相を知らず見ざるのみ。是の事を以ての故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、是の衆生の爲に法を說くなり。」

【論】問うて曰はく、佛法と菩薩法とは大に差別あり。佛は是れ一切智、菩薩は未だ是れ一切智ならず。須菩提は何が故に疑を生じて、佛に何等か是れ諸の菩薩法なりや、何等か是れ佛法なりやと問へるや。

答へて曰はく、此の中に佛は菩薩に、佛の所行の如く、應に是の如く六波羅蜜等乃至一切種智を行ずべしと敎へたまへり。是の故に須菩提は問へり。「若し佛の如く行ぜば、佛と何の異りありや」と。佛其の意を可とし、應に是の如く問ふべしとし、色等の諸法の行處は是れ同じ、但だ智慧の利鈍に異りありとす。此の中に佛自ら因緣を說きたまはく、「菩薩は實の如く六波羅蜜を行ずと雖も、而も未だ能く周遍すること能はず、未だ一切の門に入ること能はず、是の故に名けて佛と爲さざるなり。若し菩薩已に一切種智の門に入り、諸法實相の中に入り、一念相應の智慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切煩惱の習を斷じ、諸法の中に自在力を得ば、爾の時名けて佛と爲す」と。月の十四日と十五日は同じく月たりと雖も、十四日は大海の水をして潮たらしむること能はざるが如し。菩薩も亦た是の如く、實智慧ありて淸淨なりと雖も、未だ諸佛の法を具足すること能はざるが故に一切十方の衆生を動かすこと能はず。月の十五日の光明盛んにして滿つる時、能く大海の水をして潮たらしむ。菩薩の成佛も亦た是の如し。大光明を放ちて能く十方國土の衆生を動かす。此の中に佛自ら譬喩を說きたまはく、「向道得果は同じく聖人たりと雖も、而も差別あるが如く、菩薩も亦た是の如く、行者を名けて菩薩と爲す。初發心より乃ち金剛三昧に至つて、佛は已に果を得、一切の法の中の疑を斷じて、了ぜざる所なきが故に名けて佛と爲す。須菩提復た問ふ、「自相

空法の中には差別は不可得なり、所謂る是は地獄乃至天、是は性人、八人、是は須陀洹、乃至佛なり。世尊よ、地獄等の如く、衆生不可得なれば業因緣も亦た不可得なるべし。何となれば、作業者不可得なれば業不可得の故に、果報も亦た不可得なればなり。佛は云何んぞ佛と菩薩と差別ありと說きたまふや」と。佛、須菩提の意を可とし、還つて所問を以て答へたまはく、「須菩提よ、衆生は自性空の法を知らざるが故に、能く善惡の業を起すこと、經中に廣く說くが如し。衆生とは凡夫の未だ正位に入らざる人なり。是の人、我心顚倒し、煩惱の因緣の故に諸の業を起す。業とは三種あり、身と、口と、意となり。是の三種の業に二種あり、若くは善、若くは惡、若くは有漏、若くは無漏なり。惡業の故に三惡趣に墮し、善業の故に天人の中に生ず。善業に復た二種あり、一には欲界繫、二には色無色界繫なり。色無色界繫の生業を不動と名け、不動業の故に色無色界に生ず。若し衆生自ら諸法の性空を知らば、卽時に著心を生ぜず。著心を生ぜざるが故に業を起さず、乃至色無色界に生ぜず。實に知らざるを以ての故に生ず。是の事を以ての故に、菩薩摩訶薩は盡く布施等の法、乃至十八不共法を受行し、失ふ所なく少くる所なし。乃至如金剛三昧を用つて阿耨多羅三藐三菩提を得、大に衆生を饒益す。衆生は是の利益を得るが故に、復た五道の生死に往來せず。」須菩提復た問ふ、「佛は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、實に是の五道を得るや不や」と。佛の言はく、「得ず」と。

問うて曰はく、佛は先きに大利益の故に五道に墮せずと說けり。今云何なれば得ずと說きたまへるや。

答へて曰はく、決定して相を取るは邪見なり、邪見に墮せば五道に生死して得ず、但だ凡夫人は顚倒の因緣を以て業を起し、假りに五道の生死ありと名く。其は實に幻の如く夢の如し。

復た問ふ、「黑白等の四種の業を得るや不や」と。佛の言はく、「不なり」と。黑業とは是れ不善業の果報にして、地獄等の苦惱を受くる處なり。是の中の衆生は大に苦惱し、悶極するを以ての故に名けて黑となす。善業の果報を受くる處は所謂る諸天にして、其の樂を受くること、意に隨つて自在明了なるを以ての故に、名けて白業となす。是の業は是れ三界の天なり。善・不善業の果報を受くる處は所謂る人・阿修羅等の八部なり。此の處は、亦は樂を受け亦は苦を受くるが故に、黑白業と名

く。無漏業は能く不善を破し、有漏業は能く衆生を拔いて、善惡の果報の中を離れしむ。

問うて曰はく、無漏業は是れ白なるべし、何を以てか非白非黑と言ふや。

答へて曰はく、無漏の法は清淨無垢なりと雖も、空は無相無作なるを以ての故に分別する所なし、故に白と云ふことを得ず。黑白は是れ相待の法なり、此の中に相待なきが故に白と言ふべからず。

復次に、無漏業は能く一切の諸觀を滅す。觀の中に分別するが故に、黑白あり。此の中には觀なきが故に黑白なし。

須菩提復た問ふ、「若し是の四種の業を得ずんば、云何にして是は地獄、乃至阿羅漢と分別せん。若し黑業なくんば、云何にして是は地獄・畜生・餓鬼と說くや。若し白業なくんば、云何にして是は天人と說くや。若し黑白業なくんば、云何にして是は阿修羅道と說くや。若し不白不黑業なくんば、云何にして是は須陀洹乃至阿羅漢と說くや」と。佛答へたまはく、「若し一切衆生自ら諸法の自性空を知らば、菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の意を發さず。亦た六道の中に於て衆生を拔出せず、何となれば、衆生自ら諸法の性空なることを知らば、則ち度する所なければなり。譬へば、病なければ則ち藥を須ゐず、闇なければ則ち燈明を須ゐざるが如し。須菩提よ、今衆生は實に自相空法を知らざるが故に、心に隨つて相を取り著を生ず。著するを以ての故に染み、染むるが故に五欲に隨ひ、五欲に隨ふが故に貪の爲に覆はる。貪の因緣の故に慳み、虛誑し、嫉妬し、瞋恚し、鬪諍す。瞋恚を以ての故に諸の罪業を起して識知する所なし。是の故に壽終らば業因緣に隨つて、彼の處に生じ、續いて生死の業を作し、常に六道の中に往來して、復た窮まり已むことなし。是の故に菩薩は、諸佛及び弟子の所に於て、諸法の空なることを說くを聞いて衆生を慈愍す。衆生は狂愚顚倒なるを以ての故に著を生ず。我れ當に作佛して衆生の顚倒を破し、諸法の空相を解せしむべし。所以何んとなれば、諸法は爾かく凡人の所著の如くにあらざればなり。衆生の法は定實あることなく、但だ自ら無所有の中に於て、憶想分別して、妄りに所得ありとし、無衆生の中に衆生想を起し、無色の中に色想を起し、無受想行識の中に識想を起す。狂顚倒を以ての故に、是の人は能く身口意の業を起し、六道生死の中に於て得脫すること能はざるなり。若し但だ衆生法想を生ずるのみなるは、結縛は猶ほ輕易にして度することを得べし。貪欲瞋恚を生ずるは、是の中に於て

諸の重業を起す、是れ重縛と爲す。此の業、果報を受くれば則ち度するを得べきこと難し。譬へば、微塵を積んで山を成せば、移動し得べきこと難きが如し。菩薩は是の衆生の爲の故に、其の生死の因緣・果報を破せんと欲するが故に、般若の中に於て、一切の善法を攝し、菩薩道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生の爲めに四聖諦を說く。所謂る苦・苦集・苦滅・苦滅道にして種種の因緣を開示し敷演するなり。

問うて曰はく、佛は無量阿僧祇劫より來た、微妙の法を習ふ。所謂る十八不共法、乃至無礙解脫にして諸の甚深の業なり。何を以てか但だ苦集滅道のみを說きたまへるや。

答へて曰はく、衆生の畏るるところ急なる者は、苦に過ぐることなし。(故に)爲に苦を除き已つて、然る後、示すに佛道を以てす。(譬へば)人重病ならば、先づ病を除くを以て急と爲し、然して後に寶物衣服を以て、其の身を莊嚴するが如し。

「苦」とは五受衆の身を受くれば是れの一切は苦の本にして、性は卽ち是れ苦なり。是の苦は略して是を言へば、是れ生老病等なり。經の中に處處に廣く苦を說くが如し。「苦集」とは愛等の諸の煩惱なり。愛は是れ心中の舊法なり。是れを以ての故に佛は、「愛は能く後身を生ずるが故に是れ苦の因なり」と說きたまへり。苦の因にして卽ち是れ集なり。若し人、苦を捨てんと欲せば、先づ當に愛を斷ずべし。愛を斷ずれば苦は則ち滅す、斷愛は卽ち是れ苦の滅なり。苦の滅は卽ち是れ道なり。是の五衆の種種の因緣、苦及び苦集の過罪、所謂る無常・苦・空・無我にして、病の如く、瘡の如く、怨の如く、賊の如し等と觀ずるは八聖道分の中に於ては正則と爲し、餘の七事は助成し發起して、能く一切法の中の愛を斷ず。酒を以て藥を發するが如し。此の人は一切世間に於て、復た貪る所なく、苦火を離るることを得。然る後示すに妙法を以てするなり。

復次に、此の中に佛自ら因緣を說きたまふ。所謂る「四聖諦の中に於て一切の善法を提す」となり。人有りて、「佛は何を以てか但だ苦等の四法を說くや」と。言ふ。是を以ての故に、佛は說きたまはく、「一切助道の善法は、皆な四諦の中に攝在す。助道の善法の因緣の故に分別するに三寶あり。衆生は三寶を信ぜざるが故に、六道の生死を離るることを得ず」と。

問うて曰はく、須菩提は何を以てか是の麁問を作すや。(卽ち)苦滅を以て苦智滅し、集滅を以て集智滅すと爲すと言へり。

答へて曰はく、此れは麁問にあらず。今の問は苦等の四諦の體を見るが故に滅し、智を用ふるが爲の故に滅す。愛等の諸の煩惱滅するが故に有餘涅槃と名く。若し苦諦を以て道を得ば、一切衆生、牛羊等も亦た道を得べし。若し苦智を用つて道を得ば、苦を離れては則ち智なし。苦と智と離れては名けて苦諦となさず、但だ名けて苦と爲すのみ。苦諦は苦と智と和合するが故に生ず。（故に）但だ苦滅を以てし、但だ智滅を以てすと言ふを得ず、乃至道諦も亦た是の如し。佛答へたまはく、苦諦を以ても滅せず、亦た苦智を以ても滅せず、乃至道諦道智も亦た是の如し。我れ是の四諦の平等を說く、卽ち是の滅は苦諦滅を用ゐず、乃至道諦滅を用ゐず。何となれば、是の苦等の四法は皆な因緣より生じ、虛妄不實にして自性あることなきが故に、名けて實となさず、不實の故に云何んぞ能く滅せん。

問うて曰はく、二諦は有漏、凡夫の行ずる所の法なるが故に、是れ虛誑不實なるべし。道諦は是れ無漏法にして、著する所なし。因緣和合によつて生ずと雖も、而も虛誑ならず。又滅諦は是れ無爲法にして、因緣に從つて有るにあらず。云何にして四法は皆な是れ虛誑なりと言ふや。

答へて曰はく、初に道を得るや、二諦は是れ虛誑なることを知り、將に無餘涅槃に入らんとするや、亦た道諦の虛誑なることを知り、空空三昧等を以て道諦を捨離す、栰の喩を說くが如し。滅諦も[二]亦た定法なし。經の中に說くが如く。有爲を離れて無爲なく、有爲に因るが故に無爲と說く。苦の滅は燈の滅するが如し、戲論して其の處る所を求むべからず。是の故に佛說いて、以て苦を用ゐ、乃至道を用ゐて滅を得ずとなす。

須菩提、佛に問ふ、「何者か是れ四諦平等なるや」と。佛答へたまはく、「若し八法處所謂る四諦と四諦の智なくんば、是れ則ち平等なり」と。

「復次に、須菩提よ、四諦は如實にして不誑不異なること、如・法性・法相・法位・實際、若くは有佛にも無佛にも法相常住にして、心心數法及び諸觀を用ゐず。但だ衆生を誑はさざらんが爲の故に住す。一切諸法は皆な顚倒の妄著、顚倒の果報の生なるが故に、能く人に大喜樂を與ふと雖も、久久しうして皆な

【二】「亦た定法無し」は別本には「亦た無爲の滅なし」とある。

虚妄變異す。但だ一法のみあり、所謂る諸法實相なり。誑はさざるを以ての故に、常住にして滅せず」と。是の如く菩薩は般若波羅蜜を行じ、諸法の實諦に通達す。

須菩提復た問ふ「云何に菩薩は、通達して實諦を得、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩の位に入るや」と。佛答へたまはく、「若し菩薩思惟し籌量して諸法を求むるに、一法として定相を得べきものあることなく、一切法を見るに皆な空なり、若くは四諦あり、若くは四諦あらず。四諦あらざるは虚空は非數の緣盡き、餘には四諦あり。若し是の如く法空を觀ずれば、爾の時に菩薩の位に入るなり。

問うて曰はく、何を以てか空も亦は空なる觀を說かずして菩薩の位に入るや。

答へて曰はく、是を說くを須ゐず。何となれば、若し諸法の空を說かば、即ち是れ空にして、空も亦た空なり。若し是の空、空ならずんば、名けて一切空となさず。是の故に、是の空を行ずれば菩薩の位に入ることを得るなり。菩薩は是の性地の中に住す。

性地に墮頂せずとは、所謂る菩薩の法位なり。聲聞法の中の煗法・頂法・忍法、世第一法の如きを名けて性地となす。是の法は無漏道に隨順するが故に名けて性となす。是の中に住すれば、必ず望んで道を得。菩薩も亦た是の如く、是の性地の中に安住して必ず望んで作佛し、能く四禪、四無量心、四無色定を生ず。是の菩薩は、禪地の中に住在して心を攝め、諸法を分別し、思惟し、籌量して四諦に通達す。所謂る、苦を知見し、亦た苦を緣ずるにあらず、心を生じて苦を知る、是の凡夫は身を受け、苦の因緣に著するが故に諸の憂惱を受く。是の人身は皆な賊の如く怨の如く無常、空等なり。是れを得已つて即時に捨てて苦相を取らず、亦た苦諦を緣ぜず、(是れ)菩薩法位の力の故なり。乃至道諦も亦た是の如し。但だ一心に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向して、是の四諦を知り、藥病相待して亦た是の四諦に著せず。但だ諸法の如實相を觀じて四種の分別觀を作さず。須菩提問ふ「云何が實の如く、諸法を觀ずるや」と。佛の言はく「空を觀ぜよ。須菩提よ、若し菩薩、能く一切の法の若くは大、若くは小も皆な空なりと觀ずれば、是れを如實觀と名づく」と。復た問ふ「何等の空を用ふるや」と。佛答へて言は

く、「自相空を用ふ」と。

問うて曰はく、十八空の中に、佛は何を以てか、但だ自相空を說くや。

答へて曰はく、是の中道空・內外空等は是れ小空なり。畢竟空・無所得空等は是れ甚深空なり。自相空は是の中自相を空ず。有の理破るが故なり。而も心沒せずして、能く甚深空の中に入る。是の菩薩は是の如きの法を得て、一切の法は皆な空なりと觀じ、乃至、一法として性の住すべきものあるを見ず。阿耨多羅三藐三菩提を得て諸法を觀ずるに、阿耨多羅三藐三菩提の如し。阿耨多羅三藐三菩提も、亦た自性空にして、佛の所作にあらず、大菩薩の所作にあらず、阿羅漢辟支佛の所作にあらず、常に寂滅の相にして戲論の語言なし。衆生は如實相を知見すること能はず。是の故に菩薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以て衆生のために法を說く。

方便力とは、菩薩は無性法忍を得て、菩薩の位に入り、菩薩の第一義諦觀を通達するなり。是の道相は、甚深微妙にして得なく捨なく、妙智慧を用つてすら不可得なり、何に況んや口說し得べけんや。大悲心もて深く衆生を念ずるも、(衆生は)空事を以ての故に三惡道に墮して大劇苦を受く。若し我れ是の法を直說するも則ち信ぜず受けず。則ち法を破壞して地獄に墮す。我れ今當に一切の善法を成就し、身の三十二相を莊嚴して衆生を引導し、無量無邊の諸佛の神通力を起して佛道を成ずることを得、一切衆生の中に、諸法に於て自在を得べし。若し惡法を讃ずる衆生すら、猶尙受くべし、何に況や實法をや。是の菩薩は所願の如く思惟し、行じ、衆生の爲に說いて皆な度脫せしむ。

巻の第九十五

第八十五七喩品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法の性は無所有にして佛の所作にあらず、辟支佛の所作にあらず、阿羅漢の所作にあらず、阿那含・斯陀含・須陀洹の所作にあらず、向道人(の所作)にあらず、得果人(の所作に)あらず、諸の菩薩の所作にあらずんば、云何にして分別して、諸法の異あつて、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、乃至是れ非有想非無想天とせん。是の業因緣を用つての故に、地獄に生ずる者ありと知り、是の業因緣の故に畜生・餓鬼に生ずる者ありと知り、是の業因緣の故に人中に生じ、四天王天に生じ、乃至非有想非無想天に生ずる者ありと知り、是の業因緣の故に須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛を得る者ありと知り、是の業因緣の故に、是れ諸の菩薩摩訶薩なりと知り、是の業因緣の故に、是れ多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりと知る。世尊よ、無性法の中には業用あることなけれど、作業の因緣の故に、若くは地獄餓鬼畜生に墮し、若くは人天に生じ、乃至非有想非無想天に生ず。是の業因緣を以ての故に、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・菩薩摩訶薩を得、菩薩道を行じて、當に一切種智を得べく、一切種智を得るが故に、能く衆生を生死の中より拔出するなり」と。佛、須菩提に告げて言はく、「是の如し、是の如し。無性法には業なく果報なし。須菩提よ、凡夫人は聖法に入らず、諸法の無性相を知らずして、顚倒愚癡の故に種種の業因緣を起す。是の諸の衆生は、業に隨つて身を得、(卽ち)若くは地獄身、若くは畜生身、若くは餓鬼身、若くは人身、若くは天身、若しくは四天王身、乃至非有想非無想天身なり。是の無性法は業なく果報なく、無性は常に是れ無性なり。須菩提の言ふ所の如く、若し一切法は無性ならば、云何にして是の須陀洹乃至諸佛は一切種智を得んやとは、須菩提よ、汝が意に於ては云何。道は是れ無性なりや不や。須陀洹果乃至諸佛の一切種智は無性なりや不や」と。須菩提の言さく、「世尊よ、道は無性なり、須陀洹果も亦た無性なり、乃至諸佛の一切種智も亦た無性なり」と。「須菩提よ、無性の法は能く無性の法を得るや不や」と。「不なり、世尊よ」。佛、須菩提に告げて言はく、「有性の法能く有性の法を得るや不や」と。「不なり、世尊よ」と。「須菩提よ、無性の法及び道、是の一切法は皆な合せず散ぜず、色なく形なく、對なく、一相にして所謂無相なり。須菩提よ、是の菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以て衆生を見るに、顚倒を以ての故に、五衆に著し、無常の中に常相、苦の中に樂相、不淨の中に淨相、無我の中に我相ありとし、無所有處に著す。是の菩薩は方便力を以ての故に、無所有の中に於て衆生を拔出す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、凡夫人の著する所、顚し實に有つて不異不著の故に業を起さば、業因緣の故に、五道生死の中より脫することを得

【一】別本に「法性無作品」と作る。

ざるや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「凡夫人の著する所、業を起す處は、毛髮許りの如きも實のことなし。但だ顚倒の故なり。須菩提よ、今汝の爲に譬喩を說かん、智者は譬喩を以て解することを得。須菩提よ、汝が意に於て云何、夢中に見る所の人が五欲の樂を受くるが如きは、實に住處ありや不や」と。「汝が意に於ては云何、諸法の若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲、頗し夢の如くならざるものありや不や」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、夢は尙ほ虛妄にして不可得なり、何に況んや夢中に住して五欲の樂を受けんをや」と。「世尊よ、諸法の若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲にして、夢の如くならざる者なし」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、夢中に五道生死の往來ありや不や」と。「世尊よ、無なり」と。「汝が意に於て云何、夢中に道を修することあつて、是の修道を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得ることありや不や」と。「不なり、世尊よ。何となれば、是の夢法は實事あることなく、垢淨を說くべからざればなり」と。「汝が意に於て云何、鏡中の像は實事ありや。能く業因緣を起し、是の業因緣を用つて、地獄餓鬼畜生(の中)に墮し、若くは人、若くは天四天王天處、乃至非有想非無想天處に生ずるや不や」と。須菩提の言さく、「不なり、世尊よ。是の像に實事あることなく、但だ小兒を誑はすのみ。是の事云何が當に業因緣あるべき、是の業因緣を用つて當に地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の鏡中の像に修道ありて、是の修道を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。須菩提の言さく、「不なり、世尊よ。何となれば、是の像は空にして實事なく垢淨を說くべからざればなり」と。「汝が意に於て云何、深澗の中に響あるが如きは、是の響に業因緣あり。是の業因緣を用つて若くは地獄に墮し、乃至若くは非有想非無想處に生ずるや不や」と。須菩提の言さく、「不なり、世尊よ。是の事は空にして實の音聲あることなし。云何にして當に業因緣あつて、是の業因緣を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の響は頗し修道ありて、是の修道を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。是の事に實なく、是れ垢、是れ淨なりと說くべからず」と。(汝が)意に於て云何、焰の如きは、水に非ずして水の相なり。河に非ずして河の相のみ、是の炎、頗し業因緣ありて、是の業因緣を用つて、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ。焰の中に、水は畢竟得べからず、但だ無智の人の眼を誑はすのみ。云何にして當に業因緣ありて、是の業を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の焰に修道あつて、是の修道を用つて若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。是の焰に實事あることなく、垢淨を說く可からず」と。「汝が意に於て云何、揵闥婆城は、日の出づる時、揵闥婆城を見るが如き、無智の人は城なきに城の想ひあり。:.廬觀なきに廬觀の想ひありと、園なきに園の想あり。是の揵闥婆城、頗し業因緣あり。是の業因緣を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ。是の揵闥婆城は畢竟得べからず、但だ愚夫の眼を誑はすのみ。云何んぞ當に業因緣あり、是の業因緣を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の揵闥婆城に修

道あり、是の修道を用つて若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と、「不なり。世尊よ、是の揵闥婆城に實事あることなく、垢淨を說くべからず」と。「須菩提よ、汝が意に於て云何、幻師の幻作する種種のもの、若くは象、若くは馬、若くは牛、若くは羊、若くは男、若くは女は、汝が意に於て云何、是の幻に業因緣あり、是の業因緣を用つて、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり、世尊よ。是の幻法は空にして實事なし。云何んぞ當に業因緣ありて、是の業因緣を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の幻に修道ありて、是の修道を用つて、若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。是の法は實事なし。垢淨を說くべからず」と。「須菩提よ、汝が意に於て云何、佛の所化の人の如き、是の化人に業因緣あり、是の業因緣を用つて、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や」と。「不なり。世尊よ、是の化人は實事あることなし、云何んぞ當に業因緣ありて、是の業因緣を用つて地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや」と。「汝が意に於て云何、是の化人に、修道ありて、是の修道を用つて若くは垢に著し、若くは淨を得るや不や」と。「不なり、世尊よ。是の事に實あることなく、垢淨を說くべからず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、是の空相の中に於て、垢者あり、淨者ありや不や」と。「不なり、世尊よ。是の中に所有あることなく、垢に著する者あることなく、淨を得る者ある事なし。須菩提よ、垢に著する者あることなく、淨を得る者あることなきが如く、是の因緣を以ての故に、亦た垢淨なし。何となれば、我我所に住する衆生は垢あり淨あり、實を見る者は垢ならず淨ならず、實に見る者は、垢ならず淨ならざるが如く、是の如く亦た垢淨あることなければなり」と。

【論】問うて曰はく、佛已に處處に是の事を答ふ。今須菩提は何を以てか復た問ふや。

答へて曰はく、義は一なりと雖も所因の事の異なればなり。所謂る一切の法は、若くは佛あるも、若くは佛なきも、諸法の性は常住にして空にして所有なく、賢聖の所作にあらず。般若波羅蜜は甚深微妙にして解し難く量り難し。有量を以て能く知るべからず。諸佛賢聖は衆生を憐愍するが故に、種種の語言・名字・譬喩を以て爲に說きたまへり。利根の者は聖人の意を解し、鈍根の者は處處に著を生ず。語言名字に著して、若し空と說くを聞かば則ち空に著し、空も亦た空なりと說くを聞かば亦た復た著を生ず。若し一切法は寂滅の相にして、語言の道斷ゆと聞くも、而も亦た復た著す。自心淸淨ならざるが故に、聖人の法を聞いて淸淨ならずとなす。（譬へば）、人の目瞖なれば淸淨の珠を視るも、其の目の影を見て、便ち珠を不淨なりと謂ふが如し。佛、種種の因緣を說きたまふに、過罪あるを見て、疑を生じ、是の言をなす。「若し一切の法は空にして、空も亦た空ならば、云何んぞ六道の常に生ずと分別すること有らんや」と。是の如き等の疑難あるが故に、須菩提は經の將に訖らんとするを

以て、衆生の爲に處處に是の事を問ふ。是の故に重ねて問ひ、佛は須菩提の意を可としたまふなり。

問うて曰はく、須菩提は有を以て空を難ず、佛は云何んぞ其の意を可したまふや。

答へて曰はく、佛は其の諸法は空にして常住なり、佛あるも、佛なきも異らずと說くを可したまふ。其の難を可さずんば、云何んぞ、分別して六道等あらん。何となれば、其の難を以て空を破せんと欲するが故なり。是の中に佛は其の所難を解したまふ。所謂凡夫人は聖法に入らず、未だ聖道を得ず、無所有の性を知らず、善く空三昧を修習せざるが故なり。顚倒とは四顚倒なり。愚癡とは、三界繫の無明なり。餘の煩惱を說かずと雖も、而も此の二法は虛誑、不實、顚倒にして、卽ち是れ妄語虛誑なり。若し顚倒に從へば所生の業及び果報は根本不實なるを以ての故に、衆生深著すと雖も、亦た定實なし。是を以ての故に、五道は皆な空にして但だ假名のみあり。又汝、諸の賢聖を難ずるも、是の諸の賢聖は、顚倒差別を斷ずるを以ての故に異名あり。顚倒不實なるを以ての故に斷ずる所なし。又復た無所有を滅失するが故に、名けて斷と爲す。若し實に法として斷ずべきあらば、尙ほ法を斷ずることなし、何に況んや顚倒をや。是の故に、一切賢聖の果は、皆な是れ無所有なり。顚倒を斷ずるは、卽ち是れ聖人の果なり。果は卽ち是の斷を果となす。修する所の道も亦た同じく無所有なり。是の故に道を修する時には、必ず當に空無相無作を用ふべし。道と果とは分別するが故に賢聖に差別あり、今實に無所有の法は無所有を得ること能はず、云何んぞ差別あらん。是の故に難ずべからず。須菩提の意へらく、若し但だ顚倒するが故にのみ世間ありとせば。若し顚倒あらば亦た應に實あるべし、虛實は相待するか故なりと。是の故に問ふ「世尊よ、凡夫の著する所、頗し實に生有りて、業を起さば業因緣の故に、六道の生死を解脫することを得ず」と。佛は答へて言はく、「不なり」と。何となれば、此の中に佛自ら因緣を說きたまはく「但だ顚倒の故に著を生ず、若し顚倒なくんば、云何んぞ相待の實法あらん、乃至毫釐許りの實事もなく、畢竟無なるが故なり」と。

問うて曰はく、諸佛所行の實義は所謂る畢竟空なり。此は實にあらざるか。

答へて曰はく、是の第一義空も亦た分別に因る。凡夫の顚倒の故に說く。若し顚倒なくんば、亦た第一義もなし。若し凡夫

の顚倒に少多許りも實あらば、第一義も亦た應に實あるべし。

問うて曰はく、若し二つ倶に實ならざれば云何んぞ解脫を得ん。人の手の垢を洗ふに還た垢を以て洗ふが如し。云何んぞ淨を得んや。

答へて曰はく、諸法の實相は畢竟空、第一義にして、實に淸淨なり。凡夫は顚倒して不淸淨の法あるを以ての故に、此の淸淨の法あり。破壞すべからず、變異せざるが故に、人は諸法實相に於て著欲を起し、煩惱を生ずるを以て、是の故に、是の法性を空にして所有なしと說くなり。所有なきが故に實なし。二法は皆な不實なりと雖も、而も不實の中に差別あり。十善十不善の二事の如く、皆な有爲法の故に、虛誑不實なり。而して、善不善に差別あり。殺生法の故に惡道に墮し、不殺の故に天上に生ず。布施、偸盜の二事の如き。相を取り心に著すと雖も、是れ虛誑不實にして、亦た差別あり。衆生の如き、乃至知者、見者も所有なきも、而も衆生を惱せば、大罪あり。衆生を慈念せば大福あり。慈の能く瞋を破し、施の能く慳を破するが如し。二事倶に是れ不實なりと雖も、而も能く相破す。是の故に佛は、諸法は根本定實にして、毫釐許りの如きも所有あることなしと說きたまへり。是の事を證明せんと欲するが故に、夢中に五欲を受くるの譬喩を說く。

須菩提の意へらく、若し一切法は畢竟空にして無所有の性ならば、今何を以ての故に、現に眼に見、耳に法を聞くことあるや」と。是を以ての故に佛は夢の譬喩を說きたまへり。人の夢力の故に、實事なしと雖も而も種種の聞見、瞋處、喜處あり。覺めたる人は傍にあるに、則ち見る所なきが如し。是の如く凡夫人は、無明顚倒の力の故に、妄りに見る所あり。聖人は覺悟すれば則ち見る所なし。一切法は、若くは有漏、若くは無漏、若くは有爲、若くは無爲は、皆な不實虛誑の故に見聞あり。又た夢中に六道の生死往來を見るが如く、須陀洹乃至阿羅漢を見る。夢中に是の法なきも而も夢に見るなり。夢中には實に淨もなく、垢もなし。業、果報、六道も亦た是の如し。顚倒の因緣の故に業を起す、業果報も亦た應に空なるべし。顚倒を除却するが故に名けて道となす。顚倒は實なきが故に道も亦た實なるべからず、鏡中の像、響、焰乃至化の如きも亦た是の如し。佛、須菩提に反問したまはく、「是の法の中に於て、垢者有り。淨者ありや不や」と。須菩提の意へらく、「一切法の中には我なし、

云何んぞ當に垢あり、淨ある者を說くべけんや」と。是の故に「無し」といふ。佛の言はく、「若し垢を受け、淨を受くる者なくんば、垢淨も亦た無けん」と。

問うて曰はく、若し諸法を分別すれば、阿毘曇等の經の中には、「垢あり、淨あり、但だ垢淨を受くる者はなし。三毒等の諸の煩惱は是れ垢、三解脫門、諸の助道法等は是れ淨なりと(說くにあらずや)。

答へて曰はく、是の說ありと雖も、是の事は然らず。若し衆生の法に所屬なければ、亦た作者なし。若し作者なくんば、亦た作法なく、縛なく、解なし。人の火の爲に燒かるるや、畏れて捨離するは、火が火を離るるに非ざるが如し。衆生も亦た是の如く、五衆の苦を畏るるが故に捨離す、苦が苦を離るるに非ず。若し垢淨なければ解脫あることなし。

復次に、佛此の中に自ら因緣を說きたまはく、所謂我我所の法の中に住して、衆生は垢を受け、淨を受く。我は畢竟無なるが故に、垢淨に住處なし。住處なきが故に、垢なく淨なしと。

問うて曰はく、我に我見なしと雖も、實に凡夫人あつて此の中に住して諸の煩惱を起す。

答へて曰はく、若し我と我見なくんば所緣なし。所緣なくんば、云何んぞ生ずることを得ん。

問うて曰はく、我なしと雖も、五衆の中に於て邪行して我ありと謂つて我見を生じ、五衆は是れ我我所なりとす。

答へて曰はく、若し五衆の中に定んで我見を生ずる因緣を以てせば、他の五衆の中に於て何を以ての故に生ぜざらん。若し他の五衆に於て生ぜば、則ち大に錯亂を爲す。是の故に我見に定處あることなく、但だ顚倒の故に生ずるなり。

問うて曰はく、若し顚倒して生ぜば、何を以ての故に、但だ自ら己身に於て見を生ずるや。

答へて曰はく、是れ顚倒狂錯なり。其の實事を求むべからず。又復た無始の生死の中より來かた、自ら相續する五衆の中に於て著を生ず。是の故に佛說きたまはく、「我心に住する衆生は、垢を受け、淨を受く。又實に見る者は、垢なく、淨なし。若し我れ定有ならば、實に見る者に垢淨あるべし。如し實に見る者垢ならず淨ならざれば、是の因緣を以ての故に、無垢無淨なり。垢なく淨なき者は、諸法の實相を見る。諸法の實相に於て亦た著せず、是の故に無垢なり。諸法の實相は、相として取る

べきなし、是の故に無淨なり。

復次に、八聖道の中に著せざる、是を無淨と名け、諸の煩惱を除き、顚倒に著せざる、是を無垢と名く。

第八十六平等品[二]

【經】須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、實を見る者は不垢不淨なり、不實を見る者も亦た不垢不淨なり。何となれば、一切の法性は所有なきが故なり。世尊よ、所有の中に垢なく淨なければ、所有の中にも亦た亦た垢なく淨なし。世尊よ、無所有の中にも、有所有の中にも亦た垢なく淨なし。世尊よ、云何なれば如實語の者の不垢不淨なるに、不實語の者も亦た不垢不淨なりや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の諸法平等の相は、我れ是れを淨なりと說く」と。「須菩提よ、何等か是れ淨なる。須菩提よ。是の諸法平等、所謂る如、不異、不誑、法相、法性、法住、法位實際にして有佛にも無佛にも法性常住なる、是れを淨と名く。世諦の故に說いて最第一義にあらず、最第一義は、一切の語言、論議、音聲を過ぐ」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し一切法は空にして說くべからざること、夢の如く、響の如く、焰の如く、影の如く、幻の如く、化の如くならば、菩薩摩訶薩は云何にしてか是の夢の如く、響の如く、焰の如く、影の如く、幻の如く、化の如き法にして、根本定實あることなきを用つて、云何にして能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の願を作すや。『我れ當に檀波羅蜜を具足し、乃至般若波羅蜜を具足すべし。我れ當に神通波羅蜜を具足し、智波羅蜜を具足し、四禪、四無量心、四無色定、四念處を具足し、乃至八聖道分を具足すべし。我れ當に三解脫門、八背捨、九次第定を具足すべし。我れ當に佛の十力を具足し、乃至十八不共法を具足すべし。我れ當に三十二相、八十隨形好を具足すべく、我當に諸の陀羅尼門、諸の三昧門を具足すべく、我れ當に大光明を放ちて遍く十方を照し、諸の衆生の心の如を知り、應に法を說くべし」と。佛、須菩提に言はく、「汝が意に於ては云何、汝が說く所の諸法は、夢の如く、響の如く、焰の如く、影の如く、幻の如く、化の如くなりや不や」と。須菩提言さく、「爾り、世尊よ、若し一切の法は、夢の如く乃至化の如し。菩薩摩訶薩は、云何にして般若波羅蜜を行ぜん。世尊よ、是の夢乃至化は虛妄不實なり。世尊よ、不實虛妄の法を用つて、能く檀波羅蜜乃至十八不共法を具足すべからず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。不實虛妄の法は、檀波羅蜜乃至十八不共法を具足すること能はず。是の不實虛妄の法を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提よ、是の一切の法は、皆な是れ憶想思惟の作法なり。是の思惟憶想の作法を用つては、一切種智を得ること能はず。須菩提よ、是の一切の法の能く道を助くる法は、能く其の果を益すること能はず。所謂る是の諸法は、無生、無出、無相なり。菩薩の初發意より已來た、作す所の善業、若くは檀波羅蜜乃至一切種智は、何を以ての故に、諸

【二】別本に「見實品」と作る。

法皆な夢の如く、乃至化の如しと知るや。是の如き等の法は、檀波羅蜜乃至一切種智を具足せず、衆生を成就し、佛國土を淨むることを得て、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。是の菩薩摩訶薩の作る所の善業、檀波羅蜜乃至一切種智は、夢の如く、乃至化の如くと知り、亦た一切衆生は夢の中に行ずる如しと知り、乃至化の中に行ずる如しと知る。是は菩薩摩訶薩の不取般若波羅蜜なり。是は法あるも是を用つて取らざるが故に、一切種智を得、是の諸法は、夢の如くにして取る所なく、乃至諸法は化の如くにして取る所なしと知る。何となれば、般若波羅蜜は、是れ不可取の相なればなり。禪波羅蜜乃至、十八不共法は、是れ不可取の相なればなり。是の菩薩摩訶薩は一切法は、是の不可取の相を知り已りて、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何となれば、一切法は不可取の相にして、根本定實なく、夢の如く、乃至化の如し。不可取の相法を用つて、不可取の相法を得ること能はざるが故なり。但だ衆生は是の如き諸法の相を知らず、見ざるを以て、是の菩薩摩訶薩は、是の衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む。是の菩薩は、初發意より已來た、所有る布施は、一切衆生の爲の故なり。乃至修習する所有る智慧は、皆な一切衆生の爲にして己身の爲めならず、菩薩摩訶薩は、餘事の爲めにせざるが故なり。阿耨多羅三藐三菩提を求むるは、但だ一切衆生の爲の故なり。是の菩薩般若波羅蜜を行ずる時、衆生を見るも衆生なく、但だ衆生相の中に住し、乃至知者なく見者なく、知見相の中に住して、衆生をして顚倒を遠離せしむ。遠離し已つて、甘露性の中に置いて住す。是の中に住するも、妄相、所謂る衆生相、乃至知者見者相あることなし。是の時に、菩薩は動心、念心、戲論心を皆な捨てて、常に不動心、不念心、不戲論心を行ず。須菩提よ、是の方便力を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、自ら著する所なく、亦た一切衆生を教へて無所著を得せしむ。世諦の故に第一義にあらず。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、世尊の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸佛の法を得。世諦を以ての故に得るや、第一義の中なるを以て得るや」と。佛の言はく、「世諦を以ての故に、佛、是の法を得たりと說く。是の法の中には法として得べきもの、是の人は是の法を得たりとするものあることなし。何となれば、是の人、是の法を得れば、是を大有所得となす。二法を用つては道なく果なければなり」と。須菩提佛に白して言さく、「世尊よ、若し二法を行じて、道なく果なくんば、不二法を行ずるは道あり果ありや不や」と。佛の言はく、「二法を行じて、道なく果なくんば、不二法を行ずるも亦た道なく果なし。若し二法なく、不二法なければ、即ち是れ道、即ち是れ果なり。何となれば、是の如きの法を用つて道を得果を得、是の法を用つて道を得ず果を得ずと(爲すは)、是れを戲論と爲せばなり。諸の平等法の中には戲論あることなし。無戲論の相は是れ諸法平等なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、諸法は無所有の性なれば、是の中、何等をか是れ平等となす」と。佛の言はく、「若し有法なくんば、無法あることなし。亦た諸法平等相をも說かず、平等を除いて更に餘法なく、一切の法を離るるは平等相なり。「平等とは、若くは凡夫、若くは聖人も、行ずる能はず、到る能はざるなり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、乃至佛も亦た行ずる能はず、到る能はざるや」と。佛の言はく、「是の諸法の平等は、一切の聖人所謂る諸の

須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・諸の菩薩摩訶薩及び諸佛とも、皆行ずる能はず、到る能はず」と。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、佛は一切諸法の中に行力自在なり。云何にしてか佛も亦た行ずる能はず、到る能はずと說くや」と。佛、須菩提に告げて言はく、「若し諸法平等と佛と異りあらば、應當に是の如く問ふべし、須菩提よ、今諸の凡夫人は平等なり。諸の須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・諸の菩薩摩訶薩、諸佛及び聖法も皆な平等なり。是れ一平等にして無二なり。所謂是れ凡夫人、是れ須陀洹乃至佛は、是の一切法平等の中に皆な不可得なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法平等の中には皆な不可得ならば是の凡夫人乃至是の佛、世尊、凡夫人、須陀洹、乃至佛に、分別あることなけん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸法平等の中には、是れ凡夫人、是れ須陀洹、乃至、是れ佛世尊なりと分別することあることなし」と。「世尊よ、若し諸の凡夫人、須陀洹、乃至、佛の分別なくんば、云何んぞ分別して三寶あらんや。現に世間に於て佛寶、法寶、僧寶あり」と。佛の言はく、「意に於て云何、佛寶・法寶・僧寶と諸法等と異るや不や」と。須菩提、佛に白して言さく「我れ佛より聞く所の義の如くんば、佛寶・法寶・僧寶と、諸法等と異りあることなし。世尊よ、是の佛寶・法寶・僧寶は卽ち是れ平等なり。是の法は、皆な合せず散ぜず、色なく、形なく、對なく、一相にして、所謂る無相なり。佛は是の力あつて、能く無相諸法處の所を分別して、是れ凡夫人、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩摩訶薩、是れ諸佛とす」と。佛、須菩提に告げたまはく「是の如し、是の如し。諸佛は阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸法を分別せざれば、當に是れ地獄、是れ餓鬼、是れ畜生、是れ人、是れ天、是れ四天王天、乃至是れ他化自在天、是れ梵天、乃至是れ非有想非無想處天、是れ四念處乃至八聖道分、是れ內空乃至是れ無法有法空、是れ佛の十力乃至是れ十八不共法なりと知るべきや不や」と。須菩提言さく「知らざるなり、世尊よ」と。「是を以ての故に、須菩提よ、當に知るべし、佛に大恩力あつて、諸法平等の中に於て、動ぜずして而も諸法を分別す」と。

須菩提、佛に白して言さく「世尊よ、佛の諸法平等の中に於て動ぜざるが如く、凡夫人も亦た諸法平等の中に於て動ぜず、須陀洹乃至辟支佛も亦た諸法平等の中に於て動ぜず。世尊よ、若し諸法等相なれば、卽ち之れ凡夫人の相、卽ち是れ須陀洹の相、乃至諸佛、卽ち是れ平等の相なり。世尊よ、今諸法は各各の相あり。所謂る色相の異、受想行識相の異、眼相の異、耳鼻舌身意想の異、地相の異、水火風空識相の異、欲相の異、瞋癡相の異、邪見相の異、禪相の異、無量心相の異、無色定相の異、四念處相の異、乃至、八聖道分相の異、檀波羅蜜相の異、乃至、般若波羅蜜相の異、三解脫門相の異、十八空相の異、佛の十力相の異、四無所畏相の異、四無礙智相の異、十八不共法相の異、有爲法性の異、無爲法性の異、是の凡夫人相の異乃至佛相の異ありて、諸法各各の相異なる。云何が菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、諸法の異相の中に分別を作さざらん。若し分別を作さずんば、般若波羅蜜を行ずること能はず。若し般若波羅蜜を行ぜざれば、一地より一地に至ること能はず。若し一地より一地に至らざれば、菩薩の位に入ること能はず。菩薩の位に入ること能はざるが

故に、聲聞辟支佛地を過ぐること能はず。聲聞辟支佛地を過ぐること能はざるが故に、神通波羅蜜を具足すること能はず。神通波羅蜜を具足せざれば、檀波羅蜜を具足すること能はず。乃至般若波羅蜜を具足して、一佛國より一佛國に至つて諸佛を供養し、諸佛の所に於て善根を種ゑ、是の善根を用つて、能く衆生を成就し、佛國土を淨むること能はず」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が問ふ所の如く、是の諸法相も亦た是れ凡夫人なり、亦た是れ須陀洹乃至佛なり」と。「世尊よ、是の諸法は各各の相、所謂る色相は異り、乃至有爲無爲相は異なるに、云何んぞ菩薩摩訶薩は、一相を觀じて分別を作さざるや」と。「須菩提よ、汝が意に於て云何、是の色相は空なりや不や、乃至諸佛の相は空なりや不や」と。「世尊よ、實に空なり」と。「須菩提よ、空の中に各各の相法は得べきや不や。所謂る色相乃至諸佛相なり」と。須菩提の言さく、「得べからず」と。佛の言はく、「是の因緣を以ての故に、當に知るべし、諸法平等の中には、凡夫人にあらずして、亦た凡夫人をも離れず、乃至佛にあらずして、亦た佛をも離れず」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の平等は、是れ有爲法とやせん、是れ無爲法とやせん」と。佛の言はく、「有爲法にあらず、無爲法にあらず。何となれば、有爲法を離れて無爲法は得べからず、無爲法を離れて有爲法は得べからざればなり。須菩提よ、是の有爲法と無爲法と是の二法は、合せず散ぜず、色なく形なく、對なく、一相にして、所謂る無相なり。佛も亦た世諦を以ての故に說く、第一義を以てするにあらず。何となれば、第一義の中には身行なく、口行なく、意行なく、亦た身口意の行を離れずして第一義を得ればなり。是の諸の有爲法と無爲法との平等相、即ち是れ第一義なり。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、第一義の中に動ぜずして、而も菩薩の事を行し、衆生を饒益す」と。

【論】釋して曰はく、須菩提は思惟すらく、佛は「實見の者と妄見の者と異ることなし」と答へたまへり。垢淨の見なきが故なりと。思惟し已つて佛に問ふ、「實を見る者は無垢無淨にして、不實を見る者も亦た不垢不淨なりや」と。一切の法性は無所有なるが故に、無所有の中には無垢無淨なり。所有の中にも亦た無垢無淨なり。無所有は斷滅の見なるが故に垢淨あるべからず。所有の中には常見なるが故に、垢淨あるべからず。所有若し決定して是れ有ならば、則ち因緣より生ぜず、因緣より生ぜざるが故に常なり、常の故に無垢無淨なり。須菩提、佛に白して、「實に見ると、實に見ざるとは、是の義云何」と。佛答へたまはく、「垢淨に別相なしと雖も、諸法の平等を說くべきが故に、是れを名けて淨となす。若し分別して垢淨の相を說かば、是の事は然らず。一切の法は平等なるが故に、我れ說いて淨と名く」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法實相、如、法性、法住、法位、實際は是れ平等なり。菩薩は是の平等の中に入りて、心に憎愛なく。是の法は佛あるも佛なきも常住なり。作法は皆な是れ虛誑なり。是の故に無作法は、佛あるも佛なきも常住なりと說くに、聽く者、心に卽ち相を取つて是の諸法は平等

なりと著す。人の指を以て月を指すに、知らざる者は、但だ其の指を觀て月を視ざるが如し。是の故に佛說きたまはく、「諸法平等の相も亦た是の如く皆な是れ世諦なり」と。世諦は實にあらず、但だ事を成辦するが爲の故に說くなり。譬へば、金を以て草と貿ふるが如し。知らざる者の言はく、何を以てか貴きを以て賤しきに易ふるやと。答へて曰はく、我れ事に用ふべきが故なりと。是の平等の義は說くべからず。一切の名字、語音、音聲、悉く斷ず。何となれば、諸法平等は是れ無戲論寂滅の相にして、但だ覺觀の散心の中に語言あるが故に所說あるなり。須菩提は佛に從つて、諸法平等の相を聞き、其の旨趣を解せるも、諸の新發意の菩薩の爲に故に問ふ、「世尊よ、若し一切法は空にして說くべからざること夢の如く、乃至化の如くならば、云何んぞ菩薩は無根本の法の中に於て、而も心を生じて、是の願を作すや。我れ當に檀波羅蜜を具足すべし、乃至衆生の爲めに如應に法を說くべしと。」佛は反問を以て答へたまはく、「須菩提よ、布施等、乃至陀羅尼門の說法等、此の諸の法は、幻の如く、夢の如き等にあらずや」と。須菩提言さく、「實に爾なり。是の諸の法は、利益ありと雖も、而も夢の如きの法を出でず」と。須菩提復た問ふ、「世尊よ、夢等の法は、皆な虛妄不實なり。菩薩は實法を求めんが爲の故に、般若波羅蜜を行じて佛道を得。(然るを)云何なれば不實法を行ずるや、不實法は檀波羅蜜等を行ずること能はず」と。佛、須菩提の言を可として、「是の如し、是の如し。布施等の法は、皆な是れ思惟し、憶想し、分別して起生せる生法なり。是の如き法の中に住せば、一切種智を成ずることを得ず」と。卽時に衆中に聽く者、心に懈怠を生ず。是の故に佛說きたまはく、「是の一切の法は皆な是れ助道の因緣なり。若し是の法の中に於て邪行謬錯すれば、是を不實と名く。若し直行して謬らざれば、卽ち是れ助道法なり。是の法を助道と爲すが故に、果と爲さず」と。是の布施等は是れ有爲法、道も亦た有爲なり、同相の故に道果を相益する者なり。所謂、諸法は實に無出、無生、一相、無相にして寂滅涅槃なり。是の故に、涅槃に於て益あること能はず。(譬へば)、時雨は能く草木を益するも虛空を益せざるが如し。是の故に菩薩は、是の助道法及び道果を知り、初發心より來た、所作の善法布施等は、皆な是れ畢竟空にして、夢の如く乃至化の如しと知る。

問うて曰はく、若し菩薩、諸法實相を知らば、何を用つてか布施等を行ずることをなすや。

答へて曰はく、佛は此の中に布施等を具足せされば、衆生を成就すること能はず、菩薩は、身及び音聲、語言を莊嚴して佛の神通力を得、種種の方便力を以て能く衆生を引導すと說きたまふ。是の故に菩薩は、衆生を成就せんが爲の故に檀波羅蜜を行ずるも、亦た檀波羅蜜を取らず。若くは有、若くは無相も亦た戲論せず、夢等の如き諸法を直ちに行じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。何となれば、般若波羅蜜は相を取るべからず、乃至十八不共法も亦た相を取るべからざればなり。一切の相の取るべからざるを知り已つて發心し、阿耨多羅三藐三菩提を求めて是の念を作す、「一切は無根本にして相を取るべからざること、夢の如く、乃至化の如し。取るべからざるの法を以て、取るべからざるの相の法を得ること能はず。但だ衆生は、是の法を知らざるを以ての故に、我れ是の衆生の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求む」と。是の菩薩は、初發心より來た、所有る布施を、一切衆生の爲にす。所謂布施等の諸の善法は、一切衆生の爲の故に修して、自らの身の爲にせず。此の中に佛、自ら因緣を說きたまはく、餘事の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めず。但だ一切衆生の爲の故なり。所以何んとなれば、是の菩薩は、衆生を憐愍する心を遠離し、但だ般若波羅蜜を行じて、諸法實相を求め、或は邪見の中に墮す。是の人は未だ一切智を得ず、求むる所の一切智の事は、心未だ調柔せざるが故に諸邊に墮して、諸法實相は得難きが故なり。是の故に佛說きたまはく、菩薩は初發心より、衆生を憐愍するが故に、著心漸く薄く、畢竟空を、「若し空ならば此の過あり」、「若し不空ならば彼の過あり」等と戲論せず。

問うて曰はく、餘處の菩薩の如きは、自ら利益し、亦た衆生を利益す。此の中、何を以てか、但だ衆生を利益することを說いて、自利を說かざるや。自ら利して、人を利するに何の咎ありや。

答へて曰はく、菩薩の善道を行ずるは一切衆生の爲なり。此は是れ實義なり。餘處に、自ら利して、亦た衆生を利益すと說くは、是れ凡夫人の爲に是の說を作して、然して後能く菩薩道を行ずるなり。道に入る人に下中上あり、下は但だ自度の爲の故に善法を行じ、中は自らの爲にし亦た他の爲にし、上は但だ他人の爲の故に善法を行ずるなり。

問うて曰はく、是の事は然らず。下は但だ自ら身の爲にし、中は但だ衆生の爲にし、上は自ら利し亦た他人を利す。若し、

但だ利他のみにして、自ら利すること能はざれば、云何んぞ上と言はん。

答へて曰はく、然らず世間の法は爾り、自ら供養する者は其の福を得ず、自ら其の身を害するも罪を得ず。是を以ての故に、自身の爲めに道を行ずるを名けて下人となす。一切の世人は、但だ自ら身を利して、他の爲にすること能はず。若し自ら身の爲に道を行ずれば、是れ則ち斷滅なり。自ら愛著するが爲の故なり。若し自ら能く己が樂を捨て、但だ一切衆生の爲めの故に善法を行ぜば、是を上人と名く、(是れ)一切衆生と異るが故なり。若し但だ衆生の爲の故に善法を行ぜば、衆生は未だ成就せざるも、自利は則ち具足をなす。若し自ら利益して、又た衆生の爲にせば是を雜行と爲す。佛道を求むる者に三種あり。一には但だ佛を愛念するが故に自ら已身の爲に佛を成し、二には已身のためにし、亦た衆生のためにし、三には但だ衆生の爲にす。是の人は清淨に道を行じ、我顚倒を破するが故に、是の菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生なく、乃至知者見者なし。是の中に安住して衆生を拔出して、甘露性の中に著く。甘露性とは、所謂一切助道法なり。何となれば、是の法を行じて、涅槃に至ることを得れば、涅槃を甘露と名く、是の甘露性の中に住すれば、我等の妄想は復た生ぜず。是の菩薩自ら無所著を得、亦た衆生をして無所著を得せしむ。是を第一の利益衆生と名く。

問うて曰はく、上には但だ衆生を利益するが爲めの故に道を行ずと說けり。今何を以ての故に自ら無所著を得、衆生をして無所著を得せしむるや。

答へて曰はく、已むことを得ざるが故なり。若し自ら智慧なくんば、何ぞ能く人を利せん。是を以ての故に、先づ自ら無所著を得て、然る後に、人に敎ゆ。若くは是の功德を他に與ふるを得べきこと。財物の如くならば、諸佛大菩薩は、所有の功德、皆な應に他に與ふべく、乃至調達の怨賊にも皆な之れを與ふべし。然して後、更に自ら功德を修集すべし。但だ是の事は然らず、我れ作して而も他は得べからず。是れ亦た世俗の說にして、第一義にあらず。何となれば、第一義の中には衆生なく、一もなく異もなく、等しく諸法の相を分別すればなり。此の中に亦た所著の處なしと說く。

復次に、先に說くが如く、相の說く可からざるは是れ第一義なり。此の中には說くべきが故に世俗なり。爾の時に須菩提、

佛に問ふ、「道場に於て得る所の法は、世諦を用つての故に得と爲すや、第一義諦を用ふると爲すや」と。須菩提の意へらく、「若し世諦を以ての故に得ば、卽ち是れ虛妄不實なり。若し第一義を以ての故に得ば、第一義の中には得ることなく、得る者なく、說くべからず、受くべからず」と。佛答へたまはく、「世俗の語言を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得と說く。是の中に得る者なく、得法あることなし。何となれば、若し是の人、是の法を得ば卽ち是れ二法なり。二法の中には道もなく、果もなし。二法とは是れは菩薩、是れは阿耨多羅三藐三菩提を得ることなり。是の如きの二法は皆な是れ世諦の故に有り、若し二ならば、佛法何ぞ虛妄ならざるを得ん。若し人ありて第一義を得ず、但だ二法を以て諸法を分別せば、是れ則ち虛妄なり。諸佛大菩薩は、第一義を得るが故に、衆生を度せんが爲に、第一義を得せしむ。諸法を分別すと雖も、是れ虛妄にはあらざるなり。須菩提復た問ふ、「世尊よ、若し二法を用つて道なく、果なくんば、今不二の法を以ての故に、道あり果ありや」と。佛答へたまはく、「二法(を用つてする)も、道なく果なく、不二の法(を用つてする)も亦た道なく果なし」と。

問うて曰はく、餘處には、二法は是れ凡夫の法、不二の法は是れ賢聖の法なりと說く。毘摩羅詰經の不二入法門の中に說くが如し。

答へて曰はく、不二入は是れ眞實の聖法なり。或は新發意の菩薩ありて、未だ諸法實相を得ず、是の不二の法を聞いて相を取り著を生ず。是の故に、或は不二の法を稱讚し、或時は毀呰す。又た佛は是の二邊を遮して中道を說く。所謂、二に非ず、不二に非らず。二法の名は各各別にして相は不二なるを一空の相と名く。是の一空相を以て、各各別異の相を破す、破し已つて事訖れば、還た不二の相を捨つ。是れ卽ち是れ道なり、是れ果なり。何となれば、諸の賢聖は、二法無きを讚歎すと雖も不著の爲の故に、是の法を用つて道を得果を得、是の法を用つては道なく果なし。卽ち是れ戲論にして無戲論、是れ平等法なり。

須菩提佛に白して言さく、「若し諸法は無所有性ならば、何等か是れ平等なるや」と。佛答へたまはく、「若し有性無性を離るれば、假りに名けて平等となす。若し菩薩、一切法有を說かざれば、一切法性を說かず、一切法相等を說かず、顯示して亦

た、無法、無法性、無法相等を說かず、顯示して亦た「是の二邊を離れて、更に平等の相あり」と說かず、一切處に平等の相を取らず、亦た是の平等なしと言はず、諸の善法を行ずるを妨げず、是を諸法平等と名く。復次に、諸法平等とは、所謂る一切法を出過するなり。

問うて曰はく、先には處處に、諸法は卽ち是れ平等の相なり、平等は卽ち諸法の實なり。名は異なれど義は同じ、色如は色に非ず、色を離るるにあらずと說けり。今何を以てか平等は一切法を出過すと說くや。

答へて曰はく、一切法に二種あり、一には色等の諸法の體、二には色等の法の中の行なり。凡夫は邪行、賢聖は正行なり。此の中には、平等を說いて、凡夫行の中を出づるも色等の中を出づとは言はず。

復次に、平等は、能く行ずることなく、能く到ることなし。

是に於て須菩提は驚いて佛に問ふも、亦た行ずること能はず、到ること能はず。須菩提の謂へらく、「是の法は甚深微妙にして、行じ難しと雖も、是の事は佛、應に得べし」と。佛答へたまはく、「須陀洹より乃ち佛に至るまで、皆な能く行ずることなく、能く到ることなし」と。佛の意は、「三世十方の佛も、能く行ずること能はず、能く到ること能はず、何に況んや一佛平等の性自ら爾るをや」と。故に須菩提復た問ふ、「佛は一切法の中に於て、行力自在なり。佛の無礙の智慧は、處として到らざるなし、云何にして能く行ずること能はず、能く到ること能はずと言ふや」と。佛答へたまはく、「若し佛と平等と異ならば、應に是の難あるべし、何を以てか、行ずる能はず到る能はざらんと。今凡夫の平等と須陀洹の平等、佛の平等とは皆な一平等にして二なく分別なし。是の凡夫より乃ち佛に至るまで、自性は自性の中に行ずること能はず、自性の中に到ること能はず。自性は應に他性の中に行ずべし。是の故に佛說きたまはく、「若し佛と平等と異ならば、佛は應に平等を行ずべし。但だ佛は卽ち是れ平等なるが故に、行ぜず到らず。智慧の少きを以てにはあらざるが故なり」と。須菩提、佛に白して言さく、若し平等にして、凡夫より佛に至るまで、異ることを得べからずんば、今凡夫と聖人とは、差別あるべからずと。佛、須菩提の問を可として、「平等の中には差別なし。世諦の故に、凡夫法の中に差別あり」と。復た問ふ、「若し凡夫より乃ち佛に至るまで、差別あ

ることなくんば、云何なれば三寶大に世間に現れ、大に衆生を利益するや」と。佛答へたまはく、「平等は卽ち是れ法寶なり、法寶は卽ち是れ佛寶なり、僧寶なり。何となれば、未だ法を得ざる時は、名けて佛と爲さず。平等法を得るが故に名けて佛と爲せばなり。是の平等法を得るが故に、分別して須陀洹等の差別あり」と。須菩提佛の敎を受けて「是の法は皆な合なく散なく、色なく形なく、對なく、一相にして所謂無相なり。佛に是の力ありと雖も、而も尙ほ空無相の中に於て、是れ凡夫、是れ聖人ょ分別するや」。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。若し諸佛、是の法を分別せずんば、云何んぞ當に地獄乃至、十八不共法ありと知るべけんや」と。

問うて曰はく、諸佛は日出の如し。高きものを下くし、下くき者を高からしむること能はず。但だ能く萬物を照明して、眼ある者をして別識せしむ。諸佛も亦た是の如く、亦た諸法の相を轉ぜず、但だ一切智を以て照し、人の爲に演說して知らしむ。汝何を以ての故に「若し佛諸法を分別せずんば、云何にして地獄乃至、十八不共法あることを知らん」と言ふや。今畜生等は、現に目の見る所、人皆な識知するが如し。何ぞ佛說を須んや。

答へて曰はく、佛は好醜の諸事を作らずと雖も、而も演說して人に示す。知に二種あり、一には凡夫の虛妄知、二には如實知なり。畜生等の相は、是れ凡人の虛妄知なり。佛は實相を知るが爲の故に、佛が諸法を分別せずんば、云何にして地獄等あることを知ると言はん。

復次に、諸佛の法は寂滅の相にして無戲論なり。此の中に、若し地獄等の相ありと分別せば、名けて寂滅不二無戲論の法と爲さず。佛は寂滅不二の相を知ると雖も、亦た能く寂滅の相の中に於て、諸法を分別して而も戲論に墮せず。諸法實相を離るる者は、眼に畜生等を見ると雖も、亦た能く實の如く、其の相を知ること能はず。牛の角・足・尾等の諸分邊和合して、更に牛法の生ずることあるが如し。是を一となさば、諸分は多なり。牛法は一なり、一は多を作さず、多は一を作さず。有人の言はく、「此の說は非なり、此の諸の分を除いて更に牛法あるべく、力用見るべし」と。牛法は、衆分和合して生じ、而も牛法は衆分に異らず。何となれば、此の衆分合するを見るが故に、名けて牛を見ると爲す。更に餘物の牛と爲るを見ず。異は一を

破し、一は異を破し、不一不異にして一異を破す。若し一異なくんば、云何んぞ不一不異あらん。若し是の諸法平等の中に入らば、爾の時、始めて實の如く牛相を得。是の故に言はく、「若し佛、諸法の相を分別せず、二諦を說かずんば、云何んぞ善く畜生等を說かん」と。所謂平等に於て動ぜずして、而も諸法を分別す。動ぜずとは、諸法を分別する時、一異の相に著せざるなり。

須菩提、佛に白して言さく、「佛の諸法等の中に於て、動ぜざるが如く、辟支佛乃至凡夫も、諸法等の中に於て亦た動ぜず。何となれば、諸佛は平等相にして、乃至凡夫も亦た平等相なればなり。世尊よ、若し爾れば、佛は云何なれば諸法を分別して是の色は異、色性は異、受性は異、乃至有爲無爲性は異とするや。若し諸法を分別せざれば、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、一地より一地に至り、乃至、佛國土を淨むることを得ざらん」と。佛答へたまはく、「汝が意に於て云何、色等の相を推尋するに、是れ空と爲すや不や」と。「世尊よ、實に爾なり、空なり」と。「空の中に異相の法ありや不や」と。答へて言はく、「不なり。何となれば、是の畢竟空は、無相の智慧を以て解すべし、是の中に云何んぞ異相あらん」と。佛、須菩提に語りたまはく、「若し空の中に異相なくんば、空は便ち是れ實なり、是の故に汝云何んぞ、空の中に於て諸法を分別して是の難を作すや。畢竟空の中には、空も亦た不可得なり、各各の相も亦た不可得なり。汝云何が空を以て各各の相の難を爲すや。是の因緣を以ての故に當に知るべし、諸法平等の中に分別なきが故に凡夫人なし、但だ凡夫人は實相にあらざるも、實相を離れず、凡夫の實相即ち是れ聖人の相なることを。是の故に不と言ふ」と。但だ凡夫は凡夫を離れず、乃至佛も亦た是の如し。須菩提は、平等の相は大に利益するを以て、平等の定相を知らんと欲す。是の故に問ふ、「是れ有爲とやせん、是れ無爲とやせん」と。佛答へたまはく、「有爲にあらず、無爲にあらず。何となれば、若し有爲ならば、皆な是れ虛誑の作法なり、若し無爲ならば、無爲法は生住滅なきが故に無法なり、無法なるが故に無爲の名を得ず、有爲に因るが故に無爲あればなり。經の中に說くが如し。有爲を離れて無爲は不可得なり、長を離れて短なきが如し、是れ相待の義なり。

問うて曰はく、有爲法は是れ無常、無爲法は是れ常なり。云何んぞ、有爲を離れて無爲は不可得なりと言ふや。

答へて曰はく、無爲法は分別無きが故に無相なり。若し常相を說かば、無相と言ふを得ず。有爲法を破するが故に無爲と名く、更に異法なきなり。人が牢獄に閉在せるに、牆を穿つて出づることを得。壁を破するは是れ空なり、更に異なる空なきが如し。空も亦た因緣より生ぜず、無爲法も亦た是の如し。有爲法の中に、先に無爲の性あつて有爲を破すれば、卽ち是れ無爲なり。是の故に有爲を離れては無爲は得べからずと說く。是の有爲・無爲の性は、皆な合せず散ぜず、一相にして所謂無相なり。佛は世諦を以ての故に是の事を說く、第一義にはあらず。何となれば、佛自ら因緣を說きたまふ。第一義の中には身口意行なし。有爲無爲法は平等なり、卽ち是れ第一義なり。是の有爲無爲法の平等を觀ずれば亦た一相に著せず。菩薩は第一義の中に於て、動ぜずして衆生を利益す、方便力の故に、種種の因緣もて衆生の爲めに說法するなり。

卷の第九十六

第八十七涅槃如化品

【經】須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し諸法平等にして、爲作する所なくんば、云何んぞ菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、平等の中に於て、動ぜずして、而も菩薩事を行じ、布施、愛語、利益、同事を以てするや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し是の如し。汝が說く所の如し。是の諸法は平等にして所作なし。若し是の衆生、自ら諸法の平等なることを知らば、佛は神力を用つて、諸法平等の中に於て、動ぜずして而も衆生の吾我の相を拔出し。空を以て五道の生死、乃至知者見者の相を度し、色相、乃至識相、眼相、乃至意相、地種相、乃至識種相を度し、有爲性相を遠離して、無爲性相を得せしむる事なし。無爲性相は、卽ち是れ空なり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、何等の空を用つての故に、一切の法は空なる」と。佛の言はく、「菩薩は、一切の法相を遠離す。是の空を用つての故に、一切法は空なり。須菩提よ、汝が意に於て如何、若し化人あつて、化人を作るに、是の化は頗し實事にして空ならざるや不や」と。須菩提言さく、「不なり、世尊よ。是の化人は、實事あつて不空なることなし。是の空及び化人の二事は合せず散ぜず、空もを以て空ずる故に空なり。是れは空、是れは化なりと分別すべからず。何となれば、是の二事は等しく空の中に。所謂る是れは空、是れは化を得べからず。所以何んとなれば、須菩提よ、色は卽ち是れ化なり、受想行識は卽ち是れ化なり、乃至一切種智も、卽ち是れ化なればなり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、若し世間法是れ化ならば、出世間法も亦た復た化なりや不や。所謂る四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・三解脫門・佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法、並に諸法の果、及び賢聖人、所謂る須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・菩薩摩訶薩、諸佛なり。世尊よ、是の法も亦た化なりや不や」と。佛、須菩提に告げたまはく、「一切の法は皆な是れ化なり。是の法の中に於て、聲聞法の變化あり、辟支佛法の變化あり、菩薩摩訶薩法の變化あり、諸佛法の變化あり、煩惱法の變化あり、業因緣法の變化あり、是の因緣を以つての故に、須菩提よ、一切法は皆な是れ化なり」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、是の諸の煩惱斷なる、所謂る須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道の、諸の煩惱の習を斷ずるは、皆な是れ變化なりや不や」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若し法に生滅の相あらば、皆な是れ變化なり」と。須菩提の言さく、「世尊よ、何等の法か變化にあらずと爲す」と。佛の言はく、「若し法にして生なく滅なければ、是れ變化にあらず」と。須菩提の言さく、「何等をか是れ不生不滅にして變化にあらざる」。佛の言はく、「無誑相の涅槃、是の法は變化にあらず」と。「世尊よ、佛の自ら說きたまふが如く、諸法平等は、聲聞の作にあらず、辟支佛の作にあらず、諸の菩薩摩訶薩の作にあらず、諸佛

【一】別本には「如化品」と云ふ。

の作にあらず。有佛にも無佛にも、諸法の性は常に空にして性空なり。即ち是れ涅槃なり。云何にして涅槃の一法は化の如くにあらずと言ふや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如し、是の如し。諸法の平等は、聲聞の所作にあらず(乃至性空は即ち是れ涅槃なり。若し新發意の菩薩、是の一切法は皆な畢竟して性空にして、乃至涅槃も亦た皆な化の如しと聞かば、心則ち驚怖せん。是の新發意の菩薩の爲の故に、生滅は化の如く、不生不滅は、化の如くならずと分別す」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、云何にして、新發意の菩薩を敎へて、性空なることを知らしめん」と。佛、須菩提に告げたまはく、「諸法は本と有りて、今無きや」と。

【論】問うて曰はく、是の事は、佛、先きに已に答へたまへり。須菩提は今何を以てか更に問へるや。所謂「世尊よ、若し諸法平等にして作爲する所なくんば、云何にして菩薩は諸法平等の中に於て、動ぜずして大に衆生を利益するや」と。

答へて曰はく、是の事は解し難きを以ての故に、先きに說くと雖も而も更に問ふなり。又經は將に訖らんとして、佛は深空を說きたまふも、凡夫聖人の行ずる能はざる所、到る能はざる所なり。是の故に須菩提は、一切法の平等相は、定んで空なるを知り、云何にして菩薩は、是の法の中に住して、而も能く衆生を利益するや。平等法・無作相にして、是の有作相を利益するや(を問へり)。佛、須菩提の意を可し、還た須菩提の問うて而も答ふるを以て、其の平等の答を可とす。其れ衆生を利益するは、所謂若し衆生自ら諸法の平等、畢竟空を知らば、佛に恩力なし、若し病人自ら將適を知れば、則ち藥師に功なきが若し。須菩提復た問ふ、「若し諸法の實相は畢竟空にして、能く作す所なくんば、菩薩は何を以てか是の中に住して而も衆生を利益するや、若し菩薩、是の平等を用つて衆生を利益せば、即ち實相を壞せん」と。佛答へたまはく、菩薩は諸法實相を以て衆生を利益せず。但だ衆生は畢竟空を知らざるが故に、菩薩は敎詔して知らしむるなり。菩薩の衆生を敎化する、是を對治悉檀と爲す。須菩提は第一義悉檀の利益なきを以て難と爲す。佛答へたまはく、衆生は顚倒して知らず、佛は但だ其の顚倒を破して、是を實と言はず。是の故に菩薩は、是の平等相の中に住して、我相、乃至知者見者相を遠離す、是を衆生空と名づく。是を以て一切吾我の法の、衆生を敎化することなし。衆生に二種あり、一には愛多く、二には見多し。愛多き者は、是の無我の法を得れば、則ち厭心を生じ、欲を離れて是の念をなす、「若し無我ならば何ぞ餘物を用ゐん」と。見多き者は、無我法を知ると雖も、色等の法の中に於て、若くは常、若くは無常等を戲論す。是の故に次に色相、五衆、十二入、十八界を說き、乃至有爲の

性相を遠離して無爲の性相を得せしむ。無爲の性相は卽ち是れ空なり、是れを法空と名づく。

問うて曰はく、須菩提は何を以てか是の問を作すや、又何等の空を用つての故に一切法は空なるや。

答へて曰はく、空に種種あり、火中に水なく、水中に火なきが如きも亦た是れ空なり、五衆の中に我なきも亦た是の如し、或は衆生空あり、或は法空あり。法空の中に、或は有人の言はく、「諸法は空なりと雖も亦た盡く空ならず。色空の中に微塵の根本在ることあるが如し」と。是の故に須菩提問ふ、「何等の空を以ての故に一切法は空なるや」と。佛答へたまはく、「無所得にして畢竟空なるを以ての故に、一切の相を遠離す」と。是の故に、是の中には衆生空と法空とを說けり。是の二空なるが故に、一切法は空ならざることなし。

問うて曰はく、若し爾らば、此の中に何を以てか、一切の法は相を離ると說くや。

答へて曰はく、一切法は盡く壞すべからず、但だ其の邪憶想を離るれば、一切法は自ら離るるなり。神通人の如きは、色相を壞するが故に、則ち石壁も礙ふることなし。佛の說きたまへるが如し、「汝等當に五衆の中に於て、正憶念を修して貪欲を斷じ、正解脫を得べし。是の故に離相を說く」と。

須菩提は是を聞き已つて心に驚き、「云何にして一切の法の、若くは大、若くは小は、都て本と實なからん。凡夫人は虛妄なれば、實事なかるべきも、聖人には少許の實はあるべし」と。須菩提は是れ阿羅漢にして、深く佛法を貴ぶと雖も、亦た新發意の菩薩の爲めの故に問へり。佛、須菩提の意を知り、是の事を明了ならしめんと欲するが故に、譬喩を說いて、反つて須菩提に問ひたまふ、「汝が意に於いては云何、化人が復た化を作すが如き、是の化は本と實あつて空ならざるや不や」と。答へて言さく、「不なり。是の化は實あることなし。而も空ならざるは、空及び化人の二事合せず散せざればなり。皆な空の故に、空空を用つての故に空なり」と。

問うて曰はく、何を以てか名けて空空の故に、空なりとなすや。

答へて曰はく、十八事の實を破せんが爲めの故に十八空あり。衆生の心中に變化する空法を破するが故に空空を用ふ。世間

の人は皆な幻化の法は久しく住せずして能く作す所なきを知るが故に空と名く。是の故に空空の故に空なりと言ふ。是れ空なり、是れ化なりと分別すべからず。凡夫の人は、變化は是れ空にして實ならずと知るも、餘法を實と爲すと謂へり。是の故に化を以て喩と爲す。當に知るべし、餘法と化と異ることなきを。聖人の解する所の如くんば、化を以て喩と爲すを得ず、分別する所なきを以ての故なり。一切法を名けて五衆となす。佛の言はく、「色受想行識は、是れ化ならざることなし。空なるを以ての故なり」と。

須菩提、佛に白して言はく、「世尊よ、凡夫の法は虚妄にして化の如くなるべし。出世間法も亦た變化の如くなるや。所謂る四念處、乃至十八不共法、若くは四念處法等は、因緣邊より生ずるが故に化の如し。是の法果は所謂る涅槃なり。(是の涅槃も)亦た復た化の如くなるや。若し能く是の行を起す者、所謂る須陀洹、乃至佛も亦た復た化の如くなるや」と。佛の答へたまはく、「若くは有爲、若くは無爲、及び諸の賢聖は皆な是れ化なり。(そは)畢竟空なるが故なり。是の義は、初品より已來、處處に廣く說く所、是の故に一切法は空にして皆な化の如しと言ふ。

問うて曰はく、若し一切法皆な空にして化の如くならば、何を以ての故に、種種に諸法の別異ありや。

答へて曰はく、佛の所化、及び餘人の所化は、實ならずと雖も、而も種種形像の別異あるが如し。夢中所見の種種(の形像)も亦た是の如し。人は夢中に好惡の事を見て、喜を生ずる者あり、怖を生ずる者あり。鏡中の像の如きは、實事なしと雖も、而も本の形像に隨つて好醜あり。諸法も亦た是の如く、空なりと雖も、而も各各の因緣あること、佛の此の中に說きたまへるが如し。是の化法の中には、聲聞の變化あり、辟支佛の變化あり、菩薩の變化あり、佛の變化あり、煩惱の變化あり、業の變化あり、是の故に一切法は皆な是れ變化なり。聲聞の變化とは、三十七品、四聖諦、乃至三解脫門なり。何となれば、聲聞の人は、持戒の中に住し、禪定攝心して涅槃を求め、內外身の不淨を觀ず、是を身念處と名く。是等の如き法を涅槃と爲すが故なり。勤めて精進して、是の法を起さば、本と無うして而も今あり、已に有つて還た無なり、是を聲聞の變化と爲す。辟支佛の變化とは、所謂十二因緣等の諸法を觀ずるなり。所以何んとなれば、辟支佛の智慧は聲聞の人より深きが故なり。菩薩の

變化とは、所謂六波羅蜜、及び二種の神通、(卽ち)報得及び修得なり。佛の變化とは、三十二相、八十隨形好、十力、一切種智等の無量の佛法なり。煩惱の變化とは、煩惱は種種の業を起す、善不善無記業、畢定業、不畢定業、善不善無動業等の無量の諸業なり。

問うて曰はく、諸の煩惱は是れ惡法なり、云何が能く善業・無動業を生ずるや。

答へて曰はく、二種の因あり、一には近因、二には遠因なり。人に我心ありて、後身に常に樂まんとするが爲の故に、布施を修するは是れ近因なり。欲界の衰惱不淨身を離れんが爲の故に、禪定を修するは是を遠因と爲す。復た有人は言ふ、「一切の凡夫は皆な我心の和合を以ての故に業を起す」と。有人は言ふ、「我心を離るれば、第六識を起すことあることなし、我心に住するが故に。第六識を起すなり、我心は卽ち是れ諸の煩惱の根本なり」と。

問うて曰はく、煩惱は是れ垢心、善心は是れ淨心なり。垢淨は和合することを得ず、何を以てか我心の中に住して能く善業を起すと言ふや。

答へて曰はく、爾らず。一切の心は皆な慧と俱に生ず。無明心の中にも亦た慧あるべし。慧と無明とは相違の法なり、而も一心の中に淨を起す、垢も亦た是の如し。凡夫は未だ聖道を得ず、云何んぞ能く我心を離るるを得て、而して善を行ぜんや。瞋等の煩惱の中にては則ち善を行ずることを得ず。(そは)我心は無記にして柔軟なるが故なり。是の故に煩惱心の中に善業、無動業、無咎業を生ずるなり。變化とは、一切果報を生ずるの法、所謂六道なり。惡業の果報は是れ三惡道、善業の果報は是れ三善道なり。惡業に上中下あり、上とは地獄、中とは畜生、下とは餓鬼なり。善業にも亦た上中下あり、上とは天、中とは人、下とは阿修羅等なり。上善業に種種輕重等の分別あり、上惡業にも亦た輕重の差別あり。其の次第輕重は、地獄の中に說くが如し。餘道は亦た分別業品の中に說くが如し。

問うて曰はく、若し業に從つて有るならば、何を以てか變化と言ふや。

答へて曰はく、凡夫人は諸法を見ること化の如くならず、聖人は畢竟空の相を知るが故に、天眼を以て衆生を見るに、皆な

始、終、中間あること無く、化主が遠處に變化を作るが如し。業も亦た是の如く、過去世の中にあつて今身の變化を作るなり。變化の事の如きは、能く種種に人をして憂喜怖畏を生ぜしむ。智者は之れを觀るに皆な實あることなし。而も人は横ままに憂喜を生ず、是の人笑ふべし。業も亦た是の如し、是の故に業變化を說く。

問うて曰はく、是の諸の變化は、皆な業の所作なり。何を以てか但だ業變化のみを說かさるや。

答へて曰はく、業に二種あり、淨業と垢業となり。淨業とは、聲聞の變化、乃至佛の變化なり。垢業とば、是れ煩惱の變化なり。

復次に、二種の業あり、凡夫の業と聖人の業となり。凡夫の業は是れ煩惱の變化にして、聖人の業は須陀洹乃至佛なり。是の故に、皆な是れ業變化なりと雖も、而も廣く分別するに咎なし、是の故に、須菩提よ、當に知るべし、一切の法は空にして、皆な化の如くなることをと。

須菩提復た問うて言はく、「世尊よ、是の諸の聖人は煩惱を斷ず。所謂須陀洹果、乃至阿羅漢果、辟支佛道(等)は一切煩惱の習を斷ず。是の諸斷皆な化の如くなるや不や」と。須菩提意へらく、有爲法は虛誑なるが故に變化の如し。無爲法は眞實無作なるが故に、是れ化なるべからずと。是の故に問へり。佛答へたまはく、「一切法は若くは生じ、若くは滅して、皆な化の如し。何となれば、本無今有、今有後無にして、人心を誑惑するが故なり」と。佛の意は、一切は因緣より生ずる法にして皆な自性なきが故に畢竟空なり、畢竟空なるが故に皆な化の如しとなり。須菩提は諸法實相を求むる意、猶ほ息まさるが故に佛に問ふ、「何等の法か化の如くならざるや」と。須菩提意に謂へらく、「一の決定の實法ありて化の如くならず、是の法に依つて而も精進して求むべし」と。佛答へたまはく、「若し法あつて、無生無滅ならば卽ち是れ化にあらず。何者か、是の所謂る無誑相涅槃なる。是の法は無生の故に無滅なり、無滅の故に人をして憂を生ぜしむること能はず。佛は、一切の有爲法は畢竟空にして皆な化の如し、唯だ涅槃の一法のみあつて化の如くにあらずと分別したまへり。爾の時に須菩提佛に白して言さく、「佛の說きたまふが如くんば、平等法は佛の所作にあらず、聲聞辟支佛の所作にあらず。有佛にも無佛にも諸法は常住にして性空の相なり。

性空の相は卽ち是れ涅槃なり」と。須菩提意に謂へらく、「深く般若波羅蜜の中に入れば、涅槃も亦た空なること、上品の中に處處に說けり。今佛は何を以てか、唯だ一の涅槃のみ、化の如くにあらずと說くや」と。是の故に佛語を引いて難を爲す、「諸法の實相は性空、法は常住なり。諸佛は但だ人の爲に演說す。性空とは卽ち是れ涅槃なり。今何を以てか生滅の法の中に於て、別して無誑相涅槃は化の如くならずと說きたまふや」と。佛答へたまはく、「諸法は平等常住にして賢聖の所作に非ず、若し新學の菩薩、是を聞かば則ち恐怖せん。是の故に分別して、生滅者は化の如く、不生滅者は化の如くにあらずと說くなり。

問うて曰はく、唯だ佛一人のみ是れ無誑の人なり。一切の人は皆な佛の所に於て實事を求めんと欲す。今佛は何を以てか、一切法は都て空なりと說き、或は都て空ならずと說くや。

答へて曰はく、佛は此の中に自ら因緣を說けり。新發意の菩薩のための故に涅槃は化の如くならずと說きたまふなりと。

問うて曰はく、人の爲の故に諸法の相を轉ずべきや。

答へて曰はく、此の中に佛說きたまはく、「諸法の相は性空なり、性空ならば云何んぞ轉ずべき」と。佛初て是の諸法實相を得る時、心は但だ涅槃寂滅に趣向す。是の時、十方の諸佛諸天は、佛に涅槃に入ること莫く、一切衆生の苦惱を、當に度脫すべしと請へり。佛卽ち請を受く。佛は但だ衆生を度せんが爲の故に住す。是れを以ての故に知る。利益すべき衆生あれば事に隨つて爲に說きたまふと。諸の有爲法は虛誑なるを觀ずるが故に、涅槃は實に不變不異となす。新發意の菩薩あつて、是の涅槃に著せば、是の著に因つて諸の煩惱を起す、是の著を斷ぜんが爲の故に、涅槃は化の如しと說き、若し著心無くんば、是の時は則ち涅槃は化の如くにあらずと說くなり。

復次に、二道あり、小乘道と大乘道となり。小乘の論議は涅槃を以て實となし、大乘の論議は利き智慧を以て深く入るが故に、色等の諸法を觀ること皆な涅槃の如し。是の故に二說は咎なきなり。

須菩提復た問ふ、「云何に新發意の菩薩を教化して平等性空を知らしむるや」と。須菩提意に謂へらく、「性空の法は是れ凡夫人の大に怖畏する處にして、性空無所有を聞くや深坑に臨むが如し、何となれば、一切の未だ道を得ざる者は、我心に深く著

するが故に空法を怖畏して是の念をなす、「佛は人を教へて善行を勸修するを教ゆるも、終には無所有の中に歸入せしむ」と。是を以つての故に、須菩提は「何の方便を以てか是の新發意の者を教誨するや」と問へり。佛答へたまはく、「諸法は先に有りにして今は無なりや」と。佛の意は、新發意の者の怖畏するは、後に當に無なるべきを以ての故なれば、諸法は先に有りて今無きやと說きたまふなり。須菩提は自ら了了に、諸法の先をも自ら無く今も亦た無きことを知るも、但だ新發意の者は、我見を以て心を覆ふが故に驚怖を生じ、爲に顚倒を除いて實見を得せしむるも、竟に失ふ所なく、諸の煩惱顚倒は實相所謂性空を知れば、是の時は則ち恐怖なし。是の如き等の法を應に新發意の者を教ふべし。若し諸法は先に有りしも、道を行ずるを以ての故に無くなるとせば、應當に恐怖すべし。初めより自ら無きが故に恐怖すべからず、但だ顚倒を除かんが爲めのみ。

第八十八[二]　薩陀波崙品

【經】佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を求むるに、當に薩陀波崙菩薩摩訶薩の如くすべし。是の菩薩は今、大雷音佛の所にありて菩薩道を行ず。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊よ、薩陀波崙菩薩摩訶薩は云何に般若波羅蜜を求むるや」と。佛の言はく、薩陀波崙菩薩摩訶薩は本と般若波羅蜜を求むる時、身命を惜まず、名利を求めず、空閑林の中に於て、空中の聲を聞く。言はく、汝善男子よ、是れより東に行き、疲極を念ずること莫れ、睡眠を念ずること莫れ、飲食を念ずること莫れ、晝夜を念ずること莫れ、寒熱を念ずること莫れ、內外を念ずること莫れ、善男子よ、行く時左右を觀ること莫れ、汝行く時に身相を壞すること莫れ、色相を壞すること莫れ、受想行識相を壞すること莫れ。何となれば、若し是の諸相を壞すれば則ち佛法に於て礙あり。若し佛法に於て礙あれば、便ち五道生死の中に往來し、亦た般若波羅蜜を得ること能はざればなり。爾の時に、薩陀波崙菩薩、空中の聲に報へて言はく、「我れ當に教に從ふべし。何となれば、我れ一切衆生のために大明と作らんと欲し、一切諸佛の法を集めんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するが故なり」と。薩陀波崙菩薩は復た空中の聲を聞く、言はく、善い哉、善い哉、善男子よ。汝は、空無相無作の法に於て、應に信心を生ずべし。相を離るるの心を以て般若波羅蜜を求め、我相を離れ、乃至知者、見者相を離るべし。當に惡知識を遠離すべし。當に善知識に親近し供養すべし。何等か是れ善知識なる。能く空、無相・無作、無生・無滅の法、及び一切種智を說いて、人の心をして歡喜・信樂に入らしむ、是を善知識となす。善男子よ、汝若し是の如く行ぜば、久しか

【二】薩陀波崙。Sadāprudita 常啼と譯す。

らずして當に般若波羅蜜を聞くべし。若くは經卷の中より聞き、若くは菩薩の所說に從つて聞く、善男子よ、汝が從つて聞く所の是の般若波羅蜜の處に、應に心に如佛の想を生ずべし。善男子よ、汝當に恩を知るべし。是の念をなすべし、從つて聞く所の是の般若波羅蜜は、卽ち是れ我が善知識なり、我れ是の法を聞くを用つての故に、疾かに、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得、諸佛に親近し、常に有佛の國土に生じて、衆難を遠離し、無難處を具足することを得。善男子よ、當に是の功德を思惟し、籌量し、從つて聞く所の法の處に於て、心に如佛の想を生ずべし。汝善男子よ、世利の心を以ての故に、法師に隨逐すること莫れ。但だ法を愛し、法を恭敬するが爲の故に、說法の菩薩に隨逐せよ、爾の時に、當に魔事を覺知すべし。若し惡魔が、說法の菩薩の與めに、五欲の因緣を作し、假爲法を故らに受けしむるも、若し說法の菩薩、實法門に入らば、功德力を以ての故に、受けて而も染する所なし。又三事を以ての故に、是の五欲を受くればなり。(卽ち)方便力を以ての故に、衆生をして善根を種ゑしめんと欲するが故に、衆生と其の事を同じうせんと欲するが故なり。汝是の中に於て汚心を生ずること莫れ、當に淨想を起し、自ら念ずべし。「我れ未だ漚和拘舍羅を知らず。大師は、方便法を以て衆生を度し、福德を得せしめんが爲の故に、是の諸の欲を受け、智慧に於て著することなく、礙ふることなく、欲染をなさず」と。善男子よ、卽ち當に諸法實相を觀ずべし。諸法實相とは、所謂一切法の不垢不淨なり。何となれば、一切法は自性空にして衆生なく、人なく、我なく、一切法は幻の如く、夢の如く、響の如く、影の如く、炎の如く、化の如ければなり。善男子よ、是の諸法實相を觀じ已りて當に法師に隨ふべし。汝は久しからずして當に般若波羅蜜を成就すべし。復次に、善男子よ、汝當に復た魔事を覺知すべし。若し說法の菩薩が、般若波羅蜜を受けんと欲する人を見て、意に念を存せざるも、汝は心に怨恨を起すべからず。汝但だ當に法を以ての故に恭敬じ、厭懈の意を起すこと莫く、常に應に法師に隨逐すべし。

【論】釋して曰はく、上の品の中に說かく、新發意の菩薩には、云何に性空の法を敎ふるや。性空の法は畢竟無所空にして解し難く、得難きが故にと。佛答へたまはく、法は失に有にして今は無なるやと。佛の意は性空の法は、得難く知り難きにあらず。何となれば、本來常に無にして更らに新に異ることなければなり。汝何を以てか、心に驚いて、謂て得難しとなすや。是の性空の法は甚深なりと雖も、菩薩は但だ能く一心に勤めて精進して身命を惜まず。是の如く、一心に求めなば便ち得べしと。此の中に、薩陀波崙の本生を說いて證となす。佛法に十二部經あり。或は修妬路、偈經、本生經に因つて得度す。今佛は本生經を以て證となす。若し聞く者ありて是の念をなさば、彼の人能く得、我れも亦た得べし。是の故に薩陀波崙菩薩の本生の因緣を說く。佛、須菩提に告げたまはく、菩薩は般若波羅蜜を求むること、應に薩陀波崙の如くすべしと。

問うて曰はく、若し般若波羅蜜は無相畢竟空ならば、禪定を行ずるも猶尙ほ得難し。何に況んや憂愁啼哭し散心に求覓して而も當に得べけんや。

答へて曰はく、新發意の菩薩の爲に薩陀波崙を說くなり。

問うて曰はく、若し薩陀波崙、是れ新發意ならば、十方の諸佛は云何にして、其の前に現在して、諸の三昧を得、身を惜まざるや。曇無竭（菩薩）を見るに及んで、復た無量阿僧祇の三昧を得たるに、云何にしてか新發意と名くるや。

答へて曰はく、新學の菩薩に二種あり。一には深心に世間の樂に著し、軟心に發意するなり、二には深心に發意して、世間の樂に著せざるなり。軟心に發意する者は佛は以て發心となさず、深心に發意する者を乃ち名けて發心となす。聲聞法の中に、佛、二比丘に語りたまへるが如し、「我が法の中に於ては、乃至毛氂の如きも煖法なし」と。佛は是の煖法を觀じて最も微小となし、凡人は之を觀じて以て大なりとなす。譬へば、國王は一張の氎を見て以て多しとなさず、貧者は之を見て、以て多しとなすが如し。一心に身に惜まざるを以ての故に、薩陀波崙を說いて證となすなり。

問うて曰はく、若し薩陀波崙菩薩、能く是の如きの苦行を作さば、曇無竭に從つて諸の三昧を得て應當に作佛すべし。今何を以ての故に、大雷音佛の所にあつて菩薩の行を修するや。

答へて曰はく、佛法は無量無邊なり。若し千萬阿僧祇劫、勤めて苦行を修するも猶ほ得べからず、何に況んや薩陀波崙一世の苦行をや。復た菩薩あり。菩薩道・十力・四無所畏等を具足するも、衆生の爲の故に世間に住して未だ實際を取らず、文殊師利等の如し。薩陀波崙も或は能く此の如きが故に未だ作佛せず、菩薩の三昧は十方國土の中の塵の數の如く、薩陀波崙の得るところは六萬の三昧なり、何ぞ多しとなすに足らん。大雷音佛は、應に大龍王の將に雨を降さんと欲して、大雷音を震ふに、鳥雀小蟲悉く皆な怖畏するが如し。是の佛初めて法輪を轉ずる時、十方の衆生皆な發心し、外道邪見皆な恐怖懾伏す。是の故に天人、衆生は佛を稱して大雷音となす。是の佛今に現在せり。須菩提問ふ、薩陀波崙菩薩摩訶薩は、云何に般若波羅蜜を求むるやと。

問うて曰はく、薩陀波崙は未だ阿鞞跋致を得ず、何を以ての故に菩薩摩訶薩と名くるや。

答へて曰はく、大菩薩あるを以ての故に小者も亦た大と名づく。又、其の未だ實智慧を得ずと雖も、而も能く深く般若波羅蜜を念ずるを以ての故に。又身命を惜まざれば、大功德あるが故に亦た菩薩摩訶薩と名く。

問うて曰はく、何を以て薩陀波崙〔薩陀は秦に常波と言ひ。論に啼と名く。〕と名くるや。是れ父母が與めに名字を作すが爲めなりや、是れ因緣にて名字を得たるや。

答へて曰はく、有る人の言はく、「其の小時に喜んで啼きしを以ての故に常啼と名づく」と。　有る人の言はく、「此の菩薩は、大悲心を行じて柔軟なるが故に、衆生が惡世に在りて貧窮し、老病し、憂苦するを見て、之れがために悲泣す、是の故に衆人號して薩陀波崙となす」と。　有る人の言はく、「是の菩薩は佛道を求むるが故に人衆を遠離し、空閑の處にあつて心の遠離を求め、一心に思惟籌量して佛道を勤求する時、世に佛なし。是の菩薩世世に慈悲心を行ずるも、因緣小きを以ての故に無佛の世に生ず。是の人は悲心もて、衆生に於て、精進して失はざらんと欲す。是の故に空閑林の中にあり。是の人、先世の福德の因緣、及び今世の一心を以て大欲、大精進す。是の二の因緣を以ての故に空中に敎聲を聞き、久しからずして便ち滅せり。即ち復た心に念ずらく、「我れ云何んぞ問はざりし」と。是の因緣を以ての故に、憂愁啼哭すること七日七夜なり。是に因るが故に、天龍鬼神は號して常啼と曰ふ」と。佛、須菩提に答へたまはく、「過去世に薩陀波崙菩薩あり、身命を惜まず、財利を貪らず、般若波羅蜜を求むる時、空閑林の中にあつて空中の聲を聞いて。空林の中に到る」と。上に說けるが如し。

問うて曰はく、空中の聲とは是れ何の聲となすや。

答へて曰はく、若し諸佛菩薩、諸天龍王、衆生を憐愍するが故に、是の人は世間法に著せず、一心に佛道を求むるを見るも、時に、佛法なきを以て、其の般若を得るの因緣を示さんと欲するが故に、空中に聲を發するなり。

有る人の言はく、「是の薩陀波崙は、先世の善因緣の人なり。此の林中にあつて鬼神となり、其の愁苦を見る。其れ是の先世の因緣を以ての故に、又是の神は亦た佛道を求む。是の二因緣を以ての故に聲を發すること蜜脾婆羅門の如し。須達多が王舍

城に至り、大長者の家に詣で兒婦を求むる時、蜜𦚐は王舍城大婆羅門衆の中に於て、飮食度を過ぎ、腹脹りて死して鬼神となり、王舍城門の上に住す。須達多は是の婆羅門の已に死するを聞き、自ら長者の家に往いて宿す。長者は後夜に於て、起つて飮食を辦具するや、須達多問うて言はく、「汝、何事かある。婦を娶り、女を嫁せんと欲する爲か。大國王に請はんと欲する爲か。是の邑會を爲して何ぞ其れ忽忽として事を營むこと乃ち爾るや」と。長者答へて言はく、「我れ佛及び僧に請はんと欲す」と。須達多、佛の名を聞いて、驚喜し毛を竪つ。長者先づ道跡を得て、其れが爲めに廣く佛德を說く。須達多聞き已つて、愛樂の情至り、甚だ佛乘を見んことを欲し、佛心を念じて小睡す。念佛の情至るを以ての故に、須臾にして便ち覺めて、夜月光を見る。謂つて日出となし、卽ち起ちて門に趣くに、城門已に開くを見る。王舍城の門は、初夜には未だ閉さず。客來るが爲めの故なり。後夜には早く開く。客去るが爲めの故なり。(須達多)既に門の開くを見たれば、卽ち直ちに佛に向ふ。佛時に寒林の中にありて住す。其の中路に於いて、月沒して還たび闇し。須達多心悔い躊躇して、還たび城に入らんと欲する時、蜜𦚐神は身に光明を放ち、諸の林野を照して、居士に告げて言はく、「居士よ、怖るる莫れ、畏るる莫れ、直ちに去つて還去すること莫けなば大利を得んと、乃ち彼の經中の偈に廣く說くが如し。須達多は佛を見て、須陀洹道を得て、佛及び僧に請び、舍衞城に於て形盡くるまで佛を供養す。舍利弗をして須達の師たらしめ、舍衞に於て精舍を作る。須達の知識は神の示導なる如く。薩陀波崙の知識の示導も亦た是の如し。是の故に、其の愁苦を見て、而して之れを示導し是の言をなす。「善男子よ、汝是れより東に行け、行く時は疲極等を念ふこと莫れ」と。

問うて曰はく、疲極、飢渴の交來つて身を切るに、云何んぞ念はざるや。

答へて曰はく、大欲精進力の故なり。一心に佛道を愛樂し、身命を惜まず、休息飮食等は、皆な是れ助身の法なり。是の事は來ると雖も心を亂さず、皆な虛誑にして無常無實なること、怨の如く賊の如しと知る。但だ身樂の爲めの故なり。何ぞ念を存するに足らん。飢渴疲極等の爲めの故に、而も佛道を捨つること莫れ。

「晝夜を念ふこと莫れ」とは、晝は是れ法を行し、夜は(應に)止息すべしと念ふこと莫れ、實に晝夜なきなり。所以何んとなれ

ば、日、須彌に依つて、影翳るが故に夜と名づくればなり。「內外を念ふこと莫れ」とは、衆生は多く內法に著す。內法を身と名づけ、外道を五欲と名づく。內外法は不定にして性空なる故に著すべからず。「左右を觀すること莫れ」とは、人は散心にして道を行ずるが故に左右を顧着す。行者緣じて後を觀ずること無く、當前には則ち視ず。視ざるが故に但だ左右を顧看すること莫しと言ふ。復次に、惡魔は常に行者を惑亂して或は種種の形をなし、或は好色と作り、或は畏獸となりて道の左右にあるが故に觀ること莫れと言ふ。是れ皆な其の麁念を止むるなり。「身相色等の相を壞すること莫れ」とは、五衆和合の故に假りに名づけて身となす。若し別に更に決定して身法ありと說かば、是れ則ち身相を壞するなり。若し無身法に著すれば、是れ亦た身相を壞す。是の一・異・有・無等の邊を離れ中道を行ずれば、則ち疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に身相を壞すること莫れ等と說く。此の中に佛自ら因緣を說けり。若し是の諸相を壞すれば、則ち佛法に於て礙あり。佛法に礙あれば、則ち五道生死の中に往來して、般若波羅蜜を得ること能はず。薩陀波崙は空中の聲に報へて言つて、而して自ら因經を說く、所謂薩陀波崙は、一切衆生の、無明黑闇の中に墮在するを見て、我れ智慧の光明を然(とも)さんと欲す、一切衆生に煩惱あれば、我れ一切佛法の樂を設けんと欲す。一切衆生皆な邪道に墮せば、我れ是の衆生の爲めの故に無上道を求む。是の三種の願は、般若波羅蜜を得れば則ち能く具足す。是の故に教を受くと言ふ。

問うて曰はく、薩陀波崙は其の形を見ず、但だ其の聲を聞くのみ。何を以てか便ち教を受くと言ふや。

答へて曰はく、人の求むる所の事の急なるが故に、聲を聞けば則ち應ず、薩陀波崙も亦た是の如し。

復次に、其の說く所の理の好しきを聞けば、其の人も亦た好きを知るが故に、眼もて見るを須ゐず。黑闇の中に種種の衆生あるに、眼に見ずと雖も其の聲を聞けば則ち其の種類を知るが如し。爾の時に、空中の聲復た讚じて善い哉といふ、其の形を見ずと雖も、而も能く善語を信受するを以ての故に、又復た其の一切衆生を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めて懈息せざるなり。是の如き等の因緣の故に、讚じて善い哉といふ。

「三解脫門の中に於て信心を生ずべし」とは、是の門は諸法實相所入の門なり。是の三門を離るれば、皆な是れ虛誑にして實

ある者なし。汝未だ得ずと雖も、應に大信根力を生ずべし。信根力の故に漸く諸根を具す。「相を離るる心を以て、般若波羅蜜を求む」とは、所謂諸法の畢竟空を觀じ、衆生相を離れ、法相を離るるなり。

問うて曰はく、三解脫門は般若の中に攝在するや不や、若し攝(在)せば何を以て別に說くや、若し攝せずんば云何にして經の中に、一切の助道法は皆な般若の中に攝在すと說くや。

答へて曰はく、一切法は皆な般若の中に入るなり。人皆な苦を畏るるが故に解脫を求む、是の故に般若分の中に於て前に三解脫門を說くなり。何の因緣を以てか此の解脫を得、諸の二邊、所謂衆生相・法相を離るるや。般若波羅蜜を行ずればなり。

問うて曰はく、初には精進を敎へ、後には三解脫門般若を敎ふ。今復た何事をなさんと欲するが故に、善知識に親近することを敎ふるや。

答へて曰はく、好法ありと雖も若し敎ふる者なくんば、行ずる時多く錯る。譬へば、好き藥ありと雖も、亦た良醫を須つが如し。又薩陀波崙は是れ新發意の菩薩にして、般若波羅蜜は甚深なり。云何んぞ但だ空中の略敎を聞いて、而も能く自ら具足せん。是の故に善知識に親近するを敎語するなり。善知識の義は先に說くが如し、今略して二相を說く、是の善知識は、一には一心に薩婆若に向ふを敎へ、二には空・無相・無作・無生・無滅等の般若波羅蜜の法を敎ふ。若し能く是の如く行ずれば、久しからずして般若波羅蜜を得。藥師が病者の爲に服藥の法を說いて、汝能く法の如く服すれば病則ち差ゆることを得。とするが如し。若くは經卷より聞き、菩薩の說くに從つて聞く」とは、薩陀波崙を遣して曇無竭菩薩の所に至るに彼の中に二處に般若あり。一には寶臺上の金牒書、二には曇無竭の所說なり。若し人、福德多ければ、曇無竭の所說に從つて聞き、福德少ければ經卷に從つて聞く。師に於て佛の想を生ず。能く佛道を敎ふる因緣を以ての故なり。世間の小人は因緣の事訖れば、則ち其の恩義を忘れ是の念をなす、人の船に乘つて水を度(わた)るが如し。彼の岸に到れば、何ぞ船を用ふることをなさんと。是の故に說く、「汝當に恩を知り、是の念をなすべし」と。從つて般若を聞く所とは、卽ち是れ我が善知識なり。一切諸利の中、般若の利は最勝なり。是の般若を行ぜば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得て退轉せず。又復た般若を行ずる因緣の故に、諸佛に親近し、

常に有佛の國の中に生じ、八難を離れて、佛の在世に値ふ。菩薩は是の念をなすべし、「我れ是の如き等の諸の功德は、皆な般若に從ふて得。般若波羅蜜は、師に從つて得。」と。是の故に師を視ること佛の如く想へ。人あつて、能く般若波羅蜜を說く者は、大福德あつて知識多く、多く供養を得。弟子は初に般若のための故に隨逐し、後ち漸漸に供養の利のためにす。是の故に世の利を以ての故に、法師を隨逐すること莫れと說くなり。

問うて曰はく、何を以てか但だ善知識に親近すと說かずして、而も是の種種の因緣を說くや。

答へて曰はく、人あり、既に善知識を得るも、其の意を得ずして反つて釁隙を成じて地獄に墮し、更に相ひ謗毀するが故なり。唯だ佛一人のみ過失あることなし。餘人は誰か能く(過失)無き者あらん。若し弟子にして師の過を見ば、若くは實なるも、若くは虛なるも、其心を自ら壞して復た能く法利を得ず。是の故に、空中の聲は敎へて「若し師の過を見るも嫌恨を起すこと莫れ。」と。汝應に是の念をなすべし。我れ先世の福德を具足せざるが故に、佛に値ふことを得ず。今是の雜行の師に値ふ。我れ應に其の過失を念うて、而も自ら般若を妨失せざるべし。師の過失は我に著かず、我は但だ師に從つて般若波羅蜜の法を受くるのみ。譬へば、狗皮の囊に好き寶物を盛るが如し。囊を以ての故に而も其の寶の棄つべからず。又罪人が燭を執つて道を照すに、人の罪あるを以ての故に其の明を受けずして自ら溝壑に墜つべからざるが如し。又行くに、小人を遣して道を導くに、人の小なるを以ての故に其の語に隨はざるべからざるが如し。是の如き等の因緣を以て、師を遠離すべからず。師若し實に罪あるも尙ほ離るべからず、何に況んや、此の中に魔の因緣をなして、說法者をして、深妙の五欲あらしめ、弟子をして、法に染著せざらしむるをや。說法する者は方便を以ての故に現に受く。「方便とは所謂衆生をして福德の因緣を種ゑしめんと欲するなり。亦た同事を爲して衆生を攝するが故なり。復た諸の菩薩あり、諸法實相に通達するが故に、障礙する所なく、過罪あることなし。過罪を作すと雖も亦た妨ぐる所なし、人壯年にして力盛なれば、腹中のは大いに熱し、不適の飮食を食ふと雖も病を生ずること能はざるが如し。又好藥あれば、惡毒を被ると雖も害をなすこと能はざるが如し。是の如き等の因緣の故に、汝、師の所に於て嫌恨を起し、而も自ら般若を失ふこと莫れ。經の中に說くが如し。復た說法する者あり、持戒淸淨にして五

欲を離れ、多知多識にして好名聞あり、威德尊重にして、弟子は法を受くるも顧錄せず。汝是の中に於て、怨恨を生ずることなく當に是の念をなすべし。『我れは宿世の罪の故に今小人となるも師は我を輕んぜず。我れは自ら福なくして道を得ること能はず」と。又「我れ師の所に於て應に憍慢を破るべし」と。法利を求むるを以て、是の如き等の種種の諸師あり。菩薩は般若波羅蜜を求むるが爲の故に。但だ一心に恭敬して其の長短を念ふべからず。若し能く是の如く師に忍辱し、一心に增減を起さずんば、汝師の所に於て盡く好法を得ること、完牢の器の受くる所を漏さざるが如し。薩陀波崙の空中の聲を聞き已つて、是より東に行くことは、經の中に廣く說けるが如し。

第八十八薩陀波崙品(餘)

【經】爾の時、薩陀波崙菩薩、是の空中の敎を受け已りて、是れより東に行きて久しからずして、是の念をなす。「我れ云何にして空中の聲に問はざりし。我れ當に何處に去るべきか。去ること當に遠近なるべきか。當に誰に依つて般若波羅蜜を聞くべきか」と。是の時、卽ち啼哭憂愁に住して、是の念を作す「我れ是の中に住し、一日一夜、若くは二・三・四・五・六・七日七夜を過ぎ、疲極を念はず、乃至、飢渴寒熱を念はず、般若波羅蜜を聽受する因緣を聞かずんば、終に起たざるなり」と。須菩提よ、譬へば、人の一子あつて卒に死するや、憂愁し苦毒して、唯だ懊惱を懷きて餘念を生ぜざるが如し、是の如く、須菩提よ、薩陀波崙菩薩は爾の時に異心あることなく、但だ念ずらく、「我れ何れの時か當に般若波羅蜜聞くことを得べきや、我れ云何なれば空中の聲に問はざりし、我れ應に何處に去るべきや、去ること當に遠近なるべきや、當に誰に從つてか般若波羅蜜を聞くべきや」と。須菩提よ、薩陀波崙菩薩は是の如く愁念する時、空中に佛あつて薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善い哉、善い哉、善男子よ、過去の諸佛は菩薩道を行ずる時に、般若波羅蜜を求むること、亦た汝が今日の如し。善男子よ、汝は是の勸めて精進し、法を愛樂するを以ての故に、是より東に行き、此を去ること五百由旬にして城あり、衆香と名く、其の城七重にして、七寶を以て莊嚴せり。臺觀欄楯皆な七寶を以て校飾し、七寶の塹、七寶の行樹の周匝すること七重なり。其の城は、縱廣十二由旬、豐樂安靜にして、人民熾盛なり。五百の市里は街巷相當し、端嚴にして畫の如く、橋津は地の如く寬博にして清淨なり、七重の城の上には皆な七寶の樓櫓あり、寶樹行列し、黃金・白銀・車渠・瑪瑙・珊瑚・琉璃・玻璃・紅色の眞珠を以て枝葉と爲す。寶繩連綿し、金を鈴網と爲して以て城の上を覆ふ。風鈴を吹いて聲あり。其の音は和雅にして、衆生を娛樂せしむ。譬へば、巧に五樂をなさば、甚だ悅喜すべきが如し。金網、寶鈴、其の音是の如し。其の城の四邊に流池は清淨にして冷暖調適なり、中に諸船ありて七寶をもて嚴飾す、是れ諸の衆生の宿業の致す所なり。此の寶船に乘して娛樂遊戲す。諸の池水の中に種種の蓮華あつて青黃赤白、衆(おほく)の雜好華、遍く水上を覆ひ、是の三千大千世界に有るところの衆華は皆な其の中にあり。其の城の四邊に五百の園觀ありて七寶をもて莊嚴して甚だ愛樂すべし。この園中に各五百の池あり、池は各縱廣十里、皆な七寶を以て校成し、雜色もて莊嚴せり、諸の池水の中に亦た青黃赤白の蓮華ありて水上に彌覆す。其の諸の蓮華は大さ車輪の如く、(其の色)青色には青光、黃色には黃光、赤色には赤光、白色には白光あり。諸の池水の中に鳧・雁・鴛鴦、異類の衆鳥あつて音聲相和す。是の諸の園觀は適ま所屬なし。是れ諸の衆生、宿業の致す所なり。長夜に深法を信樂し、般若波羅蜜を行ずる因緣の故に是の果報を受く。善男子よ、是の衆香城の中に大高臺あつて、曇無竭菩薩摩訶

薩の宮舍上にあり。其の宮は縱廣一由旬にして、皆な七寶を以て挍成し、雜色をもて莊嚴して甚だ喜樂すべし。垣墻は七重にして皆な亦た七寶なり。七重の欄楯、七寶の樓閣あり。寶塹七重にして皆な亦た七寶なり。周圍の深塹は七重に累成し、七重の行樹は七寶の枝葉にして七重に其の宮舍を圍遶せり。中に四種の娛樂園あり、一には常喜と名け、二には離憂と名け、三には華飾と名け、四には香飾と名く。一一の園中に各八池あり、一には賢と名け、二には賢上と名け、三には歡喜と名け、四には喜上と名け、五には安穩と名け、六には多安穩と名け、七には遠離と名け、八には阿鞞跋致と名く。諸池の四邊の面は各一寶なり、黃金・白銀・琉璃・玻瓈・玫瑰もて池底となし、其の上に金沙を布く。一一の池の側に八つの梯陛ありて、種種の妙寶を以て嚴飾を爲し、諸の梯陛の間には、閻浮檀金の芭蕉の行樹あり。一切の池の中の種種の蓮華は青黃赤白にして水上に彌覆し、諸池の四邊には好華樹を生じ、風は諸華を吹いて池水の中に墮つ。其の池は八種の功德香を成就し、若くは栴檀色味を具足して（輕く且つ柔軟なり）曇無竭菩薩は六萬八千の婇女と與に五欲を具足し共に相ひ娛樂す、及び城中の男女は但に常喜等の園、賢等の池中に入りて、五欲を具足し共に相ひ娛樂す。善男子よ、曇無竭菩薩は、諸の婇女と與に遊戲娛樂し已つて、日に三時、般若波羅蜜を說く。衆香城內の男女、大小、其の城中に於て多く人の聚る處に大法座を敷く。其の座は四足あつて或は黃金を以てし、或は白銀を以てし、或は琉璃を以てし、玻瓈を以てす。敷くに綩綖雜色の茵蓐を以てし、諸の幃帳を垂る。妙白氎を以て其の上を覆ひ、散らすに雜妙の花香を以てす。座の高さ五里にして白珠の帳を張り、其の池の四邊に五色の花を散じ、衆の名香を燒き、澤香を地に塗る、所以何となれば般若波羅蜜を供養し恭敬するが故なり。曇無竭菩薩は此の座上に於て般若波羅蜜を說く。彼の諸の人衆、是の如く曇無竭を恭敬し供養するは、般若波羅蜜を聞かんがための故なり。是の大會に於て百千萬の衆の諸天・世人は一處に和集す。中に聽く者あり、中に受くる者あり、中に持つ者あり、中に誦する者あり、中に書する者あり、中に正觀する者あり、中に說の如く行ふ者あり。是の時に當り中の衆生は是の因緣を以ての故に皆な惡道に墮せず、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。汝善男子よ、往いて曇無竭菩薩に趣いて、當に般若波羅蜜を聞くべし。善男子よ、曇無竭菩薩は、世世に是れ汝が善知識にして、能く汝に阿耨多羅三藐三菩提を敎へて、示敎利喜す。是の曇無竭菩薩は本と般若波羅蜜を求めし時は亦た汝の如し。今汝去つて晝夜を計ること莫く、障礙心を生ずること莫くんば、汝久しからずして當に般若波羅蜜を聞くを得べし。

爾の時、薩陀波崙菩薩摩訶薩、歡喜し心に悅んで是の念をなす、「我當に何れの時にか是の善男子を見るを得て、般若波羅蜜を聞くを得べきや」と。須菩提よ、譬へば人あつて、毒箭の中たる所と爲りて、更らに餘念なく唯だ何れの時にか當に良醫を得て、毒箭を拔き出し、我が此の苦を除くことを得べきと念ずるが如く、是の如く須菩提よ、薩陀波崙菩薩摩訶薩は更に餘念なく但だ是の願をなす、「我れ何れの時にか當に曇無竭菩薩を見ることを得て、我れをして般若波羅蜜を聞くを得せしむべきや、我れ是の般若波羅蜜を聞いて諸の有心を斷ぜん」と。是の時薩陀波崙菩薩是の處に住し、曇無竭菩薩を念じ、一切法の中に於て無礙の知見を得已つて、即ち無量の三昧門の現在

前することを得。所謂諸法性觀三昧・諸法性不可得三昧・破諸法無明三昧・諸法不異三昧・諸法不壞自在三昧・諸法能照明三昧・諸法離闇三昧・諸法無異相續三昧・諸法不可得三昧・散華三昧・諸法無我三昧・如幻威勢三昧・得如鏡像三昧・得一切衆生語言三昧・一切衆生歡喜三昧・入分別音聲三昧・得種種語言字句莊嚴三昧・無畏三昧・性三常默然三昧・得無礙解脫三昧・離塵垢三昧・名字語句莊嚴三昧・見諸法三昧・諸法無礙頂三昧・如虛空三昧・如金剛三昧・不畏著色三昧・得勝三昧・轉眼三昧・畢法性三昧・能與安穩三昧・師子吼三昧・勝一切衆生三昧・華莊嚴三昧・斷疑三昧・隨一切堅固三昧・出諸法得神通力無畏三昧・能達諸法三昧・諸法財印三昧・諸法無分別見三昧・離諸見三昧・離一切闇三昧・離一切相三昧・解脫一切著三昧・除一切懈怠三昧・得深法明三昧・不可奪三昧・破魔三昧・不著三界三昧・起光明三昧・見諸佛三昧なり。是の如く薩陀波崙菩薩は、是の諸の三昧の中に住して、即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見、諸の菩薩摩訶薩のために般若波羅蜜を說く。

【論】問うて曰はく、薩陀波崙は、何を以てか、忘れて空中の聲に問はざりしや。

答へて曰はく、薩陀波崙は大歡喜、心を覆ふが故に忘れたり。人の大に憂愁し、大に歡喜せば、此の二の事を以ての故に忘るるが如し。

問うて曰はく、空中の聲は已に滅せり。何を以てか此に住すること七日にして、更に問處を求めざるや。

答へて曰はく、本と空閑の處に於て、一心に般若を求むるが故に空中に聲あるが如く、今も亦た一心に欲して本の如く、更に聲を聞いて其の疑ふ處を斷ぜんと冀ふ。

復次に、薩陀波崙は、世の樂に於ては已に捨て、佛道に入りて、愛樂の情至るや、空中の聲告げて少しく開示するも、竟に未だ疑を斷ぜざるに其の聲は便ち滅す。小兒の少しく美味を得ば、是の味に著するが故に、更に復た啼泣して之を得んと欲するが如し。薩陀波崙も亦た是の如く、般若波羅蜜の因緣の味を得るも、通達すること能はず、那(いづこ)に去るやを知らず、是の故に住して啼泣するなり。

問うて曰はく、何を以てか乃ち七日に至りて佛身乃ち現ずるや。

答へて曰はく、譬へば、人の大に渴するが故に、乃ち水の美(味)を知るに若くは二日、三日の精進は欲、未だ深からず、若し七日を過ぐれば其の憂愁心を妨げて、道を求むるに任ぜざるを恐る、是の故に七日憂愁す。譬喩經の中に說くが如し。

問うて曰はく、薩陀波崙は何を以てか憂愁すること、乃ち爾かく愛子を喪ふが如くなるや。

答へて曰はく、般若波羅蜜は諸法の中に於て第一なり、實に是れ十方の諸佛の眞實の法寶なり。薩陀波崙は少しく氣味を得るも、未だ具足せざるが故に、憂愁すること愛子を喪ふが如し。其の長大して、成辦する處多きを念じ、其の力を得んことを冀ふ。菩薩も亦た是の如く、般若波羅蜜の力を增益し、阿鞞跋致を得已つて、佛事を成就せんと念ず。子の父に於て孝行し、身を終るまで異心あることなきが如し。般若波羅蜜の菩薩に於けるも亦た是の如し。若し能く入るを得ば 乃ち成佛するに至るまで、終に遠離せざること、父の子を見れば心卽ち歡喜するが如し。菩薩は種種の諸法を得と雖も、般若波羅蜜を見るの歡喜に如かず。子の假りに其の名をなすが如く、般若波羅蜜も亦た是の如く、空にして定實なく、但だ假名のみあり。是の如き等は是れ總相の因緣なり。父は子を愛すと雖も、頭目を以て之に與ふること能はず。菩薩は般若波羅蜜のための故に、無量世の中に、頭目髓腦を以て衆生に施與す。子の父に於けるや、或は恩を報ずること能はず、若し能く恩を報ずるも、正に現世に小しく、衣食歡樂等を利すべきのみ。菩薩は般若波羅蜜の中に於けるや、乃至一切の智慧も得ざる所なし、何に況んや菩薩の力勢をや。世間の富樂なるも、子の父の恩を報ずるは一世に極まり、般若の益は無量世にして乃至成佛に至る。子の父に於けるや、或は好み或は惡むも、般若波羅蜜は諸の不可なし。子は但だ是れ假名にして虛誑不實の法なるに、般若波羅蜜は眞實の聖法にして、虛誑あることなし。子の報恩は現世の小樂を得と雖も、而も憂愁苦惱の無量の苦あり、般若波羅蜜は但だ歡喜實樂を得て、乃ち佛樂に至る。子は但だ能く供養を以て、父を利益するも、其の生老病死を免るること能はず、般若波羅蜜は、菩薩をして畢竟淸淨にして、復た老病死の患なからしむ。子は但だ能く父をして世樂に自在を得せしめ、般若波羅蜜は、能く菩薩をして一切世間に於て天人の主たらしむ。是の如き等の種種の因緣、譬喩、差別の相あり。世人は皆な子を喪ふの憂愁を知るが故に、此を以て喩となす。

問うて曰はく、空中に佛の現ずるは是れ何等の佛ぞや。先に何を以てか但だ音聲のみあつて而も今は身を現ずるや。佛既に身を現ぜば、何を以てか卽ち度せずして方に遣して曇無竭の所に至らしむるや。

答へて曰はく、有人の言はく、眞佛にあらず、但だ是れ像現のみ。或は諸佛は化を遣はし、或は大菩薩は現作す。先には善根福德未だ成就せざるを以ての故に、但だ聲のみを聞くも、今は七日七夜、一心に佛を念じて功德成就するが故に、佛身を見ることを得るなり。佛の卽ち度せざる所以は、其れを曇無竭に與へ、世世の因緣もて應當に彼に從つて度すべきを以ての故なり。人あり、舍利弗に從つて度すべきには、假使ひ諸佛身を現ずるとも悟らしむること能はず。

「佛讃して善い哉と言ふは、薩陀波崙、至意に去る處を求知し、般若を聞く因緣を以ての故に、佛、身を現じて善い哉と讃す。過去の諸佛は菩薩の道を行ずる時、此の般若を求むること亦た是の如く種種に勤苦す。初發心には、先づ罪厚重にして、福德未だ集まらざるが故に、佛其の心を安慰して、汝、般若波羅蜜を求めて勤苦すと雖も、懈怠すること莫れ、退沒の心を生ずること莫れ、一切衆生の行果は、因の時には皆な苦を受け、果の時に樂しむ。當に諸佛無量の功德を果報思惟して、以て自ら勸勉すべし。是の如く安慰し已つて是の言を作さく、汝是より東に行き、此を去ること五百由旬にして城あり、衆香と名く、乃至久しからずして般若波羅蜜を聞くべしと。

問うて曰はく、衆香城は何れの處にありや。

答へて曰はく、過去の佛、滅度の後には、但だ遺法あるも、是の法は閻浮提に周遍せず、衆生に聞法の因緣ある處には卽ち到る。爾の時に衆香の國土は豐樂にして、多く七寶を出だすが故に、七寶を以て城となす。時に、薩陀波崙は同じく閻浮提にありと雖も、而も佛法無く七寶無き處にありて生じ、但だ佛名と般若波羅蜜は是れ佛道なりと傳聞す。是の人は先世に廣く福德を集めて、煩惱輕微なるが故に、聞いて卽ち信樂し、惡世の樂を厭ひ、其の親屬を捨てて、空林の中に到りて住し、佛法ある國土に至らむと欲す。「音聲示語す」とは、其の異(方)に去らば、曇無竭菩薩の所に到るを得ざるを恐る。是の故に之れを語り、次いで後に佛は爲に身を現して其の去る處を示せるなり。

問うて曰はく、薩陀波崙の因緣は已に具さに上に於て聞けり。今曇無竭の因緣は云何となす。

答へて曰はく、鬱伽陀、秦には盛と言ひ、達磨、秦には法と言ふ。此の菩薩は衆香城の中にありて、衆生のために意に隨つ

て法を説き、衆生をして廣く善根を種ゑしむるが故に、法盛と號す。其の國に王なく、此の中の人民皆な吾我なきこと鬱單越の人の如く、唯だ曇無竭菩薩を以て王となす。其の國は到ること難きも、薩陀波崙は身命を惜まず、又た諸佛菩薩の接助を得て能く到れり。大菩薩は衆生を度せんがための故に是の如き國の中に生ず。(其の中の)衆生は乏短する所なく、其の心調柔にして得度すべきこと易。

問うて曰はく、曇無竭菩薩は是れ生身となすや、是れ法身が衆生を度せんがための故に、神通力を以て此の身を化作せりとなすや。若し化身ならば、何ぞ六萬の婇女、園觀浴池種種の莊嚴を用つて而も自ら娯樂するや。若し是れ生身ならば、云何にして能く薩陀波崙の供養をして、具さに皆な空中にあつて化して大臺を成ぜしめ、諸の三昧に入つて乃ち七歳に至るや。

答へて曰はく、有人の言はく、「是れ生身の菩薩なり。諸法實相及び、禪定神通力を得るが故に、是の城中に衆生を度せんと欲す。餘の菩薩の如きは利根なるが故に、能く禪定に入り、亦た能く欲界の法に入り、衆生を攝せんがための故に、五欲を受けて而も禪定を失はず。人が熱を避くるが故に、泥中にあつて臥するも、起きて還たび洗へば、則ち故の如きが如し。凡夫は鈍根の故に能く是の如くなること能はず。是の故に、神道力を以て、華臺を化作して、七歳、定に入り、又た方便力を以ての故に、能く五欲を受くること、先に義説するが如し。菩薩は但だ一道のみを行ぜず、衆生のための故に種種の道を行じて、之れを引導す。龍の雲を起して、能く大雨を降らし、雷電礔礰をなすが如し、菩薩も亦た是の如く、是の生身未だ煩惱を離れずと雖も、而も能く善法を修行し、衆生のための故に結使を盡さず」と。

有人の言はく、「是の菩薩は是れ法性生身なり、衆香城の人を度せんが爲の故に變化して度す。若し生身ならば、云何んぞ能く十方の佛稱讃して、薩陀波崙を遣はし、從つて法を受けて六萬の三昧を得せしめんや。是の故に知んぬ、是の大菩薩は是れ變化身なることを。譬へば大海の中の龍の死相出づる時は、果の熟して應に墮せんとするが如く、金翅鳥則ち來つて之を食するが如し。衆生も亦た是の如く、行業の因緣熟するが故に、大菩薩來つて之れを度す」と。

爾の時に薩陀波崙、空中の佛の敎を聞いて大に歡喜し、大に欲心を生ずる故に、「我れ何の時にか當に曇無竭菩薩を見て般若

波羅蜜を說くを聞くを得べき」とは、能く心中の愛見等の諸煩惱の箭を出ださしむるなり。是の事を明かにせんと欲するが故に、此の中に佛は毒箭の譬喩を說く。人毒箭の身に在るや、更に餘念なきが如し。一には苦痛急なり。二には毒疾かに出でざれば、則ち身中に遍滿して、命を失ふ。薩陀波崙も亦た是の如く、諸の邪疑等の箭は心に入り、貪欲等の毒は箭に塗り、曇無竭菩薩が能く此の箭を拔出するを聞く。人は邪見の箭の毒を以て心を傷くるを見、又た貪欲等の毒、遍ねく身中に入つて智慧の命を奪ひ、凡人と同じく死することを畏る。是の故に、急に曇無竭菩薩を見んと欲して、復た餘念なし。此の中に諸の所有の心を斷ずるを說く。所有の心とは相を取つて著するなり。乃至善法の中にも亦た是の病あり、薩陀波崙は目に佛身を覩、先に未だ見ざる所なり。佛に從つて敎を聞き、法喜を得るが故に、五欲の喜を離れ、卽ち一切法中に無礙の知見を得。無礙の知見とは、薩陀波崙の力の所得の如く無礙なるなり、佛の無礙にあらず。是の時に諸の三昧門に入ることを得。

「諸法性觀三昧」とは、能く一切諸法の實性を觀ずるなり。實性とは、先に種種の因緣を說けるが如し。

「諸法性不可得三昧」とは、初めて三昧を得るにして、所謂空無生無滅なり。今是の三昧を得れば、則ち是の性に著せず。其の決定相を得と謂ふにあらず。

「破諸法無明三昧」とは、諸法は凡夫の人の心の中に於て、無明の因緣を以ての故に、邪曲にして正しからず、所謂常樂我淨なり。是の三昧を得るが故に、常等の顚倒に相應する無明を破し、但だ一切法の無常空無我を觀ずるなり。

問うて曰はく、若し是の菩薩、一切法の中の無明を破さば、此の人は尙ほ佛すら見るを須ゐず。何ぞ曇無竭菩薩の所に至るを用いんや。

答へて曰はく、無明を破すること唯だ一種にあらず、遮して起らざらしむる有り。亦た名けて破となす。諸法實相を得るが故に無明を破す有り。又た無明の種數は甚だ多く、菩薩の破する所の分あり、佛の破する所の分あり、小菩薩の破する所の分あり、大菩薩の破する所の分あること、先に燈の譬喩を說けるが如し。又た須陀洹も亦た無明を破すと名け、乃至阿羅漢は方に是れ實破なり。大乘法の中も亦た是の如し。新發意の菩薩は諸法の實相を得るが故に、亦た無明を破すと名け、乃至佛は無

明盡く破して餘すことなし。是の故に薩陀波崙は、佛法の中に於て邪見、無明及び我見は皆な盡くすが故に、破無明三昧と名くるを得るも咎なし。

「諸法不異三昧」とは、是の三昧を得れば、一切法は一相にして所謂、無相なりと觀ず。

「諸法不壞自在三昧」とは、是の三昧を得て、一切法は如・法性・實際・無爲の相なりと觀ずるが故に不壞と名く。是の法を得已つて自在を得、了了に諸法を知るも佛道のための故に是の法を證せざるなり。

「諸法能照明三昧」とは、總相別相を以て一切法を知るなり。

「諸法離闇三昧」とは、無明に二種あり、一には厚、二には薄なり。薄とは無明に名け、厚とは黒闇に名く。厚き無明を破するが故に離闇と名く。先きに薄き無明を破するが故に、破諸法無明と名く。

「諸法無異相續三昧」とは、五衆は念念に滅し、相似相續して生ず。死する時相續し、生じて相似せず。是の三昧を得れば、諸法の念念相續して、法として異ならざるを知る。

「諸法不可得三昧」とは、卽ち是れ一切法空に相應する三昧なり。

「散華三昧」とは、是の三昧を得る者は、十方の佛前に於て能く七寶の華を以て佛に散ず。

「諸法無我三昧」とは、一切法の無我を觀ずるなり。

「如幻威勢三昧」とは、是の三昧を得る者は、能く種種に身を變化すること、大幻師の如く、能く衆生を引導して希有の心を發さしむること、大幻師の如し。幻力を以ての故に、能く一國の人の心を轉ず。

「得如鏡三昧」とは、是の三昧を得る者は、三界の所有を觀ずること、鏡中の像の虛誑にして、實なきが如し。

「得一切衆生語言三昧」とは、是の三昧を得るが故に、能く一切衆生の語言を辨す。

「一切衆生歡喜三昧」とは、是の三昧に入れば能く衆生の瞋心を轉じて歡喜せしむるなり。

「入分別音聲三昧」とは、是の三昧の中に入れば、皆な能く一切の天人の音聲の大小麁細等を分別す。

「得種種の語言字句莊嚴三昧」とは、是の三昧を得る者は、義理淺しと雖も、能く字句語言を莊嚴して、人をして歡喜せしむ、何に況んや深義をや。

「無畏三昧」とは、是の三昧を得る者は一切の魔民、外道の論師、及び諸の煩惱の性を畏れず。

「常默然三昧」とは、是の三昧に入る者は、常に默然として心を攝し、衆生を度せんがための故に、隨所に聞に應じて、而も音聲を出だすこと、天の伎樂が意に應じて出づるが如し。

「得無礙辨脫三昧」とは、是の三昧を得る者は、一切法の中に於て無礙の智慧を得。

「離塵垢三昧」とは、是の三昧を得る者は、諸の煩惱の結使塵垢皆な滅す、即ち是れ無生法忍三昧なり。

「名字語句莊嚴三昧」とは、是の三昧を得る者は、能く種種に偈句語言を莊嚴して說法す。

「見諸法三昧」とは、是の三昧に入る者は、世諦及び第一義諦を見るを以て諸法を知る。

「諸法無礙頂三昧」とは、人の山頂にあつて遍ねく四方を觀るが如く、菩薩は是の三昧の中に住して、普ねく一切諸法を見るに無礙なり。

「如虛空三昧」とは、是の三昧に入る者は、身及び外法は皆な虛空の如く自在を得。

「如金剛三昧」とは、金剛の能く諸山を破するが如く、是の三昧も亦た是の如く、能く障礙を破し、六波羅蜜の法もて直に佛道に至る。

「不畏著色三昧」とは、是の三昧を得れば、乃至天色すら尙ほ著せず、何に況んや餘色をや。

「得勝三昧」とは、所作あらんと欲するに、皆な能く勝つて負けざるを得。

「轉眼三昧」とは、是の三昧を得る者は、魔及び魔民が菩薩の短を見んと欲するも、之れを轉じて好く見ゆることを作さしむるなり。

「畢法性三昧」とは、是の三昧を得る者は、一切の法を見て、畢く法性の中に入る。

「能與安穩三昧」とは、是の三昧を得ば、六道に往來すと雖も、迴轉して自ら必ず當に作佛すべきを知る。

「安樂無憂師子吼三昧」とは、是の三昧に入る者は、皆な能く一切の魔民を降伏し外道も敢て當る者なし。

「勝一切衆生三昧」とは、是の三昧を得ば、一切衆生に於て最勝なり。一切に二種あり、一には名字の一切、二には實の一切なり。三界に於て著心の凡夫、及び聲聞、辟支佛、及び初發意（の菩薩）の未だ是の三昧を得ざる者の中にて、勝るが故に一切と言ふ。

「花莊嚴三昧」とは、是の三昧を得る者は、十方の佛が七寶蓮花の上に坐し、虛空の中に於て、寶蓮花を諸佛の上に雨らすを見る。

「斷疑三昧」とは。是の三昧を得る者は未だ佛を得ずと雖も能く一切衆生の所疑を斷ずるなり。

「隨一切堅固三昧」とは、諸法實相を堅固と名く。是の三昧を得る者は、諸法の實相に隨つて餘法に隨はず。

「出諸法得神通力無畏三昧」とは、是の三昧を得る者は、一切凡夫の法を過出し、菩薩の六神通・十方・四無所畏を得。

「能達諸法三昧」とは、是の三昧を得る者は、乃至諸法の如・法性・實際の中に通達し、乃至諸法平等に住せず。

「諸法財印三昧」とは、財を善法に名け、印をば相に名く、人の印綬を得るや、敢て陵易なきが如く、菩薩は善法財の印を得れば、亦た能く爲に留難を作すものなきなり。

「諸法無分別見三昧」とは、若し諸法を分別すれば、卽ち憎愛の心を生ずるも、是の三昧を得る者は、一切法を見て分別をなさざるなり。

「離諸見三昧」とは、見とは六十二の邪見、及び色等の法の中に相を取り、乃至佛見・法見・僧見・涅槃見を皆な名けて見となす。所以何んとなれば、相を取れば能く著心を生ずるが故なり。

「離一切相三昧」とは、卽ち是れ無相解脫門に相應の三昧なり。

「離一切著三昧」とは、一切の相を離るるが故に、一切法に於て亦た著せざるなり。

「除一切懈怠三昧」とは、是の三昧を得る者は、此の中に說くが如く、乃至七歲、(間)坐せず臥せず。菩薩是の三昧を得ば、常に懈怠の心なく、乃至佛を得し、初めより止息せざるなり。

「得深法明三昧」とは、深法を諸佛法、一切智慧等に名く。菩薩は是の三昧を得るが故に、能く遍に佛法を見、思惟し籌量して、深妙無比なるを知りたまふ。

「不可奪三昧」とは、是の三昧を得る者は、菩薩の法を行ずるに、能く其の志を奪ふ者なし。

「破魔三昧」とは、是の三昧力を得ば、魔は是れ欲界の主なりと雖も、菩薩は人身を以て能く魔事を破す。

「不著三界三昧」とは、是の三昧を得る者は、身は三界の中にありと雖も、心は常に涅槃にあるが故なり。

「不著起光明三昧」とは、是の三昧を得る者は能く無量の光明を放ちて十方を照す。

「見諸佛三昧」とは、是の三昧を得ば、天眼天耳を未だ得ずと雖も、而も能く十方の諸佛を見、十方の諸佛の所說の法を聞いて、疑ふ所を諮問す。

薩陀波崙は、是の如き等の三昧の中に住して、卽ち十方無量阿僧祇の諸佛を見、大衆の中にありて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜を說きたまふ。

卷の第九十八

第八十八薩陀波崙品(餘)

【經】是の時十方の諸佛は薩陀波崙菩薩を安慰して言はく、「善い哉、善い哉、善男子よ、我等は本と菩薩道を行ぜし時、般若波羅蜜を求め、是の諸の三昧を得ること亦た汝が今得る所の如し。我等は是の諸の三昧を得て善く般若波羅蜜に入り、方便力を成就して阿鞞跋致地に住す。我等、是の諸の三昧性を觀ずるに、法として三昧を出で三昧に入る者あるを見ず、亦た佛道を行ずる者を見ず、亦た阿耨多羅三藐三菩提を得る者を見ず。善男子よ、是れを般若波羅蜜と名づく。所謂是の諸の法あるを念はざるなり。善男子よ、我等は無所念の法の中に住して是の金色身、丈六の光明、三十二相八十隨形好、不可思議の智慧、無上戒、無上三昧、無上智慧を得、一切の功德を皆な悉く具足す。一切の功德を具足するが故に、佛すら尙ほ相を取りて說き盡すこと能はず、何に況んや、聲聞辟支佛及び諸の餘人をや。是を以ての故に、善男子よ、是の佛法の中に於て、倍恭敬し愛念して淸淨の心を生ずべく、善知識の中に於て應に佛の如き想を生ずべし。何となれば、善知識を守護せんがための故に、菩薩は疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。」是の時薩陀波崙菩薩は十方の諸佛に白して言さく、「何等か是れ我が善知識として應に親近し供養すべき所の者なるや。」十方の諸佛薩陀波崙菩薩に告げて言はく、「汝善男子よ、曇無竭菩薩は世世に敎化し、汝の阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむ。曇無竭菩薩は汝を守護し、汝に般若波羅蜜方便力を敎ふ、是れ汝が善知識なり。汝曇無竭菩薩を供養して若くは一劫、若くは二劫、若くは三劫、乃至百千劫を過ぐるまで頂戴し恭敬せよ。一切の樂具、三千世界の中の所有の妙なる色聲香味觸もつて、盡く以て供養すとも、未だ須臾の恩をも報ゆること能はず。何となれば、曇無竭菩薩摩訶薩の因緣の故に、汝をして是の如き等の諸の三昧を得て、般若波羅蜜の方便力を得せしむればなり。」諸佛は是の如く敎化し安慰し、薩陀波崙菩薩をして歡喜せしめ已つて、忽然として現ぜず。

是の時薩陀波崙菩薩は三昧より起ち已るに、復た佛を見ず。是の念を作さく、是の諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るや、諸佛を見ざるが故に復た惆悵して樂まず、誰れか我が疑を斷ぜんと。復た是の念を作す、「曇無竭菩薩は久遠より已來た、常に般若波羅蜜を行じて方便力を得、及び諸の陀羅尼を得、菩薩法の中に於て自在を得て、多くの過去の諸佛を供養し、世世に我が師と爲り、常に我れを利益すと。我れ當に曇無竭菩薩に、諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るやと問ふべし」と。爾の時に薩陀波崙菩薩は、曇無竭菩薩に恭敬愛樂の尊重心を生じて是の念を作さく、我れ當に何を以てか曇無竭菩薩を供養すべきや、今我れ貧窮にして華香・瓔珞・燒香・澤香・衣服・幡蓋・金銀・眞珠・瑠璃・頗梨・珊瑚・琥珀なし。是の如き等の物ありて以て般若波羅蜜及び說法の師たる曇無竭菩薩を供養す

べきなし。我が法として應に空しく曇無竭菩薩の所に往くべからず、我れ若し空しく往かば、喜悦の心生ぜず。我れ當に身を賣り財を得て、般若波羅蜜の爲の故に、法師曇無竭菩薩を供養すべし。何となれば、我れ世世に身を喪ふこと無數にして、無始生死の中に或は死し、或は賣り、或は欲の因緣の爲の故に、世世に地獄の中にあつて無量の苦惱を受けて未だ曾つて淸淨法の爲の故に、說法師を供養せんが爲の故に身を喪ふことなし。

是の時薩波崙菩薩は中道にして一大城に入り、市肆の上に至りて高聲に唱へて言はく、「誰か人を須めんと欲するや、誰か人を須めんと欲するや、誰か人を買んと欲するや」と。爾の時に惡魔は是の念を作す。是の薩陀波崙は法を愛するが故に自ら身を賣りて、般若波羅蜜の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せんと欲せり。當に正しく般若波羅蜜及び方便力を問ふことを得べし。云何んぞ菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ば、當に多聞具足するを得ること大海水の如く。是の時には沮壞すべからず、一切の功德を具足することを得て、諸の菩薩摩訶薩を饒益し、阿耨多羅三藐三菩提のための故に我が境界を過ぐ。亦た餘人を敎へて我が境界を出でて阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。我れ今當に其の事を壞すべし」と。爾の時に惡魔は諸の婆羅門居士を隱蔽して其の自らを賣る聲を聞かざらしむ。（たゞ）一長者の女は魔は蔽ふこと能はざるを除く。其の宿（世）の因緣を以ての故なり。爾の時に薩陀波崙は身を賣るに售れず、憂愁啼哭して一面にあつて立ちて啼泣して言く、「我れ大罪の爲に身を賣るに售れず、我れ自ら身を賣るは般若波羅蜜の爲の故に曇無竭菩薩を供養するなり」と。爾の時に釋提桓因は是の念を作す、「是の薩陀波崙菩薩は法を愛して自ら其の身を賣り、般若波羅蜜の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せんと欲す、我れ當に之を試みて、是の善男子は實に深心を以て法を愛するが故に是の身を捨つるや不やを知るべし」と。

是の時に釋提桓因は婆羅門の身を化作し、薩陀波崙菩薩の邊にあつて行いて問うて言く、「汝善男子よ、何を以て憂愁啼哭し、顏色憔悴して一面にあつて立つや」。答て言はく、「婆羅門よ、我れ法を愛敬し、自ら身を賣りて、般若波羅蜜の爲の故に曇無竭菩薩を供養せんと欲す。今我れ身を賣るに買ふ者あることなし。自ら念へらく、薄福にして財寶物なし。自ら身を賣り般若波羅蜜及び曇無竭菩薩に供養せんと欲するに而も買ふ者なし」と。爾の時に婆羅門薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子よ、我れ人を須めず、我れは今天を祠らんと欲して、當に人の心、人の血、人の髓を須む。汝能く賣つて我れに與ふるや不や」。爾時、薩陀波崙菩薩は是の念を作す、「我れは大利を得たり。第一利を得たり。我れ今便ち般若波羅蜜の方便力を具足せんが爲に是の心・血・髓を買ふ者を得たるは」と。是の時に心大に歡喜し悅樂して憂なく、柔和心を以て婆羅門に語つて言はく、「汝の須むる所の者は我れ盡く汝に與へん」と。婆羅門の言はく、「善男子よ、汝は何くの價を須むるや」。答へて言はく、「汝の意に隨つて我れに與へよ」と。即時に薩陀波崙は右の手に利刀を執り左の臂を刺して血を出し、右の髀肉を割き、復た骨を破り髓を出さんと欲する時、一長者の女あり、閣上にあつて遙かに薩陀波崙菩薩の自ら身體を割い

て壽命を惜まざるを見て是の念を作す、是の善男子は何の因緣の故に其の身を困苦するや、我れ當に往いて問ふべしと。長者の女即ち閣より下りて、薩陀波崙の所に到つて問うて言はく、「善男子よ、何の因緣あつてか其の身を困苦し、是の心・血・髓を用つて何等をかなすや。」薩陀波崙答へて言はく、「婆羅門に賣與して般若波羅蜜の爲の故に曇無竭菩薩に供養するなり」と。長者の女の言はく、「善男子よ、是の賣身して自ら心・血・髓を出し、曇無竭菩薩を供養せんと欲するに何等の功德利益を得るや」。薩陀波崙答へて言はく、「善女人よ、是の人は善く般若波羅蜜及び方便力を學ぶ。是の人は當に我が爲に菩薩の作すべき所、菩薩の行ずべき所の道を說くべし。我れ是の法を學び、是の道を學んで阿耨多羅三藐三菩提を得る時、衆生の爲に依止となつて、當に金色身、三十二相八十隨形好、大光無量明、大慈大悲、大喜大捨、四無所畏、佛の十力、四無礙智、十八不共法、六神通、不可思議清淨の戒、禪定智慧を得べし。阿耨多羅三藐三菩提を得て諸法の中に於て無礙一切の知見を得、無上の法寶を以て、分布して一切衆生に與ふ。是の如き等の諸の功德の利は我れ當さに彼れに從つて之を得べし」と。是の時に長者の女は是の上妙なる佛法を聞いて、即ち大に歡喜し心驚いて毛竪ち、薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子よ、甚だ希有なり、汝の說く所は、微妙にして値ひ難し、是の一一の功德法の爲の故にすら、應に恆河沙等の如き身を捨つべし。何となれば、汝の說く所の者は、甚大微妙なればなり。汝善男子よ、汝が今須むる所は盡く當に相ひ與すべし、金・銀・眞珠・瑠璃・頗梨・琥珀・珊瑚等の諸の珍寶物及び華香・瓔珞・塗香・燒香・幡蓋・衣服・伎樂等の供養の具をもて、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養せよ。汝善男子よ、自ら其身を困苦すること莫れ、我も亦た曇無竭菩薩の所に往き、汝と共に諸の善根を植ゑん。是の如き微妙の法を汝が說く所の如く得んが爲めの故なり。」爾の時に釋提桓因は即ち本身に復し、薩陀波崙菩薩を讚して言はく、「善い哉、善い哉、善男子よ、汝堅く是の事を受けて其の心を動ぜず、諸の過去の佛の菩薩道を行ずる時も、亦た是の如く般若波羅蜜及び方便力を求めて、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。善男子よ、我れ實には人の心・血・髓を用ゐず、但だ來つて汝が願を相試むるのみ、我れ當に何等をか相與ふべきや。」薩陀波崙の言はく、「我れに阿耨多羅三藐三菩提を與へよ」。釋提桓因の言はく、「此れは我が力の辦ずる所にあらず、是れは諸佛の境界なり、必ず相供養せん、更に餘の願を索めよ」。薩陀波崙の言はく、「汝若し此れに於て力なく、汝必ず供養を見すならば、我が是の身をして、平復して故の如くならしめよ」と。是の時に薩陀波崙、即ち平復して瘡瘢あることなく、本の如くにして異らず。釋提桓因は其の願を與へ已つて忽然として現ぜず。

爾の時に長者の女は薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子よ、我が舍に來到し、須むる所のものあらば、我が父母に從つて之を索めよ、盡く當に相與ふべし、我れも亦た當に我が父母を辭し、諸の侍女と共に往いて、曇無竭菩薩を供養すべし、法を求めんがための故なり。即時に薩陀波崙菩薩は、長者の女と俱に其の舍に到り、門外にあつて住す。長者の女入つて、父母に白さく、我れに衆くの妙なる花香及び諸の瓔珞・塗香・燒香・幡蓋・衣服・金・銀・瑠璃・頗梨・眞珠・珊瑚・琥珀及び諸の伎樂供養の具を與へよ。亦た我が身と、及び五百の侍女の

先きに給使する所のものをして、薩陀波崙菩薩と共に、曇無竭菩薩の所に到ることを聽したまへ。般若波羅蜜を供養せんがための故なり、曇無竭菩薩は當に我等がために法を說くべし、我れ當に說の如く行じて、當に諸佛の法を得べし」と。女の父母、女に語つて言はく、「薩陀波崙菩薩とは是れ何等の人なるや」と。女の言はく、「是の人今門外にあり、是の善男子は深心を以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量の生死の苦を度せんと欲す。是の善男子は、法のための故に自ら其の身を賣りて般若波羅蜜を供養す。般若波羅蜜は菩薩所學の道に名づく。般若波羅蜜を供養し、及び曇無竭菩薩を供養せんがための故に、市肆の上にあつて高聲に唱へて、「誰れか人を須むるや」、「誰か人を須むるや」、「誰か人を買はんと欲するや」と言ひ、身を賣るに售れず、一面にあつて立ちて憂愁啼哭す。是の時に釋提桓因、化して婆羅門となり、來つて之を試んと欲して問うて言はく、「善男子よ、何を以てか憂愁啼哭して一面に立つや」。答て言はく、「婆羅門よ、我が身を賣らんと欲するは、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩摩訶薩を供養せんがための故なり。而も我れ薄福にして、身を賣るに售れず」と。婆羅門是の善男子に語つて言はく、「我れは人を須めざるも、我れは天に祠らんと欲す、當に人の心、人の血、人の髓を用ふべし、汝能く賣るや不や」と。是の時に是の善男子、復た憂愁せず、其の心和悅して、是の婆羅門に語つて言はく、「汝が須むる所は我れ盡く相與へん」と。婆羅門の言はく、「汝何の價を須むるや」と。答へて言はく、「汝が意に隨つて我れに與へよ」と。即時に是の善男子は右の手を以て利刀を執り、左の臂を刺して血を出し、右の髀肉を割きて復た骨を破り髓を出さんと欲す。我れ閣上にありて遙かに是の事を見、我れ爾の時に是の念をなす、是の人は何故に其の身を困苦するや、我れ當に往いて問ふべしと。我れ即ち閣より下り往いて問ふ、「善男子よ、汝何の因緣を以ての故にか自ら其の身を困苦するや」。是の善男子我れに答へて言はく、「姉よ、我れは法の爲の故に、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる說法者を供養せんと欲するも、我貧窮にして所有なく金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・頗梨・眞珠・花香・伎樂なし。姉よ、我れ法を供養せんがための故に、自ら其の身を賣るに、今買ふ者の人の心、人の血、人の髓を須むるを得たり。我れ是の價を用つて、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる說法者を供養せんとす」と。我れ問うて言はく、「善男子よ、汝今自ら身より心・血・髓を出だして曇無竭菩薩を供養せんと欲するに何の功德を得るや」。是の善男子の言はく、「曇無竭菩薩は當に我がために般若波羅蜜、及び方便力を說くべし。此れは是れ菩薩の應に學ぶべき所、菩薩の應に作すべき所、菩薩の應に住すべき所、菩薩所行の道なり。我れ當に是の道を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生の爲に依止と作るべし。我れ當に金色身、三十二相八十隨形好、大光無量明、大慈大悲、大喜大捨、四無所畏、四無礙智、佛の十力、十八不共法、六神通、不可思議清淨の戒、及び禪定智慧を得、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。諸法の中に於て無礙一切の知見を得、無上の法寶を以て分布して一切衆生に與ふ。是の如き等の微妙の大法を我れ當に彼れに從つて得べしと。我れ是の微妙不可思議の諸佛の功德を聞き、其の大願を聞いて我が心歡喜して、是の念をなす、「是の清淨微妙の大願は甚だ希有なること乃至是の如し、一一の法の爲めの故には應に恒何沙等の如きの身命を捨つべしと。今善男子は、法のために能く苦行難事を受け、所謂身命を惜

まず。我れに多の妙寶あり、云何んぞ願を生じて是の如きの法を勸求し、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養せざらんやと。我れ是の如く思惟し已つて薩陀波崙菩薩に語れり。汝善男子よ、其の身を困苦すること莫れ、我れ當に我が父母に白して多く汝に金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・頗梨・眞珠・花香・瓔珞・塗香・末香・衣服・幡蓋及び諸の伎樂等を與ふべし、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる說法者を供養せよ。我れも亦た父母に求めて諸の侍女と共に汝と俱に去りて曇無竭菩薩なる說法者を供養し、汝と共に諸の善根を植ゑ、是の如き等の微妙清淨の法を汝が所說の如く得ることを爲さんと。父母よ、今我れ並に五百の侍女の先に給する所の者を聽したまへ。亦た我れに衆の妙なる花香・瓔珞・塗香・末香・衣服・幡蓋・伎樂・金銀・瑠璃等の供養の具を持することを聽したまへ。薩陀波崙菩薩と共に去つて、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩なる說法者を供養し。是の如き等の淸淨微妙の諸の佛法を得んが爲の故なり。」爾時に父母は女に報へて言はく、「汝の讃する所の者は希有にして說くことも及び難し。是の善男子は法の爲に精進し大に法相を樂しむ。及び是の諸の佛法は不可思議にして一切世間に於て最第一となし、一切衆生歡樂の因緣なり。是の善男子は是の法の爲の故に大に莊嚴す。我等は、汝の往いて曇無竭菩薩に見えて、親近し供養すること聽すべし。汝は大心を發して、諸の佛法を得んが爲の故に是の如く精進す、我等云何んぞ當に隨喜せざらん」と。是の女は曇無竭菩薩を供養せんが故に、聽許を蒙むることを得て、父母に報へて言はく、「我等も亦た是れに隨つて心歡喜す、我れ終に人の善法の因緣を斷ぜざるべし」と。

是の時に長者の女は七寶の車五百乘に、身及び侍女と共に種種の寶物供養の具を莊嚴し、種種の水陸の生華及び金銀の寶華、衆色の寶衣、好者、擣香澤香、瓔珞及び衆味の飲食を持し、薩陀波崙菩薩と共に五百の侍女を各一車に載せ恭敬圍繞し、漸漸に東に去つて衆香城を見るに、七寶もて莊嚴し、七重に圍繞し、七寶の塹、七寶の行樹皆な亦た七重なり。其の城の縱廣は十二由旬、豐樂安靜にして甚だ喜樂すべし。人民熾盛にして百千の市里に街巷相當り、端嚴にして畫の如く、橋津は地の如くにして、寛博淸淨なり。遙かに衆香城を見る。既に城中に入り曇無竭菩薩の高臺法座の上に坐するを見、無量百千萬億の衆は恭敬圍繞して說法す。薩陀波崙菩薩は曇無竭菩薩を見る時、心卽ち歡喜す、譬ば比丘の第三禪に入るや心を攝して安穩なるが如し。見已つて是の念を作す、我等は義しく應に、車に載つて曇無竭菩薩(の處)に趣くべからずと、是の念を作し已つて、車より下り步み進む。長者の女並に五百の侍女も皆な亦た車より下る。薩陀波崙菩薩は、長者の女及び五百の侍女と共に、衆寶を莊嚴し、圍繞恭敬して俱に曇無竭菩薩の所に到る。爾の時に曇無竭菩薩摩訶薩に七寶の臺有り。赤牛頭の栴檀を以て莊嚴となし、眞珠の羅網を以て臺上を覆ひ、四角には皆な摩尼寶珠を懸けて以て燈明となし、及び四寶の香爐には常に名香を燒く。般若波羅蜜を供養するが爲の故なり。其の臺の中に七寶の大床あり。四寶の小床を重ねて其の上に敷き、黃金牒書の般若波羅蜜を以て小床の上に置き、種種の幡蓋を莊嚴して其の上を垂覆す。薩陀波崙菩薩及び諸の女人は、是の妙臺の衆寶もて嚴飾せるを見、及び釋提桓因の無量百千萬億の諸天と共に天の曼陀羅花、碎末の栴檀、磨衆寶の屑を以て臺上に散じ、天の伎樂を虛空の中に鼓て此の臺

に娛樂するを見る。

爾の時に薩陀波崙菩薩は釋提桓因に問うて言はく、「憍尸迦よ。何の因緣の故に、無量百千萬の諸天と共に、天の曼陀羅花、碎末栴檀、磨衆寶屑を以て臺上に散し、天の伎樂を虛空の中に皷ち、此の臺上に娛樂するや」。釋提桓因答へて言はく、「汝善男子知らざるや、此は是れ摩訶般若波羅蜜なり、「是れ諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ菩薩を攝持す。菩薩は是の般若波羅蜜を學し、一切の功德を成就して諸佛法一切種智を得」と。是の時に薩陀波崙菩薩卽ち歡喜し悅樂し釋提桓因に問ふ、「憍尸迦よ、般若波羅蜜は、諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ菩薩を攝持す。菩薩は是の般若波羅蜜を學び、一切の功德を成就して、諸佛の法一切種智を得といふ。今何れの處にあるや」。釋提桓因の言はく。「善男子よ、是の臺の中に七寶の大床あり、四方の小床を其の上に重敷し、黃金牒書の般若波羅蜜を以て小床の上に置き、曇無竭菩薩七寶の印を以て之を印す、我等は開き得て以て汝に示すこと能はず」と。

是の時に薩陀波崙は長者の女及び五百の侍女と共に、供養の具なる華香瓔珞幡蓋を取つて分つて二分となし、一分をば般若波羅蜜に供養し、一分をば法座の上の曇無竭菩薩に供養す。爾の時、薩陀波崙菩薩五百の女人と共に華香・瓔珞・幡蓋・伎樂及び諸の珍寶を持して般若波羅蜜を供養し已つて、然る後曇無竭菩薩の所に到り、到り已つて曇無竭菩薩の法座の上にあつて座するを見る。（卽ち）諸の華香・瓔珞・擣香・澤香・金銀・寶華・幡蓋・寶衣を以て、其の曇無竭菩薩の上に散じ、法の爲の故に供養す。是の時に諸の華香寶衣は曇無竭菩薩の上なる、虛空の中に於て化して華臺となり、碎末の栴檀、寶屑金銀の寶華は化して寶帳となり、寶帳の上に散ずる所の種種の寶衣は化して寶蓋となり、寶蓋の四邊に諸の寶幡を垂る。薩陀波崙及び諸の女人は、曇無竭菩薩の所作の變化を見て皆な大に歡喜して是の念を作さん、「未曾有なり。曇無竭大師の神德は乃ち爾なり。菩薩道を行ずる時の神通力すら尙ほ能く是の如し、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得る時をや」と。是の時に、長者の女及び五百の女人は淸淨に信心し、曇無竭菩薩を敬重して皆な阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是の願をなして言はく、「曇無竭菩薩の如くに菩薩の諸の深法を得、曇無竭菩薩の如くに般若波羅蜜を供養し、曇無竭菩薩の如くに大衆の中に於て般若波羅蜜の義を演說し顯示し、曇無竭菩薩の如くに般若波羅蜜の方便力を得、神通を成就し、菩薩事の中に於て自在を得ん。我等も亦た是の如くすべし」と。

是の時に薩陀波崙菩薩及び五百の女人は、華香寶物もつて般若波羅蜜及び曇無竭菩薩に供養し、已つて頭面に曇無竭菩薩を禮し、合掌恭敬して一面に立ち、一面に立ち已つて曇無竭菩薩に白して言さく、「我れ本も般若波羅蜜を求むる時、空閑林の中に於て空中の聲を聞くに言はく、「善男子よ、汝是より東に行け、當に般若波羅蜜を聞くを得べしと。我れ是の語を受けて東に行き、東行して久しからずして是の念をなす、我れ何ぞ空中の聲に問はざりしや、「我れは當に何の處に去る可き」や、「是れより去ること遠きや近きや」、「當に誰に從つて聞くべきや」と。我れ是の時に大に憂愁し啼哭し、是の處に於て住すること七日七夜なり。憂愁するが故に、乃至飮食を念はず、但

だ念ずらく、我れ何の時に當に般若波羅蜜を聞くことを得べきと。我れ是の如く憂愁し、一心に般若波羅蜜を念ずるに、佛身の虛空の中にあるを見る。我れに語つて言はく、善男子よ、汝の大欲大精進の心をして放捨すること莫れ。是の大欲大精進の心を以て、是より東に行き、是を去ること五百由旬にして城あり、衆香と名づけ、是の中に菩薩摩訶薩ありて曇無竭と名づく。是の人の所に依つて、當に般若波羅蜜を聞くことを得べし。是の菩薩は、世世に是れ汝が善知識なり、常に汝を守護すと。我れ佛に從つて敎誨を受け已つて、便ち東に行きて更に餘念なし、但だ念ずらく、我れ何の時にか當に曇無竭菩薩の我がために般若波羅蜜を說くを見るべきやと。我れ爾の時中道に住し、一切法の中に於て無礙の知見を得、「觀諸法性」等の諸三昧、現在前するを得。是の三昧に住し已つて、十方無量僧祇の諸佛の是の般若波羅蜜を說くを見る。諸佛我れを讃じて言はく、善い哉、善い哉、善男子よ、我れ本と般若波羅蜜を求めし時、諸の三昧を得ること亦た汝の今日の如しと。是の諸の三昧を得已つて、遍ねく諸の佛法を得るに、諸佛は我がために廣く法を說き、我れを安慰し已つて忽然として現ぜず。我れ三昧より起つて是の念をなす、「諸佛は何れの處より來り、去つて何れの處に至るや」と。我れ諸佛を見ざるが故に大に憂愁し復た是の念をなす、曇無竭菩薩は先佛を供養し、衆の善根を植ゑ、久しく般若波羅蜜を行し、善く方便力を知つて、菩薩道の中に於て自在を得、是れ我が善知識にして我れを守護すと。我れ當に曇無竭菩薩に是の事を問ふべし、諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るやと。我れ今大師に問ふ、是の諸の佛は何の處より來り、去つて何れの處に至るや、大師よ願くば我がために諸佛の從來する所、所至の處を說いて、我れをして知ることを得せしめ給へ。知りて已らば亦た常に諸佛を見て離れず。

【論】釋して曰はく、薩陀波崙は渇仰して、般若を聞かんと欲するが故に、十方諸佛の大衆のために法を說くを見て、其の心歡喜し、其の意滿つることを得たり。諸佛は其の信力の堅固にして精進、動じ難きを以ての故に、其の心を安慰して讃じて、「善い哉、我れ本と初めて菩薩道を行じて般若を求むる時も亦た汝が今の如し、汝憂愁して自ら德の薄きを謂ふこと莫れ」と言へり。爾の時に、薩陀波崙は大に諸の三昧力を得て其の心深く著す。是の故に、諸佛は爲めに諸の三昧性を求むるに實體を見ず、亦た三昧に入り三昧を出づる者を見ずと說く。(そは)衆生は空にして、法も亦た空なるが故なり。諸佛は爲に、略して般若波羅蜜の相を說いて是の法ありと念ぜず。所謂、一切法は無相の故に念著すべからず、我等は是の念ずる所無き法の中に住して、能く六波羅蜜を具足す。六波羅蜜を具足するが故に、佛は金色身を得ること、經の中に說くが如し。諸佛は敎化し、利喜して其の心を安慰す。

問うて曰はく、上に化佛は已に爲めに、曇無竭は是れ汝が世世の善知識なりと說けり、今何を以てか、復た何等か是れ善知

識なりやと問ふや。

答へて曰はく、佛の勅を以て善知識の中に於て倍恭敬愛念すべきが故なり。又十方の佛の所に於て、曇無竭の功德を聞かんと欲して、自ら信心堅固ならしめて疑はざらめんと欲するを以ての故に問ふなり。十方の佛の答は經の中に說くが如し。薩陀波崙は、是れ曇無竭の度する所の因緣の人なるが故に諸佛は佐助し示導したまふ。或は諸の菩薩あつて、佛の度すべき所の者を佐助して佛の所に至らしむ。

問うて曰はく、上に虛空の聲を聞いて問はざりし故に七日啼哭せり。今は十方の佛を見ず、何を以てか、大に憂愁して、更に佛を見んことを求めずして、但だ曇無竭の所に於て諸佛の去來のことを問はんと欲するや。

答へて曰はく、薩陀波崙は先時に但だ肉眼あり、未だ三昧を得ず、深心を以て信じて、善法に著するが故に大に啼哭せり。今は諸の三昧力を得て又十方の佛を見、諸の煩惱微薄し、著心已に離るるが故に、但だ一心に念ずらく、「我れ當に何の時にか曇無竭を見るべきや」と。

問うて曰はく、若し薩陀波崙は是の三昧力を得ば、何を以てか、還つて三昧に入らずして、十方の諸佛は何れの所より來り、去つて何れの所に至るかを問ひ、而も曇無竭を見問せんと欲するや。

答へて曰はく、十方の佛は上に種種の因緣を以て、曇無竭を讃じて世世に是れ汝が師なりとす。是の故に問はんと欲するなり。是の時に薩陀波崙は曇無竭菩薩を念じて「是れ我が先世の因緣なり」と。是の故に恭敬尊重の心を生じ、大功德あるを以ての故に尊重す、是れ先世の因緣の故に恭敬愛樂するなり。

問うて曰はく、先には薩陀波崙大に世間の事に著せず、深く般若波羅蜜を愛するが故に愁憂啼哭すと說けり。今何を以てか自ら貧窮にして供養を以てすることなきを鄙むや。但だ好心を以て師の意に隨はば、則ち是れ法供養なり、華香を用つて何かせんや。

答へて曰はく、法供養は上なりと雖も、而も世間の衆生は遠くより來つて法を求むるを見るに、空にして所有なければ、則

ち喜心を發さず、世法を以ての故に、供養の具を求むるなり。

復次に、五波羅蜜は般若波羅蜜の法を助となし、助法の中には、檀波羅蜜を首となす。薩陀波崙思惟すらく、「我れ福田を尊重することを得ば、曇無竭菩薩は當に助道法の根本を以て供養すべし。亦た衆人を起發せんと欲す」と。薩陀波崙は是れ智人にして、善人なり、貧窮にして而も能く供養す、何に況んや我等をや。

復次に、諸の善法を行ずる時と思惟する時とは其の味各異なれり。薩陀波崙は布施味を行ぜんと欲す、是の故に供養の具を求むるなり。

問うて曰はく、薩陀波崙は是れ大菩薩にして能く十方の佛を見、又諸の深三昧を得、何を以てか貧窮なるや。

答へて曰はく、有人の言はく、「此の人は家を捨てて佛道を求め、富家に生ずと雖も、道里懸遠にして、一身獨り去つて、財物を齎らさず」と。有人の言はく、「是れ大人なりと雖も、宿世の小罪の因緣の故に貧窮の家に生ず」と。有人の言はく、「是れ小人なりと雖も、先世に少しく布施を行ぜし因緣の故に、大富家に生ぜず、蘇陀夷尼陀等の如し。是れ諸天の供養する所の人にして、而も小家に生ずるなり」と。貧に二種あり、一には財の貧、二には功德法の貧なり。功德法の貧は、最も大に恥づべし。財貧は好人にも亦あり、法貧は好人にはなき所なり。

「華香あることなし」とは、上妙の寶華あることなきなり、又少なきを以ての故になしと言ふ。我れ若し空しく往かば、師は我れに須めずと雖も心に大喜を得ず、是の故に、身を賣らんと欲せるなり。

問うて曰はく、若し身を賣りて他に與へなば、誰か此の物を買うて、往いて師を供養せんや。

答へて曰はく、捨身は卽ち是れ大供養なり、去住には在らず。有人の言はく、「是の人は身を賣り、財を取つて、人に因つて供養す。我は供養の爲の故に、身を賣つて奴となる」と。

又有人の言はく、「爾の時に、世の好人皆な法を知れり。自ら身を賣ると雖も、主は必ず能く之を聽して供養して而も還さん」と。

復次に、是の人深心を發し、檀波羅蜜を行ぜんと欲して、法及び法師を供養せんとするも、而も外物なく唯だ已が身のみあり。是の故に身(卽ち)是れ內物を賣る。外(物)と內物との中にては內物を重しとなす。之を惜むこと深きが故なり。是の故に布施の願を破らざらんと欲し、故らに身を賣りて供養す。此の中に自ら悔ひざる因緣を說けり。「我れ世世に身を喪ふこと無數なるも、未だ曾て淸淨法の爲めにせざるが故に、今說法者を供養せんがための故に、是の身を喪ふも、而も大に法利を得るなり」と。薩陀波崙は心を定めて身を貪惜する意を斷ち、道中に於て一大城に入れり、(そは)賣買に意の如くなるを得んと欲するが故に、此の大城に入れるなり。一心に身を賣んと欲し。羞愧を除き、憍慢を破するが故に唱へて言はく、「誰か人を須むるや」と。

問うて曰はく、魔は何を以てか、其の意を破せんと欲せるや。

答へて曰はく、魔は常に諸佛菩薩の怨家となるが故に、來つて破せんと欲せるなり。

復次に、諸の小菩薩は未だ諸法實相を得ざれば、魔及び惡人能く壞す。若し無生法忍を得、諸の菩薩の神通力に住すれば、能く破する者なし。(喩へば)、小樹を栽ゆるに、小兒も能く破するも、大(樹)は破すべからざるが如し。

復次に、此の中に自ら魔の破する因緣を說く、所謂、是の薩陀波崙は法を愛するが故に、自ら身を賣つて般若波羅蜜及び、法盛菩薩を供養す。當に正しく般若波羅蜜を聞くを得べきこと、經の中に廣く說くが如し。

問うて曰はく、若し魔にして薩陀波崙を壞せんと欲せば、先に來りて空中の聲を聞き、及び十方の佛を見る時、何を以てか壞せずして、今、方に諸の婆羅門居士を隱蔽して、其の聲を聞かざらしむるや。

答へて曰はく、薩陀波崙は先には心未だ定まらずして身を惜み、未だ盡く十方の佛を見ざりき。已に諸の三昧を得て、其の心乃ち定り、今は定心の相現ぜり。是の故に魔は驚く。若し菩薩の心未だ定らざれば、未だ能く魔を動かすこと能はず、若し大菩薩其の心已に定まらば、魔は亦た來らず。薩陀波崙は今心を定めて魔の境界を出でんと欲す、是の故に魔は來る。譬へば、債を負ふ人が未だ遠く去るを欲せざれば、債主は之を遮らざるも、他界に出でんと欲すれば、卽ち去ることを聽さざるが如し。

問うて曰はく、魔は大力あり、何を以てか、此の菩薩を殺さずして但だ破壞するや。

答へて曰はく、魔は本より其の壽命を嫉まず、但だ其の作佛心を憎む。是の故に、壞せんと欲するなり。又復た諸の天神の法は、人に重罪なくんば、妄りに殺すことを得ず、但だ壞亂し恐怖することを得るのみ。若し神に此の法なくんば、則ち人にして活くる者なからん、是の故に殺さず。

婆羅門性の中に生じて戒を受くるが故に婆羅門と名づく。此を除いて通じて居士と名づく、居士は眞には是れ居舍の士なり、四姓の中の居士にあらず。「一の長者の女を除く」とは、其は佛道の爲に、世世に功德を集むるを以ての故に、魔は蔽ふこと能はざるなり。復た有人の言はく、「是の薩陀波崙は死すべからざるが故に、一の女人をして聞かしむ」と。有人の言はく、「是の曇無竭菩薩の神通力の故に、長者の女をして聞くことを得せしむるなり」と。是の如く三たび唱ふるに、人の買ふ者なく、便ち大に愁憂せり。

問うて曰はく、薩陀波崙は既に身を惜まず、人の買ふなしと雖も、亦た愁ふべからず。

答へて曰はく、既に大心を發すも、其の願を滿ぜず、是の故に、大に愁ふるなり。釋提桓因は是の念をなす、薩陀波崙其の身を賣らんと欲すれども、買ふ者あることなしと。經の中に廣く說くが如し。

問うて曰はく、釋提桓因は報得の知他心を得、應に薩陀波崙の心已に決定せるを知るべし、今何を以てか來つて試むるや。

答へて曰はく、諸天は但た世間の人心を知るのみ、作佛不作佛の心は其の知る所にあらず、佛を除いては能く其の佛道のための故に、授記を與ふるを知ることあることなし。

復次に、釋提桓因は、引導する所多からんと欲するが故に來つて之を試み。聞見する者をして皆な發心して佛を求めしむ。又金銀等の諸寶は、以て輕賤せざるが故に、燒鍛磨打するが如く、菩薩も亦た是の如し。若し能く肉を割いて血を出だし、骨を破つて髓を出だすに、其の心動ぜざれば、是れ正定の菩薩なり。是の故、に天帝來つて之れを試むるなり。

問うて曰はく、帝釋は是れ大天王なり、何を以てか妄語して是の言を作すや。「我れ天を祠らんと欲して、人の心血髓を須

む」と。

答へて曰はく、若し慳貪瞋恚の煩惱を以てすれば、自利を求めんと欲するが故に妄語す。是の故に罪となす。帝釋にして若し實身に實語を作さば、菩薩卽ち信ぜず。是の故に、其の國法の天祠の須むる所の如くす。其の信受するが爲の故なり。是の時に、薩陀波崙は、其の語を信じ、大に歡喜して、我れ大利を得(と言ふ)。大利とは、阿鞞跋致地なり、第一利とは、是れ佛道なり。大利とは、五波羅蜜なり、第一利とは、般若波羅蜜なり。大利とは、般若波羅蜜の方便力なり。大利とは菩薩の初地なり、第一利とは十地なり。大利とは、初地乃至十地なり、第一利とは第十地なり。大利とは、菩薩地なり、第一利とは、佛地なり。是の如く、次第に分別す。末だ具足せずと雖も、已に具足の因緣に住するが故に、便ち具足をなすと言ふ。

問うて曰はく、若し釋提桓因身を化して來らば、何を以てか「汝は何等の價をか須む」と言ふや。

答へて曰はく、其の曇無竭菩薩を供養して、其の願を滿ぜんことを欲するを知るが故なり。又復た釋提桓因は、薩陀波崙を苦困して、其の索むる所の者の大なるを畏る。是の故に、何等の價をか須むるやと言へり。

「汝が意に隨つて我に與へよ」とは、汝に於て大に貪惜せず、(與へて)悔恨を致さざるものを我に與へよと言ふなり。薩陀波崙には力勢なく、旃陀羅を使ふことを得ること能はざる故に自ら刀を提へ。婆羅門も亦た罪を畏るるが故に破すること能はず、是を以て自ら刀を執つて身を破するなり。

問うて曰はく、若し長者の女、聲を聞かば、何を以てか來つて問はざるや、汝何を以てか自ら身を賣ると。

答へて曰はく、但だ空しく身を賣ると言ふは、事は輕し。身を破つて心髓を出ださば事重し。故に長者の女は心を發せり。長者の女は閣上に住在して、遙かに是の人の自ら割刺するを見て、是の念をなさく、「一切衆生は皆な樂を求め、苦を畏れて其の身を貪愛す、薩陀波崙は而も自ら割刺す、是れ希有なりとなす」と。又先世の福德因緣に牽かるるを以ての故に、卽ち往いて其の所に到りて問ふ。薩陀波崙は曇無竭菩薩に供養せんと欲すと答ふ。復た問ふ、何等の利を得るやと。答へて言はく、

般若波羅蜜を菩薩の所學と名づく。當に彼に從つて聞くべし、我れ是の道を學んで、當に作佛するを得て、一切衆生のために依止となるべし。譬へば、厚葉樹の多く蔭覆する所の如く、又熱き時に、曠野險道(に於ける)清涼の大池の如し。佛の功德現る事を說いて、以て發心すべき者の爲めにす、所謂「金色身、三十二相大光、無量光」なり丈光は、閻浮提の惡世の衆生の爲めにす。諸佛の眞實の光明には限量あることなし。「大慈、乃至六神通」の義は、先に說くが如し。「不可思議清淨の戒、禪定智慧」は、佛戒等の五衆の中に說くが如し。「諸法の中に於て、一切無礙の知見を得」とは、諸佛は無礙の解脫あり、是れ解脫相應の知見なり。一切法の中に礙ふる所なき知見にして分別して先きに說くが如し。

薩陀波崙言はく、「我是の如く無量の佛の功德を得、無上の法寶を以て分布して一切衆生に與へん」と。無上の寶とは、有人の言はく、「三寶の中の法寶なり」と。有人の言はく、「一切の八萬四千の法衆、是を法寶となし、是を得るが故に、諸の煩惱を除き、諸の戲論を滅して、一切の苦を脫することを得」と。有人の言はく、「無上の法寶は、卽ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり、更に上を過ぐる者なきが故なり」と。有人の言はく、「涅槃は是れ無上の法寶なり、何となれば一切有爲法には皆な上あり、阿毘曇に言ふが如く、一切有爲法及び虛空非數緣盡を名づけて有上の法となし、數緣盡、是を無上の法となす、數緣盡くるは卽ち是れ涅槃の別名なるが故なり」と。有人の言はく、「涅槃の道は是れ有爲なりと雖も、其を以て涅槃となすが故に、有爲法の中に於ては無上となす」と。是の如き等の法寶を分布して、三乘と爲して衆生に與ふ。是の如き等の無量の佛法は、當に師に從つて得べし。是の故に、我は是の老病生死所住の處なる不淨臭穢の身を捨つ。般若波羅蜜を供養せんがための故なり。當に佛身金色等を得べきは、先に說くが如し。長者の女は、世世に諸佛を供養し、善根を種ゑて智慧明利なり。是の法を聞くや、其の心深く入りて、大に法喜を得、乃至、心驚き毛竪ち、薩陀波崙に語つて言はく、「甚だ希有となす、汝の讃する所の法は大に微妙なり、是の一一の法のための故にすら、恒河沙等の如き身を捨つべし、何に況や一身をや」と。長者の女は、何の因緣の故に其の身を困苦するやを知らざるも、而も之を憐愍し心に不可なりと謂へり。今是の無量無邊にして無比なる清淨の佛法を聞き、是の因緣を以て得べきが故に大に歡喜す。是の故に是の法のための故に、恒河沙の如き身を捨つべしと說くと。女

の言はく、「汝は貧なるを以ての故に、自ら其の身を苦困す、今に於て止むべし、汝が須むる所を恣にせよ、當に以て相與ふべし、我れも亦た汝に隨つて而も此の道を求めん」と。

問うて曰はく、是の菩薩は既に自ら身體を割截す、云何にして能く長者の女の與めに多く佛法を説くや。

答へて曰はく、是の菩薩は、心力大にして身に苦ありと雖も、心を覆ふこと能はず。是の菩薩は始めて刀を以て肉を割き血を流し、方に骨を破り髓を出んと欲す。而も長者の女來るも未だ大に悶えざるが故に、能く法を説くことを得。釋提桓因は其の心の定まるを知つて、之を試むるのみ。故に言ふ所なく、即ち本身に復して讃して善い哉と言ふ。「汝が心堅くして此の事を受く」とは、帝釋意へらく、汝の如きは今の生死の肉身にして未だ佛道を得ざるも、能く是の如く身を惜まず。汝は久しからずして當に一切法の中に於て、所著なきを得て、無生法忍の中に住して、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ること、過去の佛を以て證となすべしと。是の如き等の種種の因緣をもて其の心を安慰す。「我は是れ天王なり、佛道を愛樂するが故に來つて相試み、汝が心の堅軟云何を知らんと欲し、汝をして信ぜしめんと欲するが故に、人の心髓を須めて天を祠らんと言ふも、實には須めざるなり。汝の願何等なるや、當に以て相與ふべし、汝は是れ好人なり。是の佛種のために、當に相擁護すべし」と。薩陀波崙は直信にして、心善軟に、深く佛道に著するが故に衆生を分別せず、帝釋の語を聞いて便ち言はく、「我に阿耨多羅三藐三菩提を與へよ」と。帝釋の言はく、「此れ我が力の能く辦ずる所にあらず、是れ佛の境界なり」と。

復次に、有人の言はく、「帝釋は大に薩陀波崙を苦困す、今此の語を以て之を謝するなり。帝釋の意へらく、「金銀寶物を求むることを謂うも、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を索むることを知らず、既に與ふること能はずと愧負するのみ」と。復た更に語つて言はく、「必ず相供養せん更に餘願を索めよ」と。帝釋の語る意は、「我れ既に大に相ひ苦困す、直ちに爾ることを得ず、而も去つて要らず相供養せん」と。薩陀波崙は身を惜まずと雖も、此の身を以て曇無竭を供養して、般若波羅蜜を聞かんと欲す。是の故に語つて言はく、「若し汝に此の力なくんば、我が身體を平復して故の如くならしめよ」と。帝釋言はく、「汝の言ふ所の如くすべし」と。瘡は卽ち平滿して、本と異ることなし。

問うて曰はく、先に已に肉を割く、云何にして平滿なるを得せしむるや。

答へて曰はく、佛は五の不可思議を說く。龍事の所作すら尙ほ不可思議なり、何に況んや天をや。又虛空の中には微塵充滿し、帝釋の福德より生ずる心は便ち能く和合平滿す。諸天及び地獄の中の身の如きは是れ胎生の身にあらず、罪福因緣の故に和合して便ちあるなり。

是の時に帝釋は其の心の堅きを知り、願を與へ已つて卽時に滅し去る。爾の時に、薩陀波崙は宿世の微罪已に畢つて福德明に盛なり、是の故に長者の女は將に歸らんとし、「須むる所のものあらば、我が父母に從つて是を索めよ」と、經の中に廣く說くが如し。

問うて曰はく、是の女は先に「汝が須むる所の物は盡く我に從つて之を索めよ」と言ひ、今何を以てか我が父母に從つて索めよと言ふや。

答へて曰はく、今旣に將に歸りて舍に到らんとす、薩陀波崙に目あたりに見えて舍に入り、父母に從つて之を得るを以て愧ぢて前の言を稱へず、是の故に先づ自ら父母に從つて之れを索めよと說くなり。又女は力能く寶を得と雖も、子女の法なるを以ての故に、父母に從つて之を索む。女旣に舍に入るや、先に許す所の如く、父母に從つて與へんことを索む。其の國には佛法あることなし、是の故に女に問ふ、「阿誰か是れ薩陀波崙菩薩なる」と。女は見し所の如く、聞きし所の如く、盡く父母に向つて、薩陀波崙の事を說き、今、父母は當に我と薩陀波崙菩薩と倶に、及び五百の侍女、併に供養の具を以て、曇無竭菩薩を供養することを聽すべしと(いふ)。父母は其の言を聞いて、卽ち聽して女の意の如くせり。

問うて曰はく、長者は貴くして而も力あり、云何んぞ先に薩陀波崙を識らずして、其の功德を聞くが故に、便ち能く女及び其の眷屬寶物を之に與へて倶に去らしむるや。

答へて曰はく、長者も亦た德本を植ゆるも、因緣少きを以ての故に、無佛の國に生ず。暫らく佛德を聞くや、其の宿識を發して、心卽ち開悟するが故に能く發遣す。譬へば、蓮花の生長し具足するや、日を見て開敷するが如し。父母は女の心が淳熟

して不淨の行なく、操を持して妄らず、世樂を樂しまずして、但だ法利を求むるを知り、其の心至つて制止すべからざるを知る。若し其の意に違へば、其の自害せんことを恐れ思惟し籌量し已つて、既に其の意を全うし、自ら功德を得、歡喜して去らしむ。世間の因緣は深く著して解き難きも、愛の至るが故に尙ほ違ふこと能はず、何かに況んや佛道のための故なり。其の心淸淨にして染著する所なくして、而も之を聽さざらんや。女は父母が、法のために聽して、寶物を惜まざるを見て、亦た隨喜心を以て、之がために歡喜す。爾の時に衆の心既に定まり、七寶の車を莊嚴し、大衆と(與に)圍遶して稍稍東に行く。是の時、五百の女の親屬及び城中の衆人は、是の希有にして及び難きの事を見て、皆な亦た隨ひて去る。人衆既に集り、歡悅して共に行き、衆香城を渴仰すること、渴者の飮を思ふが如し。漸漸に路を進み、遙に衆香城を見る。乃至長者の女及び五百の女人と(與に)、恭敬圍遶して、曇無竭の所に往かんと欲す。

問うて曰はく、曇無竭は是れ大菩薩にして、聞持等の諸の陀羅尼を得、般若波羅蜜の義は、已に自ら通利し憶持す、何ぞ七寶の臺を用ひて般若の經卷を書して中に著いて供養するや。

答へて曰はく、種種の因緣ありと雖も、略して說くに二義あり。一には衆生の心行不同なるにより、或は經卷を見んことを樂ひ、或は演說を聞かんことを樂ふ。二には曇無竭は身は白衣となつて現に家屬あり、鈍根の衆生は或は是の念を作す、「此に居家にあれば必ず染著あり、何ぞ能く畢竟淸淨無著の般若波羅蜜を以て、衆生を利益せん。自ら無著ならず、何ぞ能く無著の法を以て敎化せん」と。是の故に、其の經文を書して七寶の牒上に著け、衆寶を供養するに、諸の天龍鬼神も皆な亦た共に來つて恭敬し、花香幡蓋を供養し、七寶を雨らし、衆生の(之を)見る者は信根を增益す。則ち此の法を以て佛語を示傳し、文を案じ、敎を演べて、勸發す。一切寶臺莊嚴の具、及び薩陀波崙が釋提桓因に問ふは、經の中に說くが如し、七寶の印は印とは是れ曇無竭眞實の印なり。常に自ら手に執つて以て經を印す。有人の言はく、「七寶の印とは、佛道を求むる七大神あり、是れは執金剛の杵にして、常に曇無竭菩薩に給して、經文を守護せしめ、魔及び魔民をして、改更らに錯亂せしめず。般若を貴敬する爲の故なり。人の但だ演說を聞いて、發心する者あり、人の其の莊嚴の文字を見て、而も歡喜發心する者あり。是の故に、寶臺

を莊嚴し、金牒書七寶印を用つて印す。

問うて曰はく、臺上に書寫する所の般若と、曇無竭菩薩の口に演說する所の般若と二處倶にありと雖も、而も書寫する處のものは、能く人を益すること能はず、何を以て先づ臺の所に至るや。

答へて曰はく、書する所の般若は法寶の中に入る。佛寶の次第に法寶あるが故に、應に先きに供養すべし。曇無竭は一人なるが故に、僧寶には攝せざる所なり、是の故に、先づ法寶を供養す。又曇無竭菩薩の所說は是た法なりと雖も、而も衆生は人相を取るが故に多く著心を生ず。若し書する所の般若を見て人相を生ぜざれば、餘相を取つて著心すと雖も、人に著して患を生ずるよりは少し、是の故に先づ經を供養す。經法は諸佛すら尙ほ供養す、何に況んや曇無竭及び薩陀波崙をや。曇無竭は、般若波羅蜜に因るが故に、供養を得。所因の本を何ぞ先づ供養せざることを得ん。是の故に、供養する所を分つて、具さに二分となすなり。

問うて曰はく、曇無竭には六萬の婇女と五欲の宮殿とあり、云何にして能く散ずる所の花物を以て、化して花臺となすや。

答へて曰はく、有人の言はく、「諸佛の神力は、薩陀波崙の供養する所の物に因つて此の變化をなす」と。有人の言はく、「曇無竭は是れ大菩薩にして法性生身なり、衆生を度せんが爲の故に五欲を受く。曇無竭菩薩の名字義の中に說くが如し。

問うて曰はく、菩薩の法は先づ衆生の中に於て悲心を起し、衆生の苦を度せんと欲するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む、今は但だ曇無竭の神力威德を見て云何にして發心するや。

答へて曰はく、發心に種種あり、說法を聞いて而も發心する者あり、衆生に於て慈悲を起して而も發心する者あり、神通力大威德を見て而も發心する者あり。然る後漸漸に而も悲心を生ず、智印經の中に說くが如し。愛に依つて而も愛を斷じ、慢に依つて而も慢を斷ずること、人の道法を聞いて是の法に愛著するが故に、五欲を捨てて出家するが如し。又某甲は阿羅漢道を得と聞いて、而も高心を生じ、此の人は我が事に勝ることなし。彼すら尙ほ能く爾なり、(阿羅漢道を得)、我何んぞ能はざらんと。而も大精進を生じて阿羅漢道を得る有り。佛道の中すら亦た是の如し。長者の女等及び五百の女人は、常に深く、勢力

自在の樂を貪る。「往古に人あり、神力變化して寶物具足し、人中にて天の樂を受け、後に曇無竭が臺觀宮殿に、大法座の上に在つて坐して天人を供養するを見、又、供養する所の物は、虛空の中に於て化して大臺を成じずるを見、心卽ち大に喜んで遭ひ難きの想を發す」と聞く。皆な福德の因緣より是のことを辨ずべきを知る。是の故に皆な非佛の心を發す。聞いて發心する所の者は皆な次第行を行ず。毘摩羅詰經の中に說くが如し。愛慢等の諸の煩惱は皆な是れ佛道の根本なり。是の故に女人の是のことを見るや、已に愛樂の心を生じ、福德の因緣を以て、是のことを得べきを知るが故に皆な發心す。是の愛慢によつて、後に淸淨の好心を得るが故に。佛道の根本なりと言ふ。譬へば、蓮華の汚泥より生ずるが如し。發心して已に願をなすこと曇無竭のなす所の如く、我等も亦た當に是れを得べし。(爾の)時に、薩陀波崙等、頭面に曇無竭菩薩を禮す。花香等の供養は貴からざるが故に先にし、身を供養することは貴重なるが故に後に禮拜す。禮拜し已つて、本と般若を求むる因緣を說く、經の中に說くが如し。「我もと般若を求むる時、空中の聲を聞く、乃至我れ今大師に問ふ、諸佛は何れの所よりか來り、去つて何れの處にか至る」と。

問うて曰はく、薩陀波崙は諸の大三昧を得たり。所謂、破無明、觀諸法性なり、云何が空を知らずして、而も佛相を取つて深く愛著を生ずるや。

答へて曰はく、新發意の菩薩は、能く總相に諸法の空無相を知ると雖も、諸佛の所に於て深く愛著するが故に、佛相の畢竟空なることを解すること能はず。空を知ると雖も、而も空と合すること能はず。何となれば、諸佛には無量無邊の實功德あればなり。是の菩薩は利根なるが故に深く入り深く著す。若し佛是の菩薩のために空を說かざれば、是の菩薩は佛を愛するがための故に能く自ら親族を滅す、何た況んや餘人をや。但だ空を解するを以ての故に是のことなし。薩陀波崙に深く諸佛に著するが故に、知ること能はずして、而も大師に問ふ。今我が爲に諸佛來去の相を說きたまへ、我れ佛身を見て厭足なきが故に、常に諸佛を見ることを離れずと。

卷の第九十九

第八十九曇無竭品[一]

【經】爾の時、曇無竭菩薩摩訶薩、薩陀波崙菩薩に語つて言はく、「善男子よ、諸佛に從つて來る所なく亦た去つて至る所なし。何となれば、諸法の如は不動相にして、且つ諸法の如は即ち是れ佛なればなり。善男子よ、無生の法は無來無去なり、無生の法は即ち是れ佛なり。無滅の法は無來無去なり、無滅の法は即ち是れ佛なり。實際の法は無來無去なり、實際の法は即ち是れ佛なり。空は無來無去なり、空は即ち是れ佛なり。善男子よ、無染は無來無去なり、無染は即ち是れ佛なり。寂滅は無來無去なり、寂滅は即ち是れ佛なり。虛空性は無來無去なり、虛空性は即ち是れ佛なり。善男子よ、是の諸の法を離れて、更に佛なく、諸佛の如と諸法の如とは、一如にして分別なし。善男子よ、是の如は常一にして二なく三なし。諸の數法を出づ。所有なきが故なり。譬へば春の末月の日中熱する時、人あつて焰[二]の動くを見て之を逐ふて、水を求め得んと望むが如し。汝が意に於ては云何。是の水は何れの池、何れの山、何れの泉より來つて、今何れの處に去るや。若くは東海・西海・南海・北海に入るや」と。薩陀波崙の言はく、「大師よ、焰の中には尙は水すらなし、云何にしてか、當に來處、去處のあるべけん」と。曇無竭菩薩、薩陀波崙に語つて言はく、「善男子よ、愚夫は無智にして熱渴の爲に逼まられて焰の動くを見て、水なきに水の想ひを生ず。善男子よ。若し人あつて諸佛に來あり去ありと分別せば、當に知るべし是の人は皆な是れ愚夫なりと。何となれば、善男子よ、諸佛は色身を以ては見るべからず、諸佛の法身は無來・無去なり、諸佛の來處・去處も亦た是の如し。善男子よ、譬へば幻師が種種に、若くは象、若くは馬、若くは牛、若くは羊、若くは男、若くは女を幻作するが如し。是の如き等の種種の諸物を汝が意に於て云何。是の幻事は何の處より來り、去つて何の處に至るや」と。薩陀波崙の言はく、「大師よ、幻事は實なし、云何にしてか當に來去の處あるべき」と。「善男子よ、是の人が佛に來るあり、去るありと分別するも亦た是の如し。善男子よ、譬へば夢中に若くは象、若くは馬、若くは牛、若くは羊、若くは男、若くは女を見るが如きは、汝が意に於て云何。夢中に見る所は來處あり去處ありや不や」と。薩陀波崙の言はく、「大師よ、是の夢中に見る所は虛妄なり、云何んぞ當に來去あるべき。」「善男子よ、是の人が佛に來あり去ありと分別するも亦た是の如し。善男子よ、佛は說きたまはく、諸法は夢の如し。若し衆生あつて是の諸法の義を知らず、各字色身を以て佛に著せば、是の人は諸佛に來あり、去ありと分別す。諸法實際の相を知らざるが故なり。皆な是れ愚夫無智の數なり。是の人は數數五道に往來し、般若波羅蜜を遠離し、諸の佛法を遠離す。善男子よ、佛の說きたまはく、諸法は幻の如く夢の如し、若し衆生あつて實の如く知らば、

【一】または「說般若相」とも言ふ。
【二】焰。ここでは陽炎の意。

是の人は諸法は若くは來り、若くは去り、若くは生じ、若くは滅すと分別せず。若し諸法を若くは來り、若くは去り、若くは生じ、若くは滅すと分別せずんば、即ち能く佛の說く所の諸法實相を知るなり。是の人は般若波羅蜜を行じ、阿耨多羅三藐三菩提に近づく、名けて眞の佛弟子となす。虛妄にして人の信施を食することなく、是の人は應に修養を受けて、世間の福田となるべし。善男子よ、譬へば大海の水の中の諸寶は、東方より來らず、南方西方北方四維上下より來らざるが如し。衆生の善根の因緣の故に、海より此の寶を生ずるも、此の寶は亦た因緣なくして而も生ぜず。是の寶は皆な因緣和合より生ず。是の寶は若し滅するとも、亦た去つて十方に至らず。諸緣合するが故に有り、諸緣離るるが故に滅す。善男子よ、諸佛の身も亦た是の如く、本より業因緣の果報より生じ、生ずるに十方より來らず、滅する時も亦た去つて十方に至らず。但だ諸緣の合するが故にあり、諸緣の離るるが故に滅す。善男子よ、譬へば箜篌の聲に出づる時に來る處なく、滅する時に去る處なく、衆緣和合するが故に生ずるが如し。槽あり、頸あり、皮あり、絃あり、柱あり、棍あり。人あつて手を以て之れを鼓つに、衆緣和合して聲あり。是の聲は亦た槽より出づるにあらず、頸より出づるにあらず、皮より出づるにあらず、絃より出づるにあらず、柱より出づるにあらず、棍より出づるにあらず、亦た人の手より出づるにもあらず、衆緣和合して爾も乃ち聲あり。是の因緣離るる時は亦た去る處なし。善男子よ、諸佛の身も亦た是の如く無量の功德の因緣より生ず、一因一緣一功德によつて生ずるにはあらず、亦た因緣なきにもあらず、衆緣の和合あるが故にあり。諸佛の身は獨り一事より成るにあらず、來るに從る所なく、去るに至る所なし。善男子よ、當に是の如く諸佛の來相去相を知るべし。善男子よ、亦た當に一切法に來去の相なきを知るべし。汝若し諸佛、及び諸法の無來・無去・無生・無滅の相を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、亦た能く般若波羅蜜及び方便力を行ぜん。」爾の時に釋提桓因は天の曼陀羅花を以て、薩陀波崙菩薩摩訶薩に與へ是の言をなす、「善男子よ、是の花を以て曇無竭菩薩摩訶薩に供養せよ、我れ當に守護して汝に供養すべし。所以何んとなれば、汝の因緣力の故に今日、百千萬億の衆生を饒益して、阿耨多羅三藐三菩提を得せしむればなり。善男子よ、是の如き善人には甚だ遇ひ難しとなす。一切衆生を饒益せんが爲の故に無量阿僧祇劫の間諸の勤苦を受くればなり」と。薩陀波崙菩薩摩訶薩は釋提桓因の曼陀羅花を受け、曇無竭菩薩の上に散じて白して言さく、「大師よ、我れ今日より身を以て師に屬して供給し供養せん」と。是の如く三たび白し已つて手を合せて師の前に立つ。是の時に長者の女及び五百の侍女は薩陀波崙菩薩に白して言さく、「我等も今日より亦た身を以て師に屬せん、我等は是の善根の因緣を以ての故に、當に是の如きの法を得ること、亦た師の得る所の如く、師と共に世世に諸佛を供養し、世世常に師を供養すべし」と。是の時薩陀波崙菩薩は長者の女及び五百の女人に語つて言はく、「若し汝等誠心を以て我れに屬せば、我當に汝を受くべし。」諸の女の言はく、「我等は誠心を以て師に屬し、當に師の敎に隨ふべし」と。是の時に薩陀波崙菩薩及び五百の女人は並に諸の莊嚴の寶物、上妙の供具及び五百乘の七寶の車を曇無竭菩薩に奉上して白して言さく、「大師よ、我れ是の五百の女人を持して大師に奉給し、是の五百乘の車を師の所用に隨はしめん」と。爾の時に釋提桓因、薩陀波崙菩薩を讃して

言はく、「善い哉、善い哉、善男子よ、菩薩摩訶薩に一切の所有を捨つること應に是の如くなるべし。是の如く布施せば疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如く説法の人に供養を作さば、必ず般若波羅蜜及び方便力を聞くを得ん。過去の諸佛は、本と菩薩道を行ぜし時も亦た是の如く、布施の中に住して般若波羅蜜及び方便力を聞くことを得て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。」

爾の時、曇無竭菩薩は、薩陀波崙菩薩をして善根を具足せしめんと欲するが故に、五百乘の車と、長者の女及び五百の侍女とを受け、受け已つて還つて薩陀波崙菩薩に與ふ。是の時に曇無竭菩薩は法を説いて、日沒に起つて宮中に入る。薩陀波崙菩薩摩訶薩は是の念を作さく、「我れ法の爲の故に來る、應に坐臥すべからず。當に二事を以てすべし、(卽ち)若くは行じ、若くは立つて、以て法師の宮中より出でて法を説くを待たん」と。爾の時に曇無竭菩薩は七歲、一心の無量阿僧祇の菩薩三昧に入り、及び般若波羅蜜方便力を行ずるや、薩陀波崙菩薩も亦た七歲、經行し住立して、坐せず臥せず睡眠あることなし。欲恚惱なく、心に味に著せずして但だ曇無竭菩薩摩訶薩が何れの時にか當に三昧より起ち、出でて而も法を説くべきやを念ず。薩陀波崙菩薩は、七歲を過ぎ已つて是の念を作さく、我れ當に曇無竭菩薩摩訶薩の爲に、説法の座を敷くべし、曇無竭菩薩摩訶薩に當に上に坐して法を説くべし。我れ當に地に灑いで淸淨にし、種種の華を散じて、是の處を莊嚴すべし。曇無竭菩薩摩訶薩の當に般若波羅蜜及び方便力を説くべき爲の故なりと。是の時に薩陀波崙菩薩に、長者の女、及び五百の侍女と、曇無竭菩薩摩訶薩の爲に七寶の床を敷き、五百の女人は各各上衣を脫して以て座上に敷いて是の念をなす、曇無竭菩薩摩訶薩よ、當に此の座の上に坐して、般若波羅蜜及び方便力を説くべしと。薩陀波崙菩薩は座を敷き已つて、水を求めて地に灑がんとするも而も得ること能はず。所以何んとなれば、惡魔は隱蔽して水を現にさしめざればなり。魔は是の念をなす、「薩陀波崙菩薩は水を求めて得ず、阿耨多羅三藐三菩提を行ずるに、乃至一念の劣心異心を生ずれば則ち善根は增さず智慧は照さず、一切智に於て而も稽留あり」と。爾の時に薩陀波崙菩薩是の念をなす、「我れ當に自ら其の身を刺し、血を以て地に灑ぎ、塵土の來つて大師を、坋すことなからしむべし。我れ何ぞ此の身を用ゐんや。此の身は必ず當に破壞すべし、我れ無始の生死より已來、數數身を喪ふも未だ曾て法の爲にせずと。卽ち利刀を以て自ら刺して血を出して地に灑ぐ。薩陀波崙菩薩、及び長者の女並に五百の侍女も皆な異心なければ、惡魔も亦た便を得ること能はず。是の時に釋提桓因是の念を作さく、未だ曾てあらざる所なり、薩陀波崙菩薩の法を愛すること乃ち爾なり。刀を以て自ら刺し、血を出だして地に灑ぐに、薩陀波崙及び衆の女人の心動轉せず、惡魔波旬も其の善根を壞すること能はず、其の心堅固にして大莊嚴を發し、身命を惜まず、深心を以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量生死の苦を度せんと欲すと。釋提桓因は薩陀波崙菩薩を讃して言はく、「善い哉、善い哉。善男子よ、汝の精進力大に堅固にして動じ難きこと不可思議なり、汝が法を愛し、法を求むるは最も無上となす。善男子よ、過去の諸佛も亦た是の如く、深心を以て法を愛し法を惜み法を重じ、諸の功德を集めて阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。」薩陀波竭菩薩は是の念をなす、我れ曇無竭菩薩摩訶薩の爲に法座を敷き、掃灑淸淨にし已訖れり、當に何れの處に於て

か、好名の華を得て此の地を莊嚴すべき。若し曇無竭菩薩摩訶薩法座の上に座して法を說く時あらば、亦た當に華を散じて供養すべしと。釋提桓因は薩陀波崙菩薩の心に念ふ所を知り、卽ち三千石の天の曼陀羅華を以て薩陀波崙菩薩に與ふ。薩陀波崙菩薩華を受け已つて半を以て地に散じ、半を留めて曇無竭菩薩摩訶薩が法座の上に坐して法を說く時を待つて當に供養すべし。爾の時、曇無竭菩薩摩訶薩は七歲を過ぎ已つて、諸の三昧より起つて、般若波羅蜜を說かんが爲の故に、無量百千萬の衆に恭敬圍遶せられ法座の上に往いて坐す、薩陀波崙菩薩は曇無竭菩薩を見る時、心に悅樂を得ること譬へば比丘の第三禪に入るが如し。

【論】釋して曰はく、薩陀波崙菩薩は、諸法の空にして來去なきの相を知ると雖も、未だ能く深く入ること能はず、亦た種種の法門を解すること能はず、諸佛の身に於て恭敬深重なるが故に、(その)空なるを觀ずる能はず。(譬へば)大海の水波は其の力大なりと雖も、須彌山の邊に到れば、則ち退いて用ふることなきが如し。薩陀波崙菩薩も亦た是の如く、大空の智力ありと雖も、佛の所に到れば、則ち亦た用ふること無し。是の故に、曇無竭菩薩は今(薩陀波崙菩薩の)爲に說いて、「諸佛は從り來る所なく、去るに亦た至る所なし」と。此の中に、曇無竭は自ら因緣を說く、所謂、「諸法の如は不動の相なり、諸法の如は卽ち是れ佛なり」と。

問うて曰はく、何等か是れ諸法の如なるや。

答へて曰はく、諸法實相、所謂性空、無所得空等の諸の法門なり。

問うて曰はく、摩訶般若波羅蜜は佛法の大乘六波羅蜜の中に於て第一の法なり。若し佛なくんば、則ち般若を說くものなし。三十二相・八十隨形好・十力・四無所畏等は色無色等の淨妙の五衆和合す、是の故に名けて佛となす。五指の和合するを名けて拳となせども、拳無しと言ふことを得ざるが如し。名字は既に異り、形亦た異り、力用も亦た異れども、拳無しと言ふことを得ず。是の故に佛あるを知る。

答へて曰はく、然らず。佛法の中には二諦あり、世諦と第一義諦となり。世諦の故に佛は般若波羅蜜を說き、第一義諦の故に諸佛は空にして無來、無去なりと說くと言ふ。汝が說の如きは、淸淨の五衆の和合するが故に名けて佛となす。若し和合するが故に有るならば、是れ卽ち無となす。經の中に佛自ら因緣を說き給ふが如し。五衆は佛に非らず、五衆を離れて亦た佛

なし、五衆は佛の中に在ず、佛は五衆の中に在あらず。佛は五衆の有にあらず。何となれば、五衆は是れ五にして、佛は是れ一なり。一は五を作さず五は一を作さざればなり。又た五衆には自性なきが故に虚誑不實なり。佛自ら說きたまはく、「一切の無誑法の中にて我は最も第一なり、是の故に五衆は即ち是れ佛にあらず」と。復次に、若し五衆即ち是れ佛ならば、諸有る五衆は、皆な應に是れ佛なるべし。

問うて曰はく、是の難を以ての故に我れ先に說けり、「第一清淨の五衆三十二相等を名けて佛となす」と。

答へて曰はく、三十二相等は菩薩の時も亦たあり、何を以てか名けて佛となさざるや。

問うて曰はく、爾の時、(菩薩は)相好あつて身を莊嚴すと雖も、而も一切種智なし若し。一切種智にして第一妙色身の中にあれば是を即ち名けて佛となす。

答へて曰はく、一切種智は、般若の中に是れ寂滅の相にして無戲論なりと說く。若し是の法を得ば則ち無所得と名づけ、無所得の故に名づけて佛となす。佛は即ち是れ空なり。是の如き等の因緣の故に、五衆は即ち是れ佛なるを得ず、是の五衆を離れて亦た佛なし。所以何んとなれば、是の五衆を離れて更に餘法の說くべきもの無きが故なり。五指を離れて更らに拳法の說くべきなきが如し。

問うて曰はく、何を以ての故に拳法なきや。形も亦た異り、力用も亦た異るも、若し但だ是れ指なるは異るべからず。五指合するに因るが故に拳法生ず。是の拳法は無常生滅すと雖も、無と言ふことを得ず。

答へて曰はく、是の拳法若し定有ならば、五指も除いて應に更らに拳として見るべきものあるべし。亦た五指に因るを須ゐず。是の如き等の因緣をもて、五指を離れて更に拳あることなし。佛も亦た是の如く、五衆を離れて則ち佛あることなし。佛は五衆の中にあるにあらず、五衆は佛の中にあるにあらず。何となれば異は不可得の故なり。若し五衆は佛に異らば、佛は應に五衆の中にあるべし、但し是の事は然らず、佛は亦た五衆の中にあらず。所以何んとなれば、五衆を離れて佛なく、佛を離れて亦た五衆なければなり。譬へば、比丘は三衣鉢あるが故に、有りと言ふことを得べきが如し。但だ佛と五衆とは異を別つ

ことを得ず。是の故に佛に五衆ありと言ふを得ざるなり。是の如く、五衆に佛を求むるに不可得なるが故に、當に知るべし佛無しと。佛なきが故に無來無去なり。

問うて曰はく、若し佛なくんば即ち是れ邪見なり、云何んぞ菩薩は發心して作佛するを求むるや。

答へて曰はく、此の中に佛なしと言ふは、佛の想に著することを破するにして、無佛の想を取るとは言はざるなり。若し有佛すら尙ほ取らしめずんば何かに況んや無佛の邪見を取らんや。又、佛は常に寂滅にして無戲論の相なり。若し人、常寂滅の事を分別し戲論せば、是の人は亦た邪見に墮せん。是の有無の二邊を離れて、中道に處する、即ち是れ諸法實相なり。諸法實相は即ち是れ佛なり。何となれば、是の諸法實相を得るを名けて、佛を得となせばなり。

復次に、色等の法の如相は即ち是れ佛なり。色等の法の性空は是れ如相なり。諸佛の如も亦た性空なり。是を以ての故に、不來・不去・不生・不滅・法性・實際・空・無染・寂滅なり。虛空の性も亦た是の如く、無來無去如なり。乃至虛空性の如は佛の如なり。是の如は一にして二なく、三等の別異なし。此の中に自ら因緣を說く、何となれば諸の數法を出でて所有なきが故なり。如等の法は是れ實にして、是の中に憶想分別有ることとなし。相を取るが故に名字あり、名字の中に數あり。此の中に自ら因緣を說く、「空は實にあらず。所有なきが故なり」と。

問うて曰はく、若し是の法、無所有ならば云何にして見るべく、聞くべく、苦あり、樂あり、縛あり、脫あり等と、諸の異を分別するや。

答へて曰はく、此の中に曇無竭は自ら種種に分別して、譬喩もて說けり、所謂「春の末月に焰を見、乃至是の人は諸法の若くは來、若くは去を分別せざる」が如し。焰等の中には、實事なしと雖も、亦た能く人を誑はして自ら苦樂の事を生ずるが如し。諸法も亦た是の如く、空にして無所有なりと雖も、亦た能く人をして苦樂憂喜の事を得せしむ。夢等の法も亦た是の如し。

復次に、佛に二種の身あり、一には法身、二には色身なり。法身は是れ眞佛なり、色身は世諦の爲の故にあり。佛は法身の相の上に、種種の因緣もて諸法實相を說く。是の諸法實相も亦た無來無去なり、是の故に諸佛は從來する所なく、去つて亦た

至る所なしと說く。若し人、諸佛の法身の相を得ば、是を阿耨多羅三藐三菩提に近づくと名く。未だ一切智を得ざるが故に名けて近くとなす。相似するを以ての故なり。般若波羅蜜を諸法實相と名く。若し能く是の如く行ぜば、是を般若波羅蜜を行ずるとなし、眞の佛弟子なり。眞の佛弟子とは、諸法實相を得るを名づけて佛となす。諸法實相の差別を得るが故に、須陀洹乃至辟支佛大菩薩あり。須陀洹等乃至大菩薩は是を眞の佛弟子と名く。

「虛妄にして人の信施を食せず」とは、畜生に布施して百倍の果報を得と雖も、而も此の福は盡くることあり、量あり。衆生の生死を度すること能はず、故に名づけて虛食となす。須陀洹等乃至佛の諸の賢聖は、人の信施を受くるに、此の福果報は、乃ち涅槃に至るまで盡くることなく、無量なり。是の故に「虛妄にして人の信施を食せず」と說くなり。是の人は應に一切衆生の供養を受くべし。若し須陀洹にして、一切凡夫人の供養を受くべくんば、斯陀含は應に凡夫人乃至須陀洹の供養を受くべく、阿那含は應に凡夫人及び須陀洹斯陀含の供養を受くべく、阿羅漢は應に凡夫人須陀洹斯陀含阿那含の供養を受くべく、辟支佛は應に凡夫人及び須陀洹乃至阿羅漢の供養を受くべく、成佛に近き大菩薩は應に凡夫人及び聲聞辟支佛の供養を受くべし。「世間の福田となる」とは、種を良田に植ゆれば、成收必ず多きが如く、持戒禪定智慧の福田は衆生福を植ゆれば果を獲ること無量なり。上に諸佛の無來無去と說けり。薩陀波崙、及び諸の聽く者は意に謂へらく、「諸佛すら尙ほ無し、諸法も亦た應に皆な滅すべし」と、則ち斷滅に墮せん。是の故に今、因緣法の譬喩を說く、曇無竭は薩陀波崙に示して、汝の著する所の意の如く實有なりと謂はば、衆生を度することをなすなきが故に、因緣の和合に從つて則ち像現ずることあるなり。此の事を證明せんと欲するが故に譬喩を說く。大海の中に生ずる寶の如し。十方より來るにあらず、滅するも亦た去る所なく、亦た因緣なくしては生ぜず。四天下の衆生の福德の因緣を以ての故に、海に此の寶を生ず。若し劫盡き滅する時には亦た去る處なし。譬へば、燈の滅すれば焰の至る所なきが如し。佛身も亦た爾なり、初發心より種ゆる處の善根功德は、皆な是れ佛身相好の因緣なり。佛身も亦た自在ならず、皆な是れ本因緣に屬す。業果報の故なり。是の因緣を生じて久しく住すと雖も、性は是れ有爲法の故に必ず無常に歸す、散壞すれば、則ち身なし。譬へば、射を善くするの人の仰いで虛空を射るに、箭は去つて遠しと雖も必ず

當に地に墮つるが如し。諸佛の身も亦た是の如く、相好光明福德成就し、名稱無量にして、人を度すること限りなしと雖も、亦た磨滅に歸す。

問うて曰はく、若し衆生の福德の因緣の故に、海に珍寶を生ぜば、何を以てか近く衆生の處に生ぜずして、而も乃ち大海の得難き處に在るや。

答へて曰はく、海中にも亦た衆生あり、龍阿修羅等は是の寶を用ふればなり。

復次に、若し寶、人中の濁世に生ぜば、貪者は覆藏して人をして得せしめざらん。若し好世の時に珍寶自ら生ぜば人間に惜む者あることなけん。彌勒佛の時の如きは、珍寶も瓦礫の如し。懈怠懶惰にして、人は身を惜むを以て、强ひて願をなして樂を求む。是のの故に、寶は大海にあつて得ること能はず。若し大心にして身命を惜まず勤求する者は乃ち得。大海の水をば十方六道の國土に喩ふれば、諸の珍寶は卽ち是れ諸佛なり。珍寶の如きは一切衆生の爲の故に生ずるも、而も懈怠懶惰なる者は得ること能はざる所なり。諸佛も亦た是の如く、衆生の爲の故に世門に出づと雖も、懈怠小心にして身を貪り我に著する者は度することを得ず。所以何んとなれば、諸法は皆な衆緣の和合するより生ずればなり。衆生は二の因緣あるが故に得度す。一には內に正見あり、二には外に善く法を說く者あるなり。諸佛は善く法を說くと雖も、衆生は內に正見を具せざるが故に盡く度すること能はず、寶物は衆生の爲に出づと雖も、而も貧窮なる衆生有るが如し。諸佛も亦た是の如く、衆生の爲に出づと雖も、而も衆生は內に正見少きが故に、亦た度することを得ず。復た箜篌の譬喩あり。槽あり、頸あり、皮あり、絃あり、棍あるに、人有つて手を以て之を鼓つに、衆緣和合して而も聲あり。(是の)聲の如きは亦た衆緣の中に在るにあらず、(而も)衆緣を離れては亦た聲なし、因緣和合するを以ての故に聲有つて聞くべし。諸佛の身も亦た是の如く、六波羅蜜及び方便力の衆の因緣和合する邊より佛身を生ず。(佛身は)六波羅蜜等の法の中に在るにあらず、亦た六波羅蜜等の法を離るにあらず、聲は一の因緣を以てせず、亦た因緣無きにも非ざるが如し。佛身も亦た是の如く、無因緣に從はず、亦た少因緣にも從はず、諸の善法の因緣具足するが故に、諸の佛身を生ず。鏡中の像の如きは、衆の因緣和合するが故に有り、衆緣を離るるが故に無し。

諸佛も亦た是の如く、諸の因緣あるが故に出現し、諸の因緣散ずるが故に滅す。善男子よ、應に是の如く諸佛の去來の相を觀ずべく、一切諸法の相も亦た應に是の如く知るべし。曇無竭は薩陀波崙に語るらく、「善男子よ、汝能く諸法の相の不來不去を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得て退轉せず、亦た必ず能く般若波羅蜜及び方便力を行ずべし。何となれば一切法に障礙なきが故なり」と。

問うて曰はく、釋提桓因は何を以てか曼陀羅華を化作して薩陀波崙に與べきや。

答へて曰はく、釋提桓因は佛道を愛樂するが故に常に諸の菩薩を供養す。

復次に、釋提桓因は衆生を攝して佛道に入らしめんと欲するが故に、天王の身を現じて華を以て薩陀波崙に與ふ。薩陀波崙は一心に佛道を求むるが故に、諸天來つて供養し、衆生の(是を)見る者は亦た發心す。釋提桓因は衆生を引導せんが爲の故に薩陀波崙を供養するなり。

有人の言はく、「釋提桓因は深く薩陀波崙を愛敬し、上の品に來つて試み、試み已つて身體をして平復ならしめ、今、復た華を以て之に與ふ。釋提桓因の力は能く一切の人に華を與ふる(ことを得る)も、衆生は福力なきを以ての故に、設ひ與ふるも華は卽ち變壞すべし。薩陀波崙は福德を成就するが故に必ず變ぜざることを得、是の故に與ふ。若し一切の菩薩が師を供養する時には、盡く與へずとも應に供養者を守護すべし、先に已に因緣を說く、所謂肉を割き血を出して、試みて以て親舊を成すが故に守護するなり。

復次に、釋提桓因は此の中に、自ら因緣を說く、所謂、汝は因緣力の故に、百千等の衆生を饒益すと。

薩陀波崙は華を取つて其の意の如く曇無竭を供養す。薩陀波崙は初めは師の名を聞き、後には眼に見、法を聞いて疑を斷ずるが故に身を以て供養す。長者の女等も亦た薩陀波崙に效ひ、身を以て薩陀波崙に施せるなり。

問うて曰はく、薩陀波崙は身を以て曇無竭に供養す、曇無竭は福田大なり、女は何を以てか身を以て(曇無竭に)供養せずして而も薩陀波崙に與ふるや。

答へて曰はく、女人は智短にして著多きが故に、本師を捨てて他を供養することを用ゐず。又女身は罪穢なるを以て、心淸白なりと雖も、外に譏謗あるが爲の故なり。

問うて曰はく、長者の女は初め父母を捨てて已に薩陀波崙に屬す、今何を以てか復た身を以て施すや。

答へて曰はく、初に父母を捨て薩陀波崙と共に曇無竭に詣す。法の爲めの故に供養するも、亦た自ら身を以て曇無竭に施さず、父母も亦た(身を)以て薩陀波崙に施さず。今薩陀波崙が甚深の義を問ふに曇無竭は爲めに解說し、釋提桓因は歡喜して供養するを見る。是の故に觀喜の心を發し身を以て供養す。(是れ)自在の心を以ての故なり。又一切の女身は繫屬する處なければ則ち惡名を受く。女人の禮は幼なれば則ち父母に從ひ、少うしては則ち夫に從ひ、老いては則ち子に從ふ。是の長者の女等は、道路を共にして來ると雖も、久しく屬する所なきを得ず。是の故に自ら身を以て施し、而も是の願をなす、師の得る所の如きは、我等も亦た當に之れを得べしと。爾の時に薩陀波崙は、此の女を以て曇無竭を供養せんと欲し、其の嫌恨を慮るが故に問ふ。「汝等、實に誠心を以て我を供養すれば當に受くべし、汝、誠心ならば自ら心を用ゐずして、處分する所に隨つて無心の物の如くなるや」と。諸の女人等の言はく、「實に誠心を以てす。」卽時に薩陀波崙は長者の女幷に諸の侍女及び五百乘の車を以て曇無竭に奉上す。薩陀波崙は世の人の常に疑つて、其の長者を欺誑して諸女を將ゐ來ると謂ふを除かんと欲し。是の故に盡く以て布施し已つて著無きを明にす。

復次に、薩陀波崙は空中の聲に聞く所の如く、解を得て歡喜し、世人の貴ぶ所の如き內外の物を盡く以て供養す。深く檀波羅蜜門に入らんと欲するが故なり。釋提桓因は、薩陀波崙は貪愛等の煩惱は未だ盡きざるも、而も能く盡く內外を捨て、布施して復た遺餘なきを知るが故に、讃して善い哉と言ひ、過去の佛を以て喩となして難事を行ずるが故に得難き果報、所謂阿耨多羅三藐三菩提を得と(言ふ)。

問うて曰はく、若し曇無竭は薩陀波崙をして善根を具足せしめんと欲するが故に受くとせば、(善根とは所謂る檀波羅蜜を具足する事なり)何を以ての故に還たび薩陀波崙に與ふるや。

答へて曰はく、曇無竭は大智方便なり、薩陀波崙をして大に福德を得て而も失ふ所なからしむ。是を上受と謂ふ。薩陀波崙の至誠心の施は、諸の貪著を斷じて還たび福德の具足を得ることを望まず。曇無竭は思惟すらく、「薩陀波崙は遠くより來つて、而も五欲に於て心に染著せず。舊人の供養を善となす」と 是の故に還して與ふ。又た諸女が先きに身を以て薩陀波崙に上(たてまつ)るを聞けり。人は財物にあらず、其の本意を遂げんと欲するが故なり。又た是の諸女は世世に薩陀波崙の弟子たり。是の如き等の因緣の故に、還たび薩陀波崙に與ふるなり。

問うて曰はく、諸の大菩薩は法を說いて疲極すべからず、何を以てか宮に入るや。

答へて曰はく、世人の法に隨ふが故なり。又衆香城の中の衆生は常に道を求めず、或時は厭足して五欲の樂を受く、諸天は常に五欲を受くるが故に求道を妨廢す。有る菩薩は所住の國に於て常に勤めて精進して五欲を受けず。是の衆香城の衆生は、本より雜受を願ふ。曇無竭は其の志願に隨つて、之を引導せんと欲するが故に、其の國に生ず。是の故に衆生が法を聽いて疲惓せるを以て、起つて宮中に入れり。又未だ道を得ざる者は、法は微妙なりと雖も、常に聞くが故に疲厭の心を生ず、是の衆中にも是の人あるが故なり。又た曇無竭は、是の中に在る富樂を受くる人の法の故に、日沒すれば應に息むべし。是の時に薩陀波崙は是の念をなす、「我れは法の爲めに來れり。應に坐臥すべからず」と。

問うて曰はく、法の爲めの故に、何を以てか應に坐臥すべからざるや。

答へて曰はく、是れ定法なきも、此の人は大欲大精進にして法を恭するが故に、自ら是の念をなす、「我れ若し坐臥すれば、則ち是れ懶惰なり、我れ初めて法を求めし時は、身すら尙ほ惜まず、何に況んや疲惓せんをや」と。是の故に坐臥せず。大欲大精進と坐臥とは相違するが故なり。又坐臥は則ち勤力ならず。行立は則ち勤力精進なればなり。是の故に常に二威儀に住して、以て師の出づるを待つなり。

問うて曰はく、薩陀波崙は先に師が七歲(の間)出でざるを知るや不や。

答へて曰はく、初よりは知らざりしが故に、又復た曇無竭も亦た常に七歲、出でず。因緣を以ての故に、自ら誓つて七歲入

定す。薩陀波崙は自ら「師出でざれば終に坐臥せず」と誓ふ。又、大人人間の法すら尙ほ自ら違せず、何に況んや道法をや。又初めに法を求むる時すら尙ほ身を惜まず、今立つこと七歲なるも、何ぞ難しとするに足らんや。

問うて曰はく、人身は軟弱なり、何ぞ能く七歲(の間)坐せず臥せざるや。

答へて曰はく、是の時の人は壽命長く、復た七歲といふと雖も今の七日の如し。又好世の人の身は福德の力大なり、立つこと七歲なりと雖も以て難しとなさず。勤比丘の如きは年六十にして始て出家し、而も自ら結誓して「我が脇を席に著けず、要らず盡く聲聞の應に得べき所のことを得、乃至、六神通の阿羅漢を得て、四阿含の優婆提舍を作らん」と。今に於て大に世に行はる。此の人は惡世に於てすら尙ほ爾なり、何に況んや薩陀波崙は好世に生ずに於てをや。又身力は弱しと雖も、心强きを以ての故に能く其の事を辦ず。

復次に、一心に佛道を求むる者は、十方の諸佛の性ずる所にして、諸大菩薩、及び佛道を求むる諸天は其の氣力を益して圍遶し守護す。是の故に、住立すること七歲なりと雖も而も疲極せず。

問うて曰はく、曇無竭は三昧に入りて何を以てか乃ち七歲に至るや。

答へて曰はく、先に已に答ふ。好世の人は壽長くして七歲と雖も以て久しとなさず。又曇無竭の宮殿の婇女の微妙なる五欲は天と相ひ似たり。薩陀波崙等の新發意の者は、心未で柔軟ならざれば曇無竭を疑ひて空法を說いて離欲を讚歎すと雖も、其の心未だ捨つること能はざらん」と謂ふ。是の故に七歲、三昧して以て衆の疑を除かんと欲す。故に(薩陀波崙等は)貴敬の心を生じ、曇無竭が七歲、三昧して心口相應して、能く說き、能く行ずるを聞くや、則ち其の語を信受して、度し得べきこと易し。譬へば、癰瘡未だ熟せざれば、醫は則ち破らず、但だ藥を以て塗つて、熟せしむ。熟すれば則ち破ること易きが如し。

復次に、心に生ずる實樂を受けんと欲するが故に、無量の三昧に入る。

復次に、說法に二種あり、一には口說法、二には身現法なり。今は身を以て法を現はさんと欲するが故に無量の三昧に入り、衆生をして心を攝して、慧に入れば如實智を得ることを知らしむ。

「菩薩三昧」とは、菩薩義の中に說くが如し。「般若の方便力を行ず」とは、方便品の中に說くが如し。薩陀波崙は七歲の中に於て、三惡の覺觀を生ぜず、味を味はず、是の人未だ煩惱を破らずと雖も、而も諸の善法を集むるが故に、諸の煩惱を制して生ずることを得せしめず、但だ一心に「曇無竭は何れの時か當に出づべきや、我れ當に從つて般若を聞くべし」と念じ。七歲を過ぎ已つて是の念をなす、「我當に曇無竭のために坐處を敷いて掃灑し莊嚴すべし」と。

問うて曰はく、薩陀波崙は云何にして七歲を過ぎ已らば、曇無竭は當に出づべしと知るを得しや。

答へて曰はく、有人の言はく、「先に曾て七歲展轉して聞知す」と。有人の言はく、「曇無竭は初めに三昧に入る時、自ら說いて七歲を限りとなせり」と。釋迦文尼佛は阿難に「我れ一月二月、禪定に入らんと欲す」と告げたまひ、阿難は以て四衆に告げしが如し。

薩陀波崙は深く佛法を愛し、曇無竭を敬重するが故に、供養して說法の處を莊嚴す。出家の菩薩は但だ其の心を莊嚴し、師に詣して法を受け、在家の菩薩は則ち說法の處を莊嚴して華香もて供養す。

復次に、薩陀波崙は是の莊嚴をなし、曇無竭をして、其の法を愛し法を欲するの相を知らしめんと欲し、深心に信樂するが故に是の事を現ず。是の故に心を生じて、五百の女等と共に力を展べて掃灑し、自ら其の金銀珍寶を以て座に敷く、薩陀波崙等は自ら妙好の茵褥ありと雖も、愛法の情至るがための故に、身に著くる所の上衣を以て座に敷き、水を求めて地に灑がんとするに、魔は隱蔽するが故に、求むるも得ること能はず。此の中に自ら因緣を說く、魔は是の念をはす、『若し薩陀波崙、水を求めて得ずんば、其の心則ち劣らん。志願滿ぜざるが故なり。又自ら其の身を鄙しめて、「我れ福德薄きが故に、法を供養せんがために水を求むるも得ず」と。自ら輕んじ憂愁、心を覆ふを以ての故に、福德は增さず智慧は照さず』と。「明らかならず」とは、諸の憂愁煩惱が心を覆ふが故に、諸の福德智慧は能く照すこと能はざるなり。譬へば、日を障蔽するが故に其の照すこと明かならざるが如し。魔は其の心大にして沮壞すべからざるを知るも、但だ少しく沮壞して其をして稽留せしむ。爾の時に、薩陀波崙は自ら其の身を刺し、血を出して地に灑ぎ、以て塵を淹はんと欲す。人の血肉は臭しと雖も、其の至心に水を求めて

得ざるを以て、意に香臭好惡を分別せず。塵を淹はんと欲するが爲に身命を惜まざるなり。又薩陀波崙は深心に般若波羅蜜に愛著するが故に、愛惜する所なし。有人の言はく、「多くの諸天龍鬼神等あり、常に薩陀波崙に隨逐して、佐助し守護す。是の故に出づる所の血は變じて香水となること、羼提仙人の割截を被る時、血は化して乳となるが如し」と。又無量の福德を成就するを以ての故に、願に隨つて卽ち成就するなり。

問うて曰はく、若し福德成就し、願に隨つて卽ち得ば、魔は其の水を隱蔽すべからず。

答へて曰はく、是の新發意の菩薩は能く小願を成ずるも、未だ能く魔を卻くること能はず。此の中に薩陀波崙自の出血の因緣を說く、「我れ無始生死より已來、數數身を喪ふも、未だ曾て法のためにせず」と。

問うて曰はく、薩陀波崙は法を愛して、身を刺して血を出す、若し其の身死せば、誰か復た法を聽かんや。

答へて曰はく、是の事は破骨出髓の中に答ふるが如し。又此の中には諸天大菩薩が守護する故に、其をして死せざらしむ。又復た惡魔は其の心の、沮壞すべからざるを知らば、水は則ち還つて出でん。

「薩陀波崙等皆な異心なし」とは、人の初めて慈心を習ふが如き、衆生のため、及び般若波羅蜜のためにせんと欲するが故に身命を惜まざるも、旣に利刀を得て身を割くに、痛自ら逼るを以ての故に心に悔恨を生ず。是を異と名づく。是の菩薩は信力大なるが故に、阿耨多羅三藐三菩提の果報を得んと欲するが故に、是の苦を計らず、又深き悲心を以て衆生を愛念し、種種の苦惱を受くと雖も、以て難となさず。譬へば、慈母が子を愛するに、子のために長く勤苦不淨を受くと雖も、以て惡しとなさざるが如し。又復た諸法の實相畢竟空を見るが故に、是の身は但だ是れ虛誑の和合なるを知り、是の虛誑を破するが故に、身を割截する時も、阿耨多羅三藐三菩提を妨げず。「其の便を得ず」とは、人にして瘡あれば、則ち毒を受くるが如く、菩薩に若し貪欲憂愁の瘡あれば、魔は其の便を得るも、血を出だして地に灑ぎ、心に憂愁せざるを以ての故に、魔は便を得ず。薩陀波崙の心の如く五百の女人の心も、亦た是の如し。薩陀波崙を敬重するが故に、其の身を刺すを見ては、應に憂愁あるべきも、其の願を滿ずるを得るを以ての故に以て愁となさず。「爾の時に、釋提桓因、是の事を見已つて、未曾有なりと歎ず」とは、是

の人は未だ無生忍を得ず、諸の煩惱を未だ斷ぜざるも、法を供養せんがための故に、身命を惜しまず。諸の離欲の人の如く異(心)なく、其の身を割截すること草木を斷つが如し。初心にして既に爾り後心は轉た增さん。復次に、「未曾有」とは、此の中に釋提桓因自ら因緣を說く、「薩陀波崙の法を愛する乃ち爾なり。刀を以て自ら刺す」等なり。釋提桓因は是の心に歡喜を作し已つて讚して善哉と言ひ、其の法を愛し法を樂ひ勤心精進することを讚し、過去の佛を以て喩となす、「但だ汝のみ今辛苦するにあらず、過去の諸佛が般若を求むる時も亦た爾かなり」と。薩陀波崙は釋提桓因の其の心を安慰するを聞き已つて、火の酥を得て轉た更に熾盛なるが如く、是の念をなす「我れ既に座を敷き地に灑げり。當に何れの處に於てか、好名華を得て、法處を莊嚴することを得べき」と。

問うて曰はく、水を見ざる時に、何を以てか是の念をなさざりしや、「當に何れの處に於てか、水を得て地に灑ぐべきや」と。

答へて曰はく、薩陀波崙は先に水ある處は卽時に皆な無きを以て、魔の所作なることを知れり。是の故に自ら四大分の中に於て、水分を刺して地に灑ぐ、身中の水種多しと雖も、血は是れ命の所在なり。是の故に刺して以て地に灑ぐ。華は自らあるにあらず、曇無竭の出づる時は至らんとす。遠く求むるを容されず。又須むる所は復た多くして、當に以て遍ねく其の地を覆ふべきなり。是の故に、念を生じて得んと欲す。帝釋は其の念を知り、卽ち天華の中の妙なるものの、曼陀羅と名くるもの、三千石を以て之に與ふるに、以て事を周うするに足れり。帝釋が人の華を以て與へざる所以は、希有の心を發せしめんと欲するが故なり。薩陀波崙は華を受け已つて、分つて二分と作し、好きは留めて以て法を說く時に散じ、餘もて地を覆ふ。其の國の俗法は、華を以て地を覆ひ、其の上に行ぜしむるを以て、供養となす。爾の時に、曇無竭は其の先の要(誓)の如く、七歲を滿じ已つて三昧より起ち、無量百千の衆のために恭敬圍遶せられて直ちに法座に趣く。(そは)般若を說かんがための故なり。

問うて曰はく、若し諸の菩薩の微妙三昧の中に入らば、誰か能く起たしめんや。

答へて曰はく、行者は初めて入る時に、自ら限齊を作し、然して後入定す。時至れば、其の心自在に三昧より起つ。悲心の故に而も覺觀を生ず。一比丘の如きは滅受定三昧に入るの時、自ら期して犍椎を聞く時當に起つべしとなす、既に(定に)入り

已りし時、僧坊火を失し、諸比丘は惶懼として犍槌を打せずして去れり。爾の時に、十二歳を過ぎ已つて檀越更に和合し、衆僧は僧坊を起さんと欲して、方に犍槌を打つに、犍槌の聲を聞くや、起つて即ち身は散じて死す。後に諸の得道者の說くこと其れ此の如し。

復次に、有人の言はく、「法性生身の大菩薩は、諸佛の如く常に三昧に入つて散亂せる麁心なく、神通力を以ての故に能く法を說き、飛行して衆生を度脫す。世俗の法なるが故に三昧に出入するの相あり、是の故に微妙三昧に入ると雖も而も能く還出す。（そは）大悲心の牽くを以ての故なり。譬へば、咒術して龍を出すが如し。

「大衆圍遶す」とは是の內眷屬は恭敬し、散華燒香して隨從して出づるなり。「般若波羅蜜を說かんが爲の故に、般若波羅蜜を說く」とは、世諦の名字語言に依つて、衆生に第一義不動の相を示さんと欲するが故なり。薩陀波崙は曇無竭を見て、即ち清淨の歡喜を得、樂は其身に遍ずること比丘の三禪に入るが如し。所以何んとなれば、多欲の衆生は淨妙にあらずと雖も、猶ほ喜樂を得、何に況んや、眞の功德を見ることを得て、身を莊嚴する者をや。薩陀波崙は空中の佛從り、曇無竭を聞いて即ち大欲を生じ、諸の三昧を得て十方の諸佛を見たてまつり。復た十方の諸佛が先世の因緣を說くを聞くに、「唯だ曇無竭のあつて能く汝を度するのみ」と。是を聞き已つて其の心を增益し、渴仰して見んと欲す。是の故に中道にして身を賣つて供養せんと欲す。今衆香城に於て七歲、坐せず臥せずして曇無竭を見んと欲す。是の如く渴仰して欲樂し來ること久し。人の熱渴に逼まらるる如きは、濁煖の潦水を得るすら猶尙歡喜す、何に況んや、清冷の美水を得るに於てをや。旣に渴仰の情久しく、又曇無竭の功德は大なるを以て、是の故に悅樂す。

問うて曰はく、樂に四種あり、何を以てか但だ第三禪の樂を說いて、上地の定樂及び解脫樂を說かざるや。

答へて曰はく、欲界の衆生は三受の中に於て多く樂受を貪るを以て、涅槃の樂は無所なりと聞けば則ち心に樂喜せず。上の四禪は中に、苦樂を斷ずるが故に、心亦た樂しまず、第三禪の中の樂は樂の極なればなり。復た有人の言はく、「薩陀波崙新發意は未だ細深妙の定に入らざるが故に、曇無竭を見て大歡喜を發すこと、三禪の樂に似如す。薩陀波崙は自ら我の大歡喜を覺ゆるが故に、即時に喜を捨て、淸淨の法性を得て、遍身安樂なり。是の故に三禪の樂に以て喩となすなり。

卷の第一百

第八十九曇無竭品

【經】爾の時、薩陀波崙菩薩摩訶薩及び長者の女並に五百の侍女は、曇無竭菩薩摩訶薩の所に到つて天の曼陀羅華を散し、頭面に禮し畢つて退いて一面に坐す。曇無竭菩薩は其の坐し已るを見て、薩陀波崙菩薩に告げて言はく、「善男子諦かに聽き、諦かに受けよ、今當に汝が爲に般若波羅蜜の相を説くべし。善男子よ、諸法は等しきが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た等しと。諸法は離るるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た離ると。諸法は不動なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た不動なることを。諸法は無念なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無念なることを。諸法は無畏なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無畏なることを。諸法は一味の故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た一味なることを。諸法は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを、諸法は無生なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無生なることを。諸法は無滅なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無滅なることを。虚空は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを。大海水は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを。須彌山は莊嚴なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た莊嚴なることを。虚空は無分別の故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無分別なることを。色は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを、受想行識は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを。地種は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを。水種火種風種は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを。空種は無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無邊なることを。金剛の如く等しきが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た等しきことを。諸法は無分別なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無分別なることを。諸法の性は不可得なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜の性も亦た不可得なることを、諸法は無所有等なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無所有等なることを。諸法は無作なるが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無作なることを。諸法は不可思議なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦た不可思議なることを」と。是の時に薩陀波崙菩薩摩訶薩は即ち座上に於て諸の三昧を得、所謂、諸法等三昧・諸法離三昧・諸法無畏三昧・諸法一味三昧・諸法無邊三昧・諸法無生三昧・諸法無滅三昧・虚空無邊三昧・大海水無邊三昧・須彌山莊嚴三昧・虚空無分別三昧・色無邊三昧・受想行識無邊三昧・地種無邊三昧・水種火種風種空種無邊三昧・如金剛等三昧・諸法無分別三昧・諸法不可思議三昧なり、是の如き等の六百萬の諸の三昧門を得。

爾の時、佛、須菩提に告げたまはく、「我れ今三千大千世界の中に於て、諸の比丘僧の與に圍遶せられ、是の相を以てし、是の像貌を以て

し、是の名字を以てして般若波羅蜜を說くが如く、薩陀波崙も是の六百萬の三昧門を得、東西南北四維上下に恒河沙等の如き三千大千世界の中の諸佛が、諸の比丘のために恭敬圍遶せられ、是の如きの相を以てし、是の像貌を以てし、是の名字を以てして、是の摩訶般若波羅蜜を說くを見ること亦た是の如し。薩陀波崙菩薩は是れより已後、多聞・智慧は不可思議なること、大海水の如く、常に諸佛を離れず、有佛土の中に生じ、乃至夢中にも、未だ會つて佛を見ざる時なく、一切の衆難は皆な悉く已に斷し、佛の在所する土に願に隨つて往生す。須菩提よ、當に知るべし、是の般若波羅蜜の因緣は、能く菩薩摩訶薩の一切の功德を成就し、一切種智を得ることを。是を以ての故に、須菩提よ、諸の菩薩摩訶薩、若し六波羅蜜を學ばんと欲し、深く諸佛の智慧に入らんと欲し、一切種智を得んと欲せば、應に是の般若波羅蜜を受持し讀誦し正憶念して、廣く人の爲に說き、亦た經卷を書寫し、香華乃至伎樂を以て供養し、尊重し、讃歎すべし。何となれば般若波羅蜜は是れ過去未來現在の十方の諸佛の母にして、十方の諸佛に尊重する所なるが故なり。

【論】釋して曰はく、曇無竭は既に出でて法座の所に至つて已に勝る者なきを遍く觀じて、是に於て坐せり。爾の時、薩陀波崙菩薩は坐、已に定まるを知り、曇無竭の所に到つて、頭面に足を禮して一面に坐す。禮に三種あり、一には口禮、二には膝を屈するも頭を地に至らしめず、三には頭を地に至らしむ、是を上禮と爲す。人の一身は頭を最上となし、足を最下となす、頭を以て足を禮するは、恭敬の至なり。曇無竭其の坐し已るを見て、(その)遠より來つて身命を惜まず、種種に勤苦するは法を聞かんと欲するが爲なることを知る。初めて相見る時は、日垂れて沒せんと欲せしより、少時、法を聞き、曇無竭は日沒を以ての故に起つて宮中に入れり。今法のための故に、七歲(の間)渴仰して異心を生ぜず、(曇無竭が)出でんとするに垂たる時、血を以て地に灑ぎ、其の法のために身命を惜まず、其の心退かず、決定して疑なく、敎化を受くるに堪ふることを知る。是の故に告げて言はく、「善男子よ、一心に諦かに聽け。上に諸佛の來去を疑ふこと已に斷じ、今は但だ甚深の般若波羅蜜を聞かんと欲するのみ。是の故に爲に般若波羅蜜の相を說かん」と。般若波羅蜜の相とは、先に諸法平等の義の中に說けるが如し。或は有人の言はく、「般若波羅蜜の力の故に諸法は皆な平等なりと觀ず、諸法の性は性自から平等なるにはあらず」と。是の故に曇無竭の言はく、「諸法平等なるが故に般若波羅蜜は平等なり。所以何んとなれば、因果相似するが故なり。初めに諸法の平等を觀ずるは是れ因なり、決定して心に般若波羅蜜を得るは、是れを果と爲す」と。

問うて曰はく、諸法平等を觀ずるは卽ち是れ般若なり、般若は卽ち是れ平等なり。何を以てか分別して因果となすや。

答へて曰はく、般若及び諸法は一相にして二なく別なしと雖も、行者の初めて觀ずる時には是れ因にして、觀じ竟れば名けて果となす。須陀洹道に向を得るが如し。又、有漏の五衆の如く、因の時を集と名け、果の時を苦と名く。色等の一切の法、平等ならば、即ち是れ般若波羅蜜の平等なり。

問うて曰はく、應に般若波羅蜜の相を說くべし、今、何を以てか平等を說くや。因が不平(等)なるが故に平(等)あり、因平(等)の故に不平(等)あり、般若の中に於ても亦た一相ならず、亦た異相ならず。汝何を以ての故に一相を取らんと欲するや。

答へて曰はく、般若波羅蜜は甚深微妙にして、方便を以て解くにあらざれば則ち解する者なし。是の故に若し不(平)等を分別すれば、則ち諸の煩惱を生じ三毒增長す。所謂、怨を憎み親を愛し、善を愛し不善を憎む。菩薩は是の二等の中に住し、一切法を觀ずるに皆な平等なり。衆生が(平)等の中に住すれば、怨親憎愛は皆な悉く平等なり。福德の門を開き、諸の惡趣を閉づ。法の等の中に住すれば、一切法の中に於て、憶想・分別・著心・取相、皆な除滅して、但だ諸法の空を見る。空は即ち是れ平等なり。人あり、是の諸法平等の空を得て、直ちに菩薩道に趣きて空に於て戲論せず。人あり、平等を得と雖も、而も戲論を生ず。若し都て空なるを觀ずれば、是の如きの失あり。是の如きの人は、平等に於て即ち是れ不(平)等なり、是の故に此の中に眞の平等の爲めの故に、般若波羅蜜等を說く。是れ戲論にあらずして、平等・不平等の二邊を離る、是れ般若波羅蜜の相なり。

問うて曰はく、平等なれば、般若波羅蜜の相に於て已に具足す。何を以ての故に、更に「離等は是れ般若波羅蜜の相なり」と說くや。

答へて曰はく、經の中には但だ諸法は等なるが故に、般若も等なりと說く。行者は是の平等の相を取つて而も著を生ず。是の故に般若波羅蜜は平等の相にして自性を離ると說く。色等の諸法は自相を離るるが故なり。離の義は相無相品の中に說けるが如し。此の諸法平等を得るや、又、平等の離に於て空の中に安住す。空の中には則ち動ぜず、戲論も動ずこと能はず、諸の煩惱の山も亦た動ずること能はず、無常の時も亦た動ずること能はず、所以何んとなれば、一切法に於て實相を得るが故なり。

菩薩は是の二空に住して、不動般若波羅蜜を得ば、是れ則ち究竟なり。若し念あらば卽ち是れ相著する處あり、是の故に諸法無念と說く。故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦た無念なることを。無動の相は是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜の諸の相、滅するが故なり。若し是の般若を念ぜざれば、或は迷悶して趣向する所なし。戲論ある者は、大衆の中に在りて則ち怖畏を生じ、或は涅槃の中に於て了ぜざるが故に亦た怖畏を生ず。是の故に無怖畏の相、是れ般若波羅蜜なりと說く。是の人は決定して諸法の相を取らずと雖も、而も深く法性に入るが故に、大衆の中に於て諸相を難論する者あるも、心に畏る所なし。諸法に於て無相を得るが故なり。又、無生法忍に入るの時、一切法の不可得を知る。是の中に於ても、亦た畏る所なし、所以何んとなれば、是の菩薩は善く一切法に通達するが故なり。

復次に、一切法は一相にして所謂、性空なり。是の故に般若波羅蜜は一切法に隨ふ、故に亦た性空も一味なり。

問うて曰はく、上に已に諸法平等と說けり。今は何を以てか、更らに一味を說くや。

答へて曰はく、空は或る時は味あり、或る時は味なし。若し行者、諸見の爲に相を取りて好醜を分別して籌量するに、爾の時に是の諸法平等の空を得れば、心大に歡喜するが故に名けて味となす、(譬へば)人が熱渴のために逼まらるるに、淸冷の水を得ば、以て眞味無比と爲すが如し。時に隨つて用ふるが故に味と名く。眞實畢竟空には則ち味も不味もなし。

復次に、一味とは、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、緣ずる所、觀ずる所は皆な一味と爲る。空の智力大なるが故に餘法皆な隨つて空となる。譬へば石蜜を煑て、熟せんとする時、異物和合すと雖も、皆な石蜜となるが如し。又、大海に百川之に歸して皆な一味と爲るが如し。所謂畢竟空味なり。色等の諸法も亦た是の如く、凡夫の心中は各各別異なるも、般若波羅蜜の中に入れば、皆な一味となる。

「邊を名けて相となす。若くは有、若くは無なり。實に色等の諸法を觀ずるに有にあらず、無にあらざるが故に無相なり。無相は卽ち是れ無邊なり、是を觀じ已れば、卽ち是れ無邊般若波羅蜜なり。

復次に、有人の言はく、「邊に二種あり、常邊と斷邊、世間邊と涅槃邊、惡邊と善邊等なり。此の中には是の如き等の諸邊な

きが故に、名づけて無邊般若波羅蜜となす」と。

復次に、有人の言はく、「邊をば前際後際と名く。世間は無始なるが故に前際なく、無餘涅槃に入るが故に前際あり、復た更に出でざるが故に後際なし」と。是の如く等に、諸邊を分別し、世間に著するが故に涅槃を畏る。是の故に般若波羅蜜の中には是の一切の邊なく、但だ諸法實相を聞いて入ることなく、出づることなし。

問うて曰はく、諸法の平等、諸法の離は皆な是れ無邊なり。何を以てか復た別說するや。

答へて曰はく、人あり、諸法の平等を知り、諸法の離を知れば、則ち說くことを須ゐず。若し人ありて、相を取りて是の一味に著するが故に無邊を說く。曇無竭は但だ薩陀波崙のための故にのみ說くに非ず。薩陀波崙も亦た但だ自のための故に問はず。但だ衆生に種種の心、種種の行あるがための故に、般若波羅蜜の相の中に於て略して無生無滅を說くなり。先に種種の因緣もて生滅を破する中に說けるが如し。虛空の無邊は摩訶衍の虛空譬喩の中に說くが如く、「大海水の無邊」「須彌の莊嚴」は先に未だ說かざりしが故に、今當に略して說くべし。

問うて曰はく、虛空は無爲にして常法なるが故に、其の邊を得る者なければ、無邊と言ふべし。大海水は四天の中にあつて、須彌山を遶りて由旬の數量あり。人あつて能く渡る、何を以てか無邊と言ふや。

答へて曰はく、無邊に二種あり、一は實の無邊なり。二は人の到ること能はざるが故に無邊なり。海に亦た二種あり、一は渡るべし。二は須彌山を遶つて九寶山の裏にあり。廣さ八萬二千由旬なり、世間の人は(その)邊を得ること能はざるが故に、無邊と言ふ。小海は船の力もて渡るべく、大海水は船の力にては渡るべからず、唯だ神通あるもののみ能く渡るが如し。外道凡夫の如きは、能く禪定の船を生じて欲界と色界との海は渡るも、無色界は大海の深廣なるが如く、則ち渡ること能はず。我心を破すること能はざるが故なり。諸の賢聖人は智慧禪定の翅力もて、諸法の邪相を破して實相を得るが故に能く渡る、是の故に大海の譬喩を說くなり。

問うて曰はく、須彌山は一色なり、何を以てか莊嚴と言ふや。

答へて曰はく、外書に須彌山は一色にして、純ら是れ黄金なりと説くも、六足阿毘曇の中には、「須彌山の四邊は各一寶を以て成り金・銀・頗梨・琉璃もて莊嚴せり。諸鳥の若きは(その)所至の方に隨つて各其の色を同うす。難陀婆難陀龍王の兄弟が身を以て圍遶すること七匝なり。山の頂に三十三天宮あり、其の城七重にして名けて憙見となす。九百九十九門あり、一一の門の邊に皆な十六の青衣大力の鬼神あつて城中を守護す。高處に殿を作る、名けて最勝と曰ふ。四邊に四大園有つて四天王のある在り。四邊に山あり、遊乾陀と名く、各の高さ四萬二千由旬なり、四天王其の上を治む。四大海水、諸の阿修羅宮及び諸の龍王の宮殿、遊乾陀等の九寶山は日月五星二十八宿及び諸餘の星、圍遶莊嚴す。是の如き等の種種に雜飾し以て莊嚴をなし、之を視るに厭ふことなし」と説く。般若波羅蜜も亦た是の如し。六波羅蜜の果報の故に轉輪王・梵釋天王・淨居天王・大自在天となる。是の如き等の果報は、般若波羅蜜を行じて、未だ具足せざる時に此の果報莊嚴を受く。般若波羅蜜を具足する時には、則ち須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道・阿毘跋致の菩薩、諸佛道果の莊嚴あり。須彌山の上下に皆な莊嚴あるが如く、般若波羅蜜の莊嚴も亦た爾なり。未だ具足せざる時は、諸の天王等の莊嚴、具足し已れば諸道果を莊嚴あり。

「須彌山の如し」とは、劫初に立つ時には四邊の大風、地の精味を吹き聚めて積んで須彌山をなす、更に風あり、吹いて堅からしめ、而して寶を成ず。般若波羅蜜も亦た是の如く、一切善法の中にて第一に堅實牢固なるもの和合して以て般若となる。須彌山の如きは、四邊に大風吹けども、大海水の波も動かすこと能はざる所なり。般若波羅蜜も亦た是の如く、邪見の外道の戲論及び諸の魔民の動かすこと能はざる所なり。須彌山頂の四園の如きは、諸天の到る者は種種の樂を受く、般若も亦た是の如く、行者能く般若の頂きに登れば、四禪等の諸定の園の中に到つて種種の樂を受く。

復次に、有人の言はく、「須彌山に衆鳥到れば皆な同じく一色なり、般若波羅蜜も亦た是の如く、諸法(その)中に入れば、皆な同じく一相にして所謂無相なり。

「虛空に分別なきが如し」とは、虛空には是れ內、是は外、是は遠、是は近、是は長、是は短、是は淨、是は不淨等の分別なし。般若波羅蜜も亦た是の如く、諸法は般若の中に入れば、亦た內外、善不善等の分別なきなり。

「五衆の無邊なるが如し」とは、五衆は常に遍ねく世間に滿つ、般若波羅蜜も亦た是の如く、五衆を遠離せず、五衆の實相は、即ち是れ般若波羅蜜なり。復次に、色等の法の如きは、分析破裂して乃至微塵に至れば則ち無方なり、無方なるが故に無邊なり。色法無く形無きが故に此彼なし、此彼なきが故に無邊なり。般若波羅蜜も亦た是の如く、一切法に於て、色を分別して乃ち微塵に至り、無色法を分別して乃ち一念の中に至るも、決定して常樂我淨あるを見ず。是の故に色無邊と說き、かるが故に、般若無邊と說く。乃ち虛空に至るまでの六種も亦た是の如し。

「如金剛等」とは、天王の執る所の金剛の如きは、憎なく愛なく、所用の處に隨つて、摧碎せざることなし。諸佛の一切智の前心は、此の心中の三昧は能く一切結使の煩惱顚倒及び習を斷じ、皆な滅するが故に、名けて如金剛となす。如金剛三昧相應の智慧は、一切法皆な平等なるを觀ず。般若波羅蜜の諸法平等を觀ずるも亦た是の如し。何となれば、般若は先づ諸法の平等を觀じ、然して後に是の三昧を得ればなり。

「諸法無分別」とは、世間の凡夫は煩惱力の故に、種種に諸法を分別すれど、諸法の實相を得れば則ち皆な破壞變異す。是の故に聖人は般若波羅蜜を得るに、憶想分別の諸法に隨はずして空、無相、無作三昧の中に入る。若し諸法の變異を得る時も則ち憂愁せず。(何となれば)先より來かた、分別して諸法の相を取らざるを以ての故なり。

「諸法の性不可得」とは、一切の法は皆な因緣和合より生ず、因緣なくして有ることとなし。若し少因緣にして起るとも、若し因緣より生ぜば即ち自性なし。自性とは本有決定の實事に名く。若し性は因緣和合の邊より生ぜば、當に知るべし、未だ和合せざる時は則ち無きことを。若し先きに無にして今因緣和合よりして有るならば、則ち性なきことを知る。若し因緣よりして性を生ぜば、性は即ち是れ作法なり。性は不相待、不相因に名く。常に應に獨り有るべし。是の如く有爲法は則ち無なり。是の故に、一切諸法の性は不可得なりと言ふ。般若波羅蜜の性も亦た爾なり。

「諸法は無所有等の故に」とは、諸法の性は不可得なるが故に、衆の因緣も亦た不可得なり、衆の因緣も亦た不可得なるが故に、皆な是れ無所有なり、無所有の中に入るが故に、則ち皆な平等なり。所以何んとなれば、有の故に分別あり、無の故に分

別なし。草香と栴檀香との燒く時は分別あり、滅する時は分別なきが如し。

「諸法無作」とは、衆生は空、法は空なるが故に則ち皆な無作なり。衆生の所作とは、所謂、十善十不善等の法なり。作とは、所謂火は然え、水は流れ、風は動き、識は能く識り、智は能く知る。是の如く、法には各各に自から力有り。衆生なく、乃至、知者見者なく、色等乃至一切種智なきことは、已に先に破せり。衆生を破するが故に、作者なく、法を破するが故に、所作なし。但だ凡夫人は顚倒が覆ふが故に、我に所作有りと言ふなり。

「諸法不可思議」とは、色等の一切法は、若くは常、若くは無常、若くは苦、若くは樂、若くは實、若くは空、若くは我、若くは無我、若くは生滅、若くは不生滅、若くは寂滅、若くは不寂滅、若くは離、若くは不離、若くは有、若くは無等を決定すること得ず。種種門の分別も亦た是の如く思議することを得べからず、所以何んとなれば、是の法は皆な心中の憶想分別より生じて亦た決定すべからざればなり。一切法の實性は皆な心心數法を過ぎ、名字語言の道を出づること、前品に說くが如し。一切諸法の平等は一切の賢聖も行ずること能はず、到ること能はず、是の故に不可思議なり。般若波羅蜜も亦た爾なり、是の法を觀ずるが故に生ず、是の時に、薩陀波崙菩薩は卽ち坐上に於て諸の三昧を得。

問うて曰はく、薩陀波崙は先に已に諸法の空相を知る、今は種種に勤苦し住立すること七歲にして曇無竭を見て、何等の利益を得たるや。

答へて曰はく、薩陀波崙は先に諸佛を見て諸の三昧を得たれど、般若波羅蜜を貴重して著相を生ぜり。今曇無竭は七歲にして定より起ち、爲に般若を說いて其の著心を破せり。一切の法性は自ら空なり、般若波羅蜜あつて其れをして空ならしむるにあらず。是の故に諸法の等を說く、故に般若波羅蜜の等は諸法の離相乃至諸法不可思議の故なり。般若は不可思議なれど、餘法を輕賤して般若を貴重せしむるにはあらず。何となれば、般若に因るが故に更に垢著を生ぜしめざればなり。般若波羅蜜は畢竟清淨にして饒益する所多しと雖も、復た相を取つて著心を生ず可からず。熱する金の如し。好もしと雖も手に捉ふるべからず。薩陀波崙は是の敎化を得て般若の中の著心を斷じ、卽ち諸法等の三昧を得て句句解說す。散亂心の中には但だ智慧のみあ

つて、三昧と名けず。今師より聞き已つて一心に思惟するを名けて三昧となす。心を攝して散ぜされば智慧は變じて三昧と成る。風中の燈は能く明かに照すこと能はざるも、靜室にあつて門を閉づれば明は乃ち遍ねく照すが如し。先きには已に欲の界心散亂するが故に智慧の力未だ成就せず、今は攝心の中に入りたれば聞く所の諸法を皆な三昧と名け、能く諸の煩惱等及び魔の人民を破す。水寒けれども風未だ至らざれば未だ氷とならずして則ち堅用なし、若し凍氷と成れば能く踏む所あるが如し。是の如き等の六百萬の三昧門を得て、薩陀波崙は曇無竭の說く所の法を聞くことを得、諸法の中の大智慧明を得たり。所謂種種の諸法の實相の門、諸法の平等なり、平等は是れ智慧なり、薩陀波崙の禪定の心中に入つて變じて三昧となる。今三昧智慧を說かんと欲す。(それは)今世後世の果報の故なり。

爾の時、佛須菩提に告げたまはく、我れ今大衆の中にありて般若波羅蜜を說くに、是の相を以てし、是の像貌を以てし、是の名字を以てして般若波羅蜜を說くが如く、薩陀波崙は曇無竭より是の三昧を得。三昧の中に於て、十方の佛を見。大衆の中にありて、般若を說くも亦た是の知し。須菩提よ、薩陀波崙は是より以後、深く法を愛樂するが故に、多く諸經を集めて、廣く誦し多く聞くこと、阿難が佛の所說を皆な能く持つが如し。薩陀波崙も亦た是の如く、多聞の智慧は不可思議にして、大海水の如く、卽ち是の世に於て常に佛を離れず、是の如き等を名けて今世の果報となす。身を捨てて常に有佛の國の中に生じ、好んで念佛三昧を修行するが故に、乃至夢中にも初めて佛を見ることを離れず。地獄等の諸難皆な已に永く絕し、意に隨つて諸佛の國土に往生す。其の深く般若波羅蜜に入りて無量の功德を集むるを以ての故に業に隨つて生ぜず。薩陀波崙は一佛土より一佛土に至つて諸佛を供養し、衆生を度脫し、無量の功德を集む。譬へば、豪貴の長者が、一會より一會に至りて乃至今は大雷音佛の所にありて淨く梵行を修するが如し。若し般若波羅蜜を求めんと欲するあらば、當に薩陀波崙菩薩の如く、堅正一心にして傾動す可からず。「是の故に當に知るべし、般若波羅蜜の因緣の故に一切の功德を成就す」とは、諸の菩薩等、般若を得る者は貪欲瞋恚等の在家の罪垢と邪疑、戲論等の出家の罪垢とを皆な悉く除滅して心淸淨なることを得。心淸淨なるが故に、一切の功德を成就することを得。「一切種智を得る」とは、所謂阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。「六波羅蜜」とは、初地

より乃ち七地までは無生法忍を得、八地九地十地は是れ深く佛智慧に入り、一切種智を得て作佛を成就し。一切法に自在を得る者なり。皆な應に(般若を)受持し、乃至華香伎樂(もて供養)すべし。

須菩提は、常に空を樂しみて行ずと雖も、佛と共に般若を説き、又無諍三昧を得るが故に應に囑累すべからず。阿難は聞持陀羅尼を得て、又常に世尊に親近するが故に廣く囑累す。

第九十囑累品

【經】爾の時、佛阿難に告げたまはく、「汝が意に於て云何。佛は是れ汝の大師なりや不や、汝は是れ佛弟子なりや不や。」阿難の言さく、「世尊よ、佛は是れ我が大師、脩伽陀は是れ我が大師なり、我は是れ佛弟子なり」と。佛の言はく、「是の如し是の如し。我は是れ汝の大師にして、汝は是れ我が弟子なり。若し弟子として應に作すべき所の者は汝已に作し竟る。阿難よ、汝身口意の慈業を用つて供養供給すべし。我れ亦た常に我が意の如くして違失あることなからん。阿難よ、我が身は現にあり、汝愛敬し供養供給して心常に清淨なり。我が滅度の後は、是の一切の愛敬・供養・供給の事は、當に般若波羅蜜を愛敬し供養すべし。乃至第二第三も般若波羅蜜を以て汝に囑累す。阿難よ、汝忘るること莫れ、失ふこと莫れ、最後斷種の人となること莫れ。阿難よ、爾所の時に隨つて般若波羅蜜は世にあり、當に知るべし、爾の時、佛、世にあつて法を説くことあるを。阿難よ、若し般若波羅蜜を書し、受持し讀誦し正憶念して人の爲に廣く説き、恭敬し尊重し讃歎し、華香・幡蓋・寶衣・燈燭を以て種種に供養することあらば、當に知るべし是の人は佛を見ることを離れず、法を聞くことを離れず、常に佛に親近すと。

佛、般若波羅蜜を説き已りたまふに、彌勒等の諸の菩薩摩訶薩、慧命須菩提・舍利弗・大目犍連・摩訶迦葉・富樓那彌多羅尼子・摩訶倶絺羅・摩訶迦旃延・阿難等並びに一切の大衆、及び一切世間の諸天・犍闥婆・阿修羅等、佛の所説を聞いて皆な大に歡喜す。

【論】問うて曰はく、佛は已に法愛を斷じ、乃至一切種智、涅槃に著せず相を取らず、今何を以てか種種の因縁を以て是の法を囑累し、愛著に似たるが如くなるや。

答へて曰はく、諸佛の大慈悲心は初發意より已來た乃至涅槃門に到るまで常に捨離せず、娑羅雙樹の間に於て、金剛三昧を以て衆生の爲に身を碎くこと麻米の如くす。何に況んや經法は饒益する所多くして、而も囑累せざらんや。又阿難は是れ未だ

欲を離れざるの人にして、未だ盡く般若波羅蜜の力勢果報の利益する所多きを知らず。是を以て慇懃に「汝に囑累す、當に好く受持して、忘失せしむることなかるべし」と。是の故に佛は一切法に於て憎愛なく、常寂滅相なりと雖も、而も是の般若を囑累す。

問うて曰はく、阿難は是れ聲聞の人なり、何を以てか般若波羅蜜を以て囑累し、而して彌勒等の大菩薩に囑累せざるや。

答へて曰はく、有人は言ふ「阿難は常に佛の左右に侍し、（佛の）須むる所を供給し、聞持陀羅尼を得て、一たび聞いては常に失はず、旣に是れ佛の從弟なり。又多知多識にして名聞廣く普く四衆の所依たり、是れは能く佛の轉法輪に隨ふ第三の師なり。佛は舍利弗の壽短くして早く滅度せんことを知るが故に囑累せず。又阿難は是れ六神通三明にして共解脫し、五百の阿羅漢の師なり。能く是の如く利益する所多し、是の故に囑累す。彌勒等の諸大菩薩は、佛の滅度の後各各分散して隨所に應に度すべき所の衆生の國土に至る。彌勒は兜率天上に還り、毘摩羅詰、文殊師利も亦た應に度すべき所の衆生の處に至る。佛は又た是の諸の菩薩は深く般若波羅蜜力を知るを以て、苦んで囑累することを須めず。阿難は是れ聲聞の人にして小乘法に隨ふ、是の故に佛は慇懃に囑累す。

問うて曰はく、若し爾らば法華經の諸餘の方等經は、何を以てか喜王（及び）諸の菩薩等に囑累せしや。

答へて曰はく、有人は言ふ、「是の時に佛は甚深難信の法を說き聲聞の人は在らざりき。又佛は不可思議解脫經を說くが如きは五百の阿羅漢は佛邊にありと雖も而も聞かず、或る時は聞くを得れども而も用ふること能はず、是の故に諸の菩薩に囑累せり」と。

問うて曰はく、更に何の法が甚深にして般若に勝るものありて、而して般若を以て阿難に囑累し、而して餘の經をば菩薩に囑累せるや。

答へて曰はく、般若波羅蜜は祕密の法にあらず。而して法華等の諸經には阿羅漢の決を受けて作佛するを說き、大菩薩は能く（是れを）受持し用ふ。譬へば大藥師の能く毒を以て藥となすが如し。

復次に、先に說くが如く、般若に二種あり。一には聲聞と共じて說くもの、二には但だ十方の十地に住する大菩薩の爲に說くものにして、九住の所聞にあらず、何に況んや、新發意の者をや。復た九地の所聞、乃至初地の所聞ありて各各不同なり。般若波羅蜜は總相は是れ一にして而も深淺異あり、是の故に阿難に囑累するに咎なし。

問うて曰はく、先に阿閦佛品の中に囑累を見る、今復た囑累す。何等の異りありや。

答へて曰はく、菩薩道に二種あり、一には般若波羅蜜道、二には方便道なり。先の囑累とは、般若波羅蜜の體を說かんが爲にして竟り、今は衆生をして、是の般若の方便を得せしめんとして說き竟るを以て囑累す。是れを以ての故に、阿閦佛が後に漚和拘捨羅を說く品を見るに、般若波羅蜜の中に方便ありと雖も、(又)方便の中に般若波羅蜜ありと雖も而も多に隨つて名を受く。般若と方便とは本體是れ一なり、用ふる所の少しく異るを以ての故に別に說く。譬へば、金師が巧方便を以ての故に、金を以て種種の異る物を作るが如し、皆な是れ金なりと雖も而も各名を異にす。菩薩は是の般若波羅蜜の實相を得るに、所謂一切法性は空無所有にして寂滅の相なり。卽ち滅度を欲するも、方便力の故に涅槃の證を取らず。是の時に是の念をなす、一切法性は空にして涅槃も亦た空なり。我れ今菩薩の功德に於て、未だ具足せざれば應に證を取るべからず、功德具足して乃ち證を取るべしと。是の時に菩薩、方便力を以て二地を過ぎて菩薩の位に入り、菩薩の位に中に住し甚深微妙にして文字無き法を知つて衆生を引導す、是れを方便と名く。

復次に、方便あり、菩薩は一切法は畢竟空にして性は無所有なりと知つて、而も能く還つて善法を起し、六波羅蜜を行じて空に隨はず。若し能く四種の事、(卽ち)若くは疑、若くは邪見、若くは入涅槃、若くは作佛を生ぜば、般若に是の如くの分別あるを以て、若し能く邪と疑とを除き入涅槃せざれば、是を方便となす。有人は言ふ、「般若波羅蜜は饒益する所多く、大珍寶聚の中に於て最勝なり。佛の滅度の後に多くの怨賊の毀壞せんと欲する者あるを知れり。品品を囑累するに猶尙咎なし、何に河んや二處に於てをや。

問うて曰はく、若くは囑累は何を以てか乃ち爾く慇懃鄭重なるや。

答へて曰はく、佛は世俗の法に隨つて衆生を引導すること、　へば、估客の主が遠く他國に出でんと欲するに、財寶を以て子に囑累すと雖も、大價妙寶は偏に獨り慇懃にするが如し。其の子未だ妙寶の價重きことを識らざるを以ての故なり。餘人は估客の主が是の寶價を識る人に、而も慇懃に囑累するを以て必ず其の貴きことを知る。若し其の子が寶價を讃說するを聞くも則ち之を信ぜず。佛も亦た是の如し。

復次に、若し餘人異衆の中に於て、般若を讃歎して人に囑累せば、則ち佛を譏つて、「自ら法を稱讃す」とし、疑つて信ぜざれど、自ら弟子の中に於て囑累するに則ち嫌ふことなし。

復た有人は言ふ、「佛は上品の中に寂滅相、無戲論と說く、是れ一切智なり。是の中に決定して法として取るべきものあることなし、則ち人は以て貴ぶべき所なしと爲す。今慇懃に囑累するも、則ち佛は空法に著せざるを知る。一切衆生の中にて、般若を愛念すること佛に過ぎたる者なし。佛は般若の恩深きことを知るが故に、是の般若を貴重して而も慇懃に囑累す」と。

有人は言ふ、「佛は中道を現ぜんと欲するが故に囑累す。先に諸法の空を說いて、以て有邊を遮し、今は慇懃に囑累して則ち無邊を破す。是れ則ち中道なり」と。若し人あり、佛は貪心にして此の法に愛著すと謂ふも、佛は已に種種の因緣を以て般若波羅蜜の空相を說けり。若し人あつて、佛は斷滅の中に墮すと謂ふも是の故に慇懃に囑累す。是の如くにして則ち二邊を離る。

問うて曰はく、佛は阿難は是れ弟子なることを知る。何を以ての故に、「阿難よ、汝は是れ我が弟子なるや不や、我は是れ汝が師なるや不や」と問へるや。

答へて曰はく、佛に惡弟子の須那刹多羅等有り。少しく因緣あるが故に弟子となり、佛の所に於て射法を取らんと欲するも佛は爲に說きたまはず。是に於て反つて戒めて言はく、「我れは佛弟子にあらず」と。又須尸摩の如きは、法を盜まんが爲の故に弟子となる。是の如き等は是れ名字の弟子なり。又復た外道等は謂はく、阿難は已むを得ずして佛の邊にあり、阿難は曾つて外道の弟子となり、草衣を著して神仙を求む。今佛は是れ親族にして尊重なるを以ての故に給侍すと。是の如き等の事を以ての故に、大衆の中に於て阿難に問ひたまはく、「汝は是れ我が弟子なるや不や、若し是れ眞の弟子なり」と言はば、當に我が勅

に隨ふべし」と。是の故に、阿難は、人をして信ぜしめんと欲するが爲の故に重ねて答ふ。佛、阿難に告げたまはく、「弟子として應になすべき所の法は汝盡く具足す。弟子の法とは所謂善き身口意業を以て師に供給するなり。弟子に心好くして身口の業は稱はざるあり、弟子に身口業好くして而も心に稱はざるあり。若し弟子、善子を以て深く師を愛樂し、身口相稱して身命を惜まず、懃勞を難しとせず、自ら其の心を捨て、師の敎勅に隨ふ(是れを弟子の法とす)。阿難は盡く此の事を具足せり。佛、阿難に告げたまはく、汝、今現在、我を恭敬せり、我が滅度の後に於て、般若を恭敬すること亦た當に是の如くなるべしと。

問うて曰はく、般若は是れ諸佛の師なり、而るに阿難は何を以てか其の師を恭敬せずして、佛を恭敬するや。

答へて曰はく、阿難は初道を得と雖も、漏は未だ盡きざるが故に、深く法の實を知ること佛の知る所の如くならず。是の故に佛は阿難に告げたまはく、汝般若を恭敬すること我を恭敬するが如くせよと。

復次に、衆生は、佛の三十二相・八十隨形好・大光明・金色身を見て多く愛敬す。般若波羅蜜は微妙甚深にして形無く色無く、智者のみは能く知る。佛身の相好は、愚も智も之を視て皆な厭足なし。是の故に佛は身を以て般若に喩ふ。佛は世に在り時能く自ら魔を遮せり。是の故に佛、阿難に告げたまはく、我が滅度の後は好んで般若を守護せよと。

問うて曰はく、一たび囑累すれば則ち足る、何を以てか三たびに至るや。

答へて曰はく、佛は深く般若波羅蜜を愛するが故に、三たび囑するなり。

問うて曰はく、若し深く愛せば、何ぞ三たびに限らんや。

答へて曰はく、諸佛の常法の語は三たびを過ぎず。若し三たびを過ぎて從はざれば、執金剛神は則ち杵を以て之に擬す。又た執金剛神の意は、若し三たびを過ぎて從はざれば、則ち是れ逆人なり。便ち當に之を殺すべしとなり。是の故に佛は問ふこと三たびを過ぎず。

復次に、若し一たび說かば猶ほ緩なり、三たびを過ぐれば太だ急にして凡夫の貪著する者に似如すればなり。

復次に、受者の心に三種あり、鈍根の者は三たびに至つて乃ち善心を生ず。阿難は復た利根なりと雖も、心は聲聞に向ひて

但だ一身の度を求むるのみ、是の故に三たび告ぐるなり。囑累する所以は、法をして滅せしめさらんがための故に、汝當に弟子を教化すべし、弟子復た餘人を教へて展轉して相教へなば譬へば、一燈が復た餘燈を然して其の明轉た多きが如し。「最後の斷種の人となる莫れ」とは、世人に子あつて若し紹繼せざれば則ち斷種と名く、最も恥づべしと爲す。佛は此の喩を以て阿難に告げたまはく、汝、汝が身上に於て般若をして斷絕せしむること莫れと。

問うて曰はく、先の品中に明すが如く、般若波羅蜜は說いても亦た增さず。說かざるも亦た減ぜず。畢竟寂滅相なるに、今何を以てか、斷滅せしむること莫れと言ふや。譬へば、虛空の如きは、誰か能く滅する者あらん。

答へて曰はく、般若波羅蜜は寂滅、無生・無滅の相にして、虛空の如く戲論すべからずと雖も、而も文字語言もて般若波羅蜜の經卷を書し、他人の爲に是れを說く。此の中の般若は、此の因の中に於て而も其の果を說くなり。凡人は、般若波羅蜜の微妙なるを聞いて卽ち著心を生じ、般若の相を取て諸法を分別す。所謂是れは善、是れは不善、是れは世間、是れは涅槃等なり。分別するを以ての故に、是の法の中に於て著心を生ず。著心の故に鬪諍し、鬪諍するが故に諸の罪業を起す。是の如きの人を名けて般若波羅蜜を滅すとなす。佛阿難に告げたまはく、汝當に般若波羅蜜の相を知るべし、文字語言に著して衆生を教化すること莫れ、是を不滅と名くと。阿難は般若に隨つて世にあること幾時、則ち爾許の時に佛の世にあることを知る。經の中に廣く說くが如し。佛慇懃に囑累するに、會にある衆生は疑あり、是の故に佛は囑累の因緣を說く。所謂般若有つて世に在れば則ち佛在りと爲す。所以何んとなれば、般若波羅蜜は是れ諸佛の母にして、諸佛は法を以て師となせばなり。法とは、卽ち是れ般若波羅蜜なり、若し師あり、母あれば、名けて失利となさず。所以何んとなれば、利は本より在るが故なり。是の故に若し般若にして世にあれば佛も亦た世にありと說く。又、法寶を離れず、菩薩は三十二相八十隨形好あるも名づけて佛とはなさず、法寶を得るが故に名けて佛となす。法寶は卽ち是れ般若波羅蜜なり。人の佛に從つて利を得、乃至解脫涅槃を得るが如く、若し人般若の中に於て能く信行せば、亦た三乘の法を以て而も涅槃に入る。是の故に、般若にして世にあれば、佛が世に在つて法を說くが如く異ることなしと說くなり。阿難よ、若し人あり、般若を聽受し、及び書して持つ等をなさば、當に知

るべし、是の人は佛を見ることを離れず、法を聞いて佛に親近すと。

問うて曰はく、人に重罪あつて、三不善業を成就せんに、般若を聽受し書持すとも、是の人は云何んぞ當に諸佛を離れず、法を聞いて、佛に親近することを得べきや不や。

答へて曰はく、是のことは先の品中に已に答へたり。所謂る聽法の者に二種の人あり、一には但だ聽くのみにして、而も信受して行ぜず。二には聽いて、而して信受し奉行す。弟子が師の語を聽かず、信受して行ぜざるが如きは、是れを不聽かずと名く。若し一心に聽聞し、信受奉行するを以て、世を厭ひて涅槃を愛し、小乘を離れて大乘を樂ふ、是の如く聽受をなすは、是を眞に聽くと名く。誦讀も亦た是の如し。正しく憶念して、隨つて佛の意の如く、有無の二邊を離れて中道を行じ、聞く所の如く受持し、及び其の義を辨し、他人の爲に解說す。恭敬尊重し、花香等をもて供養し讃歎し、初始の微薄なるより乃至正憶念し他人の爲に說けば、其の心轉た厚く功德轉た多く、牢固として動ぜず、若くは師の說を聞き、若くは經卷を見て花香等をもて供養す。若し智者にして、般若の功德を知つて供養する者は福德重く、知らざる者は供養の福德微薄なり。福德純厚の者は、身を轉ずるも佛を見ることを離れず、法を聞いて諸佛に親近す。福德微薄の者は、身を轉ずるも三福報を得と言はず、衆罪を償ひ已つて、久しうして後は亦た必ず當に佛を得べし。此の中に佛總じて說きたまはく、福德の純厚も微薄も漸漸に皆な十方の佛を見、佛の所說を聞いて、漸漸に六波羅蜜を具して皆な作物するを得べしと。佛、佛眼を以て見たまふに、般若には是の如く、大利あり。衆生を益するが故に、慇懃に囑累するなり。

問うて曰はく、是の諸の大阿羅漢は已に實際を證して復た憂喜なし、小喜すら尙ほなし、何かに況んや大歡喜をや。

答へて曰はく、諸の大阿羅漢は三界の欲を離ると雖も、未だ一切智慧を得ざるが故に諸の甚深の法の中に於て、猶ほ疑を了ぜず。是の摩訶般若波羅蜜の中に了了と解說して其の疑を斷除す、是の故に歡喜するなり。

復次に、此の諸大弟子は已に實際を證す。實際とは卽ち是れ空・無相・無量にして分別する所なし。佛は此の寂滅の法を以て種種に名字・語言・譬喩を分別して廣く說きたまふに亦た法性を壞せず、又た世間と相違せず。諸の阿羅漢は是の法の中に於て

證るが故に大に歡喜す。佛善く是の空・無相・無量・寂滅の法を說きたまふに、諸餘の大衆は未だ悉く漏盡せざるも、信力深きが故に亦た大に歡喜して言はく、「此の法は能く我等の生死の苦を盡して佛道を得せしむ」と。是の如き等の無量の因緣の故に大衆は皆な歡喜するなり。

問うて曰はく、若し佛阿難に是の般若波羅蜜を囑累せば、佛般涅槃の後、阿難は大迦葉と共に三藏を結集するに、是の中に何を以て說かざりしや。

答へて曰はく、摩訶衍は甚深にして信じ難く、解し難く、行し難し。佛の世に在す時すら諸の比丘あつて摩訶衍を聞くに、信ぜず解せざるが故に坐より去れり。何かに況んや、佛の般涅槃の後をや、是を以ての故に說かざるなり。

復次に、三藏に正しく三十萬の偈あり、并せて九百六十萬言となす。摩訶衍は甚だ多くして、無量無限なり。此の中、般若波羅蜜品の如きは二萬二千の偈あり、大般若品には十萬の偈あり。諸の龍王、阿修羅王諸天の宮中には千億萬の偈等あり。所以何んとなれば、此の諸天龍神は壽命長久にして識の念力強きが故なり。今此の世の人は壽命短促にして識の念力薄くして小般若波羅蜜品をすら、尙ほ讀むこと能はず、何に況んや、多きものをや。諸餘の大菩薩の知る所の般若波羅蜜は無量無限なり。何となれば、佛は但だ一身に說く所にあらず、無量の世の中に或は變じて無數の身を化作すればなり。是の故に所說は無量なり。又た不可思議解脫經には十萬の偈あり。諸佛本起經・寶雲經・大雲經・法雲經には各各十萬の偈あり。法華經・華手經・大悲經・方便經・龍王問經・阿修羅王問經等の諸の大經は無量無邊にして大海中の寶の如し、云何んぞ三藏の中に入るべけん。小物は應に大の中にあるべし、大物は小に入ることを得ず。若し問はんと欲せば應に言ふべし、「小乘は何を以てか摩訶衍の中に在らざるや」と、摩訶衍は能く小乘の法を兼ねるが故なり。是の故に汝が問ふ所の如くなるべからず。

復次に、有しは言ふ、「摩訶迦葉の如きは、諸の比丘を將ゐて、耆闍崛山の中にあつて三藏を集め。佛の滅度の後は、文殊尸利、彌勒の諸大菩薩は亦た阿難とを將ゐて是の摩訶衍を集む。又た阿難は衆生の志業の大小を籌量して知る。是の故に聲聞人の中に於ては摩訶衍を說かず、(若し)說けば則ち錯亂して成辦する所なけん。佛法は皆な是れ一種一味なり、所謂る、苦盡解脫

味なり。此の解脱味に二種あり、一には但だ自ら身の爲にし、二には兼て一切衆生の爲にす。倶に一解脱門を求むと雖も、而も自ら利すと人を利すとの異あり。是の故に大小乘の差別あり。是の二種の人の爲の故に、佛口の所説を文字語言を以て分つて二種となす。三藏は是れ聲聞の法、摩訶衍は是れ大乘の法なり。

復次に、佛世に在す時は、三藏の名あることなく、但だ修多羅を持つ比丘、毘尼を持つ比丘、摩多羅迦を持つ比丘あり。修多羅とは、是れ四阿含の中の經の名と摩訶衍の中の經の名なり。修多羅に二分あり、一には四阿含の中の修多羅、二には摩訶衍經にして名けて大修多羅となす。二分に入るに亦は大乘亦は小乘なる二百五十戒あり。是の如き等を名けて修多羅となす。毘尼とは比丘の罪を作すに、佛は戒を結んで應に是は行ずべく、應に是は行ずべからず、是の事を作さば是の罪を得とするに名く。略說するに八十部ありて亦た二分あり。一には摩偷羅國の毘尼にして阿波陀那本生を含んで八十部あり、二には罽賓國の毘尼にして本生と阿波陀那を除却し、但だ要を取つて用つて十部をなす。八十部の毘婆沙の解釋あり。是の故に摩訶般若波羅蜜經等は修多羅經中にあるを知るも、經の大事異るを以ての故に別說す。是の故に集めて三藏の中に在らざるなり。

鳩摩羅耆婆法師は秦の弘始三年、歳は辛丑に在り、十二月二十日を以て、長安に至り、四年の夏、逍遙園中の西門閣上に於て、姚天王の爲に此の釋論を出し、七年十二月二十七日に乃ち訖る。其の中に兼て經本・禪經・戒律・百論・禪法要解を出だして五十萬言に向ふ。此の釋論と幷せて一百五十萬言なり。初品を論ずるに三十四卷、一品を解釋す。是は全く具本を論じ、二品已下は法師之を略し、其の要足を取つて、以て文の意を開譯するのみ。復た其の廣釋を備へずして此の百卷を得、若し盡く之を出さば將に此れに十倍すべし。

[illegible]

摩訶般若波羅蜜多心經解題

一、要　領

此の經は六百巻大般若を要約せるものとも従つて一切經の中核とも云はれる般若佛教の要領であつて、廣く流布し講說せられたものである。此の經の初見は三藏記第四に出づるもので失譯とせるが後には羅什の譯を始めとすと云ふ。諸譯家出す所各各異る。般若の中心問題は大品、習應品と一致前後に附け加へられたるを見る。即ち前には觀音が一切苦厄を度するとし後には所得無きを以て以下を加ふ。此の添加部には大切なる神咒が加へられて觀照が宗教的となり密教化する事を特色とする。

二、本經の譯出

三藏記第四(大正第五五、31b 結一、24a)には

摩訶般若波羅蜜神咒一巻、般若波羅蜜神咒一巻異本

を以て失譯有本とし、又同書(大正第五五、37a 結、一、27a)に般若波羅蜜偈一巻を未見の中に攝してある。此等のみでは何事も的確に論定することは出來ぬ。然るに開元錄四(大正第五五、512b 結、四、31a)に「摩訶般若波羅蜜大明呪經一巻亦云摩訶大明呪經、初出、與唐譯般若心經等同本見經題上」として、羅什譯出の中に算するに至る。大正藏には第八巻、874c に之を收む。而して其舍利弗色空故より亦無得に至る迄は全く什譯の大品般若習應品(大正第八、223a 月、三、6b)の文と一致するが故に、譯體より之を什譯とすることは頗る確なやうである。故に之を第一譯として次第するに、

一、摩訶般若波羅蜜大明呪經 一巻	姚秦鳩羅摩什譯		弘始四―一五年(四〇二―四一三)	大正第八 847c 閩、八、67	結、四、31a 大正第五五、512b 93b 大正第五五、584a
二、般若波羅蜜多心經 一巻	唐玄奘	於終南山華微宮 沙門知仁筆受	貞觀廿三年(六四九)五、廿四	大正第八 848b 月、九、59b	結、四、69 大正第五五、555c 93 大正第五五、584a
三、般若波羅蜜多那經 一巻	(天后改)菩提流志(達磨流支)	於佛授記寺	長壽二年(六九三)	欠	結、四、83 大正第五五、569c 92 云欠、大正第五五、584a
四、摩訶般若隨心經 一巻	(天后)于闐實叉難陀		六九五―七一〇	欠	結、四、78 大正第五五、566a 結、五、1 大正第五五、626b

五、般若波羅蜜多心經　一卷　罽賓般若利言等譯　大正第八、849b　月、九、57a　續、一ノ一ノ四

六、普遍智藏般若波羅蜜多心經　一卷　法月重譯　於長安　開元廿六年（七三八）　大正第八、849a　月、九、57b　續、一ノ一ノ四　貞元結、六、80　大正第五五、878b　續貞結、七、103大正第五五、1049b

七、般若心經　一卷　唐智慧輪譯　大正第八、850a　續、一ノ八七ノ四

八、聖佛母般若波羅蜜多經　一卷　宋施護譯　大正第八、852b　月、九、58a

以上八譯であるが、尚傳寫せる般若心經梵本並七識經と題するものには失譯の短經に摩訶般若波羅蜜多心經と題するものと、京兆大薦福寺三藏義淨譯とせる短き般若心經とがある、短くして功德多しとせらるゝものであるから諸家の緣に任せて試譯したものと思はれる。

三、本經の原本

此經の原本は Anecdota Oxoniensia vol. I part III に我國傳來の梵本を出版し、マックスミューラー M. müller の解說及びビューレル G. Bühler の古文書解が附載してある。同書には大小二種の梵本がある。倶に Prajñā pāramitā hṛdaya sūtra と名ける。小本は法隆寺傳來の二葉の貝葉梵文（第二葉は初行のみ第二行以下尊勝陀羅尼なり、元祿七年淨嚴の寫本音譯あり）である。是を玄弉譯心經と比較するに經首に Namasarva jñāya（歸命一切智）と初言 Ārya（聖）多く度一切苦厄の梵文がない。第二段に於て Iha (Śāriputra) rūpam śūnyatā śūnyataiva rūpam（色空空色）を缺くのみで、其他は全く同じである。故に弉譯の原本と見て大なる過はなからう。弉譯は什譯と同本と云はれて居るが、果して然うであらうか。什譯を本として玄弉譯に比較するに、

（題號）摩訶般若波羅蜜大明呪經	般若波羅蜜多心經	大般若四〇三（大正220 第七 14a 日 1、11b）觀照品三之二云
（歸命）欠	——欠	
1、觀世音……度一切苦厄	——觀自在……度一切苦厄	何以故

2、舍利弗色空故無惱壞相受空故無受觀想空故無知相行空故無作相識空故無覺相何以故	欠	舍利子諸色空彼非變礙相諸受空彼非領納相諸想空彼非取像相諸行空彼非造作相諸識空彼非了別相何以故
3、舍利弗非色異空……不增不減	舍利子色不異空……不增不減	舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識不異空空不異受想行識受想行識即是空空即是受想行識舍利子是諸法空相不生不滅不染不淨不增不減。
4、是故答法非未來非現在	欠	非過去非未來非現在。
5、是故空中……亦無得	是故空中……亦無得	如是空中無色無受想行識無眼處無耳鼻舌身意處無色處無聲香味觸法處無眼界色界眼識界無耳界聲界耳識界無鼻界香界鼻識界無舌界味界舌識界無身界觸界身識界無意界法界意識界無無明亦無無明滅乃至無老死愁歎苦憂惱亦無老死愁歎苦憂惱滅無苦聖諦無集滅道聖諦無得無現觀。
6、以無所得故……夢想苦惱究竟……故知般若波羅蜜是大明呪是無上明呪……呪曰竭諦……僧波訶	以無所得故……夢想究竟……故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪……呪曰揭諦……薩婆訶	

此に依れば「6」の小異は譯人の便宜とするも、羅什譯に於て「2」と「4」とを增して居るのは原文の異を證するものと云はねばならぬ。而して「2」——「5」の全文は大品習應品と一致し、大般若第二會觀照品の文も亦表に示す如く之に一致し、其差は具略の別のみで却て奘譯の心經とは合はない。此に於て明かに羅什の大明呪の原本は奘譯と少異なるべきを見る。因みに法隆寺本は西紀六〇九年（推古十七年）に支那より傳來したものを襲藏したので、本と慧思（五七七年、大建

九年死）の愛藏せるもの、其先梁の普通元年（北魏正光元年、五二〇）に來漢した菩提達磨の將來したもの〻やうに傳へられる。

大本心經の原本は長谷寺所傳の寫本で、其正本は慧運（弘法十大弟子の一）の將來（八三八年入唐八四七年歸朝）、野山正智院の藏什と云ふ。此の梵文は支那傳持の Āryapa-ñcaviṃśatikā bhagavatī prajñā pāramitāhṛdayam と云ふものに粗々同じい。前表の「五」に擧ぐる唐の般若譯の原本であらう。法月の重譯も勿論同本である。此の如く心經には大に體裁分量を異にした二本があつて、倶に當時我國に原本をも傳來して今日に保存したものである。且小本は前に云ふ如く玄奘譯が最も之に近い處を見れば、當時復寫されたものが少くなく、玄奘も其一に就て貞觀二十三年華微宮中に急遽之を譯したものであらう。

四、本經の註釋

譯本前述の如く種々あるも、註釋は皆玄奘譯に率由してゐる。唐朝の註家慧淨の經疏一卷（續、四十一の三206 f）靖邁の經疏一卷（同上218 f）窺基の幽贊二卷（大正第三十三 523b—542b、同上 218b—法藏の略疏一卷（大正第三十三 552a—555b、呂八、54b—57a）提要の註一卷（續、四十一の四、215f）圓測の經贊一卷（大正第三十三 542c—552a 同上 818f）明曠の經疏一卷（續、四十一の四328b f）慧忠の註（同上891f）を始とし續藏第四十一套の三より次套の一までに宋明淸の疏註約四十六種を收む。其註家に於て慧淨、靖邁、窺基、圓測等は皆玄奘の瑜伽唯識に立つ般若觀ではあるが、自から其間に多少の差がないではない。

法藏の花嚴の義に、明曠は天台の見に立ち、慧忠の註は禪宗は依る所となつた。今諸註を參酌して此經の大意を云ふに、是れ般若の中心思想を略說したもので、菩薩の深般若行が說いてある。要は諸法の空を見るに在つて、五陰、十二處、十八界、四諦、十二因緣、聖智、涅槃の有得の見を破するのである。其旨は更に最後の大明咒 Mahā mantra に要約せられて居る。

	gate	gate	pāragate	parasaṃgate	bodhisvāhā
法藏	吉也	度也（自度度他）	彼岸度	自他普度（總到彼岸）	大菩提即疾
提婆註	吉	度（自度）	度他	自度度他	自他共共到所處究竟
慧忠疏	除累（身空）	（心空）	無妄念可除	淨穢不立	見心不生

等と譯するものは強て蜜咒を解したものに過ぎぬ。而して此等の解釋を教判に應じて順釋するものは、或は空假中に配し、或は理、理事無礙、事々無礙に釋し、或は遍依圓に約し、或は自度、度他、自他究竟に觀るの類で、各宗の依用、其窮る所を知らざる有樣である。此の外本經の註釋頗る多く枚擧に堪へ難きも、これらを一括して列擧したるは佛教解説大辭典第九卷(p.p. 59—80)でこれを參照せられたく、更に近くは井口俊逸氏の「般若心經を中心とせる佛教思想論」や一般通俗的講話本として高神覺昇氏の般若心經講話、稻垣眞我氏の般若心經十講等ありて本經の民衆化は愈々加へらるゝ事となつた。

昭和十一年一月四日

譯者　椎尾辨匡　識

摩訶般若波羅蜜多心經

大唐三藏法師玄奘奉詔譯

[一]觀自在菩薩は、[二]深般若波羅蜜多を行ずる時、[三]五蘊は皆空なりと照見して、[四]一切の苦厄を度したまふ。[五]舍利子、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色卽ち是れ空、空卽ち是れ色なり。受想行識も亦た復た是の如し。[五]舍利子。是の諸法は空の相にして、生ぜず滅せず、垢ならず淨ならず、增さず、減らざるものなり。是の故に空の中には、色も無く、受想行識も無く、[六]眼耳鼻舌身意も無く、色聲香味觸法も無く、[七]眼界もなく、乃至意識界も無く、無明もなく、亦た[八]無明の盡くることも無く、乃至老死も無く亦た老死の盡くることも無く、[九]苦集滅道もなく、[一〇]智もなく、亦た得もなし。所得なきを以ての故なり。[一一]菩提薩埵は[一二]般若波羅蜜多に依れるが故に、心に[一三]罣礙無し。心に罣礙なきが故に恐怖あることなく、一切の顚倒夢想を遠離して、涅槃を究竟すべし。三世の諸佛も、般若波羅蜜多に[一四]依り給ひしが故に、[一五]阿耨多羅三藐三菩提を得給へり。故に知るべし、般若波羅蜜多は、是れ[一六]大神呪なり、是れ大明呪なり、是れ無上呪なり、是れ[一七]無等等呪なり、能く一切の苦を除き、眞實にして虛ならず。故に般若波羅蜜多の呪を說く。卽ち呪を說いて曰はく、[一八]揭諦揭諦、波羅揭諦、波羅僧揭諦、菩提、娑婆訶。

摩訶般若波羅蜜多心經（終）

【一】觀自在菩薩 avalokiteśvara Bodhisattva 觀音

【二】深般若。第一義の空を觀る。

【三】五蘊。色、受、想、行、識。

【四】我は五蘊の假和合なれば我に我とすべきものなく苦惱厄難とすべきものなし。

【五】舍利子 Sariputtra 舍利弗、身子、智慧第一の弟子とせらる。

【六】眼、耳、鼻、舌、身、意、六内入處、これに對する六外處が色、聲、香、味、觸、法、合して十二處と云ふ。

【七】十八界を擧ぐ。眼界、耳・鼻・舌・身・意界・色界・聲・香・味・觸・法界・眼識界・耳・鼻・舌……身……意識界。

【八】無明。十二緣起。無明、行識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死。

【九】四諦。現象の迷へる世界は苦。苦の因は集、惑業（已れがする）。滅は苦集の滅卽ち涅槃眞に生きること。道はその道、常に八聖道といふ。

【一〇】認識も行爲の結果も實ならず。

【一一】菩薩、求道者。

【一二】Prajñāpāramitā 智度

【一三】罣礙。故障のこと。

【一四】過去の諸佛已に依り現在の諸佛今依り未來の諸佛當に依り給ふべし。

【一五】Anuttarasamyaksambodhi 無上等正覺完全なる覺。

【一六】勝れたる道の集れる力。

【一七】無等等とは無上絕對に同し。

【一八】gate gate paragate pārasamgate bodhi svāhā

仁王般若波羅蜜經解題

一、所依本

今譯する所は大正大藏二四五（第八巻825a—834a）に載する姚秦三藏鳩摩羅什譯出せるものと、天和三年慈海宋順校合せる明治十一年貝葉書院版本と對校せるもので、大正七年四月國譯大藏經に山上曹源譯する所とは少しく異る。その異は彼唯坊本に依れるに基づく。

二、內容概觀

此の經も他の普通の經典と同じく、序・正・流通の三分より成つて居る。而して序分は證信及び發起の二序より成り、正宗分卽ち本論は、觀空、菩薩教化、二諦、護國、散華、受持の六品より成り、流通分卽ち結論は囑累の一品より成り立つてゐる。

先づ序品中の證信序には聲聞衆、菩薩衆、在家衆、七賢衆、國王衆及び五道の衆生等が、佛陀の說法を聽聞すべく、各自寶蓮華の上に座せるを序し、發起序には十六大國王中の一人なる舍衞國の波斯匿王が、神力を以つて八萬種の音樂をなせば、東西南北の諸菩薩等は、各各無數の大衆と共に此の會に列なり、六方の諸菩薩も亦各各音樂を爲し、數多の大衆と共に會座に列なり、正に說法の時至れる光景を叙してある。

次に正宗分中の初三品には內護の何たるかを說き次の散華品に於ては、般若波羅蜜多は諸佛の母たり、諸菩薩の母たり、神通の生處たる旨を述べ、且つ王の爲に五種の不思議神變を現じ給へる光景を叙し、受持品に至りて、前に說く所の內外の二護を雙べ說いてある。

而して最後の囑累品には佛が滅後正法の衰ふべき前兆を豫言して、七種の教勅を垂れ給へば、十六大國の國王等は、各各至心に佛語を受持し、出家者の行道を制止せずに、當に佛勅の如くせんと誓ひ、歡喜奉行せる旨を叙してある。

三、傳譯疑僞

仁王般若に關しては今、大藏經には、（大正、二四五、第八巻825a—834a縮冊、月九、46a—53b）仁王（護國）般若波羅蜜經二巻姚秦鳩摩羅什譯と、密教仁王經法（經二巻、念誦儀軌一巻、念誦法一巻、陀羅尼釋一巻）に屬する大唐新翻護國仁王般若經二巻（大正二四六、第八巻 834a—845a縮冊、閏七、2—9）とがある。後

者は密部で前者が今譯する所であり、その譯出疑似に就て少しく考察する。

仁王般若の譯出に關しては道安の經錄に其記なく、僧佑が三藏記第四（大正、二一四五、第五五卷29c縮冊、結、一23a）新集失譯有本錄中に、仁王護國般若波羅蜜經一卷と云ふのみで、法護、羅什の譯出に關しては言及してない。又同書第八卷（大正、二一四五、第五十五卷 54b 縮冊、結、一42a）の梁武帝の註解大品序（西紀五一七）の中には「唯仁王般若具書名部、世既以爲ニ疑經ト、今則置而不ㇾ論」とある。これで見れば梁代に存せしも（隋法經撰衆經目錄第二（大正、五五 126b結、一100b）衆經疑惑の下に「仁王經二卷。別錄稱此經是竺法護譯經首又題云是羅什、撰集佛語、今案此經始末義理文詞似ㇾ非ニ三賢所ㇾ譯故入ニ疑錄ニ」と云ふも亦梁武大品序と同じである）疑經として重んぜられなかつたやうである。然るに幾程もなく此經は識者の間に重んぜらるゝやうになつた其典據は三寶紀第十一（大正二〇三四、第四十九卷99a致、六41b）に「仁王般若經一卷、第二出、與晋世法護出者少異、同（承聖）三年（554）在寶田寺、翻見（曹毘）眞諦傳」「同書第六（大正二〇三四第四十九卷62c致六41b）「仁王般若波羅蜜經一卷或二卷、見晋世雜錄」と云ふに基き、天台の仁王疏卷一（大正一七〇五第三十三卷254b呂八11a）には次の如く論じてある

問、古人云仁王經非ニ正傳譯ニ是事云何答……豈有不ㇾ見ニ目錄ニ即云非ニ是正翻ニ……且準ニ下經ニ自有ニ兩本ニ一廣說如ニ散華品云ニ爾時十六大國王、聞ニ佛所說十萬億偈般若波羅蜜ニ散華供養、二者略本、即今經文譯者不ㇾ同、前後三本、一者晋時永嘉年（三〇七—三一二）、月支三藏曇摩羅察、晋云法護、翻出ニ二卷ニ名ニ仁王般若ニ二是僞秦弘始三年（四〇一）鳩摩羅什於ニ長安逍遙園

二

別館ニ翻、二卷名ニ佛說仁王護國般若波羅蜜ニ三者梁時眞諦、大同年於ニ豫章寶因寺ニ翻出一卷名ニ仁王般若經ニ疏有ニ六卷ニ雖ㇾ有ニ三本ニ秦爲ニ周悉ニ依ニ費長房入藏目錄ニ云耳。

と。同時代の吉藏は、般若研究者として經疏六卷を造るも、譯本の問題に就ては一も云つて居ない（大正一七〇七第三十三卷314續藏四十の三）。唐の圓測の經疏（大正一七〇八第三十三卷359續藏四十の三287a）は粗ぼ天台に同じく、只三本中、法護譯は晋泰始元年（二六五）に眞諦譯は承聖三年、豫章寶田寺に於てと云ふのが異るのみである。而して三本の用舍に關しては「晋本創初恐不ニ周悉ニ眞諦一本陰而不ㇾ行、故今且依ニ秦時一本ニ」と云ふ。

今天台の說を見るに、費氏に據ると稱して二譯を三譯とし、承聖を大同に改むるばかりでなく、云ふ所の年時が殆ど信じられない。法護譯は泰始二年（二六六）

から永嘉二年(三〇八)に至るのであるから、圓測が泰始元年とするのは當を得てない。天台が永嘉年と云ふは漢として居るも、其頃法護は既に老いて多く譯を爲ない時である。此二說が彼の四十年譯經の前後に彷徨するに見るも、此說の信じ難いことは明である。羅什は弘始三年末(十二月二十日)長安に來たので、此年に此經を譯しないことは明である。眞諦は大同の末(十二年八月十五日。同年中大同と改元した)に南海(香港珠江の邊)に達したので、同年豫章邊に譯經のなかつたことは、傳に明かである。此の如く天台の所傳は信じ難いものである。費氏、圓測は眞諦譯を倶に承聖三年として居る。傳(大正二〇六〇第五十 429c 縮冊致二 88a)「三年(承聖)二月、還返豫章、又往新吳始興、後隨蕭太保、度嶺至于南康、並隨方翻譯、栖遑靡託」と云ふ時處に一致するも、果して其時に仁王の翻譯があつたかは明でない。且つ諦譯は世に隱れて、其前譯が既に梁朝に行はれたことが明かであるから、此譯に關しては追及するの必要がない。只天台の說は、曹毘三藏傳によるものとして道宣(大唐內典錄第四〔大正第五十五卷266a結二171〕眞諦の下、仁王般若經　是第三譯與晋世法護出者少異大同三年在寶田寺譯見曹毘眞諦傳)と智昇(開元釋教錄第二〔大正第五十五卷495b結四、16a〕法護　仁王般若經一卷或二卷三十一紙初出、房云見晋世雜錄。同書第四〔大正第五十五卷512b結四、31a〕羅什、仁王護國般若波羅蜜經二卷亦云仁王般若經、或云一卷第二出與晋世法護梁朝眞諦譯著同本異出房云見別錄。同書第六〔大正第五十五卷538b結四、53b〕眞諦仁王般若經一卷、承聖三年於豫章寶田寺譯第三出與西晋法護等出者同本)とが之を錄する事を附記するに止むる。

　以上論ずる所によつて、斯經の譯出所傳の信ずべからざることを明にしたが、別に羅什譯とする一本がある、今その內容を抉揚して聊か其眞僞を論じたいと思ふ。此經は法護、羅什何れの譯でもない。試に顯著なる譯語に就て見るに(拙著佛教經典概說一一七頁以下參照)仁王の用語は法護よりも羅什の方に一致點が多い然し二者何れにも屬せないものも亦甚だ多い。

　更に法相教門より之を觀るに、大品の序品に列擧するものに就て云ふも、世尊は三昧中に六萬三千國土を照し、諸菩薩八部雲集するに當つて習行般若を敎へ、一切種智を以て一切法を知らしむ、卽ち不住法の故に六度、四念處、四正懃、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三三昧、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處、九想、八念、十想、十一智、覺觀三昧、三根を具足し、佛十力、四無所畏、四無閡

智、十八不共法、大慈大悲を遍知すべきことを說き、又道慧、道種慧、一切智、一切種智、斷煩惱習も二乘を超え、菩薩の諸陀羅尼、諸三昧、五分無邊功德を得、三十二相、八十種形、乃至諸願滿足、十八空皆學般若によるべきを說き、化他成滿も皆般若に住すべきを示してあるに反し、此經は其法相敎門を異にして居る。各經が各別の敎門を有するは寧ろ當然の如きも、其諸經が同一法相を以て成るは般若經の通相である。爾るに仁王經のみは全く例外で、護佛果、護十地行菩薩、護國土法を明して、其經旨全く限定せられて般若の特色を失ふ。殊に上卷四品に於ては

一、序品　比丘羅漢大仙緣覺菩薩信男信女七賢欲天梵天十六國王等雲集し舍衞國王波斯匿月光は說法を致請する（前諸衆等の行德諸法を列ぬ）

二、觀空品　護佛果因緣、五蘊常樂我淨、三科、六大、四諦、十二因緣、即有即空、因果諸法は空無相無々相也。此般若の一句を信解するは、三千世界に無量施を成し、七賢四果を得るよりも優つて居る。境智說受を見るは聖見でない。般若を護れば薩婆若を護る。十力十八不共法、五眼、五分法身、四無量心、一切功德果を護るものは虛空の如くなるべきである。

三、敎化品　護十地行菩薩、菩薩行化衆生の相を分て五忍（各上中下）とする。

一、伏忍　初發信、三寶習種性十心（信、進、念、慧、定、施、戒、護、願、回向）

次十長養、性種性十心四意止（念處）三意止（三世忍）三善根（慈施慧）

觀色識想受行　戒忍、知見忍、定忍、慧忍、解脫忍。

次十地（十堅心）道種性
- 觀三界因果　空忍、無願忍、無想忍。
- 觀二諦虛實　無常忍（一切法無常）無生忍（一切法空）

二、信忍（善達明）　斷三界色煩惱縛、百千萬佛國中、現百千萬身、常以十五心（四攝法、四無量心、四弘願、三解脫門）爲首。

三、順忍（見勝現法）（斷三界心等煩惱縛、十方佛國中、無量不可說、現通化生。

四、無生忍（遠不動觀慧）　斷三界心色煩惱習、現不可說功德神通。

五、寂滅忍（下忍菩薩 上忍薩婆若）　共觀第一義諦入金剛三昧（斷三界心習無明盡相爲金剛盡相無相爲薩婆若）第十一地薩婆若、超度世諦第一義之外、覺非有非無、湛然淸淨常住不變。

四、二諦品　世第一義、二諦一義二義無聽無說、菩薩於第一義、常照二諦化衆生、佛凡一而無二。

此第四品に於て一切法空非一非二の般若法門は過去の七佛が之を說くやうに、今

も亦之を說くのであるから、大衆は受持讀誦解說せねばならぬと勸持し、無量不可說不可說諸佛、一々無量不可說の衆生を教化し、此諸衆生が成佛して更に轉じて無量不可說の衆生を化して皆成佛することが出來るとする。是の三佛般若を說いた次に、

是上三佛說二般若波羅蜜經八萬億偈一、於二一偈中一復分爲二千分一、於二一分中一說二一分句義一不レ可二窮盡一。況復於二此經中一起二一念信一。是諸衆生超二百劫千劫十地等功德一、何況受持讀誦解說者功德、卽十方諸佛等無レ有レ異、當レ知是人卽是如來得レ佛不レ久。

と讃嘆してあるが、茲に至て勸持も至れりと云はねばならぬ。次で得益と經名と付屬とが述べてある。

時諸大衆聞レ說二是經一、十億人得二三空忍一、百萬億人得二大空忍十地性一、大王、此經名爲二仁王問般若波羅蜜經一、汝等受二持般若波羅蜜經一。

と、此經は應に終るべくして、更に餘德として下卷次品を喚起して本經の主旨に入ることにしてある。若し上述に止らば法相教門に不當な點はあるが、尙般若の法たるを妨げない。併し下文の功利滿足は般若と相反する如うである。これを此に餘德として教門上の矛盾を避て有相の福德利益を鼓吹する處が作經者の巧手段である。卽ち曰く

是經復有二無量功德一、名爲二護國土功德一、亦名二一切國王法藥一服行無レ不二大用一、護舍宅功德亦護一切衆生身、卽此般若波羅蜜是護二國土一如二城塹牆壁刀劍鉾楯一。汝應レ受二持般若波羅蜜一亦復如レ是。

下卷四品は次の如くである。

五、護國品

一、護國　國難民亂、神變天地怪異、星晨失時、水火風一切諸難等を護るには般若を講讀すべく、其法として、百佛像、百菩薩像、百羅漢像を請じ、百比丘衆、四大衆、七衆共に聽き、百法師を請じて般若波羅蜜を講ぜしめ、百獅子吼高座の前には百燈を燃し、百和香を燒き、百種の色花を以て三寶に供養し、三衣什物を以て法師に供養し、小飯中食も亦復時を以てし、一日に二時此經を講讀する。

二、護福　福貴、官位、七寶(如意)男女、慧解、名聞、六天果報、人中果樂。

三、護難　疾病苦難杻械枷鎖四重五逆八難六道事。

此の如き護國護福護難は講說般若の功德である。昔日帝釋も天羅の班足が羅陀に教へられて害せんとした普明王も皆其難を免れたとしてある。かくの如く化說は頗る巧妙である。

六、散華品　十六國王聞法歡喜して散

する百萬億華花は、轉變して十方諸佛の說般若となり、諸大衆の散花して釋迦に供養すること、及び光明佛、師子吼王佛等の展轉して供養散華する偉觀が說いてある。

七、受持品　修行十三觀門を重說してある。十善菩薩十千劫を經て習忍に入つてから次の如き階位を經ねばならぬ。

	十善菩薩	退位	善男女聞法隨信	十千劫	十正滿發菩提心	入習忍位
三伏	一、習種性菩薩	六大十四根不淨觀六和敬	八萬四千波羅蜜	一阿僧祇	修伏道忍	入僧伽陀位
	二、性種性菩薩	十慧觀修護空觀	百萬波羅蜜	二阿僧祇	行十正道	住波羅陀位
	三、道種性菩薩	堅忍中觀五受三界二諦如	八萬億波羅蜜	三阿僧祇	平等聖人地	住阿毘跋致正位
信	四、善覺大士	住平等忍行四攝(初忍)無量方便現前	一切行波羅蜜	四、阿僧祇	願力化生修捨觀	登鳩摩羅伽位
	五、德慧菩薩	中忍中四無量心	行一切功德	五阿僧祇	行大慈觀	入無相闍陀波羅位
	六、明慧道人	無相忍中	行三明觀	六阿僧祇	集無量明波羅蜜	入伽羅陀位
順	七、誒聖覺達菩薩	行順法忍	恒河沙波羅蜜	七阿僧祇	集無量功德	住須陀洹位
	八、勝達菩薩	順道忍	四無畏(諦論)	八阿僧祇	行諸陀羅尼門	入斯陀含位
	九、常現眞實	住順忍中	行中道觀	九阿僧祇	樂力生一切佛國土	證阿那含位
無生	一〇、玄達菩薩	修無生法樂忍	五分法身滿足	十阿僧祇	常行三空百千萬三昧	住第十阿羅漢梵天位
	一一、等覺	無生忍中心々寂滅	十力觀	千阿僧祇	化一切國土	登摩訶羅伽位
	一二、慧光神變	住上々無生忍	法眼等願生一切淨土	萬阿僧祇	無量佛光三昧現百萬恒河沙	住婆伽梵位神力
寂滅	一三、觀佛菩薩	住寂滅忍	住金剛臺	發心以來經百萬阿僧祇劫	常修一切行滿功德藏	入婆伽度位

般若の結果として以上の如き十三觀門を說いて菩薩の階位行證が明してある。而して國土安立萬姓快樂は皆此般若によるべきが故に、七難（細說）即滅七福即生の爲めに、此法を有力なる諸國王に付屬すとし、又般若を國王の父母とし神符、辟鬼珠、如意珠、護國珠、天地鏡、龍寶神王と名くとし、而して護持三寶の國王には五大力菩薩（金剛吼、龍王吼、無畏十力吼、雷電吼、無量力吼）と五千大神王とが守護すべきを說いて居る。

八、囑累品　滅後八十年、八百年、八千年中三寶を信ずる者のない時、此經は國王付囑の手にあり、國王々子は高貴を恃んで、出家を許さず像塔を作らしめず、却て白衣兵奴尊重せられ、齋會求福は外道法の如くし、比丘比丘尼に籍を立てゝ官の爲めに使役する所となれば、七難が生じて國破れ民亂れて正法滅することゝならう。

以上が仁王經の要旨である、此護國獲福の事は般若に說かぬではない。大品第九卷第三十四勸持品（大正第八卷289c 月三、57b）に

成就衆生、淨佛國土、壽命成就、國土成就、菩薩眷屬成就、得一切種智、皆從二般若波羅蜜一生。復次憍尸迦、若善男子善女人、聞二般若波羅蜜一、受持親近、乃至正憶念、是人當レ得二今世後世功德一。……何等……得二今世功德一、佛告二釋提桓因一言、若有二善男子善女人一、受二持般若波羅蜜一、乃至正憶念、終不二中レ毒死一、兵刃不レ傷、水火不レ害、乃至四百四病所レ不レ能レ中、除二其宿命業報一。復次憍尸迦、若有二官事起一、是善男子善女人讀二誦是般若波羅蜜故、往二至官所一、無二能譴責者一。何以故、是般若波羅蜜威力故。若善男子善女人、……常有二慈悲喜捨心一、向二衆生一故。憍尸迦、若善男子善女人、受二持般若波羅蜜一、乃至正憶念、得二如レ是種々今世功德一。何等……後世功德。是善男子善女人、終不レ離二十善道、四禪、四無量心、四無色定、六波羅蜜、四念處、乃至十八不共法一。是人終不レ墮二三惡道一、受身完具、終不レ生二貧窮下賤穢工師、除厠人、擔死人家一、常得二三十二相一、常得三化二生諸現在佛國一、終不レ離二菩薩神通一。

と云ふ如きもある。而も遂に無相を離るゝものでない。然るに仁王經の如きは全く有相に陷れるもので、般若の功德たる意義を失ふ。況や第三品に「外道大有經說、三界外別有衆生界藏」と云ひ、又婆羅門刹利毘舍首陀神我等色心と云ふ如き、數勝二論の主張に偏るゝのみでなく、第七品の順道忍の下に、四無畏を以て那由他諦內道論外道論藥方工巧呪術を觀ずるが故に、我是一切智人と云ふが如きは、外道對峙の法門であることを思はしむる。正に是れ楞伽經と列を同じうするも

ので、龍樹以後の成立と見られる。而して第八品に滅後八十年、八百年、八千年と云ふものは偶然の誤と見られない。小品が五百年後に北方に流布するとせるに對比して、此經にそれより三百年後くるる八百年と云つてあるのは實際に適切なやうである。而して此經は成道後、三十年の初月八日の開說で、四部般若は二十九年開說と云はれて居るが、これは頗る淺膚の談である。何が故に經初に一時と云ふか。又四部般若の中の摩訶般若とは何を指すか。道行を指すとすれば光讃に對して妥當でない。此等は梵本に在るべき事でない。尙ほ第一品に南東北西の四菩薩を擧げ、第六品に光明王佛、師子吼王佛を說くが如き、第七品に五大士五千大神王を云ふが如き、七難を擧ぐる第二に、二十八宿失度金星、慧星、輪星、鬼星、火星、水星、風星、刀星、南斗北斗五鎭大星、一切國主星、三公星、百官星と云ふが如き何れも頗る秘密經典の趣があるばかりでなく、明かに支那臭味を示すものがある。卽ち第八品に國王大臣太子王子、自恃二高貴一、滅二破吾法一、明作二制法一制二我弟子比丘比丘尼一、不レ聽二出家行一レ道、亦復不レ聽レ造二作佛像形佛塔形一、立二統官一制レ衆安レ籍記レ僧、比丘地立白衣高坐等と說く、これ支那史實に適切なるの甚しきものではないか。凡そ如上の事實は本經を以て疑經に屬する論據となるものばかりである。若しこれを疑經とせば恐らく晋梁の間に、弘法者が梵本を變造して敎化の具としたものであらう。本經に說く十三觀門の梵名の如き、又は十六國名の如き原本あるを思はしむるものもあり、又其修文が羅什譯の精妙なるに似ず、寧ろ甚だ拙劣なるものが多い點から、稍劣れる譯者の手に成れる譯者なるを示すやうであるが、之れは疑經中に往々見らるゝ事例に外ならぬ。此く此經を疑僞經とするも、その典據とせるものなしと云ふのではない。寧ろ種々の材料を纏めて編作されたものと思はれる。

今轉じて新飜仁王經（大正第八卷834a—閏七）を見るに其疏第一（大正第三十三卷430b 續四十の五4'8）に依れば肅宗が不空三藏をして諸經を飜傳せしめんとせられたが、其事成らで仙駕先づ天に歸す。依て代宗は永泰元年（西紀七六五）四月二日に詔して仁王經を更譯せしめられた。

詔曰、如來妙旨惠洽二生靈一、仁王寶經義崇二護國一、前代所レ譯理未二融通一、望依二梵夾一再有二翻譯一、貝葉之言永無二漏略一、金口所說更益二詳明一、仍請二僧懷感等於內道場一所二翻譯一、福資二先代澤及二含靈一、寇盜永淸寰區允穆、傳二之曠劫一救護實深、

と、乃ち南桃園に於て朔より望に至る迄に之を譯出した。其二卷八品は頗る整頓

して居る。故に此に至て一成典として完全したと云はねばならぬ。尤も當時梵夾の原本が存在せしや否やは確かでない。此經の梵名は磨努産捺囉跋囉囉瑟咤囉般囉枳穰波囉弭多素咀纜 Manuṣyendravārarāṣṭra prajñāpāramitā sūtraṃ（大正第三十三卷 434b 續四十の五 422同四十一の一、45）と云ふが、不空を師とし、新譯の知識を以つて、勅に應じて更正したと見るべきやうである。此經に三十六句の陀羅尼がある（陀羅尼、大正二四六、第八卷843c縮冊、閏七9、大正九九五、第十九卷 521b、縮冊、閏七17b、同儀軌第四釋陀羅尼文字觀行法、大正九九四、第十九卷518a縮冊、閏七14、同仁王般若陀羅尼釋、仁王經疏〔良賁〕七、大正一七〇九、第三十三卷516c—519c續藏四十一の一37—39に出ず。今次に揭ぐる本文は大正二四六、第八卷 843c 縮冊閏七 9により(イ) は大正九九四、第十九卷 518a 縮冊同 14に（ハ）は大正同 521b により（ロ）は眞言諸經陀羅尼常用集上梵文による。

Namoratna trayāya namahāryāvairocanāya tathāgatāyārhate samyaksambuddhāya
(ハ)māḥa

namahātya sammantabhadrāya bodhisttvāya mahāsattvāya mahākāruṇikāya tanyathā
(ロ)m (ロ)t (ロ)t

jñānapranipe aksayakośe pratibhānavati sarvabuddhavalokite yogaparinispane gambhīraduravagahe
(ロ)ka (ロ)bha (ロ)di

taiyadva parinispane bodhicitta samjanani sarvā bhirṣekabhisikte
(ロ)pṛdi (ロ)tra (イ)jā

dharmasāgārasambhūte amoghaśravane mahāsammantabhadrabhūmi niryate vyakaraṇa pariprapani
(ロ)sa. gra (ロ)m (イ)ne

sarvasiddha namaskṛte sarvabodhisattva samjanani bhagavati buddhāmase aranikarane araṇkarane mahāprajnā
(ロ)ni (ロ)t (イ)mā (イ、ヒ)ne (イ)ne

pāramite svāhā

仁王經道場念誦儀軌の示す如く本經の五尊は此を密教に導く媒となり、陀羅尼によつて其儀が成就するに至つたものである。

以上論ずる所により仁王般若が如何なるものであるかを詳にした。此に眞僞を斷定せんとするのではない。唯全然僞經でないとしても時代の要求によつて一大變化を受けたもので、若し漢人僞作し

てその迹を蔽へるものでなければ滅後八世紀頃に作られた梵本を骨子としたものであらう。

羅什譯の仁王般若と稱するものが、羅什ならざるは、譯語羅什の用例に當らさるもの多きと、摩訶、金剛、天王、光讃四般若を云ふもの大小品智度論等の什譯及び僧叡序に合はざると、僧佑の記錄に缺くると、羅什以後の支那臭强きとによりて察せられる。假令羅什以後梁武以前の所出とするも、梁代迄學者の重ずる所とならなかつた事は明かである。

四、尊重釋疏弘通

これが推重せられたのは

〔一〕智顗の疏上中下五卷（大正一七〇五、第三十三卷 253b—286a 縮冊呂八、10b—38a）に始る、顗が此經を講じたことを傳（大正第五十卷565c、致三59b—60a）に徵するに、陳の宣帝至德三年（五八五、隋開皇五年）四月（大正第五十卷182c 致八57b參看）

「頻降勅於二太極殿一講二仁王經一、天子親臨、僧正慧暅、僧都慧曠、京師大德皆設二巨難一、顗接問承對盛啓二法門一、暅執レ爐賀曰、國十餘齋身當二四講一分レ文析レ義、謂得二其歸一今日出星收見二巧智陥一矣。」と記し、又四年四月には「陳主幸レ寺、修二行大施一又講二仁王一、帝於二衆中一起拜慇懃」と云ひ、統記には此時の詔命を載せて「復下詔曰、國家舊講仁王一年兩集、仰屈於太極殿再演此經」としてある。歷朝興廢の激しきにつれ、漸やく此經に囑目して陳朝は每歲兩集開講し、慧暅が其轍を拓き智者敷講するに至つたことが知らるゝ

〔二〕此狀勢の下に隋の嘉祥吉藏も智者に倣て經疏（大正第三十三卷 314b—359a 續四十の三、288—284）を作り〔三〕唐朝の西明寺圓測は別に上中下本末六卷の疏を著した。（大正第三十三卷359a—427c、續四十の三285—363）然し多く用ひられたのは智者の疏である。爾るに支那に於て其傳を絕すと稱せらる。卽ち大雲合疏序云く「安史之亂橫罹兵燹中原絕其傳」と。然し此言は信じ難い。通載第十四に、永泰元年（大正第四十九卷600a致十107）十月、吐蕃寇逼京師、內出仁王經輦送、西明諸寺置百尺高座講之寇平」と云ひ、禁中講誦仁王護國經と云ふものは、皆不空の新翻に屬すべきも、當時對校せる仁王經と俱に、舊疏が存在したことは翌年勅を奉じて〔四〕良賁が經疏七經（大正第三十三卷 429a—573b續四十の五416四十一の一、44. 永泰二年十一月八日畢奉）を作るに「秦時所翻流二傳宇內一自古高德疏義寔繁、百坐相仍崇二護國一矣」と云つて居る處から見て、どうして台疏を漏さうか。其傳が缺けたと云ふのは會昌の難であらう。宋初、四明の法智が熱心に之を我國に求めたが得られなかつた。神宗元

豐(一〇七八—一〇八五)の初に、海貫が三卷疏を傳へて如恂が非常に欣んだことが載せて晁說之の序(政和二1112)に在る。(五)明の道霈や淸の成蓮等は之に依て合疏(續、四十の四)を作り(六)四明の善月は紹定三年(一二三〇、元の大宗元)に神寶記四卷(大正第三十三卷286b—314a呂八、331f)を作つた。卽ち國朝の餘澤が旣絕を再興せしめたに過ぬ。(七)良賁の經疏は更に唐の遇榮の法衡鈔六卷(續、四十一の一、二)となり、(八)宋の淨源は良賁の廣疏と、體元の略注をと拾摭して、疏科一卷、法經四卷(續、四十一の二)を作つた。是等が此經の注疏の現存するものである。

昭和十一年一月五日

譯者 椎尾辨匡 識

我國に於ては齊明天皇の六年三月、宮中に仁王經を講じ、同年五月、百座百袈裟を造つて百僧に施し仁王會を修したことが元亨釋書に見ゆるのを始とし、後十七年を經て天武白鳳五年十一月廿日、諸國に仁王、金光明二經を講ぜしめたことと、持統天皇七年十月廿三日、宮中に仁王最勝二講を置いたことゝは紀に錄せられて居る。聖武天平元年六月朔日に、一代一度仁王會を宮中に設くるを以て永式とせられたことも釋書に記されてある。孝謙帝が天平勝寶二年五月八日、此經を宮中及京畿七道に講ぜしめ給ふた(續紀)のを始め、屢々修會講經を命ぜられた。爾來歷朝仁王會の興行は絕ゆることなく學問として研究上大なる發達はなかつたが、之を尊重し之を保持するに於ては敢て怠る事がなかつた。勿論修會に關する著述は乏しくない。

我國の註釋として主なるものは仁王經問答 一卷。仁王護國經疏三卷內一卷缺 行信。護國鈔三卷 覺超。釋尊影響仁王經秘法八卷 良助親王。仁王護國經疏三卷。仁王般若合疏講錄三卷 光謙等があり大日本佛敎全書第六卷に收、むる所となつてゐる。

仁王般若波羅蜜經

卷の上

序品第一

是の如く我れ聞きぬ。一時、*佛王舍城[一]耆闍崛山の中に在せり。大比丘衆八百萬億と與に。學、無學の皆阿羅漢なり。[二]有爲の功德と無爲の功德と、[三]無學の十智と有學の八智と、有學の六智、三根と、十六の心行と、[四]法假虛實觀と、受假虛實觀と、名虛實觀と、[五]三空觀門と、四諦と十二因緣と及び無量の功德とを皆成就せり。

復た八百萬億の大仙の緣覺あり。(彼等は)[六]斷に非ず、常に非ず、四諦十二因緣皆成就せり。復九百萬億の菩薩摩訶薩あり。(彼等は)皆阿羅漢にして、[七]實智の功德と方便智の功德と(を具足し)獨り大乘を行じて、[八]四眼と、[九]五通と、[一〇]三達と、[一一]十力と、[一二]四無量心と、[一三]四辯と[一四]四攝と、[一五]金剛滅定との一切の功德皆成就せり。

復千萬億の五戒の賢者あり。皆阿羅漢を行じ、[一六]五分法身に廻向し、具足して無量の功德皆成就せり。復た十千の五戒の淸信女あり。皆阿羅漢を行じ成就し、始生の功德も住生の功德も終生の功德も三十生の功德も皆成就せり。復十億の[一七]七賢の居士あり。德行を具足し、[一八]二十二品・[一九]十一切入・[二〇]八除入・八解脫・三慧・十六諦・四諦・[二一]四三二一品觀九十忍を得て、一切の功德みな成就せり。

復萬萬億の九梵あり。(彼等)皆[二二]三淨・三光・三梵と、五憘樂天と、天定功德、定味常樂神通十八生處……功德皆成就せり。復億億の六欲の諸の天子あり。(彼等は)十善の果報と神通の功德とを皆

※　大正國譯大藏に、佛八百萬億の有學無學の大比丘衆と與に耆闍崛山の中に住まりたまへり。皆阿羅にして(有爲の功德………)とあり。

【一】　耆闍崛(gṛjjhakūṭa)山は譯して靈鷲山と云ふ。

【二】　有爲とは梵語 Saṃskṛta の譯語にして、正しく聚められたるもの、又は造作せられたるものの義なり。

【三】　無學とは阿羅漢果を得たるもののこと、有學とは聖道に入りたれども未だ阿羅漢果を得ざるもののことなり。十智等は有部の分てる法數の儘なり。

【四】　法假とは人間を構成する物質的要素を云ひ、受假とは其精神的要素を云ふ。名假とは概念上なり。

【五】　三空觀門とは空・無相・無作の三昧の德を云ふ。卽ち三假の因緣を以ての故に三空

成就せり。復十六の大國王あり。(彼等は)各一萬二萬乃至十萬の眷屬を有し、五戒も十善も三歸の功德も淸信の行をも(皆よく)具足せり。

復五道の一切の無生あり。復他方の不可量の衆あり。復十方の淨土を變じて、百億の高座を現ずる有り、百億の須彌の寶華を化するあり。各ゝの座前の華の上に復無量の化佛あり。無量の菩薩と比丘と八部の大衆とあり。各各寶蓮華に坐せり。(その)華上に皆無量の國土あり、一一の國土に於ける佛及び大衆は、今の如くして異なることとなし。(其等の)一一の國土中の一一の佛及び大衆、各般若波羅蜜を說き給へば、他の大衆及び化衆(並びに)此の三界の中の大衆卽ち十二大衆みな來つて集會し、九劫の蓮華の座に坐せり。其の會は方廣九百五十里にして、大衆は皆僉然として坐せり。

爾の時に十號と 二三 三明と大滅諦と金剛智の 釋迦牟尼佛は、初年の(初)月八日に、方に十地に坐し、二四 大寂室三昧に入りて、思緣して大光明を放ち三界の中を照し給ふ。復(その)頂上より千の寶蓮華を出し結へば、その華は上非想非非想天に至る。(その)光も亦復爾り。乃ち他方の恒河沙の諸佛の國土に至る。時に無色界より無量に變せる大香華香を雨ふらせば、車輪の如き華は須彌山王の如く、雲の如くにして下れり。十八の梵天王(も亦た)百に變ぜる異色の華を雨ふらし、六欲の諸天も無量の色華を雨ふらし、其の佛座の前には、自然に、九百萬億劫の華を生じ、上非想非非想天に至る。是の時に世界は其の地六種に震動せり。

爾の時に諸の大衆は俱に共に僉然として疑を生じ、各相謂つて言はく、二五 四無所畏と十八不共法と五眼とを具せる、法身の大覺世尊は、前に已に我等大衆の爲に、二十九年に摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讚般若波羅蜜を說き給ふ。今日如來は大光明を放つて斯く何事をか作し給ふと。時に十六大國王中の舍衞國の主、波斯匿王その名を月光と曰ひ、德行は十地と六度と三十七品と四の不壞の淨とを具足し、摩訶衍の化を行ず。次第に居士・寶(積)蓋(善)・法(財)、

を得るなり。詳言せば法假の故に空、受假の故に無相、名假の故に無作なり。

【六】 無明によりて世々相續するが故に斷にあらず、自性なきが故に常にあらざるなり。

【七】 實は則ち空を說き、方便は有を照す實あるが故に生死に共住せず、方便あるが故に德に住せず、身を賤うして衆生を濟度するなり。

【八】 四眼とは天眼と慧眼と法眼と佛眼となり。

【九】 五通とは五神通の略、(一)天眼通(二)天耳通、(三)宿命通、(四)他心通、(五)神足通又は神境通とも云ふ。

【一〇】 三達とは過去の宿命明と現在の天眼明と未來の漏盡明とを云ふ。

【一一】 十力とは(一)發心堅固力、(二)大慈力、(三)大悲力、(四)精進力、(五)禪定力、(六)智慧力、(七)身不厭生死力、(八)無生法忍力、(九)解脫力、(十)無礙事力なり。

【一二】 四無量心とは慈心と悲心と喜心と捨心となり。

【一三】 四辯とは法と辭と義と樂說となり。

【一四】 四攝とは布施と愛語と利行と同事となり。

【一五】 金剛滅定。第十地の上忍の定は金剛の煩惱の山を碎くが如く、自ら傾動せざるが

浄名等の八百人に問ひ、復た須菩提、舎利弗等の五千人に問ひ、復彌勒、師子吼等の十千に問へるに、能く答ふるものなかりき。

時に波斯匿王は卽ち神力を以て、八萬種の音樂を作し、十八の梵(天)も、六欲の諸天も亦た八萬種の音樂を作せしかば、(其の)聲は三千乃至十方恒沙の佛土を動かし、緣ありて斯に現ぜり。彼の他方の佛國中、南方の法才菩薩は、五百萬億の大衆と共に、俱に來つて此の大會に入り、東方の寶柱菩薩は九百萬億の大衆と共に、俱に來つて此の大會に入り、北方の虛空性菩薩は、百千萬億の大衆と共に、俱に來つて此の大會に入り、西方の善住菩薩は十恒河沙の大衆と共に、俱に來つて此の大會に入り。六方も亦復是の如くす。樂を作すことも亦た然り。復た共に無量の音樂を作して、如來を覺悟し上れば、佛卽ち時を知ろしめし、衆生の根を得て、卽て卽ち定より起ち、方に蓮華の師子座の上に坐し給へば、金剛山王の如し、大衆は歡喜して、各ゝ無量の神通を現じ、地、及び虛空の中に住せり。

觀空品第二

爾の時、佛、大衆に告げ給はく、十六大國王の意を知れり、國土を護るの因緣を問はんと欲す。吾今、先づ諸の菩薩の爲に、佛果を護るの因緣と、十地の行を護るの因緣とを說かん。諦聽せよ、諦聽せよ。(而して)善く之を思念して如法に修行せよ。

時に波斯匿王言はく「善いかな。大事因緣の故に卽ち百億種の色華を散じ、變じて百億の寶帳と成りて、諸の大衆を蓋へり。」爾の時に大王は、復起ちて禮を作し、佛に白して言さく、「世尊よ、一切の菩薩は云何か佛果を護り、云何か十地の行の因緣を護り給へる」と。佛の言はく、菩薩は二六四生を化するに、色如と受想行識如と、衆生我人常樂我淨如と、知見壽者如と、菩薩如と、六度四攝

故に此の名あり。

【一五b】五戒賢者とは在家居士優婆塞なり。

【一六】五分法身とは。(一)戒・(二)定(三)慧(四)解脫(五)、解脫知見なり。

【一七】七賢に二類あり、小乘の七賢と大乘のそれとなり。小乘の七賢は五停心より世第一法までにて、大乘の七賢は(一)初發心の人、(二)有相行の人、(三)無相行の人、(四)方便行の人、(五)習種性の人、(六)性種性の人、(七)道種の人なり。

【一八】二十二品とは四念處と四正勤と四如意足と五根と五力とを云ふ。

【一九】十一切入とは十遍處とも云ふ。入と處とは同語の異譯のみ、青黃、赤白地水火風空處識處を十となす。

【二〇】八除入とは(一)內有色相外觀色少、(二)內有色相外觀色多、(三)內無色相外觀色少、(四)內無色相外觀色多、(五)青、(六)黃、(七)赤、(八)白、を云ふ。

【二一】四三二一觀。七方便の內煖頂忍世界一法を四現忍と云ふ。本文の四とは卽ち此の四現忍、三とは煖を除き、二とは煖と頂とを除き、一とは煖と頂と忍とを除けるなり。

【二二】三淨とは第三禪の三天

一切行如と二諦如とを觀ぜず。是故に一切の法性は眞實空にして、不來不去無生無滅なり。眞（如實）際に同じく法性に等しく、二もなく（亦た）別もなく（恰も）虚空の如し。是の故に陰入界には、我もなく、（亦た）所有の相もなし。是を菩薩の十地を行化する般若波羅蜜多と爲す。」

（大王）佛に白して言さく、

「若し諸法爾ならば、菩薩の衆生を護化するは、（何等の）衆生をか化すとせむや。」（佛言はく）「大王よ、法性は色受想行識なり。常樂我淨なり。色にも住せず、非色にも住せず、非非色にも住せず、乃至受想行識にも亦住せず、住せざるにもあらず。何となれば、色如にもあらず、色如ならざるにもあらず、世諦の故に（又）三假の故に、衆生を見ると名くるを以てなり。（また）一切の生は性實なるが故に、乃至諸佛と三乘と七賢と八聖とを亦た見と名け、六十二見をば亦見と名くるを以てなり。大王よ、若し名を以て一切の法乃至諸佛三乘四生を見ると名けなば、一切の法を見ることあらざるにあらず。」（大王）佛に白して言さく、

「般若波羅蜜は有法なりや、非非法なりや。摩訶衍は何んが照さむ」と。（佛言はく）

「大王よ、摩訶衍は非非法と見るなり。法若し非非法なれば是を非非法空と名く。（そは）法性も空なり、色受想行識も空なり、十二入・十八界も空なり、六大の法も空なり、四諦も十二因緣も空なるを以てなり。是の法は卽生・卽住・卽滅・卽有・卽空なり。刹那刹那にも亦た是の如く、法は生じ法は住し法は滅するなり。何となれば九十の刹那を一念とし、一念の中の一刹那に於て九百の生滅を經るを以てなり。乃至色（等）の一切の法も亦是の如し。般若波羅蜜は空なるを以ての故に、緣を見ず諦をも見ず、乃至一切の法は空なるなり。卽ち內も空なり外も空なり、內外も空なり、有爲も空なり無爲も空なり、無始も空なり、性も空なり、第一義も空なり、般若波羅蜜も空なり、因も空なり佛果も空なり、空空の故に空なり。但（其有なる所以のものは）法集なるが故に有なるなり、受集

卽ち小淨と無量淨と遍淨とを云ひ、三光とは第二禪の三天卽ち少光と無量光と光音とを云ふ。

【二三】　三明とは三世を明鑒する德なり。

【二四】　大寂室とは大涅槃と云ふに同じ。卽ち佛教に於ける最高最上の現想境なり。

【二五】　四無所畏とは（一）一切智無所畏と、（二）漏盡無畏と、（三）盡苦道無畏と、（四）說障道無畏となり。

【二六】　四生とは胎生（人間等の如き）と、濕生（虫の如き）と、卵生（鳥等の如き）と、化生（鬼等の如き）を云ふ。

の故に有なるなり、名集の故に有なるなり、[二七]因集の故に有なるなり、[二八]果集の故に有なるなり、[二九]十行の故に有なるなり、[三〇]佛果の故に有なるなり、乃至六道も一切有なるなり。」

「善男子よ、若し菩薩有りて法と衆生と我人と知見とを見ば、斯の人は世間を行じて世間に異ならざるなり。諸法に於いて動ぜず、到らず滅せず、相もなく無相も無し。一相の法も亦如かなり。諸の佛法僧も亦如かなり。是れ卽ち初地の一念の心に八萬四千の般若波羅蜜を具足するなり。」

「卽ち載するを摩訶衍と名け、卽ち滅ぼすを[三一]金剛と爲し、亦た定と名け、亦た一切行と名く。光讃般若波羅蜜中に說くが如し。」

「大王よ、是の經の[三二]名味句は百佛千佛百千萬佛の說き給へる名味句なり。恒河沙の三千大千國土、の中に於いて無量の七寶を成じて、三千大千國土の中の衆生に施し、皆七賢四果を得せしめんも、此の經の中に於いて[三三]一念の信を起さんには如かず。何に況んや一句を觧する者をや。句も句にあらず、句にあらざるに非ざるが故に般若は句にあらず、句は般若にあらず、般若も亦た菩薩にあらざるなり。何となれば十地三十生も空なるが故なり。始生と住生と終生とは不可得にして、地地の中の三生も空なるが故なり。亦[三四]薩婆若にあらず、摩訶衍に非ず、(そは)空なるが故なり。」

「大王よ、若し菩薩の境を見、智を見、說を見、受を見るは、(これ)聖見にあらざるなり。倒想を以て法を見るは、(これ)凡夫の人なり。三界を見ることは、(これ)衆生果報の名なり。六識の無量の欲を起すこと無窮なるを名けて、欲界藏の空となし、或色の起す所の業果を名けて、色界藏の空をなし、或は心の起す所の業果を名けて、無色界藏の空となす。三界も空なれば、三界の根本たる無明藏も亦た空なり。三地に九の生滅あり、前の三界の中の、餘の無明習(氣)の果報も空なり。金剛の菩薩は理盡三昧を得るが故に、或は果の生滅も空なり。有果も空なり因も空なるが故に空なり。薩婆若も亦た空なり。滅果も空なり。或は前に已に空なるが故に、佛の三無爲の果を得たまへる、

【二七】因集とは是れ生死の因にして集諦なり。
【二八】果集とは是れ生死の果にして苦諦なり。
【二九】十行とは道諦を指し、十信より十地に至るまで各十種の行門あるなり。
【三〇】佛果とは涅槃の異名にして滅諦のことなり。
【三一】般若の能く煩惱を滅ぼすこと、恰も金剛の物を破するが如きを云ふ。
【三二】名句味。一字を字と名づけ二字を名と曰ひ、四字以上を名句と名け、句の所詮を味と云ふ。
【三三】無漏の心より起る一念の信は、有漏の心を以てする財法二施の功德に勝るを云ふ。
【三四】薩婆若は一切智と翻す卽ち佛果なり。

[三五]智緣滅と[三六]非智緣滅と虛空と薩婆若の果も空なり。善男子よ、若し修習し聽說するあるも、聽くこともなく說くことも無く、虛空の如し、法は法性に同じく、聽も同じく說も同じし。一切の法も皆如かなり。」

「大王よ、菩薩の佛果を修護すること此の若しと爲す。般若波羅蜜を護るものは、薩婆若と十力と十八不共法と五眼と五分法身と四無量心と一切功德の果を護ると爲す。」

佛の(是の)法を說き給ふ時、無量の人天衆は法眼淨と性地と信地とを得、百千の人ありて皆大空菩薩の大行を得たり。

菩薩敎化品第三

佛に白して言さく、

「世尊よ、十地の行を護る菩薩は、云何なる行をか行じ、云何なる行を以てか衆生を化し、何なる相を以てか衆生を化すべき」と。佛の言はく、

「大王よ、五忍は是れ菩薩の法なり。伏忍の上中下と、信忍の上中下と、順忍の上中下と、無生忍の上中下と、寂滅忍の上中下と(を五忍と云ひ、是を行するを)名けて、諸佛菩薩と爲す般若波羅蜜を修す。

「善男子よ、初めて相信を發する恒河沙の衆生は、伏忍を修行して、三寶の中に於て習種性の十心を生ず。(十心とは)信心と精進心と念心と慧心と定心と施心と戒心と護心と願心と廻向心となり。是れ菩薩の能く少分に衆生を化すと爲す。已に二乘を超過せる一切の善地、一切の諸佛菩薩は十心を長養して聖胎と爲すなり。(卽ち)次第に乾慧性の種性を起し十心あり。謂はゆる四の[三七]意止たる身受心法は、不淨にして苦、無常にして無我なり。三の意止たる三善根は、慈と施と慧となり。三

【三五】智緣滅。智は觀心にして緣は煩惱なり。今それ佛は正しく心を觀じて煩惱を滅するが故に智緣滅と云ふなり。

【三六】非智緣滅とは正因佛性なり、性は本來自ら清淨にして煩惱の垢なく、觀行を勞せずして惑を滅するが故に、非智緣滅と云ふ。

【三七】意止とは智慧を以て心を止住せしむるを云ふ。意とは心王にして身受心法は其の所觀の境なり。

意止とは、謂はゆる三世の過去の因忍と現在の因果忍と未來の果忍となり。是の菩薩は亦能く一切衆生を化するなり。已に能く我人知見衆生等の想及び外道の倒想を過ぐ壞する能はざる所なり。復た十の道種性の地あり、謂はゆる色識想受行を觀じて、戒忍と知見忍と定忍と慧忍と解脫忍とを得るなり。三界の因果を觀ずるに、空忍と無願忍と無想忍とあり。二諦の虛實と一切の法の無常なるを觀ずるを無常忍と名く。一切の法は空なるを以て無生忍を得るなり。是の菩薩は十堅心を以て轉輪王と作り、亦た能く四天下を化し、一切衆生の善根を生ぜしむ。また信忍の菩薩は、謂はゆる善達明中の行者にして、三界の色煩惱の縛を斷じ、能く百佛千佛萬佛の國中を化するに百身千身萬身の神通を現じて、無量の功德あり。常に十五心を以て首と爲す。(十五心とは)四攝法と四無量心と四弘願と三解脫門となり。是の菩薩は善地より薩婆若に至るまで、此の十五心を以て一切の行の根本種子と爲す。

また順忍の菩薩と云ふは、謂はゆる[三八]見と勝と現法となり。能く三界の心等の煩惱の縛を斷ずるが故に、一身を十方の佛國の中に現じて、無量不可說の神通を以て衆生を化す。

また無生忍の菩薩と云ふは、謂はゆる[三九]遠と不動と觀慧となり。亦三界の心色等の煩惱習を斷ずるが故に、不可說不可說の功德神通を現ず。

復次に寂滅忍とは、佛と菩薩と同じく此の忍を用ゐて金剛三昧に入るを云ふなり。(則ち)下忍の中に行ずるを名けて菩薩と爲し、上忍の中に行ずるを薩婆若と爲す。共に第一義諦を觀じて、三界の心習無明を斷じ、相を盡すを金剛と爲し、相と無相とを盡すを薩婆若と爲す。(而して)世諦と第一義諦との外に超度するを、第十一地の薩婆若と爲す。(こは)有にもあらず無にもあらざるを覺す。湛然として淸淨にして常住不變なり。眞(如實)際に同じく法性に等し。無緣の大悲を以て一切衆生を教化し、薩婆若の乘に乘じて、來つて三界を化す。」

【三八】見とは第四の炎慧地を指し勝とは第五の難勝地、現法は第六の現前地なり。

【三九】遠とは第七の遠行地にして不動は第八の不動地、觀慧は第九の善慧地なり。

「善男子よ、一切衆生の煩惱は三界の藏を出でず。一切衆生の果報たる二十二根も三界を出でず、諸佛の應化の法身も亦三界を出でず。三界の外に衆生なし、佛は何の化する所かあらむ。是の故に我は言ふ、三界の外に別に一衆生界の藏ありと云ふは、外道の大有經中、七佛の所說にあらずと說けり。」

「大王よ、我は常に一切衆生に語れり、三界の煩惱の果報を斷じ盡せるをば名づけて佛と爲し、自性淸淨なるを覺薩婆若性と名く。衆生の本業、是諸佛菩薩の本業にして本修行せし所たり、五忍の中に十四忍を具足せりと」。佛に白して言さく、

「云何ぞ菩薩は本業淸淨にして衆生を化するや。」

佛の言はく、

「(そは)一地より乃至後の一地に至るまで自ら行ずる所と及び佛の行處と一切を知見するを以てなり。本業とは、若し菩薩にして百佛國の中に住するときは、閻浮の四天王と作つて百の法門を修し、二諦平等の心を以て一切衆を化す。」

「若し菩薩にして千佛國の中に住するときは、忉利天の王と作つて千の法門を修し、十善道を以て一切衆生を化す。」

「若し菩薩にして十萬佛國の中に住するときは、燄天王と作つて十萬の法門を修し、四禪定を以て一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして百億佛國の中に住するときは、兜率天王と作つて百億の法門を修し、道品を行じ一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして千億佛國の中に住するときは、化樂天王と作つて千億の法門を修し、二諦と四諦と八諦とを以て一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして十萬億佛國の中に住するときは、他化天王と作つて十萬億の法門を修し、十二因緣の智を以て一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして百萬億佛國の中に住するときは、初禪(天)の王と作つて百萬億の法門を作し、方便智と願智とを以て一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして百萬微塵數の佛國の中に住するときは、二禪の梵王と作つて百萬微塵數の法門を修し、雙照の方便神通智を以て一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして百萬億阿僧祇微塵數の佛國の中に住するときは、三禪の大梵王と作つて百萬億阿僧祇微塵數の法門を修し、四無礙智を以て一切の衆生を化す。」

「若し菩薩にして不可說不可說の佛國の中に住するときは、第四禪の大靜天王三界の主と作つて、不可說不可說の法門を修し、理盡三昧を得て佛の行處に同じて三界の原を盡し、一切衆生を敎化すること佛の境界の如くす。是の故に一切菩薩の本業化行は淸淨なり。」

「若し十方の諸の如來も、亦た是の業を修して無上覺の果に登れば、三界の王と作つて一切の無量の衆生を化す。」

爾の時に百萬億恒河沙の大衆は各座より起ちて、無量不可思議の華を散じ、無量不可思議の香を燒き、釋迦牟尼佛及び無量の大菩薩を供養し、掌を合せて、波斯匿王の般若婆羅蜜多を說くを聽き、今佛前に於いて偈を以て歎じて曰く、

「世尊導師は金剛の體なり、　心行寂滅にして法輪を轉じ、　八辯の洪音もて衆の爲に說き給ふ。
時に衆の道を得たもの百億萬なり。」

「時に六天を人とは出家して、　道(の爲)に比丘衆と成つて菩薩と行ず。」

「五忍の功德は妙法門にして、　十四の正士は能く諦かに了れり。　三賢と十聖とは忍の中に行

じ、　唯佛一人のみ能く源を證し給ふ。」
「佛と僧と法との海は三寶の藏にして、　無量の功德その中に攝在せり。　十善の菩薩は大心を發して、　長く三界苦輪の海に別る。」
「中下品の善は粟散王となり、　上品の十善は鐵輪王となる。」
「(十住の菩薩なる)習種(性の人)は、　銅輪(王として)二天下に(王と)なり、　(十行の菩薩なる)性種性(の人は)銀輪(王として)三天(下に王)となり、　(十廻向の菩薩なる)道種(性の)堅德は轉輪王となり。　七寶の金光は四天下を(光被す)。」
「伏忍の聖胎は三十人、　(卽ち)十信と十止と十堅心となり、　三世の諸佛は中に於いて行じ、此の伏忍に由つて生ぜざるなし。」
「(これ)一切の菩薩行の本源なり、　是故に發心信心を難しとなす。　若し信心を得れば、必ず退かず　進んで無生の初地の道に入り、　衆生を敎化して覺の中に行ず、　是を菩薩の初發心と名く。」
「善覺の菩薩は四天の王として、　二諦平等の道を雙べ照す。」
「權に衆生を(敎)化して百國に遊び、　始めて一乘無相の道に登り、　理の般若に入るを名けて住と爲し、　住して德行を生ずるを地と爲す。」
「初住の一心に德行を(具)足すれば、　第一義に於て而も動せざるなり。」
[四〇]「離達の開士は忉利王として、　形を六道の千國土に現じ、　無緣無相にして第三諦なり、　死も無く生も無く(また)二照もなし。」
「明慧の[四一]空照は餤天王として、　形を萬國に應じて群生を導く。　忍心は無なり、三諦の中に有を出でて無に入り變化して生ず

【四〇】離達。離とは破戒の垢を離るるを云ふ。達とは三觀に通達するを云ふ。開士とは空法の道を開く人と云ふ義なり。

【四一】空照。別敎の人は三地に於いて人法の二空に達し忍を成就す、之を空照と云ふ。圓敎にては則ち十住の第三住なり。

「善覺と離（達）と明（慧）の三道の人は、能く三界の色の煩惱を滅し、還つて三界の身口の色を觀じて、法性第一なれば遺なく照す。」

「燄慧の妙光は大精進なり、兜率天の王として億國に遊ぶ。實智は緣寂なり、方便道を以て無生に達して空有を照し了る。」

「勝慧は三諦自ら達して明かに、化樂天の王として百億の國あり。空空を諦觀して二相なく、六道に變化して無間に入るなり。」

〔四二〕「法現の開士は自在の王たり、無二無照にして理空に達し、三諦現前して大智光あり、千億の（國）土を照して一切を敎ふ。」

「燄と勝と法現とは無相の定を以て能く三界の迷心の惑を洗ふ。空慧は寂然として緣觀なく、還つて心空無量の報を觀ず。」

「遠達の無生は初禪の王として、常に萬億の土に（遊んで）衆生を敎ふ。」

「未だ報身を度せずんば一生あり、進んで等觀法流の地に入り、始めて無緣の金剛忍に入り、三界の報形永く受けず、第三義を觀じて二照なく、二十一生空寂を（觀ずるを以て）行と（爲）す。」

「三界の愛習道定に順ふ、遠達の正士のみ獨り諦かに了ず。」

「等觀の菩薩は二禪の王たり、變生の法身は無量の光あり、百恒の土に入りて一切を（敎）化し、圓に三世恒劫の事を照す。」

〔四三〕「返照と樂虛と無盡源とは、第三の諦に於て常に寂然たり。」

〔四四〕「慧光の開士は三禪の王として、能く千恒に於いて一時に現じ、常に無爲に在りて空寂を行とし、恒沙の佛藏を一念に了ず。」

【四二】法現。別敎の第六地の菩薩の般若を圓滿せるを法現と云ふ。圓敎にては第六住の中に於いて理空に達せるを云ふなり。

【四三】返照とは過去七地已前の事を照すを云ひ、樂虛とは現在の事を緣するを云ひ、無盡源は未來の事を照すを云ふ。

【四四】慧光とは第九善慧地の菩薩なり。

四五「灌頂の菩薩は四禪の王たり、億恒の土に於いて群生を(敎)化し、始めて金剛に入りて一切を了じ、二十九の生をば永く已に度す。」

「(これ)寂滅忍中の下忍の觀なり、一たび轉ずれば妙覺常に湛然たり。」

「等と慧と灌頂との三品の士は、前の餘習の無明の緣を除く。無明の習相の故煩惱は、二諦の理窮むるを以て一切盡す。」

四六「圓智の無相は三界の王たり、三十生を盡して大覺に等し。」

「大寂にして無爲なるは金剛藏なり、一切の報盡きて極まりなきの悲あり、第一義諦は常に安隱にして、原を窮め性を盡して妙智を存す。」

「三賢十聖は果報に住し、唯佛一人のみ淨土に居り給ふ。一切の衆生は暫く報に住し、金剛の原に登れば淨土に居す。」

「如來の三業の德は極まり無し、我いま月光は三寶を禮す。」

「法王は無上にして人中の樹なり、大衆を覆蓋して無量の光あり。口に常に法を說いて義なきに非ず、心智寂滅にして無緣を照し給ふ。」

「人中の獅子は(大)衆の爲に說き給へば、大衆歡喜して金華を散じ、百億萬の土は、六たび大いに(震)動し、含生の類も妙報を受く。」

「天尊は快よく十四の王を說き給ふ、是の故に我いま略して佛を歎じ上つる。」

時に諸の大衆は、月光王の十四王の無量の功德藏を歎ずるを聞いて、大いなる法利を得たり。即ち座の中に於いて、十恒河沙の天王と、十恒河沙の梵王と、十恒河沙の鬼神王と、乃至三趣とありて無生法忍を得、八部の阿須輪王は現に鬼神を轉じて天上に道を受け、三生にして正位に入る者あり、或は四生五生乃至十生にして正位に入ることを得、聖人の性を證して、一切無量の報を得ぬ。

【四五】灌頂。華嚴經第二十七に曰く、譬へば輪王の太子にして王相を成就すれば、四大海の水を取つて太子の頂上に灌ぎ、初めて灌頂の大王と名くるが如く、菩薩も亦是の如し。佛職を受くる時、諸佛は智水を以て是の菩薩の頂に灌ぐを灌頂の法王と名く。

【四六】圓智無相。一切種智を圓滿して無相の相を盡すが故に圓知無相と云ふ。

佛は諸の道果を得る實の天衆に告げ給はく、「善男子よ、是の月光王は、已に過去の十千劫中の龍光王佛の法中に於て、四住の開士となり、我は八住の菩薩たりき。今わが前に於いて大獅子吼すること是の如し。汝が言ふ所の如きは、眞の義を得て、不可思議不可度量を說く。唯佛と佛とのみ乃ち斯の事を知り給ふ」。

「善男子よ、其說く所の十四の般若波羅の三忍と地地の上中下の三十忍とは、一切の行藏にして(又)一切の佛藏なり不可思議なり。何となれば一切の諸佛も、是の中に生じ、是の中に滅し、是の中に化し、(而かも)生も無く、滅も無く、化も無く、自もなく、他もなく、第一にして無二なり。化に非ず、不化に非ず、相に非ず、無相に非ず、來もなく、去もなく、虛空の如くなるを以てなり。一切の衆生は、生滅なく縛解なく、因に非ず果に非ず、(又)因果にあらざるにも非ず。煩惱は我と人と知と見と受者となり。我所は(空なり、そは)一切の苦受の行は空なるを以てなり。一切の法集は幻化の五陰にして合もなく散もなし。(そは)法は法性に同じく寂然として空なるを以てなり。法は境界空なり。空にして無相なれば、轉ぜず顚倒せず幻化に順ぜず、三寶もなく聖人も無く六道も無し。虛空の如くなるが故に、般若は知も無く、見も無く、行にあらず、緣にあらず、因にあらず、受にあらず、一切の照相を得ざるが故に行道の相なり。斯の行道の相は虛空の如し。故に法の相も是の如し。何ぞ心得無心得有る可けんや。是を以て般若の功德は、衆生の中に行ず可からざるを行じ、五陰の法の中に行ず可からざるを行じ、境の中に行ず可からざるを行じ、解の中に行ず可からざるを行ず。是の故に般若は不可思議なり。而も一切の諸佛菩薩は中に於て行ずるが故に亦不可思議なり。一切の諸の如來が、幻化無住の法中に於いて、化することも亦不可思議なり」。

「善男子よ、此の功德藏は、假使無量恒河沙の第十三灌頂の開士、この功德を說くとも、百千億分(の一)に中り、王の所說の如きは、大海の一滴の如くならむ。我いま略して分義の功德を述るに、

大いに一切衆生を利益することとあり。亦過去(未)來(現)今の無量の諸の如來の爲に述ぶる所は三賢十聖の讃歎することと無量なりとも、是れ月光王の分義の功德ならむ」。

「善男子よ、是の十四の法門は、三世の一切の衆生、一切の三乘(及び)一切の諸佛の修集する所なり。未來の諸佛も亦復是の如し。若し一切の諸佛菩薩は、此の門に由らずして、薩婆若を得と云はゞ、此の處あることとなし、何となれば一切の諸佛及び菩薩は異路なきを以てなり。是の故に一切の善男子よ、若し人あり諸忍の法門の信忍、止忍、堅忍、善覺忍、離達忍、明慧忍、焰慧忍、勝慧忍、法現忍、遠達忍、等覺忍、慧光忍、灌頂忍、(及び)圓覺忍を聞かば、是の人は百劫千劫無量恒河沙の生生の苦難を超過し、此の法門に入りて、現身に報を得む。時に諸の衆中に、十億の同名の虚空藏海の菩薩ありて、法樂を歡喜して、各に散花し、虚空の中に於て變じて無量の花臺と成り、(其の)上に無量の大衆ありて、十四の正行を說けり。十八の梵六欲天王も亦寶華を散じ、各虚空の臺上に座して十四の正行を說き、(これを)受持し讀誦して其の義理を解せり。(また)無量の諸の鬼神も、現身に般若波羅蜜を修行せり」。

佛、大王に告げたまはく、「汝は先に云何なる相を以てか衆生を化すべきと言へり。若し幻化の身を以て幻化の者を見るが如きは、是れ菩薩の眞に衆生を行化するなり。衆生の識の初一念も木石に異なり、生得の善、生得の惡あり。惡は無量の惡識の本たり、善は無量の善識の本たり。初の一念より金剛の終の一念にいたるまで、中に於て不可說不可說の識を生じて衆生の色心を成す。是れ衆生の根本なり。色をば色蓋と名け、心をば識蓋想蓋受蓋行蓋と名く。蓋とは陰覆を用と爲し、身をば積聚に名く。大王よ、此の一色の法は無量の色を生ず。眼の所得を色と爲し、耳の所得を聲と爲し、鼻の所得を香と爲し、舌の所得を味と爲し、身の所得を觸と爲す。堅持するを地と名け、水を潤と名け、火を熱と名け、輕動を風と名け、五識を生ずる處を根と名く。是の如く一色一心に不可

思議の色心あり。大王よ、凡夫の六識は麁なるが故に、假名の青黃方圓等の無量の假の色法を得、聖人の六識は淨なるが故に、實法の色香味觸の一切の實の色法を得るなり」。

「衆生とは世諦の名なり。若しくは有、若しくは無、但衆生の憶念より生ずるを名けて世諦と爲す。世諦は假誑幻化の故に有なり、乃至六道も幻化なり、衆生幻化を見る。幻化にして幻化を見る。婆羅門・刹(帝)利・毘舍・首陀・神我等の色心名けて幻諦と爲す」。

「幻諦の法無く、佛の出世、前には名字もなく義名も無し。幻法と幻化は名字もなく、體相もなく、三界の名字も無く、善惡の果報六道の名字も無し」。

「大王よ、是の故に諸佛は世に出現して、衆生の爲の故に、說いて三界六道の名字を作し給ふ。是を無量の名字と名く。空法と四大法と心法と色法との如し。相續の假法は、一にあらず異にあらず。一も亦續かず異も亦續かず。一にあらず異にあらざるが故に相續諦と名く」。

「相彌の假法をば、一切相待と名け、亦不定相待と名く。五色等の法と有無一切等法との如し。一切の法は皆緣假に成りて衆生を成す。俱時の因果、異時の因果、三世の善惡は一切の幻化なり。是れ幻諦の衆生なり。大王よ、若し菩薩も上の所見の如く、衆生も幻化なり、皆是れ假誑なり、空中の花の如し。十住の菩薩(及び)諸佛の五眼は、幻諦の如くに見て、菩薩の衆生を化することも此のごとしと爲し給へり」。

時に諸の無量の天子及び諸の大衆ありて、伏忍を得たるものあり、(又は)空無生忍を得たるものあり、乃至一地不可說の德行を得たるものありき。

二諦品第四

爾の時に波斯匿曰言はく、「第一義諦の中に世諦ありや、不や。若し無しと言はゞ、智は應に(眞

智俗智の)二なるべからず。若し有りと言はゞ、智は應に一なるべからず。一二の義その事いかん」。

佛大王に告げてのたまはく、

「汝は過去七佛(の時)に於いて、已に一義二義を問ひき。汝も今聽くことなく、我も今說くことなし、聽くことなく說くことなきを卽ち一義二義とするが故に、諦かに聽き諦かに聽きて、善く之を思念し、法の如くに修行せよ。七佛の偈も是の如し」。

「無相の第一義は、自も無く他作も無し。因緣は、本より自ら有にして、自も無く他作も無し」。

「法性は本より無性なり。第一義も空如なり。諸有は本より有法にして、[四七]三假の集は假有なり」。

「無と無との諦は實に無なり、寂滅にして第一空なり。諸法は因緣の有なり。有無の義は是の如し」。

「有と無とは本より自ら二なり譬へば牛の二角の如し。照解すれば無二なりと見るも、二諦は常に卽せず」。

「解心は不二なりと見る、二を求むるに不可得なり。二諦は一なりと謂ふにあらず、非二も何ぞ得べけむや。解に於いては常に自ら一にして、諦に於いては常に自ら二なり。此の無二に通達すれば、眞に第一義に入る」。

「世諦は幻化より起る、譬へば虛空の華の如し。影と[四八]三手との無なるが無く。因緣の故に誑有なり」。

「幻化は幻化を見る、衆生を幻諦と名く。幻師は幻法を見れども、諦實は則ち皆無なり」。

「(これを)名けて諸佛の觀と爲す、菩薩の觀も亦た然かなり」。

「大王よ、菩薩摩訶薩は、第一義の中に於いて常に二諦を照して衆生を敎化す。佛と及び衆生とは一にして而も無なり。何となれば衆生空なるを以ての故に、菩提の空に置くことを得、菩薩空なる

【四七】 三假とは一に名假、二に受假、三に法假なり。

【四八】 三手とは三本の手を有する人間と云ふ意味なり。

を以ての故に、衆生の空に置くことを得ればなり。一切の法は空なるを以ての故に、空も(亦た)空なり。何となれば般若は無相にして二諦は虚空なり、般若空なれば、無明より乃至薩婆若にいたるまで、自相もなく他相も無きを以てなり。五眼も成就する時は、見れども所見なし。行も亦受けず不行も亦受けず。非行非不行も亦た受けず、乃至一切の法も亦受けず。菩薩の未だ成佛せざる時は菩提を以て煩惱となし。菩薩の成佛する時は、煩惱を以て菩提と爲す。何となれば第一義に於いては(此の二は)不二なるを以てなり。諸佛如來も乃至一切の法も如なるを以てなり。

(大王)に白して言さく「云何んか、十方の諸の如來と一切の菩薩とは、文字を離れずして而も諸法の相を行ずるや」。

(佛の言はく)「大王よ、法輪とは、[四九]法本も如なり。重誦も如なり。受記も如なり。不誦偈も如なり。無問自說なり。戒經も如なり。譬喩も如なり。法界も如なり。[五〇]本事も如なり。[五一]方廣も如なり。[五二]未曾有も如なり。[五三]論議も如なり。是の名味句も音聲も、果たる文字記句も一切如なり。若し文字を取るものは空を行ぜざるなり」。

「大王よ、如如の文字を修するは、諸佛の[五四]智母なり。一切衆生の性、根本の智母を卽ち薩婆若の體と爲す。諸佛の未だ成佛せざるときは、當佛を以て智母と爲し、未得を[五五]性と爲し、已得を薩婆若となす。三乘の般若は不生不滅にして自性常住なり。(そは)一切の衆生は、此を以て覺性とするを以てなり。若し菩薩は受も無く文字も無く、文字を離れて(而も)文字にあらざるにもあらず、修すれども修なきを文字を修するものと爲す。(斯くて)般若の眞性を得れば、(これ)般若波羅蜜なり、大王よ若し菩薩の佛を護り衆生を護化し、十地の行を護ることは此の如しと爲す」。

(大王)佛に白して言さく、「無量の品の衆生なれば根も亦た無量なりや、行も亦無量なりや、法門は一となさんや、二となさんや、(將た)無量となさんや。」

【四九】法本とは修多羅卽ち經の異譯なり。
【五〇】本事とは闍多伽の譯語にして釋尊の因地の修行を物語體に譯せる經典なり。
【五一】方廣とはワイプリヤの譯語なり。
【五二】未曾有とは阿浮陀達磨の譯語にして又の譯名を最勝經と云ふ。
【五三】上の法本より此の論議までを十二分教と云ふ。
【五四】智母。因緣生の智は敎を智母と爲す。而して空は文字の如く、文字は空の如し。故に如如と云ふ。此の如如に因つて佛智を生ず。故に智母と云ふなり(科註)。
【五五】性とは佛性の略なり。此の句の意味は、衆生の身にありては佛性と名け、佛の身にありては一切種智と名くと云ふことなり。

(佛の言はく)「大王よ、一切の法の觀門は、一にあらず二にあらず、乃ち有無量一切の法も亦有相にあらず、無相にあらさるに非ず。若し菩薩は衆生を見るに、一とも見二とも見、(又は)一とも見ず二とも見ず。不二とは第一義諦なり。大王よ、若しくは有、若しくは無とは即ち世諦なり。三諦を以て一切の法を攝す。(そは)空諦と色諦と心諦の故なり。我は一切の法は三諦を出でずと說く。我も人も見も五受陰も空なり、乃至一切の法も空なり。衆生の品根行の不同なるが故に、法門も一にあらず二にあらず。大王よ、七佛の摩訶般若波羅蜜を說き給ふと、我が今般若波羅蜜を說くとは二もなく別もなし。汝等大衆よ、當に此經を受持し讀誦し解說するの功德によりて、無量不可說不可說の佛あり、一一の佛は無量不可說の衆生を敎化し、一一の衆生みな成佛することを得む。是の佛は復無量不可說の衆生を敎化して皆成佛することを得せしめん。是れ上の三佛の般若波羅蜜多を說き給ふ時八百萬億の偈あり、一偈の中に於いて、復分ちて千分と爲し、一分の中に於いて、一分の句義を說くとも、(其の功德)窮盡すべからず。況んや復此の經中に於いて、一念の信を起さば、此の諸の衆生は百劫千劫十地等の功德を超えん。何に況んや、(此の經を)受持し讀誦し解說するものゝ功德をや。

(彼等は)即ち十方の諸佛と等うして異りあること無けん。當に知るべし是の人は即ち是れ如來なり、佛を得んこと久しからざらん」。

時に諸の大衆此の經を說き給ふを聞き、(其の中)十億の人は三空忍を得、百萬億の人は大空忍の十地の性を得ぬ。

「大王よ、此の經を名けて、仁王問般若波羅蜜經と爲す。汝等は、(此の)般若波羅蜜經を受持せよ、此の經に復無量の功德あれば、名けて護國土の功德と爲す。亦は一切の國王の法藥と名く。(これを)服行するに大用あらずと云ふこと無し。(此の經には)舍宅を護るの功德あり、亦た一切衆生の身を護る(功德あり)。即ち、此の般若波羅蜜は、是れ國土を護ること、城塹墻壁刀劍鉾楯の如し。汝應に受持せば般若波羅蜜も亦復是の如くなるべし」。

卷の下

護國品第五

爾の時に佛、大王に告げたまはく、汝等善く聽け「吾いま正に國土を護る法用を說かむ。汝當に、般若波羅蜜を受持すべし。國土亂れ、破壞し、刧燒し、諦來つて國を破らんと欲する時に當つて、當に百の佛像と百の菩薩像と百の(阿)羅漢緣と百の比丘衆と四大衆と七衆とを請じて、共に百の法師を聽請して、般若波羅蜜を講ぜしむべし。(又)百の獅子吼の高座の前に、百燈を燃し、百の和香を燒き、百種の色花を以て用ゐて、三寶を供養し、三衣什物もて法師を供養し、小飯中食また復時を以てせよ。大王よ、一日二時に此の經を講讀せよ。汝が國土の中に、百部の鬼神あり、是の一一の部に復百部ありて、此の經を聞かんと樂ふ。此の諸の鬼神は、汝が國土を護るべし。大王よ、國土亂るる時は、先づ鬼神亂る。鬼神亂るるが故に、萬民亂れ、賊來つて國を刧し、百姓亡喪して、臣と君と太子と王子と百官と共に是非を生ず。(加之)天地怪異にして、二十八宿星の道も日月も(共に)時を失し度を失し、多くの賊起ることあり。大王よ、若し火難水難風難(及び)一切の諸難あらば、亦應に此の經を講讀すべし、法用は上に說くが如し」。

「大王よ、但國を護るのみにあらず、亦福を護ることあり。(卽ち)。富貴官位七寶を意の如く行來することを求め、男女を求め、慧解名聞を求め、六天の果報、人中の九品の果樂を求めんにも、亦た此の經を講ずべし。法用は上に說くが如し」。

「大王よ、但福を護るのみにあらず、亦衆難を護るなり。若しくは疾病苦難、杻械枷鎖その身を檢繫し、四重の罪を破り、五逆の因を作し、八難の罪を作して六道の事を行じ、一切の無量の苦難にも亦此の經を講ずべし。法用は上に說くが如し」。

「大王よ、昔日王あり、釋提桓因と云ふ。頂生王來りて天に上り其の國を滅ぼさんと欲す。時に帝釋天王卽ち七佛の法用の如く、百の高座を敷き、百の法師を請じて、般若波羅蜜を講ぜしかば、頂生(王)は卽ち(退)却しぬ。滅罪經の中に說くが如し」。

「大王よ、昔天羅國に王ありき、(彼に)一りの太子あり、王位に登らんと欲するに班足太子と名く。外道の羅陀師より、千(人)の王頭を取つて以て家神を祭らば、自ら其の位に登るべしとの敎を受けぬ。已にして九百九十九王を得たれども一王を少けり。卽ち、北の方萬里を行いて一王を得たり、名を普明王と曰ふ。其の普明王、班足王に白して言さく、「願くは一日を聽されよ。(われ)沙門に飯食せしめて、三寶を頂禮せん」と。かくて班足王は一日の間之を許しぬ。時に普明王は卽ち過去七佛の法に依りて、百の法師を請じ、百の高座を敷き、一日二時に、般若波羅蜜の八千億の偈を講じ竟りぬ。其の第一の法師は、普明王の爲に、偈を說いて言はく、

「劫燒くること終に訖はれば、乾坤も洞然たり。　須彌も巨海も、　都て灰となつて颺がらん」。

「天龍も福盡きて、　中に於いて凋喪し、　二儀すら尙ほ殞ぶ、　國(家)何の常かあらん。」

「生老病死は、　輪轉して際なし、　事と願と違へば、　憂悲して害を爲す」。

「欲深ければ禍重し、　瘡疣は外に無し。　三界は皆苦なり、　國に何の賴かあらん」。

「有は本自より無なり、　因緣を以て諸(物)を成す。　盛なる者は必ず衰へ、　實なるものは必ず虛し」。

「衆生は蠢蠢として都て幻居の如し。　聲も響も俱に空にして、　國土も亦如なり」。

「識神は形なく、　假に四虵に乘ぜり。　明なくして寶象し、　以て樂を車と爲す」。

「形には常の主なく、　神には常の家なし。　形神すら尙ほ離る、　豈國あらんや」。

「爾の時に法師此の偈を說き已れば、時に普明王の眷屬は[一]法眼空を得、王自らは虛空等定を證

【一】法眼空とは人空のことにして、虛空等定は卽ち法空なり。

得し、聞法悟解して、還つて天羅國班足王の所に至り、衆の中に於いて、九百九十九王に告げて言はく、「命に就くの時いたりぬ、人人皆、過去七佛の仁王般若波羅蜜經中の偈句を誦すべし」と。時に班足王は諸王に問うて言はく、「皆何の法をか誦する」と。時に普明王は卽ち上の偈を以て王に答へしかば、王は是の法を聞いて空三昧を得、九百九十九王も亦た法を聞き已つて三空門定を證せり」。

「時に班足王は極めて大いに歡喜して、諸王に告げて言はく、「我、外道の邪師の爲に誤らる、君等の過にあらず。汝(等)、本國に還りて、各法師を請じて、般若波羅蜜の名味句を講說すべし」と。時に班足王は國を以て弟に付し、出家し道を爲めて、無生法忍を證せり。(これ)十王經の中に說くが如し。五千の國王も常に是の經を誦して、現世に報を生じぬ、大王よ、十六大國の王の國を護るの法を修することも應に是の如くなるべし。汝當に奉持すべし。天上人中六道の衆生も皆應に七佛の名味句を受持すべし。未來世の中に復無量の小國王ありて、國土護らんと欲するものも亦復然り。(乃ち)法師を請じて般若波羅蜜の名味句を說かしむべし」。

爾の時に釋迦牟尼佛、般若波羅蜜(多)を說き給へば、(その)衆中の五百億の人は[二]初地に入ることを得、復六欲の諸の天子八十萬人ありて、[三]性空地を得、復十八梵王ありて無生法忍を得、(或は)無生法樂忍を得、復先づ以て菩薩を學する者ありて、一地二地三地乃至十地を證し、復八部の阿須輪王ありて[四]十三昧門を得、二の三昧門を得、鬼身を轉じて天上の正受を得、此の會にあるものも皆自性信乃至無量空信を得ぬ。吾いま略して天等の功德を說く、具さには(說き)盡すべからず。

散華品第六

爾の時に、十六大國の王は、佛の十萬億の偈をもて、般若波羅蜜を說き給へるを聞き、歡喜無量

【二】初地とは十信の初心地なり。
【三】性空地とは無明の性空を觀ずることを云ふ。
【四】十三昧門とは前に擧げたる十一切入のことにして二の三昧門とは眞俗二諦のことなり。

なりき。即ち百萬億の莖華を散ずるに、虚空の中に於いて變じて一座と爲る。十方の諸佛は共に此座に坐して般若波羅蜜を説き給ふ。無量の大衆は、共に一座に坐し、金羅華を持して、釋迦牟尼佛の上に散ずるに、萬輪の華と成つて大衆の上を蓋ひ、復た八萬四千の般若波羅蜜の華を散ずるに、虚空の中に於いて變じて白雲の臺と成る。臺中の光明王佛は、無量の大衆と共に、般若波羅蜜を説き給ふ臺中の大衆は、電吼華を持して、釋迦牟尼佛及び諸の大衆に散ず。復妙覺華を散ずるに虚空の中に於いて變じて金剛城と作る。城中の師子吼王佛は、十方の佛と大菩薩衆と共に第一義諦を論じ給ふ。時に城中の菩薩は、光明華を持して、釋迦牟尼佛の上に散ずるに、一の華臺と成り、臺中の十方の諸佛及び諸の天人は、天華を釋迦牟尼佛の上に散ずるに、虚空の中に於いて、紫雲の蓋と成り、三千大千世界を覆ふ。蓋中の天人は恒河沙の華を散ずるに雲の如くに下れり。

時に諸の國王は、散華し供養し已つて、過去の佛、現在の佛「及び」未來の佛に般若波羅蜜を説き給へと願ふ。一切の受持する者は、比丘・比丘尼・信男・信女の求むる所・意の如くにして、常に般若波羅蜜を行ぜよと願ふ。佛、大王に告げ言はく、「是の如し、是の如し。王の説く所の如く、般若波羅蜜は應に説くべし應に受くべし。是れ[五]諸佛の母なり、諸菩薩の母なり、神通の生處なり」。

時に佛は王の爲に五の不思議神變を現じ、一華を無量華に入れ、無量華を一化に入れ、一佛土を無量の佛土に入れ無量の佛土を一佛土に入れ、無量の佛土を一毛孔の土に入れ、一毛孔の土を無量の毛孔の土に入れ、無量の須彌と無量の大海とを芥子に入れ、一佛身を無量の衆生身に入れ、無量の衆生身を一佛身に入れ、六道身に入れ、地水火風身に入れ給ふ。

佛身も不可思議なり、衆生身も不可思議なり、世界も(亦た)不可思議なり。佛の神足を現じ給ふ時、十方の諸の天人は佛華三昧を得、十恒河沙の菩薩は現身に成佛し、三恒河沙の八部の神王は菩薩の道を成じ、十千の女人は、現身に神通三昧を得たり。善男子よ、是の般若波羅蜜は、三世の利

【五】諸佛の母は實相般若にして、菩薩の母は觀照般若而して神通は文字般若なり。文字は能く智慧を發す、智慧生ずれば即ち神通發る。

益あり、過去には已に說き、現在には今說き、未來には當に說かん。諦かに聽き諦かに聽きて善く之を思念し、法の如くに修行すべし。

受持品第七

爾の時に月光は心に念じて口に言さく、「[六]釋迦牟尼佛を見上まつれば無量の神力を現じ給ひ、亦た千華臺上の寶滿佛を見上つれば、是れ一切の佛の化身の主なり。復た千華葉の世界の上の佛を見上つれば、諸佛は各〻般若波羅蜜を說き給ふ」と。佛に白して言さく、「是の如き無量の般若波羅蜜は、說く可らず、解す可らず、識を以て識る可らず。云何ぞ諸の善男子は、是の經の中に於いて、明了に覺解して、法の如くに、一切の衆生爲に空法の道を開かしめんするや」。大牟尼言はく、

「十三の觀門を修行する諸の善男子ありて大法王と爲り、習忍より金剛頂に至るまで皆法師たり、(衆生を)依持し(正法を)建立するなり。汝等大衆は、應に佛を供養するが如くに之を供養し、應に百萬億の天華天香を持し、以て奉上すべし。」

「善男子よ、其の法師とは、是れ習種性の菩薩なり。若くは在家の婆差憂婆差若くは出家の比丘比丘尼は、十善を修行して、自ら己身の地水火風空識は分分不淨なりと觀じ、復十四根を觀ず。謂はゆる五情と[八]五受と男と女と意と命等、無量の罪過あるが故に、即ち無上菩提の心を發し、常に三界の一切の念念みな不淨なりと修するが故に、不淨忍の觀門を得、佛家に住在して六の和敬を修す。(六和敬とは)謂ゆる三業と同戒と同見と同學となり。(斯くて)八萬四千の波羅蜜の道を行ず」。

「善男子よ、習忍以前に十善を行ずる菩薩に退あり進あり。譬へば輕毛の風に隨つて東西するが如く、是の諸の菩薩も亦復是の如し。十千劫を以て十正道を行じ、三菩提心を發して、乃ち當に習忍の位に入り、亦常に三伏忍の法を學すと雖も、而も字を以て名く可らず、是れ不定の人なり。定の

【六】一に釋尊の神力を見るは法身佛、二に寶滿を見るは報身佛、三に千華の上の佛を見るは化身佛なり。

【七】空とは此所にて般若の智慧を云ふ。此の智慧によりて能く神通變化を得るなり。

【八】五受とは苦と樂と憂と喜と捨となり。

人は生空の位に入る。(そは)聖人の性なるが故に、必らず五逆[九]六重二十八輕を起さざればなり。佛法の經書に反逆の罪を作つて佛說にあらずと言ふは、是の處あること無し。能く一阿僧祇劫を以て、伏道忍を修して、始めて[一〇]僧伽陀位に入ることを得るなり」。

「復次に性種性は、十慧の觀を行じて、十顚倒を滅す。及び我人知見は分分に假僞なり、但名のみあり、但受のみあり、但法のみあり、不可得にして、定想なし、自他の相なきが故に、空觀を修護す。亦た觀じ亦百萬の波羅蜜を行じて、念念に心を去らしめず。二阿僧祇劫を以て、十正道の法を行じて、[一一]波羅陀の位に住す」。

「復次に道種性は、堅忍の中に住して、一切の法は生なく住なく滅なしと觀ず。謂ゆる五受も三界も二諦も自他の相なし。如實の性にして不可得なるが故に、而して常に第一義諦に入れば、心心寂滅なり、而も生を三界に受く。何となれば業習の果報未だ壞盡せず、道に順じて生ずるを以てなり。復三阿僧祇劫を以て、八萬億の波羅蜜を修し、當に平等の聖人地を得るが故に。[一二]阿毘跋致の正位に住すべし」。

「復次に善覺の摩訶薩は、平等忍に住して四攝を修行し、念念に去らしめず、心無相の捨に入りて、三界の貪煩惱を滅し、第一義諦に於いて不二なるを法性の無爲と爲す。理を緣じて一切の相を滅するが故に、智緣滅火して無相無爲と爲す。初忍に住する時、未來の無量の生死は智緣に由らずして滅するが故に、非智緣滅にして無相無爲なり。自他の相なければ無無相なるが故に無量の方便みな現前す」。

「實相の方便を觀ずる者は、第一義諦に於いて、沈まず出でず轉ぜず顚倒せざるなり」。「遍く方便を學ぶとは、證にあらず不證にあらず、而も一切を學す」。「回向方便とは、果に住するにもあらず、果に住せざるにもあらず、而も薩婆若に向ふ」。「魔自在方便とは、非道に於いて佛道を行

【九】六重とは(一)殺、(二)盜、(三)婬、(四)妄語、(五)沽酒、(六)在家出家の四衆の過失を說くを云ふ。二十八輕は優婆塞戒經を見よ。
【一〇】僧伽陀位とは譯して離着假者と云ふ。
【一一】波羅陀とは此に守護と譯す。
【一二】阿毘跋致とは此に不退轉と譯す。

ずれば、四魔のために動ぜられざるなり」。「一乘方便とは、不二の相に於いて、衆生の一切の行に通達するなり」。「變化方便とは、願力を以て、自在に一切の淨佛國土に坐すなり」。

「善男子よ、是の如きは是れ初覺の智なり。有無の相に於いて而も不二なれば、是れ實智の照す功用にして證せず、沈まず出でず到らざるは是れ方便の觀なり。譬へば水と波とは、一にあらず異にあらざるが如し。乃至、一切の行波羅蜜と禪定と陀羅尼と不一不二なるが故に、一一の行成就し、四阿僧祇劫の行を以て行ずるが故に、此の功德藏門に入る。三界業習の生なきが故に、故を畢へて新しきを造らず。願力を以ての故に、變化して一切の淨土に生ず。常に捨觀を修するが故に、[二三]鳩摩羅伽の位に登り、四大寶藏を以て常に人に授與す」。

「復次に德慧の菩薩は四無量心を以て三有の瞋等の煩惱を滅し、中忍の中に住して一切の功德を行ずるが故に、五阿僧祇を以て大慈の觀心を行し、心心つねに現在前して、無相の[二四]闍陀波羅の位に入りて一切の衆生を化す」。

「復次に明慧の道人は、常に無相忍の中に三明の觀を行ずるを以て、三世の法は來もなく去もなく住處もなしと知り、心心寂滅す。三界の癡煩惱を盡して、三明の一切功德の觀を得るが故に、常に六阿僧祇劫に無量の明波羅蜜を集む。(是の)故に、[二五]伽羅陀の位に入り、無相の行を以て一切の法を受持す」。

「復次に爾燄聖覺達の菩薩は、順法忍を修行して、五見の流に逆らひ、無量の功德を集めて、須陀洹の位に住す。(そは)常に天眼天耳宿命(及び)他心身の通達を以て、念念の中に於いて、能く三界の一切の見を滅するを以てなり。亦七阿僧祇劫に、五神通を行ずるを以て、恒河沙の波羅蜜常に心を離れず」。

「復次に勝達の菩薩は、須道忍に於いて四無畏を以て、那由他の諦と內道論と外道論と藥方と工巧

【二三】鳩摩羅伽は此に勝惡魔と譯す。

【二四】闍陀波羅は此に滿足又は無畏と譯す。

【二五】伽羅陀とは此に度邊と譯す。癡等の邊を度するなり。

と呪術とを觀るが故に、我はこれ一切智人なり。三界の疑等の煩惱を滅するが故に我相已に盡せり。地地に所出あることを知るが故に、出道と名く。所不出あり故に障道と名く。三界の疑に逆らひ、無量の功德を修習するが故に、斯陀含の位に入る、復八阿僧祇劫の中に集行して、諸の陀羅尼門を行ずるが故に、常に無畏觀を行じて心を去らしめず」。

　復次に常現の眞實は、順忍の中に住して中道の觀を作し、三界の集因集業の一切の煩惱を盡すが故に、(また)有にあらず無にあらず、一相無相にして無二なりと觀ずるが故に、阿那含の位を證す」。

「復九阿僧祇劫に於いて、昭明の中道を集ふが故に、藥力を以て、一切の佛國土に生ず」。

「復次に玄達の菩薩は、十阿僧祇劫の中に無生忍法樂忍を修して、三界の習因業果を滅し、後身の中に住して、無量の功德の行みな成就く、無生智と盡智と五分法身と皆滿足して、第十地の阿羅漢梵天の位に住す。(彼は)常に三つの空門の觀を行じ、百千萬の三昧を具足して法藏を弘化す」。

「復次に等覺忍とは、無生忍の中に住して、心心の寂滅を觀ずれども、而も無相の相、無身の身、無知の知なり。而して心を用ゐて群方の方に乘じ、憺泊にして無住の住に住し、有に在れども常に空を修し、空に處すれども常に萬化す。一切の法を雙べて照し、是處非是處乃至一切智の十力觀を知るが故に、能く[二六]摩訶羅伽の位に昇り、一切の國土の衆生を(敎)化す。(斯くて彼は)千阿僧祇劫に十力の法を行じ、心心相應して常に見佛三昧に入る」。

「復次に慧光の神變は、上上の無生忍に住して[二七]心心の相を滅す、法眼は一切の法を見淨三眼は色と空とを見、大願力を以て常に一切の淨土に生ず。(彼は)萬阿僧祇劫に無量の佛光三昧を集めて、而も能く百萬恒河沙の神力を現じ、婆伽梵の位に住して、亦常に佛華三昧に入る」。

「復次に觀佛の菩薩は、寂滅忍に住するもの〻、始めて發心せしより今に至るまで、百萬阿僧祇劫を經て百萬阿僧祇劫の功德を修するが故に一切の法解脫に登りて金剛臺に住す」。

【二六】摩訶羅伽は此に大將と譯す。

【二七】心々の相とは心王と心所の相と云ふことなり。卽ち意を滅するを滅心と名け、心所を滅するを滅相と名く。

「善男子よ、習忍より頂三昧に至るまで、皆名けて一切の煩惱を伏すと爲す。而も無相の信を以て一切の煩惱を滅し、解脱の智を生じて第一義諦を照すは、名けて見と爲さず。謂ゆる見とは是れ薩婆若なり。是の故に我昔より以來、常に唯佛のみ知見し覺り給ふ所なりと說く。灌頂三昧より以下習忍に至るまでは、(これを)見ず知らず覺らざる所なり。唯佛のみ頓に解し給ふ。(故に)名けて信と爲さず、漸漸に伏する者なり。慧は起滅すと雖も、能生なく、滅なきを以てなり。此の心若し滅すれば、則ち果として滅せざるなし。無生無滅にして、理盡金剛三昧に入れば、眞際に同じく法性に等し。而も未だ無等の等に等しきこと能はざるなり。譬へば人あり大高臺に登つて、下の一切を見るに、ことごとく了せざるなきが如し。理盡三昧に住することも亦復斯くの如し。常に一切の行を修して功德の藏を滿て、婆伽度の位に入つて、亦復常に佛慧三昧に住す」。

「善男子よ、是の如く諸の菩薩は皆能く一切十方の諸の如來の國土の中に於いて、衆生を(敎)化して正しく正義を說き、受持し讀誦し實相を解達して、我が今日の如く等うして異あることなし」。

佛、波斯匿王に告げ言はく、「我が滅度の後、法の滅盡する時に當つて、皆まさに是の般若波羅蜜を受持し大いに佛事を作すべし。一切の國土の安立し、萬姓の快樂ならんことは、皆この般若波羅蜜に由れり。是故に諸の國王に付囑して、比丘比丘尼、(及び)淸信男淸信女には囑せず。何となれば王の力なきを以てなり。故に汝は當に受持し讀誦して、其經の義理を解すべし」。

大王よ、吾が今化する所は、百億の須彌と百億の日月となり。(而して)一一の須彌に四天下あり。其の南閻浮提に十六の大國と五百の中國と十千の小國とあり。其國土の中に七つの畏るべき難あり。一切の國王は、是の難を除かんが爲めの故に、般若波羅蜜を講讀せば、七難卽ち滅し、七福卽ち生じ、萬姓安樂にして帝王歡喜せん。何をか難と爲すや。(謂く)日月度を失し、時節反逆し、或は赤き日出で、黑き日出で、二三四五日出で、或は日蝕して光なく、或は日輪の一重なると二三四五重の

輪現はる、かく變怪の時に當つて此の經を讀說せよ。一難と爲す。二十八宿度を失す、(卽ち)金星慧星輪星鬼星火星水星風星刀星南斗北斗五鎭の大星一切國の主星と三公星と百官星と、是の如きの諸星各變現す、亦此の經を讀說せよ。二の難となす。大火の國を燒いて萬姓燒き盡され、或は鬼火龍火天火神火樹木火賊火あらば、是の如きの變怪にも亦此の經讀を說せよ。これを三の難と爲す。大水百姓を漂沒し時節反逆し冬の雨あり、夏の雪あり冬の時に雷電霹靂し、六月に雨ふり、氷霜雹なり、赤水黑水青水を雨ふらし、土山石山を雨ふらし、沙礫石を雨ふらし、江河逆さまに流れ、山を浮べ石を流す、是の如き變(怪)の時にも亦此の經を讀說せよ。これを四の難と爲す。大風吹いて萬姓を殺し、國土山河一時に滅沒し、時ならずして大風黑風赤風青風天風地風火風なく、是の如く變ずる時にも亦此の經を讀說せよ。これを五の難と爲す。天地國土は亢陽として炎火洞然たり、百草亢旱して五穀登らず。土地赫然として萬性滅盡す。是の如き變怪の時にも亦此の經を讀せよ。これを六の難と爲す。四方より賊來りて國を侵し、內外に賊起り、火賊水賊風賊鬼賊ありて、百姓荒亂し刀兵劫(掠)起る。是の如く變怪の時にも亦此經を讀せよ。これを七の難と爲すなり」。

「大王よ、是の般若波羅蜜は、是れ諸佛菩薩、(及び)一切衆生の心識の神本なり。一切の國王の父母なり。又は神符と名け、又は辟鬼珠と名け、亦は如意珠と名け、亦は護國珠と名け、亦天地鏡と名け、亦は龍寶神王と名く」。佛、大王に告げて言はく、

「應に九色の旛の長さ九丈なると九色の華の高さ二丈なると干支の燈の高さ五丈なると九玉の箱と九玉の巾とを作るべし。亦七寶の案を作つて經を以て(其の)上に置くべし。若し王行かん時は、常に其の前の一百步の所に於いて、是の經は常に千の光明を放ち、千里の內をして七難起らず、罪過をして生ぜざらしめん。若し王住する時は、七寶の帳を作つて、中の七寶の高座に經卷を以て上に置き、日月を供養し、散華燒香して、父母に事ふるが如く帝釋に事ふるが如くせよ、大王よ、吾いま

五眼を以て、三世を見るに一切の國王皆過去世に五百の佛に侍ふるに由りて、帝王の主となることを得たり。是の故に一切の聖人羅漢は、彼の國に來り生じて大利益を作さん。若し王の福盡ん時には、一切の聖人は皆捨て去らん。若し一切の聖人去らん時は七難必らず起らん」。

「大王よ、若し未來世に於ける諸の國王の三寶を護持するあらば、我は五大力の菩薩をして、往いて其の國を護らしめん。(卽ち)一に金剛手菩薩は、手に千寶相の輪を持て、往いて彼の國を護り、二龍王吼菩薩は、手に金輪燈を持て、往いて彼の國を護り、三に無畏十力吼菩薩は、手に金剛杵を持て、往いて彼の國を護り、四に雷電吼菩薩は、手に千寶の羅網を持て、往いて彼の國を護り、五に無量力吼菩薩は手に五千の劍輪を持て、往いて彼の國を護らん。是の五大士は、五千の大神の王なり。汝が國中に於いて、大いに利益を作さん。當に形像を立てて之を供養すべし。」

「大王よ、吾いま三寶を以て汝等一切の諸王に付囑す。憍薩羅國と舍衞國と、摩竭提國と波羅柰國と迦夷羅衞國と鳩尸那國と鳩睒彌國と鳩留國と罽賓國と彌提國と伽羅乾國と乾陀衞國と沙陀國と僧伽陀國と健挐掘闍國と波提國と、是の如き一切の諸國王等は、皆まさに般若波羅蜜を受持すべし。時に諸の大衆及び阿須輪王は、佛の未來世に七つの畏るべき身毛竪を爲すを說き給ふを聞き、聲をあげ大いに叫んで言はく、「願くは彼の國に生ぜざらん」と。時に十六大國の王は、國事を以て弟に付(囑)して出家し、道を修して四大四色[二八]勝出の相を觀ず。四大四色不用識の空は入の行相にして、三十忍の初地の相、第一義諦は九地の相なり。是の故に大王は凡夫の身を捨てて六住の身に入り、七報身を捨て、八法身に入り、一切の行般若波羅蜜を證せり。十八の梵天、阿須輪王、三乘の觀を得て、無生の境に同じ、復空華と法性華と聖人華と順華と無生華と法樂華と金剛華と緣觀中道華と三十七品華とを散華し供養して、佛の上及び九百億の大菩薩衆に散じ、其の餘の一切の衆は、道迹果を證して、心華と空華と心樹華と六波羅蜜華と妙覺華とを佛の上及び一切衆に散じ、十千の菩薩

【二八】勝出。地水火風の能造の四大と青黃赤白の所造の四色とに於いて貪欲を出離するが故に勝出と云ふ。

は、來世の衆生を念じて、即ち妙覺三昧と圓明三昧と金剛三昧と世諦三昧と眞諦三昧と第一義諦三昧とを證せり。此の三諦の三昧は、是れ一切の三昧の王三昧なり。亦無量の三昧を得たり、七財三昧二十五有三昧一切行三昧これなり。復十億の菩薩ありて金剛頂に登り、現に正覺を成じ給へり。」

囑累品第八

佛。波斯匿王に告げたまはく、「我敕して汝等を誡む、我が滅度の後、八十年八百年八千年の中に、佛も無く法もなく僧もなく信男信女も無き時あらん。(故に)此の經と三寶とを諸の國王と四部の弟子とに付囑す、(須らく)受持し讀誦して其の義を解すべし。三界の衆生の爲に空慧の道を開き、七賢の行と十善の行を修して一切の衆生を(敎)化せよ。後の五濁の世には比丘比丘尼四部の弟子天龍八部一切の神王國王大臣太子王子(等)は、自ら高貴を恃んで吾が法を滅破し、明かに制法を作りて我が弟子の比丘比丘尼を制し、出家して道を行ずることを聽さず、亦復佛像の形も佛塔の形も造作することを聽さず、統官を立てて衆を制し、籍を安じて僧を記るし、比丘をば地に立て白衣をば高座せしめ、兵奴、比丘となつて別請の法を受け、知識の比丘も共に心を一にすることを爲し、親善の比丘も爲に齊會を作して、福を求むること外道の法の如くならば、都て(これ)吾が法にあらず。當に知るべし、爾の時に正法の將に滅せんこと久しからざることを」。

「大王よ、吾が道を壞亂せんこと、是れ汝等が自ら作す所ならん。(汝等若し)自ら威力を恃んで、我が四部の弟子を制せば、百姓疾病して苦難せずと云ふことなけん。是れ破國の因縁なり。五濁の罪を說くこと劫を窮むれども盡きず」。

「大王よ、法末の世の中に四部の弟子あらんに、國王大臣(等)は各非法の行を作して、横に佛と法と僧とのために大非法を作し、諸の罪過を作り、法に非ず律にあらずして比丘を繋縛し、(以て)獄

四の法の如くならば、當に爾の時は法滅すること久しからざらん」。

「大王よ、我が滅度の後、未來世の中に四部の弟子、諸の小國の王、太子、王子(等)の乃ち是れ住持して三寶を護らんものにして、轉た更に三寶を滅破すること、(恰も)獅子の身中の蟲の、自ら獅子を食ふが如くならば、(これ)外道非ざるなり。多くは我が佛法を懷を大罪過を得るなり。正敎衰薄にして、民に正行なく、漸く惡を爲すを以て、其の壽日日に減じて百歲に至らん時、人は佛敎を壞して復孝子なく、六親不和にして天神も祐けず、疾疫の惡鬼日に來つて侵害し、災恠首尾し連禍縱横ならん。死しては地獄餓鬼畜生に入り、若し出でて人とならば兵奴の果報(を受くること)、響の聲に應ずるが如く、人の夜書するに火滅するも字存するが如くならん。三界の果報も亦復是の如し。」

「大王よ、未來世の中の一切の國王太子王子四部の弟子は、横に佛弟子と與に制戒を書記し、白衣の法の如く兵奴の法の如くせん。若し我が弟子、比丘、比丘尼にして籍を立てて官の爲に使はるれば、都て我が弟子にあらず、是れ兵奴の法なり。統官を立てて僧典を攝し、僧の籍を主どる大小の僧統共に相攝縛せんこと、獄囚の法(或は)兵奴の法の如し。當に知るべし、此の時は佛法久しからざらんことを」。

「大王よ、未來世の中の諸の小國の王、四部の弟子にして、自ら此の罪(を造り)破國の因緣を作し、自ら之を受けば、佛法僧に非ず」。

「大王よ、未來世の中に此の經を流通せば、七佛の法器たり、十方の諸佛の常に行道し給ふ所なり。諸の惡比丘は、多く名利を求めて、國王太子の前に於いて、自ら佛法を破るの因緣と國を破るの因緣を說かんに、其の王(この理を)別まへずして此の語を信聽し、横に法制を作つて佛の戒に依らずんば、是を破佛破國の因緣と爲す。當に知るべし、爾の時は正法將に滅せんこと久しからざること

を」。

爾の時に十六大國の王は、佛の七たび誡めて說き給ふ所の未來世の事を聞き、悲啼涕泣しぬ。而して其の聲三千を動かし、日月五星二十八宿は光を失して現ぜざりき。時に諸の國王等は、各至心に佛語を受持し、四部の弟子の出家行道を制せずして當に佛の敎の如くなるべき(を誓ひぬ)。

爾の時に大衆、十八の梵天王、六欲の諸天子皆悉く歎じて言はく、「爾の時に當つて世間空虛にして是に無佛の世とならん」。

爾の時に無量の大衆の中に百億の菩薩あり、彌勒獅子月等と、百億の舍利弗須菩提等と五百億の十八の梵王六欲の諸天と、三界六道と阿須輪王等は、佛の說き給へる護佛果の因緣と護國土の因緣とを聞きいて、歡喜すること無量なり、爲に佛に禮を作して般若波羅蜜を受持しき。

仁王般若波羅蜜經(終)

佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經解題

一、譯出　今此處に國譯する寶德藏偈三卷は北宋法賢の譯出にかゝるものにして大正藏經の第二二九佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經（八ノ六七六―六八四b）に收むるものなり。國譯本文の末尾に揭載せる梵文奥書に依らば、本經は八千頌般若(aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā)の品に隨つて作られしものなりとなし、確然と本經成立の經路を說示せり。されば尨大なる八千頌般若の要義を撮りて偈頌に略攝せしものなり。八千頌般若は漢譯大般若經の第四第五の兩會なれば、此の寶德藏偈に關連する漢譯經典は左の如し。

（番號は大正藏經の經の番號に依る）

二二〇（四、五）大般若經第四第五兩會。二二四道行般若經。二二五大明度經。二二二六摩訶般若鈔經。二二七小品般若波羅蜜經。二二八佛母出生三法藏般若波羅蜜多經。詳なる對照は國譯一切經般若部五、第十表小品諸本比較に出せり。

二、梵本に現に四ありて對照に用ふ即ち

(1) 北京版單行本、紙本、$15\frac{1}{4}\times 4$ in., 109枚, 6行詰。此の本は梵藏二體合璧經にして第一行に梵文を蘭闍體にて出し、其の下に西藏文字にて該梵文の音譯を書し、更らにその下に梵文に對應する西藏譯文の三行宛の文が二列（即ち都合一面に六行）宛印刷せられたり。

(2) 河口教授將來本、東京帝國大學所藏、紙本、No. 32, Sūtra No. 32, $14\frac{1}{4}\times 2\frac{1}{2}$ in., 30枚, 5行詰。

(3) 高楠博士將來本、東京帝國大學所藏、紙本、No. 402, Sūtra No.12, $13\frac{1}{8}\times 8\frac{1}{8}$ in., 40枚, 6行詰。

(4) 河口教授將來本、東京帝國大學所藏、紙本、No. 48, Sūtra No. 48, $13\frac{1}{2}\times 4\frac{1}{4}$ in., 25枚, 7行詰。

此等の四梵本中(1)の北京版本は他の異本に比して最も誤謬尠きにより最も依用するに足るも、(2)乃至(4)は次第の如くその正確さを減じ(4)の如きは脫落、竄入、寫誤等頗る多く、殆んど依用するの價値なきに似たり。此等の四本の外ケンブリッヂ(Cambridge)大學にも一本を藏することはベンドール(Bendall)の目錄中に出でたり。されど其の紹介文を見るに必ずしも依用するに足るものに非ざるものの如し。此等諸梵本は何れもヷサンタテイラカー(Vasantatilakā)調の偈文より成り俗語並びに頌法に合せんが爲に正しき連聲法に依らざるもの及び寫誤等多く

稀にみる亂暴なる梵本なり。但し梵文の奥書はシャールドゥーラビックリーディタ(Śārdūravikrīḍita) 調にして比較的正しき梵語なるは注目に値せり。

三、西藏譯本　三ツあり

ḥphags-pa śes-rab-kyi pha-rol-tu phyin-pa yon-tan rin-po-che sdus-pa tshigs-su-bcad-pa

西藏譯は梵本と二體合璧經となせる北京版本の他大正大學所藏ナルタン版（甘珠爾雜般若部第一帙所收）及び河口教授所藏のデルケ赤字版とあり。されど西藏譯本の異同の如きは頗る僅少にして梵本の如く繁雜なるには非ざるも藏經所收本には三十二品の品名を闕きたり。

四、西藏所傳寶德藏偈の註釋　二あり

P. Cordier の丹珠爾目錄に依れば西藏には今の寶德藏偈の註釋二本を傳て現に丹珠爾經部註釋中に存するを知るなり。

（1）bcom-ldan-ḥdas yon-tan rin-po-che sdud-paḥi tshigs-su-bcad-paḥi dkaḥ-ḥgrel

《梵》Bhagavad-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā-pañjikā

と名づけ北京版丹珠爾にて釋經部第七帙(ja-pa)に收められ九十三葉あり。

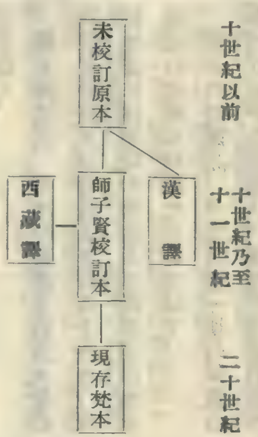
（2）sdud-pa tshigs-su-bcad-paḥi dkaḥ-ḥgrel

《梵》Saṃcaya-gāthā-pañjikā

と號し第八帙（ña-pa）に收められ又略ゝ九十葉あり。而して前者は師子賢(Haribhadra 藏 seṅ-ge bzaṅ-po) の撰にかゝり、後者は師子賢の高足たりし Buddhaśrījñāna の作る所なり。梵文奥書に述ぶるが如く師子賢は此の寶德藏偈を校訂整理せる人なりと云へばその校訂者自身又はその高弟の註釋たる此等の論書の價値については喋喋を要せず。

五、以上の梵藏漢の三ツを對比するに三者皆相違出入あり、梵漢合して藏に合せざるあり。梵藏好く吻合して漢と相違するもの頗る多く又藏漢合して梵と異るもの僅少あり。更に惟ふに此等の相違は現今傳へらるゝ梵本と、西藏譯或は漢譯の原本たりし梵本とが各ゝ異れる傳承にかゝりしものと思考するを以て妥當となすべし。抑も此の異れる傳承は何より起りしものなるべきか。此の經梵本の奥書に依るに、此の寶德藏偈は師子賢の校訂整理する所にかかると云ひ其の奥書の梵文は偈の本文と異りて、正しき梵語にて記されたり。而して此の奥書は漢譯には缺除せり。漢譯には此の文無きのみならず梵藏と其の內容を異にする個處頗る多ければ、漢譯の原本たりしものも亦梵本藏本(の原本)と傳承を異にするものと云ふべし。飜つて梵文奥書に依る寶德藏偈の校訂者師子賢の年代を檢するに、故シルバン　レビィー(Sylvain Lévi)教授に

よれば西暦第十世紀の出なりとせり。且らくレビィー教授の說を假りて師子賢を以て西暦第十世紀の人となさば、漢譯の譯出者法賢(A. D. 973—1001)と略ゞ同時代となるを以て、法賢が印度に在りし頃には師子賢の校訂せざる舊本も行はれしものなるべしと推察するを得べく、漢譯が現今傳ふる所の梵本と著しき相違點を有し又師子賢校訂云々の奥書を闕ける等の諸理由よりして法賢は未校訂の舊本を將來して支那に至り、之を譯出し。現今傳へらるゝ梵本は師子賢校訂にかゝる新本を寫傳せしものなるべしとなすも甚だしく當を失する說には非ざるべし。又藏譯が今の梵本と相違する點多々あり、且つ藏譯が比較的妥當なるは、藏譯の作製年代が校訂者師子賢の年代に近く(藏譯は大體西暦第十世紀第十一世紀頃の製作なり)、その所用の梵本は師子賢校訂本よりの寫傳比較的正確なりしもその後數百年に亘りて寫傳せらるゝ中に、種々の異同を生じ現今傳へらるゝが如き梵本を見るに至りしものと思考するを得るなり。今此の原本所承の關連を圖示せば次の如し。



六、各品內容概說　本經の品目(1)行(2)帝釋(3)持無量功德建塔(4)功德(5)福量(6)隨喜功德(7)地獄(8)清淨(9)歎(10)稱讚功德(11)魔(12)現世(13)不思議(14)譬喩(15)天(16)如實(17)不退地祥瑞(18)空(19)昂識天姊(20)善解方便(21)魔業(22)善友(23)法王(24)我(25)戒(26)幻化(27)妙義(28)散華(29)聚集(30)常歡喜(31)出法(32)善護の三十二品より成る。今その大綱を云はゞ

第一行品　五蘊は實相なく、無所住無所行　無相行を行じ、一切法に住せず、種種相を離れ、諸法本不生なりと知るを般若行を行ずとなす。菩薩の善友　惡友を辨じて菩薩摩訶薩大乘の義を明す。

第二帝釋品　無相行の大智者如來を望む佛子の、四補特伽羅の大智行を行ずべきを明し、如來の一切智を學ぶは無學の學にして一切法の眞實相を知るものなることを明す。

第三持無量功德建塔品　佛母たる般若の受持讀誦及び供養殊勝にして洹沙に等しき佛塔の供養乃至如何なる供養にも勝れたるを說く。

第四功德品　般若尊德無上にして經函のみすら應供に價するが故に受持般若の者必ず頓證するを說き且つ般若の六度を攝盡するを明す。

第五福量品　最上般若行は一切法空なりと觀照するにあり、是れ無上佛智にして萬德の根元なるを示す。

第六隨喜功德品　大智の菩薩は非法非施の心もて無相の廻施を學ぶべきを敎ふ。

第七地獄品　般若の證佛菩提の因たるを明し、若し不信瞋恨誹謗せば無間地獄に墮すべきを說くが故に此の品名あり。

第八淸淨品及び第九歎品　果色と一切智は不二無別にして畢竟一切淸淨なるを說き、大智者は諸相を遠離するも愚人は著相して歡色の淤泥に苦しむを明す。

第十稱讃功德品　般若聞解の功德を說き、無相行是れ般若行なる所以を明す。

第十一魔品　善現を對告とし、佛、如來金剛佛地を說き更に般若を聽受せず般若を求めずして枝葉を求むる等の魔事なるを詳說す、魔事無量なるも佛力に攝受せらるゝが故に魔事爲す無きを說く。

第十二現世品　般若は諸佛の母なるを說き、諸佛は般若に依りて邪魔を破し三塗の衆生を度するも虛空の無相なるが如く般若無相にして不可得なるを示す。

第十三不思議品　離相般若の智成就するは佛の功德成就する所以を說く。

第十四譬喩品　草木、堅牢の器、大船舫等の喩を用ひ般若に依りて菩提を證するを說く。

第十五天品　初地の菩薩は般若大智の功德を善友及び智者より得るを說き、又初地並に住不退の菩薩及び深般若の相を衆生の迷相に相對せしめて示す。

第十六如實品　十方三世一切の如實の得べからざるを云ひ、離相方便般若是れ佛智菩提にして之を失ふは鳥の翼を失ふに喩ふ。

第十七不退地祥瑞品　無相般若に住し如何にして不退の菩薩は般若を說くべきかを示すが故に此の品名を出す。

第十八空品　諸法本來寂靜空なりと觀じ無相の菩提を證せば無有等の師にしてその覺智は義無邊を成就するを明す。

第十九昂識天姊品　初發心より菩提の果に至る迄方便善巧して退する無く深法性に於て審諦に觀察し無所著を修行するは佛般若行なることを燈火、華菓、滴水、船師等の喩を以て論ず。

第二十善解方便品　深般若を善解し空無相無願の三解脫門に住せる大智の菩薩の相を喩を以て說き、菩薩智慧方便を修習して終に最上の大神通を獲、四威儀常に退倦無く常に世間の爲に眞實の願力を出して諸の惡道鬼神を滅除するを示し、不退地と名づけ應に授記すべしと說く。

第二十一魔業品　初めに有執は魔の所依なるを說き、それより種種の魔相の起るを敷衍し後に無分別無所執の佛菩提を修し世間を利するを菩薩と名づくるを言ふ。

第二十二善友品　一切法皆空なりと了知せる菩薩は佛般若を行ずる者にして三世十方に通じ又大智者善友たるが故に此の品名あり。善友たる菩薩と愚迷の人とを對比してその相を說くこと極めて精細なり。

第二十三法王品　般若の大智を行施する菩薩は王子の財寶を施して衆生を利し衆生歡びて王位に奉戴するが如く菩薩の法王位を證するを論ず。

第二十四我品　菩薩魔事を離れ、法王位に上らんには須く我執を離れて瞋恚鬪諍無く忍辱によりて菩提を證すべきを敎ふ。

第二十五戒品　戒法の根本は無相に住するにあり永く不善法を生ぜず諸の功德を攝すればなり。

第二十六幻化品　最初に般若隨喜の功德三千の須彌に超ゆるを歎じ大智の菩薩無相寂靜に住すること虛空の如くにして幻人の種種相を現ずるも實には不實なるが如しとするによりて此の品名を立つ。

第二十七妙義品　菩薩般若の妙義を學行せば四魔も嬈動すること能はず、一切に超出して解脫自在を得るを明す。

第二十八散華品　佛母般若の受持は一切の戒を受持するなり、般若の自性不增不滅、方便たる戒は隨緣の法にして皆般若より生出すと知らば無明の破るゝを明す。

第二十九聚集品　菩薩の最上般若を得るは一切に住せず著せざること蓮華の水に在るが如く常に進不退にして利他行を行じ而も我相無きを論ず。

第三十常歡喜品　初めに菩薩は衆生の爲に初發心より證果を得る迄心身語に懈怠なく進不息なるを說き、次に大智の菩薩は利樂を行じて常に人をして歡喜せしめ說聽人無きも忍に住して瞋喜無く功德を悉く佛菩提に廻向するを說く。

第三十一出法品　一切智を證せんことを樂ひ利他の爲に行じ持戒破戒を見ず戒相行相に著せずんば直に戒を持つとなし、戒より見たる施を說示す。

第三十二善護品　最後に六度各の利益を明し、菩薩般若を受持せば國土衆生を淨化し世間の病を醫する最上師なりと說き、寶德藏を以て證道の大良藥と爲す。

以上三十二品　般若の廣說に對し偈頌を以て要を說くこと麗妙微細之を信行する者無著無相の自在神通を證得するを說く。

七、佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經梵漢對照表

〔漢〕　　　　〔梵〕

佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經　　Ārya-prajñāpāramitā-ratna-guṇa-sañcaya-gāthā

(卷次)		(品目)	(偈數)		(Parivartaḥ)	(Gāthā)
上	一	行品	二九	1.	Sarv'ākāra-jñatā-caryā-parivartaḥ	28gāthās
	二	帝釋品(歡喜地攝布施波羅蜜伽陀)	一〇 長行一	2.	Śakra-p.	13g.
	三	持無量功德建塔品(無垢地攝持戒波羅蜜伽陀)	八	3.	Aprameya-guṇa-dhāraṇa-stūpa-satkāra-p.	8g.
	四	功德品(發光地攝忍辱波羅蜜伽陀)	七	4.	Guṇa-parikīrtana-p.	7g.
	五	福量品(焰慧地攝精進波羅蜜伽陀)	九	5.	Puṇya-paryāya-p.	9g.
	六	隨喜功德品(難勝地攝定波羅蜜伽陀)	九	6.	Anumodana-p.	9g.
	七	地獄品(現前地攝智慧波羅蜜伽陀)	七	7.	Niraya-p.	7g.
	八	清淨品(遠行地攝方便波羅蜜伽陀)	六	8.	Viśuddha-p.	4g.
	九	歎品(攝上品)		9.	Stuti-p.	2g.
	一〇	稱讚功德品(不動地攝願波羅蜜善慧地攝力波羅蜜伽陀)	一〇	10.	Dhāraṇī-guṇa-p.	10g.
	一一	魔品(法雲地攝智慧彼岸伽陀)	一一 二句	11.	Māra-karma-p.	10g.
中	一二	現世品	一〇	12.	Loka-sandarśana-p.	9g.
	一三	不思議品	二	13.	Acintya-p.	2g.
	一四	譬喻品	一〇	14.	Aupamya-p.	10g.

一五	天　品	八	15.	Deva-p.	8g.
一六	如實品	六	16.	Tathatā-p.	6g.
一七	不退地祥瑞品（攝普遍光明佛地）	七	17.	Avinivartinīya-liṅg'ākāra-p.	7g.
一八	空　品	八	18.	Śūnyatā-p.	8g.
一九	昻誐天姉品	八	19.	Gaṅga-devā-bhaginī-p.	8g.
二〇	善解方便品	二四	20.	Upāya-kauśalya-mīmāṃsā-p.	24g.
二一	魔業品	八	21.	Māra-karma-p.	8g.
二二	善友品	一三	22.	Kalyāṇa-mitra-p.	13g.
下二三	法王品	四	23.	Śakra-p.	4g.
二四	我　品	六	24.	Abhimāna-p.	6g.
二五	戒　品	六	25.	Śikṣā-p.	6g.
二六	幻化品	八	26.	Māyôpama-p.	8g.
二七	妙義品	九	27.	Sāra-p.	9g.
二八	散華品	七	28.	Avakīrṇa-kusuma-p.	7g.
二九	聚集品	一四	29.	Anugama-p.	14g.
三〇	常歡喜品	一四	30.	Sadā-prarudita-p.	14g.
三一	出法品	一八	31.	Dharmôdgata-p.	18g.
三二	善護品	六	32.	Parīndanā-p.	6g.
	計　三〇二偈二句長行一				302gāthās

八、本經梵本に就て瀧照道學士專門に研究中なるを以て同學士をして本經譯を行はしめ嚴密に校閲共議を重ねたるを以て此に之を附記す。

昭和十一年一月六日

共譯者　椎尾辨匡
　　　　瀧照道　識

佛説佛母寶德藏般若波羅蜜經

卷の上

西天譯經三藏朝散大夫試光祿卿明教大師臣[一]法賢詔を奉じて譯す

行品[二]第一

爾の時世尊、[三]四衆をして各歡喜を得せしめたまはんが爲に、是の般若波羅蜜經を説いて利樂を獲せしめたまふ。即ち伽陀を説いて曰はく、

〔一〕所有る菩薩は世間の爲に　蓋障煩惱の垢を滅除し　淨信心を發して寂靜に住し　當に智度彼岸の行を行ずべし

〔二〕諸の江河は閻浮提に流れ　華果の藥草は皆潤ふことを得　龍王主無熱池に住し　彼の龍の威力江河を流す

〔三〕亦佛子聲聞等の如く　法を説くと他に方便説を教ふると　[四]樂最聖行と果報を求むるとは　此れ諸の如來の勝威德なり

〔四〕云何が佛此の法眼を説き　諸の弟子をして佛の如く學ばしめ　自ら證し他に教へ及び方便するや　此れ亦佛力にして自力に非ず

〔五〕最上の般若は知る可からず　心知る可きに非ず菩提に非ず　是くの如く聞き已りて驚怖せざる　彼の菩薩は行じて佛智を知る

〔六〕色受想行識は皆無く　纖塵にも著せず處る所無し　彼若し一切法に住せず　無受想を行ぜば菩提を得ん

〔七〕菩薩若し出家の智を求めんには　五蘊の實相無きことを照見す　此れを知らば寂靜を求めず　彼は是れ菩薩の行智なり

〔八〕復た次に云何が智の所得なる　一切法皆空なりと照見し　著せず驚かずして照見する時　自覺覺他の諸菩薩

【一】法賢賜號明教大師支那北宋代。譯經三藏。初の名は法天。中天竺那爛陀寺の僧なり。開寶六年を以て來朝し、譯經事業に專念、譯著多く。咸平四年（A.D.1001）五月寂す。

【二】般若行を説くを以て行品と云ふ。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ sarv'ākāra-caryā-parivarto nāma pratham-aḥ//

【三】四衆。比丘(Bhikṣu)、比丘尼（Bhikṣuṇī)、優婆塞(Upāsaka) 優婆夷(Upāsikā)の四衆なり。

【四】最勝聖安樂を作ることの義なり。

なり　〔九〕色受想行及び識蘊　是の蘊見行するも而も知らず　菩薩は蘊皆空なりと照見するも　無相の化を行じて　[五]句に著せず　〔一〇〕色受想行識等無く　行ぜざるを是れ無相行と名づく　若し行じて得ずんば　最上智の無相寂靜三摩地なり　〔一一〕若し菩薩の行自ら寂靜ならば　過去の諸佛は咸く　[六]授記せるなり　身の苦樂等皆及ばず　因果法の本性を知るに由つてなり　〔一二〕若し法を行じて得可からずんば　是くの如きの行を行ずるは乃ち佛智なり　無所行を行じ了知し已らば　是れ最上の般若行を行ずるなり　〔一三〕彼の無所有不可得なるを　愚癡なるは相に著して有無と謂ふ　有無の二法は皆實に非ず　此れより出でて了知するは乃ち菩薩なり　〔一四〕菩薩若し諸の幻化を知らん　色受想行識も亦然なりと　寂靜行の種々相を離るる　此れを最上の般若行と名づく　[七]〔一五〕善友は方便して知覺せしめ　佛母を聞いて驚怖せざらしむ　惡友は同行し及び他を化す　[八]坏器に水を盛るは堅牢に非ず　[九]〔一六〕云何が名づけて菩薩と爲すことを得るや　一切の染行は皆著する無く　佛菩提の所著無きを求む　是の故に名づけて菩薩と爲すことを得　[一〇]〔一七〕云何が摩訶薩と名づくることを得るや　[一一]第一義を衆生中に得　衆生界の諸の邪見を斷ず　是の故に摩訶薩と名づくることを得　〔一八〕大施大慧大威德あり　佛の乘は最上にして乘ることを得　菩提心を發して衆生を度す　是の故に摩訶薩と名づくることを得るなり　[一二]〔一九〕幻化は四足にて俱胝數の　多人衆の前にて悉く首を截るも　一切世界は皆幻化なりと　菩薩は知り已りて怖れ無きことを得　〔二〇〕色受想行識の纏縛は不實なりと知り已りて解を求めず　菩提心を行じて著する所無し　此れを最上の諸の菩薩と名づく　〔二一〕云何が名づけて菩薩と爲すことを得るや　大乘に乘じて行き衆生を度す　[一三]大乘の體相は虛空の如く　菩薩は安隱樂を得るに由つてなり　〔二二〕大乘の乘は不可得

【五】句。梵の Pada 足より句、處、涅槃等に譯す。名相に執せざるなり。
【六】授記。成佛を豫約されたるなり。
【七】菩薩の善友。惡友を明す。
【八】惡友と俱なる者は泥の器が水に觸れし時壞るる如く壞るるの義を現す。
【九】菩薩の義を明す。
【一〇】摩訶薩の義を明す。
【一一】衆生中の頭となるの義なり。
【一二】魔術師が四角に於て俱胝數の多人衆の前にて幻化を作して悉く首を截るも彼等殺された者がある如くその如く菩薩は一切世界を幻化と知る彼に怖れなしの義なり。
【一三】大乘の義を辨ず。

なり　涅槃に乘じて諸の方所に往く　行き已りて見ざること火の滅するが如し　是の故に名づけて入涅槃と爲す　〔二一三〕菩薩の所行は不可得なり　初後現在三つながら清淨清淨にして畏れ無く戲論無し　是れ最上の般若行を行ずるなり　〔二一四〕大智の菩薩行を行ずる時　大慈悲を發すは衆生の爲なり　爲し已りて衆生相を起さず　是れ最上の般若行を行ずるなり　〔二一五〕菩薩念を起して衆生の爲にし　諸の苦行を修して苦相有るは　是れ有我相衆生相なり　此は最上の般若行に非ず　〔二一六〕自及び諸の衆生等を知る　乃至諸法も亦復た然なり　生滅は二なく分別なし　是れ最上の般若行を行ずるなり　〔二一七〕乃至所説の世界等の　一切の生滅を離るゝ法と名づく　最上無比の甘露智あり　是の故に名づけて般若と爲すことを得　〔二一八〕菩薩の是くの如く行ずる所の行　了知し方便して求むる所無し　此の法の本性非實なりと知る　是れ最上の般若行を行ずるなり　[四]〔二一九〕若し色に住せず亦受無く　亦想に住せず亦行無く　復た識に住せず正法に住せば　是れを最上の般若行と名づく

帝釋品　第二[一]　歡喜地攝布施波羅蜜伽陀[二]

〔一〕常と無常と苦樂等と　我及び無我とは悉く皆空なり　有爲及び無爲に住せず　無相行に住す佛も亦然なり　[三]〔二〕若し聲聞緣覺等を求めんに　乃至佛果も亦復た然ならば　此の忍に住せずんば得可からず　大河を渡るに岸を見ざるが如し　〔三〕若し此の法を聞いて彼の定を得なば　等正覺を成じて涅槃を證し　一切を見ること自身の如し　是れ大智者如來の說なり　[五]〔四〕佛子當に四補特伽羅に住すべし、是れ大智行を行ずるなり。一は眞實善法、二は不退心、三は應供離垢無煩惱無求、四は善友と同等なり　〔五〕大智の菩薩は是く

【四】梵本にては第二品第一偈に攝せり。

【一】帝釋等諸天を對告衆とするを以て此の品名出でしも本文には現はれず。梵名にては
Bhagavatyām ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ śakra-parivarto nāma dvitīyaḥ//

【二】菩薩の十地、十波羅蜜の配當は梵本にはなし。

【三】此の偈の次前に梵本にては左の偈あるも漢譯にてはそれに相當するもの無し。
yatha nāyako 'sthitaku

の如く行じ　聲聞及び緣覺を學ばず　樂うて如來の一切智を學ぶ　是れ學にして學に非ず名づけて學と爲す　〔六〕學びて受けず色は增減せず　亦復た種種の法を學ばず　攝受し樂うて一切智を學ぶ　若し此の功德あらば出離せる者なり　〔七〕色は有智に非ず無智に非ず　受想行識も亦復た爾なり　色性の自性は虛空の如く　平等無二にして分別無し　〔八〕妄想の本性は彼岸無し　衆生の界も亦復た然なり　虛空の自性も亦同然なり　智慧は世間辨も亦爾なり　〔九〕智慧無色は佛の所說なり　一切想を離るれば彼岸に到る　若し人諸想を離るゝことを得已らば　是の人の語意は眞如に住す　六〔一〇〕彼の人世に住すること恒沙劫なるも　佛の說きたまふ衆生といふ聲を聞かず　衆生は不生にして本清淨なり　是れ最上の般若行を行ずるなり　〔一一〕佛の說きたまふ種種語言は　皆最上の般若の義を具す　過去の佛我が爲に受記したまへり　未來世に於て菩提を證せんと

一持無量功德建塔品　第三　無垢地攝持戒波羅蜜伽陀

二〔一〕若し人常に般若を受持し　所作上諸佛の行に應じなば　刀劍毒藥水火等　乃至諸魔も爲すこと能はず　〔二〕若し人佛滅度の後に於て　七寶塔を建てて以て供養せん　是くの如く千俱胝の佛刹を圓滿するに　恒沙に等しき佛塔あり　〔三〕衆生の無邊にして千俱胝なる　妙香華塗香等を以て　供養すること三世無邊劫　所有る功德の數量も　〔四〕佛母を書寫するに及ばず　諸佛此れに由つて生ずることを得ればなり　若し受持し讀誦し供養せんに　功德倍佛塔に勝らん　〔五〕大明般若は諸佛の母　能く苦惱を除いて世界に遍ず　所有る三世十方佛は　此の明を學びて無上師たることを得る　〔六〕般若行を行じて有情を利し　大智を學んで菩提を證せしむ　有爲無爲の諸の快樂　一切衆は般若從り生

---

dhātu saṃskṛtāyāṃ
tatha saṃskṛtāyāṃ athito
aniketa-cāri
evaṃ ca sthāna athito
sthita-bodhisattvo
asthāna-sthāna ayu
sthāna jinena ukto//

譬へば導師が無爲の界に住せざる如く、その如く有爲(の界)にも住せず、無住を行じ、斯樣に住處に住せざるは住する菩薩なり、無住に住する是れが住なりと勝者によりて說かれたり。

【四】此の忍。空、無生忍なり。

【五】四補特伽羅を說く此の文長行なるも梵本に於ては左の如く偈文なり。

catvāra pudgala ime
na trasanti tasmin
jina-putra satya-kuśalo
avivartiyaś ca /
arhaṃ vidhūta-mala-kleśa
prahīṇa-kāṃkṣo
kalyāṇa-mitra-paripācita
saṃ caturthaḥ//

【六】衆生は不生にして本性清淨なるを明す。

【一】般若持誦供養と建塔供養との功德比較を論ずるに由る。梵名にては
Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ

す　〔七〕譬へば大地に諸の種を植え　和合を得て種種の色を生ずるが如く　五波羅蜜及び菩提は　皆般若從り出生する所なり　〔八〕又輪王の出で行く時　七寶四兵導從を爲すが如く　若し佛母最上行に依らば　一切の功德法集聚せん

功德品[一]　第四　發光地攝忍辱波羅蜜伽陀

〔一〕帝釋疑ひ有りて佛に問うて曰く　恒河沙數に等しき佛刹あり　佛界[二]もて圓滿すること芥子の如くならんも　能く佛刹より般若力を受けんか　〔二〕是くの如く般若を了知し已りて　此の[三]界を云何が供養せざらん　譬へば[四]人王の人の重んぜらるるが如く　般若に住する者亦爾なる合し　〔三〕佛界の般若は摩尼寶なり　一切の德を具して價比ひ無し　經函の安ずる處經有るも無きも　供養は悉く寶の功德より獲ん　[五]〔四〕佛滅して舍利を供養するは　般若を供養するに及ばず　若し樂うて受持し供養する者は　是の人速かに解脱を證することを得ん　[六]〔五〕首に行き布施波羅蜜　次に戒忍進及び禪定なり　善法の壞す可からざるを受持す　彼の一一は一切法を生ずればなり　〔六〕閻浮提の種種の樹は百千倶胝の無數の色あり　一一の樹影は皆別なりと雖も　無量の影同じく一名に攝せらるゝが如く　[七]〔七〕五波羅蜜の五名は異るも　般若波羅復た一名なり　一切は廻施して菩提と爲り　一味にして同じく菩提の名に歸す

福量品[一]　第五　焰慧地攝精進波羅蜜伽陀

〔一〕彼の色受想行識等　菩薩は悉く無常なりと觀照す　各各現行して而かも知らず　非法非生なりとするは智者の見なり　〔二〕色無く受想行識無く　是の法得る無く復た生ずる

---

a-prameya-guṇa-dhāraṇa-stūpa-satkāra-parivarto nāmas tṛtiyaḥ//

【二】般若の功德を說き、般若の書寫持讀供養の功德、佛塔供養の功德にます〳〵勝るを詳說す。

【一】前品の續き般若受持供養の功德を稱讚するが故に此の品名あり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ guṇa-pari-kīrtana-parivarto nāma catur-thaḥ//

【二】佛界は梵の jina-dhātu にして勝者の舍利なり。

【三】界は舍利の義なり。

【四】人王の人は人王に仕へる者なり。

【五】重ねて般若供養の舍利供養に勝るを說く。

【六】慧は施戒忍進禪の首に行くものなるべきことを明し、般若を根本とせる六度を指す。

【七】五波羅蜜の五名般若波羅蜜の一名に攝せらるるを示す。

【一】般若信重の福の種類を明す。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ puṇya-paryāya-parivarto nā-ma pañcamaḥ//

無し　一切法皆空なりと了知す　是れを最上の般若行と名づく　〔三〕如し恒沙に等しき佛刹の　諸の衆生を化して羅漢果を證せしめんに　若し能く此の般若を書寫して　他をして受持せしめなば功德勝れたり　〔四〕佛の如く修行せんには云何が學ばん　般若の諸法空なるを信重せば　速かに聲聞及び緣覺　乃至無上正等尊を證せん　〔五〕世間に種無くんば樹を生ぜず　枝葉華果悉く有ること無し　佛無くんば誰か菩提心を指さん　亦釋梵聲聞果無し　〔六〕日の光を舒べて諸天を照し　普く種種の業を成就せしむるが如く　佛智菩提心も亦然なり　智從り諸の功德法を生ず　〔七〕無熱池に龍主無くんば　即ち河の閻浮提に流るゝこと無し　河無くんば華果悉く生ぜず　亦大海の種種の寶無きが如く〔八〕世間に佛無く大智無く　智無くんば功德增長せず　亦佛法の諸の莊嚴無く　菩提の海等に等しき寶無し　〔九〕譬へば世間の螢光有り　一切の螢光を一處に集め　日の一光の世間を照すに比ぶるに　微塵數分の一にも及ばざるが如く

隨喜功德品　第六　難勝地攝定波羅蜜伽陀

〔一〕所有る聲聞衆の功德　布施持戒觀照の行も　菩薩の一心を發し隨喜する　福蘊の少分に及ばす　〔二〕所有る俱胝那由他の　無邊の佛刹の千俱胝の　過去現在の佛の此の法寶を說きたまへるは一切の苦を斷ぜんが爲なり　〔三〕先に最上の菩提心を發してより　正覺を成じ及び入滅に至るまで　彼の所有る佛の功德を量るに　咸く方便波羅蜜を成ず〔四〕及び彼の聲聞の學無學と　有漏無漏の諸の善法と　菩薩は等一しく普く廻施して當に世間の爲に菩提を證すべし　〔五〕菩薩施し已りて心に任せず　心に任せば即ち衆生相と名づく　有見有念を著相と名づく　是れ菩薩の廻施に非ず　〔六〕是くの如く施すは無

【三】重ねて、般若を書寫し、他に受持せしむる功德の勝れたるを說く。

【一】菩薩の隨喜廻施の功德を說くを以つてなり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ anumodana-parivarto nāma ṣaṣṭhaḥ//

【二】布施持戒觀照。布施と持戒と修行六念十念等なり。

【三】菩薩の廻施を詳說す。

相の施に非ず　是の法は當に知るべし滅盡ありと　若し非法非施の心を作さば　乃ち名づけて廻施と爲すことを得可し　〔七〕有相の施を作すは眞施に非ず　無相の廻施は菩提を證す　上妙の食に毒藥を雜ふるが如く　[四]自法の著相も亦是くの如し　〔八〕是の故に廻施を應當に學ぶべし　佛衆の善を悉く當に知るべきが如く　若しは生若しは相若しは威力悉く皆隨喜して廻施するなり　〔九〕功德を以つて佛菩提に施す　菩薩の施は皆無相なり

此の施を佛許して印可したまふ　是くの如きを勇猛の施と名づくることを得

[一]地獄品　第七　現前地攝智慧波羅蜜伽陀

〔一〕無量の盲人道を見ず　一りとして城郭に入り得るもの無し　六度の行を修するに般若を闕かば　力無くして菩提を成ずること能はず　〔二〕譬へば畫像に眼を畫かず　眼界無きに因りて　[二]功德無きが如く　若し受くる有りて智慧を行ぜば　有眼及び有力と名づくることを得　〔三〕有爲無爲黑白の法　微塵等の如きも得可からず　智慧もて觀照すること虛空の如し　故に般若の出世間と名づく　〔四〕菩薩は諦かに信じて佛行を行じ　那由他の苦の衆生を度せんに　是くの如く若し衆生相に著せば　此れ般若の最上行に非ず

〔五〕菩薩若し最上行を行ずるに　過去に未だ曾て大智を求めず　今般若を聞いて佛の如く想はば　速かに寂靜佛菩提を證せん　[三]〔六〕過去の佛を信ずるは那由他なるも　般若波羅蜜を信ぜざれば　或は瞋根を生じ或は誹謗せん　是の人少智にして阿鼻に墮せん　〔七〕若し人樂うて諸佛の智を證せんに　諸佛の母を信重すること能はずんば　商の海に入りて寶を求めんと欲するに　返つて本を失ひて復た還るが如し

【四】自法。梵本にては śukladharma とあり白法の誤字なるべきか。

【一】少智者般若を尊重すること能はず、誹謗するを以て無間地獄に墮するが故に地獄品と名づく。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ nirnya-parivarto nāma saptamaḥ//

【二】功德。貨金の義なり。

【三】般若波羅蜜を信重すべきを明す。

清淨品[一]　第八　此品攝第九歎品　遠行地攝方便波羅蜜伽陀

〔一〕色清淨なるが故に果清淨　果色二つながら一切智に同じ　若し一切智清淨なる時は虛空界の斷壞せざるが如くならん　〔二〕菩薩三界より出過し　煩惱を斷盡して生を現じ老病死を無くして滅度を現ず　斯は卽ち是れ般若行を行ずるなり　〔三〕世間の欲色の淤泥に　愚人の中に處ること風の旋るが如く　亦鹿の屋中に在りて轉ぶが如し　智者は鳥の如く虛空を飛ぶ　〔四〕若し色に著せず受想無く　亦行識無くんば乃ち淸淨なり　是くの如く諸の煩惱の垢を離れて　解脫するを佛の大智行と名づく　[二]〔五〕菩薩は是くの如く大智を行じ　諸相を離るることを得輪迴を脫せば　日の羅睺[三]の障より解脫して　光明普遍く世間を照すが如し　〔六〕火の草木及び樹林を燒くこと　一切の法性淸淨なるが如し　是くの如き觀を作すは亦觀に非ず　是くの如きは最上の般若行なり

稱讚功德品[一]　第十　不動地攝願波羅蜜　善慧地攝力波羅蜜伽陀

〔一〕帝釋天主佛に問うて言はく　云何が菩薩智慧を行ずるや　佛答へたまはく微塵數の蘊界あり　此の蘊界無き菩薩　〔二〕菩薩久しく行ぜば應に知る可し　倶胝の佛に於て勝緣と作らんも　新學は此れを聞いて邪疑を生じ　或は求むるを樂はず　而かも學ばざらん[二]〔三〕又人の深惡道を行くに　忽ちに邊界の牧牛人を見れば　心安隱なることを得て賊の怖れ無く　城郭を去ること遙かに非ずと知るが如く　〔四〕若し最上の般若を聞き已りて復た樂うて佛菩提を求むることを得ば　安隱を獲て怖れ無きことを得るが如く　心羅漢覺地を超ゆ　〔五〕譬へば人の往いて大海を觀るに　先に大山大樹林を見ば、　此の所愛祥瑞

【一】果色と一切智と不二無別、清淨なりと說くを以て清淨品と名づく。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ viśuddha-parivarto nāma aṣṭamaḥ //

【二】以下の二偈は梵本にては第九品なり。Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ stuti-parivarto nāma navamaḥ//

【三】羅睺。梵の rāhu にして又、羅護と寫し、星の名、日月を障蔽して蝕せしむるなり。印度の傳說にては阿修羅王なりと云ふ。

【一】新學と雖も般若を信解するに依りて大菩提を證するを說き、般若の功德大なるを明すを以て此の品名あり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ dhāraṇi-guṇa-parivarto nāma daśamaḥ//

【二】比喩を以て未授記の菩薩、最上の心を發し、般若を聞かば、菩提を證すること遙かに非ざるを了解せらむ。

境を見　必ず大海に達すること遠きに非ざるを知らんが如く　〔六〕菩薩若し最上の心を發し　此の般若波羅蜜を聞かば　未だ佛前に授記せずと雖も　此れ菩提を證すること亦遠きに非ず　〔七〕春諸の草木を生ずるを見ば　華實有ること遙かに非ずと知らんが如く　若し人の手に此の般若を得ば　菩提を證し得ること亦遠きに非ず　〔八〕亦女人の其の妊を懐き　十月滿足せば必ず誕生するが如く　菩薩若し寶德藏[三]を聞かば　速かに正覺の祥瑞を成ぜん　〔九〕若し般若波羅蜜を行ぜば　色增すに非ず亦減ずるに非ずと見　法非法法界の如しと見　寂靜を求めざるは卽ち般若なり　〔一〇〕行者若し佛法を思はず　力足及び寂靜を思はず　思非思を離れて無相行なる　是れ最上の般若行を行ずるなり

魔品[一]　第十一　法雲地攝智慧彼岸伽陀

[二]〔一〕佛善現に告げたまはく汝諦かに聽け　凡夫聲聞緣覺地は　斯れ卽ち名づけて如來地となす　一切は一に如し彼に疑ひ無し　〔二〕所有る稱讚も言說を離る　彼れ從り如來を遍照する時　乃至成所の作智まで　大金剛佛地に住持し　〔三〕無相を觀察して虛空に住す　應に知るべし佛種を斷ぜざるが故に　[三]〔四〕善現佛に白して言さく世尊よ　[四]云何が菩薩の魔事なる　佛言はく菩薩は魔事多し　我れ今汝の爲に略して宣說せん　〔五〕無數の魔有りて種種に變じ　當に最上の般若を書かん時　速かに天宮を離るゝこと電の滅するが如く　世間に來りて魔事を作すべし　〔六〕或は示現する有りて樂うて說かんと欲するも　或は聽受せずして返つて瞋根し　名姓及び氏族を說かず　是くの如きは魔事なりと咸應に知るべし　〔七〕愚癡なるは智無く方便無く　根を無くして寧ろ枝葉等を有つ　般若を聞き已りて別に經を求むるは　全象を棄てて返つて足を求むるが如し　〔八〕人の先に百味の

【三】寶德藏。寶の如き德を藏せる般若なり。

【一】菩薩の最上般若を行ずる時起る種種の魔事を說くによる。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ māra-karma-parivarto nāma ekādaśaḥ//

【二】〔一〕より〔三〕に至る二偈二句は梵本に相當するものなし。

【三】梵本の第一偈に當る。

【四】菩薩の種種の魔事を說く。

食を得たるに　或は稻飯を得て上味と爲すが如く　菩薩は先に般若を得已りて　棄捨し樂うて羅漢果を求め　〔九〕或は樂うて利養を求むることを爲し　心族姓に著して種跡に留り　彼の正法を捨てて非法を行ずるは　是れ魔の邪道に引入せるなり　〔一〇〕若し人此の最上法を聞かば　當に法師に於て深く信重すべし　法師魔なりと知らば　身適悅するも及び適悅せざるも著すべからず　[五]〔一一〕復た無數の種種の魔有りて　無數の苾芻衆を嬈亂し　此の般若を持誦せんと欲求するも　無價の寶を獲得すること能はず　〔一二〕佛母般若は實に得難し　初心の菩薩樂求せんと欲するに　若し十方の佛攝受せば　一切の惡魔は爲すこと能はざらん

【五】以下の二偈は梵の三偈に當る。

般若伽陀現世品　第十二[一]

〔一〕母の子を愛するや子の疾病は　當に父母をして心を憂惱せしむべきが如く　十方の諸佛般若より生ず　般若の攝受するも亦復た爾なり　〔二〕過現未來三世の佛の　十方界に遍ぜるも亦復た然なり　皆佛母般若從り生ず　衆生の心行攝せざる無し　〔三〕是くの如く世間諸の如來　乃至緣覺及び羅漢　迨及般若波羅蜜は　皆一味の法にして分別を離るる　〔四〕過現の大智の諸の菩薩は　各各此の法空行に住し　彼の諸の菩薩は　實の如く已[二]　是の故に如來名づけて佛と作す　〔五〕般若の園林華菓盛んにして　佛依止せるが故に甚だ適悅し　[三]十力諸根等淨の衆　乃至聲聞衆圍繞せり　〔六〕般若波羅蜜の高山に十力の諸佛は依止し　三塗の衆生を悉く救度し　度し已りて衆生相を起さず　〔七〕師子山に依りて大いに吼ゆれば諸の獸は聞き已りて皆恐懼し　人師子般若に依りて吼ゆれば外道邪魔悉く驚怖す　[四]〔八〕日の千光虛空に住し　普く大地を照すに諸相現ずるが如く法王の般若に住したまふも亦然なり　[五]愛河を度すの妙法を說きたまふ　〔九〕色無相と受無相と　乃至想行も亦復た然なり　識も亦是くの如く五法同じ　是の法は無相にして佛佛の說なり　〔一〇〕虛空に衆生相を見ることを起すも　虛空は無相なれば得可からず　佛の說法は法と相應するに非ず　非有非無相を說かず

不思議品　第十三[一]

〔一〕若し是くの如く一切法を見　一切の我見を悉く皆捨てなば　佛行法及び聲聞等　皆

【一】般若は佛母たり又よく世間諸法の實相を現ずるが故に現世品と名づく。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ loka-saṃdarśana-parivarto nāma dvādaśaḥ//

【二】如實已。梵にては tathatām anubuddhayanti とあるを以て如實知の誤字に非ざるか。

【三】「十力諸根等淨の衆乃至聲聞衆圍繞せり般若波羅蜜の高山に十力の諸佛は依止し」の四句は梵本にはなし。

【四】大明般若よく諸相を現ずるに喩ゆ。

【五】渴愛の河を渡す即ち煩惱を斷盡するなり。

【一】般若力の不可思議なるを示す。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ acintya-parivarto nāma trayodaśaḥ //

般若に從りて成就す　〔一〕王の國邑に行かずして　所有る王務自ら辦ずるが如く　菩薩相を離るれば般若に依りて　自然に佛の功德の法を獲るなり

譬喩品　第十四

〔一〕若し菩薩堅固心を發し　最上の般若行を修行せば　聲聞緣覺地を超過して　速かに能く佛菩提を證得せん　〔二〕人の大海を渡らんと欲するに　乘る所の船舫忽ちに破壞せば草木に依らずんば命全からず　若し依附することを得ば彼の岸に達するが如く　〔三〕若し人堅き信心を發し　般若に依りて解脫を求めずんば　輪廻の海に溺れて出期無く生老死に處して常に苦惱せん　〔四〕若し信心有りて般若を持たば　有の無性を解して眞如を見ん　是の人福智を獲て財有りて　速かに最上の佛菩提を證せん　〔五〕人の水を擔ふに坏器を用いなば　堅牢ならずして速かに破壞し　若し堅牢の器を用いて水を盛らば破壞無く憂怖無きを知らんが如く　〔六〕信を具せる諸の菩薩を見ざるは　般若行より遠ざかり退墮を求むるなり　能く信心を發し般若を持つは　大菩提を證し二地を超ゆるなり〔七〕未だ商人の海に入らんと欲して　堅固なる大船舫を造らざるは有らず　堅固なる船に依りて怖畏無く　多くの珍寶を獲る彼の岸に到るなり　〔八〕信心の菩薩も亦是くの如く般若行を離るれば菩提より遠ざからん　若し最上の大智行を修せば　當に無上菩提の果を得べし　〔九〕百歲の人の復た病患あるに　是の人自ら行立すること能はず　若し左右に扶侍する者を得ば　意に隨いて行往し怖るる所無きが如く　〔一〇〕菩薩般若力微劣ならば　菩提の岸に往かんに到ること能はず　兼て最上の方便行を行ぜば　佛菩提を得るに罣礙無からん

〔一〕種種の譬喩を用ひ、般若に依りて最上菩提を證すべきを說くが故に。梵名にては Bhagavatyām ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyām upamā-parivarto nāma caturdaśaḥ//

〔三〕船舫等の比喩を用ひ般若に依附して最上佛菩提を證すべきを論す。

天品[一]　第十五

[一]所有る菩薩初地に住し　信心を發し般若行を行ぜんには　無上菩提を求めんが爲の故に　善友及び智者に親近す　[二]大智の功德云何が獲んや　當に般若波羅蜜從りすべし　是くの如き一切の諸佛の法の　功德は皆善友從り得ればなり　[三]六度の般若行を修行し　一一菩提に迴施するも　佛蘊は有るに非ず求む可からずと　初地の爲に是くの如く說くこと勿れ　[四]菩薩功德海を修行し　世間を救度するも度する無し　菩提を求め意顚倒を離れて　最上の法を說くこと電光の如し　[五]最上の菩提心を發さば　名稱を求めず　瞋恚せず　蘊識界及び三乘を離れ　退せず動ぜず取る可からず　[二][六]是くの如き法に於て礙り無きを得　甚深の理に達して妄想を離れ　般若を聞いて信じ及び他を化する　此の菩薩は不退に住せるを知る　[七]彼の甚深の法は佛も知り難し　人の得ること有る無く得可からず　利益せんが爲の故に菩提を證す　[三]此れ初心の衆生の知るに非ず　[八]衆生は愚癡にして復た盲冥にして　世間に樂住し境界を求む　法は無所住にして取得無し　無所住從り世間を生ず

如實品[一]　第十六

[一]東方の虛空界は無邊なり　南西北方も亦是くの如し　乃至上下及び四維も　種種相無く分別無し　[二]過去未來及び現在の　一切の佛法及び聲聞の　一切の如實は得可からず　得可からざるが故に分別無し　[二][三]菩薩樂うて是くの如き法を求む　應に方便般若行を行ずべし　種種相を離るるは卽ち菩提なり　菩薩此れを離るれば由つて證すること

【一】小品諸本比較より、欲界梵世の天子佛所に來詣し、般若は甚深にして見聞覺知の難解なるを述ぶるを以て此の品名出でしも本文には現はれず。梵名にては Bhagavatyām ratna-guṇa-saṁcaya-gāthāyām deva-parivarto nāma pañcadaśaḥ //

【二】不退の菩薩の義を明す。

【三】初心の衆生の相を明す。

【一】過現未の一切法及び聲聞の一切の如實は不可得、無分別なりと說くによる。梵名にては Bhagavatyām ratna-guṇa-saṁcaya-gāthāyām tathatā-parivarto nāma ṣoḍaśaḥ //

【二】菩薩菩提を得んには方便般若行を行ずべきを比喩を以つて說く。

無し　〔四〕鳥は能く百由旬を飛ぶも　翅翼を折るが故に飛ぶこと半ば無きが如く　一切利天及び閻浮人　般若を忘失するが故に自ら墜つ　[三]〔五〕前五波羅蜜を修し　多倶胝那由劫を經と雖も　復た廣大願を以て資持するに　方便を離れなば聲聞位に墜ちん　〔六〕樂うて佛智を行ぜば心平等なること　猶父母の一切を觀るが如く　當に利益及び慈悲を行じ常に善歡にして妙なる言敎を宣ぶべし。

[一]不退地祥瑞品　第十七　此品攝普遍光明佛地

〔一〕時に須菩提瞻仰して問ふ　不退の菩薩は何ぞ殊勝なる　言聲の相を離れて云何が說かん　願はくは佛彼の功德藏を說きたまへ　〔二〕沙門婆羅門に仕せず　及び十善を行じ三塗を離るるもの　大智もて種種相を離るること　山谷の響聲相應ずるが如し　〔三〕若し法礙無く化を行じ　一向に善く諸の言敎を說かんと欲せば　行住坐臥の四威儀　一念の觀心にも悉く通達せん　〔四〕三業清淨なること白衣の如く　利養の爲にせざるが故に法を樂しむ　魔の境界を降し及び他を化す　四禪定を觀じて而も仕せず　〔五〕名譽を求めず瞋恚無く　乃至家に在るも塵に染まらず　或は富貴及び[二]脫命の爲に　纖毫の欲塵にも染まらず　〔六〕本來寂靜にして所有無く　[三]男女互に相業する所緣　若し清淨を求め退せさる時は　當に最上の般若行を行ずべし　〔七〕正遍知を求め心柔順にして　二地を求めず邊地を離れ　法の爲に命を捨つること須彌の如き　[四]是れを不退の菩薩と名づく

[一]空品　第十八

〔一〕色受想行識は甚深にして　未來寂靜にして相無く　海の深さは杖もて測る莫きが如く

【三】方便の離る可からざる義を明す。

【一】不退の菩薩の殊勝なるを說くに依る。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyām avinivartanīya-liṅg'ākāra-parivarto nāma saptadaśaḥ//

【二】脫命は梵に jīvika vigṇaya に作る。生活を事とするなり。

【三】大正藏經に更互相とあるも梵本と宋・元・明及び宮の四本の男女互とあるを採る。

【四】以上、不退の菩薩の行狀相を明す。

【一】五蘊、六塵、十二界等の空なるを說くが爲なり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ śūnyatā-parivarto nāma aṣṭā-daśaḥ//

般若の蘊を得るも亦是くの如し　〔一〕菩薩此の甚深法を知りて　眞如乘に住せば染す可からず　六塵十二界の體空にして　蘊無く寧ぞ有所得の福あらんや　〔三〕人の彼の染欲境を思ふが如く　心女色に著して目もて見　乃至日日の心の所行の如く　菩薩の思覺も亦是くの如し　〔四〕若し多倶胝劫羅漢　緣覺持戒者に布施するも　般若法を說行するに如かざること　百千萬分の一にも及ばず　〔五〕若し菩薩は般若の理を觀じ　安住して法を說き而も無相にして　一切に迴施し菩提を證せば　彼の三界の師に等しきもの有ること無し　〔六〕所說の成就無相にして　空に非ず實に非ず得可からず　若し是くの如く行ぜば覺智と名づけ　成就を受くることを得て義無邊なり　〔七〕一念に於て一切法を知り佛の所說及び他の說を信じ　演說すること倶胝那由劫ならんも　法界は增さず亦減ぜず〔八〕此れを佛波羅蜜と名づくることを得　菩薩は中に於て法を說くに　名施の如く已に心著せず　亦無上覺を證せりと言はず

昴識天姊品　第十九

〔一〕譬へば燈光衆緣從りし　假へ膏油芯火等を以てするも　光は芯火及び膏油に非ず火に非ず芯に非ず光有らざるが如く　〔二〕或は菩薩有りて初發心より　無上菩提の果を求めずんば　豈唯菩提を證し得ざるのみならんや　亦復た寂靜を得ざるが故に　〔三〕種從り樹及び華菓を生ず　種無くんば華菓悉く皆無し　發心して佛菩提の爲にせずんば　修行は終に菩提の果に遠ざからん　〔四〕種子從り麥穀等を生ずるも　彼の果は有に非ず亦無に非ず　佛菩提の果も亦幻の如く　彼の有性及び無性を離る　〔五〕譬へば涓滴水は細微なるも　漸次に必ず能く大器を盈すが如く　初心より無上果を求むることを爲し　久し

【三】多倶胝劫羅漢、緣覺、持戒者に布施するも般若法を說行するに如かざるを明す。

【一】小品諸本比較より、昴識天女會中に在るに依り此の品名出でしも、本文には現はれず。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ gaṅga-devā-bhaginī-parivarto nāma ekônaviṃśatitamaḥ //

【二】菩薩、初發心より無上菩提の果を求むべきを比喩を以て明す。

く白法を修せば終に能く證せん　〔六〕空無相無願の行を行じ　寂靜を求めず相を行ずる無きこと　亦船師の善く濟度するに　兩岸に著せず中流に非ざるが如し　〔七〕菩薩無所著を修行せば　乃ち佛菩提の記を受くることを得ん　若し菩提非所有なりと了せば　此は即ち是れ佛般若を行ずるなり　〔八〕譬へば疾疫飢饉道に　菩薩中にて無怖畏を行じ　小人知り已らば悉く往來し　苦惱の微塵の如きも無きことを得んが如し

善解方便品　第二十[一]

〔一〕菩薩佛般若を奉行し　本來蘊不生なりと了知せば　佛法衆生界悉く空にして　空の三昧を以て悲智を起す　〔二〕人の德有りて力最勝にして　善く一切の幻化の法を解し乃至器仗及び工巧にして　能く一向に世間の爲にせん　〔三〕彼の人の父母妻及び子　遠路にして多寃の中を遊行するに　是の人勇猛にして衆に知られなば　安樂にして家に還り怖畏無きが如く　〔四〕大智の菩薩衆生の爲に　第一三摩地に安住し　四魔を降伏し二乘を離れ　亦復た佛菩提を求めず　〔五〕譬へば虛空は無所有にして　風水火地皆依住し

世間の衆生は快樂を得るも　虛空は意住非住無きが如く　〔六〕菩薩の空に住するも亦是くの如し　世間に種種相を現ずるも　衆生智及び願力を以てし　彼の寂靜に非ず空に非ざるが故に　〔七〕若し菩薩大智を行ずる時　空寂靜三摩地に住せば　此の中一切相を見ず　亦復た彼の非相を見ず　[二]〔八〕菩薩此の解脫門を行ぜば　寂靜を求むるに非ず行相に非ず　鳥の空を飛んで往來するに　虛空に住するに非ず地に住するに非ざるが如し〔九〕亦人有りて射法を習ひ　之を習ふに住せずして多歲を經　射法久しく習いて盡妙を得ば　一一箭發するも中らざること無きが如く　〔一〇〕最上の般若行も亦爾なり　智慧及

【一】菩薩深般若を善解し、智慧方便を修習して大神通力を得、行住坐臥の四威儀退倦無きを說くによる。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ upāya-kauśalya-mīmāṃsā-parivarto nāma viṃśatitamaḥ//

【二】空、無相、無願の三解脫門に住せる大智の菩薩相を種種の譬喩を以て說く。

び方便を修習し　直ちに衆善悉く圓滿するに至らば　方に最上の神通力を獲ん　〔一一〕若し茲獨神通力を證し　神變化を現じ虚空に住せば　行住坐臥の四威儀　倶胝劫を經るも退倦せず　〔一二〕空に住する菩薩も亦是くの如し　無相行を修して彼岸に到らば　種種の行を行じて世間に現じ　倶胝劫を經るも退倦せず　〔一三〕人の險を經て大風に遇はんに　二手もて蓋を持ち心專注するも　是の人險を怖れて行くこと能はず　直ちに無風に至らば乃ち前進するが如く　〔一四〕大智の菩薩は大悲に住し　智慧方便を二手と爲し空無相願の法蓋を執り　法を見るに寂靜に住せず　〔一五〕人の寶を求めて寶洲に往くが如し　寶を獲て安隱にして家に還り　是の人の心足りて快樂せんに　豈眷屬の心苦惱すること有らんや　〔一六〕空の寶洲に詣るものも亦是くの如し　根力禪定の寶を獲得するも菩薩歡喜心に住せず　諸の衆生をして苦惱を離れしむ　〔一七〕商人の利の爲に悉く經る所の　聚落國城諸の里巷　寶所に達すと雖も住するに非ず　大智善道によりて復た還らん　〔一八〕大智の菩薩は悉く了知し　聲聞緣覺解脫智　乃至佛智も亦住するに非ず何かに況んや彼の有爲道を行ぜんをや　〔一九〕大智の菩薩は世間の爲に　空無相願三昧に住し　若し寂靜を得て所著無くんば　乃ち無爲を知ることを得可し　〔二〇〕譬へば人の生れて人未だ識らざるも　其の名を稱するが故に衆乃ち知るが如く　菩薩若し解脫門を行ぜば　解脫門に於り衆知識せん　〔二一〕菩薩彼の甚深の法を聞いて　而も諸根に於て悉く照明し　空無相無願の法に住せば　退無く思無く授記無し　[三]〔二二〕三界を觀ること夢幻の如く　聲聞緣覺地を求めず　佛の如く悅法して世間の爲にするを　不退地と名づけ應に授記すべし　〔二三〕諸の衆生の三塗に墮せるを知り　發願して刹那に惡道を滅し眞實力を以て火蘊を滅するを　不退地と名づけ應に授記すべし　〔二四〕諸惡宿曜及び鬼

【三】以下不退地の菩薩相を明す。

神　種種の疫を作して世間を惱すに　眞實の願力もて悉く滅除し　我に能く作すこと無し應に授記すべし

魔業品　第二十一[一]

〔一〕我れ授記を得るも能所に非ず　是れ實に願力にして增長を得　若し授記及び能所を見ば　是れ執著及び少智と名づく　〔二〕菩薩執有らば魔即ち知り　親友の相を現じて來りて嬈惱し　或は父母七代の人と作つて　汝の名は此れ佛として證す可しと言はん　〔三〕魔の現作する所無數の相にして　皆汝を恐んで利樂を作すと云はん　菩薩聞き已りて忻ぶ所有らば　是れを少智の魔に著せらるると名づく　〔四〕或は城隍及び聚落　山林曠野寂靜の處に住し　自ら己の德を稱し他人を毀らば　應に知るべし少智にして魔の作爲りと

〔五〕城隍聚落中に住すと雖も　聲聞緣覺の證を求めずんば　此の心衆生を度せんが爲の故に　我說いて是れを名づけて菩薩と爲す　〔六〕五百由旬の山險深にして　諸の惡獸と共に多年住む　若し逼迫せられ我慢に著すとも　若し分別無くんば菩薩と知る　〔七〕菩薩彼に住して世間の爲に　力解說三摩地を得るも　彼れ山野の寂靜に著して行ぜば　此れ亦彼の魔の所作なりと知る　〔八〕城隍及び山野に住すと雖も　佛菩提を樂ひ二乘を離れ

是くの如き行を修して世間を利せば　一念如秤の菩薩と名づく

善友品　第二十二[一]

〔一〕大智者の師に依りて學する有らば　速かに疾く無上覺を證し得ること　亦良醫の衆患を除くが如く　學は善友に從りて心疑ひ無し　〔二〕菩薩は佛菩提の所を行じ　彼の善友

【一】菩薩の魔に著せらるる相を示すを以て魔業品と名づく。梵名にては
Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ māra-karma-parivarto nāma ekaviṃśatitamaḥ//

【一】學は善友に從りて成就するの義を第一偈に說くが故に。梵名にては
Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ kalyāṇa-mitra-parivarto nāma dvāviṃśatitamaḥ//

波羅蜜に依らば　此れ最上地にして能く調伏し　二種事の爲に菩提を證す　〔三〕過去未來の十方佛　此の正道を行じ異路無くんば　佛菩提の最上所を行じ　波羅蜜を說くこと電光の如し　〔四〕彼の般若の空無相の如く　諸法の相も亦是くの如しと知り　一切法皆空なりと了知せば　此れ卽ち佛般若を行ずと名づく　[二]〔五〕色欲及び飮食に繫著し　常に輪廻に在りて休息せずんば　此れ愚迷の人にして見る所倒に　不實の法に於て實想を生ず〔六〕譬へば食を得て毒有りと疑ひ　虛妄見を以て食はざるが如く　愚人は妄りに心に我想を生じ　我想を以ての故に生死有り　〔七〕亦恒に諸の煩惱を說くも　諸の煩惱に於て相に著せざるが如し　煩惱淸淨倶に有る無し　是くの如き菩薩は般若を知る　[三]〔八〕閻浮提の諸の衆生　皆無上菩提心を發し　多千倶胝劫布施し　一切に廻施せば菩提を證せんが如きも　〔九〕若し復た人有りて一日に於て　最上の般若行を奉行せんに　千倶胝の施は一にも及ばず　般若を行ずるの功無爲なるが故に　〔一〇〕菩薩は大悲もて般若を行じ衆生を度せんが故に想を起さず　恒に乞食を國城に行ぜば　是れを一切の大智と名づくることを得　〔一一〕菩薩人天乃至　三塗の極苦衆を度し　皆速かに彼岸に到らしめんと欲せば　晝夜に勤めて般若を行ぜよ　〔一二〕人の無價の寶を求めんと欲せば　必ず大海の諸險難を過ぎ　無心に忽爾にして獲得せば　憂惱皆除こり喜び無量ならんが如く　〔一三〕菩提の寶を求むるも亦是くの如し　勤めて般若の諸の功德を行ぜば　取捨無き無上の寶を得て　菩薩速かに菩提を證せん

【二】愚迷の人と善友たる菩薩とを對比してその相を說く。

【三】般若行の千倶胝の施に勝るを說く。

卷の下

法王品　第二十三

〔一〕日出でて光明世間を照すに　雲幻焔散じ黒闇滅し　所有る螢光及び衆星　乃至滿月も皆映蔽す　〔二〕菩薩は空無相願に住し　最上の大智行を行ぜば　羅漢緣覺の證を皆超へ　一切の邪見を俱に能く破す　〔三〕譬へば王子財寶を施して　自在に能く諸の衆生を利し　衆生歡喜して悉く隨順せば　疑ひ無く當に王位を嗣ぐことを得べきが如く　〔四〕菩薩は勤めて大智行を行じ　甘露の法を施して群生を利し　一切の人天悉く愛樂せば　決定して當に法王の位を證すべし

我品　第二十四

〔一〕魔は菩薩の法王を證するを恐れ　天宮に處ると雖も常に憂惱し　放火掣電し諸相を現じ　菩薩をして退懼を生ぜしめんと欲す　〔二〕大智の菩薩は心動ぜず　晝夜に常に般若の義を觀じ　鳥の空を飛ぶに心泰然たるが如く　一切の魔事能く爲すこと無し　〔三〕菩薩は若し瞋怒の心を起し　晝夜分に於て或は鬪諍せば　時に魔歡喜して精勤せん　菩薩は是れ佛智に遠ざかるなり　〔四〕菩薩或は諍ひ或は瞋怒し　毘舍左鬼は其の便を得て彼の菩薩の身心の中に入り　菩提を退せしむるは魔の所作なり　〔五〕菩薩の授記せると未だ授記せざると　或は瞋怒を起し或は鬪諍すると　乃至心念に皆過失ありと　知り已らば倍更に勤めて修行せよ　〔六〕菩薩諸佛を思念せば　皆忍辱に從りて菩提を證す　懺悔して說の如く正行を持たば　是れ佛法の如く修學するなり

【一】菩薩、甘露法を施して法王位を證すべきを比喩を以て明すが爲なり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ śakra-parivarto nāma trayoviṃśatitamaḥ//

【一】菩薩、我執を離れて瞋怒鬪諍無く、般若を觀じて法王位を證せば魔の便をなすなきを說くが爲なり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ abhimāna-parivarto nāma caturviṃśatitamaḥ//

【二】毘舍左鬼。Piśāca 食血肉鬼のことなり。

戒品　第二十五

〔一〕若し戒法の有作相を學せば　戒法に於て善く學せず　戒非戒無二相なりと知らば是くの如きは乃ち佛法を學すと名づく　〔二〕若し菩薩有りて無相に住し　受持して離れずんば戒を持つと名づく　佛法を學すに於て樂うて承事せば　是れを善く學して著する無しと名づく　〔三〕是れ大智者にして是くの如く學せば　心永く不善法を生せざること　日の虛空に往來して　百千光を放ちて黑闇を破るが如し　〔四〕若し般若を學して無爲に住せば　能く一切の波羅蜜を攝すること　六十二見の身見を攝するがごとく　般若の攝受するも亦復た爾なり　〔五〕譬へば人有りて諸根を具するも　命根滅するが故に諸根滅するが如く　若し諸の菩薩大智を行ぜば　亦一切の波羅蜜を行ずるなり　〔六〕聲聞緣覺の諸の功德を　大智の菩薩は悉く皆學す　學すと雖も住するに非ず亦求むるに非ず　學する所の學は此れを義と爲す

幻化品　第二十六

〔一〕若し志を發して心而も　最上の菩提を隨喜し行を退せずんば　三千の須彌の重さ無量ならんも善法を隨喜する重さ彼に過ぎん　〔二〕衆生は解脫の法を求めんが爲に　一切に隨喜して福蘊を作し　作佛の功德法に迴施して　當に世間の爲に諸の苦を盡すべし　〔三〕菩薩は諸の法空に著せず　無相を了知して罣礙無く　內心亦覺智を求めず　是れ最上の波羅蜜を行ずるなり　〔四〕虛空界の障礙無し　無所得なるが故に亦有らざるが如く　大智の菩薩も亦復た然なり　寂靜行に住すること虛空の如し　〔五〕幻師有りて幻人を作すに衆人幻を見て皆喜ぶ　幻人は種種相を現ずると雖も　名字身心倶に不實なるが如く

【一】戒法の修學を說くを以て戒品と名づく。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gīthāyāṃ śikṣī-parivarto nāma pañcaviṃśatitamaḥ//

【一】幻化の比喩を以て大智菩薩の無相寂靜に住する相を說くによる。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ māyopama-parivarto nāma ṣaḍviṃśatitamaḥ//

〔六〕般若行を行ずるも亦復た然なり　世間の爲に菩提を證し　乃至種種の所作の事を說くこと　幻師現ずるも悉く著する無きが如し　〔七〕佛佛諸の佛事を化現するも　所作皆彼我の相無し　菩薩の大智行も亦然なり　一切の現行は幻化の如し　〔八〕木匠人の心善巧にして　一木もて種種の相を作るが如く　菩薩の大智も亦復た然なり　無著智もて一切行を行ず

妙義品　第二十七

〔一〕大智の菩薩是くの如く行ぜば　天人合掌して恭敬し禮し　乃至十方の佛刹中より亦功德鬘の供養を得ん　〔二〕假使恒河沙の佛刹の　所有る衆生皆魔と作り　一一の毛無邊相を變ずるも　菩薩と嬈動すること能はざらん　〔三〕大智の菩薩は四力有り　彼の四魔も動かすこと能はず　空を行ずるも亦衆生を捨てず　菩薩慈悲もて利樂を處す　〔四〕佛母般若波羅蜜を　菩薩は了知して深く信重し　內心眞實にして而も奉行す　應に知るべし是れ一切智を行ずると　〔五〕法界は實の如く得可からず　由虛空の處る所無きが如く　天の宮殿に應に生ぜんと念ずべきが如く　亦飛禽の菓樹を思ふが如く　〔六〕大智の菩薩は是くの如く行じ　彼の寂靜の功德に住せば　法見る可からず亦說く無く　菩提得るに非ず得ざるに非ず　〔七〕所有る聲聞及び緣覺　寂靜三摩地を修行し　寂靜を愛樂して解脫を得　唯佛のみ一切より超出す　〔八〕菩薩は禪に依りて彼岸に到り　寂靜行に住せざること空の如く　禽の飛翔して地に墮ちざるが如く　魚の水中を行くに自在なるが如し　〔九〕菩薩若し諸の衆生の爲にせんには　當に未曾有の佛智を求むべし　最上第一の法を施與せば　此れを最上行の行者と名づく

【一】般若の妙義を學行する菩薩の堅固相を明すによる。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ sāra-parivarto nāma saptaviṃśatitamaḥ//

散華品　第二十八[一]

[二]〔一〕如來の說きたまふ戒波羅蜜は　一切の戒中爲れ第一なり　智者一切の戒を奉ぜんと欲せば　當に佛の戒波羅蜜を學すべし　〔二〕今此の法藏は諸佛の母にして　爲れ最第一の快樂所なり　過現未來の十方佛　此の法界に生じて盡くること無し　〔三〕一切の樹林華菓等　皆大地從り生長するに　大地は厭はず亦著せず　減ぜず增さず復た倦まず　〔四〕佛及び聲聞緣覺等　天及び世間の安隱法は　皆般若從り生ずる所なるも　[三]般若は增す無く亦減ずる無し　〔五〕世間の上中下の衆生　一切皆無明從り生じ　因緣和合して轉じ身を苦しむるも　無明は增す無く亦減ずる無し　〔六〕乃至方便の諸の法門は　皆般若從り生出する所にして　彼の方便の法は緣に隨つて轉ずるも　般若は增す無く亦減ずる無し　〔七〕菩薩は十二緣乃至般若の增減無きを了知せば　日の雲中に光明を放つが如く　無明の障を破して菩提を證す

聚集品　第二十九[一]

[二]〔一〕大菩薩は四禪定を修すること　愛樂する所に而も住する無きが如く　或は復た四禪に住せず　當に最上の菩提を得べし　〔二〕最般若を得ば禪定　[三]四無色等の三摩地に住し　最上の大禪定を得て　而も復た諸の漏盡を學せずと爲す　〔三〕此の功德藏は未曾有にして　三摩地を行じて而も相無く　彼れ住せば我見を破らず　心所有らば欲界に生ぜんことを思ふ　〔四〕譬へば南閻浮提の人の　未だ諸天に生ぜず　[四]北洲に生ずるは　彼の境界を見て生を求むるも　彼の住を作し已つて復た還るが如し　〔五〕菩薩の修する所の功德は　三摩地と行と相應し　凡夫と同じく欲界に住すと雖も　由ほ蓮華の水に著せざるが如し

【一】小品諸本比較より、三十三天諸天子衆佛所に來詣して散華するに依り此の品名出でしも本文には現はれず。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ avakirṇa-kusuma-parivarto nāma āṣṭāviṃśatitamaḥ//

【二】佛の戒波羅蜜を修學すべきを說く。

【三】般若の不增不減を辨ず。

【一】他には隨知隨順に作る。その方梵に親し。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ anugama-parivarto nāma ekōnatriṃśatitamaḥ//

【二】大智の菩薩の禪定に住するを明す。

【三】四無色。梵名Catur-ārūpa又は四空處、無空界の四處なり。是れ四空處定を修して得る所の正報なり。一に空無邊處 Ākāśānantāyatana 二に識無邊處 Vijñānānantāyatana

〔六〕菩薩衆生を度脫して　淨土波羅蜜を圓滿し　無色界に生ずることを求めずして菩提波羅蜜を求む　〔七〕譬へば天人の寶藏を獲るに　愛樂の心を生ぜざるを得と雖も或は天人心を起せりと言つて　彼の寶を收めんと欲するも得可からざるが如し　〔八〕大智の菩薩は四禪　寂靜三摩地に來住せず　彼の寂靜三摩地より出でて　欲界に入るは世間の爲なり　〔九〕若し菩薩三摩地を行ずるに　羅漢及び緣覺乃至散亂兇惡の心を樂はずんば無知迷亂して功德無し　〔一〇〕色聲香味觸の五欲　及び彼の緣覺聲聞等　是くの如き法は悉く遠離するも　等しく引いて菩提心を離れず　〔一一〕菩薩は一向に衆生の爲に　精進波羅蜜を修行すること　由ほ奴僕の其の主に事ふるが如く　衆生を利すること亦是くの如し　〔一二〕僕の主に事ふるに心專注し　瞋辱を被ると雖も對する無く　凡そ動止する所常に心に在り　唯彼の主の其の過を責むることを恐るるが如く　〔一三〕菩薩は佛菩提を求めんが爲に　奴の主に事ふるが如く衆生を利し　無上菩提を證得し已りて　生を利すること火の草木を燒くが如し　〔一四〕晝夜に勤めて利他行を行じ　利し已りて內心我相無きこと　母の子を愛して常に衞護し・に　寒暑苦しと雖も心倦くこと無きが如し

常歡喜品　第三十

〔一〕菩薩は愛樂して衆生の爲に　佛刹の淸淨行を修治して　恒に精進波羅蜜を行じ　微塵の如きも心退倦すること無し　〔二〕大智の菩薩は俱胝劫　久しく苦行を修して菩提の爲に　精進波羅蜜を離れず　懈怠心を無くして終に證することを得　〔三〕初發心從り菩提の爲に　乃至寂靜の證を得獲まで　恒に晝夜に精進を行ず　大智の菩薩は應に是くの如くすべし　〔四〕能く須彌を破りて　方に無上菩提の果を證すと言ふもの有るを　聞き已

三に無所有處 Ākiñcanyāyatana 四に非想非非想處 Naivasaṃjñā=jñānāsaṃjñāyatana なり。

【四】 北洲。北俱盧洲なり。北洲の定命は千歲なり。

【一】 大智の菩薩進、忍波羅蜜に住して利樂を行じ人をして歡喜せしむるを以て此の品名あり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-saṃcaya-gāthāyāṃ sadā-prarudita-parivarto nāma triṃśatitamaḥ//

【二】 大智の菩薩精進波羅蜜を行ずるを明す。

りて懈怠して心を退けなば　是れ彼の菩薩の過失なり　〔五〕大智の菩薩は是の言を聞いて謂らく須彌盧甚だ微少にして　一念の間に於て破壞す可しと　亦佛菩提を證するに住らず　〔六〕身心語に於て精進を行じ　世間を度脫して大利を作すも　或は我相に著して懈怠を起さば　佛菩提を證すること能はず　〔七〕身心の相無く衆生無く　諸の相を離れて不二法に住せば　無上の佛菩提を求むと爲す　是れ精進波羅蜜を行ずるなり　[三]〔八〕大智の菩薩は利樂を行じ　人をして聞いて悉く歡喜すと言はしむ　法を說くも說く無く聽人無きを　最上の忍波羅蜜と名づく　〔九〕譬へば寶の三千界に滿てるを　佛緣覺及び羅漢に施さんも　法を知る忍の功德に如かざること　百千萬分の一にも及ばざるが如く　〔一〇〕忍を持てる菩薩は淸淨の　三十二相を得て彼岸に到り　一切衆生悉く愛樂し　法を聞き信受して調伏せん　〔一一〕或は衆生有りて栴檀を以て　菩薩の身に塗りて供養を爲し　或は火を持ち遍く燒然すること有らんも　平等の心を行じて瞋喜無し　〔一二〕大智の菩薩是の忍を持たば　或は緣覺及び聲聞　乃至世間の諸の衆生の爲に　悉く皆佛菩提に廻向せん　〔一三〕譬へば世間五欲を貪りて　三塗の無邊の苦を甘忍するが如くならん　菩薩は佛菩提を求めんが爲に　今何すれぞ勤めて忍辱を持たざらんや　〔一四〕首足を割截し耳鼻を劓り　禁縛捶拷諸の楚毒　是くの如くの苦惱を悉く能く忍ぶ　是れ忍辱波羅蜜に住するなり

[一]出法品　第三十一

[二]〔一〕戒を持たば當に高き名稱を得　亦復た三摩地を證得すべし　戒を持つは諸の衆生を利せんが爲なり　後に當に佛菩提を證すべし　〔二〕心緣覺及び聲聞を重んじ　及び破戒を

【三】大智の菩薩忍波羅蜜に住するを明す。

【一】出法は他に法涌に作る、說般若の菩薩の名なり。梵名にては Bhagavatyāṃ ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ dharmôdgata-parivarto nāma ekatriṃśattamaḥ//

【二】大智菩薩の戒に就て詳說す。

見て他の過を說くは　實に戒を持つて菩提の爲にすと雖も　是れを戒を持つて五欲を行ずと名づく　〔三〕菩提の功德法を證せんと欲し　戒具足を持つて利樂を行ずるに　若し行尸羅を毀破せば　是れ則ち菩提を滅壞するなり　〔四〕菩薩は五欲を樂受すと雖も　佛法及び聖衆に歸命し　我れ當に一切智を證すべしと念ず　是れ尸羅波羅蜜に住するなり

〔五〕菩薩は倶胝劫を經歷して　十善を奉行すること間斷無けんも　心緣覺及び羅漢を樂はば　是れ波羅夷の重罪を犯せるなり　〔六〕戒を持ちて佛菩提に迴向し　作念して自ら益せんことを求めず　但他の諸の衆生を利せんと念ぜば　是れ卽ち戒波羅蜜を持てるなり

〔七〕菩薩若し諸の佛道を行じ　衆生に於て種種相を離れ　破戒の諸の過患を見ずんば此れ最上にして善く戒を持つと爲す　〔八〕菩薩は要ず諸相を離れ　我無く人及び壽者無く　戒相及び行相に著せずんば　是れ則ち戒の殊勝を持てるなり　[三]〔九〕是くの如く具足して戒を持たば　一切礙り無く分別無く　頭目手足を施すも悋む無く　一切の愛する所皆著する無し　〔一〇〕法は本より空無我なりと了知せば　乃ち此の身に於て戀著無し・況んや外の財物にして捨てず　及び彼の非處にして嫉妬せんや　〔一一〕內外の施に於て我慢を生ぜば　是れ菩薩の病にして施と爲すに非ず　或は嫉妬を起して鬼趣に生じ　或は人と爲ることを得て貧賤に處せん　〔一二〕彼の衆生の貧賤の因を知り　菩薩發心して恒に布施し　施すこと四洲の草木の數の如くならんも　是くの如く廣大なるも亦無相なり

〔一三〕大智の菩薩は施を行じ已りて　復た三有の諸の衆生を念ず　菩薩も亦彼の衆生の爲に　悉く皆菩提に迴向す　〔一四〕是くの如く施を行ずるも著する所無く　亦復た果報を求めざるを　大智者の一切の爲にすと名づく　施の因少なりと雖も果無量なり　〔一五〕乃至三有の諸の衆生　一切皆施を尊重するを以て　佛及び菩薩　緣覺聲聞の功德を供養

【三】戒より見たる施を明し、更に大智菩薩の施に就て詳說す。

するが如く〔一六〕大智の菩薩は方便を以て　彼の福を施すの行を用いて迴向して　當に一切衆生の類をして　皆悉く無上覺を證得せしむべし　[四]〔一七〕假の琉璃寶を大いに聚めんも　一の眞琉璃寶に及ばざるが如く　世間の一切衆に迴施するも　無上覺に迴施せんには及ばず〔一八〕菩薩施を世間に行ずるに　我慢を作さず愛する所無く　修行して大增長を得ば　月の障より離れて雲の中より出づるが如し

善護品[一]　第三十二

[二]〔一〕菩薩布施して貧乏を濟ひ　富盛なることを得せしめて苦惱を度せば　果報永く餓鬼趣を滅し　及び諸の煩惱を斷除することを得ん　〔二〕戒を持つて畜生趣を遠離せば　八非念を捨て、正念を得ん　忍辱は當に最上の色を得べきこと　金の世間悉く愛樂するが如くならん　〔三〕精進の善法は無邊の　所有る功德を獲て盡す可からず　禪定を修行せば五欲を離れ　等持に從りて神通明を得ん　〔四〕智は無邊の佛法藏を獲　慧は諸法本來の因を了し　佛は三界の諸の過咎を知り　法輪を轉ずるは諸の苦を滅せんが爲なり　〔五〕菩薩此の法を圓滿することを得ば　佛刹清淨にして衆生淨く　佛種幷に法種　聖衆種及び一切法を受持するなり　〔六〕世間の病を醫する最上師　智慧を以て菩提の方を說きたまふ　寶德藏に種種の藥有り　衆生をして服して悉く道を證せしむ

附　梵文の奧書に說く

〔一〕世界をして正しく位に導く所の道を容易に得せしめるべく悲に依つて　利益する考を持てる世尊佛に依りて說かれたる完全なる法の　眞實のある所の經を總て固有の垢を離れてある所の彼等は聞き訖りて　受持することから處に達して日夜(經の意味を)思惟せよ〔二〕

【四】無上覺に迴施するの尊重なるを辨ず。

【一】寶德藏に世間を醫する種種の藥あり、衆生をして服せしめ善護し道を證せしむるが爲なり。梵名にては Bhagavatyām ratna-guṇa-sañcaya-gāthāyāṃ parindanā-parivarto nāma dvātriṃśattamaḥ//

【二】六度各別の利益を說示す。

時を經るに隨つて誦が離れて來た時に多くの困難に滿されたる骨折を持つてゐる　澤山の書物に出て居る今は違つて居る偈の相違を見て　賢（Bhadra）によりて總て校訂せられたる世界の爲に我師子（Hari）に依りて善く　整頓せられたる此のものは議論をする象王の水瓶を壞はす時に智者に依りて取られよかし

世尊の母なる聖八千（頌）の中の般若波羅蜜の品に隨つて居る世尊の母なる貴重なる功德を集めたる偈終る。

〔I〕 lokaṃ prâpayituṃ sukhena padavīṃ samyak pad'āvāhinīṃ /
kāruṇyā-hita-cetasā bhagavatā buddhena saṃdīpitam /
śrutvā te 'khila-dharma-tattva-nilayaṃ sūtraṃ samādānato /
gatvā sthānam aharniśaṃ nija-malaṃ dhyāyantu ye'tyāgatāḥ //

〔II〕 kālesmiṃ bahu-duḥkha-saṃkula-dhuraṃ pāṭhe vidūraṃ gate /
gāthā-bhedam aneka-pustaka-gataṃ dṛṣṭvā 'dhunā 'ny' āyataṃ /
kūpam-vādi-gajêndra-kumbha-dalane bhadreṇa yā śodhitā /
lokârthaṃ hariṇā mayā suvihitaiṣêiyaṃ budhair gṛhyatāṃ //

āryâṣṭa-sāhasrikāyāṃ bhagavatyāṃ
prajñā-pāramitāyāḥ parivartânusāriṇī
bhagavatī ratna-guṇa-sañcaya-gāthā samāptā //

佛說佛母寶德藏般若波羅蜜經（終）

昭和十一年一月十五日印刷
昭和十一年一月二十日發行

不許複製

國譯一切經釋經論部五ノ下

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝 三〇四〇番
　　　 二一一六番

製本所　　兩角製本所

(I) lokam prāpayitum sukhena padavīṃ samyak pad'āvāhi[illegible] /
kāruṇyā-hita-cetasā bhagavatā buddhena saṃbodhitam /
śrotā ca [illegible] dharma-tattva-nilayaṃ sūtraṃ samādāsyato /
gatvā sthānam [illegible]-malaṃ dhyāyantu ye [illegible] /

(II) kāleasmiṃ bahu-duḥkha-saṃkula-dhuraṃ pāṭhe [illegible] /
gāthā-bhedam aneka-pustaka-gataṃ dṛṣṭvā 'dhunā 'py āyatam /
kupain-vādi-gajendra-kumbha-dalane bhadreṇa yā śodhitā /
[illegible] hariṇā mayā suvihitaṃ [illegible] budhair [illegible] //

aṣṭāda-sāhasrikāyāṃ bhagavatyāṃ
prajñā-pāramitāyāṃ parivartan[illegible]
bhagavatī ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā samāptā //

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 8547